バカとテストと召喚獣　バカとＦクラスと転校生

黒炉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとテストと召喚獣　バカとＦクラスと転校生

【Ｎコード】
Ｎ３３５９Ｖ

【作者名】
黒炉

【あらすじ】
化け物と呼ばれ、また天才と呼ばれ育った完全記憶能力者、峰嶋真琴。彼は生まれたその地を離れ育ったが、世界でも珍しい『試験召喚システム』を取り入れた進学校、『文月学園』に興味を持ち、周囲の意見を無視して転校を果たし、居眠りでＦクラス入りを果たす。そこでかつての幼馴染、観察処分者の吉井明久と学年２位の才女、姫路瑞希と再会する。真琴は元神童、坂本雄二や帰国子女、島田美波たちＦクラスたちのバカメンバーとも仲を深めていく。そして見え隠れする何者かの陰謀……。文月学園を舞台に巻き起こる、

バカと愉快と時々シリアスな物語！※現在オリストーリー編です！

オリ主人公紹介

オリキャラ紹介

峰嶋　真琴　１７歳

身長　１６８ｃｍ　体重　５３ｋｇ
特技　脱走術　剣術（天性の才能。人に教えてもらったことはない）
　あとツッコミ
趣味　昼寝　悪巧み　料理
得意教科　物理　数学　英語　世界史
苦手教科　化学　日本史（本人曰く興味がない）　保健体育

容姿　黒髪短髪。体系はムッツリーニが大きくなった感じ。おとなしそうな顔つきで、勉強や読書に勤しむときは愛用の眼鏡を掛ける。
作者は高山み○みさんに声優をやってもらいたい。
異性にてんで興味がなく、本人曰く「心に決めた人がいる」そうで。
そのため男のロマン（エロ本）にも興味はない。
好きな女性のタイプもない。

本作の主人公で、明久、姫路とは小学校の頃の友達。
小学４年生のときに親の都合で北海道に転校して以来、本州に渡ったことがない。
そのためか、寒さにはめっぽう強いが暑さに弱い。
何年たっても北海道の方言が理解できず身に付きもしなかったので、そのことが原因でいじめの対象になっていた。
中学２年の頃からひそかに貯めた裏貯金で（親の助力も含めて）文月学園へ転校する。
極度の機械音痴で、料理用の電子機器と携帯いがいで使える電子機

器がこの世に存在しない（この二種類は、転校してから必須スキルになると考え必死に訓練した）。
本来なら学年主席に居てもおかしくないほどの頭脳の持ち主だが、本人の気まぐれな性格と極度の機械音痴（＝Ａクラスのシステムデスクなども例外ではない）ためわざとＦクラス入りをする。
ちなみに前にいた学校では５０点満点の平均は４８点。
優しく気さくな振る舞いをするが、誰にでもそうというわけではなく、信頼を置いている人物にはまた別の対応をする。本人曰く家族以外で北海道に信用できる奴はいない。
家族といっても父親が原因（本人にとっては身勝手）でわざわざ北海道まで転校しなくてはならなくなり、家族でも父親にだけは信用を置いていない。

父親、母親、弟の四人家族だが、一人で転校してきたため、一人暮らし。
偶然にも明久のマンションの部屋の隣に住んでいる。

学力、策力、身体能力全てにおいて秀でているが、明久レベルの鈍感さがでることも・・・

一人称はオレ。
自分が気に入らない（特に人とか）物は容赦なく潰しにかかる。
が、基本的に自分から人を嫌悪することは少ない（格別迷惑な連中は別）。

常に木刀とお手製の木製くないを携帯している（秀吉曰く木刀は携帯するものではないとか）。
いじめ対策で木刀を持ち歩いてみたところ不良を圧倒。
刀剣類を持てば右にでる奴はいないと称された。

が、危険人物扱いもされた。
一度見たものを決して忘れない完全記憶能力を持っており、高校３年間の内容は全教科１年の二学期に終了させている（本人にとって授業補修は復習に過ぎない）。

小学校の頃から明久、姫路と仲がよく仲良し三人組だった。
その頃からずっと姫路に恋心を抱いているが、姫路の明久に対する態度から自分の気持ちを諦めている節がある。
最近は姫路の恋をどうやったら成功させられるかを検討中（趣味は悪巧み。一応）。
Ｆクラスのバカ色に染まりつつある。

召喚獣

黒いダウンジャケットに黒いジーンズ。
両手に姫路の大剣サイズの物を持っている（つまり二本持っている）。

特殊能力は“決闘（デュエル）”。特殊な召喚フィールド（黒いドーム状）を作って対象と１対１になり、両手の大剣でめったざしのフルボッコにする。
例外として、同じクラスの人間を自分の代わりに中に入れることが出来る。
自分と自分の代わりに入った人間以外は、全教科の得点が半分になる。
ちなみに科目は総合科目で固定。

これとは別に腕は能力は“炎上と帯電”。
右手の大剣に炎、左手の大剣に雷をまとわせる（攻撃力は通常の２倍。非常にチートくさい）。

余談だが異端審問会ＦＦＦ団を壊滅させることを目標としている（姫路と明久の邪魔になると判断）。

第一話　バカとFクラスと転校生（前書き）

どーも、「バカとテストと召喚獣　バカとFクラスと転校生」を見ていただき有難うございます。
まだまだ未熟ですが、どうぞお付き合いください。

第一話　バカとFクラスと転校生

バカテスト　化学

第1問

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例をひとつ挙げなさい。』

姫路瑞希の答え

『問題点・・・・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点
　合金の例・・・・・・ジェラルミン』

峰嶋真琴の答え

『問題点・・・・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点
　合金の例・・・・・・ジェラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんと峰嶋君は引っかかりませんでしたね

土屋康太の答え

『問題点・・・・・・ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例・・・・・・未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いといわれても。

「吉井、遅刻だぞ」

吉井明久。文月学園二年所属、この学園ではじめての「観察処分者」である（様はバカである）吉井明久はドスの聞いた声に呼び止められる。
声のした方には浅黒い肌に短髪のいかにもスポーツマンですみたいな人が立っていた。

文月学園補習担当の西村宗一こと鉄人先生（もとい。鉄人こと西村先生）である。

「あ、鉄じ――――じゃなくて西村先生。おはようございます」

明久は軽く頭を下げて挨拶する。相手は生活指導の鬼だ。目をつけたられたらろくなことにならないのだ（明久は既に目をつけられている）。

「今、鉄人って言わなかったか？」
「ははっ。気のせいですよ」
「ん、そうか？」

やばかったな。危うく普通に「鉄人」と呼んでしまうところだった。
鉄人っていうのは渾名だ。彼の趣味であるトライアスロンが原因である。真冬に半そでとかほかにも色々ありそうなんだけど・・・・

・。

「それにしても普通に『おはようございます』じゃないだろうが」
「先生。先生は僕が挨拶せずに無視していたらどうするつもりでした？」
「補習室行きは確定だったな」
「だったら挨拶を重んじましょうよ」
「それとこれとは話が別だ」

いい加減気づこうよ。コントしてると時間が減るぞ。

「全くお前というやつは・・・・・・遅刻の謝罪より先に挨拶の大切さを説くとは・・・・・・いくら罰を与えても懲りないな」
「先生。僕、遅刻はあんまりしてないですよ？遅刻の常習犯みたいに言わないでください」

西村先生は去年明久のクラスの担任だったので明久が遅刻の常習犯でないことは知っている。

「遅刻は、な。ほら、受け取れ」

鉄人が箱から封筒を取り出し明久に渡した。宛名の欄には『吉井明久』と書いてあった。明久は一応頭を下げて受け取る。

「あ、どーもです」
「全く。転校生でもしっかり来てるんだから、しっかりしろ」
「転校生？」

明久が首をかしげる。
後になって知ったのだが明久がオレがいることを知ったのはこの時

だったそうだ。

「それにしてもどうしてこんな面倒なやり方でクラス編成を発表してるんですか？掲示板とかで大きく張り出しちゃえばいいのに」

こうやって皆に一枚一枚丁寧に封筒に入れて渡さなくてもいいのに。

「普通はそうするんだけどな。まぁ、ウチは世界的にも注目されてる最先端システムを導入した試験校だからな。この変わったやり方もその一環ってわけだ」

「ふーん。そういうモンですかね」

適当に相槌しながら明久は封筒に手をかける。

さてコイツはどのクラスに入るのか・・・・・・。知ってるけどネ。

この文月学園はクラスがA～Fまである。二年生以上はAから順に振り分け試験の成績順でクラスが決まっていくんだ。

頭いいやつはAだし、頭悪いやつはFだ。つまりは所属してるクラスで頭の良し悪しが丸分かり。だからコイツはFだけは避けたいんだ。

「吉井、今だから言うがな」

「はい、なんですか？」

あの封筒って糊付け頑丈なんだよな・・・・・・

苦戦してるぜ。明久のやつ・・・・・・

「俺はお前を去年一年見て『もしかすると、吉井はバカなんじゃないか？』なんて疑いを抱いてたんだ。」

「それは大いなる間違いですね。そんな誤解をしているようじゃ、更に『節穴』なんて渾名をつけられちゃいますよ？」

そういえば明久、勉強しなかったけど振り分け試験は良く出来たとか言ってた気が・・・・・・

「ああ。振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気づいたよ」

「そう言ってもらえると嬉しいです」

開かない・・・・・破ってあけよう・・・・・・

明久はDかCだろうかと思ったとか言ってたな・・・・・・

「喜べ吉井。お前への疑いはなくなった」

明久。冥福を祈らせてもらおうか・・・・・・

『吉井明久・・・・・・Fクラス』

「お前は疑いようのない正真正銘のバカだ」

こうして俺たちの最低クラス生活が幕を開けた。

「・・・・・なんだろう、このバカでかい教室は」

ノートパソコンに個人エアコン、冷蔵庫にリクライニングシート・・・・・すげ。

「まるで高級ホテルじゃないか・・・・・・まさかこれが噂のAクラスか・・・・・・？」

明久くん。君はFクラスだ。そして俺はAクラスが（なんとなく）嫌だ。だからさっさとFクラスの教室に向かおうか。

「え？何この声？何これーーーーーーーーーー！？」

明久がFクラスに向かおうとするとき（？）にAクラスのクラス代表っぽい人が見えた。

「・・・・・霧島翔子です。よろしくお願いします」

黒髪を伸ばした日本人形のような、何か神々しささえ感じさせるような人だった（らしい）。

二年Ｆクラスの前。吉井明久は躊躇していた。

「遅刻なんてして、みんなの印象悪くなってないかな・・・・・・？痛い奴とか居たらどうしよう・・・・・・」

「なんて考えすぎだよね！」

そういってあいつは扉を開けて入って・・・・・・

「すいません。ちょっと遅れちゃいました♪」

愛嬌たっぷりに言って・・・・・・

「早く座れこのウジ虫野郎」

台無しにされた。

「聞こえないのか？あぁ？」

それにしてもなんて物言いだろう。いくら教師でも失礼にもほどがある（教師ではないが）。

僕はにらみつけるように教壇に立っている教師を見た（教師ではないが）。

その背は意外に高く、だいたい１８０ｃｍ強くらい。やや細身ではあるが華奢なわけではない。むしろボクサーのよう機能美を備えた細さを感じるぞこの教師（教師では以下略）。

視線をもうちょっと上にやると現れたのは意志の強そうな野性味たっぷりの顔をした教師（教師以下略）。

短い髪の毛がつんつんと立っていてまるでたてがみのように見える（もうどうでもいい）。

「・・・・・雄二、何やってんの？」

彼は明久の悪友、坂本雄二だ。教師じゃない。生徒だ。

「先生が遅れてるらしいから代わりに教壇に上がってみた。なんか転校生がこのクラスに来るらしいぞ。」
「あ、そういえば鉄人も転校生がどうとか言ってた・・・・・・」

『なにーーーー!?転校生だとぉぉぉぉ!!?』
『男か!?女か!?』

こんなむさくるしい男ばっかのクラスなら転校生が女であることに期待してもおかしくないな。

「残念ながら男だ」

坂本の死の宣告。
この一言でFクラスはずーーんと沈んだようで。

「で、何で雄二が先生の代わりを?」
「一応このクラスの最高成績者だからな」
「え?それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの?」
「ああ、そうだ」

明久はこのとき『雄二さえ説得すればこのクラスは僕の思いどおりに・・・・・・』とか考えてたらしい。

「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

考えることは皆同じなんだな・・・・・・

でもってFクラスの面々はみんな床に座っている。なんでかって?
決まってるさ・・・・・・

椅子がないんだ!!

「それにしてもさすがはFクラス。ひどい設備だね」

とりあえずあいている席でも探そうとおもった時、

不意に背後から覇気のない声が聞こえてきた。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね?」

そこには寝癖のついた髪によれよれのシャツを貧相に着た、いかにもさえない風体のオジサンが居た。

どう見ても10代ではない。このクラスの担任だ。

「それと席についてもらえますか?HR(ホームルーム)を始めますので」

明久と雄二がそれぞれ返事をして席に着く。

先生は明久たちを待ってから壇上でゆっくりと口を開いた。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎(ふくはらしん)です。よろしくお願いします。」

福原先生は黒板に名前を書こうとして、やめた。

チョークすらまともにないとは、さすがFクラス・・・・・・

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか?不備があれば申し出てください」

「せんせー、座布団に綿が入ってないです」

「我慢してください」

「せんせー、卓袱台の足が折れました」

「ボンドで直してください」
「せんせー、窓が割れてて隙間風が寒いです」
「ビニール袋とセロハンをあげますから直してください」

・・・・・ひどすぎる。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね、転校生君からやってもらいましょう」

ざわざわ・・・・・・

『男だろ?どーでもいい・・・・・・』
『早く帰りたい』

・・・・・オレは帰っていいんだろうか?

「では、峰嶋真琴くん、入ってきてください」

先生に呼ばれて、オレはFクラスの教室に入っていった。

第一話　バカとFクラスと転校生（後書き）

どうでしたでしょうか？
感想お待ちしてます。

第二話　彼と彼女と転校生

バカテスト　国語

第二問

問　以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『（1）得意なことでも失敗してしまうこと』
『（2）悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

『（1）弘法にも筆の誤り』
『（2）泣きっ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも（1）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（2）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

峰島真琴の答え

『（2）病人に姫路瑞希の手作り料理』

教師のコメント

君が姫路さんの手作り料理をどういう風に見ているかが気になりま

す。
しかし君は前に居た学校でトップクラスの成績と聞いていたのですがわざと間違えていませんか？

土屋康太の答え

『（1）弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

『（2）泣きっ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

「では、峰嶋真琴くん、入ってきてください」

先生に呼ばれて、オレはFクラスの教室に入っていった。

「峰嶋くん。軽く自己紹介をしてください」

先生にそう促され、４人以外は聞いちゃいないだろうなとか思ったけど一応自己紹介をした。

「えっと、峰嶋真琴と言います。真の琴と書いて真琴と読みます。よく女みたいな名前って言われるけどれっきとした♂なのでよろしくお願いします。
趣味は昼寝と料理で、剣術が少し得意です。
１年間よろしくお願いします」

さっと趣味と特技を言ったところでFクラスの面々が色々呟いている。

『けっこう可愛い顔してるな・・・・・』

『木下（弟）の次くらいじゃないか？』
『峰嶋ちゃん結婚して』

だまれＢＬ。オレにそんな趣味はない。
けど一応釘刺しとくか。

「あと、オレのことを女呼ばわりしたやつには漏れなく地獄への永遠旅行をプレゼントしてやるからそのつもりで（笑顔で）」

この一言がＦクラスの（４人をのぞいた）男子の顔を青くした。

「しつもーーん」

一人が手を上げてきた。オレもそんなにオニじゃないから質問の二十や三十ドンと来い！

「頭はどのくらい悪いですかー？」

グハァ！！いきなり答えづらいのきたな！？オイ！？
でもまあオレもオニじゃないし質問の二十や三十（ｒｙ

「振り分け試験の時は思いっきり爆睡してたから１点も取ってないけど・・・・・」

この文月学園のテストは変わっている。
問題数無制限で、時間内なら一度に何点でも取れる。
極端にいえば時間さえあれば１万点でも取れるって事だ。

「前に居た学校では日本史以外は大体万点とってたけど・・・・・」

今度は皆が吐血した。
まあ普通にこんなやつが最低クラスにいたら結構な問題だよな・・・・・・

「ま、まあそういうことなんでよろしく・・・・・・・・」

ほんとに最低クラスなんだ。驚いたな・・・・・・・・

「では、次はそうですね。廊下側の人からお願いします」

先生が次の生徒に自己紹介を促す。
まあ一応転校生なんだし真面目に聞いとくか。
他人なんてあんまり興味はないけど・・・・・・・・

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

秀吉？変わった名前だな・・・。オレもあんまり人のことといえねーけど。
ていうかあいつほんとに男か？
男子の制服着てるからそうなんだろうけど、女子の制服着たらまんま女だろ・・・・・・・
オレも名前で女扱いされてるみたいにあいつも色々大変そうだな。
仲良くしてみたいな。

「――――――という訳じゃ。よろしく頼むぞい」

しゃべり方がなんか違和感あるけど・・・演劇部のなんかだろ。
勝手に決め付けさせてもらったとこで次の人が自己紹介を始める。

「・・・・・・・・・・・・土屋康太」

今度は大人しそうだな。

特徴は・・・・・・？カメラ以外にこれといった特徴が見当たらん！

ついにオレの眼も落ちぶれたというのか・・・・・・？

けどいい体つきしてるな。体も引き締まってるし、小柄だし、運動神経もよさそうだ。今度試合でも申し込んでみるか。勿論剣でだけど。

「＿＿＿＿＿＿です。海外育ちで日本語は会話は出来るけど読み書きが苦手です」

は？土屋の自己紹介もう終わり？はやいな・・・・・・

と思って聞いてると女子の声だ。こんなむさい奴ばっかじゃなくて良かった。

木下が奴らの餌食にならなくてもすみそうだな（彼女には悪いがオレは性別を忘れらてそうな奴同士、木下と仲良くなりたい！すまない、名も知らぬ女子！）。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は・・・・・」

ドイツからの帰国子女？前言撤回。遠くから来た奴同士、接点があるので見捨てないようにしよう。

・・・・・・なんかオレこのクラスのバカ色に染まってないか？

「趣味は吉井明久を殴ることです☆」

ブッ！！！なんちゅー危ない奴だ！前言撤回！あんな危ない奴とは言葉を交わすことさえしない！

吉井明久と思われるさっきの遅刻してた奴が喚いている。
きっと去年もあんな感じだったんだろうな。まあ自分の学力を呪うこった。
・・・・・?吉井明久?吉井ってまさか・・・・・・?
あとで確認するか。

あとはもう名前を言ってくだけか。
つまらないな。もうちょっとひねりがあったほうが暇つぶしになるのに。

ん?明久まで順番が回ったようだな。
あいつの自己紹介が終わったら確認しねぇと。

「――――コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね♪」

「ダーーーリンィィーーーーン!!!!!」

うわっ!これは不愉快だ!
しかしこれであのバカがあの明久であることは分かった。
確認するまでもない。こんなバカな明久はあの明久しかいない!!

「――――失礼。忘れて下さい。とにかくよろしくお願い致します」

・・・・・・バカ。

明久の自己紹介が終わればあとはどうでもよさそうな奴らが名前だけの自己紹介。
今のうちにあいつと話をしにいくか。

「・・・・・おい。明久」
「あれ。真琴？どったの？」
「・・・・・もしかして俺のこと覚えてた？」
「さっき名前を言われるまでは思い出せなかったけどね。もう7年ぶりとかそんくらいだよね」
「ああ。オレが小４のとき転校して以来だから、７年で合ってる」
「にしても振り分け試験で居眠りとは・・・・・すごいことしたね真琴」
「オレが本気出したらＡクラス確実とかいろんな教師に言われてたんだけどな。だがはっきりいってオレはＡクラスが嫌いだ」
「え？なんで？あんな良い設備なのに」

明久が本気で首を化し出ている。まだ完全に思い出してないのか。

「・・・・・オレはエアコンもパソコンもシステムデスクも嫌いだ」
「あ・・・・・真琴は機械音痴だっけ・・・・・」
「やっと思い出したか」

「ところで明久。姫路は？この学園に通ってるのか？」
「う、うんこの学校だよ」
「てことはやっぱＡクラスか？」

オレはこのときは振り分け試験の時のことを聞いてなかったからしょうがないといえばしょうがないんだが、それでも自分の無神経さに腹が立った。

「あ、あの・・・姫路さんは・・・・・」
「？」

明久がもじもじしていても、今のオレには分からない。
前なら一発で分かったんだろうが。

そんなオレの気持ちはどこ吹く風とでも言う様に教室のドアが開き、
息を切らせて胸に手を当てている
女子が現れた。
なんとなく見覚え・・・・・というか面影がある。

「あの、遅れて、すいま、せん・・・・・・・」
『え？』

クラスのほぼ全員が驚きの声を上げる。
一緒になってオレも・・・・・あと明久のバカも・・・・・・
まあびっくりしなかった奴は眼が節穴か寝てるんだろうけどな。

そんな中、平然としてる数少ない人物、福原先生がその女子に話しかけた。

「丁度良かったです。今自己紹介をしてるところなので姫路さんもお願いします」
「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします・・・・・」

「小柄な身体を更にちぢ込めるようにして声を上げる姫路さん。肌は新雪のように白く背中まで届く柔らかそうな髪は、優しげな彼女の性格を表しているようだ。保護欲をかきたてる可憐な容姿は、男

だらけのFクラスで異彩を放っている」
「落ち着け明久。心の中のナレーションが表に出てしまっているぞ。それから無表情でそういう個人的な解析をすると変態に見えるからやめろ。あと土屋。貴様はなぜカメラを用意している」
あいつのカメラは一体何のために用意されたものなんだ？
「・・・・・・・・・・・写真を撮って売る」
「シバき殺すぞてめぇ」
オレは秘技、木刀携帯で懐から取り出した木刀を土屋に向ける。
本当なら真剣で叩き切ってやりたいところだが真剣は持ち歩くだけで銃刀法なんちゃらに引っかかるので木刀で我慢。
「はいっ！質問です！」
既に自己紹介も終わってるどうでもいい男子A君が手を上げている。
「あ、は、はい。なんですか？」
「登校するなり、質問がいきなり自分に向けられて驚く姫路さん。その小動物的な仕草が可愛かったり」
「だから個人的な解析を口に出してするな。このバカ変態」
「なんだと真琴！？僕のどこが変態なんだ！」
「全てだ」
「グハァ！」
明久が吐血してくたばる。まあ静かになっていいや。
既に自己紹介も終わってるどうでもいい男子A君が質問を以下略。

「なんでここにいるんですか？」

・・・・・失礼な奴だな。

『確かにそうだ。姫路さんは学年次席に匹敵するんじゃないのか？』

『どういうことだ？』

『峰嶋みたいに居眠りしたんじゃないのか？』

『姫路さん結婚して』

最後の姫路に熱烈失礼極まりないラブコールをした奴はあとでオレが地獄への片道切符をくれてやるとしよう。

だが姫路がなぜＦクラスにいるのかはオレも気になった。

まさかオレじゃあるまいし居眠りなんて・・・・・・

「そ、その・・・・・」

「緊張した面持ちで身体を硬くしながら姫路さんが口を開く」

「だからやめろ。変態解析者・吉井バカ久」

「だれが変態解析者だ！」

「貴様だ。あと吉井バカ久にも少しは触れてくれ。オレが悲しくなってくる」

「誰がバカ久だ！」

「てめぇだ」

こいつ、口と鼻をガムテープでふさいでやろうか。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして・・・・・・」

ああ、納得。

確か振り分け試験は途中退席したら無得点扱いだったか。

０点じゃＦクラス入りはむしろ必然とでも言うべきか。

あの学園妖怪ババァ長にあとでケチ付けに行くか。
またFクラスのバカどもが騒ぎ出す。

『そういえばオレも熱（の問題）が出たせいでFクラスに』
『ああ、化学だろ？あれは難しかったな』
『俺は弟が事故に会ったと聞いて実力を出し切れなくて』
『黙れ一人っ子』
『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』
『今年一番の嘘をありがとう』

どうしよう・・・・・
Aクラスで機械音痴をバカにされるのとFクラスのバカどもと一緒に勉強とどっちがマシだったんだろうか・・・・・。
オレ、やっちまったんだな。

「で、ではっ、一年間よろしくお願いします！」
「そんな中逃げるように僕と雄二の・・・・・」

シュ！

「ギャアアアアア！！腰がああああああ！！刀のようなもので腰がああああああ！！」
「だまれ姫路ファン」
「なに！？だれが姫路さんのファンだというんだ！？でて来い！僕が成敗してやる！」
「じゃあてめえがてめえを成敗しろ」

コイツの場合はファンとはちょっと違うがな・・・・・

姫路は明久と短髪の不良っぽい奴の隣の空いている席に着く。

「き、緊張しましたぁ～・・・・・・」

席に着くや否や、姫路は安堵の息をついて卓袱台に突っ伏す。
そして明久が頑張って姫路に声をかけようとしてるけどなんとなく
あの短髪に邪魔されるような気がする。

「あのさ、姫――「姫路」

ほんとに被った!!
すまん明久!俺の余計な想像のせいで・・・・・・・・

「は、はいっ。なんですか?えーっと・・・・・・・」
「坂本だ。坂本雄二。よろしくな」
「あ、姫路です。よろしくお願いします」

「深々と頭を下げる彼女。挨拶も――――――」
「まだやってたのか。変態解析者」
「だれが変態だ!!」
「お前だ」

「ところで、姫路。体調はいまだに悪いのか?」
「「あ、それは僕も（オレも）気になる」」

オレと明久が声をそろえて話題に介入。
振り分け試験の時のことは詳しくは知らないが、さっき本人が高熱
出したって言ってたし気になるものは気になる。

「よ、吉井くん!?とえーっと・・・・・・」

「覚えてないか？峰嶋真琴だよ」
「え？真琴くん？でも前の学校で成績トップって聞いたのに・・・・・」
「覚えてないか？俺は機械音痴だ。Ａクラスなんていう機械だらけの場所は嫌だ」
「あ・・・・・・」

姫路も大分思い出してくれたようだ。
ところでさっきから明久がなんかショック受けてる。
うん。あんなふうに驚かれたら誰だってショックだろう。

「「姫路。明久がブサイクですまん」」

今度はオレと短髪の――――坂本雄二の声がダブる。
すまない明久。つい本音が・・・・・・

「そ、そんな！目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ・・・・・・」

そしてその一言でショックを受けてた明久が手放しで喜ぶ。
なんて単純でバカなんだ・・・・・・

「そういえば確か明久に興味を持ってる奴がいたような・・・・・・」

・・・・・そんなのいるんだ。

「え？それって誰――――「そ、それって誰ですか！？」
「確か久保・・・・・・」

久保のその次は？

「・・・・・・利光だったか」

久保利光＝男
吉井明久＝男
結果＝ＢＬ

「・・・・・・（明久が声を殺して泣く）」
「・・・・・・（俺があきれる）」
「明久、声を殺して泣くんじゃない。きっとまだこれから先いい事あるさ」
「僕もうお婿にいけない・・・・・・」
「大丈夫だって。いけるって」

明久がばっと顔を上げる。
どうやら「いける」が「逝ける」になったらしい。
コイツ、昔と変わんないな・・・・・・

「そこの君たち。少し静かにしてください」

と先生に注意されたところで、

バキバキガラガラ・・・・・・

先生の教卓は無残にもゴミになってしまった。
さすがＦクラス。酷すぎる。

「え～、替えを用意してくるのでここで自習でもしてて下さい」

といって先生も出て行ってしまう。
ホントになにから何まで最低クラスなんだ・・・・・・・
やっぱ色々間違えたかも・・・・・・・

「雄二、ちょっといい？」
「ん？なんだ」
「ここじゃ話しにくいから廊下で」
「・・・・・・分かった」

そういうと二人は立ち上がって廊下に出て行った。
面白そうだからついってってみようかな・・・・・・（ついでに内容盗み聞き♪）
そう思って立ち上がろうとしたときに姫路に声をかけられた。

「あの、真琴くん！」
「？」
「相談があるんですけど・・・・・・！」

第二話　彼と彼女と転校生（後書き）

如何でしたでしょうか？
次回は真琴ｓｉｄｅと明久ｓｉｄｅに分かれて物語を進めたいと思います。

誤字脱字ありましたらご報告ください。

第三話　天才と神童と観察処分者（前書き）

前話のあとがきに書いたとおり、真琴ｓｉｄｅと明久ｓｉｄｅに分けて話を進めます。

第三話　天才と神童と観察処分者

バカテスト　物理

第三問

問　以下の文章の（　）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって（　）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よく出来ました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の回答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もＲＰＧは好きです・・・

峰嶋真琴の答え

『光』

確かにそうともいえますが丸はあげられません。反則です。

明久ｓｉｄｅ

「それで、話ってなんだ？」
「この教室なんだけど・・・・・・」
「ああ、ひでえもんだな」
「何とかできないかな」

さすがにＨＲ中だから人影はないし、これなら安心して雄二と話が出来る。

「教室の設備をなんとか・・・・・・ねぇ・・・・・」
「うん。こんな風に汚れてたんじゃ、勉強だってままならないし、何よりみんなの身体に害が出る・・・・・だから、もっといい設備を手に入れて、皆が安心して学園生活を遅れるように・・・・・・」
「つまりお前は体調の悪い姫路のために教室の設備をもっと良くしたいわけだ」

うぐぅっ！さすがかつて“神童”と呼ばれただけのことはあるな！勘だけはいい奴だ！

「恥ずかしいから遠まわしに言ってるのにストレートに言い直さないでよ！！」

なんだかものすごい恥ずかしい。Ｆクラスの人たちに聞かれたら殺されそうだな（特に須川とか）。

Ｆクラスには女子といい感じになった男子（審問するやつら曰く異端者）を審問する（ただの逆恨み＆妬み＆八つ当たりなのだが）集団がある。
『異端審問会・ＦＦＦ団』
Ｆクラスの須川亮をはじめ、Ｆクラスの男子（雄二＆秀吉＆真琴以外）全員が所属している。明久もである。
もてない男の集まった逆恨み集団以外の何者でもない。
ちなみに同じ異端審問会に所属している男子でも審問されることがある。
たいていは理不尽な理由で殺さｒ・・・・・もとい、審問及び処刑される。

「いいだろう。どうせ俺も、やる気でいたんだからな」
「え・・・・・？」
「明久がやる気ならなおいい。俺も最初からやろうと思ってたんだからな」
「・・・・・・・・・・雄二。なにを企んでるの？」

僕は雄二に疑いの目を向ける。
コイツは僕の幸せと幸福と笑顔を何よりも嫌っている。
コイツが何か企んでいるということは僕の死亡フラグが確立への一歩を踏み出すということだ。

「ちがうわ。バカ。俺はただ、世の中テストの点数や学力だけが全てじゃねぇってことを証明してみたくなっただけなんだ」
「・・・・・・・・・・ごめん雄二。疑って悪かったよ」
「気にするな明久」
「うん！やろう！」

『試験召喚戦争』を！！

この文月学園は『試験召喚システム』を取り入れている。
生徒は最後に受けたテストの点数にあわせた攻撃力を持つ召喚獣を教師承認の元、召喚して戦わせることが出来る。
このシステムを利用したのが試験召喚戦争である。
二つのクラスが召喚獣を用いて戦争をし、先にクラス代表を討ち取られたクラスが負けとなる。
勝ったクラスは相手のクラスの設備と自分のクラスの設備を交換出来る。
下位勢力が負けると設備がランクダウンする。

「そうなったら、皆に報告しねぇとな・・・・・・っと先生が戻ってきた。教室に入るぞ。明久」
「うん！」

てな訳で、新しい教卓（ボロさはさっきと変わらない。さすがFクラスだ。替えまでボロいのか）を持ってきた先生と一緒に教室に入った。

「ではクラス代表の坂本君。君が最後です。自己紹介してください」
「はいはい～と」

雄二が先生に言われて前に出る。

「俺はクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは坂本でも代表でも好きなように呼んでくれ」

さすが雄二。元神童だけあって演説慣れしてるよ（注：元神童と演説慣れは関係ありません）

「じゃあ皆。早速だがクラス代表として提案がある。聞いてくれ」

皆が雄二のほうを向く。さすが元神童以下略（注：元神童以下略）

「皆。このクラスの設備に・・・・・・・・・・不満はないか？」

雄二が間をおいて言う。
その台詞に皆は・・・・・・

「「「「「「「「大ありじゃぁぁぁーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」」」」」」」」

・・・・・でしょうね。
かび臭い教室に古く汚れた座布団。薄汚れた卓袱台だもんね。
勉強に興味のない僕だって不満があるんだ。普通の人なら不満があって当然だよ。
こんな汚い環境に不満がない奴なんて機械音痴でアナログ野郎な真

琴くらいだよ。
と、思って真琴の方を見ると真琴がものすごい殺気を飛ばしてくる。
心を読まれてた様な気がする。
「そこで俺はクラス代表として提案する」
皆がごくりと息を飲み・・・・・・
「俺たちはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」
『勝てる訳ないって』
『これ以上設備が酷くなるのは嫌だぁぁ！！』
『姫路さんという天使（エンジェル）がいたら何も入らない』
みんなが喚きだす。
普通、最下位クラスのFクラスが最上位クラスであるAクラスに勝てる訳がないからだ。
「まあ皆落ち着け。勝算はある」
「「「「「「「「？」」」」」」」」
「例えば土屋康太！」
みんなの視線が彼に集まる。
「おい。ムッツリーニ。いつまでも姫路のスカート覗いてないで早く前に来い」
そういうなり姫路さんがあわてだし、真琴の視線の凶悪さが増す。
視線の先が僕からムッツリーニに変わっていく。

「こいつがあの寡黙（ムッツリーニ）なる性識者だ」
「「「「！！」」」」
「・・・・・・・・・・・・！！（ぶんぶん）」

もう否定しても遅いよ。ムッツリーニ。
顔に畳の後が・・・・・・

寡黙（ムッツリーニ）なる性識者。
その名は男子には畏怖と畏敬を。
女子には軽蔑を持って呼ばれている。

『こいつがあのムッツリーニだと！？』
『本当か！？はじめて見た！』
『あいつ、畳に顔をつけてたあとを消そうとしてるぞ！？確かにムッツリーニだの名に恥じないムッツリスケベだ！』

ムッツリーニ＝ムッツリスケベなだけなんだけど、これは結構有名な話。

「コイツの保健体育の実力はＡクラス以上のものだ。恐らく誰もかなわない。それから木下秀吉！」

秀吉は名前を呼ばれてハッとなる。
驚いた顔もまたかわいいよ！秀吉！

「演劇で秀吉を上回るものはいない」

雄二の説明に皆も納得。

『木下秀吉って、確か演劇部のホープだろう』

『確かAクラスに双子の姉がいるって・・・・・・』
『なら何かしらやってくれそうだ！』

「さらにこのクラスには姫路もいる。主戦力にして切り札だ」

みんなの視線が姫路さんに集まり・・・・・・

「もっと言えば峰嶋真琴も期待できる」

真琴にも視線が集まる。

『姫路さんって実力は学年次席レベルなんだろう？』
『最強の切り札じゃないか！！』
『あの転校生も普通のテストで満点取るくらいの実力があるっていってたぞ？』
『すげえじゃん！あの二人！』

「当然、俺も全力を尽くす」

雄二がかつて神童と呼ばれていたことは有名な話。
当然皆も知っているから余計にざわつく。

『それじゃあこのクラスにはAクラス並みの実力を持つ奴が3人もいるのか？』

この一言が火種で・・・・・・

『勝てるんじゃないか！？』
『ああ、いけるよ！！』
『待っていろ！俺のシステムデスク！』

Ｆクラスは一気にヒートアップした。

「それにこの吉井明久もいる」

「「「「「「「「???」」」」」」」」

え? 何で皆『だれだそれって?』って顔するの?

て言うか雄二・・・・・・

「このタイミングで言う必要あったのそれ!?」

「コイツは学園はじまって以来、最初の『観察処分者』だ!」

無視するなぁぁぁぁーーーーーー!!!!!

「あの、それってすごいんですか?」

姫路さんが手を上げて質問する。

「ああ、すごいぞ。誰でもなれるわけじゃない。勉強する気なし、生活態度も悪い、問題児に送られる称号で、ちなみに先生の雑用係だ」

「雑用係ですか?」

「ああ。観察処分者の召喚獣は普通と違って物理干渉が出来る。教師の雑用を召喚獣を使って手伝うためだ」

「それって本当にすごいんですね!」

だまされちゃ駄目だよ。姫路さん。

実際教師の承認がないと呼び出せないのは一緒だし、召喚獣の痛みや疲労は何割かが僕にフィードバックしてくるから、何もしてなくても疲れるんだ

「実際教師の承認がないと呼び出せないのは一緒だし、召喚獣の痛みや疲労は何割かがこのバカにフィードバックしてくるから、実際はほとんど意味がないがな」

おい！もうちょっとフォローしてくれよ！

「でも召喚獣ってかなり力持ちなんだろう？明久の点数がどんなに酷くたって、結構な力持ちのはずだし、それなりに使えるんじゃないのか？」

おお、真琴！ナイスフォロー！

「大丈夫だ。恐らくコイツはそう簡単には召喚獣を呼び出さないだろう。攻撃されたら痛いからな」

「なるほど」

納得しないで！しかも全然大丈夫じゃない！！

『じゃあ、そう簡単に召喚できない奴がいるのか！？』

『でも吉井ってバカだからいなくてもいいだろ』

『それもそうだな』

・・・・・しどい。僕のカッコいいとこ返して・・・・・・・（注：そんなものはないと思って良いです）

「だがこれではＡクラスには勝てない」

「「「「「「オイ！！」」」」」」

「だから手始めにDクラスを落とす。うまくことを運べば、Aクラスにも負けないからな」

「「「「「「なるほど」」」」」」

このクラスはよく声が重なるなぁ・・・・・・

「という訳でバカ(あきひさ)にDクラスに宣戦布告に行ってもらう」
「えーやだよ」

下位勢力の宣戦布告の使者はたいていボコされる。

「行かなきゃ俺がお前をボコす」
「行ってきます!!」

僕はダッシュでDクラスまで宣戦布告に行き、ボコボコにされて帰ってきた。
その間に雄二はなにやらカッコいい台詞を吐きまくってたのである。

「全員筆(ペン)を執れ!!出陣の準備だ!!」
『おおーーーーーー!!』
「俺たちに必要なのは卓袱台ではない!システムデスクだ!!」
『おおーーーーー!!』

・・・・・・・・・・・・・・・アイツコロス

真琴ｓｉｄｅ

ＨＲが終わり、解散になったところで、オレと姫路は屋上に来た。
姫路の相談に乗るためだ。

「それで、相談ってなんだ？」
「えっと、あの、その・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・明久の事か？」
「え！？ええと、何でそれを知ってるんですか！？」

普通に気付くって。

あんだけ極端にリアクションしてれば。

「姫路の明久に対する反応や態度を見て、なんとなくそう思っただけだよ」

「「・・・・・・・・・・・・・」」

・・・・・なんか気まずいな。

「そういえば姫路は明久のこと、前みたいに呼ばないのか？」

「え？」

「前は『明久君』って呼んでたのに」

「えええ！？なんでそんなことまで覚えてるんですか！？」

そりゃあ転校してからいい思い出ほとんどなかったからな・・・・・・

忘れように忘れられないし。

「ホントに覚えてないんだな」

「え？」

姫路もまだ完全に思い出したわけじゃないんだな。

「オレは完全記憶能力者だ」

完全記憶能力。

一度見たものを完全に記憶し、二度と忘れない能力。

一見すると便利な能力に聞こえるけど、嫌なものや忘れたいものを忘れられないのが困る。

しかもオレの場合は、視覚以外にも聴覚と味覚においてもこの能力

が働くから、意識して聞かないようにしない限り、たいていのことは記憶してしまう。

「ああ、そういえばそうでしたね。だから真琴くんは、吉井くんや私よりもいろんなことを覚えてるんですね」

「結構困る能力なんだけどな」

まずい。話がそれてる。

話題の方向を元のほうに持ってかないと。

「その、恥ずかしいので誰にも言わないで下さいね・・・・・・」

「いや、それはいいんだけど、相談の内容は・・・・・・」

正直ずっと気になってた。転校してきて再会したばっかのオレに相談ってなんだろう。

「あの、えっと・・・・・私に料理を教えて欲しいんです！さっき、趣味は料理って言ってたから、きって上手なんだと思って！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・どうしよう。

すげぇ断りたい。

姫路の料理に付き合って命と魂を持っていかれるのは嫌だ。

でもここで断るとあとが怖いし・・・・・・・

「うーん・・・・・・」

「駄目・・・・・・ですか・・・・・・？」

そんな風に言われると余計断りづらいな・・・・・・

「まあ、いいか・・・・・・」

「それじゃあ・・・・・・！」

しょうがないよな。

嫌いなわけでもないのに、頼みごとを断りたくはない。

「いいよ。教えてやるよ」

「あ、ありがとうございます！」

明久が姫路の料理を食べて死なないようにしなければ・・・・・・！

なんかものっそい使命感がオレを襲った。

「それと、今度の試召戦争が終わったら・・・・・・」

ちなみに試召戦争（しょうせんそう）とは試験召喚戦争の略である。

「吉井君を映画に誘おうと思ってるんですけど・・・・・・真琴君も一緒にどうですか？」

二人で行ってくればいいのに。

決して嫉妬はしない。明久なんかに嫉妬なんてシナイヨ？

「じゃあ、ご一緒させてもらおうかな？」

と言ったところで、明久が黒い服をまとった連中を連れてやってきた。

『いたぞ！異端者だ！』

『殺せー！殺せー！』

明久のバックの奴らの台詞が怖い。

「真琴！屋上で姫路さんと二人っきりなんて・・・・・・許せない！！」
「はぁ！？」

こいつ、とうとうイカれたのか！？

『では、峰嶋真琴よ。異端審問会の名において貴様ののど笛を掻き切らせてもらう！！』
「その声は須川だな！？異端審問会ってなんだよ！？しかもなんでおれはのど笛を掻き切られなきゃならないんだ！？明久！お前からもなんか言ってくれよ！」
「すまない。真琴・・・・・・」
「明久・・・・・・？」
「死ねぇぇぇぇ！！」

と明久が釘バットで殴ろうとしてくる。

「何の恨みがあるんだよ！？お前は！？」
「姫路さんと二人っきりなんて羨まし過ぎるんだよ！！」
「それって、逆恨みとか妬みとかって言うんじゃないのか！？」
「とにかく死ねぇぇぇぇ！！」

『ＦＦＦ団よ！吉井に続け！！』
『オオーーー！！』

うわっ！嫌な団結力！

「おい須川！！」

何とかしないとまずい！！

「さっきＡクラスの奴に告白されてなかったか？」
『はあ？なにを言っｔ・・・・ゴブッ！」

須川はついさっきまで仲間だった奴にボコボコにされました♪

「明久、姫路。帰ろうぜ・・・・・・」
「うん・・・・・・」
「はい・・・・・・」

異端審問会（バカども）は無視して帰らせてもらおう・・・・・・
転校初日から滅茶苦茶疲れた・・・・・・

第三話　天才と神童と観察処分者（後書き）

如何でしたでしょうか？
真琴は姫路の料理の威力を知ってるので、命をとしてそれを直しにかかります。

感想お待ちしてます。

第四話　オレと僕とお隣さん！？　？

バカテスト　化学

第四問

問　以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え

『Ｈ６Ｃ６』

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン＋ゼン＝ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

『Ｂ＿Ｅ＿Ｎ＿Ｚ＿Ｅ＿Ｎ』

教師のコメント

あとで土屋君と一緒に職員室に来るように。

峰嶋真琴の答え

『ベベベベーン　ゼゼゼゼーン　～ベンゼンの運命～』

あとで吉井君と土屋君と一緒に職員室に来るように。

真琴Ｓｉｄｅ

「明久。家はどっちだ？」

オレは転校してきたばっかで、皆の家がどこにあるとかそういうのは全く知らない。
最低限自分の家から学校まで行くくらいはできるが、七年も離れていれば生まれた土地であっても土地勘は薄れていくものだ。
オレの完全記憶能力は土地勘までは覚えてくれなかったようだ。

「僕はマンションだよ。姉さんも父さんも母さんも海外だから一人暮らしさ」

「奇遇だな。オレもマンションで、親父も母さんも弟も北海道なん

だ。つまりオレも一人暮らし」

やっぱオレたちって持ってるもん持ってんのかねぇ・・・・・・

「二人とも、一人暮らしなんですか・・・・・大変ですね」

そうやって話しかけてくるのは姫路瑞希。

同じFクラスの仲間で、学年主席にも相当する才女。

「結構大変だぞ？掃除も料理も洗濯も何から何まで一人でやるんだから」

「まあ、誰にも邪魔されずにくつろげるってのはあるんだけどねぇ・・・・・・」

それでも明久は一人暮らしの大変さを分かってるので苦笑い。

「ところで明久。さっき坂本に聞いたんだが」

「ん？なに？」

自分なりに真面目な表情で質問する。

「おまえ、主食が塩と水らしいな」

「雄二。明日が君の命日だよ・・・・・・！」

「吉井君・・・・・砂糖と塩ではご飯にならないと思いますが・・・・・」

「ならない。全く持ってならないぞ姫路。ついでに言えば、腹の足しどころかカロリーすら基準となる摂取量に届かないだろうな」

明久の主食を聞いたときは心底驚いた。

水と塩だけでその身体と命を保たせているなんて、ある意味才能だ。

「一応仕送りはあるんだけどさ。毎月新作のゲームが発売されるからそれに費やしてるとすぐ無くなっちゃうんだよね・・・・・」
「そんな風にゲームばかりやってるからバカって言われるんだ」
「食費まで趣味に使うのはどうかと思います・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・明久」

真剣な表情で質問し、

「・・・・・・・・・・・・なんだい？真琴」

真剣な表情で返してくる。

「最後にまともな食事したのいつだ？」
「僕の基準でのまともなら３日前」
「普通の基準でなら？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・３週間前」

こいつの命がこの世に繋ぎとめられてることに驚いた。

「決まりだ明久」
「？なにが？」
「お前、今日家に夕飯食べに来い」
「いいの！？」

ホントに３週間まともな食事してないのか！？
よくそれでやつれないなコイツ！？

「明日はＤクラスとの試召戦争だろう？」

「ああ・・・・・・」
「頼むからまともな食事を取ってくれ！」
「な、なら、私もご一緒させてもらっても良いですか？」

姫路も交えてか・・・・・この際だから、姫路に料理を教えるか。
台所に入れること自体が非常に怖いんだけど・・・・・・

「どうせだ！！明久！！」
「はい！！」

明久がびっくりして棒になる。

「この際だ！！坂本に島田に秀吉にムッツリーニも呼べ！！」
「ええ！？」
「Ｄクラスには勝つ！前夜祭じゃーーー！！！」

悪い癖が出てしまった。

明久ｓｉｄｅ

僕と真琴と姫路さんは僕のマンションの前まで来ていた。

「明久もこのマンションだったのか？」

「真琴もこのマンションだったの？」

家賃が低くて文月学園に近いマンションといったら一番最初に紹介されたそうで、しかも偶然にも真琴の部屋は僕の部屋の隣だった。

つまり僕と真琴はお隣さんって訳だ。

「じゃあ明久は皆に連絡してくれ。オレは自分の家で夕飯の支度してる」

「うん。分かった」

「ええと、私はどうすれば・・・・・・」

「何言ってんだ。料理を教えて欲しいって言ってきたのは姫路だろ。丁度いい機会だ。教えてやるよ」

「は、はい！」

そんな流れで二人は真琴の家に行ってしまった。

さて、僕も早く皆に連絡して、真琴っち行こ～♪

最初は雄二だろうな。

「・・・・・・・・・・・・・・あ、もしもし雄二？」

『なんだ明久か。どうした?』
「今から真琴の家で勉強会&ご飯食べるんだけど」
『いいなそれ!明日の午前は現国のテストがあったし、姫路や峰嶋は振り分け試験を受けてねえから点数アップにもつながるな!』
「でしょ?ほかにもムッツリーニとか秀吉とか島田さんも誘う予定だけど」
『ムッツリーニと秀吉は連絡しておく。明久は島田に声をかけておいてくれ』
「わかった。よろしくね。場所は僕のマンションまで来てくれればいいから」

っと・・・・・次は島田さんだね。

『・・・・・もしもし』
「あ?島田さん?吉井ですー」
『え?え?あ?何よ?』

電話の向こうの島田さんがものすごい挙動不審な気がする。

「今から真琴の家で勉強会&ご飯なんだけどこない?ちなみに雄二と姫路さんは来るよ」
『いく!!』
「そ、即答だね・・・・・」

なぜに即答なんだろう・・・・・

「島田さん、僕の家分かる?」
『・・・・・・・・・わかんない』
「じゃあ、学校かどこかで待ち合わせね」
『・・・・・・・・・・・・・・・わかった』

なぜ島田さんが挙動不審で姫路さんの名前が出た途端に即答なんだろう？

真琴ｓｉｄｅ

「あがっていいよ」
「お邪魔します」

材料ってなにあったっけ?とか考えながら家に帰ってきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・」
「どうした、姫路?」
「引っ越してきたばかりって聞いてたからダンボールとかあるのかなって思ってたんですけど・・・・・・・」
「ああ、それならもう片付けたよ。一昨日からこっちに来て、ずーっと片づけしてたんだ」
「真琴君って結構しっかりしてたんですね」
「ん、まあな・・・・・・」

そういう風に言われるとちょっと嬉しい・・・・・・
違う違う違う!
夕飯の支度しなきゃ。皆来るんだからちょっと多めに作らなきゃ。
と思って冷蔵庫を覗く。

「ほとんど何も無い・・・・・・ですね」
「さすがに引っ越してきたばかりだからな。しゃーない。買い物行くか」
「でしたら皆さんが揃ってから行くのはどうですか?」
「まあ、それでもいいか。そのほうが皆が食べたいものも聞けるしな」
「はい!」

そこで明久がやってきた。

「真琴ーお邪魔しまーす」
「おお、明久。ナイスタイミング！」
「へ？なにが？」

まあ普通はそれだけじゃ分からんだろうな。

「材料がない。だから全員揃ったら買いに行く」
「僕はお金がないんですけど・・・・・・」
「安心しろ。今日の材料代くらいはオレが払ってやるから」
「ありがとう！やっとまともな食事にありつけるーーー！！！」

まさかほんとに食べてなかったのか・・・・・・
信じられん。本人の基準でも3日もロクに食ってないとは・・・・・・

「あ、じゃあ私、家に連絡入れないと・・・・・・」
「ああ、そのほうがいいだろ。あんまり遅くなると親も心配するだろうしな」
「そうだよ姫路さん。姫路さんは綺麗で可愛いんだから色気の無い島田さんとかと違ってスタイルもいいし右腕がだんだん極められて変な方向にいいいいいいいいいいいいいい！！！！！！！！」

気が付くと島田がいつの間にか入ってきている。
何でコイツは人の家に勝手に上がりこんでるんだ！？

「なんで島田さんがいるの！？そして僕の首はその方向にはまがらなあああああああああああ！！！！！！！」

明久の首がえらいことに・・・・・・変な方向向いてる・・・・・・

「途中で坂本たちと会ってついてきたらアンタの部屋留守で隣から
あんたの声が聞こえたのよ！！」
「だからって勝手に上がりこんでいいわけ無いだろ！」

「邪魔するぞー」
「邪魔するのじゃ」
「・・・・・・・・・失礼する」

「おう。みんな」

坂本、秀吉、ムッツリーニも入ってくる。

「おう、峰嶋。で、早速だが何を作るんだ？」
「いや、それが材料が無くてさ。みんなで買いにいこうと思ってた
んだよ。次いで皆何が食べたいか言ってくれ」
「パエリアなんかどう？」
「明久。折檻されてるのによく言えるな」
「あだだだだだだだだ々だだだだだだだだだだだだだ！！！！！！」

パエリアか。悪くないな。

「みんなパエリアでいいか？」

「別にかまわねーよ」
「異論なしじゃ」
「・・・・・・・・・同意」
「はい。何でも良いですよ」
「うっしゃ！じゃあ買い物行くぞ！」
「「「「おおーーー！！」」」」

このあと折檻された明久はちゃんとナオリマシタヨ？

第五話　オレと僕とお隣さん！？　？

バカテスト　生物

第五問

問　以下の問に答えなさい。

『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希の答え

『？脂質　？炭水化物　？タンパク質　？ビタミン　？ミネラル』

教師のコメント

さすがは姫路さん。優秀ですね。

峰嶋真琴の答え

『？砂糖　？塩　？こしょう　？オリーブオイル　？ごま油』

教師のコメント

それは君が料理をする上で必要となる五大調味料です。

吉井明久の答え

『？砂糖　？塩　？水道水　？雨水　？湧き水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

一行はとあるスーパーへ来ているのであ～る。

真琴Ｓｉｄｅ

「でもパエリアって言ってもいろいろあるだろ。どれにするんだ？」
「僕がよく作るのはシーフードだけど、他にもいろいろあるよね」
真面目に夕飯の話をしているのはオレ、明久、坂本、秀吉の四人だけ。
姫路と島田とムッツリーニはどこかへ行ってしまった訳で・・・・・
「雄二、どれがいいと思う？」
「一口には言えんが食えれば何でもいい。腹が減った」
「じゃあ、明久の得意料理のシーフードパエリアで行きますか？」
「パエリアか・・・・・わしはパエリアを食べるのはかなり久しぶりじゃからのう。今から楽しみじゃ」
はっきり言って今月は金に余裕がある。
明久と違って金をつぎ込むような趣味も無いからなにかうまいものでも食べようと思ってはいたがこれはこれで悪くないだろう。
「ねえ真琴？さっき、『オレの奢り』とか言ってた気が・・・・・・」
「夕飯限定でだ。貴様の好きな者を買ってやるとは言ってない」
いくら余裕があっても今日で全部使い切るわけにはいかないからな・・・・・
「・・・・・・・・・・・・・・・・・女子の手料理」
「ムッツリーニ。作るのはオレと明久だ。その他は勉強！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・ケチ」
いや、実力の知れない奴を台所に入れるのはほんと怖いんだって。

姫路とか。

「すいません、皆さん」

そこへ姫路と島田が戻ってきた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・認めたくない現実をつれて。

「あれ、姫路さん。ベーキングパウダーとか買ってどうするの？」

「はい、ケーキを焼こうと思って」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・認めたくない現実である。

「姫路。明日はDクラスとの試召戦争だ。ケーキはそれが終わってからにしよう」

そうしないと戦争が始まる前に戦死者が出てしまう。

「・・・・・分かりました。じゃあ、Dクラスとの試召戦争が終わったら、皆さんにケーキ、焼いてきますね」

「「「「おおーーー」」」」

世の中には知らないほうが幸せなことってあるんだな・・・・・・

「じゃあ、早く帰ろうぜ。勉強する時間もなくなっちまう」

てな訳で、オレの家へと全員撤収。

明久Ｓｉｄｅ

皆がテストの点数をあげられるように勉強してる中、僕と真琴はせっせと夕飯の支度。
母さんに言わせれば「料理は家族で一番立場の弱いひとがするもの」だそうで、イコール僕が家族の中で一番立場が弱いって事には突っ込まないでね。

「みんなで集まって勉強したりするのもいいね」
「オレと姫路以外は明日のテストは現国だけだけどな」

Ｄクラスとの試召戦争か。
雄二は勝算あるって言ってたけど、ほんとに大丈夫かな。
「ここにいる奴らは強者ぞろいなんだろ。Ｄクラス相手にビビってたら、Ａクラスになんか一生勝てないぞ」
「そうだね。皆それぞれ秀でてる部分があるもんね」

Ｆクラスだけど。

「あの・・・・・・」
「え・・・・・・姫路さん？いつからそこに？」

二人で話し込んでたから姫路さんがいることに気が付かなかった。

「あの、何かお手伝いできることありますか？」

さすが姫路さん！僕らを手伝ってくれるなんて！なんて優しいんだ！

「そうだね。じゃあ――――」「悪いがまだ何も無い」
「真琴！何言ってるのさ！せっかく姫路さんが手伝ってくれるって言ってるのに！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

うっ！
なぜか真琴から『お前は黙ってろ。命が惜しくないのか』的な視線が突き刺さるように来るんだけど！

「まあ強いて言えばそれぞれの取り皿を運んでもらうくらいかな。もうすぐパエリアも出来そうだし」

・・・・・・・・・・・・いま真琴がすごく妬ましい。自分で否定しといて何言ってるんだこいつ。

「じゃあ、お手伝いさせてもらいますね」

うんうん。やっぱ姫路さんはいい子だ。

「明久。パエリア頼む」

「っと、了解」

パエリアの焦げ目（アルデンテって奴だ）が丁度いい感じになっている。

パエリア好きなんだよなー

「おーい。飯できたぞー」

真琴が呼びかけるとムッツリーニと雄二が

「「腹が減ってるんだ!!早く準備するぞ!!」」

と声をそろえて言うのである。

「「「「「「「「「いっただきまーす」」」」」」」」」

そして皆でおいしく頂くのである。

「ふぃねひまっへほうひふはいんはなーー（峰嶋って料理うまいんだなーー）」

と雄二が口いっぱいにパエリアをほおばって言う。

「オレは何かしたって訳じゃないんだけどな」

「吉井君、お料理上手なんですね」

「うん。母さんと姉さんが料理とか出来ないから、家事はたいてい僕がやってるしね（↑一人暮らし）」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・紳士の嗜み」

なぜだろう。ムッツリーニの言葉に下心しか感じ取れない自分がいる。

「でも峰嶋も作るの手伝ったんでしょ？すごいじゃない」

「うむ。わしは料理はあまり得意ではないからの。こうやって料理が出来るというのはじつにうらやましい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

真琴が黙り込んでしまった。

「どうしたの真琴？シーフード嫌いだった？」
「いや、そうじゃなくてだな。呼び方っていうか、ファーストネームのほうが呼ばれたときにしっくり来るというか・・・・・」
「つまりみんなに『真琴』って呼んで欲しいんでしょ」
「ん。まあ・・・そう・・・だな・・・・・・そのほうが・・・いいけど・・・・・・」

真琴もそれなりにわかりやすい性格だなぁ。

「という訳で、皆はこれから真琴のことはきちんと『真琴』と呼ぶように！」
「おい！何を勝手に・・・・・・」
「ホントはそう呼んで欲しいくせに」
「う・・・・・・」

「じゃあ、俺のことも『雄二』って呼んでくれ」
「わしも秀吉で構わんぞ」
「・・・・・・・・・・・・本名で呼んで欲しい」
「・・・・・・ああ、分かった。ありがとう（ムッツリーニの本名ってなんだっけ？）。」

「・・・・・なあ明久」
「なに？」

夕飯も食べ終わって、皆も帰ったあと、僕と真琴だけで勉強してい

た。

「やっぱ、友達っていいもんだよな」
「どうしたのさいきなり」
「・・・・・・いや、なんでもない」

真琴はゆっくりと立ち上がる。

「明日は試召戦争だ。もう自分の家に戻れ」
「そうだね。おやすみ、真琴」
「ああ。おやすみ」

第六話　ＶＳ　Ｄクラス　？

バカテスト　数学

第６問

問　以下の問に答えなさい

『（１）４ＳＩＮ？＋３ＣＯＳ３？＝２の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する？の値を一つ答えなさい。
（２）ＳＩＮ（Ａ＋Ｂ）と等しい式を示すのは次のどれか、？～？の中から選びなさい。

？ＳＩＮＡ＋ＣＯＳＢ　？ＳＩＮＡ－ＣＯＳＢ
？ＳＩＮＡＣＯＳＢ　？ＳＩＮＡＣＯＳＢ＋ＣＯＳＡＳＩＮＢ

姫路瑞希の答え

『（１）？＝π／６
（２）？　』

教師のコメント

そうですね。角度を『。』ではなく『π』で書いてありますし完璧です。

峰嶋真琴の答え

『（１）？＝π／６

（2）？　　』

教師のコメント

正解です。これが君の実力でしょうか。
君のまともな回答を久しぶりに見た気がします。

土屋康太の答え

『（1）？＝およそ3』

およそをつけて誤魔化したい気持ちも分かりますが、これでは回答に近くても点数は上げられません。

吉井明久の答え

『（2）およそ？』

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

坂本雄二の答え

『（2）きっと？』

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題できっとをつ

ける生徒も君が初めてです。

真琴Ｓｉｄｅ

Ｄクラス戦当日の朝。

「雄二。何か作戦はあるのか？」
「ない」
雄二の作戦というのが気になって聞いてみたところ、「ない」と返された。
「嘘だろ」
「嘘だ」
コイツ・・・・・・
「とにかくお前と姫路は回復試験を受けないことには話にならないだろ。まずそっちを心配しろ」
「教科はどうする？せいぜい2教科が限界だろう」
回復試験で全教科受けてたらさすがに時間がなくなるだろう。
よって受ける教科は2つくらいに絞らないといけない。
「俺たちは数学をメインに攻めるからな。数学のほかにはどの教科がいるか・・・・・・」
「なら私と真琴君がそれぞれ別の教科を受けるというのはどうでしょう」
と姫路がやってきた。
「だけどそれだと、教科のフィールドが変わった瞬間がきついし、オレたちがお互いをフォローしあいながら動かないといけなくなるぞ」

ようは起動力に欠ける、と言うことだ。

「いっそのこと全教科受けるか・・・・・・・」
「そんな時間あるんですか?」
「むう・・・・・・」

文月学園のテストは時間内問題数無制限。
やろうと思えば何点でも点数が取れる、という方式だ。
だがそれは逆に言えば、時間が残っているうちはテストをやり続けなければならないということでもある。

「そうだな・・・・・・じゃあこんなのはどうだ?」

と雄二が提案してくる。

「数学はメインに使いたいから二人とも受ける。で、真琴は化学、姫路は古典を追加で受ける」
「なるほどな。メインで攻める教科にしぼってテストを受けるのか。でもそれだとやっぱり反撃がつらくないか?」
「そうならないようにするんだ」

無茶言うぜ全く・・・・・・
まあそうならないようにはするけどさ・・・・・・・

おおかたの作戦が決まったところで、

「みんな、聞いてくれ」

雄二が作戦の説明にはいる。

「基本的には、時間稼ぎ方式だ。姫路と真琴が回復試験を受けられるだけ時間をみんなで稼ぐんだ。うまく事が運んでこの二人が前線に立ったとき、俺たちは勝利する！！」

「「「うぉーーーー！！！」」」

「午前中の現国の休み明け試験も含めて3教科になる。みんな！時間を稼ぐぞ！！」

「「「うぉーーーー！！！」」」

すごい団結力だ・・・・・・

明久ｓｉｄｅ

「吉井！木下たちが渡り廊下でＤクラスと交戦状態に入ったわ！」

Ｄクラスは新校舎の端、Ｆクラスは旧校舎。
この二つの教室間はかなり距離があるから、戦力も分散しやすい。
それをねらっての時間稼ぎだった。

「何が足りないんだろうな・・・・・・」

こうしてみると、同じ部隊に配属された島田さんは、いわゆるモデル体型で、背も高いし、脚も綺麗なんだけど、どうしても何か物足りなさを感じてしまう。

「ああ、胸か・・・・・・」
と自問自答がポロっと口から出てしまう。

「アンタの指折るわ。小指から順番に全部綺麗にへし折るわ」

まずい。目が本気になってる。

「まあまあ島田さん。今は試召戦争に集中しようよ」
「・・・・・まあ、そうね」

危なかった！！危うく僕の十本の指が揃いも揃って変な方向を向くところだった・・・・・・！！

「今戦況はどうなってるのかな・・・・・」
「木下たち先攻部隊が頑張ってくれてるのよ」

そこへ、叫び声が聞こえてきた。

『戦死者は補習室へ集合ーーーーー!!!』
『て、鉄人!?鬼の補習は嫌だ!!』
『鉄人ではない!西村先生だ!』
『あんなのは補習じゃない!拷問だ!』
『助けてくれー!』
『これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎という、模範的な生徒にしてやるから安心しろ!』
『『『安心できねーー!!!』』』

Dクラスの人が3人、Fクラスからも4人、補習室送りが出た。
だがおかげで雰囲気はなんとなく分かった。
この状況で僕らがするべきは、ただ一つ!

「島田さん。中堅部隊全員に通達」
「ん?何?作戦?なんて伝えるの?」
「総員退避!!」
「バカ!!!」

島田さんに目を(チョキで)殴られた。
普通そこはグーとかパーとかじゃないの!!?

「目がぁ!目がァァ!!」
「目を覚ますのよ!この意気地なしの甲斐性なし!」

目がアアアアアア！！！！

「アンタは部隊長でしょ！！臆病風に吹かれちゃだめでしょ！！」
「君の言う覚ます目が焼けるように痛いんだけどオオオオオオオオオオ！！！！」

島田さんが僕の襟首をつかみあげる。

「ウチ等は木下たちが点数を補給してる間、木下たちの代わりに戦わなきゃなんないの！！ウチ等が逃げたら木下たちが点数の補充にいけないでしょ！！」

なんか島田さんがすごい良いこと言ってる気がする。
すごい。島田さんの言葉に涙（と激痛）が止まらないよ（注：明久は痛みに泣いているだけである）。

「島田さん。僕は君の男らしさに感動したよ。僕が間違ってた。鬼の補習なんか恐れずにこの戦争に勝利することだけを考えて動けばいいんだ！！」
「ウチは女よ」
「さあいこう！勝利を目指すんだ！」

島田さんの視線が怖いが気にしないようにしよう。
と勝利を目指して意気込んでる所へ報告係がやってきた。

「報告します！先攻部隊、負傷者、戦死者ともに多数。撤退を開始しました！」
「よーし！僕等の出番だ！」
「まって吉井」

島田さんに止められた。

「総員退避よ」

「さっきといってることが真逆だよ!?」

「私たちは十分頑張った。もうこれ以上は無理なのよ!!」

まだ何もやってないけどね。

しかもなんか戻っちゃいけない気がする。

「そうだね。僕等には荷が重すぎた。撤退しよう」

「了解」

二人して臆病風に吹かれた。

そこへ、隠密（暗殺）担当のムッツリーニがやってきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・明久」

「どったの？ムッツリーニ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・雄二が、逃げずに戦ったらこれをやると」

「これは!!!」

ひ、秀吉の着替え写真!!

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・逃げたらこれを明久の家に１００枚送りつけるとも」

「こ、これは!!!」

て、鉄人の入浴写真!!?

どうやって撮ったんだ!?この写真!!

こんなの送りつけられたらたまったもんじゃない！

「全員突撃ーーーーー！！！！！」
「え！？撤退は！？」

島田さんが驚く。

「みんな攻めるぞー！！出ないと、鉄人の入浴写真が家に送りつけられてしまう！！」
「「「「な、なんだってーーーー！！！！？？？」」」」
「総員突撃ぃぃぃぃぃぃ！！！！！」
「「「「オオーーーーー！！！！！」」」」

僕等の脳破壊を防ぐためにも、この戦争に勝利しなければ！！
とここで前方から撤退してくる美少女(ひでよし)を発見。

「明久！今おぬし、美少女と書いて秀吉と呼んだだろう！」
「そんなことより、ここは僕等に任せて早く回復試験を受けてきて！」
「うむ、かたじけない！！」

秀吉が教室に急いでいく。
あとに続く選考部隊の人数が少なくなっている。
大分戦力を削られたのだろう。

「吉井！試験召喚戦争のルールは覚えてる！？立会いの先生がいないと召喚獣を呼び出せないんだからね！」
「わかってる！！」

試験召喚戦争には細かいルールや規約がいっぱいある。

1、原則としてクラス対抗戦である。各科目担当教師の立会いにより試験召喚システムが起動し、召喚が可能となる。なお、総合科目勝負は学年主任の立会いの下でのみ可能。

2、召喚獣は各人一体のみ所有。この召喚獣は該当科目において最も近い時期に受けた点数に比例した力を持つ。総合科目においては各科目最新の点数の和がこれに当たる。

3、召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数も減点され、戦死に至ると0点となりその戦争を行っている間は補習室において補習を受講する義務を負う。

4、召喚獣は止めを刺されて戦死しない限りはテストを受けなおして点数を補充することで何度でも回復可能である。

5、相手が召喚獣を呼び出したにもかかわらず、召喚を行わなかった場合は戦闘放棄と見なし、戦死者同様に戦争終了まで補習を受ける。

6、召喚可能範囲は担当教師の半径10メートル程度（個人差アリ）

7、戦闘は召喚獣同士で行うこと。召喚者自身の戦闘参加は反則行為として処罰の対象となる。

8、戦争の勝敗はクラス代表の敗北を持ってのみ決定される。この勝敗に対し、教師が認めた勝負である限り、経緯や手段は不問とする。あくまでもテストを用いた『戦争』であるという点を常に意識すること。

要約するとこんな感じ。
ちょくちょく改定されたりはするけど、この認識でいいはずだ。
よく覚えておかないと、『テストを用いていれば、召喚獣なしでも勝負が出来る』なんてことには気づかない。

「吉井！見て！」

島田さんの指差すほうを見る。

「五十嵐先生に布施先生！？Ｄクラスのやつ等、化学で勝負を挑んでくるつもりだな！？」

化学自身ないんだよな・・・・・・

「学年主任だと総合科目になって時間がかかるから立会人を増やして一気に来るつもりなのね！」
「島田さん、化学どれくらい！？」
「６０点台が普通よ」

さすがＦクラス。ひどいなあ。僕が言えることでもないんだけど。

「ならあそこは避けて学年主任の高橋先生のところに行くのがいいな」
「了解！」

で、僕等はこそこそと隅へ移動する。
・・・・・あまりほめられた光景じゃないような・・・・・・

「美波お姉さま！見つけましたわ！」
「げ、美春！！」

「しまった！布施先生が来る！」

ここで二人で戦ってたら点数を消費してしまう！
仕方ない！

「島田さんここは君に任せて僕は先に行く！」
「え！？普通逆でしょ！？」
「そんな台詞、僕は知らない！」
「えええ！？」

島田さんが快く（？）引き受けてくれた！
先を急ぐぞ！

「吉井！あとで殺してやる！」

なんか物騒なこと言ってる！

「仕方ないわね！勝負よ美春！」
「お姉さま！美春の愛の一撃、受け止めてください！！」

Ｄクラスの清水さんと、島田さんの戦闘が始まる。

「「試獣召喚（サモン）！！」」

第六話　ＶＳ　Ｄクラス　？（後書き）

如何でしたでしょうか？
感想お待ちしてます。

第七話　ＶＳ　Ｄクラス　？

バカテスト　国語

第７問

問　以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『何度も意見や忠告をしても全く聞く気配がなく、話や忠告の効き目がないこと』

姫路瑞希の答え

『馬の耳に念仏』

教師のコメント

正解です。特にコメントはありません。

土屋康太の答え

『明久に脱走しないよう言うこと』

教師のコメント

確かに意味はありませんね。

峰嶋真琴の答え

『姫路に料理の指導』

教師のコメント

姫路さんはそんなに料理が下手なのですか?

吉井明久の答え

『鉄人の耳に説得』

教師（鉄人）のコメント

何か言ったか吉井?

明久ＳＩＤＥ

「「試獣召喚（サモン）！！」」

Ｄクラスの清水美春さんと島田さんが同時に叫んだ。
と同時に足元になんか魔方陣っぽいものが出てくる。
これが教師の立会の下、試験召喚システムが起動した合図で、魔方陣の真ん中には所属するクラスが書いてある。

ポン！

そして召喚獣が姿を現す。
軍服にサーベルのその召喚獣は、顔つきや髪型がそのままで、身体だけ小さくなった『デフォルメされた島田さん』のような感じ。
相手の召喚獣もデフォルメされた感じの奴で、あっちは普通の剣みたいだけど。

「お姉さま！美春の愛の一撃、受け止めてください！」
「ウチは普通に男の子が好きなの！！」

すごい激戦の真っ只中で繰り広げる会話としてはあまりにも不適切な気がする。

「男なんて豚同等の家畜ですよ！？お姉さまはそんなものに近づいてはいけません！！」

「ほっといてよーー！！」

不適切極まりなさすぎる。

Ｆクラス　島田美波　化学　５３点

ＶＳ

Ｄクラス　清水美春　化学　９４点

「島田さんサバ読んでたの！？６０点届いてないじゃん！」

「数学以外じゃ無理ー！！」

さらば島田さん！鬼の補習に生き残れたらまた会おう！

島田さんを潔く見捨てる！これも戦争なんだ！

「さあお姉さま！一緒に保健室のベッドであんなことやこんなことを・・・・・」

「え、ちょ、吉井！助けて！なんだか危険な匂いしかしないの！！」

島田さん。ゴメン。僕じゃ・・・・・・・

「オネエサマの邪魔をスルモノ・・・・・・キリ（ＫＩＬＬ）マス・・・・・」

そこに行く勇気はない！

「ちょ、吉井！」

「さらば島田さん！」

「アンタ、ウチを見捨てる気！？」

「戦争に犠牲はつき物サ！」

「覚えてなさいよーー！！」

とそこへ須川君がやってきて・・・・・・

「島田！助太刀するぞ！！」

Ｆクラス　須川亮　化学　７６点

ＶＳ

Ｄクラス　清水美春　化学　４１点

須川君の召喚獣が清水さんの召喚獣を破る。

いわゆる戦死という状態だ。

「え？あ、あれ？」

突然やってきた須川君にあっと言う間にやられてしまった清水さん。

島田さんとの戦いで点数をかなり消費してたから、簡単に負けちゃったんだね。

「０点になった戦死者は、補習ーーーー！！！！」

清水さんが補習室に連行される。

「お姉さま！美春は諦めませんからね！美春の愛は鬼の補習程度では止められませんから！」

むしろ止めておいて欲しい。

とっても危険な香りのする捨て台詞を残して清水さんが鉄人に連れて行かれた。

「吉井」

「島田さん。お疲れ。化学の点数を補充してきなよ」

「吉井」

「さ、須川君。他にも助けを求めてる人がいるだろうから行こう！」

「吉井」

「・・・・・・はい」

「・・・・・・ウチを見捨てたわね」

「・・・・・・記憶にございません」

戦争というだけはあるな！殺気が（島田さんから）ひしひしと僕に伝わってくる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

すごく居心地の悪い沈黙が続く・・・・・・

「死ね！吉井！試獣召喚（サモ）」

「誰か！島田さんが錯乱したぞ！本部に連行してくれ！」

「落ち着け島田！吉井は味方だ！」

すごい殺気に満ちた目で僕を見ないで島田さん！

「違うわ！コイツは敵！ウチの最大の敵なの！」

否定する要素がない・・・・・・

「須川君。ヨロ」

「了解」

「放しなさい須川！あいつだけは・・・・・・あいつだけはーーーー！！！」

身の確保だけは出来たな。

「よし！秀吉たちの補給が終わるまでここは誰も通さないぞ！」

大声で指示を出す。

「前線を突破出来れば、補給中の奴ばかりだ！Fクラスなんかに負けるな！！」

向こうの隊長格からも大声で指示が飛ぶ。

ここからが正念場だ！

真琴ＳＩＤＥ

教室で回復試験の真っ最中。
化学は格別得意じゃないんだが、Ｄクラスと対抗するだけの点数を取らないと・・・・・・

「先生！回復試験を受けさせて欲しいのじゃ！」
「秀吉！」

ドアを開けて秀吉が入ってきた。

「科目は何にしますか？」
「化学でお願いしたい！」

「では準備がよければ始めてください」

「（秀吉。戦況はどんな感じだ？）」

「（あまり好ましくないのう。化学の布施先生と五十嵐先生が出てきて苦戦しておる。）」

「（化学か・・・・・・）」

丁度今受けている試験も化学だ。

雄二との打ち合わせでは数学も一緒に受ける予定だったけど、むしろ数学はやめたほうがいいかもな。

「そこまで！姫路さんと峰嶋君は引き続き数学の試験を・・・・・・」

「先生。オレは数学の試験は辞退します」

「「え？」」

秀吉と姫路の声が重なる。

「でも、坂本君の指示では数学も受けたほうがいいって・・・・・・」

「化学のフィールドからは出ないから安心しろ。オレが時間を稼ぐから、その間にもう2，3教科受けてくれてもいい」

「真琴！お主化学は苦手ではないのか！？」

「多分大丈夫だ。そういうわけだから先生。秀吉と姫路はそのままで」

「分かりました。頑張ってください」

「じゃあ、お先に暴れてくるぜ！」

試験召喚戦争。

オレがこの学校に来た一番の目的がやっと果たされる。

明久ＳＩＤＥ

「クソ！もう持たないかも・・・・・！」

『吉井隊長！横溝が戦死！布施先生側があと二人に！』

『五十嵐先生側があとオレだけだ！援軍頼む！』

『藤堂が戦死しそうだ！何とかしてくれ！』

劣勢は想像以上だ。

雄二たちにも応援を頼みたいけどそんなことしたら作戦に使う戦力がなくなる・・・・・・

「布施先生側は防御に専念して！五十嵐先生側は総合科目担当と入れ替わって効率いい勝負をするように！藤堂君はかわいそうだけど見捨てよう！」

『了解！』

「Ｆクラスのやつ等、時間稼ぎ目的か！？」

「何を待ってるんだ！？」

「あっちは世界史の田中が来たぞ！」

「世界史の田中だと！？」

「長期戦目的か・・・・・・！」

まずい。Ｄクラスの人たちが、こっちの作戦に気づいてる。

真琴！姫路さん！まだなの！？

『布施先生側に戦力を集中させろ！五十嵐先生はオレが行く！』

この声は・・・・・・

「真琴！よかった！間に合った！」

「数学のテストはやめてきたからな」

「え？やらなかったの？」

「ああ。たまたま受けてたテストが化学で、Ｆクラスが化学で押されてるって聞いたからな。五十嵐先生側のＤ連中は任せろ！」

「分かった！頼むよ真琴！」

「おうよ！」

真琴は五十嵐先生のいるほうに向かって走っていった。

「みんな！真琴が五十嵐先生側に向かった！布施先生側は全力で守るよ！」

「「「了解！！」」」

真琴ＳＩＤＥ

「クッソー・・・・・」
「援軍はまだなのか！」

こっち側はあと二人か。
相当追い詰められてんな。

「援軍だ」
「おお！峰嶋！すまないが頼む」
「任せておけ」

やっと暴れらるんだ。むしろ任せてくれないと困る。

「Ｆクラス峰嶋真琴、この場にいるＤクラス全員に化学で勝負を申し込む！」

「な、何！？」
「Ｄクラス全員に！？」
「Ｄをなめてるでしょ！？Ｆの癖にーー！！」

「御託はいいからかかってこいよ。早く戦いたくてうずうずしてんだ」

「舐めないでよね。行くわよ皆！」

向こうのリーダー格の女子が先陣を切ってくる。

「「「「「試獣召喚(サモン)！！」」」」」

「試獣召喚(サモン)！！」

Ｆクラス　峰嶋真琴　化学　２５８点

ＶＳ

Ｄクラス　岡田裕子　化学　１０８点
向井週　化学　９６点
今井由美　化学　１１２点
稲盛健吾　化学　８７点

「２００点オーバー！！？」

「何でこんな奴がＦクラスにいるのよ！？」

「興味本位だよ！！」

一瞬でＤクラスのやつ等がオレの召喚獣の大剣の餌食になる。

オレの召喚獣は黒いダウンジャケットを羽織っていて、両手に自身の身長の二倍ほどある大剣を持っている。

「なら、化学以外で攻めるまでよ！」

「Ｄクラス吉田麻衣ほか４名がＦクラス峰嶋真琴くんに現代国語勝負を申し込みます！」

現代国語なら午前中にテストを受けてるから点数はあるはずだ！

「「「「「試獣召喚(サモン)！！」」」」」

「いいねえ！パワーゲームは嫌いじゃないよ！試獣召喚（サモン）！！」

Ｆクラス　峰嶋真琴　現代国語　４３９点

ＶＳ

Ｄクラス　吉田麻衣　現代国語　１３９点
岡井勇次　現代国語　１２４点
長島翔太　現代国語　　９７点
三島賢三　現代国語　１０５点

「「「「「４００点オーバーだと！！」」」」」

「「すげ～～・・・・・・」」

仲間のＦクラスの二人ですら呆然とする。
先生の話じゃ４００点以上が優秀な点数だそうだからな。そうでなくたって、この点数じゃＦクラスにいるわけがないと思われても仕方ないが。

「手ごたえなさ過ぎだよ！」

一瞬で振るわれた大剣はＤクラス４人の召喚獣を吹っ飛ばした。

Ｆクラス　峰嶋真琴　現代国語　４２１点

ＶＳ

Ｄクラス　吉田麻衣　現代国語　　０点

岡井勇次　現代国語　０点
長島翔太　現代国語　０点
三島賢三　現代国語　０点

「戦死者は補習室に集合！！」
「げ、鉄人！」
「ほしゅういあだ～～～～～～！！」

Ｄクラス８人補習室へごあんな～い♪
鉄人こと西村先生によってＤクラス生徒８人が連衡されて行った。

「よっしゃ！こっち側はＦクラスが制圧！隊長に報告だ！ついでに布施先生側はオレが行くから、そっちにいる奴はこっちへ移動って伝えとけ！」
「了解！」

第七話　ＶＳ　Ｄクラス　？（後書き）

読んでいただきありがとうございます！
真琴が大暴れしましたね・・・・・・

誤字脱字ありましたらご報告お願いします。

第八話　ＶＳ　Ｄクラス　？（前書き）

今回はバカテストは無しということで

第八話　ＶＳ　Ｄクラス　？

真琴Ｓｉｄｅ

「援軍はまだか！？」
「今、峰嶋がこっちに移動してる！」
「撤退準備だ！」

Ｆクラスのやつ等には、俺が到着したらすぐ撤退するように言ってある。
だがさすがに戦争。かなり体力を使うな。

「Ｄクラスが攻めて来るぞ！」

『Ｆクラスなんかに負けるなー！』
『オオーーー！！』

「その勝負、Ｆクラス峰嶋が受ける！試獣召喚（サモン）！！」

Ｆクラス　峰嶋真琴　化学　２２８点

ＶＳ

Ｄクラス　モブ男Ａ　化学　７８点
モブ男Ｂ　化学　１００点
モブ男Ｃ　化学　６６点

「その程度じゃ勝てないぜ！」

オレの召喚獣が左手の大剣でＤ連中の召喚獣をなぎ払う。

「ならオレの得意な数学で勝負だ！」

Ｄクラスの一人が数学の長谷川先生を連れてくる。

「まずい！全員撤退！オレ数学受けてないから０点なんだ！！」

「「「なにいいいいい！！！」」」

あくまでも俺が戦えるのは数学、現国、総合科目のみ。

それ以外の科目は０点だ。

「数学なら勝てるぞ！！Ｄクラス突撃！！」

「「「おおーーー！！」」」

「ヤバイ！！数学の点数がある奴は前線で防御に徹しろ！！点数が残ってない奴は撤収！！」

「峰嶋！ここはこの須川に任せろ！！」

「須川！！」

須川に任せるしかない自分がこの上なく情けない。

「すまないが、任せた！！」

「おう！長谷川先生！Ｆクラス須川が召喚します！試獣召喚（サモン）！！」

Ｆクラス　須川亮　数学　８９点

ＶＳ

Dクラス　モブD　数学　９０点
モブE　数学　１１８点
モブF　数学　１０４点

「駄目だったー！！」
「須川ァァァァァ！！」

だめじゃん！

「戦死者は補習ーーーー！！」

須川が鉄人に連行される。

「ムッツリーニ！長谷川先生を何とかできないか！？」

『・・・・・・・・・・・・やってみる』

「ついでに化学か現国の先生を手配してくれるとありがたい！」

『・・・・・・・・・・・・任せろ』

姫路の回復試験が終わるまで、なんとしても持ちこたえなければならない。

「真琴！時間稼ぎ終わり！終わったみたいだよ！」
「やっと終わったか！！」

ここに来ていい知らせだ。
しかもムッツリーニがうまくやってフィールドを数学から現国に変

えてくれた。

「Ｆクラス峰嶋真琴、Ｄクラス三名に現国で勝負を申し込む！試獣召喚（サモン）！！」

Ｆクラス　峰嶋真琴　現国　４２１点

ＶＳ

Ｄクラス　モブ　現国　５６点
　　モブ　現国　９９点
　　モブ　現国　１２２点

「勝負さえ出来ればＤクラスになんか負けないさ！！」

またまた一瞬でＤクラスの召喚獣を葬る。

「こっち側も完全に押さえた！！もうすぐ我等が切り札が来るぞ！全力でサポートしろ！！」

『ついに来たか！』
『てめえら！！死ぬ気で行くぞ！！』
『任せろ！！』

明久ｓｉｄｅ

さかのぼること４０分ほど前。

先生たちがどんどん呼ばれて戦線が拡大されている。
このままだと総合点数で劣るＦクラスに勝ち目がなくなってしまう。

「須川君！何とか先生たちの動きを止められない！？」
「任せろ！」

須川君がうまくやってくれることを祈るしかない。

「よし、みんな！ここは耐えるよ！」

ピーンポーンパーんポーン

この放送はもしかして須川君か！？

＜連絡いたします。船越先生。船越先生＞

ナイスタイミングだよ！須川君！船越先生を動かせるなら、Ｄクラスの戦力はこれ以上広がらない！

＜吉井明久君が体育館裏で待ってます＞

・・・・・・・・・・・・あれ？須川？

＜生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです＞

「すううぅうがぁあああわあああああ！！！！」

なんてことしてくれてんだ！あのバカ！相手はあの船越先生だよ！？婚期を逃して単位を盾に生徒に交際を迫る第一級危険人物ぞ？

「許さんぞ！すがわぁぁぁぁあああああ！！！！」

「吉井隊長！あんたぁ男だよ！」

「クラスのためにそこまでしてくれるなんて・・・・・・」

「みんな！吉井隊長の犠牲、無駄にするな！！」

やめて！あおらないで！

これは須川の策略であって僕にはそんな趣味はないんだ！！

『おい・・・・・・聞いたか今の放送』

『Ｆクラスのやつ等、そこまでするなんて・・・・・・』

『そんな括弧とした決意のあるやつらに、勝てるのか・・・・・・？』

やめて！だからあおらないで！

クソッ！須川！絶対許さないぞ！

「みんな！吉井隊長の戦死を無駄にするなーー！」

「おおーーー！！！」

ああ！うちの士気にまでいい影響が！もうやめて～！助けて～！

「須川！絶対に許さんぞ～～！！」

Dクラスと接戦になったところでクラス代表の雄二が応援に来てくれた。

「雄二！きてくれたの！？」

「ああ。明久。あの放送、すごくよかったな」

コイツ、僕の不幸を喜んでやがる！！

「ねえ雄二。須川君、どこにいるか知らない？」

「さあ。そのうち会えるだろ」

よかった！会えるんだ！

「やれる。僕なら殺れる・・・・・・！」

「殺るなっての」

須川君！早く逢いたいよ・・・・・・

「ちなみに、あの放送は俺の指示だ」

『キシャアアアアアア！！キサマダアアアアアア！！』

「あ、船越先生」

僕はバッと身を翻し、逃げる。

身の安全の確保が優先だ！

「さて、そろそろいくか」

「そうじゃな。下校する生徒も出始めたことじゃし。バカはほっといて良いのかのう？」

「かまわん」

構えよ。

「あーーーー・・・・・・それと明久。船越先生がいるってのは嘘

だ」

うそ？ウソ？嘘？

そのあたりはもう誰の気配もしなくなった。

「逃がすかぁ！！雄二ィィィ！！」

『Ｄクラス塚本、討ち取ったぞ！！』

敵の隊長格を討ち取ったようだ。
おおくのFクラスの生徒が下校中の生徒に混じってDクラスを取り囲んでいる。

「雄二どこだ！！」

もう僕には戦況がこっちに傾いてるとかそんなことはどうでもいい。
とにかく雄二を探し出して殺す！

「首を洗って待ってろ！雄二！」

「援護に来たぞ！もう大丈夫だ！」

げ！あれはDクラス代表の平賀くん！

「Dクラスの本体だ！ついに来たぞ！」
「本体の半分は坂本を討ち取れ！残りは包囲されてる奴を助けるんだ！」
『おおーーーー！』

雄二がDクラスの人たちに包囲される。
くっそっ！コレじゃ雄二に近づいて暗殺することが出来ないじゃないか！

と走り回ってた僕の視界に平賀くんの姿が入る。

「チャンス！」

雄二を殺れないなら敵を殺るまでだ！

近くにいるのは現国の竹内先生。いまなら勝てないまでもダメージは与えられる！

「竹内先生！Ｆクラス吉井が――――！」
「その勝負、Ｄクラス玉野美紀が受けます！試獣召喚（サモン）！」
「な！？近衛部隊！？」

Ｆクラス生徒と思われる奴の動きには注意して立ってことか！
平賀くんと僕の間にはＤクラスの女子が割って入った。

「残念だったな。船越先生の彼氏クン？」
「違う！断じて僕にそんな趣味はない！」
「照れるなよ。さあ皆で祝福してやろうじゃないか」

と平賀くんがぼくを挑発してくる。

「あと少しでＤクラスを落とせたのに！！」
「お前じゃ無理だ。観察処分者のお前じゃな」

確かにそのとおりだけど、改めて言われるとむかつく！

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「どうした。やらないのか？」

確かに僕じゃ無理だけど・・・・・・

「君の言うとおり、確かに僕じゃあ無理だよ。だから・・・・・・」
「だから？」
「だから姫路さん。真琴。よろしくね」
「は？」

『何を言ってるんだ？このバカは』見たいな顔をしている平賀くん。
まあそうだろうね。あの二人がＦクラスにいるなんて普通思わないから。

「あ、あの・・・」
「えと・・・こんちは？」

で、僕の後ろから真琴と姫路さんが顔を出す。

「え？姫路さん？Ａクラスはこの廊下通らなかったと思うけど。とそっちの君は？」
「ああ。オレは峰嶋真琴。えっとこの春から転校してきました」
「えっと私はＡクラスじゃなくて・・・・・・」

まだ状況をつかめてない平賀くん。

「えっと、Ｆクラス姫路瑞希と・・・・・・」
「峰嶋真琴が」
「「Ｄクラス平賀くんに、現代国語勝負を申し込みます（む）！！
試獣召喚（サモン）」」

「え？ええ？？」

とりあえず召喚獣を構えさせる平賀くん。
でも無駄だろうな。
だってこの二人は・・・・・・

Ｆクラス　姫路瑞希　現代国語　３３９点
　　峰嶋真琴　現代国語　３８６点

VS

Dクラス　平賀源二　現代国語　１２９点

「あ、あれ？」

平賀くんの召喚獣は二人の大剣で消し飛んでしまった。
竹内先生が戦争終結を告げる。

「戦争終結！勝者、Ｆクラス！」

新学期一回目の試験召喚戦争はＦクラスの勝利で幕を閉じた。

第八話　ＶＳ　Ｄクラス　？（後書き）

如何でしたでしょうか？
平賀くんにはＦクラス最強コンビに下されてもらいました。

誤字脱字ありましたらご報告ください。

第九話　僕と悪魔と自分の気持ち

バカテスト　歴史

第８問

問　以下の文の（　）に入る正しい言葉を答えなさい。

『アケネメス朝ペルシアの最後の国王を破り、紀元前（　　）年に（　　）を始めたのは（　　）である』

姫路瑞希の答え

『アケネメス朝ペルシアの最後の国王を破り、紀元前（３３４）年に（東方遠征）を始めたのは（アレクサンドロス?世）である』

教師のコメント

正解です。アレクサンドロス?世の部分は、アレキサンダー?世やアレクサンダー?世、アレクサンドロス大王でも良いですね。

吉井明久の答え

『アケネメス朝ペルシアの最後の国王を破り、紀元前（３３４）年に（東方遠征）を始めたのは（アレクサンドロス大王）である』

教師のコメント

正解ですがどうしたのですか?まるでいつもの吉井君ではないよう

です。

土屋康太の答え

『アケネメス朝ペルシアの最後の国王を破り、紀元前（３３４）年に（成人向けの写真集販売）を始めたのは（吉井明久）である』

教師のコメント

年号があってるのにそういう風に間違えるのはある意味すごいと思います。ただし、吉井君を成人向けの写真集の販売者に仕立て上げるのは辞めてください。

峰嶋真琴の答え

『アケネメス朝ペルシアの最後の国王を破り、紀元前（－２００８）年に（文月学園への転校の準備）を始めたのは（何を隠そうこのオレ）である』

教師のコメント

－２００８ってなんですか？

真琴ＳＩＤＥ

Ｄクラスを下したとあって、Ｆクラスのはしゃぎぶりは凄まじいものだった。
もともとがはしゃいだり騒いだりが好きな連中で、しかも二つ上のクラスを下したのだからもうボルテージはＭＡＸを超えていた。

「卓袱台に腐った畳とはおさらばじゃーーーー！！！」
「坂本雄二さまさまだな！」
「それを言うなら姫路さんと峰嶋だろう！あの二人の点数は凄まじかったぞ！」
「姫路さん愛してるぅぅぅぅぅう！！」

・・・・・どうしよう。最後のラブコール野郎はシバくべきなんだろうか。

まあ今日くらいは許してやってもいいんだけどな。

「姫路さん結婚してぇぇぇ！！！」

前言撤回だ。あいつは殺そう。

そんなこんなのボルテージ最高潮のバカ連中を尻目に、雄二がＤクラスの代表と交渉らしいことを始めた。

「雄二。何の話をしてるんだ？」

「真琴か。いや、この後の話をな」

「設備交換のことか？」

「・・・・・いや、設備も交換はしない」

「だろうな」

雄二がびっくりしてこっちを見る。

「な、なんだよ」

「いや、なんか分かってたみたいだったから」

「大方、Ａクラスとやりあう時の布石かなんかだろうと思ってな。お前が言ったんだぞ。『俺たちの目標はあくまでもＡクラスだ』ってな」

「鋭いな・・・・・」

「これだけ短い時間で、他人を理解したのは初めてかもしれないな」

「どういうことだ？」

「そのうち話してやるよ。それより交渉するんだろ。付き合うぜ」

「ああ。よろしく頼む」

雄二と一緒にＤクラスの教室に向かう。さっきも言ったが出会ってたった数日で他人の特徴や考え方を理解したのは明久や姫路のときくらいだ。
もっとも今までいた他人なんて興味もわかないような奴ばかりだったけど。

雄二ＳＩＤＥ

「なあ真琴」
「なんだよ」
「握手という建て前をつかってオレを殺そうとした奴がいたんだけどな。どうすればいいと思うか？」
「殺し返すべきだな。そんでもってそいつは多分明久なんじゃないか？」
「ご名答だな」
「二人で楽しそうな会話してて申し訳ないんだが、戦後対談といきたいな」

Ｄクラス代表の平賀源二がうずうずしているな。

「ああ、そうだったな」
「今日はもう遅いし、クラスの設備交換は明日でもいいか？」
「いや、クラス設備の交換はしない。この戦争は“両クラスの代表による話し合いで、勝敗はなかったことにする”」
「どういうことだ？」
「そっちがある条件を飲んでくれれば、Ｄクラスの設備はそのままで良いって事だ」

この条件はＤクラスの連中からしてみれば、とってもおいしい条件だろう。

「なにをすればいいんだ」
「タイミングを見計らって、アレを壊して欲しい」

俺が言うアレとは、Ｂクラスの外に付いてる室外機。
来たるＢクラス戦への布石といったところだ。

「わかった。まあ注意や罰則はあるかもしれないが、この教室を守れるならやろう。だが本当に設備を交換しなくていいのか？」
「なんだ？あのボロい卓袱台と腐った畳が欲しいのか？」
「と、とんでもない！」

あわてるDクラス代表。
やっぱり今の環境を壊したくはないわけだ。

「俺たちの目標はあくまでAクラスのシステムデスクだ。Dクラスの設備で満足されちゃ困るんでな。」
「モチベーション維持のためってことか」

物分りのいい代表さんで助かったぜ。

「じゃあ俺たちはもう用はないんでな。引き上げるぞ、真琴」
「じゃあな。平賀」
「ああ。Aクラスに勝てるように祈ってるよ」

嘘付け。

「本当は勝てる訳ないって思ってんだろ」
「はは・・・・・ばれてたか。まあ、頑張ってくれ。期待はしとくよ」
「俺たちは勝つさ。なあ真琴？」
「当然。今年のFクラスは最強だからな」
「Aクラスに勝てよ！最強のFクラスさん！」

「で、雄二。なんでDクラスの設備を交換しなかったのは何でだ」
「さっきも説明しただろ。次のBクラス戦へ向けての種まきだ」
こいつはほんとに物分りが悪い。
「全く明久。そんなバカだからお前は近所の小学生に『バカなお兄ちゃん』って呼ばれてるんじゃないのか？」
「真琴もうまい事いうな」
Dクラス戦が終わってから、真琴がだんだんリラックスしてきたように思う。

「え!?何でそれ知ってるの?」
「「え!?マジだったのか!?」」
俺と真琴が同時に突っ込む。
「まあ、ＢＡＫＡ(あきひさ)はほっといて、今日はご苦労だったな皆!」
「待て雄二!貴様、今ＢＡＫＡと書いて明久と呼んだな!取り消せ!」
「そうだぞ雄二!」
真琴も揃って反論してくる。
「ＢＡＫＡに失礼だ」
「そうか・・・・・。すまなかった・・・・・・」
「僕は!?」
そうか。ＢＡＫＡを明久よばわりなんて失礼だよな。
「真琴!貴様裏切ったな!」
「雄二。続きを頼む」
「きけぇぇーーーー!!!」
「明日は今日の戦争で消費した点数の補充だから、ゆっくり休んでくれ!以上、解散!」
『『『あざしたぁー』』』

明久ＳＩＤＥ

「あの、坂本君！」

姫路さんが雄二に声をかける。

「お、お話があるんですけど」

「おう。いいぞ」

雄二と姫路さんが僕から少し離れたところで話し始める。
うーん・・・・・・内容がすごく聞きたい。

・・・

・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

は！？

待てよ！？ない頭をフル回転させるんだ！

姫路さんは僕のことを見てない

↓眼中にない

↓存在を気づかれない

↓スカートめくり放題！！

「いやいやそんなことしたら、姫路さんがかわいそうだよな。うん。やめよう」
「何を言ってるんだ、明久？さっさと帰るぞ」
「え？帰るって？」
「明日は補充試験だぞ？勉強しなくていいのか？」

あ。そうか。今夜のうちに勉強しておけば明日のテストでいい点数が取れるのか。

「早く戻るぞ。お前は頭悪いんだから一夜漬けだな」
「えええ!?寝かせてくれないの!?」
「お前の頑張り次第だ」

真琴と二人で話してると姫路さんと雄二話しながら戻ってきた。

「あの、吉井君が試召戦争をやろうって言い出した理由って・・・・・」
「さてな。大方、振り分け試験のときに何かあって、それが原因になってるってとこじゃないか?」

『さあ、めくっちまえよ。気づかれないって。せっかく姫路さんのスカートの中覗けるんだぜ?』

はっ!?貴様は僕の中の悪の心だな!?
だが貴様なんぞに負けはしない!!いでよ!退くの善の心ーーーーー!!!!

・・・
・・・・・・
・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・

あれ？僕の善の心は？
天使さんはいないの！？

「それじゃやっぱり・・・・・」
「たぶんな。姫路の想像は大体あってると思うぞ」

僕の心の葛藤なんざいざ知らずってやつですね。ハイ。

「こっちの話は終わったぞ。早く帰って勉強して来い」
「りょーかい」

真琴は勉強なんかしなくたって十分頭いいじゃないか。

「じゃあ帰るか。明久」
「うん。そうだね。それじゃまた明日ね。姫路さん」
「は、はい！」

帰り際に姫路さんの顔が赤くなったような気がしたけど、何でだったんだろう。

『・・・・・スカート、めくってもよかったんとちゃう？』

遅いよ天使！！しかもスカートめくり肯定してる上になぜに関西弁！？
色々忙しかった。

「あ」
「どうした。明久」
「ゴメン。教科書とか忘れちゃったみたい。取ってくるから二人とも先に帰っててて」
教科書を取りに戻るだけで二人を待たせるのも悪いと思った。
「当たり前だ。お前を待ってるわけがないだろう」

ぐ・・・・・・雄二に期待した僕がバカだったのか・・・・・・

「オレも戻ろうかな。どうせ家も明久の隣だし、一人で帰ってもつまんないからな」

「真琴はいい奴だよね。雄二と違って」

「勘違いするな明久。俺はお前の不幸を望んでるだけだ」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（ガンのくれあい）」」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（メンチの切りあい）」」

「お前等は本当に仲がいいんだな」

「「どこがだ！？」」

こんな奴と仲がいいなど心外だよ！

「それより明久。戻るなら早く戻ろうぜ。雄二。また明日な」

「おう」

で、雄二と別れて二人でＦクラスの教室に戻った。

教室には誰もいないだろうなって思ってたんだけど、僕のその考えははずれだった。
姫路さんがいたんだ。
しかも真琴が姫路さんを見た瞬間にニヤニヤしながら、

「じゃあオレは用事ないから外にいるぞ」

とか言い残してどこかに行ってしまった。

「あれ？姫路さん？何してるの？」
「よ、吉井君！？」

姫路さんがびっくりして、机の上にあったものを落としてしまう。
で、それが僕の足元に落ちる。
ピンク色で綺麗な便箋・・・・・まるでラブレターだな。

『普通にラブレターだろ。どう見ても』

またお前か！どうしてお前はそう僕を不幸にしそうなことばかり言うんだ！

『それが現実だ』

なんかムカつく。

更にその一文も目に入る。

＜あなたの事が好きです＞

『これがラブレターじゃなくてなんだというつもりだ？』

違う！これは断じてラブレターではない！

「あ、あの、吉井君・・・・・・それは・・・・・・・・」
「うん、大丈夫分かってるよ。これは・・・・・・・・」

『認める気になったか』

「不幸の手紙だよね」

『認めないのかよ!?』

「あ、あの、それはそれで困る勘違いなんですけど・・・・・・・」
「大丈夫。僕は分かってるよ」

『分かってないだろ』

うるさいぞ!僕の中の悪魔!

『そのラブレターの相手がお前って可能性もあるだろ』

え?いやいや、姫路さんが僕なんかに・・・・・・

「あの、吉井君?」

「なに、姫路さん？」
「あの、私の話、聞いてくれますか？」
「うん。気に入らない奴がいるなら僕が始末するよ？」

『早速聞いてねえじゃないか・・・・・』
「早速聞いてないじゃないですか・・・・・」

悪魔と姫路さんの台詞が被る。

「あのですね、吉井君」
「うん・・・・・。正直に聞くとするよ」

もう否定する材料が見つからない。

『やっと素直に認めたか』

「私ね、小学校の頃からずっと好きだった人がいるんです」
「やっぱり、うちのクラスの・・・・・？」
「はい。クラスメイトです」

やっぱり雄二か・・・・・
いや、小学校からっていうから真琴かな？
でも雄二とはさっき二人で話してたしなぁ・・・・・

『あくまで自分って可能性はないと思ってるのか？』

あるわけないでしょ。

「でもそいつのどこがいいの？外見だって・・・・・・」

「はい。外見も良いですよ？カッコいいし、凛々しくて、目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし・・・・・・・」

あれ？なんか聞いたことある特徴だな・・・・・・

「くそ！憎い！アイツが心底憎いぞ！！」

「え？どうしてですか？」

姫路さん。僕は自分に自信がないんだよ。

「僕には外見に自信がないから・・・・・・」

「そんなことないですよ！吉井君はすごくカッコいいです」

「え？そうかな？」

カッコいいなんて女の子に言われたの、初めてかも。

「ありがとね。姫路さんみたいな可愛い女の子にそういう風に言われたらうれしいかな？」

「え！？可愛いだなんて・・・・・・そんな、あの・・・・・・」

姫路さんが赤くなる。

ＦＦＦ団がいたら間違いなく殺されてただろうな。

『・・・・・ま・・・・・・・るな！・・・・・・・井はころ・・・・・・だ！』

『だま・・・・・・！いいから・・・・・・・・すんな・・・・・・・・バ・・・・・・も！』

なんか外から言い争う声が聞こえる。

「なんでしょう？」

「なんだろうね？」

ドコーン！となんか大きな音がしたんだよね。

「・・・・・・ほんとになんでしょう？」

「・・・・・・・さあ？」

で、なんか話題がそれてることに気が付いて、

「で、なんだっけ？」

「えっと、吉井君はカッコいいって・・・・・・・」

姫路さんがまた赤くなるんだけど、なんか違う話だったような気が・・・・・・

「あの私の友達も言ってました！『美少年の吉井君と、たくましい坂本君が並んでると、絵になるね』って」

「そう。仲良くしてあげてね」

「はい。あと、『やっぱり吉井君が“受け”なのかな？』とも・・・・・。受けってどういうことなんでしょう？」

姫路さんは誰と友達になったんだろう？

「前言撤回。その人とは距離を置こう。姫路さんには早いと思う。

いろんな意味で」

僕が雄二と?で僕が受けって・・・・・・ヤバイ・・・・・・吐きたくなってきた。

「でも“外見も”ってことは、中身がいいの?」

「・・・・・・はい」

「そうだよね。すごく頑丈そうだもんね。特に肝臓とか大腸とか」

『そこまで認めたくないのか!?』

久々に出てきた悪魔を無視して話を進めよう。

『オイ!無視すんな!』

「それは身体の中身です・・・・・・」

「じゃあ、やっぱり性格とか・・・・・・?」

「・・・・・・はい。とっても優しくて、いつも笑顔で、私のために本気になってくれて」

優しい?僕を第一級危険人物に売り渡すような雄二が優しいと?いや、でも真琴だったらありえるかな?真琴は昔っから僕と姫路さんには優しかったから。

「あのね、姫路さん。落ち着いて聞いて。右と左はどっちか分かる?」

「・・・・・・あの、別におかしくなったわけじゃないですよ?」

むー・・・・・まさか雄二に催眠術を?もしくは真琴が?

「でも、ずっと近くにいたのに、思いを伝えられなくて・・・・・・」

すっと近くにいた?雄二と姫路さんってそんなに長い付き合いなのか?

「だから、吉井君!!」

「何かな?」

こんな風に本気になってる姫路さんを茶化すなんて出来ない。

むしろ、応援してあげるべきだと思う。

「だから、吉井君。昔みたいに、いまから“明久君”って呼んでも良いですか?」

「え?」

姫路さんが好きなのは雄二か真琴じゃないの?

「あ、いや、でもそれこそFFFとかが許してくれないだろうし・・・・・」

でもあわててる僕の手を姫路さんが握ってくれる。

「いいですか?明久君」

「・・・・・・うん」

姫路さんに手を握ってもらって、下の名前で呼んでもらって、僕は

始めて自分の気持ちに気が付いた。
姫路さんが好きなのが、雄二だろうと真琴だろうと、他の誰かだろうと関係ない。

僕は、姫路さんの事が好きなんだ。

第九話　僕と悪魔と自分の気持ち（後書き）

読んでいただきありがとうございました！
明久が自分の気持ちに気づいたって仕様にしてみました。
根本くんと戦うときにもこの気持ちが関係してくるかも・・・・・・！？

誤字脱字ありましたらご報告ください。

番外編　姫路瑞希（と峰嶋真琴）の楽しい料理教室（前書き）

Ｂクラスとの試召戦争の前に、番外編（姫路さんが料理を作り、真琴が犠牲になる話）をやりたいと思います。
肉じゃがを作ります（注：王水などは決して入ってません。そう信じたいです）。
台詞が中心になってると思います。

番外編　姫路瑞希（と峰嶋真琴）の楽しい料理教室

「姫路瑞希（と峰嶋真琴）の楽しい料理教室～～！！！（ドンドンパフパフ～）」

となんだかとっても陽気な雰囲気で始まってはいるものの、ようはオレが姫路の料理の手伝いをして殺される。という落ちにしかならない気がする。

「このコーナーは、私が真琴君に料理を教えてもらって、あ「要するに姫路が明久のために手料理を作りたいと言うのでオレが手伝うことにしよう！という企画な訳です」言わないでください～～～～！！」

なんだかとっても先が思いやられる・・・・・・

「今日は肉じゃがを作りたいと思ってるので、真琴君も手伝ってくださいね？」

「了解しました・・・・・・」

☆材料☆

「まずは肉じゃがの材料の紹介を「省きます」ってだめですよ！！」

「ていうか、ただ明久に料理を作って持ってくだけならわざわざこうやって小説にしなくてもいいんじゃないか？」

「それは、そのう・・・・・・」

「はい。姫路が自分のコーナーを持ちたいという無茶振りをするだけなので、それでは皆さんさよ～なら～」

「ま、待ってください！ちゃんとやりますから！だからさりげなく秘密のレシピ（危険物）を廃棄しようとするのはやめてください！」

「ちゃんとやるならこんな危険物はすぐに撤去したほうがいいな」

「まってください～！」

☆5分後☆

「・・・・・・・・・・・料理ってこんなに疲れるんだっけ？」

「それでは材料の紹介です」

「やるのかよ・・・・・・」

「材料は、４人分。じゃがいも大４個、たまねぎ大１個、しらたき１玉、牛肉（薄切り）２００ｇグリンピース大さじ３、サラダ油大さじ３、さらに煮汁の材料として、砂糖・・・大さじ３、みりん大さじ２、しょうゆ大さじ４、水カップ２を使います！さらにこの秘密のレシピを・・・・・・」

「だから危険物は入れんなぁ！！」

☆作り方☆

「じゃがいもは皮をむいて、適当な大きさにきります。１０～１２個くらいに切り分けるのがいいでしょう。たまねぎは芯を落としてから厚みを3等分して同じ大きさのくし形に切り分けます。牛肉は3～5センチくらいに切りましょう。好みに負わせて多少大きさが変化しても構いません」

「案外普通に出来るんだな・・・・・・」

「しらたきはサッとゆでてアクをとりましょう」

「別に俺が教えなくても大丈夫そうだな」

後になって、このときのオレは、どうして姫路から目を離したのかがいつまでたっても理解できなかった。

「鍋でサラダ油を熱し、たまねぎをいためます。少し透明になるまで炒めてください」

「ディレクターさん。オレっている意味あります～？」

「ブレーキ＆犠牲」ｂｙディレクター

「うおい！？なんちゅう危ない役やらせるんだ！？」

「たまねぎが透明になるまで炒めたら、そこに牛肉、水けを切ったしらたきとじゃがいもを加え、全体に油が回るように炒めましょう」

「まて！プロデューサー出て来い！」

「牛肉の色が変わったら分量の水を加え、最初は砂糖・清酒・みりん・しょうゆ各大さじ2で調味をしてください。すぐふたをし、火加減は煮立つまで強火、煮立ったら少し火を弱めてアクをすくい取りましょう」

「逃げんな！現場監督！」

「ではここで秘密のレシピを使いましょう！」

☆秘密のレ死ピ（注：危険物）☆

「ではここで、肉じゃがに濃硫酸４５ｃｃを加えたいと思います。真琴君と一緒に料理をしてる場合は、邪魔されないうちに入れましょう」

ちなみに薬品は必ずラベル側を持ちましょう。

「作者は化学が苦手なので省きますが、まあいろいろあって単糖類になります」

「ま、真琴君!?あっち瑞希ちゃんが変なことを・・・・・・！！」

「何で貴様は姫路をファーストネームで読んでるんだ!?」

「ちょ、まって、濃硫酸がどうとか言ってて・・・・・・ぎゃあああ!!!」

☆しばらくお待ちください☆

「酸味を出したいときはクロロ酢酸を加えましょう。さっぱりした酸味が食欲をそそりますよ（注：危険ですので危ないことはしないでください）」

「ちょ、ほら、クロロ酢酸とか持ち出してるよ！？」

「何を言ってるんですか！？それならさっきオレが処分したばかりですよ！嘘をつくとどうなるのかな？フフフフ！！」

「真琴君！キャラがぶれてるから・・・・・ぎゃあああああ！！！」

☆しばらくお待ちください☆

「では、最後に硝酸カリウムとグリーンピースを入れましょう。防腐剤として硝酸カリウムが働き、グリーンピースのおかげで彩りも豊かになります」

「まて姫路！グリーンピースと硝酸カリウムをさも同じ系列の食材のように言うな！！」

「違うんですか？」

「おい！コイツ学年次席レベルの才女って設定じゃないのか！？」

「他には濃硫酸やクロロ酢酸も入れましたけど・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はい？」

「どうしました？真琴君」

「ッてことは・・・・・・」

「これは王水肉じゃがですよ？最初からそのつもりで作ってましたけど」

コイツ頭いいいんじゃなかったのか！！？？

☆注意☆

塩酸＋硝酸＝王水

王水とは、硫酸や塩酸よりもはるかに強力な溶解力をもつ液体。
ちなみに金やプラチナも溶けます。

☆盛り付け☆

「そのままにしておくと鍋まで溶けちゃいますから、すばやくガラスの器に盛り付けましょう。ガラスは溶けないので、安心してくださいね（ニコッ）」

いざ試食！！

「真琴君。ためしに食べてみてください」

「遠慮します」

「真琴君は手伝ってくれなかったんですから、味見と感想を聞かせるくらいはしてくれますよね？」

「遠慮します」

「真琴君」

「遠慮します」

「では、無理やりにでも食べてもらいましょうか？」

「・・・・・・頂きます」

「はい。召死上がれ♪」

姫路の料理（凶器）を口に運ぶ。

「ふむふむ。しょうゆと砂糖でうまく味付けが出来ていて、王水肉じゃがなのになぜか食材の食感がしっかり残ってて、だんだん口の中が溶けてるような・・・・・・ブボハァ！」

姫路の料理の完成度（威力）は最後に食べたときよりも数段上だった。

「では皆さん。さよ～なら～」

番外編　姫路瑞希（と峰嶋真琴）の楽しい料理教室（後書き）

結局真琴が犠牲になりましたね・・・・・・

第十話　ＶＳ　Ｂクラス　？

バカテスト　保健体育

第八問

問　以下の（　）に入る言葉を答えなさい。

『女性は（　）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『明日か明後日くらいには・・・・・・』

教師のコメント

随分と急な話ですね・・・・・・

峰嶋真琴の答え

『お客様』

教師のコメント

迎えるの意味を間違えないでください。

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では生理のことを月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係にあり、体重が４３ｋｇに達する頃に初潮を見るものが多いため、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均１２歳。また、初潮年齢は体重以外にも人種、気候、社会的環境や栄養状態などにも左右される』

教師のコメント

詳しすぎです。

坂本雄二の答え

『処刑』

教師のコメント

『処刑』ではなく『初経』です。

明久ＳＩＤＥ

ついに始まったＢクラスとの試召戦争なんだけど、朝から姫路さんの様子がおかしい。
戦争に集中出来てないみたいだし、さっきから全然敵に攻撃してない。

「Ｂクラス小野庸介、姫路瑞希に古典勝負を申し込む！！」

Ｆクラス　姫路瑞希　古典　３３５点

ＶＳ

Ｂクラス　小野庸介　古典　１８０点

いける！！この点数差なら負けないだろう！

Ｆクラス　姫路瑞希　古典　３０９点

ＶＳ

Ｂクラス　小野庸介　古典　１８０点

Ｂクラスの小野くんの攻撃が姫路さんの召喚獣にあたる。
けど、大したダメージにはなってない。

Ｆクラス　姫路瑞希　古典　２７５点

ＶＳ

Ｂクラス　小野庸介　古典　１８０点

←

Ｆクラス　姫路瑞希　古典　１９７点

ＶＳ

Ｂクラス　小野庸介　古典　１８０点

←

Ｆクラス　姫路瑞希　古典　１３２点

ＶＳ

Ｂクラス　小野庸介　古典　１８０点

おかしい。いくらなんでも一方的すぎるし、姫路さんの召喚獣がさっきから防御ばかりで全然攻撃してない。

しかもさっきからＢクラスのほとんどが姫路さんに攻撃してる。

姫路さんの実力を考えれば当たり前かもしれないけど、真琴はほとんどフリー状態だ。

Ｆクラス　姫路瑞希　古典　６４点

ＶＳ

Ｂクラス　小野庸介　古典　１８０点

「まずい！！」

僕が姫路さんのサポートに入る。

Ｆクラス　姫路瑞希　古典　３５点
　　吉井明久　古典　６７点

ＶＳ

Ｂクラス　小野庸介　古典　１８０点

全然点数の足しにならない。
けど、こんな点数でもいないよりはマシだろう。

「姫路瑞希！覚悟ーーー！！」

小野くんが僕に構わず突っ込んでくる。
いくらなんでも有り得ない。操作技術でも、点数でももう僕のほうが上なのに。

「姫路！明久！その勝負、オレが受ける！！」

Ｆクラス　峰嶋真琴　古典　３６２点

ＶＳ

Ｂクラス　小野庸介　古典　１８０点

「クソッ！！」

「喰らえ!!」

真琴の召喚獣の大剣が、相手の召喚獣の上半身を吹っ飛ばす。

「・・・・・ふう。大分片付いたな。二人とも大丈夫か?」

「助かったよ。ありがとう真琴」

「なに。良いってことよ。姫路も大丈夫か?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「姫路?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「姫路さん?」

「は、はい!?」

「話聞いてたのか?」

「え、ええと・・・・・・・」

真琴が僕のほうを見る。

僕も真琴も多分同じ事を考えてるんだろう。

「あ・・・・・・私、もう行きますね」

そういうと姫路さんは行ってしまった。

「どう思う?真琴」

「どうもこうも・・・・・・絶対何かあると思う」

「それは奇遇だね。僕もそう思う」

「あまり褒められた事じゃないけど、姫路をつけてみるか」

「え?真琴いなくて大丈夫かな?」

姫路さんも真琴もいなくなったらかなり危なくなりそうだ。

「多分大丈夫だな。敵はみんな、姫路を狙うだろう」
「え?どうして姫路さんばっかり狙われるの?」
「単純な話さ」
「どういうこと?」

真琴は少し息をついて言った。

「姫路がBクラスのやつ等に抵抗できないってことだ」
「はい?」
「何かで脅迫されてるとかだろ。Bクラスの代表のことはオレも少し調べたからな」
「根本君か・・・・・・」

彼なら確かに何かあっても不思議じゃない。
カンニング常習犯、喧嘩に刃物を使うとか彼の卑怯っぷりはすごいものだからね。

「姫路の後をつけるぞ」
「うん・・・・・でもいいのかな?」
「やらなきゃオレ達がやられるだけだ」

姫路さんが向かった先にいたのは、ついさっき話題にあがった根本君だった。
そして彼が右手に持って姫路さんに見せてるのは、あのときのラブレターだった。

「いまどきラブレターなんて、可愛いな」
「か、返してください！！」

根本君が持ってるものは、大して価値のないものだけど、逆にとても大きな意味を持つものでもあるんだ。それを・・・・・・

「あの野郎・・・・・・！」
「おちつけ、明久」

真琴に止められる。

「どうして落ち着けるのさ！」
「今出てけば、あいつは何をすると思う？」

「なにって・・・・・・」
「あれは姫路にとって大切なものだ。だからこそ奪い返すのはアイツを叩きのめした後でなきゃいけない」
ただ様子を伺うことしか出来ない僕らに気づかずに二人は会話を続ける。

「さて、なんて書いてあるのかな?」
「ど、どうしてあなたがそれを持ってるんですか!?」
どうして姫路さんのラブレターを根本君が持ってるのかは姫路さんも知らないみたいだ。

「お前が下駄箱の中に入れてるところを見たんだよ。全く、吉井のどこがいいのか俺には全然分からないな。ただバカでブサイクなだけだろ」
え・・・・・?
根本君はいま、『吉井』って言ったの・・・・・・・?
吉井って僕のこと・・・・・・・?

「そんなことありません!」
!!

「明久君は、確かにお勉強は出来ないかもしれないけど、でもとっても優しくて、私のために頑張ってくれて、とってもいい人で・・・・・」
僕も、真琴も、根本君さえも動かない。

「私の憧れの人です！！」

根本君の顔が、すごく不愉快そうになる。

「憧れ？あんなバカが！？観察処分者になるようなクズに憧れてるだぁ！？これは飛んだお笑い草だな！！」

「明久君は、クズなんかじゃありません！！」

「姫路さん・・・・・・」

こんな風に、姫路さんの気持ちを知ってしまった。

盗み聞きしたみたいに・・・・・・

「いくぞ明久」

「え？行くって？」

「あのクソヤローをぶっ飛ばすための準備だ」

「でも、あそこに・・・・・・」

「はぁ・・・・・・」

真琴があきれたようにため息をする。

「お前はそれでいいのか？」

「え？」

「姫路の気持ちを盗み聞きして、今出て行って『実は今の会話聞いてました』って言うつもりなのか？」

「それは・・・・・・」

「嫌なんだろう？ちゃんと本人の口から聞きたいんだろ？だったらオレ達がすることは一つしかない。」

真琴はそう言うと、一人で教室のほうへ向かおうとする。

「・・・・・真琴」
「なんだ、明久」
「ありがとう！」
「何をいまさら。当たり前じゃないか」
「ハハハ。それもそうだね」
「そんなことよりやることがあるって言っただろ」
「うん！」

「「あのクソヤローをぶっ飛ばす！！」」

二人で雄二が一人でいる教室に戻ってきた。
僕と真琴が戻ってきて、しかも真剣な表情だ。
こっちの話を真剣に聞いてくれた。

「雄二、話がある」
「・・・・・・・・・・・・聞こうか」
「姫路さんを護衛部隊に移して欲しい」
「理由は？」
「言えない」

雄二は真琴の方を見る。

「悪いな雄二。こればっかりは言えないんだ」

ハァ・・・・・と雄二はため息をつく。

「お前らがそういうんだから、何かあるんだろうけど・・・・・・」
「雄二、頼む」
「真琴・・・・・・」

真琴が頭を下げるなんて、初めて見たかもしれない。

「雄二、僕からも頼む！」
「二人とも・・・・・・・・」

僕も真琴も頭を上げない。

「分かった。その代わり条件がある」

僕と真琴が同時に頭を上げる。

「条件ってなんだ？」

「お前らが二人で根本を討つんだ。可能な限りバックアップはするが、基本的にお前ら二人でだ」

僕と真琴が二人だけで根本君を・・・・・・

「出来るな？」

「「当然だ！」」

「いい返事だ」

第十一話　ＶＳ　Ｂクラス　？（前書き）

オリ主人公紹介を少し、編集しました。

第十一話　ＶＳ　Ｂクラス　？

バカテスト　国語

第九問

問　以下の漢字の読みを答えなさい。

『（１）　鴛鴦
（２）　飛蝗
（３）　般若　』

姫路瑞希の答え

『（１）　おしどり
（２）　ばった
（３）　はんにゃ　』

教師のコメント

正解です。飛蝗を読める人はそう多くはないかもしれません。さすがと言っておきましょう。

峰嶋真琴の答え

『（１）明久と姫路（注：この回答には突っ込まないでください）
（２）いい回答が思いつきませんでした。
（３）西村教諭
』

教師のコメント

いろいろ言いたいことはありますが、とりあえず西村先生に謝ってきてください。

吉井明久の答え

『（1）とり
（2）とびむし
（3）はんわか』

教師のコメント

何とか答えようという気持ちは伝わってきました。

Fクラス（吉井、峰嶋を除く）の答え

『（3）鉄人』

教師のコメント

今すぐ西村先生に補習をつけてもらいましょう。

真琴ＳＩＤＥ

「いけるか明久？」
「もちろん！」

戦況ははっきり言ってよくない。
雄二に頼んでＢクラス内には根本以外に可能な限り戦力を入れないで欲しいとは言ったがそれが出来るかどうかも怪しい。
まあ最低条件として、オレと明久がＢクラスの教室まで行けるのが前提だけど。

「いいか明久。オレの召喚獣の能力で、お前が根本と１対１になる状況を作ってやる。お前の操作性なら、いける筈だ。だから、お前

は1点も点数を減らすな」
「本当に大丈夫なの？」
「問題ないさ。鉄人にもちゃんと確認してあるからさ」

基本的にはBクラスの教室に向かって突撃するだけ。
だから相手も『Fクラスがやっきになってるだけだ』と思い込ませたいんだけど・・・・・・

『Fクラス全員行くぞー！！』
『『『おおーー！！』』』

「え！？何でこんなに！？」
「さては雄二の奴、護衛を姫路以外全員攻撃に回したな！？ムチャクチャしやがって・・・・・・！」

『お前等は俺達が責任もって敵陣まで導く！！』
『雑魚に構わず行くんだ！！』
『お前らー！！我等が最強コンビの邪魔する奴を蹴散らせー！！』
『おおーー！！』

Bクラスも特攻してくるオレ等を黙って通すわけにはいかないから、全力で止めに来る。

「Bクラス岡崎が吉井に――「Fクラス横溝が受ける！！」
「Bクラス今田が峰嶋に――「この須川が受けよう！」
「まて吉井！お前の相手は――「このＦＦＦ団Ａだ！」

最後の奴は誰だか知らないが、Bクラスの教室まであと少しだ！

「貴方達は通さないわ」

あと少しってところで立ちふさがったのは、えーと・・・・・・

「Bクラス岩下律子と菊入真由美が吉井明久に――――「峰嶋真琴が受ける!!試獣召喚(サモン)!!」ってええ!?」

「真琴!!点数の消費を抑えなきゃ・・・・・・!!」

「フィールドは総合科目だ!!問題ない!!補充試験はちゃんとやった!!」

Fクラス　峰嶋真琴　総合科目　４７０９点

ＶＳ

Bクラス　岩下律子　総合科目　１７５６点

菊入真由美　総合科目　１８０７点

「邪魔すんなーー!!」

「勝てる訳ないじゃない!あんな化け物じみた点数の奴に!!」

総合科目２０００点も行かない奴は敵じゃない!!

岩菊（今命名）を倒した後はもう誰もいなかった。

オレと明久は全力でBクラスに向かう。

「「根本!!覚悟!」」

教室にいたのは、根本のクソヤローに近衛部隊が５人。

「いくら俺でも全員を前に出すわけがないだろう。お前らが何を企

んでいたかは知らないが、Ｆクラスなんかに負けるかよ！！」

根本の台詞を合図に近衛部隊が前に出る。

「明久！しくじんなよ！！」

「真琴こそ、ちゃんとやってよね！！」

「Ｆクラス峰嶋真琴、Ｂクラス近衛部隊全員に、総合科目勝負を申し込む！！試獣召喚（サモン）！！」

「「「「「試獣召喚（サモン）！！」」」」」

「Ｆクラス吉井明久、Ｂクラス代表根本恭二に総合科目勝負を申し込む！！試獣召喚（サモン）！！」

「やれるもんならやってみろよ！！クズが！試獣召喚（サモン）！！」

「承認する！！」

どこからやってきたかは知らないが、鉄人が総合科目フィールドを展開する。

補習担当の鉄人こと西村宗一先生は、全教科及び総合科目の承認が出来るから、こういったときに非常に助かる。

「「（かかった！！）」」

そこでオレの召喚獣の出番って訳だ。

「起動ワード、決闘（デュエル）！！」

オレの召喚獣が2本の大剣を根本と明久に向ける。
そして、黒いドーム状のなにかが現れて根下と明久を閉じ込める。
それ以外の人間は弾き飛ばされてしまった。

「くそっ！何だこれ！？」
「はいれない！！」

「入れるわけねーよ。召喚獣の能力だもん」

『バカな！？峰嶋の召喚獣の能力は武器強化じゃないのか！？』

ああ。接続繋いでるのか。
根本の声が中から聞こえてくる。

「それは腕輪の能力。こっちは召喚獣自体の能力。お前と明久はその中でどちらかが戦死するまで勝負を続けてもらう」
『そんなバカな話があるか！召喚獣自体が特殊能力持ちなど聞いたことがない！！』
「じゃあオレって点数いいから、ご褒美なんじゃない？」
『ふざけるな！！第一、お前は近衛部隊と戦っていたのに俺に手を出したいいのか！？』

それに関しては鉄人に確認済み♪

「それに関しては問題ない！！峰嶋はちゃんと召喚獣を出しているし、敵前逃亡もしていない！！」

いうじゃないか、西村教諭。

「じゃあ接続切っとくから、お二人で話があるならご自由にね」

プツッと音が頭の中に響く。

「じゃあ、近衛部隊の皆さん。オレが相手してやるよ！！」

明久ＳＩＤＥ

「根本君。聞きたいことがある」

真琴が外側との交信を切ってあるはずだから、根本君に聞きたい事を思う存分聞ける。

「どうして姫路さんにあんなことをしたんだ？」

「あんなこと・・・・・？さて、何のことかな？」

あくまでしらを切るつもりか。

「そっちがそのつもりなら、僕は構わない。君を全力で叩き潰すだけだから」

「叩き潰す？お前が俺をか？お前、ついにおかしくなったんだな」

「根本君はこのフィールドについて知らないことがある。試獣召喚」

根本君の知らないこと。それは・・・・・・

「へえ。教えてくれよ。試獣召喚」

Ｆクラス　吉井明久　総合科目　８９６点

ＶＳ

Ｂクラス　根本恭二　総合科目　１０１６点

「どういうことだ！俺はこんなに点数は低くない！！」

根本君が取り乱す。そりゃそうだろう。なにせこのフィールドは・・・・・

『言い忘れていたが根本。その中は点数が半分になるぞ』

真琴の声が響く。また回線を繋いだのかな？

「どういうことだ！！なら吉井の点数はそのままなんだ！？」

『そもそもお前は勘違いをしている。この能力はオレが選んだ奴と1対1で戦う能力だ。お前等二人が入ってるのはいわば応用だな」

「応用だと！？」

『燃費が悪くなる代わりに、自分の代わりに同じクラスの人間を閉じ込められるんだよ。今回は明久が対象になったわけだな』

「ならなんで吉井の点数が減ってないんだ！？」

『その抑制効果も例外があってな。一つ目の例外はオレだ。オレはその点数抑制効果に引っかからない。もう一つは俺の代理で入った奴だ。そいつもこの抑制効果には引っかからない』

「！！」

『わかっただろ。明久は観察処分者として、召喚獣の扱いに慣れている。２００点程度の差ならあって無きが如しだぜ？じゃあ回線切るから、頑張れよ。明久！！』

「当然さ！真琴こそ、そっち側で負けないでよ！」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・』

もう回線は切れちゃったみたい。

「さあ、やろうじゃないか！根本君！！」

今の僕なら、負ける気がしない！！

「クッソー！！Ｆクラスの癖に！！」

根本君の召喚獣が突撃してくる。

僕はそれを避けて、一撃を入れる！

Ｆクラス　吉井明久　総合科目　８９６点

ＶＳ

Ｂクラス　根本恭二　総合科目　９５８点

「バカな！！この攻撃力は一体・・・・・！？」

「実力が均衡してる相手なら、僕は負けない！！」

僕の召喚獣の木刀が根本君の召喚獣のみぞおちに入る。

Ｆクラス　吉井明久　総合科目　８４２点

ＶＳ

Ｂクラス　根本恭二　総合科目　７８１点

「クッソ・・・・・・！！」

Ｆクラス　吉井明久　総合科目　８４２点

ＶＳ

Ｂクラス　根本恭二　総合科目　６７９点

「まだまだァ！！」

続けて攻撃する。

Ｆクラス　吉井明久　総合科目　７９８点

ＶＳ

Ｂクラス　根本恭二　総合科目　６０８点

「もういっちょぉぉぉ！！！」

根本君の召喚獣も必死に避けようとするけど、こちらのスピードのほうがはるかに速い。

Ｆクラス　吉井明久　総合科目　６８１点

ＶＳ

Ｂクラス　根本恭二　総合科目　３６７点

「うおおぉぉぉぉ！！！止めだーーー！！」

木刀を召喚獣に向かって振りかざす。

これで終わりだと思った瞬間、根本君自身が走り出した。

「オラァァ！！」

「！！」

根本君が僕の召喚獣を蹴り飛ばす。

観察処分者の召喚獣は、特例として、物理干渉が出来るようになっているからだ。

「がはぁ！！ゲホ、ゴホ・・・・・・」

「痛いだろうな・・・・・・フィードバックってのはそんなにキツイか？」

「根本・・・・・・それは・・・反・・・則じゃ・・・・・・」

「確かに反則だがバレなきゃいい」

Ｆクラス　吉井明久　総合科目　９６点

ＶＳ

Bクラス　根本恭二　総合科目　３６７点

今の蹴りで、一気に点数が減っちゃった・・・・・・
絶対勝たなきゃいけないのに・・・・・・！

「クッソ・・・・・・！」
「何だ？まだやるのか？」

根本君は余裕な感じで笑っている。

「そういえばお前が言ってた『あんなこと』ってのはこれのことか？」

そう言って根本君は姫路さんのラブレターを僕に見せ付けた。

「！！」
「どうしてかって？そんなの決まってるだろ。姫路さえいなければ、Ｆクラスには負けないからな。あの峰嶋とか言う転校生はちょっと想定外だったが、まあ一人強い奴がいたところで問題ない。その程度じゃＢクラスは落とせないからな」

「・・・・・だけは」
「あ？」
「お前だけは、絶対ぶっ飛ばす！！」

僕が真琴の代わりにこのフィールドに入ったのは、理屈じゃない。
単純に点数の高い真琴が入ればいい。
僕が負けても真琴が代わりに戦えばいい。
けど、そういう理屈じゃないんだ。

「お前だけは許さない！！絶対ぶっ飛ばしてみせる！！」
「やれるもんならやってみろよ！！」

僕の召喚獣は点数は低いかもしれないけど、それを補えるほどのスピードと経験がある！！

「姫路さんのためにも！！」

根本君の召喚獣ののど笛を、木刀で貫いた。

Ｆクラス　吉井明久　総合科目　３１点
ＶＳ
Ｂクラス　根本恭二　総合科目　０点

根本君が０点、つまり戦死した瞬間に、フィールドが割れたガラスのように消えていく。

「明久。勝ったみたいだな」
「真琴！！」
「ご苦労さん」

ちなみに真琴の後ろでは、Ｂクラスの人が戦死して鉄人に連れて行かれていた。

「さて根本。楽しい戦後対談といこうか。なあ我等がＦクラス代表

？」

「まて！お前今楽しい戦後対談と書いて拷問と読んだだろ！！」

「ナンノコトカナ？」

まずい。真琴がキレてる。

「そうさせてもらうさ（ニヤニヤ）」

雄二がいつの間にか来てて、しかも嫌な笑みを浮かべている。

根本君、ご愁傷様。この二人が本当にキレたらぼくでもどうしようもないから。

「ここでＢクラスの皆に提案があるから、１度教室に戻ってくれないか？」

雄二が廊下にいるみんなに呼びかける。

で、全員教室に入ったところで

「提案というのは設備交換の事だ。ちょっとした条件さえ飲んでくれれば、このクラスの設備に手は出さない」

「「「「詳しく聞かせろ」」」」

Ｂクラスの皆が話に食いつく。

仲がいいのはＦクラスだけじゃないんだな。

「提案というのは、そこの負け組み代表、根本恭二だよ」

「俺だと？」

「ああ。お前が俺と真琴と明久の言うことを聞いてくれたらこの設備はＢクラスの物のままになる」

『何をさせればいい？』
『何でも言ってくれ！！』
『必ずやらせるから！』

「お前本当に人望ないんだな・・・・・・」
「ほっとけ！！」

あきれる真琴と怒る根本君。
まあしょうがないんだけどね。

「じゃあ、まず俺からだな」

最初は雄二からだ。

「これを着てＡクラスに戦争の準備が出来ているといってこい。間違っても宣戦布告はするな。準備が出来ているとだけ言うんだ」

そういって、ナース服を取り出す雄二。
どこから持ってきたんだろ・・・・・・

「ふざけるな！何で俺が！」
「こんなものもあるが？」

そう言って取り出したのは女物の水着とチャイナドレス。
どれも破壊力抜群だな・・・・・・

「・・・・・ナース服でお願いします」

根本君もしぶしぶ了承。

そうだよね！水着はイヤだよね！

「じゃあ次は明久だな」
「え？真琴は？」
「オレは最後でいいよ」
「そう？じゃあ・・・・・・」

僕は根本君の方を向く。

「姫路さんから盗ったものを返して欲しい」
「そんなことでいいのか？」
「いいから早く返してよ」

僕もさすがに力が入る。
本当ならこんな外道は許すべきじゃないんだろうけど、コイツを殴ったりしたところで何か変わるわけでもないし。

「あとでね」

ここだと、さすがに人目につきやすいからね。

「じゃあ最後に真琴だね」
「おう。任せろ」

真琴が根本君の前に立つ。一体何を言う気なんだろう？

「思う存分殴らせろ」
「ゴメンナサイ！！許してください！！」

根本君がすごい勢いで土下座する。

真琴の力は馬鹿に出来ない。真琴に殴られたら本気で死んじゃいそうだから・・・・・

「ウソウソ。ホンキニシナイデ？」
「まずい！！リアルでやる気だったなコイツ！？」

思わず突っ込んでしまう。

「後で姫路に謝れ。それだけだ」
「え？真琴はそれだけなの？」

もっと体罰や拷問をすると思ったのに。

「それだけでいい。じゃあしっかり女装しろよな。根本ちゃん」

真琴の台詞を想像してみて吐き気がした。
真琴もやっちまったって顔してる。

「わかった。その役目、引き受けよう」
「へえ？随分いさぎいいな」
「まあな」

雄二が不思議がるけど、根本君の視線の先を見て納得がいった。
真琴だ。
ものすごいオーラを出してる。すごく黒いやつ。
しかも目でこう訴えかけている。

『ハナシタラコロスカラネ？』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（ガタガタガタガタ）」

根本君。心から同情するよ・・・・・・

「じゃあ後は頼むぞ！Ｂクラス諸君！」

雄二の言葉に反応するかのようにＢクラスが沸き立つ。

『任せておけ！！』

『何が何でもやらせる！！』

『その程度でこの教室を守れるなら本望！！』

『根本なんてどうでもいいけど、教室は大切だからな！』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・根本君は本当に人望というものが無かった。

「落し物は落とし主に・・・・・っと」
「明久。本当にそれでいいのか？」
「うん。僕がこれが姫路さんのって知ってたらおかしいでしょ？」
「そうやってる時点でおかしいけどな」

真琴の言ってることも正しいけど、僕には勇気が無いから。

「お前がそれでいいならいいけどな・・・・・・・・・・・っと。
オレは先に戻るから」
「？」
「後はしっかりやれよ？」

真琴は何を言ってるんだろう？
その言葉の意味を理解する暇も無く真琴は出て行ってしまった。

「まあいいや。えーと、姫路さんの鞄はこれだよな・・・・・・」

姫路さんの鞄と間違えて誰かのに入れちゃったら大変だもんね。

「あ、明久君！？」

「姫路さん!?」

なんで姫路さんがいるの!?
さては真琴だな!?あれはそういう意味か!
いやそれよりもこの状況!!
今の僕はどう見てもストーカーじゃないか!!

「あ、えーと姫路さん!ゴメン!これには訳が!」

なんとか説明しないと僕の社会的立場が!!

「あ、ありがとうございます!!」

え?なんか僕の予想したりアクションと全然違うんだけど。
僕の予想に反して姫路さんは泣きながら抱きついてきた。

「え?姫路さん、どうしたの?」

ていうか色々当たってる!!
柔らかいものとか、僕の理性が壊れそうなものとか!!

「わ、私、どうしていいか分からなくて・・・・・・みんな頑張ってるのに、どうしようもなくて・・・・・・」
「別に姫路さんが悪いわけじゃないよ。それに、これは別にその辺で拾っただけで・・・・・・」
「嘘ですね?」

ばれていた。

「さっき明久君が根本君からこれを取り返してるとこを見ましたし、

その後で根本君が謝りに来てくれました」

真琴はここまで予想していたのか！？

恐るべし・・・・・・！（注：勘違いです。）

「わかったから、姫路さん。とりあえず離れようか」

そろそろ理性が持たなくなりそうだ。

「そうですか・・・・・・（しゅん）」

すいません。露骨にがっかりされると困るんですけど・・・・・・

でももう一回抱きついてもらうのもいいかも・・・・・・

『もう一回抱きついて欲しいって言えばいいじゃないか』

悪魔の台詞を初めて素直に受け入れようと思った。

「あの、姫路さん！」

「はい。なんですか？」

「あの、僕と・・・・・・！」

本当はこの後『抱きついて欲しい』って言うつもりだったんだ！！

なのにあの天使が・・・・・・！

『二人で映画に行ってください？』

「二人で映画に行ってください！！」
「え？えええ！！？」

ってしまったーーーー！！
なにいきなりデートのお誘いしてるの僕！？
おのれ天使！あとでぼこぼこに・・・・・・！

「ごめんね姫路さん！これはその・・・・・・えーと・・・・・・」
なんだろう。僕はなんて言いたいんだろうか。

「あの、私は良いですよ」
「・・・・・・・・・・・・本当に？」

なんだろう。このいい知れぬ高揚感。
これはこれでアリな気がする。

「はい！Ａクラスとの試召戦争が終わったら、一緒に行きましょう！！（できればそこで明久君に・・・・・・）」
「？何か言った？」
「い、いえ！なんでもないです！！」
「？？？」
「じゃあ、今度の日曜日に行きましょう、明久君！」
「そうだね！」

なんだかよく分からないけど、姫路さんと二人でお出かけか・・・・・・
少しお金貯めないとな・・・・・・

「明久君！！」
「はい！」

いきなり話しかけられたから、少しびっくりした。

「明久君は、好きな人はいますか！？」
「え！？急にどうしたの！？」
「いいから答えてください！」

どうしよう・・・・・・
姫路さんが好きなんていえないよ・・・・・・
真琴だったらこんなときどうするんだろう・・・・・・

「どうなんですか！？」

姫路さんに迫られる。

「僕は・・・・・・」

その続きを言おうとしたときだった。

『まて峰嶋！！これは異端審問会ＦＦＦ団の役目であってだな・・・・・！！』
『うるさい！！むしろ異端なのはお前達だ！！自分達がモテないからって二人の邪魔するな！！』
『まて、話し合おう！！そうすればだな・・・・・・やめて、そっちの間接はまがらな・・・・・ギャアアア！！』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

もしかして今までの会話全部聞かれてた?

「じゃあ、また明日ね・・・・・・?」

「え?明久君待ってください!まだ好きな人を聞いてません!!」

「じゃあさよなら!!」

「あ、待ってください!!明久君!!」

瑞希ＳＩＤＥ

「明久君、行っちゃいました・・・・・・」

やっぱり明久君は、私のことが嫌いなんでしょうか・・・・・・

「おお、もういいのか？」

そう言って明久君と入れ違いに入ってきた真琴君。
元はといえばこの人のせいで聞きそびれたようなものです。

「真琴君たちが大騒ぎしたせいで好きな人を聞きそびれてしまいました・・・・・・」
「なに言ってんだ姫路？気づいてないのか？」

気づいてないって何にでしょう？

「ほんとに気づいてなかったのか・・・・・・？」
「何にですか？」

真琴君はあきれてますけど、なぜなのか私にはさっぱりでした。

「好きでもない奴をわざわざデートに誘うのかって話だよ」
「え？それってどういう・・・・・・」
「後は明久に聞くんだな」
「むぅ～・・・・・・意地悪です！」
「なんとでも言え。むしろなぜ気づかないのかオレには不思議でたまらないけどな」
「？？？」

真琴君は自分の鞄を持って出て行きます。

「まあ少なくとも、明久はお前のことを嫌っていないと思うけどな」
「？でも、さっき逃げちゃいましたし・・・・・・」
「逃げたからって、嫌いとは限らないだろ」

そう言って真琴君も帰ってしまいました。

「ああ、それから」
「？？？」
「オレは映画はパスでいいよ。二人で行ってきな」
「えええ！！？」

あとで真琴君に聞いたらこのときの私は首まで赤かったとか・・・・・・

次の日、ナース服姿の根本君が電柱で逆さまになって吊るされていたと聞いたんですが、誰の仕業だったんでしょうか？

第十一話　ＶＳ　Ｂクラス　？（後書き）

読んでいただきありがとうございました！！
根本君には結構な悪役をやってもらいました・・・・・・（その挙句に明久と１対１で負ける始末・・・・・・）
次回はいよいよＡクラスとの試召戦争に突入です！！

第十二話　ＶＳ　Ａクラス　？

バカテスト　英語

第十問

問　以下の問に答えなさい。

『ｇｏｏｄおよびｂａｄの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

『ｇｏｏｄ－ｂｅｔｔｅｒ－ｂｅｓｔ
ｂａｄ－ｗｏｒｓｅ－ｗａｏｒｓｔ』

教師のコメント

そのとおりです。

吉井明久の答え

『ｇｏｏｄ－ｇｏｄｄｅｒ－ｄｏｏｄｅｓｔ』

まともな間違え方で先生驚いてます。
ｇｏｏｄやｂａｄの比較級と最上級は語尾にｅｒやｅｓｔをつけるだけでは駄目です。
覚えておきましょう。

土屋康太の答え

『ｂａｄ－ｂｕｔｔｅｒ－ｂｕｓｔ』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

峰嶋真琴の答え

『ｇｏｏｄ＝明久－姫路
ｂａｄ＝坂本－根本』

教師のコメント

中の良い生徒とそうでない生徒を上げろとは言ってません。

清水美晴の答え

『ｂａｄ－ｇａｉｔｙｕ－ｐｉｇ　ｙａｒｏｕ』

教師のコメント

『悪い』『害虫』『豚野郎』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・コメントに困ります。

真琴ＳＩＤＥ

Ｂクラスを下したオレ達は、最終目標であるＡクラスに来ていた。

「一騎討ち？」

「ああそうだ。一騎討ちだ」

で、交渉してるのが秀吉の姉貴の木下優子。

まさに瓜二つで着ている服が同じだったら見分けがつかないところだ。

「断るわ。私達にリスクしかない勝負を受けるつもりは無いもの」
「姫路や真琴を警戒してるのか？なら大丈夫だ。どうせ出るのは俺だからな」
「信用できないのよ」

あちらさんの言うことも最もだからな。
さて、かつて神童と呼ばれた雄二のお手並み拝見ってところかな・・・・・

「受けてくれなくてもいいけどな。ＢクラスとＤクラスに攻め込ませるだけだから」

それは脅迫だろ・・・・・・

「それって脅迫のつもり？」
「いいや、お願いだよ」

間違いなく脅迫です。

「・・・・・・一騎討ち、受けてもいい」
「代表！」

Ａクラス代表、霧島翔子。
この学年の首席だな。

「・・・・・・ただし、７対７」
「７対７だと？」
「・・・・・・そっちが７人だから、７対７」

そんな理由でいいのかよ？

まあ恐らく願っても無い幸運だけどな。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「おい雄二！お前のその表情から不安しか受け取れないんだけど！？」
「ダイジョブだ！きっと・・・・・・・その代わり、教科をこっちで決めさせてくれ」
「・・・・・・・・・構わない」
「本当に大丈夫なのか・・・・・・・？」

まあ、姫路とオレと雄二で3勝してその後どうするかって話もあるんだけど・・・・・・

「じゃあ、いつにするか、そっちで決めてくれる？」
「今日の午後からだ。それでいいだろう？」
「構わないわよ」

それだけ言うと雄二も木下姉も席を発つ。

「お前ら、戻るぞ」
「ホントに大丈夫なのかよ・・・・・・・不安しか残らないんだけど・・・・・・」

そっち側で鼻血出して死んでるバカ二人も含めて。

「雄二。勝つための策はあるのか？」
「勿論ある。出なければこんなことしないからな」
「だろうな」

雄二がＦクラスの教壇に立って話し始める。

「明日のＡクラスとの試験召喚戦争は、俺、真琴、明久、姫路、島田、秀吉、ムッツリーニの７人で挑む」
「オレと姫路と雄二が勝つとして、もう一人は誰が勝つんだ？」
「ムッツリーニだ」
「ムッツリーニ！？」

コイツただのムッツリスケベじゃないのか！？

「コイツの保健体育はＡクラスにも引けをとらない」
「そんなに点数いいのか・・・・・・」

ちょっとびっくりな新事実。

「そして、ここまでこれたのはみんなのおかげだ」
「どうしたの雄二？雄二らしくないよ」
「・・・・・・同感」

お前等二人は黙ってろ。

「俺たちはＡクラスに勝つ！！そしてこの卓袱台を・・・・・・」

「「「システムデスクに！！！」」」

仲いいね。本当に。

明久ＳＩＤＥ

「ではこれよりＡクラス対Ｆクラスの試験召喚戦争を行います。一回戦の対戦者は前に出てください」

学年主任の高橋先生の合図で、僕達とＡクラスとの試召戦争が始まる。

あっちもあっちで強そうだな・・・・・・

「わしが行こう」

「秀吉、大丈夫なの？」

「問題ない・・・・・・と思いたい」

ただの願望か。

「でも、頑張ってね」

「うむ。行ってくる」

あっちは昨日の秀吉のお姉さんだ。

姉妹対決になるのか・・・・・・（わしは男じゃ！！）

「姉弟対決なんて久しぶりね。秀吉」
「姉上に勝てるなどとは思えんが、駄目でもともとじゃ！参る！」
「強化は何にしますか？」
「古典でお願いするのじゃ！！」
「では、召喚してください」
「「試獣召喚（サモン）！！」」

Ｆクラス　木下秀吉　古典　　７９点

ＶＳ

Ａクラス　木下優子　古典　２８５点

「その点数で勝とうなんて、甘いわね秀吉」
秀吉のお姉さんのランスで秀吉の召喚獣は一瞬で消えてしまった。
「勝者、Ａクラス木下優子」
「すまぬ・・・・・」
「大丈夫だよ秀吉。まだ終わってないから」
「そうだぞ秀吉。まだ６回もあるじゃないか」
「明久・・・・・・雄二・・・・・・」
うん。秀吉の涙目も可愛い。

「じゃあ次オレが行くけどいい？」
「大丈夫か？」
「トーゼン！！」

真琴はＶサイン（ちょっと古い気がするけど）を満面の笑みでして来る。
何か作戦でもあるんだろうか。

「おーい！！出て来いよ学年次席ーーー！！！」
「って何挑発してんの！？」
「だって強い奴から片付けたほうがいいしさ」
「そりゃそうだが・・・・・・」

Ａクラスの人たちがムチャクチャ怒ってるんですけど・・・・・・・
「なめられてる気分だわ。わたしが行くよ」

黒髪長髪で小柄な女の子・・・・・・霧島さんと雰囲気が似てる子だ。

「「誰？」」

真琴と僕の声が重なる。

「わたしは河野麻奈美（かわのまなみ）。Ａクラスの数学ナンバーワンってとこかな？」
「へえ・・・・・興味ないや」
「結構いうじゃない。フィールドは何でもいいよね」
「なんでも」
「数学でも？」

「どうぞご自由に」

真琴はちっとも相手を見ようとしない。
そんな真琴の態度にいらついたのか、あっちも怒ったみたいだ。

「後悔しても知らないから。試獣召喚(サモン)！！」

Ａクラス　河野麻奈美　数学　５８９点

「５００点台！？」
「いくら真琴でもあれじゃあ・・・・・・」

って思ったんだけど本人がノーリアクションなんですよ。

「どう？驚いた？」
「別に。たかだか５００点だろ」
「たかだか５００点！？この点数取るのに私がどんだけ苦労したと思ってるのよ！？」
「さあね。試獣召喚(サモン)」

Ｆクラス　峰嶋真琴　数学　７６８点

ＶＳ

Ａクラス　河野麻奈美　数学　５８９点

「オレだと数学はこの辺が限界かな？」
「な・・・・・・７００点オーバー・・・・・・」

なんか河野さんのほうが驚いちゃってる。
でもそれもしょうがないかもしれない。
７００点台は教師でもそう簡単に取れる点数じゃないから。

「真琴君はやっぱり・・・・・・」
「？どうしたの姫路さん？」
「真琴君はあの頃と変わってないです」
「あの頃・・・・・・？」
「あの頃と同じ、正真正銘の天才です！」

姫路さんと話してる間に決着が付いた。

「勝者、Ｆクラス峰嶋真琴」
「そんなあ・・・・・・」
「まあ、出直してくるんだな。頑張ればもっと行くんじゃないか？」

で、戻ってきた真琴は・・・・・・

「勝って来た」

とＶサインでした。

「余裕だね・・・・・・」
「学年次席が出てこないから半分八つ当たり」
「ハハハ・・・・・・」

（（（真琴が敵じゃなくて本当によかった・・・・・・！！））））

多分この場にいるFクラス全員がそう思っただろう。
「じゃあ次はウチね」
「島田さん、頑張って！！」
Aクラスからは誰が出てくるんだろう・・・・・
「じゃあ、俺が行くから・・・・・」
「わたしの分も頑張ってきて・・・・・」
「しょんぼりするな。相手が悪かっただけ」
あっちからは今度は男子だ。
なんか前髪が妙に長くて不気味だな・・・・・
「教科は何にしますか？」
「数学でお願いします！！」
そっか。島田さんは数学でないと戦えないもんね。
「では、両者召喚してください」
高橋先生の合図で二人が召喚を開始する。
「試獣(サモン)召喚！！」
「試獣(サモン)召喚・・・・・」
やっぱりなんか不気味だな・・・・・
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ける」

「え？真琴なんか言った？」
「恐らく島田はアイツには勝てない」
「え？どうして分かるの？」
「見てれば分かる」

Ｆクラス　島田美波　数学　２６０点

「あの点数だよ？勝てると思うけど」
「あいつら、どっかで見たことあんだよな・・・・・・」
「俺の勝ち・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「な、何よ・・・・・・」
「お前はもう逃げれない」

「「「！！」」」

見ると、美波の召喚獣の足元が底なし沼みたいになっていた。

「腕輪の能力・・・・・・」
「腕輪って・・・・・・・！！」

Ａクラス　河野重蔵　数学　４３７点

「腕輪付きか・・・・・・・！！」

雄二が驚いたように言う。

Aクラスなんだからおかしくないと思うんだけど・・・・・・

「腕輪の能力・・・・・・沼地獄・・・・・・・一度はまったら抜け出せない・・・・・・・」

美波の召喚獣がどんどん沈んでいく。

「クッ・・・・・・・!!」

「思い出した!」

「何を?」

「あいつ!河野兄妹!!確か、兄弟で数学オリンピックの1位と2位を抑えた天才コンビだ!」

「あの二人そんなに数学得意なの!?」

「もっと言うと、兄のほうはものすごいSだそうだ・・・・・・!!」

「なにそれ!?」

美波・・・・・・この会話聞いてたんだ・・・・・・

「お前、よく知ってるな・・・・・・」

「なるほどな。だから沼地獄か・・・・・・やってくれたぜ全く・・・・・」

思いっきりSじゃないか!!

「あの、明久君。一つ聞いても良いですか?」

「なに?姫路さん」

「Sってなんですか?」

正直フリーズした。
姫路さんにホントのことなんか教えられないよ・・・・・・
「・・・・・SとMってのがあるんだよ。Sは攻め、Mは守りが好きなんだよ」
「なるほど！そういうことですね！」
ゴメン。姫路さん。本当のことはさすがに言えないから・・・・・・
ポトン
「え？何の音？」
Fクラス　島田美波　数学　0点
VS
Aクラス　河野重蔵　数学　437点
島田さんの召喚獣は沼に沈みきっていた。
「俺の勝ち・・・・・・・・・・・・・・・」
「勝者、Aクラス河野重蔵」
Aクラス対Fクラスの一騎討ち7本勝負は、2対1でAクラスのリードになった。

第十二話　ＶＳ　Ａクラス　？（後書き）

次回はオリキャラ紹介になると思います。

オリキャラ紹介　？（前書き）

今回はＡクラスの数学オリンピック兄妹の紹介です。

オリキャラ紹介　？

河野重蔵　（兄）

数学オリンピックで銀メダルを取る実力がある。
総合科目では姫路や久保に劣るものの、英語、古典で５００点台をキープする。
どちらかというと文系。

召喚獣の装備は西洋甲冑にバズーカ砲。
異色の組み合わせだと本人も嘆いている。

容姿はＰ３の主人公に近い。

河野麻奈美　（妹）

数学オリンピックで金メダルを取る。
全教科で３５０点以上をキープする才女。
振り分け試験の結果があまりよくなく、総合科目で久保に負けたために次席の座を譲ることになる。
数学を得意とし、５００点以上の点数を取ることが多い。
数学、物理が得意。

召喚獣の装備は和服にランス。

異色の組み合わせなのは兄と同じ。

容姿は霧島がちっちゃくなった感じ。

第十三話　ＶＳ　Ａクラス　？

バカテスト　国語

第十一問

問　以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『ありあまるほどの物を売っていても買い手がないということ』

姫路瑞希の答え

『冬の雪売り』

教師のコメント

正解です。

峰嶋真琴の答え

『誰も見ない通信販売』

教師のコメント

不正解ですが、なぜか頷いてしまいました。

吉井明久の答え

『どうせ僕は売れ残りなんです・・・・・』

教師のコメント

何かあったんですか？

土屋康太の答え

『売れ残り』

教師のコメント

そのとおりですが不正解です。

明久ｓｉｄｅ

「ゴメン・・・・・負けちゃった・・・・・・」

島田さんががっくりうなだれて戻ってくる。

「仕方がありませんよ。あの点数差ですもの」

「相手は数学オリンピックで優勝するような化け物じみたやつ等だ。落ち込むことは無いさ」

数学で７００点台たたき出した真琴が言える台詞かな・・・・・・

「次は誰が出るんだ？」

「僕だね」

「Ａクラスの皆さーん！こっちの負けでーす」

「早いよ！！」

日本史だったら頑張ればいけるよ！！

「明久じゃしょうがないか・・・・・・」

「雄二まで何言ってんのさ！？」

「「早く逝ってこい。バカ」」

「何でそこで真琴と雄二の声が重なるの！？」

しかも逝くってどう考えても字違うでしょ！！

「明久君。私は明久君が勝てると思います。信じてますよ？」

「よっしゃーーーーー！！！俄然やる気出てきた！！」

「バカだな」（雄二）
「バカじゃな」（秀吉）
「バカね」（島田さん）
「バカだ」（真琴）
「・・・・・・バカ」（ムッツリーニ）

皆なんて嫌いだッ！！

「始めさせて貰ってもいいでしょうか？」
「え？ああ、ゴメン。よろしくね」
「はい。こちらこそ」

えっと、佐藤美穂さんだっけ・・・・・・
いるんだな・・・・・・眼鏡美女って・・・・・・・・

「教科は何にしますか？」
「日本史でお願いします」

日本史のフィールドが展開される。

「「試獣召喚（サモン）！！」」

Ｆクラス　吉井明久　日本史　　９７点

ＶＳ

Ａクラス　佐藤美穂　日本史　２７５点

「結構な点差があるね・・・・・・」

でも、僕の操作技術なら何とかできるかも・・・・・・！

「その点数差で勝てるとでも！？」

「やってみなきゃわかんないじゃないないか！！」

僕の召喚獣が佐藤さんの召喚獣に脚払いをかけて、木刀で叩く。

ねらい目は鳩尾や喉もとだ！！

Ｆクラス　吉井明久　日本史　　９７点

ＶＳ

Ａクラス　佐藤美穂　日本史　１６０点

「そんな！ここまで減らされるなんて！」

「いっけーーーー！！」

脚払いからの急所狙い作戦は続く。

一撃一撃が小さくても、当たればそれはダメージになるんだ！！

Ｆクラス　吉井明久　日本史　　９７点

ＶＳ

Aクラス　佐藤美穂　日本史　　６９点

追い詰めた！！

「止めだーー！！」

足払いをかけて最後の一撃を繰り出そうとして、それは失敗する。
佐藤さんの召喚獣の鎧から、刃物が飛んできて、召喚獣の頬をかすった。

「痛っ！！」
「今です！！」

そして佐藤さんの召喚獣と僕の召喚獣の武器が互いの身体にぶつかる。

Fクラス　吉井明久　日本史　　０点

VS

Aクラス　佐藤美穂　日本史　　４点

「勝者、Aクラス佐藤美穂」

「負けた・・・・・？そんな・・・・・・ガハッ、ゴホ！」

フィードバックで攻撃を受けた箇所が痛む。

「明久！！」

「明久君！！」

真琴と姫路さんの声が聞こえたような気がしたけど、それを確認する前に僕は気を失った。

「先生！！明久を保健室に連れて行きます！！」

「はい。構いません」

「真琴君！私が・・・・・・」

「姫路！気持ちは分かるけどお前は残って戦え！お前がいなくなったらFクラスに勝ち目は無くなる！」

「でも・・・・・・」

「明久の努力を無駄にするな！」

「・・・・・分かりました！次は私が行きます！」

「終わったらすぐに保健室にこいよ」

「分かってます！！」

僕が覚えてるのはここまでで、ここから先は本当にどうなったか分からない。

誰かに背負われて、保健室に連れて行かれたことは分かった。

瑞希ｓｉｄｅ

「姫路さんが出てくるなら、僕の出番だね」

そう言って出てきたのは学年次席の久保君でした。
彼が次席の座に座っていられるのは私が振り分け試験を途中退席したから。という噂も聞きましたけど、それを踏まえても彼は強いのです。

「Ｆクラスにはもう後が無いけど大丈夫なのかい？」
「関係ありません！」
「関係ない？」
「私と土屋君と坂本君で勝って、それでＦクラスの勝ちです！」

後が無いのは分かっています。でも、それでもまだ負けたわけじゃありません。

「教科は何にしますか？」

「総合科目でお願いします！！」

本来の点数なら、久保君に負けてないはずです。

なら、総合科目で一気に押し切ります。

「総合科目か・・・・・・」

「？」

「なんでもないよ」

なんでしょう？

久保君の目が眼鏡の奥で怪しく光ったような気がしました。

「では召喚してください」

「「試獣召喚（サモン）！！」」

Ｆクラス　姫路瑞希　総合科目　４５５７点

ＶＳ

Ａクラス　久保利光　総合科目　４０７９点

「成程。さすが姫路さんだ。ここまで差をつけられているとは」

「私、Ｆクラスが好きなんです」

「Ｆクラスが好き？」

「はい」

少し深呼吸して、私は続けます。

「明久君や真琴君や坂本君がいて、皆優しいこのFクラスが好きなんです。確かにうるさかったりもしますけど、皆で一つのことに一生懸命になれて、頑張れるこのクラスが好きなんです」

そして、私の好きな人がいるこのクラスが・・・・・・・

大好きな明久君のいるこのクラスが・・・・・・・

「だから、負けられないんです!!」

久保君は私の話を聞いて、こう反応しました。

「そうか・・・・・・なら僕も最大限の敬意をもってお相手しよう」

「お願いします!!」

私の点数なら、力押しで勝てるはずです!!

「残念だよ。姫路さん」

「え?」

「君が総合科目で僕に挑んだことが君の運の尽きだったね」

久保君は腕輪の能力を私に話し始めました。

「僕の召喚獣の腕輪の能力は“自爆”。総合科目の時のみ使える能力で、自分の点数を1にすることで減少した点数に応じた攻撃力を持つ爆発を起こす。減少した点数は４０７８点。君の召喚獣が耐え

切れば君の勝ちだ。君の召喚獣が耐え切れずに倒れたら・・・・・・僕の勝ちだ」

Ｆクラス　姫路瑞希　総合科目　０点

ＶＳ

Ａクラス　久保利光　総合科目　１点

久保君の腕輪の能力で起こった爆発で、私は０点になりました。

「勝者、Ａクラス久保利光。よってこの試験召喚戦争はＡクラスの勝利となります」

高橋先生がＡクラスの勝利を告げます。
私はその場に座り込むしか出来ませんでした。

「姫路。保健室に行って来い」

坂本君に声をかけられても私には無言で頷く事しか出来ませんでした。

明久君は、保健室のベッドで横になっていました。
隣で真琴君が座っていて、他には誰もいません。

「姫路・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

真琴君に何を言われても仕方ありません。
真琴君は勝ったんですから。

「姫路」

真琴君は手招きで私を呼びます。

「明久のそばに居てやれよ」

「え・・・・・？」
「大体想像は付くよ。爆音はここまで聞こえたからな」
「じゃあなんで・・・・・・・」
真琴君はなんで・・・・・・
「負けたのはお前だけじゃない。オレたちはクラスで負けたんだ。だからお前が全部抱え込んで責任を感じる必要はないんだ」
「でも・・・・・・」
「クラスの負けは個人の負けだ。だからオレもＡクラスには勝てなかったって事かな」
真琴君も明久君と同じで・・・・・・
「姫路」
「な、なんですか？」
聞き返そうとして、顔を上げようとしたら私は真琴君に抱き付かれました。
「！！」
「姫路。お前が明久のことが好きなのは知ってる。だけど、これだけは聞いて欲しいんだ」
これって・・・・・・もしかして・・・・・・
「オレは、姫路のことが・・・・・・」
真琴君が、私に・・・・・・？

「小学校の頃からずっと・・・・・・」

でも、私は明久君が・・・・・

「・・・・・・・・・・好きだった」

・・・・・・・・・・・・・・・・！！

「だから、答えてくれなくてもいいから、答えなんて無くてもいいから、この気持ちだけは伝えたかった。オレの・・・・・いや、僕の初めての友達、瑞希ちゃんに」

そういうと真琴君は私から身体を離しました。

「悪かったな。じゃあオレは行くから、明久のことを頼むよ」

「・・・・・はい」

真琴君は保健室から出て行ってしまいました。

私は明久君のことが好きで、でも真琴君のことも好きです。

二人はいつも私を助けてくれていたのですから。

「どうしたらいいんでしょう。明久君」

ぐっすり眠っていて、起きる気配のない明久君に呼びかけます。

明久君ならどう言うんでしょうか・・・・・

「・・・・・むにゃむにゃ」

明久君が私をデートに誘ってくれたことを真琴君は知っていました。

なのに、それなのに私に告白するって言うのはすごく勇気の要るこ

と。

私は、どうしたら・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・姫路さん」

「！！」

びっくりして明久君を見ます。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「寝言ですか・・・・・・びっくりしました・・・・・・」

『お前が全部抱え込んで責任を感じる必要はないんだ』

ふと真琴君が言った言葉を思い出します。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・姫路さんは」

「？」

寝言・・・・・・でしょうね。きっと。

「・・・・・・・・・・・・・・・・姫路さんは・・・自分の・・・・・・・・思う・・・とおりに・・・・・すればいいよ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・！！」

自分の思うとおり・・・・・・・

『返事なんて無くてもいい』ってこういうことですか・・・・・・・・

私の思うとおりにしろって事ですよね・・・・・・・

「私は・・・・・・明久君のことが好きです。愛してます」

そう言って、眠っている明久君にそっと、起こさないようにキスをしました。

第十三話　ＶＳ　Ａクラス　？（後書き）

第十三話、終わりました！
ここでやっと一区切りですね！
恋愛系は書いたこと無いので大変でした・・・・・・

感想お待ちしてます。

第十四話　夢の中で（前書き）

今回は真琴の夢の中のお話です。

第十四話　夢の中で

気が付くとオレは真っ暗な空間の中にいた。

「・・・・・・・・・・・・ああ、またコレか」

コレが夢であることは分かっている。

こっちに来てから何度も見た夢だ。

「キミは本当にそれでよかったのかい？」

暗い、何もない空間で不意に現れたそれはオレに話しかけてくる。

「これでよかったんだ。後はアイツ自身が決めることだ」

「キミがそういうなら僕は構わないんだけどねぇ・・・・・・」

「相変わらずだな。その人を食ったような性格、何とかならないか？」

「それは無理だね。僕はキミのココロだからね。キミの過去は知ってるし、君のことを誰よりも理解している」

：：

それの形がだんだんはっきりしてくる。

それは・・・・・・いや、そいつは子供の頃のオレの姿をしていた。

あの時、転校する当日のオレの姿だ。

「キミは彼女に謝りたかった。だけどキミには時間がなかった。そういうことだろう？」

「何でも理解してるんじゃないのかよ」

「さあね」

オレのココロだと言うのならなんでこんなに人をいらだたせるんだコイツは。

「キミはあの子のことをずっと思ってた割にはずいぶん簡単に諦めたねぇ」

「あんたには関係の無い話だ」

「そうやって逃げるのかい？あの時のように」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・！！」

「キミはやろうと思えばもう一度あの子に会うくらいのことは出来たはずだ。なのにあえてそれをしなかった」

「・・・・・・何が言いたい？」

「キミは怖かったんだろう？嫌われたんじゃないかっていう勝手な妄想で彼女から逃げたんだろう？ただあの場から逃げ続けただけだったんだろう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「話を戻すけど、君は簡単にあの子の事を諦めたからね。それが正しいのかなんて僕には分からない」

「だったらなんで・・・・・・」

「一つ確実に言えるのは、君は満足してないって事だ」

満足？これはそういう問題じゃないだろうが。

「そういう問題だよ。『あの子の思うとおりにさせてあげたい』なんてたいそうな事言ってたってそれはただの自己満足で、考えることをやめた人間の思考だ。だけど今のキミは自己満足すら出来てない」

説教臭い。子供姿をした奴に説教されるのは思いのほか不愉快なものだ。

「そう言うなって。あの子の気持ちを尊重したいっていうキミの気持ちも理解できないものではないけどね。でもキミはただ想いをぶつけて逃げただけだ。それは愛情でもなんでもない」

「だったらどうしろって言うんだよ！」

「そうやって人に聞こうとするのも考えない人間のすることだ。キミは違うって前に言ってたじゃないか」

違う・・・・・・

「あの子が“アキヒサクン”って奴に恋心を抱いているのを知ってしまったから、自分は諦めるしかないって決め付けたのかい？」

違うんだ・・・・・・

「それはただの“逃げ”だ。キミは7年前と同じように自分が傷つくのが嫌で逃げただけだ」

「やめてくれよ・・・・・・もういいだろ・・・・・・」

「よくないね。キミはそうやってまた傷つきたくないがために現実から目をそらす。そんなことをしているから、キミは守るべきものが守れなくて、大切なものを失う羽目になるんだ」

「もういいだろ！！そんなに俺を苦しめて何が楽しいんだよ！！」

「楽しくなんか無いさ。僕がキミのココロであるうちは、キミが傷つけば僕も傷つく」

「だったら・・・・・・・！」

「それでもキミはこのことに向き合う必要がある。もう目をそらし続ければいいなんて甘いことは言ってられない」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「僕はそろそろ失礼させてもらいたいからね。最後に一つだけ重要なことを教えておいてあげるよ」

「・・・・・・・・・・・・・・なんだよ」

「僕はキミのココロだ。僕がこの場で君に告げる内容はキミがココロの奥底の純粋な部分で考えていることだ。キミは僕という存在によって、自分の思考を再認識させられているに過ぎない」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「キミがこっちに来てから手に入れたものをよく考えれば、僕のこともよく分かると思うよ」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「結局最後はだんまりかい？まあいいさ。また来るよ」

そういって奴は消えていった。

オレの目はそこで覚めた。

第十四話　夢の中で（後書き）

どうでしたでしょうか？
次は明久と瑞希のデートということで・・・・・・

第十五話　バカと才女とラブラブデート！（前書き）

真「雄二。いくつか聞いていいか」

雄「なんだ？」

真「鉄人がオレたちの担任ってどういうことだ？」

雄「スマン・・・・・・俺も考えてなかった」

真「負けた方が一つ言うことを聞くって約束はいつの間に取り付けたんだ？」

雄「いいじゃないか。別に」

真「そのせいで姫路の貞操が危うくなったとか明久が騒いでたんだが・・・」

雄「・・・・・気にするな。そいつの勘違いだ」

真「霧島とは仲がいいのか？交際を迫られたとか聞いたけど」

雄「幼馴染だ」

真「なるほど・・・・・・雄二、覚悟は出来てるか？」

雄「・・・・・・いろいろすまなかった」

第十五話　バカと才女とラブラブデート！

バカテスト　歴史

第十二問

問　以下の人物を答えなさい。

『米将軍と呼ばれた、徳川８代将軍を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『徳川吉宗』

教師のコメント

正解です。吉宗が幕府の財政を立て直すために行った政策を、“享保の改革”といいますね。

吉井明久の答え

『徳川八代（やちよ）』

教師のコメント

そんな回答をするのは君だけです。

島田美波の答え

『徳川八代（やちよ）』

峰嶋真琴の答え

『徳川八代（やちよ）』

坂本雄二の答え

『徳川八代（やちよ）』

木下秀吉の答え

『徳川八代（やちよ）』

教師のコメント

こんなに沢山いるとは・・・・・・

土屋康太の答え

『豊臣秀吉』

教師のコメント

もっとひどい人がいるとは・・・・・・

真琴ＳＩＤＥ

「さて、ムッツリーニ。協力してもらおうか」
「・・・・・・断る」
「そうか・・・・・・。どうしてもか？」
「・・・・・・異端審問会は人の幸せを許さない」
「ついにムッツリ商会から姫路関連の商品が消える日が来たようだな。ムッツリーニ」
「・・・・・・喜んで協力しよう」

「秀吉。頼みがあるんだが」
「なんじゃ？」
「この台詞をボイスレコーダーに雄二の声で録音して欲しい」
「わしは構わんのじゃが・・・・・雄二は大丈夫じゃろうか？」
「問題は無い。あと例の件にも協力して欲しいんだが・・・・・」
「それについては協力させてもらうのじゃ」
「サンキュー♪」

「雄二。協力してくれ」
「断る。俺はあのバカの幸せを邪魔することにしているからな」
「協力しなければこれを霧島に渡す」

《島田。俺と付き合ってくれ。俺はお前のペッタンコに惚れたんだ》

「わかった！！協力するから俺の声でそういうものを偽造するのはやめてくれ！！」
「事が穏便に運んだらお前に渡す」
「これは脅迫じゃないのか！？」

「霧島。まずはこれを聞いて欲しい」

《翔子。結婚しよう。俺はお前を愛してる》

「・・・・・これ、本当？」
「このボイスレコーダーはあの事に協力してくれたら無償で譲ろう」

「・・・・・・協力する」
「助かるよ」

「・・・・・・準備は完了。あとはＦＦＦ団だな・・・・・・」

「須川。次の日曜に明久と姫路が如月ハイランドにデートに行くそうだ。ＦＦＦ団として行かなくていいのか？」
「情報の提供感謝する！！いくぞ我が同志達！！」
「「「おおーーーー！！！」」」

「扱いやすくて助かるぜ」

明久ＳＩＤＥ

Ａクラスとの試召戦争が終わって次の休日。約束どおり、姫路さんと映画を見に行く約束なんだけど・・・・・・

「私服で大丈夫かな・・・・・・？」

といってもあんまりかっこ悪いと姫路さんに悪いしな・・・・・・

「真琴ならこういうの詳しそうなんだけど、朝早くから出かけちゃったみたいだし・・・・・・」

服選びに時間をかけすぎるのもアレなので、結局いつもの服装で行くことにした。

「約束の時間より３０分も早く来ちゃった・・・・・・」

ちなみに昨日のうちにゲームを何本か売ったので、金銭面には余裕がある。

「姫路さん来るまでどうやって時間潰そうかな・・・・・・」

そして背後から何かが付いてくるような気がする。

で、待ち合わせの場所に行くと既に姫路さんがいた。

「えっと・・・・・・姫路さん、待った？」

「あ、明久君！えと、あの、今来たところです！」

「じゃあ、行こうか？」

「はい！」

傍から見たら間違いなくカップルだろうな。僕達。

「えっと、姫路さん。その服可愛いね」

「え・・・・・？そうですか？ありがとうございます・・・・・・」

「見てなさい吉井。瑞希とデートなんて許さないんだから」

「お姉さまのため、ガンバリマス！」

『まな板と同性愛者がターゲットに接近。夫妻は即刻対処頼む』

『『了解』』

『・・・・・なぜおぬし等はそこまでノリノリなんじゃ・・・・・・？』

「おかしい！吉井たちがいないじゃないか！」

「もっと良く探せ！異端審問会の名にかけて、吉井を処刑するんだ！！」

「「おおーー！！」」

で、二人で映画館に来たわけで・・・・・・

「姫路さん。何見たい？」

「私ですか？そうですね・・・・・・これなんかどうでしょう？」

姫路さんが指差したのは『宇宙の中心で溺愛を叫ぶ』という映画だった。

宇宙の中心ってどこだろうとかそういう突っ込みはしないでおきたい。

「いいんじゃないかな？これにしようよ」

「・・・・・雄二。どれにする？」

「俺に選択権はあるのか・・・・・・？」

「「！！」」

後ろに手錠で拘束された雄二とＡクラス代表の霧島さんがいた。

「・・・・・じゃあ、これ『魂の叫び』」

「待てそれ、５時間３０分もあるだろう！！」

「・・・・・３回見る」

「１６時間３０分も座ってられるか！！」

「・・・・・隣で寝ててもいいから」

そう言って霧島さんがスタンガン（３０万ボルト）を雄二に押し付けていた。

「まて翔子！俺たちの目的はあくまでギャヘエエエエエエ！！」

「・・・・・二人、三回分」

「はい、学生一枚気を失った学生一枚無駄に三回分ですね」

雄二よ・・・・・・哀れな君に黙祷をささげたい・・・・・・

「明久君、早く見ましょう」
「・・・・・・うん。そうだね」

姫路さんが霧島さんのようにならなければいいけど。

『忍者、夫妻がバカやって自滅したからターゲットの護衛を頼む』
『・・・・・任せろ』
『だからなんでおぬし等はそんなにノリノリなのじゃ！？』

ＰＩＰＩＰＩ

「なんだ坂本か。我々は異端者狩りで忙しいのだが」
『よく聞け須川。明久がいるのは街中の映画館だ』
「なんだと！？助かる坂本！行くぞ同志達！！」
「「おおーー！！」」
『・・・・・雄二。早く見る』
『待て翔子、だからアイアンクローはやめろと何度もノオオオオオオオオ！！頭盤が！！俺の頭盤がアアアアア！！』

「面白かったね。姫路さん」
「そうですね・・・・・・まさか、あんなに・・・・・・・」

姫路さんは終始感動の涙を流していた。
一人の女の子を守るために全世界を敵に回すって話だったけど僕からすればそれは日常茶飯事なんだけど（ＦＦＦ団とかのせいで）どうしても感動よりさきに同情が来てしまったのは内緒。

「明久君、私、『ラ・ペディス』ってところでクレープが食べたいんですけど・・・・・・」
「別にいいよ」
「本当ですか？」
「うん。（ゲームを売って金銭的に余裕があるから）僕も食べてみ

たいし」
「じゃあ行きましょう」

姫路さんに腕を引っ張られる僕。
姫路さん、楽しそうでよかったな・・・・・・

『ターゲットは駅前の『ラ・ペディス』に移動する模様。役者は追跡頼む。忍者はまな板と同性愛者の監視を怠らないでくれ』
『・・・・・・了解』
『それにしてもお主はどうして二人の居場所や行き先を知っているのじゃ？』
『ＧＰＳをなめるな』
『・・・・・・これくらい、一般技能』
『聞いたわしがバカじゃった・・・・・・』

「目標補足！！総員戦闘準備」

『ラ・ペディス』に来た僕と姫路さんはクレープを食べてたんだけど・・・・・・・

「明久君・・・・・・すごく気になるんですけど・・・・・・・」

「僕も・・・・・・・」

秀吉に似てる人と島田さんに似てる人と清水さんに似てる人が睨み合ってるんだよね・・・・・・・

「しかもあれってＦＦＦ団だよね・・・・・・・」

喫茶店の周りには黒装束のやつ等が沢山いた。

「リーダー・・・・・・ＦＦＦ団のやつ等がいるんじゃが・・・・・・」

『やっぱり来たか・・・・・・雄二が情報をリークした可能性が高い。注意してくれ』

「了解」

真琴ＳＩＤＥ

「よし、全部繋いだな・・・・・・」

４０台以上の携帯を一斉にかける。

相手はＦＦＦ団全員だ。

『『『『『もしもし？』』』』』

「峰嶋だ。どうやら間違った情報をリークしてしまったようだ。すまなかった」

『『『『『用件は何だ？』』』』』

「霧島が話があるそうなんだ。受話音量をＭＡＸにして聞いてくれ」

『『『『『ありがとう！！』』』』』

バカばっかりだった。

「ではよろしくお願いします」

「まかせろ。あれはこの西村宗一が大学生の頃、ブラジルからの留学生とレスリングをしていたんだが・・・・・・」

『脳みそが！！脳みそが腐るウウウ！！』

『ぎゃあああああ！！！最悪のビジュアルがッッッ！！』

『須川隊長！！起きてくれ！！』

『ママーーー！！』

『戦死者多数！！』

『お前等！早く電話を切れ！』

「あいつは俺にヘッドロックをかけてきた。なんとかしようとしたんだが汗で滑らなかったら危なかったな・・・・・・」

『『『『『ノオオオオオオオオ！！！！！！』』』』』

「本当にバカばっかだな・・・・・・」

さて、オレも直接動くときが来たかな・・・・・・

ＦＦＦ団４３人、全員気絶。

明久ＳＩＤＥ

「待ちなさいこの豚ヤローーーーー！！！」
「さあ吉井！！お仕置きしてあげるから止まりなさい！！」
「何でこんなことに！？」

落ち着いて思い返してみよう。

たしか、外にいた連中が突然騒ぎ出して倒れたと思ったら姫路さんがクレープをあーんってしようとして、僕も姫路さんに甘えることにしたら文房具が飛んできて島田さんと清水さんに追いかけられて・・・・・・

「僕が何かした！？」
「色々したでしょ！！」
「豚ヤローー！！美春がお姉さまを手に入れる為に殺されなさい！！」
「なんでそうなるの！？」

姫路さんと一緒に逃げてるんだけど、彼女は体が強くないからどうしても遅れがちになる。

「明久君・・・・・私は、良いですから・・・・・・先に・・・・・・」
「何言ってるのさ！？姫路さんも一緒に逃げるんだよ！」

というより狙われてるのは僕一人だろうけど。

「豚ヤローー！！」

「美春！あんたはそれ以外に言うことないの！？」

「どうしよう・・・・・・」

「（明久。こっちだ）」

「？」

真琴が茂みに隠れていた。

とりあえず隠れる僕と姫路さん。

「何やってんの？真琴」

「そんなことよりあのバーサーカー（島田と清水）を何とかするぞ」

「どうするんですか？」

「鉄人を呼んだ」

「鬼だね・・・・・・」

「鬼ですね・・・・・・」

ＰＩＰＩＰＩ

真琴の携帯が鳴った。

「はいもしもし」

『峰嶋。すまないが職員会議でいけなくなった。悪いな』

ピッ

真琴は携帯を切った。

「どうしたの」
「鉄人が来れなくなった。逃げるぞ」
「・・・・・・やっぱりこうなるんですね」

最初から想定できた事態だった。
多分この後は二人が僕らを見つけるんだろうな。

「見つけたわよ吉井！！」
「死になさい豚ヤロー！」

ほら見つかっちゃった。

「とにかく逃げるぞ！！」
「え！？」
「明久君！行きましょう！」
「なんでそんなに楽しそうに言うわけ！？真琴もノリノリでやってるでしょ！！」

とかなんとか言って僕も逃げるんだけど。

「あ！待ちなさい吉井！！」
「お姉さまの純愛を手に入れるためにあの豚どもを殺します！！覚悟しなさい！吉井明久と峰嶋真琴！」
「オレもかよ！？」

「真琴、どうするの！？」
「とにかくムッツリーニと秀吉に連絡！」

ＰＩＰＩＰＩ・・・・・・

「ムッツリーニ！今どこにいるんだよ！」
『ムッツリーニなら秀吉と一緒に俺がひっとらえて・・・・・・』

ピッ

また切った。

「今度はどうしたんですか？」
「雄二（あのバカ）は後で社会的に抹殺する・・・・・・」
「雄二だね・・・・・・」
「坂本君ですね・・・・・・」

さてどうしよう。
真琴だけであのＷ凶戦士（ダブルバーサーカー）に勝てるとは思えないな・・・・・・

「こうなりゃ最後の手段だな・・・・・・」
「最後の手段って？」
「文月学園で召喚獣を呼び出して追っ払う！！」
「「言うと思った（思いました）・・・・・・」」

好戦的な真琴らしい作戦だった。

「ラッキ！！鉄人発見！！」
「どうして西村先生なんですか？」
「事情を知ってるから、簡単に召喚フィールドを展開してくれる！！」

事情を知ってる鉄じ・・・・・・もとい西村先生は現国のフィールドを展開してくれた。

「さあどうするW凶戦士（ダブルバーサーカー）！！オレと姫路を相手にして勝てるかな！？」
「僕は戦力外なんだね・・・・・・」

「ウチらは吉井さえ倒せば問題ないから！試獣召喚（サモン）！！」
「お姉さまの純愛！！手に入れて見せます！試獣召喚（サモン）！！」
待とう清水さん。君の台詞と行動がおかしい気がするんだけど。
「結局最後はこうなるんだよな・・・・・・試獣召喚（サモン）！！」
「「試獣召喚（サモン）！！」」

Ｆクラス　峰嶋真琴　現国　４６０点
　　姫路瑞希　現国　３４６点
　　吉井明久　現国　　５８点

ＶＳ

Ｆクラス　島田美波　現国　１１点
Ｄクラス　清水美春　現国　１２８点

「この点数差なら楽勝だよ！！」
「吉井！覚悟！」
「死になさい豚ヤロー！！」
と思ったけど明らかに二人の狙いは僕だった。
「折角の姫路さんとのデートを邪魔されてたまるか！！」
僕の召喚獣の木刀が島田さんにクリーンヒット。

Ｆクラス　島田美波　現国　　０点

「隙アリです！！死になさい吉井明久！！」
「しまった！」

点数の低い島田さんの召喚獣に気を取られて清水さんの攻撃を避けられない！

「させるか！“決闘（デュエル）”！！」
「え！？何ですかこれは！？」

Ｆクラス　峰嶋真琴　現国　３５９点

ＶＳ

Ｄクラス　清水美春　現国　７４点

「お前が戦死しろ！！」
「きゃあ！！」

Ｆクラス　峰嶋真琴　現国　３５９点

ＶＳ

Ｄクラス　清水美春　現国　　０点

「戦死者は補習室に集合！！」
「そんなー！！折角のお休みが・・・・・・」
「美春はお姉さまと一緒なら、喩え火の中水の中、鬼の補習でも耐えられますわ」
「もうやめてー！！」

島田さんと清水さん
W凶戦士は鉄人に連行されて行った。

「さて、オレはもう用ないし、帰るとするか」
「え？真琴もう行っちゃうの？」
「多分もうお前らの邪魔をする奴はいないだろうから二人で楽しみな」

そういうと真琴は行ってしまった。

「あの・・・・・明久君」
「何かな？姫路さん」
「お話があるんですけど、いいですか？」
「？」

「・・・・・雄二。二人の邪魔は許さない」
「まて、落ち着くんだ翔子。アイアンクローなんかしても何も解決しなガアアアアア！！！」
「・・・・・お仕置きするのは妻の役目」
「俺はいつお前の旦那になったんだ！？」

第十五話　バカと才女とラブラブデート！（後書き）

唐笠さん、感想ありがとうございました！！

第十六話　ひとりのつらさ（前書き）

「・・・・・・雄二、どこ？」

「アイツは探しだして社会的に抹殺しなければ・・・・・・」

第十六話　ひとりのつらさ

明久ＳＩＤＥ

僕と姫路さんは学校の屋上に来ていた。
姫路さんが話があるって言ってたけど、なんだろう？

「姫路さん、話って何かな？」
「えっと、その・・・・・・」

姫路さんの顔が赤い。まさかまた熱でもあるんじゃ・・・・・・？

「明久君！」
「は、はいっ！」

急に呼ばれて思わず硬くなってしまう。

「あの、今日はありがとうございました」
「いいよ別に。僕も楽しかったし」

いろんな人に追いかけられて大変だったけど。

「明久君と二人で映画に行って、クレープを食べて・・・・・・本当に楽しかったです」
「僕もだよ」

姫路さんの顔がどんどん赤くなる。
やっぱり熱があるんじゃないかと不安になってくる。

「私はやっぱり、いろんな人に守られてばかりです・・・・・・」
「え・・・・・・？」
「今日だけじゃありません。試召戦争の時も、久保君と戦った時も、いろんな人に守られて励まされてるんです」
姫路さんは急にどうしたんだろう？
「でも別にそれは悪いことじゃないんじゃ・・・・・・」
「守られることは悪いことじゃないんです！でも、私は守られてばかりで、誰も守れないんです。いろんな人が私を特別扱いしますけどそれは私と距離を置こうとしてる気がして・・・・・・そのうち、誰も私に近づいてくれなくなるような気がして・・・・・・」
知らなかった。姫路さんがそんな風に悩んでいたなんて。
「だから、明久君も私のそばから居なくなっちゃう気がして・・・・・・」
姫路さんは泣いていた。
僕には分からない理由で泣いていた。
僕はバカだから。
誰にも特別扱いなんてされないから。
皆が普通に話しかけてくれるから。
一人になるつらさなんて、僕には永遠に理解できないのかもしれない。

でも、今の姫路さんの気持ちを分かってあげたいと思った。
少しでも楽にしてあげたいと思った。

「姫路さん・・・・・・」
「私ってバカですよね・・・・・・こんなこと、明久君に話しても意味ないのに・・・・・・」

どうすれば彼女の不安を取り除いてあげられるかなんて、バカな僕には一個しか思い浮かばない。
たとえそれが、彼女に嫌われる原因になるとしてもそれでも構わない。
彼女が少しでも楽になれるのなら。

「姫路さん・・・・・・」
「！！」

僕は姫路さんを抱きしめた。
彼女が一人になることを恐れるのなら・・・・・・

「大丈夫だから・・・・・・皆がいなくなっても、僕が姫路さんのそばにいてあげるから」
「・・・・・・明久君」

はっきりいって、僕は自分のことを相当頼りない奴だと思ってる。
自覚があるくらいだ。
でも、ここで彼女を突き放してしまったら、自分の気持ちに嘘をつくことになる。
好きな女の子が困って、悩んで、泣いているのに助けないなんて僕

には出来ない。

「だから泣かないで。ね？」

「・・・・・やっぱり、明久君は優しいです。ずっと昔から」

「え？」

「だからもう少し、もう少しだけこのままでいても良いですか？」

そう言って、姫路さんは僕の胸に顔をうずめてくる。

いつもならあわてて焦ってるんだろうけど、今の僕はそれを感じなかった。

「うん。姫路さんが落ち着くまで、このままでいよう」

「ありがとうございます・・・・・」

それから数分して、姫路さんも落ち着いたみたいだった。

「その、さっきはごめんなさい・・・・・・」

「気にしなくていいよ。僕は大丈夫だから」

もうちょっとあのままでいたい気もしたけどね・・・・・・・

「明久君」

「なに？」

「私は、明久君のことが好きです」

「え・・・・・・？」

姫路さんは何を言って・・・・・・

「ずっと前から好きでした。小学校の頃から・・・・・・・」

「・・・・・・」

僕は何も言わない。

正確には言えなかった。

何も言わずに、何も言えずに、姫路さんの言葉を聞き続ける。

「だから、吉井明久君！！」

「・・・・・・なにかな？」

「私と付き合ってください！！」

嬉しかった。僕も姫路さんのことが好きだからだ。
だけど、優秀な姫路さんは僕みたいなダメな奴よりももっと優秀な人間のほうがふさわしい。
最近まで・・・・・・いや、ついさっきまでそう思っていた。
だけど・・・・・・

「姫路さん・・・・・・嬉しいよ。僕のほうこそよろしくね」
「いいんですか・・・・・・？」
「姫路さんのほうから言って来ておいて、何言ってるのさ」
「・・・・・・それもそうですね」

約束したから。
そばにいるって。
皆がいなくなっても、僕が姫路さんのそばにいるって。
そばにいるだけじゃない。
そばにいて、守るんだ。

「僕も大好きだよ・・・・・・姫路さん」
「私もです・・・・・・明久君」

～翌日～

「おはようございます。明久君」
「おはよう。姫路さん」

学校の前で、姫路さんと出会った。

「行こう？遅刻したら鉄人に怒られちゃうからね」
「そうですね」

二人で雑談しながら教室に行くと凄惨な状態だった。

「・・・・・真琴。この状況を説明してくれるかな」
「お？明久と姫路か。おはよう」
「あ、おはようございます」

この二人はこの状況を不思議に思わないんだろうか？

「いや、おはようじゃないでしょ・・・・・・・姫路さんも挨拶を返す前にこの状況に突っ込もうよ・・・・・・・」

ＦＦＦ団の連中が血まみれになったり顔が陥没してたりでとにかく全滅していた。

軽く暴力団同士の喧嘩でもやった後のような酷さだ。

「あの、真琴？これは一体・・・・・・？」

「ああ、こいつ等か。朝からお前を見つけ次第処刑するとか言ってうるさいから黙らせただけだ」

そういえば昨日の姫路さんとのデートは異端審問会にもばれてたんだっけ。

「なら別に問題ないんじゃないですか？明久君」

「そ、そうだね・・・・・・姫路さん・・・・・・」

問題しかないような気がする。

「なんか二人とも随分仲がよろしいようで・・・・・・昨日なんかあった？」

「え！？いや何もないよ！？ねえ姫路さん！？」

「そうです！いろいろありましたけど、何もなかったんです！」

姫路さん・・・・・・語るに落ちてるよ・・・・・・

「まあいいさ。これ以上聞くのは野暮ってもんだしな」

「はは・・・・・・そうしてもらえると助かるよ・・・・・・」

この中にまだ意識のある奴がいたら、聞かれてはいけないことを聞

かれてしまうからね・・・・・・・

「まあああこぉぉぉぉとぉぉおおお！！！」

雄二がものすごい剣幕で飛び込んできた。

「おい！！なぜ翔子があんなものを持っている！？」

「？・・・・・・ああ、ボイスレコーダーか。それなら作戦協力の報酬として俺があげたもんだけどな」

「キサマハコロス！！イマココデコロス！！」

雄二は完全に怒り狂っていた。

「霧島！！お前の旦那がオレを襲ってるんだ！！」

「てめ、なんてこと言うんだ！！」

「・・・・・・雄二、浮気は許さない」

「違うぞ翔子！！襲うといってもいろんな意味があって、けっしてやましいことは（ブス）目があああああ！！！」

なるほど。真琴に刃向かうとこういうことになるのか。よく覚えておこう。

「峰嶋！！全部木下から聞いたわよ！！」

今度は島田さんがものすごい剣幕で以下略。

「これどういうことよ！！」

《島田。俺と付き合ってくれ。俺はお前のペッタンコに惚れたんだ》

「げ・・・・・・」
「すまぬ真琴・・・・・・ついはずみで喋ってしもうたのじゃ・・・・・・」
「・・・・・・雄二、どういうこと?」
「記憶にない!!」
「・・・・・・胸が小さいほうがいいなら、努力する」
「そんな努力するな!!」

もはやムチャクチャだった。

「しかも私のコードネーム『まな板』ってどういうことよ!?」
「いや、それ以外で特徴が見つからなかったから仕方なく・・・・・・おい、島田。言っておくがオレの右腕はその方向には曲がらないから関節技をかけても無駄・・・・・・(ボキ)うそ?曲がった?曲がっちゃった?」
「安心するのじゃ真琴。後でわしがはめておいてやろう」
「いや、それ以前になぜお前はそんな特技を持ってるんだ?」
「よく姉上にせっか・・・・・・なんでもないのじゃ。聞かないで欲しいのじゃ・・・・・・」

本当に秀吉になにがあったんだろう?

「・・・・・・ふふ」
「?姫路さん、どうかした?」
「やっぱり、皆がいるのっていいなって、思っただけですよ」
「そうだね」

にぎやかで、若干酷い目にあってる人もいるけど、これがFクラスの平和なんだろうな・・・・・・

「あのさ、姫路さん」
「なんですか？」
「これから、『瑞希』って呼んでもいいかな？」
「・・・・・良いですよ。明久君なら」
「よかった。じゃあ『異端者、吉井明久を処刑せよ！！』ってええ！？」

サクサクサク（カッターが畳に刺さる音）
パリーン（僕が窓から飛び降りる音）
ダッ（皆が追いかけようとする音）

「明久君！！ここ三階・・・・・！」
「大丈夫だよ！ＨＲ（ホームルーム）までに戻るから、待ってて！！」

『異端者を発見！即刻処刑せよ！！』

「まずい！！」

僕はバカでブサイクで甲斐性なしかもしれないけど、それでも・・・・

「待ってて！瑞希！」
「はい！！」

人並みに守りたいと思うものはあるんだ。

第十六話　ひとりのつらさ（後書き）

ふーーー・・・・・・・
やっと終わりました！
明久の視点から恋愛系を書くのは初めてだったので大変でした・・・・・・

唐笠さん、また感想を頂き、ありがとうございました！！
期待に沿える小説になったかは分かりませんが、これからも応援してくださると嬉しいです！
他の読者の皆さんも、よろしくお願いします！！

第十七話　また夢で（前書き）

意外に夢の中の真琴が気に入ってしまった今日この頃。

第十七話　また夢で

何もない、真っ暗で何も見えない空間。

手探りしても何も見つからない空間。

何度もアイツに呼び出されてここに来る。

「やあ。またあったね」

「そっちから来るんだろうが・・・・・・」

今度は制服姿のオレか・・・・・・

毎回毎回ご苦労なこった。

「そう言うなって。いや、そう考えるなって。が正解かな？」

「またそうやって人のココロを読むわけだ」

「読んでるんじゃなくて、分かっちゃうんだよ。キミが自分の姿で僕にこられることを面白く思ってない事だってね」

「分かってるんなら何とかしてくれよ・・・・・・」

「それは無理な相談だ。キミがなぜ僕がこんな格好をしてるのか分かってくれなければ、僕にはどうにも出来ない」

「そのうちな」

「僕だって本当はこんな生意気そうな男なんかになりたくないよ。もっと可愛い女の子とかの方がいいとおもうだろ?」

「オレの体はこれ以外にないからな・・・・・・そんなこと考えたってどうしようもないだろ」

「とか言って、瑞希ちゃんの格好とかしてくれるとありがたいとか思ってるんじゃないの?」

「その口調とアイツの顔が一致しないからやめてくれ・・・・・・夢見が悪くなりそうだ・・・・・・」

というか本当に想像できない。

「まったく、アンタが本当にオレの物なのか不思議で仕方ないな・・・・・」

「そう！僕はその話がしたかったんだよ！アレだけのヒントで僕の正体にたどり着くなんて、さすがとしかいい用がないね」

「用件は他にもあるんだろ？」

「あるけどこの話から行こうよ！キミは本当にすごいねぇ・・・・・・僕の所有者がキミのような頭のいい人間で、僕も嬉しいよ」

「簡単なことだ。他のやつ等も持っていて、オレがこっちに来てから手に入れたものなんて、数えるほどしかないからな」

「キミのような人間が僕を所有するなんて、本当に運命って奴は面白いよね！」

「アンタはオレのココロの投影だけど、それでも自分の意志を持ってるって事も分かってるぞ」

「そこまで行くと本当に神がかってるね」

「もうこんな話はやめに・・・・・・・いや、一つだけ聞きたいな」

「なんだい？」

「アンタ以外の奴・・・・・・例えば明久や姫路のもアンタと同じなのか？」

「違うね。この仕様になってるのは僕だけだね」

「アンタは現実でも今と同じように出てくるのか？」

「それは分からない。でも今のままじゃ無理そうだ」

「いろいろと不都合だな・・・・・・」

「質問はそれだけかい？」

「ああ。アンタのことが少し気になっただけだからな」

「じゃあ本題に入ろうか」

「拒否する」

「キミに拒否権はない」

「断らせてもらう」

「二人をあそこまで煽っておいて未練タラタラなんて情けない話じゃないか」

「オレの問題だ。アンタには関係ない」

「確か前もそう言ってたね」

「キミは自分の弱点と向き合わなければいけないのにずっと目をそらし続けている。その弱点、早いうちに克服しとかないと大変なことになるよ？」

「ならない。オレが食い止めてやる」

「無理だね。キミが自分で考えるようになるまではどうやっても力不足だ」

「力不足だと？」

「キミは考える気がないようだから今回は単刀直入に言うけどね。君の弱点は対人経験の少なさだ」

「対人経験の少なさ・・・・・・？」

「対人経験の少なさだよ。キミは他人を能力面や技術面で分析して理解することは出来ても、その人の気持ちを理解できない。人と触れ合った経験があまりにも少なすぎるからだ」

「・・・・・確かに本気の付き合いとなると、１０人もいないだろうな」

「それがキミの弱点だよ。守ることしか出来ないキミには、“攻撃することを恐れている”キミには、その弱点は致命的だろうねぇ」

「オレが攻撃することを恐れてるだと・・・・・・？」

「そう怒るなって。でもキミは実際に守ることは出来ても、傍にいてやる事は出来なかったし、彼女がキミに何を望んでいたかって事も最後までわからずじまいだったじゃないか」

「・・・・・・・・・・・・！」

「いつまでも過去に捕らわれちゃダメだよ？変えられないことをどうこうしようとしたって無駄だからね。それよりも未来に目を向けたほうがいいとは思わないかい？」

「だけど、オレは・・・・・・」

「『あの日の償いをしていないから未来に目を向けることは許されない』かい？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「いいじゃないか」

「・・・・・・？」

「キミはもう十分に苦しんだよ。色々考えて、強くなったじゃないか。今からでも自分のために生きていいんだよ。自分の幸せくらい求めて、何が悪いって言うんだ？」

「でも・・・・・・！」

「分かってないようだからもう一度言うね。キミがするべきことはその『守る力』を過去ではなく未来に向けることだ。それがどういう意味か分かったら、また来るよ」

「未来、か・・・・・・」

なんだかんだで、アイツもやっぱりオレだな。

ありがとう。

第十七話　また夢で（後書き）

次回からオリ話で行きたいと思います！

第十八話　僕らと旅行と里帰り！（前書き）

今回からオリジナル話『僕と皆と北海道旅行（そんないい物じゃないからな！？ｂｙ真琴）編』が始まります！

第十八話　僕らと旅行と里帰り！

バカテスト　家庭科

問　以下の問に答えなさい。

『スパゲティを茹でる時、（　）を入れる』

峰嶋真琴の答え

『塩』

吉井明久の答え

『塩』

教師のコメント

正解です。ちなみに塩を入れる理由として、塩味をつける、「塩析」という現象を利用してパスタのたんぱく質を溶かしコシをつける（グルテンが残る）、食塩水の方が水よりも沸点が高いので、茹でるのに適しているなどの理由があります。

土屋康太の答え

『俺の望む物』

教師のコメント

君は一体何を入れる気ですか？

姫路瑞希の答え

『塩酸』

教師のコメント

峰島君の回答の意味がよく分かりました。

真琴ＳＩＤＥ

とあるＧＷ前の峰嶋家・・・・・・

ＰＩＰＩＰＩ・・・・・・

「オレの携帯？誰からだ？」

オレは自分の携帯が鳴ったのに気づいて電話に出る。
非通知なので誰だかわからない。

「もしもし？」
『もしもし真琴？だれーだ？』

このあからさまないたずらっ子ムード全快の喋り方をする人間は一人しかいない。

「・・・・・母さん、何の用？」
『いや、用ってほどでもないんだけど、一回こっちに戻って来て欲しいのよ。出来ればお友達７人くらい連れて』
「突然どうしたんだ？」

相変わらずあの人に常識はないようだ。

『だって真琴ったら嘘が上手だから実物連れて来てくれなきゃお友

達の事分からないじゃない』

だからって北海道まで呼びつけるか？

『それからね、真琴のこれからの生活に関わる大事な話もあるから、今度のゴールデンウィークにでも里帰りしてね』

それだけ言って電話は切れてしまった。

「相変わらず訳分からん人だな・・・・・・」

友達か・・・・・・7人って言ったら丁度いい人数じゃないか。

明久ＳＩＤＥ

朝の教室。
普段ならＦＦＦ団のやつ等が飛び掛って来るんだろうけど皆が騒ぐたびに『うるさい！！』ってキレてフルボッコするもんだから最近は静かだ。
で、その『うるさい！！』の本人が・・・・・・

「あ〜ー・・・・・・疲れた・・・・・・」

朝からダウンしていた。

「どうしたの真琴？朝からみかん箱に突っ伏してるなんてらしくないね」
「具合でも悪いんですか？」

この間のＡクラスとの試験召喚戦争に負けたせいで僕等の教室の設備は更に酷くなった。

卓袱台→みかん箱

座布団→ござ

てな具合に。

「いや、なんか分からんが夢を見た後にムチャクチャ疲れてるんだよ・・・・・・」
「夢？」
「自分の姿したムカツク奴に諭される夢」
「いろんな意味で疲れる夢ですね・・・・・・」

とはいえ、寝ても疲れが取れないどころか疲労が増すなんてのは尋常じゃない。

「しかもあの事もあるしな・・・・・・」
「あの事？なんですか？」

そう質問するのは姫路瑞希さん。
一応僕の彼女（注：のろけです）。

「いや、母さんが北海道まで戻って来いって言うんだよ。友達7人くらい連れて来いとか言ってるし」
「7人・・・・・・ですか？」
「7人・・・・・・だって？」

7人・・・・・・真琴を含まないとすると・・・・・・

僕・瑞希・雄二・秀吉・島田さん・ムッツリーニで6人か。
あと一人は・・・・・・

「明久。勝手にメンバーを決めないでくれ」
「え？まだ何も言ってないよ？」
「どうせいつもの6人は確定だからもう一人は誰にするかとか考えてたんだろ」

ピッタシビンゴ。
恐るべし峰嶋真琴・・・・・・

「まあその6人には話するつもりでいたんだけどな・・・・・・明久と姫路はゴールデンウィーク空いてるか？」
「僕は問題ないよ」
「私も大丈夫です」
「じゃあ後は他の4人と霧島だな」
「え？なんで霧島さん？」
「雄二が行くのにあいつがいなかったらつまらないだろ？」
「君最高！！」

あのバカ雄二を闇に葬れる日がこようとは・・・・・・！！

「それにアイツ（雄二）をまだ社会的に抹殺してないからな」

真琴のほうがはるか上を行っていた。

「なんだ？三人で楽しそうにしてるじゃないか」
「あ、雄二」
「真琴君が北海道に帰郷するんですけど、友達を連れて来いって言われたみたいで・・・・・・」
「だからいつもの6人と霧島を誘おうと思ったんだけど」

雄二のことだから霧島さんがいるって知ったら断固拒否するだろうな。

「翔子が一緒なのに行くわけが（ブス）目がああああ！！」

「・・・・・峰嶋はいい人。ぜひ行かせて欲しい」
「かまわねーよ。最初から誘うつもりだったしな」

雄二が悶絶していることには誰も突っ込まない。
なんだかこの光景にも慣れてしまった。

「秀吉と島田とムッツリーニはどうだ？」
「何の話？」
「真琴がＧＷに北海道に連れてってくれるって」
「ホント！？行く行く！！」
「わしも行きたいのう。今年のＧＷは特に何もなくて退屈してたところじゃ」
「・・・・・・温泉はあるか？」

ムッツリーニは覗く気満々だった。

「明久君。行くときのお金は自分達で出さないと真琴君に悪いですよ・・・・・・」
「そうか・・・・・・しまったぁぁァァ！！」

いくらゲームを売っても旅行するくらいのお金になるわけないじゃないか！！

「それなら心配要らないよ。じいが迎えに来てくれるって」
「「「「「じいって？」」」」」

なにその超お金持ちみたいな発言。

「じいって言っても別に使用人とかじゃないよ。お袋の知り合いで、事情があって家で暮らしてる」

よかった。真琴が一瞬とても遠くに感じられた。

「あの忌々しいクソ親父は買王（ばいおう）グループの会長だから、それなりに金持ちだけど」

やっぱり遠かった。

「買王グループっていうと・・・・・・最大手のデパートっていうあの買王デパートか！？」

「「ええーー！！？」」

真琴がとっても遠かった。

瑞希ＳＩＤＥ

「はあ・・・・・・」

明日から3泊4日で皆さんと旅行なんですけど、何を持っていったらいいんでしょう?

「明久君に聞いたら分かるんでしょうか・・・・・・?」

そう思って明久君の家に電話をかけます。

「あ、明久君ですか?姫路ですけど・・・・・・」

『え?瑞希!?ゴメンちょっと今取り込んでて『くたばれえええええ!!』てめえがくたばれええ!!』

・・・・・・何が起こってるんでしょうか?

坂本君の声が聞こえたような気がしたんですけど・・・・・・

『ふう・・・・・・霧島さん、後は頼むよ』

『・・・・・・まかせて。夫の不始末は妻の役目』

『で、なんだっけ?』

・・・・・・・・・どうして明久君の家に翔子ちゃんがいるんでしょう?

「明久君。今から明久君の家に行きますから待っててクダサイネ？」
『あれ？瑞希？なんか発音が変だよ？』
「イイエ。絶対に家から出ないでクダサイネ？」
『・・・・・・はい』

アキヒサクン。ウワキハイケマセンヨネ？
ハヤクオハナシシタイデスネ・・・・・・・

明らかにバーサーカーだった・・・・・・（ｂｙ福原教諭）

「明久君!!どうして翔子ちゃんがいるんですか!?」

と大声で明久君の家に来たんですが、いるのは明久君だけでした。

「・・・・・翔子ちゃんは?」

「霧島さんなら雄二を引き取ってもらうために呼んだだけだから帰ったよ?」

「・・・・・・ふぇ?」

つまり・・・・・私の勘違いですか?

「それより瑞希は何の用で電話してきたの?」

「え!?えっと、それは・・・その、何を持って行ったらわからなくて、聞きたかったんです!」

「なら来る必要はなかったんじゃ・・・・・・」

「えと、それは明久君に会いたかったから・・・・・・じゃなくて、ええと・・・・・・」

ああ!これじゃ嘘にならないじゃないですか!

明久君の浮気を疑ったなんて言えないですし・・・・・・

「持ってく物なら、着替えとか歯ブラシとかの他に入らないんじゃないかな?」

「・・・・・君は・・・・・・なこと・・・・・・のに」

「もしもーし?瑞希?」

「え?」

「いや、『え?』じゃなくて・・・・・・」

着替えとか歯ブラシって単語は頭に残ってるんですけど・・・・・・
まあいいですよね。

「わかりました。ありがとうございます」
「ううん。いいんだよ」

なんとなく見透かされてる気がするんですけど、大丈夫ですよね？

「ねえ瑞希」
「なんですか？」
「その、僕たち・・・・・・付き合ってるわけだし、その・・・・・・
・敬語って何とかならないかな？」
「え？敬語・・・・・・ですか？」

そういえば無意識のうちに敬語を使っちゃってるんでした・・・・・・
・

「えっと、じゃあ明久君がそう言うなら、頑張ってみます・・・・・・
・」
「あ、いや、別にそれが嫌な訳じゃないんだけどね・・・・・・」

折角明久君と仲良くなれたのにこのままじゃいけませんよね・・・・
・・

「あー・・・二人で仲良くやってるとこ悪いんだけど、いいかな？」
「「え！？真琴（君）！？いつからそこに！？」
「いまから」

いや、そうじゃなくてですね・・・・・・

「明日はこのマンションの玄関に9時集合な。他のやつらにも伝えておいてくれ」
「明日は9時ですね。分かりました・・・・・・」
「瑞希、準備終わったの？」

まだ終わってないんでした・・・・・・

「今からやってきます・・・・・・」
「ははは・・・・・がんばって・・・・・・」
「何やってんだよお前らは・・・・・・」

～翌日～

真琴ＳＩＤＥ

「全員揃ったな～」

オレに明久に姫路に坂本夫妻と秀吉に島田にムッツリーニ。
全員いるな。

「そろそろ来るはずなんだが・・・・・・」

時計は９時丁度になっている。

「“じい”ってどんな人なのかな？」
「気になりますね」
「なんかすごい人かも・・・・・・！」
「いや、わしは普通の老人だと思うのじゃが・・・・・・」
「・・・・・雄二と私を祝福してくれる人」
「何を言ってるんだお前は・・・・・・」
「・・・・・・偉人」

いや、そこまですごい人でもないんだけど・・・・・・

と、そのとき向こうから一台のバス（大型）がやってきた。

「いや、そこまでやる必要はねえだろ・・・・・・」

恐らくアイツだな。

バスが俺たちの前に止まって扉が開くと一人の男が降りてきた。

「ようボウズ！！元気だったか！？」

「源兄（げんにい）こそ元気だったのかよ？」

「相変わらずの減らず口だな！ガハハハ！！」

「あれ？みんなどったの？」

オレ以外の7人がフリーズしていた。

「いや、じいってこの人なの？って思って・・・・・・」

「イメージと違います。違いすぎます」

「・・・・・想定外！」

いや待とう。だれもこの人がじいだなんて言ってない。

「この人は名川源太さんだよ。オレの実家で暮らしてるんだ。決してじいではない」

「「「「「よかったー」」」」」

「なにが？」

確かに源兄は活発で限度という言葉を知らないけどいい人だ。

「じいは、こちらでございますよ」

そう言ってまた一人、降りてくる。

「久しぶりだな」

「そうですな・・・・・・」

やっぱり変わってないな。だって・・・・・・

「おお、真琴様にこんなにお友達が出来るとは・・・・・・」

「意外か？」

「はい、なぜなら・・・・・・」

だって・・・・・・

「お父上が『あの小生意気なクソガキに友達などできる訳が無い』とおっしゃっておりましたから」

「わかった。あのクソ親父はどうやらシバかれたいらしいな」

親父一番なあたりとか。

「それにしてもボウズ！！可愛い女の子が４人もいるじゃないか！！」

コイツも変わっていなかった。

「黙れ節穴。女子はこの場に3人しかいないわ」

「まあ、とりあえず皆さん。詳しい自己紹介とかめんどくさい事はバスの中でやりましょう。さあ乗った乗った」

「は、はあ・・・・・・」

さすがに呆れられるよな・・・・・・

「まあ、乗ってくれ。説明するからさ」

本当にめんどくさい里帰りになりそうだ・・・・・・

第十八話　僕らと旅行と里帰り！（後書き）

感想お待ちしてます！

第十九話　オレと親父と家庭の事情

バカテスト　地理

問　以下の問に答えなさい。

『北海道にある都市の名前を３つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『札幌・室蘭・函館』

教師のコメント

正解です。他には釧路、小樽などがありますね。

峰嶋真琴の答え

『嫌な記憶が蘇るので答えたくない』

教師のコメント

何かあったんですか？

吉井明久の答え

『北・海・道』

教師のコメント

やると思いました。

明久ＳＩＤＥ

真琴の家族は色々な意味で変わってる。
その中で一番目立つのが・・・・・・

「なんでこんな大きいバス使うんだろ・・・・・・」

『限度を知らない』って言うことだった。

「多分源兄だな。こんなことする奴はあの人しかいない」
「そうなんですか・・・・・」
「この程度で驚いてたら家に着いた時にショック死するぞ。あの人の妹はもっとすごいからな」
「どういう風にすごいんだ?」

雄二が聞く。

「俺が寝てる間に女装させて写真を撮った挙句にインターネットに乗せようとしたからな。肖像権の侵害もいいとこだ」

凄まじかった。

「では皆さん。そろそろ自己紹介をしやがってください」
「黙れ親父主義のクソジジィ」

真琴のキャラがどんどん崩壊して言ってる気がする。

「僕は吉井明久です」
「見るからにバカそうな顔ですね」

え!?僕の顔ってそんな風に見えるの!?

「よし皆。もうこんなバカジジィに付き合う必要はないからな」
「峰嶋もすごいわね・・・・・・」
「ま、まあ皆さん続けましょう・・・・・・」
「姫路。無理にあのジジィに付き合う必要はないぞ」
「じいはそこのクソガキのお友達のことをもっと知りたいです」
「シバくぞ」

平然と真琴のことをクソガキと言ってのけるこの人は一体どんな環境で生きてきたんだろうか?

「えっと私は姫路瑞希です。真琴君とは小学生の頃の友達で・・・・・」
「お母上から話は聞いていますよ。あの頃のクソガキは貴方のことをよくお話して「ホントに殺すぞクソジジィ!!」やれるものならやってみなさいクソガキ」

この自己紹介、ものすごく不毛な気がする。

「俺は坂本雄二だ」
「木下秀吉じゃ」
「島田美波です」
「・・・・・・・・・土屋康太」
「・・・・・坂本翔子」

あれ?坂本さん今おかしくなかった?

「まて翔子。俺はお前と籍を入れた覚えはないからな?」
「・・・・・・・・未来の名前」
「おかしいだろ!?」

雄二。今君の事をうらやましく思うよ。
愛し合っている者同士で既に結婚が決まってるなんて。

「翔子ちゃん、大胆です・・・・・・私も見習わないと・・・・・・」

「待とう瑞希。一体どこを見習う気なんだ？」

最近瑞希がＦクラス色に染まりまくってる気がする。

「じゃあ次は俺だな！」
「アンタの暑苦しいその台詞で全てが分かったからもういいや」
「冷たいぞ！ボウズ！」
「アンタが熱すぎるだけだ」

真琴は冷たかった。

「俺は名川源太だ！特技は力仕事だぞ！あと英語が得意だから英語で分からないことが会ったら聞いてくれよな！」
「へぇー。源太さん英語が得意なんですか？」
「ああ。ものすごいぞ！！」

どれくらいすごいんだろう？

「たしか高校のときに英語で演説したって言ってたよな。しかも２時間」

すごいの種類が違った。

「峰嶋の家族ってすごいのね・・・・・・」
「本家の家族はもっとすごい。口では言い表せないくらいにすごい」

もう行きたくなくってきた。

「皆さん。すぐに空港に着きますから準備してください。お父上が生意気なクソガキのために自家用機を回してくださいましたから」

「生意気のクソガキのためにそこまでするのか・・・・・・？」

雄二の疑問も最もだった。

で、空港・・・・・・

「自家用機って言っても、そんなに大きくないのな」

ホントに１０人くらい乗るような奴だけど、それでも十分すごいと思う。

「まあ親父がよくこんなの回してくれたよな」

「全くだな！！ボウズと親父さんは仲ワリィのにな！」

「え？真琴ってお父さんと仲悪いの？」

小学校のときはそんな感じしなかったんだけどな。

「隙あらばお互いを殺しあおうと常に武器を持ち歩いている」

「仲悪いってレベルじゃないのではないか？」

「・・・・・・敵対関係」

それって殺し合ってるって言うんじゃ・・・・・・

「さっさと乗るぞ。１時間もあれば向こうに着くだろ」

「・・・・・・ポジティブ」

「あの、皆さん！！」

自家用機に乗って少ししてから瑞希が包みを差し出してきた。

「あの、シフォンケーキを焼いてきたんですけど、皆さんどうですか？」
「オレはいらない（いろんな意味で）」
「真琴！女の子の手料理を断るなんて貴様に男としての尊厳（プライド）はないのか！？」

まったく、なんという奴だ！

「オレは尊厳（プライド）より命のほうが大事だ」

後になって、このときの真琴がどれだけ正しかったかがよく分かった。

「あの、ちょっと失敗しちゃって、５人分しかないんですけど・・・・」
「「「「「！！」」」」」
「じゃあ、男子５人で食べればいいじゃない。ウチは食べなくてもいいから」
「・・・・・・雄二、今は許す」

雄二はケーキ一つ食べるのにも霧島さんの許可がいるのか・・・・・・

「明久君、どうぞ！」
「うん。じゃあ頂くよ」

折角作って来てくれたんだ。食べなきゃもったいないよね。

モグモグ・・・・・・

「うん！すごくおいしいよ！！」
「本当ですか！？よかったです！！」

瑞希は料理もうまかったんだな・・・・・・

「本当か明久？身体に異常とかないのか！？」
「なに言ってるのさ真琴。そんなのあるわけないじゃないか」

何を言ってるんだろう真琴は？

「じゃあ俺も頂くとするか」
「わしも一つもらおうかの」
「・・・・・・頂きます」

ホラ、早く食べないとなくなっちゃうよ？

「じゃ、じゃあオレも！！」

みんな一つずつ瑞希のケーキを手にとって食べる。

「瑞希、何か隠し味とか入れたの？」
「はい！塩味が少しついてるとより甘く感じると思ったので・・・・・・」

そのとき、みんな（男子４人）の顔が青くなった。

「塩酸を、明久君のケーキ以外に入れておきました！」

ガタガタガタ　バタン！×４

「うわ、みんな！？ダメじゃないか瑞希！ケーキに塩酸なんか入れちゃ！」

「そうなんですか？」

恐るべし、姫路瑞希（必殺料理人）・・・・・・！

このときの真琴の言葉が忘れられなかった。

「やはり姫路の料理だったか・・・・・・（ガクッ）」

「何だ皆？女子の手料理がおいしすぎて倒れちまったか！？ハハハ！！」

この人の台詞も忘れられなかった。

そんな４人の犠牲者（笑）を出しながら僕らは真琴の実家に着いたんだけど・・・・・・

「「「「「デカッ！！」」」」」

でかかった。

「大体４００坪くらいあるかな・・・・・・」
「そんなあるの！？」
「ほとんど親父の個人資産だけどな」

恐るべき、峰嶋家・・・・・・！！

「まあ、自分の家だと思って使っていいからさ」

恐るべき、峰嶋家の子息・・・・・・・！！

歩いて行く真琴が遠く思えた。

「ただいまー」

「待ってたよ琴君！！」

ピシャ！！（真琴が扉を閉める音）

ガン！！（さっきの人が扉にぶつかる音）

バシャガンドンドン（！！？）

「ただいまー」

何事もなかったようにする真琴をすごいと思った。

「ひどいよ琴君！！」

「なんだみどりか・・・・・・」

女の子だった。

下ろした髪とか自己主張の激しい部分とかが瑞希に似てるけど、雰囲気は正反対だった。

「あれ？琴君の友達？初めまして！名川みどりです！！よろしくね！」

「え？名川ってことは・・・・・・」

「ああ。源兄の妹だ」

「すごい可愛いじゃないか。うらやましい限りだな」
「・・・・・雄二。浮気は許さない（ブス）」
「目がああ！！目がああああ！！」

雄二は霧島さんがいるのにそういう事言うから・・・・・・

「自己紹介は後でするとして、とにかく部屋に案内するよ」
「じゃあ、あたしについてきて」

で、僕らは名川さんについていって、大きな部屋に案内された。

「寝る部屋は男の子があっちで、女の子はあたしの部屋ね」
「いっとくがみどり。変なもの見せたら・・・・・・」
「大丈夫だよ。信用ないなぁ」
「ある訳ないだろうが・・・・・」
「まあまあ、二人とも。自己紹介でも・・・・・・」

この人もいろいろやりそうだ。

「僕は吉井明久。よろしくね」
「よろしくね。アッキー」
「ア、アッキー！？」
「こいつは人に渾名をつけるのが好きなんだよ」

明久→アッキー

なるほど

「姫路瑞希です。よろしくお願いしますね」
「姫ちゃんだね。よろしく～」

「ひ、姫ちゃんですか・・・・・・？」

姫ちゃんとは・・・・・・
なるほど特技というだけあって思いつくのも早いのか。

「俺は坂本雄二だ」
「了解！ゆーくん！」
「ぷっ」
「うるさいぞ。アッキー」
「なんだとゆーくん！」
「黙れバカ共」

真琴の実家でなければシバいてるところだ。

「ウチは島田美波。よろしくね」
「よろしくね、みなみん」
「み、みなみん・・・・・・」

島田さんも思うところがあるようだ。

「わしは木下秀吉じゃ。よろしく頼むぞ」
「ヒデ君だね。よろしく」
「わしを男と分かってくれるとは嬉しいのじゃ！！」
「だって男の子じゃん」
「やっほー！！」

ひ、秀吉のポーカーフェイスが崩れていく・・・・・・

「琴君がそう言ってたよ」
「あ、秀吉が落ち込んだ」

「はは・・・・・・」

秀吉のポーカーフェイスが崩れていく・・・・・・

「・・・・・・土屋康太」

「みどり。コイツはムッツリーニだ」

「・・・・・・・（ブンブン）」

「よろしくね。ムッツリーニ君」

「・・・・・・・（ブンブン）」

まさか初対面の人にムッツリリーにと呼ばれるとはね・・・・・・

「・・・・・・霧島翔子」

「よろしくね。翔子ちゃん」

「？　渾名をつけないのか？」

「いいでしょ。別に」

「いや、いいけどさ」

誰にでも渾名ってわけじゃないのか。

「真琴。帰ったなら声をかけてくれればいいのに。悪い子ね」

「やめてくれ。今すぐ帰りたくなる」

なぜだろう。この人は真琴のお母さんなんだろうけど、ものすごいたずらっ子オーラが・・・・・・

「皆さん初めまして。真琴の母の琴音です。明久君と瑞希ちゃんはお久しぶりですね」

「あ、はい。こんにちは」

「お久しぶりです」

覚えててくれたなんて嬉しいなあ。

「では、夕飯の準備をしますので」

「え？いまからですか？」

まだ4時になるかならないかくらいなのに？

「皆さんがいらしてるから豪勢に行きたいと思いまして・・・・・・」

「なら皆（瑞希を除く）で手伝おうよ」

「いいですよそんな・・・・・・夕飯の準備が出来たら呼びますね」

なぜか瑞希が残念そうな顔をしてるけどあんなものを見せられたらとても料理なんてさせられない。

「なら7並べでもしようぜ。トランプもあることだし」

真琴。そのトランプ、どこから出したの？

「よし、なら何かかけるか」

「・・・・・・負けたら自分の一番言いたくない秘密を一つ言う」

ムッツリーニ。何てこと言うんだ。

「レッツ7並べ！！」

「「「おおー！！」」」

で、カードを分けてもらって泣きたくなった。

K、K、Q、4、2、2、1

結果は僕の惨敗だった。

真琴ＳＩＤＥ

母さんが夕飯が出来たって呼びに来たから皆で向かうとそこには魚介類が大量に並べられていた。

「イセエビ、マグロ、ｅｔｃ・・・・・すごいな」
「よくこんなにたくさん買えたな。こんなに金あったのか？」
「お父さんの個人資産から少しもらったのよ」

相変わらずだった。

「真琴君。それっていいんですか？」
「油断した奴が食われる。それが家のルールだ」
「すごい家ね・・・・・・」

オレからすれば外のほうが温い位なんだけどな。

「それじゃ、皆さんたべましょう」
「「「「「いただきまーす」」」」」

さすがにこんなに豪華な海の幸を食すなんて機会はそうないのかみんなドンドンがっついてく。

「真琴はずっとこんな食事を食べておったのか？」
「いや、普段はもっと普通の料理だったな。親父がなんか言わなき

ゃこんな風にはならなかったな」

そういやあのクソ野郎がいないな。

「母さん。あの木偶の坊はどこだ?」

「ああ、父さんなら・・・・・・」

「木偶の坊＝父親が通じるとはどういう家庭なのじゃ・・・・・・」

あんなクソ親父、木偶の坊で十分だ。

「父親に対して木偶の坊とは随分だな」

あの忌々しい男か。

「父親面するならそれ相応のことしてからやりやがれ」

「貴様のような馬鹿には言われたくないな」

「んだと強欲男」

「なんだクソ息子」

コイツもちっとも変わらない。

変わるわけもないのだが。

「・・・・・・・・お前、Fクラスに入ったんだってな」

「それがなんだ?」

「お前ならAクラスは余裕だろう。どうしてだ?」

「気分だ。文句あるか」

「・・・・・・・・・・・・・・」

こんな奴と話してるくらいなら食べたほうがよっぽど有意義だ。

そう思って食べ続けてると親父に胸倉をつかまれた。

「貴様のそういう態度が我が家の面汚しだというんだ！！」
「なんだと！！家族のことも考えない自分勝手野郎に言われる筋合いはねぇ！！」
「私はお前の父親だ！言う筋合いくらいあるに決まっている！」
「だから父親面するならその前にテメエの行動を見直せっつってんだよ！！」

みんながいるのも忘れてオレと親父が二人で口論しあう。
こんな腐った奴が父親だなんて吐き気がする。

「・・・・・どうやらFクラスのせいでお前がおかしくなっているようだな」
「・・・・・・・・・・・んだと？」
「やはりお前にまともな友達などできるわけがなかったか」
「・・・・・・・・・・・んだとこの野郎！！」

明久も姫路も、雄二も秀吉も島田もムッツリーニも霧島もオレの友達だ！
それをコイツは・・・・・・・

「このクソ野郎・・・・・・・！絶対ゆるさ・・・・・・・！！」

パシン！！

言い終わらないうちに、頬が熱くなった。

親父じゃない。親父は殴るときはいつもグーだ。
じゃあ誰だ?
その答えはすぐに分かった。

「・・・・・・真琴君、いくらなんでもお父さんに対して失礼です!!」

姫路だった。恐らくオレたちの口論に、特にオレが言った『クソ野郎』って言葉で耐えられなくなったんだろう。

「・・・・・・ごめん」

今まで親父は、家族のためとか言って自分の欲以外の目的のために動かなかった。
こいつのせいで散々いやな目に合ってきた。
だからオレはこんなにコイツが嫌いだった。

「あっ・・・・・・・・・・・・・・」

姫路は何も言わずに部屋から出て行ってしまった。

「瑞希・・・・・・・・!」
「大丈夫だよアッキー。あたしが行くから」
「でも・・・・・・・!」
「こういう時って、女の子同士のほうがいいでしょ?」
「・・・・・・じゃあ、頼むよ」

みどりが姫路の後を追いかける。

「・・・・・・真琴。話してくれないかな」

「・・・・・・悪い」

今はとてもそんなこと話す気分じゃない。

「・・・・・もしよければ私がお話しましょうか？」

「・・・・・オレは席を外させてもらう」

このクソ親父のせいで・・・・・・

「やはりお前に友達などできるわけなかったな」

「・・・・・何とでも言え」

オリキャラ紹介　？

峰嶋琴音（みねしまことね）

真琴の母親。
常に真琴のことを理解していて、本人が悩んでいるときや思いつめてるときはさりげなく助言する。
年の割りに茶目っ気が多く（多すぎる）、その部分だけは真琴に嫌がられている。
かなりの巨乳。

峰嶋宗太（みねしまそうた）

真琴の弟。中学3年生。
真琴との信頼関係は厚く、お互いにサポートしあうことで足りない部分をフォローしあう。
真琴に次ぐほどの高い知能を持っているが、完全記憶能力は持っていない。
海外の高校を目指している。
フランスに留学中。

峰嶋雄大（みねしまゆうだい）

真琴の父親。
真琴の転校の原因で、そのことから真琴と敵対関係にある。
財力に物を言わせることで、買王グループの頂点まで上り詰める。
金銭欲と権力欲が強く、家族の中でもトップに立とうとするが琴音や冷静時の真琴の脅迫のせいで事実上のナンバー3止まり。

じい

琴音の古い知り合い。
雄大一番な主義で、真琴とは敵対関係にあるが、和解することもしばしば。
交渉しだいで協力することもある。

名川みどり

真琴の幼馴染。
とある理由で兄の源太とともに峰嶋家に暮らしている。
北海道で出来た真琴の最初にして唯一の友達。
みどりは漢字で書くと碧。
趣味は女装　（させること）と渾名を考えること。
女装　（させること）は真琴限定。
数学、物理、化学の成績は教師クラス。
物理においては真琴以上の点数をとることも多く、文系教科もそれなりの点数のため、実力は久保や姫路に匹敵する　（真琴が裏試験方法を考案してからは負けている）。

名川源太

みどりの兄。
とある理由で峰嶋家に居候している。
真琴に慕われており、誰にでも分け隔て接する優しい性格。
元気だが限度を知らない。
人の大切なものを傷つけることを何よりも嫌っている。
そのため雄大に関してもあまりいい印象を持っていない。

第二十話　事情と理由と秘密の話

バカテスト　地理

問　以下の問に答えなさい。

『北海道の県庁所在地を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『札幌市』

教師のコメント

正解です。軽い復習だと思ってください。

土屋康太の答え

『北海道』

教師のコメント

当たり前です。

吉井明久の答え

『日本』

もっと当たり前です。

峰嶋真琴の答え

『どうせ明久とかが日本とかって書いてるだろうから地球』

教師のコメント

色々と言いたい事はありますが、とりあえず当たり前ですと言っておきます。

瑞希ｓｉｄｅ

なんとなく部屋を飛び出してきたしまって、元々いた部屋がどこだったかも分からなくなってしまいました・・・・・・

「はぅ・・・・・・真琴君の家、広すぎです・・・・・・・」

友達の家で迷子になるなんて、情けなさすぎです・・・・・・

確か４００坪とか言っていた気がするんですけど・・・・・・

「どうしましょう・・・・・・帰れなくなっちゃいました・・・・・・」

歩いていればそのうち戻れるんでしょうか？

とぼとぼ歩いていると後ろから声をかけられました。

「姫ちゃん」

「名川・・・・・・さん？」

「やだなぁ。みどりでいいってば」

そこにいたのは名川さん・・・・・・じゃなくて、みどりちゃんでした。

「たぶん迷子になってるだろうなと思ってさ。ちょっとお喋りしようよ」
「・・・・・・・？」

二人でその場に座り込んで、色々なお話をしました。
真琴君の転校の理由や、どうしてあんなにお父さんを嫌っているのかも・・・・・・

「姫ちゃんは、どうして琴君があんなにお父さんの事嫌ってるか知

ってる？」

「知らないです。真琴君、何も話してくれないから」

悩み事を話すのはいつも私や明久君で。真琴君は自分の悩みなんかちっとも話してくれません。

「琴君って昔からそうだからさ。自分なんかに優しくしてくれるようないい人に迷惑かけたくないってさ」

「迷惑なんかじゃないんですけど・・・・・・」

むしろ迷惑をかけているとしたら私のほうです。試召戦争のときも、明久君とのデートのときもいつも助けられてばかりで・・・・・・

「琴君ね、自分が姫ちゃんやアッキーと離れ離れにならなきゃいけなくなった原因はお父さんだと思ってるんだよ」

「どういうことですか？」

「琴君のお父さん、今はグループの会長さんなんてすごいことしてるけど、数年前まではちょっと仕事が出来るだけの普通のサラリーマンだったんだって。仕事は出来るけど部下や同僚の人たちに対する態度がひどいとか色々言われてたらしいんだけど、でもその頃のお父さんはすごくかっこよかったって琴君言ってたんだよ」

「じゃあどうして・・・・・・」

「琴君が転校しなきゃならなかった理由って、お父さんの自分勝手って言ってたんだよ」

「自分・・・・・・勝手・・・・・・？」

まだいまいち話が見えません。

「琴君のお父さんは、琴君が４年生のときに北海道への転勤の話を持ちかけられてたんだよ。断ろうと思えば断れたらしいんだけど、

出世の話ってだけで家族に相談もなしに決めちゃって琴君も知らないうちに転校することになってたらしくて、琴君こっち来てからお父さんのこと、まともな呼び方したことないって言ってた」

「そんなことがあったなんて・・・・・・」

なのに、私はあんな無神経なこと言って・・・・・・

「私、真琴君のこと何も知らないのにあんな事言っちゃって・・・・・・」

「大丈夫だよ。琴君はそんなこと気にしないよ」

「でも・・・・・・！」

「ならさ、後でこっそり謝るって事にしちゃおうよ」

みどりちゃんは笑って言いました。

「琴君ならきっと許してくれるからさ」

「・・・・・・本当ですか？」

「前にもこういうことあったんじゃない？姫ちゃんの顔見てたら分かるよ」

Aクラスとの試召戦争のときも確かに自分の性だと思う必要はないって言ってくれました。

でも・・・・・・

「私は真琴君のこと何も考えてなくって、ひどい事言っちゃって・・・・・・」

「じゃあ、今度琴君に教えてもらうってことでいいじゃん」

「教えて・・・・・・もらう？」

「もう・・・・・・姫ちゃんもくよくよしないでさ、素直に仲直りすればいいじゃん！」

「・・・・・・・・・・・・・・・」
「え？なに？どしたの姫ちゃん？」
「今度は私の話、聞いてもらえますか？」

あれは私達が小学校の４年生のとき。
真琴君が転校しちゃうときのことです。

「・・・・・あれ?私の髪飾り、どこ行っちゃったんでしょう?」
机の上においてあったはずなのに、その髪飾りはあるはずとこからなくなってました。
「どうしたの?瑞希ちゃん」
「あっ、明久君、私の髪飾り知りませんか?」
「髪飾り?」
明久君も知らないとなると何かの拍子にどこかに転がって行っちゃったとかでしょうか?
「よかったら僕も探すけど?」
「はい!お願いします」
二人で一所懸命探したんですけど、結局見つからなかったんです。
「もういいですよ明久君。後は一人で探しますから」
「え?でも・・・・・・」
「いいですから。早く帰らないとお家の人が心配しますよ?」
明久君は少し悩んでから言いました。
「・・・・・じゃあ、先に帰るね。瑞希ちゃんも早く帰ったほうがいいからね」
「はい。着き合わせてしまってごめんなさい」
明久君を見送ってから、もう一度しっかり探します。
「見つかりません・・・・・・もしかして・・・・・・」

その先のことはあまり考えたくありませんでした。
自分の見当はずれであって欲しいと思いまして。でも・・・・・・・
「誰かが持って行っちゃったとかじゃないですよね・・・・・・・」
そんなことを考えてると、外から怒鳴り声が聞こえてきました。

『邪魔なんだよ!!』
『お前明日からいなくなるんだろ!?だったらんなことする必要ねえだろうが!』

外を見ると、真琴君が上級生みたいな二人組みと喧嘩していました。
喧嘩というよりは、一方的に苛めているみたいでした。

『テメエ、なんでそんなにあいつのこと気にかけるんだ!?』
『もしかして好きとかか!?生意気なんだよいちいちテメエはよぉ!!』
『・・・・・・!!』

二人組みの、ボウズのほうが真琴君のおなかに蹴りを入れて、モヒカンみたいな髪型の人がそれを見て笑っていました。
私は急いで教室を出て3人がいたところへ向かいます。
私が着いたときには二人組みはもういなくなってて、ボロボロになった真琴君だけがいました。

真琴ｓｉｄｅ

知らない上級生、小さいモヒカンと坊主頭がクラスのいじめっ子と話してから、彼女の机の上においてあった髪飾りを持っていったのを見た。
たぶん自分達じゃオレや明久には勝てないと踏んで、上級生を使ったんだろう。

「・・・・・相変わらず嫌らしいやつらだ」

あのムカツクバカ共や上級生はどうでもいいけど、あの髪飾りはあ

の子が大切にしていたものだ。
あいつらシメて奪い返さないと・・・・・・

あのときのオレには人質とかそういう発想はなかったから、あの二人組みのことをなめててんだろう。

「おい。そこの上級生」
「お前、峰嶋でいいのか？」
「そうだけど、あんた達が持ってった髪飾り、返してくれないか？」
「それが先輩に対する口の聞き方かよ。返すわけないだろ」

坊主のほう、かなりむかつく。
さっさとボコって帰ろう。

「おおっと、力ずくで奪おうってんならこの髪飾り、壊しちゃうぜ？」

そう言って、ウサギの髪飾りを取り出してオレの前にちらつかせる。

「壊して欲しくなかったら、俺らに軽く殴られろ」
「・・・・・・」
「返事ねぇな・・・・・・壊しちまってもいいのかよ？」

あいつら、多分いじめっ子どもに頼まれてやってるな。
オレが多少殴られる位ですむなら、別にかまわないけど・・・・・・

「・・・・・・やるならさっさとやれ」

「お！本当にいいのか！？」
「聞いてたとおりの奴だな・・・・・・おらよ！」

モヒカンのほうに腹を蹴られる。
軽く殴るだけとか言ってた気もするけど、こいつらにそんなこと言っても無駄だろうしな。

「ハハ！！コイツほんとに抵抗しないぜ！」
「憂さ晴らしにはちょうどいいな！！」

結局鳩尾やすねばっか狙ってきて、軽く３０回は殴られたり蹴られたりした。

「まあ、これくらいやれば十分だろうな」
「で、それどうすんだ？返すのか？」
「バカ。そんなもったいないことするかよ」

坊主頭はポケットからウサギの髪飾りを取り出して、耳を折った。
折って、そのままオレの目の前に投げ捨てた。

「・・・・・！！」
「ほらよ。返してやるよ」

結局は壊すつもりだったのか・・・・・？
じゃあオレは何のために殴られたんだ？
こいつ等の憂さ晴らしにつき合わされただけ・・・・・？

「てめえら・・・・・！！」
「お？なんだ？やるのか？」
「そんなボロボロのお前に２対１で負けるわけねえだ・・・・・・

ろ！！」

今度は小モヒカンが髪飾りを蹴飛ばす。

「テメエ、なんでそんなにあいつのこと気にかけるんだ？」

「もしかして好きとかか！？生意気なんだよいちいちテメエはよぉ！！」

こいつら・・・・・・！！

「そもそもお前みたいな化け物じみた奴、好きになる奴がいるかよ！！」

「あの吉井と姫路とか言うやつ等だって内心お前のこと気味悪がってるに決まってるだろ！」

「・・・・・・！！」

確かにあの二人が何で自分と仲良くしてくれてるのか疑問に持つときはあったけど、気にしないようにしてきた。それをこの二人は・・・・・・！！

「こんな奴と仲良くする奴の気が知れないな！！」

「全くだな！！」

コイツラ・・・・・フタリヲバカニシタナ？

「・・・・・・ぶっ殺す」

「あ？」

「なんか言ったか？」

コイツラハコロス。

「お前ら二人ともぶっ殺す！！」
「ああん！？」
「チョーシのってんじゃねえぞ！？」

こいつらなんかに・・・・・・！！

「ふごぉお！？」
「勇作！？」

こいつらなんかに、いいようにされてたまるか！！

「ぶっ飛ばしてやるから覚悟しろ！！」
「いい気になってんじゃねえぞ！！」

残ったほうが金属バットを取り出してくる。
どうせオレを殴るために用意したものだろ。

「そんなの当たるわけが・・・・・・ッ！！」

避けようと思って、避けられなかった。
足首に激痛が走る。
後で分かったことだけど、両足を捻挫してたらしい。
相手の金属バットはモロに鳩尾に入って、オレは倒れて、意識も朦朧とした。

『いくぞ・・・・・んな奴・・・・・・られっか』

なんとなく負け惜しみみたいな台詞が聞こえたけど、どっちが言った言葉か分からないくらいに意識が朦朧として、そのまま気絶した。

目が覚めたとき、彼女は近くにいた。
彼女は耳の折れてしまったウサギの髪飾りを拾って、こっちを見た。
確かに目が合った。
目が合ったのに、何も言わず、何もせずに行ってしまった。
非難めいた目でオレを睨んで・・・・・・

「瑞・・・・・奇・・・・ちゃん・・・・・・・」

何がいけなかったんだろうか。
髪飾りを壊してしまったこと?
ボロボロになったこと?
オレは瑞希ちゃんに嫌われたんだろうか?

・・・・・・やめよう。どうせ明日からはもう会うことは無いんだ。

いまさら嫌われたって、何か変わるわけじゃないだろうに。

なのに・・・・・・・

「・・・・・・・？」

なんで・・・・・・・

「なんで・・・・・・・オレ・・・・・・泣いてんの？」

人に嫌われることなんて慣れてるはずなのに・・・・・・

これから会うことも無いんだから、関係ないはずなのに・・・・・・・

「なんでだよ・・・・・・・」

謝ろう。

手紙でも電話でも何でもいいから。

謝りたい。

瑞希ｓｉｄｅ

彼が引っ越してから数日後に、壊れてしまった私の髪飾り全く同じものと一枚の手紙が送られてきました。

差出人は彼です。

髪飾りを壊してしまったこと。引越し先で同じものを見つけたから、代わりにと送ってくれたこと。そして謝罪の文が書いてありました。

私はあのときの彼が怖くて逃げたんです。

それが結果的に彼を傷つける結果に終わってしまって・・・・・・

あそこで何があったのか詳しくは分かりませんけど、彼が私のために頑張ってくれてたことは事実です。

なのに私は逃げたんです。

だから私も、謝罪と感謝の言葉を書いて、手紙を出しました。

それからは彼とは会うことも連絡をとることもありませんでした。

そして、彼が転校生として文月学園にやってくるまで、その存在す

らも私は忘れていました。

「ふーん。そんなことがあったんだ。やっぱ琴君は全部話してたわけじゃなかったんだね」

「あの、このことは秘密にしてくれませんか？特に明久君には・・・・・」

優しい明久君の事です。この話をしたら、あの時自分がもう少し残ってればとか言いそうですから。

「いいけどね・・・・・ならあたしが姫ちゃんにいろいろ話したことも秘密にしてよ。誰にも言うなって琴君に口止めされてたからさ」

「はい。いいですよ」

「じゃあ、お礼にあたしから一つ教えてあげる。あたしね、もうす

ぐ・・・・・・」

みどりちゃんから聞いたこと。それは私にとってとっても嬉しいことでした。

「本当ですか!?」
「ほんとだよ」
「じゃあ、これからよろしくお願いしますね!みどりちゃん!!」
「こっちこそよろしくね。姫ちゃん」

真琴君なら、あのときのことも笑って許してくれるんでしょうけど・・・・・・
・・・・・・違いますね。ちゃんと話してみないとわからないですよね。

真琴君は、好きな人と言うよりは・・・・・お兄ちゃんみたいな人で、

私は、真琴君の最初の友達だから。

第二十一話　蟹と朝食と暗殺成功（前書き）

ＰＶ２００００、ユニーク２５００ありがとうございました！

第二十一話　蟹と朝食と暗殺成功

バカテスト　英語

問　次の英文を和訳しなさい。

『Ｂｏｙｓ，　ｂｅ　ａｍｂｉｔｉｏｕｓ』

姫路瑞希の答え

『少年よ、大志を抱け』

教師のコメント

正解です。ウィリアム・スミス・クラークという人物の言葉ですね。
日本ではクラーク博士で知られています。

土屋康太の答え

『少年よ、エロティカルを抱け』

教師のコメント

抱くのは君だけで十分です。

吉井明久の答え

『少年よ、ａｍｂｉｔｉｏｕｓ』

教師のコメント

分からないからといってそのまま書くのはやめてください。

峰嶋真琴の答え

『我よ、親父への復讐を抱け』

教師のコメント

お父さんと何かあったんですか？

Ｆクラス（一部除く）の答え

『異端審問会よ、信念を抱け』

教師のコメント

大志を抱いてください。

真琴ｓｉｄｅ

結局母さんが明久たちにオレが親父のことを嫌ってる理由を話して一日目は終わった。
元々帰ってきたくないのだってあのクソ親父と顔を会わせなきゃならないからで、あいつさえいなければ大して問題はなかったんだ。

「・・・・・朝か」

この日は特に夢も見なかった。

「まあ、あんな夢何度も見せられたらたまったもんじゃないけどな・

・・・・・」

枕もとの携帯で時間を確認する。

「6時か・・・・・まだ皆起きてないな・・・・・・」

周りに目をやるが、まだ誰も起きてないようだった。

「・・・・・起きて朝飯でも作るか」

一度起きたらすぐには寝れない体質だし、布団の中でずっと横になってるのも暇なので起きることにした。

で、顔洗って歯磨いて台所に朝飯の支度に来るとそこで一番見たくない人物がいた。

「あ、真琴君。おはようございます」

「・・・・・姫路。何をやってる?」

「朝ごはんの用意ですけど?」

オレたちを殺すための用意だろ・・・・・・

なんとしてもやめさせなければ・・・・・・

「一応聞くが危険物は入れてないよな?」

「大丈夫です。濃硫酸しか入れてません」

手遅れだった。

「既に手遅れだし、大丈夫じゃないだろ・・・・・・」
「???」
「もういい。なんでもない・・・・・・後はオレがやるから」

姫路には悪いけどこの危険物はさっさと処理しよう。
親父の朝飯にでもすればいいかな?
あのクソ親父が悶絶して死ねばいい気晴らしになりそうだ。

「あの・・・・・・真琴君」
「なんだ?」
「その・・・・・・昨日はごめんなさい!」

そう言って姫路は頭を下げる。

「別に良いって。こっちこそ悪かったな。皆の前で見苦しいもん見せちまって」

オレが場をわきまえずにあのクソ親父と口論したのはどうしようもない事実だ。
ついでに言えばあのクソ親父の言葉の中に皆を侮辱する言葉があったのも事実だ。

「親父の発言の中に皆を馬鹿にしたようなのがあったのも謝る。すまなかった」

あの親父は自分から謝らない。
それどころか失敗をもみ消してなかったことにしようとする。

これ以上オレの個人的な関係で明久や姫路たちを傷つくたくない。

「私のほうが悪かったんです・・・・・・。真琴君のこと何も知らなかったのにあんなこと言っちゃって・・・・・・」

「別に姫路が間違ってるわけじゃない。普通ならお前のほうが正論だからな。オレたちが異常なだけだ」

「またそうやって庇うんですね・・・・・・」

「？　どういう意味だ？」

また？

そんなに頻繁に姫路を庇うことになる展開なんてあったかな？

「何でですか？真琴君はいつも私のことを守ろうとしますけど、どうして私ばっかり守るんですか？」

「何でって言われても・・・・・・」

指摘されてみればなんとなく思い当たる節がないわけではない。

けど、今までそれが当たり前みたいなものだったし、理由を求められても・・・・・・

「ダメなのか・・・・・・？」

「え・・・・・・？」

「姫路はオレにとって最初にできた友達だ。その友達を守りたいと思うことに理由なんかいるのか？」

これは理屈とかの問題じゃないってことくらいはオレにだってわかる。

あのムカツク奴に『対人経験のなさが弱点だ』とか言われたけど、

それが一体何の弱点なんだよ・・・・・・

そんなの試召戦争じゃあってもなくても変わらないだろうが・・・・

・・

「・・・・・でも私は守られてばかりは嫌です。もっと皆と対等でいたいんです」

「？　友達なんだから対等なんじゃないのか？」

「友達だから・・・・・・対等・・・・・・？」

オレの感覚からすれば友達なのに上下関係があるってのがおかしいと思う。

そういうのは主従関係って言うんじゃないのか？

「友達なんだから、お互いの足りないところをフォローしあったり、悩みを言い合ったりするのは普通なんじゃないのか？」

「でも、私は皆に助けられてばかりで・・・・・・！」

「だったらお前も皆を助ければいいじゃないか」

「！」

皆に助けられている？

むしろ姫路が助けているんじゃないのか？

「お前の点数はFクラスの中じゃ必要不可決だし、Fクラスの中にはお前がいるからモチベーションが上がってる奴だっていると思うぞ」

「・・・・・・でも」

「そう自分を卑下するなって。皆お前がいるから頑張ってるようなもんなんだぞ？だったらそれはお前が皆を助けてるってことだろうが」

はっきり言ってオレは別にFクラスの設備のままでよかったし、パソコンやシステムデスクやリクライニングシートに興味はない（最

悪一日で壊しかねない）。
けど、体の弱い姫路にとって今の環境は最悪だし、多少クラスの設備がよくなることはいいことだ。
結局のところ、オレ自身も姫路のためにやってるところがある訳だ。

「ホラ、この話は終わりだ。そろそろ皆が起き出すからな。朝飯の準備、手伝ってくれ」
「・・・・・分かりました。じゃあ私はお鍋を・・・・・・」
「皿を持っていってくれ」
「・・・・・分かりました」

あまり落ち込まないでくれ。
お前の料理（殺戮兵器）を食べるのは親父だけで十分だから・・・・・・

明久ｓｉｄｅ

「朝・・・・・・眠い・・・・・・」

目が覚めたので（実際にはほとんど覚めてないんだけど）起きる。
僕のほかには雄二やムッツリーニとか秀吉とか真琴も一緒に寝てて・・・・・・

「真琴か・・・・・・」

あれ？そういえば今日ってたしか・・・・・・

『起きろー！！朝飯だぞ！！』

真琴の声が響いてくる。

「んうぇ？朝飯？」
「・・・・・・・・・・空腹」
「何じゃ？もう朝かの？」

『さっさと顔洗って起きて来い！！１分以内に来なければ朝飯は抜きだ！！』

「行くぞお前ら！！朝飯抜かれたらたまったもんじゃねえ！！」
「「「おおーー！！！」」」
Fクラスの団結力は意外なところでも発揮された。

「ま、真琴・・・・・・1分・・・・・・稲井に来た・・・・・・・・よ・・・」
急いで顔洗って着替えてきた。
我ながらよく1分以内に来れたな。

「ああ。あれは嘘だ」
「「コイツ殺す！！」」
僕と雄二の声が重なる。

「やれるもんならやってみろ。ただし先に朝飯食べるぞ」
「む・・・・・。まあそうだね」
「朝飯の後で殺すからな・・・・・・」
雄二には話してないけど、別に殺す必要はないと思う。
なんだか本人も自覚してないみたいだけど今日は・・・・・・

「あ、明久君。おはようございます」
「あ、瑞希。おはよ・・・・・・」
現れたのはエプロン姿の瑞希。

最悪の光景が浮かぶ。

「（真琴！瑞希に料理はさせてないよね！？）」
「（おい！またあんなもの食わされたらマジに死ぬだろ！！）」
「（わしもあれは勘弁願いたいのじゃ！！）」
「（・・・・・・・・・同じく！！）」
「（安心しろ！そんなことするわけないだろ！！）」
「（本当だな！！）」
「（当然だ！今日の朝飯は全部オレの手作りだ！！）」

なら安心だね。
真琴の料理なら前に食べたから。

「へー、雑炊か・・・・・・。またすごいな。これは蟹か・・・・・・？」
「ああ。昨日の奴が残ってたからな。蟹雑炊（得意料理）だ」

蟹・・・・・・！

「朝からこんなスゴイの食べられるなんて・・・・・・・！！真琴、君は最高の友達だよ！！」
「お前の友達の基準を疑っていいか・・・・・・・？」

そうと分かったら早く食べたい！！

「おはよー・・・・・・ってまたすごいもの作ったわね・・・・・・・」
「・・・・・・これは蟹？」
「あー・・・・・・琴君蟹雑炊作るの得意だからね」

女子グループも起きてきたか！！
ならばさっさと食べようじゃないか！！

「・・・・・・！！親父！」
「・・・・・・なんだ」
「・・・・・・別に」
「・・・・・・なら呼ぶな」

「「・・・・・・・・・・・・！！（ガンのくれあい）」」

本当に仲悪いんだな。この二人・・・・・・
まあしょうがないよね。

「あらあら二人とも、朝から元気ですね（ポチ）」

っと真琴のお母さんだ。
ていうか今のポチってな「「ゴフン！！」」何事！？

「母さん！！いきなりたらいを落とすのはやめろって言ってるだろ！？ていうかいつの間に仕掛けたんだ！？」

みると真琴と真琴のお父さんが頭を抑えていた。
しかも近くにはド〇フで見るようなたらいが二つ・・・・・・

「まったくあんた達は・・・・・・お客さんもいるのに朝くらい我慢できないのかねぇ？」
「「出来ない！！」」
「（ポチ）」

またポチって言った。

「「ブホッ!!」」

今度は足元からボクシングのグローブっぽい奴が・・・・・・

「もう一度言うわよ?我慢できないのかしら?」

「「我慢します・・・・・・」」

なんだかんだ言ってこの二人仲いいんじゃ・・・・・・?

「さあ、バカ親子は黙らせましたから早く食べましょう」

「そ、そうですね・・・・・・」

この人・・・・・・強い!!

「「「「いただきまーす!!」」」」

「これおいしい!!」

「本当だ!」

「おいしいのじゃ!!」

確かにこの蟹雑炊はすごくおいしい。

食べた感じからして瑞希の料理でない点も含めて。

「母さん。これは何だ?」

不意に真琴のお父さんが声を出した。

指差していたのは僕達には出されていないドレッシングらしきもの。

「さあ?私は知りませんが・・・・・・」

「？　まあいい」

真琴のお父さんがドレッシングをサラダにかけて食べる。
なんで僕達には出されてないんだろう？

「・・・・・なるほど。甘すぎず辛すぎず、すっぱすぎる上に口の中が焼けるように熱くてゴバア！！」

「「「！！？？」」」

「あらあら。お父さんどうしたのかしら？」

この状況で平然としてる貴女のほうがすごいかも・・・・・・！
一体何が・・・・・・！？

「・・・・・・ククク」

真琴が横で笑ってる。まさか・・・・・・・

「真琴。アレは真琴が出したの？」
「ああ。オレだ」
「あれって・・・・・・・」
「さっき姫路が作ってたドレッシングだな」
「やっぱり・・・・・・」

この二人、仲が悪かった。
結局、真琴のお父さんはそれから数十分目を覚まさなかった。

暗殺成功・・・・・・・！！

第二十二話　お出かけと出費と誕生日（前書き）

「食費が・・・・・・」ｂｙ真琴

第二十二話　お出かけと出費と誕生日

バカテスト　国語

問　以下のひらがなを漢字に直しなさい

『えぞ』

姫路瑞希の答え

『蝦夷』

教師のコメント

正解です。特にコメントはありません。

土屋康太の答え

『獲路』

教師のコメント

それは『エロ』です。

吉井明久の答え

『虫暇　夷』

教師のコメント

非常に惜しいですね。
蝦夷の『蝦』は日が入らないので注意してください。
そしてこれを無理やり考えた作者はどういう心境だったんでしょうか・・・・・・

峰嶋真琴の答え

『どうしてこんなに北海道関連の問題が出るんだ！？』

教師のコメント

物語の舞台が北海道だからです。

真琴ｓｉｄｅ

朝食と暗殺作戦（笑）も終わって、オレと姫路は明久に呼び出された。

「二人で出かけて欲しい？」

「今日一日、二人で外出して欲しいんだ。お願い！」

「別にそれはかまわないけど・・・・・・なんでオレと姫路なんだ？お前が行けばいいじゃないか」

明久と姫路は（多分）付き合ってるんだし。

「お願い！いろいろと準備・・・・・・じゃなくて都合が・・・・・・！」

「オレの家で友達の都合に振り回される日が来るとは思わなかったな」

「明久君。本当のことを教えてもらえますか？」

別に外出自体はかまわないし、コイツが何を企んでても関係ないけど気になるものは気になる。

オレと姫路を追い出そうとしてるあたり、オレたちに見られるとマズイものとかか？

「えっと・・・・・・それは・・・・・・」
「それは？」

本当の事言うわけないだろ。
多分底の浅い嘘で誤魔化してくるに決まって・・・・・・

「それは、内緒」
「よし、右か左好きなほうを選べ。腕を折ってやるから」
「ごめんなさい！！心の底からごめんなさい！！」

まさか嘘すらついてこないとは・・・・・・

「明久君。私にも言えない事なんですか？」
「ごめん。後でちゃんと説明するから・・・・・・だからお願い！」

明久は土下座までしてくる
ここまで懇願されると断りづらいし、あとで説明するならオレはこれ以上追求するつもりもないし・・・・・・

「姫路がかまわないならオレはいいけどな」
「私も大丈夫ですよ。明久君がそういうなら、私もかまわないですから」
「ほんと！？二人ともありがとう！！」
「気にするな。その代わり・・・・・・」
「その代わり？」

手をポキポキと鳴らしながら、

「下らない理由だったらマジに地獄を見せるからな？」
脅しておいた。

「真琴。これ」
「なんだよ。母さん」
母さんは五千円札をオレに渡してくる。

「アンタには小遣いを上げたことなんてなかったからね。今日くらいは母親らしいことさせておくれ」
「別に金に困ってるわけじゃ・・・・・・」
「いいから。瑞希ちゃんとでかけるんでしょ。だったら持ってきなさい」

これでもバイトである程度は稼いでるし、貯金だってしっかり貯めてるから金に困るなんてことはない。そのことは母さんだって分かってるはずだ。

「いいから、受け取りなさいって」
「・・・・・じゃあ、もらっておくよ。ありがとう」
「いいんだよ。それより楽しんでらっしゃい」

「そうするよ。あと明久たちが暴走したら頼むぜ？」
「大丈夫だよ。この家には対夫＆長男装置がありとあらゆるところに配置されてるから」

この人は自分の息子を何だと思ってるんだ。
ついでに言うが親父はどうなろうと知ったこっちゃない。

『真琴君ー出かけますよー？』
「今行くからちょっと待て！」

ていうかなんでアイツはこんなに上機嫌なんだ？
明久が相手じゃないのにそんなにノリノリでいいのか？

「じゃあ行ってらっしゃい」
「ああ。行ってくる」

でも、外出してこいって言われてもどこに行けばいいんだ？

「よかったのか？明久」
「？　何が？」
「お前の大好きな姫路を真琴と二人っきりにして」
「・・・・・多分大丈夫。真琴だからそう思えるんだけど」
「根拠は？」
「ない。でも、真琴だったら、瑞希のこと安心して任せられる気がしたから」
「なるほどな・・・・・だったら俺達も準備に取り掛かるぞ」
「分かってるよ。雄二」

「瑞希を任せたよ。真琴」

結局どこに行くかも何も考えずに出て来てしまったわけで・・・・・・

「どこに行きましょうか？」

「どこって言われてもな・・・・・こっちでまともに外出する時っていったら食材の買い物位だったし・・・・・・」

そういえばこのあたりで遊べるところってほとんど知らないぞ。

そんなんでどうしろって言うんだよ？

「折角ここまで来て映画ってのもアレだしな・・・・・・」

「なら、北海道で有名なものを食べましょう！」

「有名なもの・・・・・・？」

北海道で有名どころっつたら・・・・・・

1．魚介類

ダメだな。昨日と今朝食べたばかりだ。なら・・・・・・

2．ラーメン

女子と出かけてるのにラーメンってのもな・・・・・・

「ヤバイ・・・・・・まともな選択肢が出てこない・・・・・・・」

あとは・・・・・・

3．ソフトクリーム（十勝）

「そうだな。姫路、ソフトクリームなんかどうだ?」

「ソフトクリームですか・・・・・・?」

「折角だから本場（十勝）で食べてみたくないか?」

言っておくが別にここは十勝じゃないからな?

ていうかここってどこって設定なんだよ?

「いいですね、行きましょう!真琴君のおごりで!」

「やっぱそうなるんだな・・・・・・」

母さんに小遣いもらってきて正解だったかも・・・・・・

【ソフトクリーム　３００円×２】

【現在の出費　６００円】

やっぱおごらされる羽目になった。当然予想はしていたが。
まあ自分も食べたんだし、せいぜい３００円だと思って我慢しよう。

「真琴君！このデパート入ってみませんか？」
「別にいいけど・・・・・・」

なぜにデパート？
まさか服を買うとかじゃないよな・・・・・・
ソフトクリームやラーメンならともかく、そんなもん買わされたら
流石に財布の中身が・・・・・・

姫路がエレベーターの２階のボタンを押す。

2階は・・・・・・服とかアクセサリーの売り場。

…

……

……

……

これって死刑宣告か何か？

「この服可愛いと思いませんか？」

「うん。似合ってるんじゃないか？」

姫路はワンピースを持ってはしゃいでいる。確かに可愛いんだけど・・・・・・

もうこの際気にするのは似合ってるかと可愛いかとかじゃなくて値段だ！！

さっきの姫路のペースで行けば間違いなく金の請求はオレのところに来る！！

いっそのこと親父につけとくって手も無くはないがそれやると事後処理が面倒だからな・・・・・・

「これ、買ってもらえますか？」

言うと思った。

まあ、金額しだいでは検討しないことも無いんだが、いくらするんだ？

と、オレは値札を確認する。

【２０００円】

…

……

……

……

これって死刑宣告か何か？

は！？なんか既視感（デジャヴ）！？

ってそんなことはどうでもいい！！

「姫路。０が一個多いぞ」
「そうですか？女の子の服はこれ位するんですよ？」

あの金額だと今後のオレの生活に関わってくる！
只でさえ欲しい物だってあるのに今週のオレの生活が明久レベルになったら最悪だ！
悪いが今俺が身に着けてるもの全てあわせても１万いくかいかないかくらいだからな！？
しかも俺の持ってる服ほとんどユニ○ロで買ったやつだからな！？

「・・・・・それは高校生が買うものじゃないと思うぞ」
「そうですか・・・・・じゃあ別のにしますね」

そもそもオレは買うなんて一言も言ってない。
意地でもオレに買わせるつもりなのかコイツは。

「真琴君！向こうに３５００円均一で２着で２割引ってコーナーが！！」
「そう・・・・・それはすごいね・・・・・」

姫路・・・・・夢を持って目を輝かせてるとこ悪いんだが、３５００円を２着買って２割引すると１着買うよりも高いんだぞ・・・・・？
コイツが学年次席レベルの頭脳を持ってるって事が信じられなくなってきた・・・・・

「じゃあ選んできますね！」
「だから買うなんて一言も・・・・・・ハァ」

しかもいつの間にか１着から２着に増えてるし・・・・・

２万のワンピース買わされるよりはマシなんだけどな・・・・・・

「なんだろう・・・・・母さんがこうなること見越してて小遣いくれたような気がしてきた・・・・・・」

というより本当に見越してたんじゃないか？

あの化け物じみた母親なら十分ありえる。

スーパーマンすら凌駕するときもある人だからな、あの人は。

「・・・・・そんな訳無いよな」

もしこれが事実だったら制裁を加えたほうがいいかもしれない。

「息子にこんだけの出費をさせるとは・・・・・あの母親、あなどれん」

もしわざとやってるんなら相当陰湿だなオイ・・・・・・

まさか峰嶋家に親父とじい以外にオレの敵がいるとは・・・・・・

まさに思わぬ伏兵だな。

『いいじゃん。俺らと一緒に行こうぜ？』

『や、やめてください！』

「ん・・・・・？なんか今姫路の声が聞こえたような・・・・・・」

見ると１８０ｃｍ以上ある４人の男が姫路を取り囲んでいた。

「俗に言うチンピラって奴か？また面倒なことになりそうだな・・・・・」

出費のことで頭が痛いってのにあいつらはオレの悩みの種を増やしてくれる訳だ。なんて親切極まりない連中だろう。

「いいじゃん。服くらい俺らが買ってやるから」
「んなこと言って、お前金欠じゃねえか」
「そういやそうだな！」

うるさいな。とりあえず形だけでも話し合いから入るとするか（面倒だからボコりたいけど）。

「いいからこいよ！」
「は、はなして！」
「おい、あんたら」
「あ？んだテメー！！」

さっきから相手が嫌がってんのにしつこい連中だな。
まあ、形からでも丁寧に入ったほうが説得もしやすいだろうし・・・・・

「そいつも嫌がってるだろ。それからその薄汚い声で騒がれると店に迷惑がかかるから黙ってくれないか？」
「んだよ？怪我したくなかったらすっこんでろ！」

無理だった。

「生憎そいつはオレの連れだからな。はいそうですかとすっこむ訳にもいかねぇんだよ」
「真琴君・・・・・・」
「んだよ。コイツの男か・・・・・・」

いや、そのポジションは多分別の奴が抑えてると思うんだけど・・・・
まあ今はその認識でいいや。どうせこいつらには関係のない話だから。

「別にこんな奴ソッコーでボコればよくねえ？」
「確かにな！こんなちっちゃくて細い奴相手に負けるわけねえしな！」

む・・・・・・
確かに１８０もあるやつらから見れば１７０弱のオレは小さく見えるのか・・・・・・・
細いのも事実だから否定のしようが無いが・・・・・・

「じゃあ、ここだと周りに迷惑がかかるのでトイレとか適当なところでやりましょう（ニコッ）」
「おまえ、俺ら相手に勝てると思ってんの？」
「馬鹿だろコイツ」

一応総合科目で教師並みの点数取る自信あるんだけど。

「真琴君・・・・・・」
「心配するなって。３分で戻ってくるから、服でも選んでてくれ」

で、移動した先で・・・・・・・

「ちょ、まて・・・・・・ふがぁ！！」
「何だコイツ！？ムチャクチャゴブ！！」
「腕がみしみしってエエエエ！！」

「・・・・・・・（顔陥没中）」

「なんだ。みどりより弱いじゃないか」

アイツより強い奴もそうそういるもんじゃない気もするけど。

返り血が手についてしまったので綺麗に洗って戻る。

「おーす。お待たせ」

「あ・・・・・その、大丈夫でしたか？」

「問題ナシ。ＦＦＦ団の方が手ごたえあった」

実際問題であいつらよりもＦＦＦ団の方が強いんじゃないか？

「その、助けてもらってありがとうございました！！」

「いいって。別に大したことじゃないし」

オレのストレス解消にもなったし。

「で、で、」

「？？？」

「この２着に決めました！」

感謝してるならそこは自重して欲しかった・・・・・・

【女物の服　３５００円×２　２０％引きで５６００円】

【現在の出費　６２００円】

母さんの五千円札があって助かった・・・・・・

夕方になって、そのデパートの屋上でジュースを買って飲んでた。
正直早く帰らないと次は何を買わされるか怖かった。

【コーヒー＆ジュース　二本で３００円】

【現在の出費　６５００円】

「真琴君、今日はありがとうございました」
「いいって。大したことじゃないからさ」

今日のオレって姫路に服を買わされてチンピラをボコった以外に何かしたっけ？

「気にするな。ちょっと早い誕生日プレゼントだと思ってくれ」
「え・・・・？私の誕生日、覚えててくれたんですか？」
「まあな。忘れられないからさ」

姫路の誕生日は5月5日で、今日は5月2日。
何をプレゼントしたらいいか迷ってたところだったけど、本人と一緒（？）に選べたんだからラッキーだったかな。

「じゃ、じゃあ私もこれ・・・・・・」

もごもごしながら姫路は小さな箱を差し出してくる。

「？　オレにか？」

なんでオレになんだ？明久とかならまだ分かるけど・・・・・・

「真琴君！誕生日おめでとうございます！」
「あ・・・・・・」

言われて気づく。
そういえば今日ってオレの誕生日だったか！

「え？もしかして忘れてたんですか？」

「・・・・・忘れてた・・・・・・というよりは気づいて無かった」

恐らく全世界を探しても自分の誕生日を忘れる奴はそういないだろう。
普通は誰だって楽しみなものだもんな。

「これ、あけてもいいか？」
「はい、どうぞ」

姫路からもらった小さな箱をあけてみる。
そこに入っていたのは・・・・・・

「腕時計？」
「はい。どうですか？」

結構カッコいい、それも前からなんとなく目をつけてた奴だ。

「うん、気に入ったよ。大切にする」
「そうですか、よかったです。真琴君、前から欲しそうにしてましたから」
「？　オレそんなこと言ったか？」

人に話したつもりは無いけど・・・・・・

「言ってませんよ。でも、腕時計のカタログ見て欲しそうにしてましたから」
「あ・・・・・・」

そういえば学校でも腕時計のカタログ見てたんだっけ。

それでか・・・・・・

「ははっ」

「？　どうしたんですか？」

「いや、あの家に住んでる人間以外からプレゼントもらうなんていつ以来だろうなって」

こっち来てからできた友達はみどりだけだし、同年代の人からもらうプレゼントなんて数えるほどしかない。

「この腕時計、大切にさせてもらうよ」

「私も買ってもらった服、大切にしますね」

なんか一方的に買わされてるだけだと思ってたけど、これがもらえただけでそんなの気にならなくなったな。

ＰＩＰＩＰＩ

「？　オレの携帯か？」

「誰からですか？」

「・・・・・明久だ。そろそろ帰ってこいとかだったらマジでキレるぞ」

アイツから追い出しといてそろそろ帰って来いとか図々し過ぎだろ。

「もしもし？」

『もしもし真琴？こっちの準備終わったから、早く帰ってきてね』

予想通りだった。

「分かった。今すぐ帰る。詳しく話を聞かせてモラウカラナ？」

『え！？何！？怖！どうしたの真琴！？ねえ！？』

ＰＩ

「なにが目的でこんなことしたんだアイツは・・・・・・」

「明久君はなんて言ってたんですか？」

「“準備が出来たから早く帰って来い”ってさ。何がしたいんだか・・・・・・」

「いいじゃないですか。早く戻りましょう」

「だな。じゃあ戻るとしますか」

もらった腕時計をつけて、オレたちは明久が何か仕掛けた家に戻った。

「ただいまー・・・・・ってあれ？」
「誰もいないんですか？」

電気もついてないし、声も何もしない。

「あ、二人ともお帰りー」
「みどりちゃん。ただいま戻りました」
「ただいま。で、この静けさはなんだ？」
「ああ、これね。教えて欲しかったらついてきて」
「「？？？」」

なんだ？みどりもグルなのか？

「面白そうですし、早く行きましょう」
「え？・・・ああ、そうだな」

一体何なんだ？よく分からないままみどりに案内されたのは昨日夕飯を食べた大広間。

「ホラ、早く開けて？」

「ああ、分かったよ」

よく分からないまま、言われたとおりにする。

パンパパン！！

「！？」

『『『『二人とも、誕生日おめでとー！！』』』』

「え？なに？どゆこと？」

「琴君、今日誕生日でしょ？」

「いや、そうだけど・・・・・・」

「アッキーが盛大に祝いたいって言うから皆で準備したんだよ！」

なるほど・・・・・これがオレたちを追い出そうとした理由だったのか。

全部極秘で進めて、最後にオレを驚かすために。

あれ？でもだったら・・・・・・

「姫路はこのこと知ってたのか？」

「ぜ、全然知りませんでした！」

じゃあ何で姫路はオレと一緒だったんだ？

「ごめんね瑞希。本当は瑞希の誕生日会はちゃんと別でやりたかったんだけど・・・・・・」

「明久君・・・・・・」

「なるほどな。5日じゃオレ達は帰ったあとで、ここまで盛大なパーティーとなるとそれこそこの家でもない限りできないから、オレと一緒になったってことか・・・・・・」
「ちゃんと別々にやれたらよかったんだけど・・・・・・」
「いいんですよ。明久君」
「そうだぞ明久。やってくれるだけでも有難いんだからな。それに折角のパーティーでそんな暗い顔してたらつまんないだろ」
折角のパーティーだ！楽しまないとな！
「いろいろ料理もあるんだ！今日は眠らずに行くぞー！！」（雄二）
『『『『イェーー！！』』』』
「それにしても、まさかパーティーやるためにオレ達に外出させてたなんて思わなかったぞ」
「ごめん。びっくりさせたかったから」
「十分にびっくりしたよ。それに、こうやって大勢の友達に祝ってもらうなんて初めてだからな」
「真琴・・・・・・」
「今夜は思いっきりはしゃごうぜ！明久！」
「そうだね！」
プシュッっと勢いよく缶を開ける。
グビッ！
「「って苦ッッ！！？」」

めちゃくちゃ苦かった。

「何これ!?何で苦いの!?」
「これ本当にジュースか!?」

びっくりしてラベルを見る。

『フル～ツサワ～　ピーチ』

「って酒じゃねえか!!誰だ飲み物買いに行った奴は!?」
「オレだぜ!!ガハハハハ!!」
「やっぱあんたか!!未成年のパーティーに酒を持ち込むな!!」
「オレは成人だ!!」
「このパーティーの主役は高校生って分かってんのか!?」

流石に酒と分かった以上は何か別の飲み物を用意しないと・・・・・・

「しゃあない。コンビニまでひとっ走りしてくるか・・・・・・」
「僕も付き合うよ。主役だけ行かせるのってよくないよね」
「別にいいんだけどな」
「そんな事いわずに・・・・・・ん?瑞希、どうかしたの?顔赤いよ?」

姫路が明久にじりじりと詰め寄る。
確かになんとなく顔が赤い気がするが・・・・・・まさかコイツ・・・・・・

「むぎゅ～～～～」

「え!?なに!?どしたの!?」

姫路が明久に思いっきり抱きつく。やっぱりコイツ・・・・・・

「明久君はあったかくて気持ち良いです～」

「え?なにこれ?どうなってんの!?」

「明久。多分今の姫路は・・・・・・「み、瑞希!アンタ吉井にくっつきすぎよ!」・・・・・・コイツもなのか?」

島田も顔が赤い。

なんとなくいやな予感がして雄二のほうを見ると・・・・・・

「・・・・・・姫路の真似」

「ぐあああ!!落ち着け翔子!姫路は関節を極めたりはしてないだろ!!」

「・・・・・・霧島もか。いや、あれはいつもどおりなのか?」

「真琴!!なにこれ!?どうなってんの!!?」

「明久。多分姫路と島田は酒に酔ってる。ついでに言うと霧島も・・・・・・(多分)」

「え?」

「全ては源兄が悪いんだが・・・・・・ここまで酔う奴が続出するとは・・・・・・」

ここまで酒に弱い奴がよくこんなに集まったな。

正直関心すらしそうになる。

「まあ雄二と明久は別として、大して困らないだろうし・・・・・・問題は・・・・・・」

「琴君～～～!!!」

「コイツだ」
「えい！」

みどりまで酔ってるのか？
てことは女子は全滅か・・・・・・

「琴君、今日は一緒にねよ～」
「何言ってんだ！男女別に決まってんだろ！それからムッツリーニ！そのカッターはしまえ！」
「・・・・・・・・・・・・殺したいほどに妬ましい」
「コイツが酔ってわけの分からんことを口走ってるだけだ！」
「姫ちゃんも、アッキーと寝たいよね～」
「私は明久君と寝るんです～」
「％’☆＃＄★▲＞―￥！？」
「明久！お前まで酔ってないよな！？」

とにかくこいつらの酔いを醒まさないと・・・・・・！

「明久！水飲ませろ！酔いを醒まさせるんだ！」
「水ね、了解！！」

そう言って明久は手元の水を自分で飲んでしまった。

「やっぱテメエ酔ってるだろォォォォ！！」

次の日女子全員が二日酔いになっていた。

第二十三話　闘争と夕食と鬼ごっこ（前書き）

ストーリー展開に悩む・・・・・・

第二十三話　闘争と夕食と鬼ごっこ

バカテスト　地理

問　以下の問に答えなさい。

『日本で最も大きい島を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『本州』

教師のコメント

正解です。北海道と答える人多いですが本州も立派な島のひとつなので、この場合の正解は本州になります。

峰嶋真琴の答え

『本州（意地でも北海道なんて書かないからな！）』

教師のコメント

むしろ書かないでください。

吉井明久の答え

『沖縄』

教師のコメント

せめて北海道と書いて欲しかったです。

明久ｓｉｄｅ

北海道旅行3日目の朝。
明日には帰ることになるから、実質今日が最終日みたいなものなんだよね。

「あれ・・・・・朝か・・・・・・」

目が覚めて、重い瞼を開けてみる。
そこにあるのは・・・・・・

「・・・・・瑞希？」

姫路瑞希さんの顔。なぜ？

「落ち着いて思い出してみよう……」

確か昨日の夜は、皆がジュースと勘違いしてお酒を飲んじゃって、名川さんが真琴と一緒に寝るとか言い出して、そしたら瑞希も僕と一緒に寝るとか言い出して・・・・・・

「それでこうなってるの・・・・・・？」

そこから先のことは覚えてないけど、多分そのまま寝ちゃったんだろう。

「さて、これからどうしよう・・・・・・」

1．瑞希を襲う

2．瑞希を襲う

3．瑞希を襲う

・・・・・うーん。ろくな選択肢が無いな。
ていうか１２３全部同じな気がする。

「どうすればいいんだ？」

とりあえず起きあがってこの事態を何とか・・・・・・って思った
矢先に眠ってる瑞希に抱きつかれる。
これじゃ起きられないじゃないか！！

「・・・・・・・・・・むにゅ」
「なんか小動物みたいで可愛い・・・・・・」

うーん。これはこれでアリかも・・・・・・

「このままでいられたらいいかも・・・・・・」

でも神様はそう優しくなかった。

『『ギイイヤアアアアア！！！』』
「！？　なんですか！？って明久君！？」
「わわ！！えっとこれは・・・・・どうなってんの？」

雄二と真琴の悲鳴で瑞希は起きてしまった。

「・・・・・誰か昨日の夜のこと覚えてる人、いる？」

「「「・・・・・・」」」

誰も首を縦に振らない。

誰も覚えてないのである。

「わしは明久が姫路と島田にくっつかれてるとこまでは覚えておるぞ」

「秀吉。多分皆同じようなもんなんだよ・・・・・・」

「・・・・・記憶障害？」

「ただ酔っ払ってただけだろ・・・・・・」

雄二と真琴はある程度覚えてはいたものの、なぜ女子と男子が一緒に寝てたのかまでは覚えてなかった。

「大体二人とも度胸がなさすぎるよ。僕は瑞希の顔が目の前にあっても声なんか上げなかったもんね」

エッヘン。

「・・・・・明久。俺たちがその程度で悲鳴をあげると思うのか？」

「・・・・・また夢に出てきそうだった」

「？　何があったの？」

なにかあるとすれば二人のほうから仕掛けてそうだけど。

「翔子の奴、抱きついてきたと思ったら関節極めやがって・・・・・・！！」

「みどりが寝返りうったら裏拳が飛んできたんだよ・・・・・・」

「それは大変だったね・・・・・・」

なるほど。この二人だったらそれで悲鳴を上げてもおかしくない。

「おはようございます・・・・・・。うぅ・・・」

「どうしたの？瑞希」

「朝からちょっと頭が痛くて・・・・・・」

どう考えても二日酔いだろう。

ていうかたったアレだけで二日酔いになるっておかしくない？

「あたしも頭痛いんだよね・・・・・・」

「・・・・・痛い」

「自業自得だろうが」

「酒なんか飲むなよ・・・・・・」

いや、お酒買ってきたのって源太さんだよね?

「で、主犯はどこにいるんだ?」

「源兄なら部屋で寝てるよ。呑むと次の日は必ずああなるんだ」

主犯はいまだに寝てるのか。

とりあえずほっとくのはいいとして・・・・・・

「瑞希、大丈夫?」

「はい、多分大丈夫だと思いますから・・・・・・」

全然大丈夫そうに見えない。

「おはよう。吉井、瑞希」

「・・・・・・・・・・おはよう」

「あ、島田さんにムッツリーニ。おはよう。島田さんは頭痛くないの?」

「? 何のことよ?」

島田さんは二日酔いじゃないんだ。

それはそれでいいことなんだけど・・・・・・

「そんなに痛いんなら頭痛薬でも飲んでくれば?」

「そうですね。そうします・・・・・・」

真琴の提案に二日酔い軍団は出て行った。

「まさかコップ一杯で二日酔いになる人っていたんだね・・・・・・」

「どんだけ酒に弱いんだ？」

瑞希たちも戻ってきて、朝食も済ませてから今日の予定について話し合う。

「今日はどうする？」
「オレは正直ゆっくりしてたいってのが本音だけどな」
「・・・・・・・・・・・・雄二、デート」
「しないからな！？」
「私もゆっくりしたいです。まだ少し頭も痛いですし・・・・・・」
「あたしも～」
「・・・・・・風呂に入るとリラックスする」

「ムッツリーニ。おぬしは覗くために言っておるのじゃろう？」
「・・・・・・・・・！！（ブンブン）」

結局のところみんな出かける気力が無いってことだ。

「風呂なら家にもあるけど？」
「・・・・・・・・・！！（コクコク）」
「そうですね・・・・・・お風呂でさっぱりしたら少しは良くなるかもしれないですもんね」
「ならひとっ風呂浴びてくるか！」
「一つしかないから女子先にどーぞ」

「（女子風呂っつったら覗くしかないよね！ムッツリーニ！！）」
「（・・・・・・・・・コクコク）」
「そんなんだからお前は観察処分者になるんじゃないのか？」

真琴ｓｉｄｅ

「どうした明久？」
「ムッツリーニ、何かあったのか？」
「風呂場に言ったら、鉄人の補習よりきついトラップが・・・・・・！」
「・・・・・・・・・・・・脅威！」
「母さんだな。相変わらずムチャクチャする人だな」

覗きに行くこの二人が悪いんだけど。

「おまたせー！」
「おう、お帰り」
「男子は入ってこないの？」
「僕達は別に頭が痛いわけじゃないからね」
「・・・・・・・・・・・・・・・（コクコク）」

お前らは覗き目的で行ってきたばかりだろうが。

「明久君、土屋君も覗きなんてダメですよ！！」
「ハハ・・・・・・やっぱばれてた？」
「あんた達の悲鳴、すっごく響いてたのよ！」
「・・・・・・雄二、見たいなら言ってくれればいいのに」

「オレは覗きなんてしてねえ。やったのはバカ二人だ」
「実行犯は明久とムッツリーニだけじゃからな」

おお、雄二と秀吉が二人を売ってるぞ。

「まあ、それはいいんだけど、これからどうする？」
「どうしようか、雄二」
「・・・・・いい考えがある」
「「いい考え？」」

コイツの言ういい考えはたいてい明久が犠牲になる。

「軽いゲームをしよう」
「「ゲーム？」」
「ああ。これだけでかい家があるんだ。鬼ごっこくらい余裕だろ」
「確かに余裕で出来るけど・・・・・ただの鬼ごっこをするのか？」
「雄二。それだと瑞希や秀吉に不利だよ！」
「吉井、今ウチが入ってなかったのはなんで？」
「島田さんみたいに男勝りで強靭な肉体を持ってるなら鬼ごっこくらい軽くて僕の両足の関節がッッッ！！」

明久が余計なこと言ったから島田に折檻される羽目になる。

「当然俺がそんなことを見逃すわけ無いだろう。二人一組の鬼ごっこだ」
「二人一組？」
「正確には全員が鬼で全員が逃げる奴だけどな。遭遇したらどんな方法でもいいからルールを決めて勝負するんだ。負けたほうは買ったほうにこのコインを渡す」

そう言って雄二が取り出したのはパチンコ屋のコイン。

「でも待てよ。人数揃わなくないか？オレ、雄二、明久、姫路、みどり、秀吉、島田、ムッツリーニ、霧島だろ？９人いるぞ」

「どこかが３人グループになればいい」

「はあ・・・・・・」

「で、このコインを１グループに５枚分ける。最終的なコインの枚数で夕飯のメニューを区別するってのはどうだ？」

「まるで試召戦争見たいですね」

試召戦争・・・・・・？

「制限時間は夕方の５時までだ！」

「今から５時までって言うと大体７時間くらいか。チームはどうやって決める？」

「くじ引きだ」

いやな予感がするんだけど・・・・・・

Ａグループ

土屋康太&名川みどり

Bグループ

島田美波&霧島翔子

Cグループ

坂本雄二&木下秀吉

Dグループ

吉井明久&姫路瑞希&峰嶋真琴

「どのグループにも警戒するべき相手がいるな・・・・・・・」
「明久君！がんばりましょう！」
「そうだね」
「・・・・・雄二、もし浮気したら・・・・・・・」
「安心しろ翔子。秀吉は男だ」

『実況は私、峰嶋琴音です』
『解説は名川源太だな！よろしくな！！』

「なんか本格的・・・・・・！」

「おっしゃ！！夕飯をかけた鬼ごっこだ！！」

「「「絶対負けない！！」」」

第二十三話　闘争と夕食と鬼ごっこ（後書き）

次回は夕飯争奪鬼ごっこですね。
今日中に更新できればいいんですけど・・・・・・

第二十四話　コインとテストと夕飯争奪戦（前書き）

「夕飯争奪ゲーム！！」

「「イェー！」」

第二十四話　コインとテストと夕飯争奪戦

バカテスト　英語

問　以下の英文を和訳しなさい。

『Ｔｈｅ　ｂｉｒｔｈ　ｉｓ　Ｔｏｋｙｏ　ｔｈｏｕｇｈ　Ｉ　ｇｒｅｗ　ｕｐ　ｉｎ　Ｈｏｋｋａｉｄｏ．』

姫路瑞希の答え

『私は北海道で育ちましたが、生まれは東京です』

教師のコメント

正解です。流石姫路さんですね。

峰嶋真琴の答え

『・・・・・・・・・・これはオレのことか？』

教師のコメント

どうでしょうね？

吉井明久の答え

『東京は私で生まれましたが、育ちは北海道です』

教師のコメント

君から東京が生まれたんですか。とても凄いですね。

～明久・瑞希・真琴チーム～

真琴ｓｉｄｅ

「さて、どこから攻めるか・・・・・・」

一番ラクに落とせそうなのはみどり&ムッツリーニペアだけど、ムッツリーニなら保健体育のテストとか言ってきそうだし・・・・・・

「あの、こういうのはどうでしょう?誰とも戦わずにコイン5枚のままで終わるっていうのは・・・・・・」

「?　それだとつまりどういうことになるの?」

「相変わらず理解能力にかけるなお前は・・・・・・利点はこれ以上コインが減ることが無いってとこだけど・・・・・・却下だな」

そもそもそんな戦い方はつまらない。

「どうしてですか?」

「コインは減らないだろうが増えもしない。理想はコイン１０枚だからな」

やるからには本気でやるし、夕飯が懸かってるんだからなおさらだ。

「じゃあどのグループと対戦するの?」

「その前に色々確認することがある」

「確認・・・・・・ですか?」

「そ。まず勝負方法は問わないってとこだけど、どっちがゲームを決めるのか。それから負けたときに手放すコインはどれくらいなの

か。強いて言えば同じグループ内での対戦はありなのか」
「最初の二つは分かるけど、最後の奴はどういうこと？」
「最初の二つが不明確でも、最後の一つがわかれば対戦することで他の二つも明確になるし、どんな感じで戦うのかも分かりやすくなる。最終目標は１０枚だけど、できれば雄二とは戦いたくないし、対戦回数も減らしたい」

そのためにもルールをもっと正確に理解する必要がある。

「というより・・・・・雄二の奴、最初からこうなること理解してたんじゃないか？」
「どういうことですか？」
「最初はルールの究明に力を注ぐグループが出ること。ルールがはっきりしないうちは無闇に戦うべきじゃないしな」

どこかに間違って推測してる部分があったりしたら大惨事だ。

「じゃあどうするんですか？」
「やるなら島田＆霧島ペアだな。それ以外が近づいてくるなら逃げる」
「なんで島田さんと霧島さんのペアなの？」
「一番乗せやすいそうだから。勝負方法をちょっと考えれば、たぶん簡単に勝てるぞ」
「真琴・・・・・今ひどい事考えてるでしょ」
「ナンノコトカナ？」

コレハゲームナンダカラウラミッコナシニキマッテルジャナイカ！！

「あ・・・・・そういえば、こんなものもらったんですけど」

そう言って姫路が封筒を差し出す。
ご丁寧に『姫路瑞希』って書いてあるし。

「封筒？中身は見たのか？」
「まだです。確認しようと思ってたら忘れちゃって・・・」
「中身、見てもいいかな？」
「はい、どうぞ」

封筒は厚い訳じゃないから入っているのは紙だろうけど、問題はどうしてこんなものが姫路に渡されたかだ。
オレや明久がもらっていないところを考えると、女子限定かチームに一つってとこだろうけど。

「やっぱり紙だな・・・・・」
「えーと、なになに？『貴女の大切な人の物の中』・・・・・・ナニコレ？」
「一見するとなぞなぞみたいだな」
「というより本当になぞなぞなんじゃないですか？」
「『貴女の大切な人の物の中』・・・・・・貴女って書いてるくらいだから姫路のことだろうけど・・・・・・そっから先のはどういうことだ？」
「いた！！」
「・・・・・吉井たち」
「ヤベッ！見つかった！」

島田と霧島か。出来ればまだ戦いたくないんだが・・・・・・
えーと、ルールによると対戦って避けられないんだっけ？

『Bグループ対Dグループの対戦です。代表者を一人決めてください』

「・・・・・・母さん。ノリノリで何やってんだ？」
『・・・・・・代表者を決めてください』
なるほど。あくまで白を切るのか。ならいいや。
「まあ最初だし、オレが行くけど？」
「真琴、頑張って！」
「応援してます！」
向こうからは霧島か・・・・・・
えーと、対戦方法は問わないがあくまで1対1ってことか？
『ではどちらがゲームを決めるか・・・・・・くじ引きで決めます』
「くじ引きかよ！？」
『ゲームの提案者は真琴選手（？）に決定しました』
ダメだ。ついていけない・・・・・・
ってこの人はなんでこんなにノリノリなんだ？
「まあいいや。えーと・・・・・・作戦タイム！」
「・・・・・・かまわない」
霧島相手で確実に勝ちを狙えるゲームを決めないといけないから・・・・・
「（明久、合図をしたらこの台詞言ってくれないか？）」
「（いいけど・・・・・これを言ってどうするの？）」
「（これとゲームとなにか関係があるんですか？）」
「（まあ見てなって）決まったぞ！対戦方法は『先に“ゆうじ”と言ったの方の負け』だ！！」

『では試合に負けた場合に支払うコインの枚数を・・・・・・くじ引きで決めます』
「それもくじ引きかよ!?』
ヘンなところで手を抜いてる気がする。
『支払うコインは3枚となりました。では試合を開始してください』
ちょっと誘ってみようかな・・・・・・
「霧島。坂本の下の名前は?」
「・・・・・・言わない」
「お前の婚約者のフルネームは?」
「・・・・・・言わない」
「Fクラスの代表は?」
「・・・・・・言わない」
む・・・・・・思ったよりも手ごわい・・・・・・
なら明久に一役やってもらうとするか・・・・・・
「(明久、頼むぞ)」
「(了解!)さっき雄二が秀吉のことをいやらしい目で見つめてたなー(棒読み)」
「・・・・・・雄二、浮気は許さない」
『霧島選手(?)アウトー。勝者、Dグループ!』
「本当に引っかかった・・・・・・」
半分冗談でやってたんだけど・・・・・・

「・・・・・でも、吉井も雄二って言った」
「代表はあくまでオレだからな。ゲームするのもオレだから、明久が“雄二”って言ってもなんの問題も無いだろ」
「ひ、卑怯よ吉井！霧島さんの純粋な気持ちを利用するなんて！」
「そうです！翔子ちゃんに謝ってください！」
「ちょっと落ち着こう！そもそもこれ考えたの真琴だし、ていうか瑞希は知ってるでしょ！？」
「おい！？オレに責任を押し付けるな！！文句言うんだったらなんか他に作戦あったのかよ！？」
「どう考えたって真琴の責任でしょ！？」

Dグループは早速仲間割れをおこした。

「・・・・・負けたのは事実。峰嶋のほうが一枚上手だった」
「そりゃどーも・・・」
「・・・・・いまから雄二をお仕置きに行ってくる」

あ。なんか思わぬ収穫が。

「じゃあ、とりあえずコインはオレらのものになる・・・・・・でいいのか？」
『Dグループのコインは8枚になりました』

勝ったことには勝ったんだがなにか釈然としないものが・・・・・・

『ではこれをどうぞ』
「？　なんだこれ？」
『対戦をしたグループには勝敗に関係なくこの封筒が渡されます』
「これってさっきの姫路のもってた封筒と同じもの？」

今度は『峰嶋真琴』って書いてある・・・・・・

「真琴、どうしたの？」

「もらった」

二人にもらった封筒を見せる。

「これってさっき私がもらったのと同じ封筒ですよね？」

「宛名はオレになってるけどな」

「中身は？」

「何だろうな？確認してみるか」

封筒を開けてみると中に入ってるのは一枚の紙。

そこに書いてあるのは・・・・・・

『クソガキは死ね』

「これ新手の嫌がらせか何かか・・・・・・？」

この封筒作ってんの親父かじいだな。間違いない。

「ってなぞなぞでも何でもねぇじゃねぇかーー！！」

「ただの罵倒だね・・・・・・」

「ゲームの最中なのにこんなところでも喧嘩するんですね・・・・・・」

「ま、まあどうでもいいことだ。それより他のチームのコイン確認してみるか」

Ａグループ
土屋康太＆名川みどり
コイン　　　　１０枚

Ｂグループ
島田美波＆霧島翔子
コイン　　　　９枚

Ｃグループ
坂本雄二＆木下秀吉
コイン　　　　１５枚

Ｄグループ
吉井明久＆姫路瑞希＆峰嶋真琴
コイン　　　　８枚

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？

「・・・・・真琴。僕達さっき勝ったよね？」
「・・・・・・ああ」
「・・・・・・僕達今最下位だよね？」
「・・・・・・ああ」
「・・・・・・どういうこと？」
「知るかぁぁ！！」

コインの枚数がいつの間にか２０枚から増えてるし！
もともと持ってた５枚が４グループ分で２０枚だけじゃないのか！？

「どこかにコインが隠されてたってことですよね・・・・・・？」
「他のやつ等はもう見つけてたって事か・・・・・・」

さっきの勝負に負けてたら大変なことになるところだった！

「どうやってコインを見つけるかが問題なんだけ『ギャアアアア！！！』・・・・・どうやってコインを見つけるかが問題なんだけど、多分ヒントか何かあるはずなんだよな・・・・・・」
「凄い！さっきの悲鳴を完全に無かったこととして話を進めてる！」
「さっきのなぞなぞとかはそれっぽいですけどね・・・・・・」
「「それだ！！」」
「え！？」

さっきのなぞなぞはたしか・・・・・・

「確か、『貴女の大切な人の物の中』だったな・・・・・・」
「瑞希の大切な人って・・・・・親とか？」
「お前の思考レベルは本当に革命的だな」

普通真っ先に思い浮かぶのはお前だから。

「明久、お前の鞄どこにおいてある？」
「部屋だけど？」
「じゃあ取りに行くぞ」
「なんで？？？」
「コインを回収するんだよ」

残り時間　５時間３０分

「あった！あったよ真琴！コイン５枚！」

明久が鞄の中を探してると茶封筒が出てきた。
その中にコインが５枚入っていた。

「やっぱあったか。これで目標は達成だし、これ以上的と遭遇しないように時間を潰すだけだな」
「もう戦わないんですか？」

「無駄に戦闘してコインを失うなんてことにならないようにな」
現在の持ちコイン数は１３枚。一度負けるとまた１０枚きっちまうからな。

～時間を潰して～

残りは１時間半くらいか・・・・・・

「じゃあオレだな。４だ」
「僕だね。５」
「明久。それダウト」
「ぐ・・・・ばれたか。じゃあ２」
「じいですな。３です」

オレたちはたまたま通りかかったじいと一緒にダウトをしていた。

「私ですね。４です」
「５だ」
「６だよ」
「７です」
「８ですね。・・・・・そういえば他の人たちはどうなったんでしょうか？」
「そういえばそうだな。どうなったか見てみるか」

Aグループ

土屋康太&名川みどり

コイン　２９枚

Bグループ

島田美波&霧島翔子

コイン　２８枚

Cグループ

坂本雄二&木下秀吉

コイン　２３枚

Dグループ

吉井明久&姫路瑞希&峰嶋真琴

コイン　１３枚

「・・・・・・・・・真琴？」

「コイン奪いに行くぞ！！」

「ええ！？」

当然だ！こんなに差をつけられて黙ってるわけにはいかないじゃないか！

『お知らせします。お知らせします。あと1時間でゲームが終了します。4回以上対戦していないチームはコイン0枚の扱いとなりますので注意してください』

「やるぞーー！！」（明久）

「早くやらねえと夕飯抜きになる！！いくぞ！！」

ていうかそんな大事なルール今になって言うなよ！！

「なんとか・・・・・・間に合った・・・・・・」

あんな重要なルールをぎりぎりまで言わないとは・・・・・・
なんとか雄二たちを見つけて3回勝負して回数を稼いだ後、走り回って隠されてたコインを見つけたんだけど・・・・・・

「あんまりコイン増えなかったね・・・・・・」

雄二たちに何枚か持ってかれたせいで、持ちコインは１８枚どまり。

「あと１０分か・・・・・・これ以上コインを増やすのは無理そうだな・・・・・・」
「あれー?琴君じゃん!」

合いたくない奴登場。

「そーだ!勝負しよう!勝負方法は点数上限なしの科目は物理!」
「あと１０分だぞ・・・・・・んなのできるか・・・・・・」
「１０分でやるんだよ。どっちが上か勝負しよう?」

みどりって確か物理は得意科目だよな・・・・・・まあいいか。

「やるけどいいか?二人とも」
「こっちは・・・・・・ぜい・・・大丈夫・・・・・・」
「明久。大丈夫か?」
「大丈夫・・・・・・（カクッ）」

あ。死んだ。

「よしやるぞ」

「あれ！？僕のことは無視！？」
「みどりちゃんってどれくらい点数取るのか楽しみですね」
「瑞希まで！？」

「さっさと始めるぞ」
「じゃあせーので同時に始めよ。せーの・・・」

一応監督の先生代わりでムッツリーニに合図をもらう。

「始め！」

ムッツリーニの合図と同時にテスト開始だ。
１０分と制限時間が短いけどみどりは物理に関して天才的だったから油断は出来ない。
文章題は時間がかかるから簡単な問題だけに絞って点数を稼がなきゃ・・・・・・

「・・・・・そこまで」

ムッツリーニの合図でテスト終了。採点は・・・・・・誰がやるんだ？

「じいが引き受けましょう。これでも物理の教員免許をもっていますので」

「じゃあよろしく」

「了解しましたクソガキ」

「だまってやれやクソジジイ」

茶番はどうでもいいからさっさと採点して欲しいものだ。

「そういえばコインって何枚かけてるんだっけ？」

「１０枚でどう？」

「別にいいけど・・・・・決まってないのか？」

「うん、ナレーション役の二人が飽きたからって仕事投げちゃって」

「何やってんだあの二人は・・・・・・」

話してるうちに採点が終わったらしい。

「真琴、出来はどうだったの？」

「まあまあかな？１０分で解く量としては結構なほうじゃないか？」

「みどりちゃんはどうなんでしょう？」

「さあな。アイツも似たようなもんだろ」

『結果発表～』

あ。戻ってきた。

『Aグループ、名川みどりの得点・・・・・・・・・１５６点！』

「ひゃ、１５６点ですか！？」
「１０分でそんなに解いたの！？」
「ああ、あたし物理得意だから」

『Dグループ、峰嶋真琴の得点・・・・・・・・・１５７点！勝者、Dグループ！』

「あ。勝った」
「・・・・・・瑞希。この二人の頭の中身どうなってるんだろうね？」
「さあ・・・・・・・？」

１０分だから勝てたようなものか・・・・・・

「じゃあ約束のコイン１０枚」
「あ～あ。負けちゃった。勝てると思ったのに」
「そう簡単に負けてたまるか」

「お、終わったみたいだな」

そこに雄二、秀吉、霧島、島田が入ってきた。

「みなさんお疲れ様でした」

母さんも入ってきた。

「母さん。あのノリノリ具合は何だったんだ？」

「じゃあ皆で・・・・・・」
「聞け！！」
「ご飯でも食べに行きましょう」

「「「「「「「「「「は？」」」」」」」」」」

「え？じゃあ、夕飯争奪ゲームは・・・・・・？」
「いちいち違うメニューを用意するなんて面倒でしょ？だから無かったことに・・・・・・」

「「「「「「「「「「何ィィィ！？」」」」」」」」」」

「ここまでやっておいてその落ちは無いだろ！？」
「そうですよ！！何のために頑張ったか分からないじゃないですか！！」
「じゃああれは何のためにやったんだ！？

オレと明久と雄二が講義する。
でもこの人はそんなものを許すわけも無く・・・・・・

「いいじゃないの。別に（ポチ）」

ガン！×３（たらいが脳天直撃する音）

バタバタ×３（悶絶する音）

「さあ行きましょうか」

「「「「「「はい・・・・・・」」」」」」

今日一日を何のためにすごしたのか分からなくなってしまった・・・・・・

「俺の出番がなかったな！！」

第二十四話　コインとテストと夕飯争奪戦（後書き）

なんか最後のほうがぐだぐだになってしまってすいません・・・・・・

続きは今日中に更新したいですね・・・・・・

第二十五話　キスと理不尽と二人の時間

バカテスト　歴史

問　以下の問に答えなさい。

『１６６９年に起きた、松前藩に対するアイヌ民族の大規模な蜂起をなんと言うか答えなさい』

姫路瑞希の答え

『シャクシャインの戦い』

教師のコメント

正解です。シブチャリ（現在の北海道日高振興局新ひだか町の静内地区）の首長シャクシャインを中心として起きた戦いのことですね。

峰嶋真琴の答え

『作者は北海道関連のバカテストのネタが尽きかけている』

教師のコメント

応援してあげてください。

土屋康太の答え

『エロ本戦争』

教師のコメント

一人でやってください。

吉井明久の答え

『マック〇バリューの戦い』

教師のコメント

主婦の皆さん大活躍。

明久ｓｉｄｅ

「ふ～食った食った」
「・・・・・・・・・・・・ご馳走様」

何の意味があったのかさっぱり分からない夕飯争奪戦のあと、みんなで外食して戻ってきた。
さて、いろいろあってやってなかったけど今夜は恒例の・・・・・・

「坂本雄二から始まる！」（雄二）

「「「「イェー！」」」」（他４人）

「古今東西！」

「「「「イェー！」」」」

「絶品料理！」

フッ！バカめ！料理関連で僕に挑んだことを後悔させてやる！

パンパン（手拍子）↑雄二の番

「【パエリア】！」

「いきなり僕の切り札言わないでよ！」

パンパン（手拍子）↑ムッツリーニの番

「・・・・・・・・・・・・【蟹雑炊】」

「テメエオレの切り札言ってんじゃねえ！」

パンパン（手拍子）↑秀吉の番

「ええと・・・・・・【ステーキ】じゃ！」

「おお、無難に来たな秀吉」

パンパン（手拍子）↑真琴の番

「なら・・・・・・【シーフードパエリア】！」

「それいいの！？パエリアだよね！？いいの！？」

パンパン（手拍子）↑僕の番

「【オムライス】！」

「「「「罰ゲーム決定！！」」」」

「なして！？」

オムライスは絶品料理として分類されないのか！？

「ほら明久。引いた引いた」

「真琴。面白半分でやってるでしょ」

全くいやらしい・・・・・・
とにかくヘンな罰ゲームに当たらないように願うしか・・・・・・

『明久と真琴が女子部屋に忍び込んで姫路にキス』↑秀吉の書いた罰

「「おかしいだろ!!」」

僕と真琴の声が被る。

「なんだこのムチャクチャハードルの高い罰ゲームは!嫌われたらどうするんだ!」

「このバカはともかく何でオレまで行かにゃならんのだ!!てか明久、お前こんなわけの分からん罰ゲーム引いてんじゃねえ!!確率1／5でなんちゅーの引いてんだ!!」

真琴に逆ギレされた。
あれ?これ悪いのって僕?

「他の罰ゲームはこんなのだぞ」

『明久と真琴が女子部屋に忍び込んで姫路にプロポーズ』↑雄二
『明久と真琴が女子部屋に忍び込んで姫路に愛の告白』↑ムッツリーニ
『峰嶋真琴に1万円貢ぐ』↑真琴
『吉井明久にご飯をおごる』↑僕

「……真琴、確率1／5って言った?」
「……心の底から反省してる」

理不尽な罰ゲームの確率は3／5だった。

「クッソ……納得いかねえ……第一アレじゃ誰が引いてもオレたちが行くことになるだろ」

「まんまと嵌められたってとこかな」

「理不尽な上に女子部屋に特攻とは……みどりが偶然いないことを願うばかりだな……」

「なんでそんなに名川さんをいやがるのさ。美人じゃないか」

アレだけの美人と今まで同棲していただなんてなんだか無性にいらだってくる。

「明久。お前はオレに女装させる趣味をもっていて事あるごとに関節極めてくる女を好きになれというのか？」

「……ごめん」

「気にするな。しかもあいつの関節技、１ヶ月前よりも磨きがかかりまくってるんだよな……」

「きっと真琴のために一生懸命練習したんだよｗｗｗ」

「楽しそうだな。なんなら今からお前の全身の関節外してやろうか？」

「遠慮します」

まだ人類の新境地に達したくは無い。

「冗談だ」

「真琴の冗談は冗談に聞こえないんだよ」

「なら本気でやってやろうか？」

「遠慮します」

「いやなんだったらもう少し言葉に気をつけて……あ」

「？　どったの真琴」

真琴の視線の先を見る。そこにいるのは……

「瑞希……？」

瑞希ｓｉｄｅ

なんとなく眠れなくて、外の空気を吸っていました。
そこに二人がやってきたのです。

「あ……明久君……真琴君も……」
「ええと……眠れないの？」
「あ……はい」

なんで二人がここにいるのかは分かりません。

でも、明久君がきてくれたのはある意味でラッキーだったかもしれません。
真琴君には悪いですけど……

「……」
「ん？」
「……」
「な、なんだよ……」
「……」
「はぁ……わーった、わーった。明久、オレは先に戻るからあとは二人でやってくれ（これって軽く邪魔者扱いされてるだけだろ……）。」
「え？罰ゲームは？」
「お前がやってやればいいだろ。姫路も喜ぶぞー」

罰ゲーム？何の話でしょう？

「あの、明久君…罰ゲームって……」
「え？ああ、なんでもないよ」
「？？？」

きっと坂本君たちと何かやってたんでしょね。
それよりも……

「明久君……」
「なにかな？瑞希（ムニュ）理性が飛びそうなんだけどォォォォ！！」
「あ、明久君！大声を出したら美波ちゃん達が起きちゃいます！」
「は、はあ…はあ…」
「だ、大丈夫ですか？」
「だ、ダイビョズ」

ちっとも大丈夫そうじゃないんですけど……

「明久君……もうすぐ、清涼祭ですよね……」
「え？ああ、そうだね。もうそんな季節か……」

私達の通う文月学園で行われる『清涼祭』。
その清涼祭ではとっても幸せなカップルが出来やすいという噂があるんです。

「明久君…その、よかったら、私と……」
「？？？」
「私と、清涼祭のお店、一緒に回ってくれましぇんか！？」

咬んじゃいました……
勇気をだして言ったのに……

「別にいいよ。一緒に行こう？」
「ほ、ほんとですか！？」
「うん。今から楽しみだよね」
「はい！そうですね！」

明久君と一緒に清涼祭……
明久君と一緒に清涼祭……
明久君と一緒に清涼祭……

「じゃあ、僕達が出すお店も頑張らないとだね！」
「明久君と一緒に清涼祭……明久君と一緒に清涼祭……明久君と一緒に清涼祭……」
「……瑞希？」

「は、はい！なんですか！？」
「だから、僕達が出すお店も頑張らないとねって」
「あ、そうですね！一緒に頑張りましょう！」

「（明久君と一緒……凄く楽しみです……）」
「（食べ物をだすお店になったら瑞希を厨房に立たせないようにしなきゃ……）」

？　今明久君が何か言ったような……？

「「……」」

なんだか会話が途切れてしまいました……
はっ！い、今なら、みどりちゃんに教えてもらったこと……

「明久君！」
「今度は何……！」

明久君がこっちを向いて、そして驚きます。
明久君の背中に腕を回して、顔を近づけて、そっと……

「……ぷはぁ……明久君」
「……み、瑞希、僕もそろそろ……」
「待ってください！」

行かないで欲しい。
ずっと一緒にいたい。
心からそう願いました。

「もう少しだけ……一緒にいてください」

「……うん」

もう少しだけこうやって、明久君によりかかって、一緒にいたいんです。

「明久君……」
「なに？瑞希」
「大好きです……」
「……うん、僕もだよ」

そう言って明久君は私を抱き寄せてくれます。
こうしているだけの時間。
たったそれだけの時間。
でも、それだけのことがとっても幸せだったんです。

二人だけの時間が……

～翌日～

真琴ｓｉｄｅ

「もういっちゃうのかい？もう少しゆっくりしていっても……」
「しょうがないだろ。全員分のチケット取れる便が朝のしかなかったんだから」

本来なら夕方発の飛行機でもよかったんだが８人分の席を取ろうとしたら朝の便しかなくなってしまった訳だ。

「琴君ー！こっち準備できたよー！」
「お前は行く必要ないだろうが……ってなんだその大荷物」
「へへっ、実はＧＷ明けから、文月学園に転入するんだ」

へー、この時期にか……

いろいろ大変……

「今文月学園って言ったか？」
「言ったよ？」
「所属クラスは？」
「Ｆクラス」

最悪だ！！

「嘘だろ！嘘だって言ってくれ！」
「その話なら嘘じゃないですよ？」

後ろから声がして振り返る。
そこにいたのは姫路だった。

「ど、どういうことだよ……」
「みどりちゃん、文月学園へ転入するって凄く嬉しそうに話してましたもんね」
「そゆこと☆」
「う、嘘だろ……」

只でさえ平和と程遠いＦクラスなのに、コイツまできたら安息の地はどこにもなくなるじゃないか…
いや待て。待つんだオレ！まだ家があるじゃないか！
流石に毎日家まで来るわけ無いだろうし、家にいれば少しは……

「それからね、あたし、琴君の家に住むことになってるから、これからよろしくね☆」
「理不尽だァァァ！！」

もはやオレに安息の地は無かった。

「俺は使い捨て扱いか！？出番はこれで終わりなのか！？」

第二十五話　キスと理不尽と二人の時間（後書き）

ｅｐｉｓｏｄｅ２　僕と皆と北海道旅行（そんないい物じゃないからな！？ｂｙ真琴）編はこれでおしまいですね。

次回は清涼祭編……になるといいな。

これからも『バカとＦクラスと転校生』をよろしくお願いします！

第二十六話　おかえり（前書き）

また夢の中のお話です。
今回はちょっと違う感じ？

第二十六話　おかえり

暗い、何も無い空間。

今まではそうだった。

何も無い、お互い以外の存在を一切確認できない空間だった。

けど、今日は何かが違った。

いや、厳密にはオレたち以外の全てが違った。

いつもの何も無い空間じゃなく、草木が生え、鳥や魚がいる、心が安らぐような空間だった。

「どうやら今日のキミはいつもと違うようだね」

現れたソイツはいつもなら会いたくない相手だっただろう。

二度と出てくるなと言ってやりたいくらいに。

「キミなりの結論が出たんだろう？なら聞かせてもらおうじゃないか」

「当然。そのためにアンタを呼んだんだからな」

そう。今まではコイツのタイミングで（といってもしょっちゅうだったけど）オレが呼び出される側だった。でも今日は違う。

「キミに呼ばれたんだ。来ないわけが無いだろ？」

今日、オレはコイツを呼んだ。

「さあ、キミの出した答えを聞かせてもらおうじゃないか」

「アンタは前にオレが“攻撃することを恐れてる”と言ったな」

「言ったね」

「攻撃することを恐れてる……もっと言えば、“攻撃を出来ない”」

「言っとくけどそれは試召戦争の話ではないからね？」

「分かってる。オレが言ってるのはあくまで精神論だ。オレの結論は……」

オレ自身が考え出した答えは……

「攻撃しない。守りに徹する」

「それが君の答えかい？そんなのがキミの導き出した答えなのかい？」

「極論だ。攻撃できないならしなければいい。守りに徹してカウンターで仕留める。戦法としては十分ありえる話だ」

「だから試召戦争の話じゃ……」

「無駄だ」

コイツがオレに何をさせようとしてるのか。

コイツがオレに何をさせたいのか。

「全部お見通しだからな」

「へえ……キミが何を見通したって言うんだ？」

「アンタはオレにもっと攻撃的な意識を植え付けて自分が強くなろうとしてるんだろ。だから守りに徹するといった時、それをやめさせようとした」

「……」

「別に攻撃できないからって負けるわけじゃない。ただ守りに特化した存在も戦いでは重要だからな。アンタはアンタで自分のなりたい形があるんだろうけどそうは行かない。アンタはオレの物だ。最もオレが強いと思うものになる」

強いと思うもの。

それが物なのか者なのかは分からない。

「キミには……ガッカリしたよ。あんなに長い時間一人ぼっちで閉じ込められて、やっと出られたと思ったら持ち主は僕を押さえつける……どうしてキミ達には感情があるのにそんなに自由なんだ！？こんなに苦しいだけなら……自我なんていらなかったんだ！！」

「それが本音だろう」

「！！」

「それがアンタの本音だ。自由になりたい。楽しみたい。もっと人とのコミュニケーションをとりたい。それは自我があって、感情を持っている生き物なら当たり前だ。それも、人間みたいな複雑な生き物なら……」

「でも、僕は人間じゃないし……」

「アンタは確かに人間じゃない。でも自我がある。感情がある。欲望がある。なら、人間と大して変わらないじゃないか。姿形が違うだけで、アンタは立派な人間だと、少なくともオレはそう思ってる」

「キミは……」

「アンタはオレの“守る力”だ。アンタがいなきゃ、オレには守ることなんて出来ない。アンタはオレにとって大切な存在だ。オレにはアンタが必要なんだ」

「……やっぱりそうだ」

「？」

ソイツはオレと出会って初めて涙を流した。

「キミが僕の持ち主で、本当によかった……！」

「持ち主なんて言うな。オレたちは相棒（パートナー）だ」

「何年も、何年も研究され続けて、やっとあそこから出て、皆と同じようになれると思った。でも皆感情なんてなかった！僕一人が異常な存在で、キミすらも僕を嫌がるんじゃないかって……」

「やっぱオレなんだな。アンタも」

「やっと、やっと出会えたんだ。ずっと待ってたんだ。キミの事を！」

「どうやら、オレが文月学園に来たのも、姫路や明久たちと再会したのも、アンタとであった事も偶然じゃなかったようだな」

「偶然でも必然でもいい！ずっと待ってたキミに出会えたんだから！」

「ずっと待ってた、ずっと離れてた、そんな気分だ。だから、僕はキミに……」

彼の望むもの。

あの時彼女が何を望んでいたのか、あの頃の俺には分からなかった。

でも、俺の大事なパートナーが今、オレに何を望んでいるのか、オレにはわかる。

「キミに……ただいまって言ってもいいかい？」

「いいに決まってるだろ。……おかえり」

おかえり。オレの召喚獣（パートナー）。

第二十六話　おかえり（後書き）

ついに明らかになった夢の中の真琴の正体！
これから二人はどうなっていくのか！？
次回から清涼祭編始まります！

第二十七話　僕と転校と清涼祭（前書き）

今回から清涼祭編です！

第二十七話　僕と転校と清涼祭

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。

『あなたが今欲しい物はなんですか？』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物もいいかもしれませんね。写真館とかも候補になりうると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Ｈな本（訂正）　成人向けの写真集』

教師のコメント

訂正の意味があるのでしょうか。

吉井明久の答え

『カロリー』

教師のコメント

この回答から君の生命の危機が感じられます。

峰嶋真琴の答え

『安そ（訂正）名川みどり』

教師のコメント

みどりさん、人の回答を改竄するのはやめましょう。

名川みどりの答え

『琴君が望むもの』

教師のコメント

もう勝手にしてください。

明久ｓｉｄｅ

清涼祭。
文月学園の学園祭で、試験召喚システムを取り入れているために注目度の高い文月学園は、毎年多くの来賓が訪れる。
そのため生徒達も自分のクラスの出し物をよりよくしようと準備に精を出すのである。
そして２年Ｆクラスは……

『プレイボール！！』

野球をしていた。

『さあゆーくん！きっちり補球してよね！』

『坂本に捕球のチャンスはない！みどりさんの球は、俺が場外に飛ばしてみせる！』

バッターボックスに立っているのは須川君。

ていうか学園祭の準備の時間なのにこれでいいのか？

「ねえ真琴、みんなに学園祭の準備してもらわないと困るんだけど……」

「無理だな。雄二があの調子じゃ、鉄人でも出てこない限りはまとまらないからな」

「じゃあどうすればいいの？」

「……そうだな、姫路あたりが頼み込めばバカ共はやってくれるんじゃないか？」

「でもその瑞希が……」

「いねえんだよな……」

『こぉおらぁあああぁあ！！何をやっとるか貴様らぁぁ！！』

あ。鉄人だ。

「吉井！貴様何をやっとるか！どうせまたお前が主犯だろ！」

「どう見ても違うでしょ！ていうか、僕やってないし！」

「主犯は雄二ですよ。鉄村西人」

「そうです！取り消してください西鉄村人！」

「鉄人と西村を合わせて斬新な名前を作ってるんじゃない！！お前等も教室にもどれ！まだ清涼祭の出し物が決まってないのは、お前達Ｆクラスだけだぞ！」

『『『うぃ～～す……』』』

さすが鉄人。皆素直に撤退していくよ。

「それにしても明久。お前なんでそんなに学園祭にこだわってるんだ？」

「うん。瑞希と一緒に頑張ろうって約束したから」

『『『『吉井を殺せぇぇーー！！』』』』

「誰を殺すって？」

『『『『すいませんした！自分らチョーシこいてやした！！』』』』

おお、眼力だけでＦＦＦ団を封殺した！

「……にしちゃあその本人がいないのは不自然だけどな」

「いろいろあるんじゃない？それより僕達も早く戻ろうよ」

「そうだな」

Ｆクラスの教室に戻る途中の廊下。

「出し物って何にしたらいいのかな？」
「あのボロい教室で飲食店は無理がありそうだからな……あと姫路も」
「それは言えてるかもね」
瑞希の料理なんか出したら食中毒の嵐がおきそうだ。
「でもだったらどうする？やっぱり飲食店とかじゃないと……」
「ああ、ここにいたのかい、あんた達」
後ろからしわがれた声がする。
振り向いてみると……
「「ああ、学園妖怪ババア長か」」
「出会い頭に罵倒とはあんた達も失礼なクソガキさね！」
こんなババアに呼び止められるとは不愉快だ。
「まあいいさね。あんた達に話がある。ついてきな」
「「？？？」」
とりあえずこのババアについていくことにした。

真琴ｓｉｄｅ

「学園長室？」
「来たのは転校してきて初日以来だな」
「無駄口叩いてないでさっさと入りな」

ババアに促されて学園長室に入ると、そこには既に４人の人間がいた。

「なんだ、お前達も来たのか」

「雄二！それに島田さんに霧島さんに瑞希も！」
「なんなんだこの面子は……」

オレたちは一体何の用で呼ばれたんだ？

「さて、あんた達にはちょいとアタシの手伝いをしてもらいたくてね」
「手伝い？何をさせようってんだ？」

どうせろくな事じゃないのは目に見えてるけどな。

「今度の清涼祭で行われる召喚大会で優勝と準優勝を独占して欲しいんだよ」
「どういうことですか？」
「おおかた、賞品に不具合でも見つかったんだろ」
「ぐ……いいとこ突くじゃないか」
「え？マジだったの？」

これは想定外だ。冗談で言ったのに。

「なるほど。それを俺たちに回収して欲しいってわけだ」
「アンタ達は理解が早くて助かるね」
「えっと……どういうことよ？」

女子メンバーはまだ理解できてないようだ。

「つまり、不具合を起こされると困るから不具合を起こす可能性のないチームに優勝して欲しいって事だ」
「ウチ達がそうだってこと？」
「……なら、優勝チームに頼んで回収すればいい」

「そうも行かないんだよ。あの賞品は一応は新技術と語ってるからね。デモンストレーションでもしなきゃ新技術の存在そのものを疑われちまう」
「別にいいんじゃないのか？」
「雄二！？何言ってるのさ！？」
「オレも雄二に賛成。暴走でも起こされてこの学校が潰れたらそれこそ冗談じゃない」

この学校にはまだ潰れてもらうわけには行かないからな。

「そういうことさね。吉井は姫路、坂本は霧島、峰嶋は島田と組んで大会に出場しな」
「またババア。条件がある」
「なんだいクソガキ」

よし、乗ってきた。

「まずFクラスの教室の改善。いくらなんでもあれじゃまともな飲食店は出来ないからな」
「設備の向上はなしだがまあそれくらいならいいさね」
「あとは清涼祭の売り上げで設備を買いたい」
「好きにしな」
「雄二、後は頼むぞ」
「任せろ。最後に一つだ。召喚大会はランダムトーナメントであってるんだよな？」
「間違いないさね」
「その対戦科目を俺たちに決めさせろ」
「なんだ、そんなことかい。点数の水増しとかだったら却下だけど、それくらいなら問題ないね、好きにしな」
「助かるぞババア」

これだけ条件を出しておけば、俺たちにもやるメリットは出てくるな。

「これだけやってんだ。勝てるんだろうね？」

「当たり前ですよ」

「俺たちを誰だと思ってる？」

「オレたちは史上最強のＦクラスだぞ？」

「あんた達のその自信はどこから来るんだか……女子はお目付け役も兼ねてるから、頑張っておくれ」

「「「はい！」」」

「オレたちはお目付け役が必要なのか……」

瑞希ｓｉｄｅ

学園長室でお話があった後、私と明久君は真琴君に呼ばれました。

「真琴、話ってなに？」

「なんですか？早く戻らないとＬＨＲ（ロングホームルーム）が始まっちゃいますよ？」

本当は、早く真琴君から逃げたいだけなんですけど……

多分この人は気づいてます。

「姫路。お前何か隠してるだろ」

やっぱり。

「え！？瑞希、それ本当！？」

「そ、そんなことないですよ！？ぜぜん隠し事なんかしてないですから！！」

「お前らは二人揃って嘘が下手だからな……何を隠してる。オレたちでよければ協力するが？」

そこまで見破られてるなんて、やっぱり嘘が下手なのは本当なんですね……

「……あの、実は私、転校するかもしれないんです……」
「ふぇ？」
隣にいる明久君の気の抜ける声。
って何か耳から煙が出てますよ！？
「あ。明久が処理落ちしてる」
「あ、明久君！！大丈夫ですか！？」
「しっかりしろ、このバカ」
「は！！」
明久君、いくらなんでもアレだけで処理落ちはないでしょう……
「真琴…モヒカンになっても僕達友達だよね…」
「どうすれば私の転校からモヒカンになるんでしょう…？」
「気にするな。コイツのバカは今に始まったことじゃない」
ある意味稀有な才能なのかもしれませんけど…
「なんで！？なんで瑞希が転校しなきゃならないの！？」
「おちつけ、まだ可能性の話だ。まあ原因は言わなくても分かるけどな」
「わかんないよ！！」
「ちょっとは自分で考えろバカ。原因は恐らくＦクラスそのものだろう」
「？　どういうこと？」
「お父さんに言われたんです。お前にはＦクラスはふさわしくないって。学園の底辺なんかでまともな勉強が出来るわけないし、もっとまともな普通の高校のほうがいいって」

Fクラスというだけで皆をバカにされたんです！と続けます。

「ごめん瑞希。Fクラスのことをよく知ってる僕らでもFクラスはバカの集まりだと思う」

「学園祭の準備の時間に野球をやるようなクラスだからな……」

「そんな……」

「だけど試召戦争でBクラスを倒したって言う実績があるのは事実だ。今のオレたちは実質学年2位だからな」

「真琴がババアと掛け合って、クラスの設備をよくするチャンスを作ったんだ！クラスの設備を良くして、召喚大会でFクラスが優勝すれば……」

「姫路の親父さんも考え直すんじゃないか？Fクラスは学園の底辺なんかじゃないって見せ付けてやろうじゃないか」

「……！　はい！ありがとうございます！」

二人が協力してくれるなら、何とかなるかもしれません！

「しょうがないだろ。―両思いの明久と姫路の為なんだから≪・・・・・・・・・・・・・・≫」

「わ、な、何言ってるのさ！？」

「両思いだなんて……そんな……」

「お前ら本当に嘘が下手だな…」

第二十七話　僕と転校と清涼祭（後書き）

なんか最近グダグダになりやすいですね。すいません…

第二十八話　僕と執事と喫茶店

バカテスト　地理

問　以下の問に答えなさい。

『バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『リトアニア　エストニア　ラトビア』

教師のコメント

そのとおりです。

土屋康太の答え

『アジア　ヨーロッパ　浦安』

教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります。

峰嶋真琴の答え

『目黒　新宿　浦安』

坂本雄二の答え

『東京　大阪　浦安』

名川みどりの答え

『沖縄　中国　浦安』

木下秀吉の答え

『ドイツ　アメリカ　浦安』

教師のコメント

浦安という認識が流行っているのですか？

吉井明久の答え

『香川　徳島　愛媛　高知』

教師のコメント

正解不正解の前に数が合ってないことに違和感を覚えましょう。

島田美波の答え

『頑張れ　なでしこ　浦安』

教師のコメント

それでも浦安は外さないんですね。

真琴ｓｉｄｅ

雄二「じゃあ今から学園祭の実行委員決めるから全部そいつに任せるぞ」

やる気はないんかいな……

オレ「じゃあオレがやろうか？」

雄二「いいのか？」

オレ「ああ。こういうのって、一度やってみたかったからな」

明久「本音は？」

オレ「なんとしても成功させる必要があるからオレが仕切る」

姫路の転校がかかってるとなれば本気でやる必要があるからな。

雄二「じゃあ全権を真琴にゆだねるから、あとは適当に仕切ってくれ」

そういうと雄二は教室の隅で寝てしまった。

明久「雄二……。本気でやる気ないのかな？」

オレ「多分アイツは召喚大会以外に興味はないんだろうな…んなことよりさっさと出し物決めるぞ。意見があるやつは挙手してくれ」

ムッツリーニがスッと手を上げる。

オレ「なんだ。ムッツリーニ」

康太「……写真館」

明久「ムッツリーニの言う写真館ってなんかやばい気がするんだけど……」

オレ「営業停止とか喰らったらシャレにならないな…却下だ」

康太「……なぜ？」

オレ「清涼祭ルールその２３、写真館は提案者が土屋康太の場合に限り問答無用で却下だ」

勿論そんなものは存在しない。これにだまされる奴がいたらかなりのバカだな。

康太「……無念」

かなりのバカがここにいた。

オレ「他にはないか？」
姫路「あの、ウェディング喫茶ってどうですか？」
一同「ウェディング喫茶？？」
姫路「はい。メイド喫茶みたいに、ウェイトレスがウェディングドレスを着るんです」
島田「へぇー可愛いじゃない」
康太「……結婚は人生の墓場」

何を言ってるんだこいつは。

明久「一応書いとこうか」
オレ「そだな。言っておくが【ウェディング喫茶　人生の墓場】とか書くなよ？」
明久「……」

黒板を見るとそこには【ウェディング喫茶　人生の墓場】と書いてあった。

オレ「明久、せめてもうちょっと客が入りやすい名前を考えてくれ」
明久「了解……」

全くこのバカは……

オレ「次！他には？」
須川「中華喫茶とかどうだ？」
明久「中華喫茶？チャイナドレスとか？」

チャイナドレス……

オレ＆康太「チャイナドレス……！！（ブシャアアア）」
秀吉「な、なんじゃ！？真琴が鼻血を吹いて倒れたぞ！」
明久「ムッツリーニはともかく、なんで真琴まで！？」
康太「……凄まじい破壊力（カク）」
オレ「流石は、（姫路の）チャイナドレス……（カク）」
明久「だれか、だれか二人の鼻血を止めてください！！」

死して尚、一片の悔い無し……！！（ｂｙ真琴＆ムッツリーニ）

～しばらくお待ちください～

オレ「アー…死ぬかと思った…で、中華喫茶だったか？」
須川「ああ。他の店みたいにイロモノじゃなくて、本格的な飲茶とかを出すんだ。中華ほど奥の深いジャンルはないし、最近はヨーロピアン文化に押され気味だけど本来は……」
オレ「明久。書いてくれ」

明久「オッケー」
オレ「【中華喫茶　ヨーロピアン】とか書いたら殺すからな？」
明久「……え　？」

黒板にはやっぱり【中華喫茶　ヨーロピアン】と書いてあった。

明久「……なんて書けばいい？」
オレ「そうだな……好吃可？的中？喝茶なんてどうだ？」
明久「……真琴、中国語喋れるの？」
オレ「他には韓国、フランス、スペイン、ドイツ、ポルトガルとか英語とか？」
明久「で、その……はどういう意味？」
オレ「好吃可？的中？喝茶だ。確か日本語に訳すと……」

好吃可？的中？喝茶の日本語訳は……

オレ「『美味しくて可愛い中華喫茶』だな」
明久「やっぱチャイナドレス目当てか！！さては瑞希か！？瑞希のチャイナドレスが目的か！？」
オレ「ちょっと興味はあったりする（そんなことは無い！！）」
秀吉「真琴。本音と建て前が逆になっておるぞ……」
康太「……オレも興味はある」
瑞希「興味だなんて……そんな……」
明久「はいそこ！！照れるとこじゃない！！真琴！異端審問会として貴様を裁く！！」
真琴「やれるものならやってみろ。細切れにしてやる」

と言って木刀を構える。そういえばこれ使うの久しぶりだな。

みどり「でもどうするの？このままじゃ決まんないよ？」

オレ&明久「ぐ……確かに」
みどり「琴君の意見は？」

オレ？オレの意見？

オレ「オレか……折角こんだけ男がいるんだから執事喫茶とか？」
明久「本音は？」
オレ「姫路が男子の制服着たら凄く可愛いと思う」
明久「テメエ表出ろやぁ！！」
オレ「上等じゃボケェェ！！」

なんで毎回最終的にこの展開になるんだ。

秀吉「それよりもう時間が無いんじゃぞ？早く決めんと間に合わなくなってしまう」
康太「……（コクコク）」
オレ「そうだな……じゃあみんなこの中から一つ選んで手上げてくれ。ウェディング喫茶がいい奴…次、中華喫茶…次、執事喫茶…」

集計結果は意外なものに集まった。

オレ「……じゃあ、２年Ｆクラスの出し物は執事喫茶になりました」
明久「……真琴、今どう思ってる？」
オレ「凄く意外だと思ってる」
明久「本音は？」
オレ「凄く嬉しい」
明久「やっぱテメエ表出ろやぁ！！」
オレ「上等じゃボケェェ！！」

こんなんで本当に大丈夫なんだろうか？

明久ｓｉｄｅ

出し物が執事喫茶に決まった2年Ｆクラスでは、準備をしていた。

僕「真琴、机とかどうする？」

真琴「ちょっと待て、今手配する」
瑞希「手配……ですか？」
真琴「まあ見てなって」

そう言って形態をとりだして誰かに電話をかける真琴。
誰に電話してるんだろう？

真琴「あ…親父？ちょっと親父の個人資産で長机を４つか５つほど用意してくれ、速達で。明日までで。……なに？いやだ？別に断ってもいいけど断ったらテメエの口座の口座番号と暗証番号母さんにバラすから。……なんだ物分りがいいじゃないか。じゃあ頼んだから」

真琴は父親を脅していた。

僕「真琴……今のは……？」
真琴「気にするな明久。脅迫は家じゃ日常茶飯事だからな」
僕「読んだ！今脅迫と書いて交渉と読んだ！！」
瑞希「で、で、私は厨房担当で良いですよね？」
僕＆真琴「「ダメ！！瑞希（姫路）は絶対ホール担当！！」」

あんなのを出されたら恐らく執事喫茶は３秒で潰れるだろう。

瑞希「でも、執事喫茶だから女の子は……」
真琴「だ、大丈夫だって！男子の制服も似合うと思うから！！」
僕「真琴！何を言って……」
真琴「（明久！お前は姫路が男装するのと転校するのとどっちがいいんだ！？）」
僕「（男装！！）」
真琴「（決まりだ！！）」

なんか釈然としないものがあるけどあんな兵器じみた料理で営業停止を喰らって瑞希が転校するくらいならまだいいのかな？

真琴「それよりメニュー考えるぞ。明久、何かあるか？」
僕「ケーキとかしか思い浮かばないけど……」
真琴「オレもコーヒーくらいしか考えてなかったからな……」

中華喫茶とかと違って出すものがイメージしずらいって言う弱点はあった。

瑞希「じゃあカレーとかシチューはどうですか？」
僕「カレー？」
真琴「確かにカレーやシチューは一度に沢山作れるからな……それ以外でケーキとかを足せばいいか……」
僕「なら僕がケーキとかを担当するよ」
真琴「オレはカレーとかシチューとかをやるぜ。なんならパスタとかも……あ」
僕「あ……」

多分、僕と真琴は同時に同じことを考え付いた。

僕&真琴「「パエリア！！」」
真琴「どうせだ！パエリアも出そうぜ！」
僕「なら僕に任せて！パエリアは得意だから！」
瑞希「なら、私も……」
僕&真琴「ホール！！」
瑞希「はい……」

瑞希には悪いけど執事喫茶で死者を出すわけにはいかないんだよ……

こうして【執事喫茶　ｄ?ｌｉｃ･ｉｅｕｘ】（真琴命名）は着々と開店の準備を進めていった。

真琴「明久、召喚大会の優勝者と準優勝者への副賞として如月グランドパークのペアチケットがあるって知ってたか?」
僕「知らなかったけど?」
真琴「姫路を誘ってみれば?」
僕「……行って来る!」
真琴「がんばれよー」

僕「あ、瑞希！」
瑞希「？　なんですか？明久君」

よし、勇気を出して誘ってみよう！

僕「ええと、その、召喚大会で優勝したら如月グランドパークのペアチケットがもらえるのって知ってる？」
瑞希「……知ってますよ。一緒に行きたい人もいますし。今から声をかけに行くところです」
僕「え？あ、そう……」

なんだ、別の人を誘うつもりだったのか……ちょっと残念……

瑞希「明久君」
僕「何かな？」
瑞希「もし優勝したら、私と一緒に如月グランドパークに行ってくれますか？」

そう言って彼女は微笑む。
今から声をかけに行くところ……あれは僕のことだったのか。

僕「も、もちろん！あの、僕も誘おうと思ってたところだったから……！」
瑞希「ふぇ！？そ、そうだったんですか！？それは、あの、嬉しいです……」
僕「じゃあ、優勝できるように頑張らないとね」

瑞希「そ、そうですね！頑張らないと、翔子ちゃんも真琴君も強いですもんね」

そういわれて思い出す。さっき真琴に教えてもらった数学の点数を。

真琴『数学？確か９００ちょっとだったはずだけど。惜しかったんだよなあ、もう少しで１０００点行ったのに……』

僕「終わった……！（ガク）」

瑞希「え！？明久君、どうしたんですか！？」

僕「勝てる分けない……あの点数……」

瑞希「え？点数って誰のですか？」

僕「真琴……数学９００点台だって」

瑞希「９００点ですか……でも大丈夫です！明久君、今夜から家に来てください！」

僕「ふぁい？」

瑞希「私の家で、一緒に勉強しましょう！」

僕「……ってえええ！！？」

「あいつらはお互いに自分を卑下してるから、こうでもしなきゃくっつかないんだよな……お似合いのカップルの癖に……」

第二十八話　僕と執事と喫茶店（後書き）

明久「えっと、では作者の黒炉に僕たちが思った疑問をぶつけます！って企画だよ」

真琴「作者からすればいい迷惑だろ」

黒炉「そんなことないよ？」

瑞希「そうです！きっと快く受け入れてくれるはずです！」

明久「じゃあ一つ目。この話から台詞の頭に誰が言ってるか分かるように名前がついたけどどうして？」

黒炉「自分で読み返してて気づいたんだけど、これって誰が言ってるの？みたいな感じの台詞が多かった気がしたから。あとは真琴にもそのうち姫路さんのことを瑞希って呼んでもらう日が来るから」

真琴「何ィ！？」

瑞希「真琴君、今から呼んでも良いですよ？」

黒炉「その話は物語がもっと後半に進んでからで。他には？」

真琴「どうして執事喫茶なんだ？」

黒炉「男が多いから」

明久「本音は？」

黒炉「バカ限定女装コンテストに出てきた男物の服を着ている姫路さんがものっそい可愛かったから」

真琴「同士よ！！」

瑞希「可愛いだなんて……明久君も、そう思いますか？」

明久「瑞希は何を着ても可愛いと思うよ？でもその前に……テメエら表でろやぁ！！」

黒炉＆真琴「上等じゃボケェェ！！」

瑞希「えっとこの企画は読者の皆さんの反応しだいで打ち切りｏｒ継続になりますので、「もっとやれ」って方はぜひともお声をくださると……

黒炉「くたばれ明久ァァァ！！」

明久「現実で運動音痴の作者に負けるかァァ！！」
真琴「黒炉！作者のチート力を見せてやれ！！」
黒炉「おう！必殺、作者はバカ強いって設定！！」
明久「せ、せこい！！せこいよ！！」
黒炉＆真琴「くたばれェェェ！！」
瑞希「ええと、さよ～なら～……」

続く！…

…のか？

第二十九話　僕と姫路家と憧れの王子様（前書き）

ＰＶ３００００、ユニーク３０００突破しました！ありがとうございます！

第二十九話　僕と姫路家と憧れの王子様

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、制服はどのようなものが良いですか？』

島田美波の答え

『家庭用エプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、いい考えです。

吉井明久の答え

『瑞希は何を着ても可愛いから大丈夫』

峰嶋真琴の答え

『姫路は何を着ても可愛いから大丈夫』

姫路瑞希の答え

『明久君は何を着ても格好いいから大丈夫』

教師のコメント

ならもう少し具体的な例を出してください。

土屋康太の答え

『スカートは膝上１５センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の強調を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られるくらいものを用意し、裏にはロゴを入れる。靴は５センチ程度のヒールを――――――』

教師のコメント

裏面にまでびっしり書き込まなくても。

名川みどりの答え

『琴君は何を着ても可愛いから大丈夫』

教師のコメント

それはどうかと思います。

明久ｓｉｄｅ

瑞希「じゃあ明久君、上がってください」
僕「う、うん、お邪魔します……」

召喚大会に向けて勉強しなきゃみたいな会話からなぜか瑞希の家に来ることになってしまった。
なぜこんなことに？いや、別に嫌だってわけじゃないしむしろ嬉しいけど……

？「お帰りなさい瑞希ちゃん……あら、そちらの方は？」

僕「あ、えっと僕は――――「付き合ってる明久君」っていきなりもの凄い紹介のされ方なんだけど!?」

こういう紹介の仕方をされたのは初めてだ！しかも言ってるのが瑞希だから余計に説得力がある！

？「ああ、最近瑞希が買ってきた抱き枕の……」

僕「瑞希。抱き枕って何？」

恐らくムッツリーニだろう。いつの間に撮ったんだ？

瑞希「そ、その話はいいんです！！明久君は勉強しに着たんですから！！早く行きましょう！！」

？「瑞希ちゃん、まだ高校生なんだからやるならほどほどに……」

瑞希「な、何言ってるの!?お母さん！！」

そして気になったのが――――

僕「瑞希。お母さんって？ていうか瑞希って妹さんいたの？」

この人、どう見てもお母さんには見えない。

と言うより大人に見えない。

どうみても子供である。出てるとこは出てるんだけど。

瑞穂さん「申し遅れました。姫路瑞希の母の瑞穂です。お義母さんって呼んでください」

僕「お、お母さん！いきなり何を言ってるの!?明久君、気にしないで良いですからね!?」

不思議だ。真琴の家族と言い、瑞希の家族と言いなんで僕の周りに

はこんな不思議な家族が集まってるんだろう？

僕「なるほど、瑞希のお父さんはロリコンなのか……」

瑞穂さん「よく言われます」

瑞希「お母さん！お父さんのためにそこは否定してあげて！！」

よく言われるんだ……

瑞希「明久君！早く行きますよ！！」

僕「へ？どこに？」

瑞希「私の部屋です！！」

僕「えええ！？」

お、女の子の部屋！？ちょっ！待って！まだ心の準備が！！

ＰＩＰＩＰＩ！

あ、電話だ。真琴から？何の用だろ？

瑞希「どうしたんですか？明久君」

僕「ごめん、真琴から電話みたい」

そう言って電話に出る。

真琴『明久！今どこだ！？』

僕「どこって瑞希の家……」

これって言ってよかったのかな？

真琴『じゃあ今から行く！！だから助け……待てみどり！そのメイ

ド服どうするつもりだ！？』
みどり『早く着ちゃおうよ！きっと可愛いよ？』
真琴『ちょっとやめ……明久、助けてくれギャアアアア！！！』

そこで電話は切れてしまった。

瑞希「明久君、真琴君はなんて？」
僕「どうやら名川さんに女装されられてるみたいなんだ……」

メイド服と悲鳴だけで断定するには十分だ。

瑞希「じゃあ早く行きましょう。晩御飯はここで食べていってくれますよね？」

なんだろう。ものすごい悪寒が……

僕「真琴は見捨てるんだね……」

正直瑞希は時々薄情になる気がする。

瑞希「で、明久君。ここはただ暗記するんじゃなくて、ごろを使ってですね……」
僕「大化の改新なら僕も分かるよ。無事故の改新で６２５年だよね？」
瑞希＆真琴「明久君（明久）、大化の改新は６４５年です（だぞ）ってなんで真琴君がいるんですか！？」
真琴「わるい。邪魔する」
瑞希「靴を脱いで玄関から来てください！」

突っ込むとこはそこじゃないと思う。

真琴「何を言ってるんだ。そんなことしたらみどりに見つかるだろうが」

なるほど、真琴は名川さんから逃げてるのか。

真琴「明久。大化の改新は６４５年だからな？」
僕「あ、うん。分かった」

何か違う気がする。

みどり「琴君みーーッけ！！」

名川さんが部屋の扉を開けて突入してくる。
ご丁寧にビニル袋に靴入れてるよ。

真琴「げ！二人とも邪魔して悪かった！さらば！」

真琴、ここ2階なんだけど。
窓から入ってきて窓から出てくなんてほとんど泥棒じゃないか。

みどり「琴君は逃がさないよ！！」

名川さんも飛び出した。
あの二人は人間じゃないと思う。

瑞希「で、ここから先は……」

そして今の出来事をまるで無かったかのように振舞う瑞希も凄いと思う。

瑞希の教え方は上手だったし、日本史は元々それなりの点数だったけど、それ以外の教科も結構あがったと思う。
流石に真琴の９００点にはとどかないだろうけど……

瑞穂さん『瑞希ちゃん、明久君、ご飯出来ましたよー』

え？もうそんな時間？
気が付いて時計を見ると既に7時を回っていた。

僕「もう2時間以上やってたんだね」
瑞希「明久君、やれば出来る部分が多かったですからね」
僕「そ、そうかな？」

そういう風にほめられると、ちょっと嬉しい。

瑞希「じゃあ明久君、続きはご飯の後にしましょうか」
僕「そうだね。僕もおなか空いちゃったし」

ここでふと思い出す。

「真琴、大丈夫かな？」

ＰＩＰＩＰＩ！

また電話だ。真琴からだし、今度はなんだろ？

僕「はい、もしもし？」

真琴『助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けてギャアアアアアアアアア！！！！！』

僕「……」

大丈夫じゃなかったみたいだ。

瑞希「明久君、早く行きましょう？」

僕「……うん、今行く……」

真琴、助けてあげられなくてごめん……

瑞希「あ、お父さん。お帰りなさい」

1階に降りて行くと、さっきまでいなかった（と思われる）ロリコンな人がいた。

僕「ああ、この人が瑞希のお父さんのロリコンだね。初めまして、吉井明久です」

政宗さん「初めまして、姫路政宗です。それからせめてロリコンの瑞希のお父さんと呼んで欲しいんだが」

あ、ロリコンは否定しないんだ。

政宗さん「君は……Fクラスかね？」

僕「あ、はい。そうですけど」

政宗さん「なるほど……」

瑞希「お父さん。Fクラスってだけで明久君をバカにしないでね。Fクラスにだって点数の高い人はいるんだから」

真琴のことを言ってるんだろうか？
でも真琴も点数が高いだけで僕らと同じレベルのバカだと思う。

政宗さん「瑞希……転校の話なんだが……」
瑞希「だから、召喚大会でFクラスにも点数の高い人がいるって見せてあげるから」
政宗さん「しかし設備がだな……」
僕「それなら大丈夫ですよ。真琴が学園長と掛け合って教室の改善をしてくれるように頼んだし、喫茶店の売り上げで新しい設備を買ってもいいってお許しが出てますから」

もっともそれは僕たちが召喚大会の1位と2位を独占できればの話だけど。

政宗さん「そうか……。なら辛気臭い話は終わりにしよう。夕食が出来ている」
瑞希「明久君。早く食べましょう」
僕「うん。そうだね」

席に着こうとしたら政宗さんに肩を叩かれた。

僕「？　なんですか？」
政宗さん「あー……瑞希の料理について知ってるかね？」
僕「僕は食べたこと無いですけど、その危険性を知りながら口いっぱいに頬張った勇者なら知ってます」

言うまでも無く真琴のこと。
ていうか今思うとあのときのあの料理は間違いなく殺意がこもってた気がする。

政宗「その……指摘はしたのかね？」
僕「してない……というよりは出来ないですけど、その勇者が何度も注意してるらしいんですけど全然直んないみたいで」
政宗「そうか……実験台の日々は続くのか……」

こんなところにも犠牲者がいたか。

瑞希ｓｉｄｅ

夕飯も食べ終わって勉強の続きに取り掛かろうとしたところでまたもや窓からやってくるあの人。

私「真琴君……あの、入ってくるなら玄関から……」
明久「瑞希。その突っ込みはいい加減おかしいって気づいて」
真琴「ああ、悪いな。まだみどりに追われてんだよ。それから明久、これ着替え」
明久「え？なんで？」
真琴「なんでって、姫路の家に泊まるんじゃないのか？」
明久「泊まるって……違う！僕はただ勉強に来ただけで……」
みどり「琴君発見！みんな捕まえて！！」
犬達「ばうばうばう！！」
真琴「ヤベッ！じゃあな！二人で仲良くやって……うわ、来るな犬！落ちるだろうが……わあああ！！」

真琴君が犬ごと窓から落ちていきます。
下のほうからゴシャッって音が聞こえたような気がしたんですけど……
もう入ってこれないように窓と鍵を閉めて……

私「じゃあ明久君。続きを始めましょうか」
明久「うん……あの犬、どこの犬だろうね……」
私「明日みどりちゃんに聞いてみたらどうですか？」
明久「そうするよ。さあ続きを頑張ろう」

明久君と勉強を続けて気が付いたら12時を回っていました。

私「あ、明久君……今夜はもう遅いから、うちに泊まっていったら……」

明久「……」

私「明久君……？」

明久「……え？何か言った？」

凄い集中力です…

しかも解いている問題のほとんどが正解です。

私「明久君すごいですよ！正解の問題が多いです！」

明久「でもまだまだだよ。召喚大会で優勝するためにはもっと正解できるようにして、点数を上げないと」

私「明久君、明日も来ませんか？」

明久「え？」

私「明日も、また来て一緒にお勉強しませんか？」

明久「いいの？」

私「それか、清涼祭が終わるまで、この家にいても良いですよ？」

明久「ええ！？」

驚いた顔をする明久君。当然ですよね……

私「ダメですよね……ごめんなさい無理を言って……」

明久「そ、そんなこと無いよ！」

私「え？」

明久「えっと1週間くらいだけど、よろしくお願いします！」

よろしくお願いしますってことは、つまり……

私「いいんですか？家族とか……」
明久「大丈夫。僕は一人暮らしだから」
私「えっと、じゃあ、よろしくお願いしますね、明久君」
明久「うん。こっちこそよろしくね。瑞希」

そうと決まったら……

私「明久君！」
明久「なにかな？」
私「ベッドが一つしかないから、一緒に寝ることになっちゃうんですけど……って明久君鼻血が！大丈夫ですか！？」

明久君が鼻血の海に沈んでいました……

明久君の鼻血も止まって、ベッドの中……

私「ごめんなさい明久君……あんまり大きいベッドじゃなくて……」
明久「じぇ、じぇじぇん」
私「噛み噛みじゃないですか……」

緊張してるんでしょうか？
緊張してるんのは、むしろ私のほうなのに……

私「明久君……」
明久「……どうしたの？」

私「私……転校なんかしないですよね？明久君と離れたりしないですよね？」
明久「瑞希……」

自分で言ってて涙が出てきちゃいました…

私「明久君や、真琴君や、みんなと離れ離れになったりしないですよね？」
明久「大丈夫だよ。僕達が召喚大会で優勝して、新しい設備を買って、転校も阻止する。絶対に」

明久君はそう言って私を抱きしめてくれます。
温かい、その手で。その腕で。私のことを抱きしめてくれます。

明久「僕じゃ少し頼りないかもしれないけど、瑞希は、瑞希だけは僕が守るから。だから安心して。ね？」
私「明久君……私の憧れの王子様……」
明久「え？」
私「……すやすや」
明久「……おやすみ。瑞希」

「……吉井、姫路と一緒に寝るとは……！ゆるせん！」
「それどこ情報だ？ていうかなんでお前らは懲りるってことをしねえんだよ？」
「み、峰嶋！？邪魔しようとしても無駄だ！我等異端審問会の名において、名川みどりと同棲している貴様も同様に処刑する！」
「あんなのと一緒に住むなんて最悪だからな！？引き取ってくれるなら引き取ってもらいたいくらいだ！」
「本当か！？」
「……といいたいところだが無理な話だ。一応アイツの保護者って立場なんでな」
「死ねえええええ！！」
「まったく、『人の恋路を邪魔する奴は、馬に蹴られて死んじまえ』という言葉を……」
「キシャアアアア！！」
「……知らないんだろうな」

その後、異端審問会ＦＦＦ団員２７名が大怪我をして転がっていた。

ｂｙ福原

第三十話　僕と常夏と召喚大会（前書き）

「わーい。本編三十話だ～」ｂｙとある天才の弟君

第三十話　僕と常夏と召喚大会

バカテスト　英語

問　次の日本語を英訳しなさい。

『私はこの日をとても楽しみにしていました』

姫路瑞希の答え

『Ｉ　ｗａｓ　ｌｏｏｋｉｎｇ　ｆｏｒｗａｒｄ　ｔｏ　ｔｈｉｓ　ｄａｙ　ｖｅｒｙ　ｍｕｃｈ』

教師のコメント

正解です。清涼祭を楽しんでくださいね。

峰嶋真琴の答え

『召喚大会で暴れるのが楽しみだぜ』

教師のコメント

英訳してください。

吉井明久の答え

『執事喫茶ｄ?ｌｉｃｉｅｕｘにぜひきてください』

教師のコメント

回答で宣伝活動をしないように。

明久ｓｉｄｅ

真琴＆秀吉「「お嬢様、お帰りなさいませ！」」

真琴がメインのウェイターで、サブで秀吉、島田さん、瑞希が入っているこの執事喫茶『ｄ?ｌｉｃ･ｉｅｕｘ』。
僕とムッツリーニが厨房なんだけど思いのほか大繁盛で、とてもじゃないけど手が足りない。

真琴「明久、パエリア２皿追加だ」
瑞希「明久君、カレー３皿追加です」
僕「りょーかい！」

……厨房二人じゃ足りない気がする。

僕「ムッツリーニ、カレーのほうお願いできそう?」
康太「……ちょっときつい」
僕「そうか……真琴！厨房入れない?」
真琴「無理だな。ウェイター目当ての客が多いからホールから人を外せない」
僕「このままだと過労死ししちゃうよ！！」
真琴「分かった、適当にＦクラスの中から料理できる奴連れ来るから」

そう言って出てった真琴が連れてきたのは須川君と横溝君。

須川「カレーのほうは任せろ！」
横溝「ケーキとかを作るのは得意だ！」

意外な二人の特技発覚。

僕「そういえば雄二はどこに行ったのさ！?」
康太「……召喚大会」
僕「あ……」

そういえば雄二は霧島さんと一緒に召喚大会に行ったんだっけ。
雄二が戻ってきたら僕と瑞希が行かなきゃならないからもっと大変になるなあ……
とそこへ真琴がやってきた。

真琴「明久、そこのタッパーの中のパエリア、食べてみてくれないか？」
僕「へ？これ？」

と、真琴が持ってきてた包みを開けて中のパエリアを食べてみる。

僕「すごいよ！これ、僕の作るパエリアとそっくりだ！」
真琴「オレが作ったんだ。これでお前は安心して召喚大会にいけるだろ」

はっきり言って一番の売れ筋はパエリア。
それを作れるのは僕だけだったので本来は午前中で完売のはずだったんだけど……

僕「うん、これならいけるよ！」
真琴「そうか、作ってきた甲斐があったな。……っと雄二が戻ってきたぞ」
雄二「戻ったぞ。俺はどっちに入ろうか……」
真琴「姫路が抜けるからホールやってくれ。明久の代わりはオレがやる」
雄二「大丈夫なのか？」
明久「真琴が作ったパエリア、いまだしてるのにそっくりな味だから大丈夫だよ」
真琴「毎日練習してたんだからな？」

そっか……僕が召喚大会に言ってる間にうまく喫茶店を保てるように……

真琴にはいくら感謝しても足りないくらいだ。

瑞希「明久君、そろそろ召喚大会の一回戦が始まりますよ？」

僕「うん、今行く」

真琴「負けんなよ？お前を倒すのはオレだからな」

僕「勿論！そういえば雄二は勝ったの？」

雄二「当然だ」

瑞希「翔子ちゃんと一緒ですもの。大丈夫に決まってます」

雄二「俺だってちゃんと点数は取ってるからな！？」

真琴「分かったから早くホール入ってくれ。二人とも頑張れよ」

僕「うん！」

真琴「雄二、相手は誰だったんだ？」

雄二「久保と佐藤美穂だ。結構ぎりぎりな戦いだったぞ」

真琴「明久たちもＢクラス以上と当たって、オレ達もＡクラスとかと当たるようなら……」

雄二「色々考えとかねえとな……」

一回戦の対戦科目は数学で相手はまだ決まってない。

瑞希「明久君、数学の点数はどれくらいでした？」

僕「結構よかったよ。瑞希は？」

瑞希「私も結構よかったです」

相手がＡクラスで無ければ多分勝てると思う。

今回の僕の点数はそれくらい高い。

司会『それでは召喚大会一回戦第２試合を行います。赤コーナー２年Ｆクラス、姫路瑞希、吉井明久！』

僕達の名前が呼ばれる。

一般公開があるのは準決勝からで、それまでは生徒や教師以外の観客はいない。

司会『青コーナー、２年Ｂクラス、岩下律子、菊入真由美！』

いきなりBクラスか……
でも瑞希もいるし、僕の点数も高いんだ！

僕「あ……君達って……」

たしか試召戦争の時に真琴に瞬殺されてた人たちだ。

岩下「ひ、姫路さんとやるの！？」
菊入「落ち着いて律子。２対１なんだから、私達にも勝機はあるわ」

あれ？僕のことはいない扱いですか？

司会『それでは召喚してください』
僕「二人とも、僕のことをなめてると痛い目見るよ。試獣召喚！」
３人「試獣召喚！」

Ｆクラス　姫路瑞希　数学　４６８点
　　吉井明久　数学　１５６点

ＶＳ

Ｂクラス　岩下律子　数学　１７９点
　　菊入真由美　数学　１６３点

岩下「１５６点ですって！？」
菊入「Ｃクラス並みの点数じゃない！？本当にＦクラス！？」

二人が驚くのも無理は無い。

ていうか1週間も泊り込みで瑞希に勉強教わったらこれくらいは取れないと申し訳なくなってくる。

瑞希「明久君凄いです！そんな点数取れるなんて！！」

僕「瑞希に比べたらまだまだだよ。それよりも敵も来るみたいだよ」

敵の召喚獣はなかなかのコンビネーションで僕に集中攻撃をしてくる。

点数は向こうのほうが2倍だけど、僕には観察処分者として身につけた操作技術がある。

岩下「こ、攻撃が当たらない！？」

菊入「ちょこまかと……！」

こっちのほうが操作性においてずば抜けて高いのに加えて、固体での点数差は２０点前後。

実力の近い相手なら攻撃を喰らわないくらいは造作も無い。

僕「瑞希、後はよろしく！」

瑞希「分かりました！ごめんなさい！！」

僕の召喚獣が一気に飛びのいて、その瞬間に瑞希の腕輪の熱線が放たれる。

岩下「え！？」

菊入「きゃあ！！」

二人の召喚獣が消し炭になる。

フィードバック付きだったらムチャクチャ熱いだろうなぁ…

Ｆクラス　姫路瑞希　数学　３９９点
吉井明久　数学　１３８点

ＶＳ

Ｂクラス　岩下律子　数学　０点
菊入真由美　数学　０点

司会『勝者、２年Ｆクラス、姫路瑞希、吉井明久ペア！』
僕「やった！」
瑞希「やりましたね、明久君！」

雄二も僕も無事に一回戦突破！これで後は真琴と島田さんが一回戦を突破すれば全員二回戦出場だ！

瑞希「で、明久君。どうしてあんな点数取れたんですか？」
僕「そりゃあ一週間も勉強教えてもらったらアレくらいは取らないとさ……」
瑞希「明久君……」
僕「それよりも早く戻らないと真琴たちが抜けれないからさ、早く戻ろう？」
瑞希「そうですね、早く戻りましょう！」

そういえば、あとで真琴にいっておかなくちゃならないことがあるんだっけ……

瑞希の正装はムチャクチャ可愛かった。

？？「ひい！ゆ、許してくれ！」
？？「覚えてろ！こんな店、営業できなくしてやる！！」

Ｆクラスの教室の隣の空き教室から出てきた二人組み。
制服からして３年だろうか？
一人はボウズで、もう一人がソフトモヒカン。
ムチャクチャにボコされて逃げてった。

真琴「チッ、逃がしたか……お、明久に姫路か。どうだった？」

僕「勝ったけど……あの二人は？」
真琴「営業妨害だ。オレの作ったパエリアが不味いって抜かしやがったから軽く拳でＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしてた」
瑞希「３年生ですよね……。生徒の中では一番年上なのに……」
真琴「全くだな」

なるほど、あの二人組みは真琴を怒らせたのか。
だったらボコされるくらいですんでよかったね。

雄二「おい真琴。そろそろ時間だぞ」
美波「もういくわよ。峰嶋」
真琴「悪いな。じゃあ明久に姫路、後は頼んだぞ」
僕「オーケー、任せてよ」
瑞希「私もがんばります！」
真琴「常夏コンビが来たら雄二に言ってくれ」
僕＆瑞希「常夏コンビ？」

なぜに常夏？

真琴「常村と夏川って言うんだ、あの二人。だから略して常夏」
瑞希「そういうことですね、うまいです」

確かにうまい。

美波「峰嶋、早く行くわよ」
真琴「分かってるって。じゃあ後頼んだぞ」
僕「了解、頑張ってね」
瑞希「二人とも頑張ってくださいね」

真琴ｓｉｄｅ

姫路たちの対戦相手はＢクラスのやつらだったって聞いたからな。
恐らくオレたちの相手はＡクラス連中だろう。

司会『赤コーナー、２年Ｆクラス、峰嶋真琴、島田美波！』
オレ「さて、頑張ろうぜ島田」
美波「そうね、数学だからウチも戦力になるから」

そういやこいつ帰国子女で問題文が読めないから数学以外の点数は

低いんだっけ。

司会『青コーナー、二年Ａクラス、河野重蔵、河野麻奈美！』
オレ＆島田「「なに！？」」

数学オリンピック兄妹か……
一回戦からとんだ大物と当たったな……
勝てるけど。

麻奈美「あー、君が相手なんだ」
オレ「またオレに瞬殺されにきたのか？ご苦労なこった」
重蔵「コイツの点数は前よりかなりあがった……油断すると負けるぞ」
オレ「ならオレは油断しながら勝ってやる」
司会『いいですか？では召喚してください！！』

河野兄妹「「試獣召喚（サモン）！！」」

Ａクラス　河野重蔵　数学　４２０点
　　河野麻奈美　数学　６６５点

オレ「６００オーバーか」
麻奈美「前よりも上がってんだから！総合科目でも久保君抜いたもん！」
オレ「大したこと無いな。オレたちも召喚するぞ、島田。試獣召喚（サモン）」
美波「たいしたこと無いの……？　試獣召喚（サモン）！」

Ｆクラス　峰嶋真琴　数学　９６５点
島田美波　数学　２９５点

美波＆麻奈美「９００点オーバー！？」
司会『す、凄いです！９００点オーバーなんて教師でもそう簡単に出せる点数ではないというのに！！』
美波「あんたどういう頭してるのよ……？」
麻奈美「カ、カンニングとかしたんじゃないでしょうね！？」
真琴「一人で試験受けたんだから、カンニングの余地なんてあるか！！消えろ！！」

相手の召喚獣を2体とも鎖鎌で瞬殺……ん？鎖鎌？

美波「峰嶋……あんたの召喚獣、装備変わってるわよ……」
オレ「本当だ……」

オレの召喚獣の装備は、防具はそのままでヘッドフォンを首にかけていて、二本の大剣が二本の鎖鎌に、腰に日本刀を装備していた。

司会『勝者、赤コーナー、２年Ｆクラス、峰嶋真琴、島田美波！』
オレ＆美波「「え？」」

Ｆクラス　峰嶋真琴　数学　９６５点
島田美波　数学　２９５点

ＶＳ

Ａクラス　河野重蔵　数学　０点

河野麻奈美　数学　　0点

麻奈美「また負けたーー！！」
重蔵「お、おれまで……」
オレ「ええっと、勝ったから戻っていいんだよな？」

そう言って戻ろうとするオレを島田が引き止める。

美波「あ、峰嶋！」
オレ「？　なんだ？」
美波「あの、もしよかったらなんだけど、ウチと一緒に色々回ったりとかしない？」
オレ「？　別にかまわないけど」
美波「そ、そう？じゃあ早く戻りましょ。お店手伝わないと……」

そう言って島田はすたすたと行ってしまった。

オレ「なんだったんだアイツ？」

第三十話　僕と常夏と召喚大会（後書き）

黒炉「えーと、とりあえず真琴と美波のフラグを立たせてみました」
真琴「おい、この間オレはこの後姫路のことを名前で呼ぶようになるとか言ってたよな？」
黒炉「それなんだけど、真琴にもそろそろカップリングしてもらおうと思って」
真琴「それでなんで島田なんだ？」
黒炉「なんとなく」
真琴「やっぱりか……」
黒炉「あとは秀吉とみどりもくっつく予定だよ」
真琴「そこまでネタバレしていいのか！？」

まだまだ続く！……かも

第三十一話　僕と瑞希と学園祭めぐり（前書き）

「たまにはこういうのもいいよね？」
「いいんじゃないか？」

～バカと天才の会話より～

「いい訳あるかこの恥さらしィィィィィ！！」

ｂｙ異端審問会

第三十一話　僕と瑞希と学園祭めぐり

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。

『喫茶店以外に出し物をするとすれば何が良いですか?』

島田美波の答え

『ぬいぐるみショップ』

教師のコメント

女の子らしくて可愛いと思います。

姫路瑞希の答え

『吉井明久ショップ』

名川みどりの答え

『峰嶋真琴ショップ』

教師のコメント

歪んだ愛情だと思います。

土屋康太の答え

『アダルトな写真館』

教師のコメント

ムッツリ商会で我慢してください。

坂本雄二と峰嶋真琴の答え

『暴れたいから闘技場』

教師のコメント

町の不良を片付けてくれると有難いです。

吉井明久の答え

『寄付』

教師のコメント

……

明久ｓｉｄｅ

時間が空いたので、喫茶店を真琴たちに任せて瑞希と二人で他のクラスの出し物を回って見ることにした。

瑞希「明久君、向こうでクレープ売ってますよ?行ってみましょう」

僕「あ、待って瑞希」

瑞希に腕を引っ張られる。

こういう風にしてるのって何かいいなぁ……

僕「そういえば、前にもこうやって二人で出かけたことあったよね？」

瑞希「あの時は明久君から映画に誘ってくださったんですよ？」

僕「そういえばそうだね」

今にして思うとあのときの天使には感謝しなければならない。

あの天使につられて瑞希を映画に誘ってなければこうやって付き合うことも無かったんだから。

瑞希「あの時は、Ｆクラスの人たち（特に美波ちゃんと清水さん）が襲ってきたんですよね？」

僕「あの時本当に鉄人の補習喰らうと思ったからね……」

瑞希とのデート（ということにしておきたい）がＦＦＦ団＋島田さんと清水さんにバレて追い掛け回されて大変な目にあったんだ。

あの時も試召戦争のときみたいに真琴が手助けしてくれたんだっけ。

瑞希「明久君、真琴君のこと考えてますね？」

僕「え？どうして分かったの？」

瑞希「だめですよぅ……確かに真琴君は女の子みたいな格好すれば可愛いですけど……坂本君のこともです！！」

僕「とりあえず僕にその気は無いってことを分かって欲しいんだけど」

ていうか瑞希は自分の彼氏がそういう趣味だって事を否定するってことは考えないんだろうか？

瑞希「明久君のほうが、可愛いですから！！」

僕「そんなこと言われても嬉しくないからね！？」

ホントにどういう思考回路なんだろう？
瑞希って頭いいんじゃないのかな？

瑞希「嘘ですよ。明久君はカッコ良いですから」

そう言って僕の腕に抱きついてくる瑞希。
そういうことされると……

僕「み、瑞希、はなれて……」
瑞希「どうしてですか？」

そういうことされると……

ＦＦＦ団「よぉおぉおぉしいいいいいいいぃ！！」

あいつらが来るから。

僕「こうなっちゃうからだよ……」
瑞希「ああ……」

須川「姫路さんと二人だなんてうらやましグフ！！」
横溝「そのポジションを俺によこグボ！！」
真琴「はいはい、喫茶店の仕事が終わってからなー」

二人が最後まで台詞を言い終わらないうちに真琴の延髄切りが二人の首をヒットする。

真琴「喫茶店とバカは大丈夫だから二人で行ってきてくれ。ただし１０時半までには戻って来いよ？」
僕「分かってるって」

真琴「じゃあ戻るぞ、バカ一号（すがわ）とバカ二号（よこみぞ）」
須川「待ってくれ！吉井！この恨みは絶対にはらクペッ！？」
横溝「姫路さん、そんな甲斐性なしより俺とカポッ！？」

これまた奇怪な音を立てて首の関節を外されるバカ二人と引きずっていく真琴。
……？
真琴の左腕に見える腕時計。
真琴ってあんなの持ってたっけ？

瑞希「明久君、クレープ買って屋上で食べませんか？ここだとFクラスの人たちがまた来そうですし……」
僕「別にいいよ。クレープも僕のおごりで」
瑞希「いいんですか？」
僕「これくらいは大丈夫だよ。曲がりなりにも彼氏なんだし」

少しは甲斐性なしのレッテルの返上くらいさせて欲しいし。
ちなみにこの後クレープを買ってから屋上に上がるっていう短い時間の間にまた須川君と横溝君が来たんだけど、今度は真琴に脚の関節外されてた。

瑞希ｓｉｄｅ

屋上まで上がってきたんですけど、流石に誰もいませんでした。

明久「流石に誰もいないね」

私「そうですね」

もっとも誰かいたら困るんですけどね。

明久君と二人っきりでいられる時間が少しでも欲しくて……

明久「クレープ食べようか？」

私「そうですね、食べましょうか」

そう言って屋上で、明久君に買ってもらったクレープを食べます。

明久「そういえば前に二人で出かけたときもクレープ食べたよね。

瑞希はクレープ好き？」

私「はい！……あ、でも、あんまり食べ過ぎちゃうとお腹が……」

もとから太りやすい体質なので、カロリーの高いものを食べちゃうと気になるんです。

明久「うーん……そんなこと気にしなくても、瑞希はスタイルいいと思うよ？それに僕は、今のままの瑞希が好きだからね」

私「そ、そうですか？えっと、なら、今のままで……」

明久君にそう言ってもらえると嬉しいです……。

私「……あ、明久君、クリームついてますよ？」

見ると明久君のほっぺにクリームがついていました。

明久「え？嘘？」

私「取ってあげますね」

私はそう言って明久君のほッペについたクリームを指で取り、そのままなめます。

明久「瑞希ってば……」

私「はい、明久君。ちゃんと拭いてくださいね」

そう言ってハンカチを手渡します。

ハンサムなお顔が台無しですから。

明久「大丈夫。今日はちゃんと自分のハンカチ持ってきてるから」

私「そうなんですか？」

明久「うん、ほら」

明久君はポケットからハンカチを取り出して私に見せてくれます。

私「いつもの明久君なら持ってないのに……どうしたんですか？」

明久「……真琴に男でも身だしなみはちゃんとするべきだって小一時間説教された」

私「そういうことですか……」

真琴君は妙にきっちりしようとする所がありますから…

私「あの、明久君。もし私が転校せずにすんだら……」

明久「もしじゃなくて、しないんだよ。瑞希を転校なんてさせないから」

私「……そうですね。じゃあ言い方を変えます。清涼祭が終わったら、またデートに行ってくれませんか？」

明久「何言ってるのさ瑞希？」

私「え……？」

きょとんとする私をみて、少し笑いながら明久君は続けます。

明久「約束したじゃないか。一緒に如月グランドパークに行くって」

私「でもあれは優勝したらの話で、まだ優勝できると決まったわけじゃないですし……」

明久「大丈夫、優勝できるよ」

私「根拠はあるんですか？」

明久「根拠は無いけど、僕は信じてるから」

私「信じてる……ですか？」

明久君は楽しそうに、嬉しそうに言います。

明久「僕は、瑞希と一緒なら誰と戦っても勝てるって信じてる。瑞希のことを信じてる」
私「……私も、明久君のことを信じてます」

明久君に信用してもらえている。
それだけのことが私はとても嬉しかったんです。

私「明久君」
明久「なにかな？」
私「キスしてください」
明久「キス……ってええ！？」

明久君はとっても驚いてます。
まあそうですよね。

私「早く、早く」

私は子供のようにせがんでみます。

明久「うーんと……じゃあ……」

明久君の顔がとても近くなります。
そして唇にと唇がくっつく感触。
この瞬間がとっても幸せなんです。

明久「……っぷはぁ……これでいいかな？」
私「はい、無理を言ってごめんなさい」
明久「じゃあそろそろ時間だし戻ろうか」
私「そうですね。喫茶店のお手伝いに行かないと」

二人で屋上を出て、Ｆクラスの教室に向かいます。

私「明久君、大好きです」

明久「僕もだよ、瑞希」

明久君から、嬉しい言葉をもらって。

Ｆクラスの経営する喫茶店、執事喫茶『ｄ？ｌｉｃｉｅｕｘ』に戻ってきた私達は、すぐに真琴君に声をかけられました。

真琴「明久に姫路か。戻ってきたとこ悪いけどホールの手が足りないから入ってくれ」
私「はい、ガンバリマス！！」
明久「任せてよ！」

急いで執事服に着替えて準備をします。
ちなみにこの服、土屋君のお手製。

私「明久君、頑張りましょうね！」
明久「うん、頑張ろうね、瑞希！」

こうして、ほんのわずかな、短い明久君とのデートは終わり、また清涼祭を成功させるために頑張る時間がやってくるのでした。

明久君にまたキスをせがんじゃおうかな……？

第三十一話　僕と瑞希と学園祭めぐり（後書き）

次回は真琴と美波のお話です！
感想お待ちしております！

第三十二話　オレと美波と学園祭めぐり（前書き）

お気に入り登録件数３０件超えました！
これからよろしくお願いします！

第三十二話　オレと美波と学園祭めぐり

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。

『喫茶店以外で行ってみたい出し物はなんですか?』

姫路瑞希の答え

『お化け屋敷』

教師のコメント

一般的ですが姫路さんはお化けの類は苦手では無かったですか?

吉井明久の答え

『ただで飲み食いできる場所』

教師のコメント

ありません。

島田美波の答え

『屋上でアイツと……』

教師のコメント

出し物を書いてください。

峰嶋真琴と坂本雄二の答え

『かかってこいやぁぁ！！』

教師のコメント

常夏コンビの相手をお願いします。

霧島翔子の答え

『結婚式場』

教師のコメント

坂本君と末永くお幸せに。

真琴ｓｉｄｅ

明久と姫路が戻ってきてから１１時までの３０分はオレと島田が自由行動できる時間帯だった。
召喚大会一回戦のときに約束もしたので二人で他のクラスの出し物を見て回ることにした。

美波「見てよ峰嶋、お化け屋敷だって」
オレ「島田はお化けとか得意なのか？」
美波「……苦手」
オレ「じゃあ何でお化け屋敷の存在をオレに認識させたんだ？」

苦手なら何も言わずにスルーすればいいのに。

美波「いいのっ！そんなことより、クレープあるみたいだから食べ

てみない？」
オレ「オレは別にいいぞ」

そういうや前に明久と姫路がデートしたときもクレープ食べてたっけ。
女子ってクレープとか甘いものが好きなんだな。

美波「当然峰嶋がおごってくれるのよね？」
オレ「やっぱそうなるんだな……」

買ってもらうのも好きなんだな……

買ったクレープを落ち着いた場所で二人で食べる。

オレ「やっぱコーヒーが欲しくなるな……」
美波「峰嶋は甘いものとか苦手なの？」
オレ「苦手ってほどでもないけど、普段からあまり食べないからな……」

普段からそういうものに縁が無い上にみどりに付き合わされて時々食べる程度だったから、クレープとか甘いものはあまり得意じゃない。

美波「あのさ、召喚大会で優勝か準優勝したら、如月グランドパークのペアチケットがもらえるじゃない？」
オレ「ああ、訪れるカップルを無理やり結婚まで持ってくって言うアレか」

明久と姫路には丁度いいと思って両方に教えた奴だな。
うまく行ってお互いでお互いを誘ったみたいだ。

オレ「それがどうかしたのか？」
美波「その、もしチケットが手に入ったら、ウチと行ってくれたりとか……」
オレ「オレは別にかまわないけど……なんでオレなんだ？」

どうせ誘う当てもないし、手に入れたら売り払おうかとか考えてたくらいだから一緒に行くこと自体はかまわない。
けどなんでオレなんだ？

美波「その、一緒に行きたいからに決まってるでしょ！」
オレ「オレと……か？」
美波「そ、そう！アンタと！それから、ウチは今から峰嶋のこと真琴って呼ぶから、真琴もウチのこと美波って呼びなさい！」
オレ「ええ！？いきなり何を言って……」
美波「いいから、呼ぶの！！」

呼ぶの！！って言われても困る。
女子を名前で呼ぶなんてそれこそみどりくらいに長い時間一緒にいた奴くらいだしそもそも異性を名前で呼ぶなんて考えもしなかった（みどりは別）。
それをいきなり、呼ぶの！！って言われても……

美波「ほら、呼んでみて」
オレ「わ、分かったよ……えっと、美波」
美波「なに、真琴？」
オレ「いや、呼んでみてって言われたから呼んでみただけ……」

とオレが言うと美波がムスッとする。
なんだ？オレなんかしたか？

オレ「なんだよ……」
美波「別に、なんでもないわよ」
と言って美波は向こうを向いてしまう。
でも、そのときにしたにおいがオレの鼻に留まる。

オレ「いいにおい……」
美波「えっ？」
オレ「あ、いや、なんでもないんだ」

美波からいいにおいがしたなんて死んでも言えない。
ていうか言ったら殺されるんじゃないか？

美波「……真琴は」
オレ「な、なんだ？」
美波「真琴は、ウチと一緒に居て、楽しい？」
オレ「急にどうしたんだよ？」
美波「いいから答えて！」

一緒に居て楽しいかどうか？
そういう風に聞かれると、オレは多分こう思ってると答えるだろう。

オレ「……オレは、一緒に居て楽しいし、いてくれて嬉しい」
美波「……嬉しい？」
オレ「オレみたいな化け物なんかと一緒に居てくれて嬉しい。けど、それと同時に悪いとも思ってる。美波はオレなんかより、もっと普通の奴といた方がいいよ」

ずっと化け物だ怪物だと蔑まれて生きてきたし、自分で化け物の自

覚があった。
小学生の癖に中学の勉強が出来る。忘れることが無い。喧嘩で年上を簡単に倒す。
そんな奴がいたら誰だって化け物だと言うだろう。

美波「……そんなこと言わないで」
オレ「……？」
美波「化け物だなんて言わないで……真琴は化け物なんかじゃないから」
オレ「……」
美波「真琴は化け物なんかじゃない……普通よりもちょっと優秀なだけだから、だからそんなこと言わないで……」
オレ「……ごめん」

初めてだった。否定してくれた。
誰にも打ち明けなかった自覚を否定してくれた。
誰もがオレのことを化け物だ異端だとののしった。
それを初めて否定してくれた。
そんな美波の存在がオレにとってどういうものかをこのときのオレはまだ理解していなかった。

？？「根本。これであの二人を倒してくれ……」
根本「……断るといったら？」
？？「お前の彼女はどうなるかな……？」
根本「……分かった。やればいいんだろ」

第三十三話　僕と根本と守りたい人

バカテスト　現代社会

問　以下の問に答えなさい。

『ＰＫＯとは何か答えなさい』

姫路瑞希の答え

『Ｐｅａｃｅ－ｋｅｅｐｉｎｇ　ｏｐｅｒａｔｉｏｎｓ（平和維持活動）の略。国連の勧告のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動のこと』

教師のコメント

そうですね。豆知識ですが、Ｕｎｉｔｅｄ　Ｎａｔｉｏｎｓ　Ｐｅａｃｅｋｅｅｐｉｎｇ　ｏｐｅｒａｔｉｏｎｓ　とも呼ばれたりします。余裕があれば覚えておくといいでしょう』

土屋康太の答え

『Ｐａｎｔｕ　Ｋｏｓｈｉ－ｔｕｋｉ　Ｏｐｐａｉの略。世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体のこと』

教師のコメント

君は世界の平和を何だと思ってるんですか。

吉井明久の答え

『パウエル・金本・岡田　の略』

教師のコメント

それはセ界の平和を守る人たちです。

峰嶋真琴

『パンチと拳で嘔吐　の略』

教師のコメント

暴力行為もほどほどに。

明久ｓｉｄｅ

召喚大会二回戦。
相手はＢクラス代表の根本君って聞いたけど、また何か卑怯な手でも使ってくるんだろうか？

瑞希「明久君、二回戦も頑張りましょう」
僕「……うん、そうだね」

根本君がどんな卑怯な手を使ってきても関係ない。
ようは勝てばいいのだから。

司会『それでは召喚大会二回戦を始めます！青コーナー、二年Ｆクラス、姫路瑞希、吉井明久ペア！』

司会の合図で前に出る。

司会『赤コーナー、２年Ｂクラス、根本恭二、二年Ｃクラス、小山

優香ペア！』

向こうから根本君とCクラス代表の小山さんがやってくる。
なんだろう？根本君が小山さんを見て、悔しそうな顔をしてるような……？

司会『では、召喚してください！！』

４人「試獣召喚（サモン）！！」

Ｆクラス　姫路瑞希　英語Ｗ　４１５点
　　吉井明久　英語Ｗ　１２０点

ＶＳ

Ｂクラス　根本恭二　英語Ｗ　１９９点
　　小山優香　英語Ｗ　１６５点

瑞希「明久君、英語の点数も上がってますね」
僕「それでも決して高い点数じゃないけどね」

瑞希に１週間も教えてもらったのに、英語は他の教科よりも点数が低い。

根本「……クソッ」
小山「どうしたの恭二？Ｆクラスにしては高い点数だけど、それでも勝機はあるじゃない」

根本君がさっきからおかしい。
まさかまた卑怯な手を使おうってんじゃ……

根本「……吉井、姫路、すまない……」

根本君がなにか言ってるけどこっちまで聞こえない。

根本「姫路、これを見『まあ落ち着こうよBクラス代表』な……！？」

僕達4人が一斉に司会のほうを見る。
そこには司会からマイクを奪った真琴がいた。

真琴『根本。お前が素直に吐いたら今回のことは見逃してやるけど？」

根本「な、何のことだ！？」

僕「真琴！ソイツはまた瑞希を脅そうとしてるんだよ！？見逃していいわけが……」

真琴『だから落ちつけっての。根本、誰に命令されてる？』

え？命令？

根本「命令されてなんか……」

真琴『お前の表情見てたら分かるっての。それをおとなしく姫路に返して、誰に命令されてるか言ったらお前を見逃してついでにお前の彼女の安全も保障してやる』

小山「恭二……どういうこと？」

根本「峰嶋……その話、信じていいのか？」

真琴『勿論。なんならそいつの死体、お前の前に持ってきてやってもいいぞ』

また真琴が物騒なこと言ってる。

根本「分かった……姫路、これは返す。すまなかった」
瑞希「根本君……」
真琴『で、誰の差し金だ?』
根本「名前は分からないが、三年でボウズとモヒカンの奴だ」

それってさっきの営業妨害の二人じゃないか?

真琴『常夏コンビか……ちょっとシバきに行ってくるかな……じゃあ後は二人に任せるよ。司会、マイク返すぞ』

真琴はマイクを司会に返すとどこかに行ってしまった。

小山「恭二……どういうことか説明して」
根本「三年の二人組みに、さっきの手紙を渡されて、優香を傷つけられたくなかったらこれを使って吉井と姫路を倒せって……」
僕「根本君……」
根本「本当はこんなことしたくなかったけど、優香のことを言われたら…逆らえなくて……!」

根本君の気持ちは僕にも痛いほど分かる。
僕にも瑞希という、守りたい人がいるから。

僕「分かるよ。その気持ち」
根本「!!……吉井」
僕「僕にも、瑞希がいるから……守りたい人がいるから。だから正々堂々勝負しよう。根本君」
瑞希「私も、正々堂々勝負したいです」

根本「吉井……姫路……」

根本君は涙を流していた。

小山「恭二……私のために……ありがとう」

根本「いいんだ。吉井、姫路俺達は全力で行く。お前達も全力で来てくれ！！」

僕「勿論だよ！全力で勝負だ！根本君！」

司会『それでは試合、開始！！』

司会の合図と同時に僕と瑞希の召喚獣が小山さんの召喚獣に攻撃する。

点数の低いほうから2対1で倒す作戦だ。

根本「優香！！」

そこに根本君のサポートが入る。

瑞希「根本君、ごめんなさい！！」

飛び込んできた根本君の召喚獣に瑞希の熱線が直撃。

Bクラス　根本恭二　英語W　0点

僕「こっちは僕が！！」

小山「Fクラスなんかに負けてられないのよ！！」

小山さんの召喚獣の持ってるランスが僕の召喚獣の頬をかする。

大振りな動きで出来た隙に木刀をドンドン打ち込んでいく。

僕「止めだ！！」

隙が出来たのど元を木刀が貫く。

Ｃクラス　小山優香　英語Ｗ　　０点

司会『勝者、二年Ｆクラス、姫路瑞希、吉井明久ペア！』

僕「よっしゃぁ！！」

司会の勝利宣言が響く。

小山「ごめん恭二。負けちゃった……」

根本「いいんだ」

お。向こうもいい感じになってるみたいだ。

瑞希「明久君、早く戻りましょう」

僕「あ、そうだね」

根本君たちもほっといて欲しいだろうし、僕達はさっさと執事喫茶に戻ることにした。

真琴「お疲れ様。どうだった？」
僕「勝ったけど……これはどういうこと？」

執事喫茶にはお客さんが一人もいなかった。
ついさっきまで満席だったのに……

真琴「見てのとおりだ。常夏コンビが営業妨害でもしてんのかねぇ……」
僕「常夏コンビといえば……さっきシバくとか言ってたけど……」
真琴「見つけ出して両手両足の関節外してきた」
瑞希「それが原因じゃないですか？」
真琴「そんなに暇じゃないだろ。曲がりなりにも三年なんだし」

真琴の言うことも最もだ。三年は受験勉強で忙しいはずだから、たかが学園祭で営業妨害なんてするはずが無いのに。

僕「そういえば雄二は？」

真琴「便所に行くって言ってたぞ」

そのとき、外から雄二と小さな女の子の声が聞こえてきた。

？？『お兄さん、すいませんです』

雄二『いや。気にするな、チビッ子』

葉月『チビッ子じゃなくて、葉月ですっ』

秀吉「お、雄二が戻ってきたようじゃの」

真琴「雄二に妹なんていたのか？」

僕「いや、聞いたことも見たことも無いけど……」

雄二『んで、探してるのはどんな奴だ？』

葉月『あの、葉月はお兄ちゃんを探してるんですっ』

雄二『お兄ちゃん？名前はなんて言うんだ？』

葉月『あぅぅ……わからないです……』

雄二『？　家族の兄じゃないのか？なら特徴とかはないか？

雄二が子供と一緒にいるなんて想像……できる。

意外と子供好き？

葉月『えっと……バカなお兄ちゃんでした！！』

女の子からものすごい特徴が発せられる。

雄二『沢山いるな』

雄二の言う沢山の中には僕や真琴も含まれてるんだろうか？
気になるところだ。

葉月『そうじゃなくて、とーってもバカなお兄ちゃんだったんです！』
雄二『明久だな』
真琴「明久だな」
瑞希「明久君ですね」
美波「吉井ね」
秀吉「明久じゃな」

僕以外の全員が声をそろえて僕の名を言う。
ていうか瑞希くらいは言わなくてもいいんじゃないの！？

僕「みんなひどい！！」
真琴「それが真実だからな」
葉月「あ！バカなお兄ちゃん！！」
真琴「ほらな」

なんだろう。このいい知れぬ敗北感。

僕「うーん……どこかであったような気はするんだけどなぁ……」
葉月「バカなお兄ちゃん、葉月のこと覚えてないですか？うぅ……葉月が折角、『バカなお兄ちゃん知りませんか？』って聞きながら来たのにー！！」

うわ、泣いちゃった！
ていうかそれでここを教えた人たちは僕のことを思い浮かべたんだろうか？

そう考えたら僕も泣きたくなってきた！！

真琴「葉月ちゃん、バカなお兄ちゃんはバカなんだよ。ごめんね」
秀吉「そうなのじゃ。バカなお兄ちゃんはバカじゃからな。すまぬのう」
雄二「バカでバカで仕方ないからバカなお兄ちゃんなんだよ。悪いな」

君達はここぞとばかりに僕を侮辱してるよね？

瑞希「明久君、小さい女の子を泣かすのはどうかと思うんですけど……」
僕「僕も泣いていいかな……？」

皆にここまでバカだバカだといわれると泣きたい。マジで。

葉月「バカなお兄ちゃんと結婚の約束までしたのに！！」
瑞希「明久君、私とは遊びだったんですか……？」
真琴「落ち着けって。子供の言うことをそんなに真に受ける必要は……」
葉月「ファーストキスまであげたのに！！」
瑞希「ひどいです明久君！私は本気だったのに！！」
真琴「二股なんて最低だぞ」
僕「真琴が落ち着けよ！！それからファーストキスって言ってもほっぺだからね！？」

思い出したよ！！僕が観察処分者になるきっかけのあの子だ！！

真琴「なら大丈夫だな」
瑞希「でも、結婚の約束って……」

真琴「お前はいい加減にその発想から解放されろ」

全くだ。僕が好きなのは瑞希だけなのに。

真琴「まあそれはいいとして「葉月!?どうしてここにいるの!?」……そろそろ本題に入りたいんだが……」

葉月「あ、お姉ちゃん!」

僕「お姉ちゃん?島田さんの妹?」

美波「そうだけど……吉井は葉月と知り合いなの?」

僕「まあね。一年前にちょっとね」

真琴「んなことよりこの状態をどうするかだ」

真琴がイライラしながら言う。

この全くお客さんがいない状態をどうするか話し合いたいみたいだ。

葉月「葉月も手伝いたかったのに……残念です……　！　そういえば葉月、ここに来るまでにいろいろ聞いたです!」

秀吉「色々とは?」

葉月「執事喫茶は汚らしいから行かないほうがいいって」

瑞希「そんな……」

美波「ちゃんと掃除もしたし、来てくれた人もみんな満足してたのよ?」

雄二「二人を除いて、な」

雄二が真琴を見ながら言う。

真琴「……常夏コンビのことだろ。オレが二回もボコッた」

美波「あんたそんなことしてたの……?」

真琴「だってオレの料理が不味いって抜かしやがるから……」

そういえばいたね。そんなやつ等。

雄二「で、それはどこで聞いたんだ？」
葉月「短いスカートをはいた綺麗なお姉さんがいる――」
僕「行くぞ雄二！早く調査せねば！！」
雄二「まったくだ明久！我がクラスの成功のために、（低いアングルから）綿密に調査しないと！！」

葉月ちゃんの言葉を聞くや否や全力でダッシュ。
瑞希の転校に関わることだから後悔しないように全力で調査しないと！！

瑞希「明久君、ひどいです！！」
葉月「バカなお兄ちゃんのバカ！！」
真琴「あほ……」

そんな言葉は僕には聞こえなかった。

「執事喫茶は汚いぞ！」
「Fクラスだもんな！しょうがねえって！！」

第三十四話　みどりと秀吉と意外な相手（前書き）

唐笠さん、感想ありがとうございました！

第三十四話　みどりと秀吉と意外な相手

バカテスト　英語

問　次の英文を和訳しなさい。

『In my thing, my thing and your thing are my things』

姫路瑞希の答え

『俺の物は俺の物、お前の物も俺の物』

教師のコメント

正解です。ドラ○もんに出てくるあの人の台詞ですね。

峰嶋真琴の答え

『ジャ○アン』

教師のコメント

正解……なのでしょうか？

吉井明久の答え

『坂本雄二』

教師のコメント

今すぐ坂本君に謝って……

坂本雄二の答え

『俺』

教師のコメント

こなくても結構です。

明久ｓｉｄｅ

雄二「明久、ここはやめよう！！」

葉月ちゃんに教えてもらった桃源郷は、『メイド喫茶【ご主人様とお呼び！】』というＡクラスの店だった。

僕「なに言ってるのさ雄二。ここまできて帰るなんてありえないでしょ」

たぶん雄二は霧島さんを警戒してるんだろう。
そんな必要ないのに。

真琴「明久。逃げるならお前だと思うぞ」
僕「え？」
真琴「さっき姫路が冥土の土産がどうとか言ってたからな」
僕「……（ダラダラ）」

冥土の土産って死ぬときに出てくる奴のこと？
いや、そんなことよりもこのメイド喫茶に……

瑞希「明久君……」

僕「ビクッ！！」
真琴「姫路……それはなんだ？」
瑞希「えっと、明久君はこういうのが好みなのかなって……」

振り返ると瑞希が持っていたのはメイド服？
冥土じゃなくてメイドってこと？

瑞希「明久君はこういうのが好みなんですか？」
僕「僕は瑞希だったら何を着ても可愛いから大丈夫だよ」
真琴「……付き合ってらんないな。行くぞ美波」
美波「坂本は？」
真琴「霧島に引き渡せばいいだろ」

僕と瑞希がトリップしてる間に真琴と島田さん、葉月ちゃんと雄二は中に入っていた。

雄二「やっぱＡクラスだな……。綺麗すぎるくらいだ」
真琴「フリードリンクがあるから出すものにも困りにくいんだろうしな」
美波「……アレを土屋だと思うのはウチだけかしら？」

島田さんの視線の先にはムッツリーニがいた。

僕「ムッツリーニ、何してるの？」
康太？「……人違い」
美波「どう見ても土屋でしょ」
康太？「……人違い」
雄二「新学期初日の姫路の下着の色は？」
康太「みずいろ」
真琴「コイツ、ムッツリーニだ」
康太「……無念」

即答だった。

瑞希「土屋君、そういうのは人には言わないでください！」
真琴「覗かれたこと自体はいいのかよ……」

瑞希は相変わらず突っ込むところが違った。

美波「そんなことより早く座りましょ。真琴はおごってくれる？」
真琴「さっき奢ったばっかだろうが……ほどほどにしろよ？」
僕「？　二人ともなんか仲いいね」
真琴「別にたいしたことは「吉井もそう思う？」……何を言ってるんだお前は」

入り口で騒いでいても迷惑なだけなので皆で席に着く。

翔子「……お帰りなさいませ、ご主人様にお嬢様」
僕「あ、霧島さん。綺麗だね」
翔子「……吉井、ありがと」
真琴「姫路のオーラが嫉妬属性に変わってるな」
瑞希「明久君、翔子ちゃんばっかり見てひどいです……」

あ、何か怒らせたみたい。

僕「瑞希はもっと綺麗で可愛いよ」
瑞希「そ、そうですか？…ありがとうございます」
真琴「……常夏コンビはどこかな？」
美波「……早く探さないとマズいわね」

この二人、僕達のことを見てない気がする。

翔子「……今夜は帰しません。ダーリン」
雄二「……今すぐ帰っていいか？」

この二人は相変わらずだった。

翔子「……メニューをどうぞ」

霧島さんがメニューを渡してくる。

葉月「葉月、ふわふわシフォンケーキが良いです！」
瑞希「私もそれでお願いします」
美波「ウチもそれで。いいわよね真琴？」
真琴「かまわないぞ。オレはホットコーヒーをもらいたい」
僕「僕は……水で」
雄二「俺は……」
翔子「……ご注文を確認します」

雄二の注文を聞かずに霧島さんが確認する。

翔子「ふわふわシフォンケーキを3つ、ホットコーヒーを1つ、水を1つ、メイドとの婚姻届をひとつでよろしいですか？」
真琴「ああ、それでいい」
雄二「いいわけねえだろ！！」

まったく、雄二も素直じゃないなぁ。

？？「ああ、この店はきれいでいいなぁ！！」
？？「全くだ！汚いFクラスの執事喫茶とは大違いだな！！」

とそこへ響く薄汚い声。

真琴「となコンビだ」
美波「それはいくらなんでも略し過ぎじゃない？」
雄二「翔子、あいつらはいつからここにいる？」
翔子「……かなり前から……3回ほど出入りしてた。話の内容もひどくなる一方」
僕「霧島さん達から見ても、あまり楽しい客じゃないって事だね」

翔子「……当然。Fクラスは頑張ってる。雄二をバカにされてるみたいで嫌だから」

霧島さんは本当に一途だなぁ。

真琴「さてどうするよ代表。何ならまたオレがあいつらシメてくるけど？」

美波「アンタがそういうことするから相手もムキになってるんじゃないの！」

真琴「オレのせいじゃねーだろ！！」

今度は真琴と島田さんが口喧嘩始めちゃった……

でもどうしたものかな……

常村「Fクラスの執事喫茶は料理も不味いし、ウェイターもウェイトレスもブスとかブサイクとかばっかだし、ここは大違いだな！！」

夏川「あんなとこ、近づくだけで気持ち悪くなってくるな！！」

真琴「あいつら……！殺す！」

雄二「落ち着けって。ここで殴りかかっても、俺達の悪評が余計に広がるだけだ」

真琴「なら人が見てないとこでぶっ殺してくる！！」

雄二「とりあえず殺すって発想を改めろ」

真琴「……なら生死の瀬戸際に追い込むまで拷問して痛めつける」

雄二「言いなおそう。お前は黙ってろ」

雄二の判断は正しいかもしれない。

真琴をこのまま放っておいたらマジに常夏コンビに襲い掛かりそうだ。

雄二「姫路、さっきのメイド服貸してくれ。翔子！メイド服を1着貸してほしいんだが」
翔子「……分かった」

といって着ているメイド服を脱ぎだす霧島さん……って何やってんのこの人は！？

瑞希「だ、ダメですよぅ翔子ちゃん！明久君の前でそんなことしないでください！！」
美波「真琴がいるんだから、やめてよね！！」
葉月「わー、お姉さんお胸大きいですね」

二人の言ってることは正しいようでなんかおかしい気がする。

翔子「……だって雄二が私の身体を欲しいって言ったから」
雄二「俺が欲しいのはメイド服で、それも予備があったらの話だ！！そんなことは言ってねぇ！！お前の妄想癖はどこまで悪化してるんだ！？」
翔子「……今もって来る」
雄二「あからさまにがっかりするな！！」

霧島さん、そんなに雄二のことが好きなんだ。
雄二も幸せものだなぁ……

瑞希「坂本君、メイド服なんてどうするんですか？」
雄二「勿論着るんだ」
僕「瑞希、可愛いと思うよ？」
真琴「美波、着てみろよ。似合うと思うぞ？」
瑞希＆美波「「そ、そう（ですか）？なら……」」

雄二「明久と真琴がな」
僕＆真琴「「断る」」

真琴と声が重なる。
なんでメイド服なんか着なきゃいけないんだ。

瑞希「明久君……着てください……」
僕「う……」

こ、この上目遣いは最強だ！
こんな顔されたら着るしかない！！

僕「雄二！！僕は着るよ！！」
雄二「そうか……あとは真琴だな」

真琴のほうは島田さんが色仕掛けをしていた。

美波「真琴……着て？」
真琴「上目遣いなんかしても無駄だからな。オレはそんなことで落とされない」
美波「じゃあアンタの関節全部外すわ」
真琴「喜んでやらせていただきます」

あ、落ちた。
案外簡単に落ちたね真琴。

雄二「んじゃ作戦の説明と着付けだな。姫路に島田、頼むぞ」
瑞希「すっごく可愛くしてあげますから、安心してください」
美波「まかせてよ！」
僕＆真琴「すっごく不安だ……」

～しばらくお待ちください～

真琴「……」
僕「……ブラまでするなんて」
瑞希「明久君……凄く可愛いです」
美波「真琴…可愛いわ……」
僕&真琴「嬉しくない！！」
雄二「よし、行って来い！！」
僕「くそう……行ってくるよ……」
真琴「雄二、後で覚えてろよ……」

完璧（？）な女装をした僕と真琴は常夏コンビに近づく。
まずは僕が夏川（ボウズ）に近づいて……

僕「……（ガシッ）」
夏川「お、なんだ？俺のこと好きとかか？結構可愛いな……」
僕「くたばれェェェ！！」
夏川「うおお！？」

うまくバックドロップを決める。

僕「こ、この人、私の胸触ってきました！！」
夏川「ってえな！！テメエ男じゃ…」
真琴「黙りなさいこの変態！！」

真琴が眼一杯にボウズの顔面を踏みつける。

真琴「（コイツラのせいで女装する羽目になったんだ！！全力で踏み殺してやる！！）」

真琴は怒っていた。
それもムチャクチャに。

僕「こ、この人、私のスカートの中覗いてます！！」
常村「な、何言ってんゴブゥ！！」
雄二「公衆の面前で痴漢行為とは見下げた野郎どもだ！！」
常村「な、お前の目は節穴か！？被害者は俺らだろ！？」
雄二「何を言う。お前らは加害者だ」

正直僕も節穴だと思う。

っとその間に……

夏川「……あれ!?何だこれ!?取れねえぞ!?」

夏川の頭に瞬間接着剤を塗り、その上にブラを装着!!

雄二「な?加害者だろ?」

常村「どう見てもちげーだろ!!クソッ!逃げるぞ夏川!!」

夏川「ま、まて常村!!」

あ、二人に逃げられた。

雄二「まあアレだけやってれば十分だろ。明久と姫路はもうすぐ大会だから行って来い」

僕「うん、じゃあ喫茶店は任せたよ」

瑞希「行ってきますね」

真琴「こっちは問題ないぞ。……さて雄二、ちょーっといいかな?O☆HA☆NA☆SHIがあるんだけど?」

雄二「イィィィイィィィィヤァァァァァア!!」

あ、雄二の悲鳴。

まあ自業自得だよね。

瑞希ｓｉｄｅ

召喚大会三回戦。
真琴君と美波ちゃんのチームは準決勝進出が決まっていて、坂本君たちの相手は食中毒だとか……
とにかく、私達もこれに勝てば準決勝進出です！！

司会『青コーナー、二年Ｆクラス、姫路瑞希、吉井明久ペア！！』
私「明久君、頑張りましょう！これに勝てば準決勝です！」
明久「うん、頑張ろう！！」

ここまで来ると残っている相手もきっと強い相手ばかりだと思いますけど、私と明久君のペアなら勝てると信じています！

司会『対するもＦクラス！名川みどり、木下秀吉ペア！！』

え!?Fクラス!?しかも相手がみどりちゃんと木下君だなんて……

みどり「あ、アッキーに姫ちゃん!!よろしくね～」
秀吉「明久、お主には悪いがここで負けてもらうぞい!」

秀吉君は別として、みどりちゃんの点数は未知数。
しかもここまで残ってるんですから、相当高いはずです。

司会『それでは召喚してください!』
明久「相手が誰であろうと倒すだけだよ!試獣召喚(サモン)!!」
みどり「アッキーにあたしが倒せるかな?試獣召喚(サモン)!!」
私「相手がみどりちゃんでも負けません!試獣召喚(サモン)!!」
秀吉「わしの底力、見せてやるのじゃ!!試獣召喚(サモン)!!」

フィールドは物理、私の物理の点数はかなり高くて、４５０点を超えていたはずです!

Fクラス　姫路瑞希　物理　４６８点
　　吉井明久　物理　１５５点

ＶＳ

Fクラス　名川みどり　物理　８８９点
　　木下秀吉　物理　８８点

私&明久「８８９点!!?」

真琴君レベルの高得点です。

みどりちゃんってこんなに点数いいんですか！？

みどり「いくよ姫ちゃん！！」

私「……あれ？」

なんだかみどりちゃんの召喚獣がしっかり剣を振れていません。

もしかしてみどりちゃん、まだ召喚獣がちゃんと使えないんじゃ……？

私「明久君、みどりちゃんは召喚獣の扱いに慣れてないみたいです！一気に畳み掛けましょう！！」

明久「わかったよ！！」

どんなに点数の高い召喚獣でもちゃんと扱えなければ意味がありません。

ふらついてるみどりちゃんの召喚獣に最大級の熱線を浴びせます。

Ｆクラス　名川みどり　物理　３８４点

みどり「ああ、一気に減っちゃった！！」

秀吉「援護するぞい、名川！！」

明久「秀吉の相手は、僕だ！！」

援護に入ろうとする木下君を明久君に食い止めてもらいます。

もう一発熱線を浴びせれば、恐らく戦死するはずです！

私「みどりちゃん、ごめんなさい！！」

みどり「うっそ！」

Fクラス　名川みどり　物理　　0点

あんなに高い点数だったのに、一気になくなりました。
防御もロクに出来ないから、攻撃はすべて直撃です。

明久「ごめん秀吉！止めだよ！」
秀吉「ぐ……わしの負けじゃ……」

明久君も勝ったようです。
これで私達の準決勝進出が決定したのです。

私「明久君、やりましたね！！」
明久「瑞希、これであと2回だ！！」

準決勝からは一般のお客さんも召喚大会を見に来ます。
お父さんも見に来てくれる約束ですから、Fクラスの点数は低くないって教えるチャンスなんです。

私「明久君、早く戻りませんか？」
明久「うん、秀吉たちも早く戻ってね～」
秀吉「大丈夫じゃ、後で手伝いに行くのじゃ～」

こうして、召喚大会三回戦も勝ち抜いたのでした。

「あの子達だ。よろしく頼んだよ」
「わかりやした。金は後で……」

第三十四話　みどりと秀吉と意外な相手（後書き）

召喚大会の準決勝と決勝は二日目です！
そして次回、あの事件とアイツが……！？

第三十五話　狂気と誘拐と帰り道（前書き）

ＰＶ４００００　ユニーク４５００行きました！
これからもよろしくお願いします！

第三十五話　狂気と誘拐と帰り道

バカテスト　化学

問　以下の（　）に入る言葉を書きなさい。

『ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（　）である』

姫路瑞希の答え

『水酸化カルシウム』

教師のコメント

正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要な内容なので確実に覚えておいてください。

土屋康太の答え

『塩化吸収剤』

教師のコメント

勝手に便利な物質を作らないように。

吉井明久の答え

『アンモニア』

教師のコメント

それは反則です。

峰嶋真琴の答え

『夏川俊平と常村勇作を殺すこと』

教師のコメント

そんなことをしてもアンモニアは生成されません。

真琴ＳＩＤＥ

オレ「ふ～、残るは明日の準決勝と決勝か……」

どこで明久たちと当たるのかは分からないがどうせなら決勝戦で当たりたい。
そのほうが楽しいし、面白いからだ。

オレ「トイレ混むんでたなぁ……早く戻らないと……」

少しトイレに行かせてもらうだけのつもりだったのに、なぜかムチャクチャ混んでて１５分ほど掛かってしまった。

康太「……真琴」
オレ「どうしたムッツリーニ。そんなに息を切らせて」
康太「……島田たちが誘拐された」
オレ「……詳しく話せ」

オレと明久と雄二が見事に３人ともいなくなった時間が５分ほどあった。
その間に美波と妹、姫路とみどりと秀吉が連れて行かれたらしい。

オレ「どこにいるかは分かってるのか？」
康太「……案内する。明久と雄二が先に行ってる」
オレ「案内してくれ」

常夏コンビ……ここまでやってくれるとは思わなかったぞ……
絶対にぶち殺してやる。

ムッツリーニに案内されたのは文月学園から5分くらいのカラオケ

ボックス。
ここに美波たちがいるらしい。
どうして分かったかとかそんなことはもうどうでもいい。
乗り込んでぶち殺して来るだけだから。

オレ「雄二」
雄二「真琴か。この中だ」

そう言って雄二が指差すのはかなり広いと思われる部屋。

オレ「だったらさっさと乗り込んで中にいる奴ら全員殺して……」
雄二「落ち着け。ムッツリーニが忍び込むからそこからチャンスが出来るまで待つんだ」
オレ「ふ……っざけんな！んなの待ってられるか！明久、お前はそれでいいのかよ！？」
明久「僕だって乗り込みたいけど、確実に瑞希たちを助けるためには仕方ないんだよ！」
オレ「仕方ないだと……！？テメエ、本気で言ってんのか！？」
雄二「二人とも冷静になれ！」

オレ達が外で言い合ってると、中から声が聞こえてきた。

？？『さて、どうする？坂本と吉井と――峰嶋だったか？こいつら人質にすればのこのこやってきそうだな』
？？『待て、吉井と峰嶋は知らんが。坂本はかつて悪鬼羅刹と呼ばれてたらしいぞ』
？？『悪鬼羅刹というと、あの坂本か！？』
？？『ああ。出来ればやりあうのだけは勘弁したいな……』
？？『だが依頼はその三人を動けなくすることだろ？なら多少やりあうことは覚悟したほうがいいだろ』

覚悟も何もこっちは殺る気満々だっての。

明久（雄二、こいつらって……）

雄二（そこら辺のチンピラだろ。黒幕に金で雇われた、な）

真琴（そんなことより早くあいつらを切り刻んで……）

雄二（だから落ち着けって言ってるだろうが！！）

そのとき、中から聞こえてくる葉月ちゃんの声。

葉月『お、お姉ちゃん……』

美波『アンタたち、いい加減葉月を話しなさいよ！！』

だめだ美波……

相手を挑発するような言い方はしないでくれ……

？？『お姉ちゃん、だってさ！かっわいいー！』

？？『ぎゃははは！！』

抑えるんだ。雄二の言ってることは正しい。

ここでオレ一人が先走ったところで全員を無傷で助けられる保証なんてどこにもない。

？？『で、このオネーチャンたちどうする？俺らの好きにしちゃっていい訳？』

？？『ならオレこっちの巨乳のねーちゃんで！！』

？？『あっ、ズリー！！なら俺二番目ね！』

抑えろ…。抑えるんだ…。

ここで暴走しても意味なんかない…

瑞希『あ、あのっ、葉月ちゃんを放して、私達を帰らせください！！』

？？『だってさ～、どうする？』

？？『それはオネーチャンたちの頑張り次第だよな？』

ムッツリーニがうまくやってくれるはずだから……

瑞希『や、触らないでください！』

？？『うっせーなぁ！！』

瑞希『きゃあ！』

ガシャン！

……オサエルッテナニエヲ？

美波『アンタたち、いい加減に……』

？？『おめえも黙ってろ！』

美波『きゃあ！』

葉月『お姉ちゃん！』

抑えるものって何？

もう、暴れてもいいよな？

オレ「明久、やるぞ」

明久「わかってる。僕ももう、我慢なんて出来ないから」

雄二「お、おい、お前等……」

二人で同時に立ち上がって、二人で同時にドアを蹴破る。

瑞希「明久君……？」
美波「真琴……？」

姫路や美波以外にそこにいた、６人の男どもも呆然としている。

オレ&明久「「邪魔するぞ！！クズ野郎ども！！」」
男「こいつら、吉井と峰嶋だ！」
男「たった二人で乗り込んでくるなんてバカだな！！やっちまえ！」

オレと明久に一人づつ襲い掛かってくる。
明久は知らないがたった一人が相手とはなめられたものだ。

オレ「死ね」
男「ゴブァァァ！？」

オレのパンチが顔面直撃。
顔を潰すくらいのつもりで殴ったから気絶くらいはしただろ。

男「ひ、く、来るな！こいつがどうなってもいいのか！？」

美波の近くにいたスキンヘッドが美波の首にナイフを当てる。
けど、そんなものに意味はない。

オレ「出来るならやってみろよ。そんな指で出来るならな」
男「えっ？」

一瞬で近づいてナイフを奪い、５本の指全てをへし折る。

男「あっ…ギャァァァ！！」
オレ「痛いだろうな……黒幕を吐いたらすぐに楽にしてやるよ」

痛みから解放してやるから。
死を持って。

男「誰が言うか……っっがぁあ!!」
オレ「次、左折るから」

スキンヘッドの右腕をつかんで、本来曲がらない方向へ曲げる。
美波なら関節外れる程度で済むんだろうけど、オレは手加減なんかしないから完全に折れる。

男「は、話す!話すって!教頭だ!竹原だよ!」
オレ「そうか。話してくれてありがとな。じゃあ死ね」
男「!!?　楽にするって……」
オレ「死ねば痛くないだろ?美波を傷つけた罰だ。さっさと死んで償え!!」

奪ったナイフをスキンヘッドの眼に突きつけて思いっきり振り上げ、おろそうとする。

オレ「消えうせろ!!」
男「や、やめろ、たすけて!!」
美波「もうやめて!!」

美波ＳＩＤＥ

真琴「出来るならやってみろよ。そんな指で出来るならな」

真琴はそう言うのと同時にウチを捕まえてる男からナイフを奪った。
奪って、指を折った。

真琴「痛いだろうな……黒幕を吐いたらすぐに楽にしてやるよ」

指を押さえて呻いているスキンヘッドを見下して、真琴は冷たく言い放つ。
真琴の眼を見て、直感した。
今の真琴は本気だって。
本気で殺そうとしてるって。

男「は、話す！話すって！教頭だ！竹原だよ！」
真琴「そうか。話してくれてありがとな。じゃあ死ね」
男「！！？　楽にするって……」
真琴「死ねば痛くないだろ？美波を傷つけた罰だ。さっさと死んで償え！！」

ウチの嫌な直感は当たった。
奪ったナイフをスキンヘッドの眼に刺そうとしている！！

ウチ「真琴……」

止めなきゃいけないのに、止められない。
真琴の眼が怖くて。
真琴が怖くて。
ふと、真琴が言っていた言葉を思い出す。

『オレは、化け物だから』

ウチ「もうやめて……」

やめさせたいのに、声が出ない。
早くやめさせないと、真琴が人殺しになってしまうというのに。

真琴「消えうせろ！！」
男「や、やめろ、たすけて！！」
ウチ「もうやめて！！」

やっと出た、真琴をとめる声。

ウチ「もういいから、ウチはなんともなかったから！！」
真琴「何言ってんだ？コイツは美波を傷つけたから、オレもコイツを傷つけるんだ」
ウチ「そんなのどうでもいいの！！」

思わず真琴の手を握り締める。

ウチ「真琴は人殺しなんかになっちゃだめ！！ウチの為に真琴が人を傷つけるとこなんて見たくない！！」
真琴「美波……ごめん」
ウチ「！！」

抱きしめてくれた。
真琴がウチを抱きしめてくれた。

真琴「美波がそう望むのなら、そうする」
ウチ「うん、でも危なくなったら自分のことを守ってね？」
真琴「……分かった」
ウチ「……あ、この人！」

すっかり忘れてたけど、このスキンヘッドの人、どうなったんだろ？

ウチ「……気絶してる」
真琴「普通の人間だったら気絶くらいはするからな……」
ウチ「……真琴」
真琴「なんだ？」
ウチ「……明日、後夜祭の後で駐輪場に来て！」
真琴「え？」
ウチ「…来てね？」
真琴「……分かった」

流石に今、ここで言う勇気はない。
吉井も瑞希もいるここでなんて、そんな勇気はウチにはなかったから。

瑞希ＳＩＤＥ

突然でした。
私と美波ちゃんが突き飛ばされたのと同時に、明久君と真琴君がド

アを蹴破って入ってきたのです。

明久&真琴「「邪魔するぞ!!クズ野郎ども!!」」

真琴君は美波ちゃんのほうへ、明久君は私のほうへと向かってきます。

明久「オォラァァ!!」

明久君が男の人を殴り飛ばして、すぐに私に駆け寄ってくれます。

明久「瑞希、大丈夫?」

私「はい、大丈…っ!?」

立ち上がろうとして、足首に痛みが走ります。

私「すいません……ちょっと挫いちゃったみたいです……明久君!後ろ!」

明久君の後ろにはガラスの灰皿を振りかぶった男の人がいました。

明久「グゥッ!!」

私「明久君!!」

強く背中を殴られた明久君はそのまま私のほうに倒れこんできます。

康太「……よくも明久を!」

その後ろから土屋君が明久君を殴った男の人を同じように気絶させました。

私「土屋君……！明久君が……！」
康太「……大丈夫、気絶してるだけ」
雄二「おいムッツリーニ、明久は大丈夫か？」
康太「……気絶してるだけ、問題ない。そっちは？」
雄二「２対１だったが楽勝だったぞ。ほらな」

坂本君が指差すほうには伸びてしまった男の人が２人。

雄二「秀吉も名川もチビッ子も無事だったみたいだしな」
真琴「そっちも終わったか」
雄二「まあな。にしてもあそこまでキレるとはな……」
真琴「面目ない……」

みどりちゃんは木下君にくっついていて、葉月ちゃんは美波ちゃんと一緒です。

真琴「黒幕が分かった。教頭の竹原だ」
雄二「教頭だと？」
康太「……意外な人物」
私「あの、どういうことですか？」

まだ状況が飲み込めません。

真琴「腕輪の不具合で学園長の失脚を狙ってる……ってとこかな」
雄二「また面倒なことに巻き込まれたな……」
秀吉「？　おぬし等、腕輪の不具合とは何のことじゃ？」

そういえば木下君は事情を知らないんでしたっけ。

雄二「召喚大会の賞品の腕輪は、ある程度の点数を持つものが使うと暴走するらしいんだよ」
真琴「あのババア問い詰めて、洗いざらい吐いてもらうか」
康太「……同感」
みどり「よくわかんないけど、だったら早くここを出たほうがいいんじゃない？気絶してる人が起きたらまた乱闘になっちゃうでしょ？」
雄二「そうだな。明久は俺が負ぶって行くから、真琴はチビッ子を家まで送ってくれ」
真琴「了解、代表」

……？
真琴君が坂本君を代表と呼ぶのは試召戦争に関わるときのはずだったのに……

葉月「チビッ子……じゃないです……グス……」
真琴「そうだね、ごめんね葉月ちゃん。今からオレとお姉ちゃんと一緒にお家に帰ろうね」
葉月「怖いお兄ちゃん、今は怖くないです……」
真琴「こ、怖いお兄ちゃん？」

さっきの真琴君の暴走は凄かったですから。
そこに転がってるスキンヘッドの人の右腕を見れば分かります。

美波「じゃあ先に行っててくれる？葉月を家に送ったらすぐ戻るから」

そう言って美波ちゃんと葉月ちゃん、真琴君は出て行きました。

私「じゃあ坂本君、明久君をよろしくおね…っ！」

立ち上がろうとしてまた足首に痛みが走ります。
そういえば挫いてるんでしたっけ。

みどり「ちょっ…姫ちゃん大丈夫!?」
私「はい、ちょっと挫いただけですから」
雄二「大丈夫か?」
私「大丈夫ですよ……これくらいは……」
みどり「全然大丈夫そうじゃないよ!?」

みどりちゃんの言うとおり、本当はぜんぜん大丈夫ありません。

明久「う……ん……」
雄二「お、起きたか明久」
私「明久君!大丈夫ですか!?」

明久君が起きたと聞いて思わず聞きます。

明久「イテテ……まあなんとか大丈夫……」
私「良かったです……」
雄二「よし、明久も起きたことだし、文月学園へ戻るぞ。明久、姫路を負ぶってやれ」

え?坂本君は何を言って……

明久「え?え?どうして?」
雄二「姫路は足を怪我してるんだ。お前が負ぶってやらなくてどうする」
私「ええ!?大丈夫ですよ!?ぜぜん痛くなんかないですから!!」
雄二「じゃあたってみろ」

私「あぅぅ……」

それを言われると……

明久「瑞希、痛くて立てないなら遠慮しなくてもいいよ？」

私「でも……」

明久「ほら」

そう言って明久君はしゃがんで私に背中を向けます。

私「なら……よろしくお願いしますね、明久君」

明久「これくらい大したことないよ」

私を負ぶってくれる明久君の背中はとても温かくて、大きかったのです。

真琴ＳＩＤＥ

葉月「怖いお兄ちゃん、笑うと可愛いお兄ちゃんですね！」
オレ「そ、そう？あ、ありがとね……」

怖いの次は可愛いか……
オレは小学生にまで中性的な顔と言われるのか？

葉月「怖くて可愛いお兄ちゃん、お家まで送ってくれてありがとうです！」
オレ「ああ、ここが美波の家か」
美波「そう、態々送ってもらって悪いわね」
オレ「別に大したことないって。二人で帰らせてまた誘拐でもされたら大変だからな」

美波や葉月ちゃんだけで帰らせるとまた誘拐騒ぎが起こる可能性がある。
そうならないように一緒に来ただけの話で、そこまで感謝されるようなことは何もしてない。

オレ「じゃあ葉月ちゃん、少しまっててね。お兄ちゃんたちはちょ

っと出かけてくるから」
葉月「あぅぅ……どこかへ行っちゃうですか？」
オレ「友達と約束があるからね」
葉月「なら、それが終わったらまたきてください！」
オレ「は？」

またきてって……なんで？

美波「葉月、無理言わないの。真琴が困ってるでしょ」
葉月「でも、葉月も怖くて可愛いお兄ちゃんにお礼したいです！」
美波「真琴だってずっと暇って訳じゃないんだから……」

いや、高校の課程を既に終えてるオレにとってはバイトが無い日は基本暇なんだけど……

オレ「美波さえよければ後でまた寄ってもいいけど？」
美波「ちょっと真琴まで……」
オレ「じゃあ葉月ちゃん、おとなしくいい子にしてたらまた後で来るからね？」
葉月「はいです！葉月、おとなしくいい子にしてです！」

こういう無邪気な笑顔って癒されるな～
おっと、勘違いしないで欲しいのはオレは決してロリコンではないからな？

美波「真琴……あんたもしかしてそういうのが好みなの？」
オレ「断じて違う」
葉月「お姉ちゃんとお兄ちゃん、行ってらっしゃいです！！」
オレ「ああ、行ってくるよ」
美波「葉月、いい子にしててね」

で、文月学園へと戻るわけで……

美波「……真琴」
オレ「なんだ？」
美波「あんたはみどりの事が好き？」
オレ「……みどりは妹みたいな奴だからな。そういう意味では嫌いじゃない」

ていうかいきなり何を聞いてるんだよ？

美波「恋人としては？」
オレ「そんな風に見たことは無いけど……いきなりどうした？」
美波「……なんでもないの」

なんなんだ一体？
今日の美波は何かヘンだ。
何かおかしい。

美波「ウチって……女の子に見える？」
オレ「見えるも何も……女だろ？」

美波「そういうことじゃなくて……ああ、もういいわ！早く行きましょ！」

美波は一人で先に行ってしまった。

オレ「なんなんだよ……」

第三十五話　狂気と誘拐と帰り道（後書き）

うーん……真琴は明久以上に鈍感でしたねぇ……

第三十六話　過去とババアと最強の召喚獣（前書き）

「お久しぶりですねクソババア」ｂｙとある最強の召喚獣

第三十六話　過去とババアと最強の召喚獣

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。

『召喚大会以外でイベントをするとすれば何がいいと思いますか？』

木下秀吉の答え

『売り上げ合戦』

教師のコメント

なるほど。清涼祭に取り組む意欲も上がりそうですね。

姫路瑞希の答え

『吉井明久ミュージアム』

島田美波の答え

『峰嶋真琴ミュージアム』

教師のコメント

好きにしてください。

吉井明久と坂本雄二と峰嶋真琴の答え

『ババア撲滅戦争』

教師のコメント

学園長への誠意ある謝罪と訂正を要求します。

明久ＳＩＤＥ

真琴「お待たせ。ババアは？」
雄二「まだ来てねえ」
美波「あんたたちに敬意って物は無いの？」
真琴＆雄二「「ない」」

ここは保健室。
瑞希が足を挫いているのでババアの話は保健室ですることになった。
真琴と島田さんには電話で伝えてきてもらった。

真琴「あのババア、早くこねえかなぁ」
僕「そうだよね、人を待たせてるって自覚は無いのかな」

あのババアは後でコンクリに詰めて東京湾に沈めてこよう。

ババア「まったく、言いたい放題言ってくれるじゃないかクソジャリども」
僕＆雄二＆真琴「あ、クソババア」
ババア「アレだけ罵倒してもまだ足りないのかね！？」

このババアを罵倒するのに上限なんか無い！

真琴「いいからさっさと話せクソババア」
ババア「いいから黙りなクソガキ。で、何から話せって？」
雄二「まずは俺たちに隠してること全てだ。ここにいる全員が関係者で、特に姫路に島田、秀吉と名川は誘拐までされたんだからな」
ババア「そうかい……あいつらはそこまでしたのかい。それは悪か

ったね」

そう言ってババアは頭を下げる。
これは……

僕&真琴「「明日は台風だね（だな）」」
美波「あんた達は人の誠意を素直に受け止められないの！？」

ババアに誠意なんてある訳がない！

真琴「黒幕は教頭だってことも知ってる。なんで教頭がここまでやるのか、その具体的な理由を聞かせてもらおうか」
ババア「はぁ……身内の恥をさらすようなもんだからね、言いたくはなかったんだよ」
瑞希「あの、私達は誰にも話しませんからお話していただけませんか？」
雄二「というよりは話せないだろうな。誰かに口外すれば、俺たち全員転校だろうな」
真琴「この学校自体が潰れるからな。それはなんとしても避けたい」

秀吉やムッツリーニたちも賛成する。
僕だってまだ瑞希や真琴たちと離れたいわけじゃない。

ババア「あんたたちに話した腕輪の不具合なんだけどね、あれは暴走するんだよ」
一同「暴走？」
ババア「二つの腕輪、金色の腕輪と白銀の腕輪のうち、代理召喚型の腕輪は何の問題もないんだがね、もう片方の腕輪がある程度の点数保持者だと暴走するんだよ」
雄二「それで低得点者と高得点者の組み合わせか」

ババア「そのとおりさね」

そう言われればそうだ。

僕と瑞希、真琴と島田さん、雄二と霧島さん。

この３組は低得点者と高得点者で構成されてるじゃないか。

美波「代理召喚ってなんですか？」

ババア「点数を消費して教師の承認なしで召喚フィールドが作れる腕輪のことさね。優勝チームへの金色の腕輪と準優勝チームへの白銀の腕輪の違いは召喚フィールドの広さと点数の消費具合と教科選択が出来るか出来ないかの違いだよ。どちらを使っても自分の召喚獣は呼び出せる」

真琴「その二つが暴走しない腕輪、つまりはオレか姫路か霧島が手にするはずの腕輪ってことだな」

ババア「そういうことさね。こっちは問題じゃないんだがね、もう片方はＢクラス並みの点数で暴走しちまうんだよ」

Ｂクラス並み？それだと僕危ないかも……

ババア「大体２０００点前後で暴走するね」

僕「なら大丈夫だ」

僕の総合科目は１５００点前後だから。

ババア「金色の腕輪の暴走するほうは同時召喚型って言って自分の召喚獣を２体召喚できる。点数は単純に１／２さね」

みどり「それって操作技術が高くないと使えなくないですか？」

真琴「どう考えても明久用の腕輪じゃないか」

ババア「んなことは気にするところじゃないよ。白銀の腕輪は点数移動型。他の教科の点数を消費して、消費した分だけ他の教科の点

数を上げる」
真琴「こっちは逆に美波向けの腕輪だな」
美波「ウチは数学の点数がいいから、数学の点数を消費して古典や現国の点数を増やすわけね」

あれ？これってもはや優勝とか準優勝とか決まっちゃってない？

真琴「そんなこと考えなくても、回収が目的だから軽いデモンストレーションのあとはババアにあげちまうんだろ？」
ババア「まだ修繕できるわけじゃないからね、そのまま持っておいてもらうことになるさね」
僕「瑞希たちが誘拐された理由は？」
真琴「あのスキンヘッドが教頭の名前を出したってことは、オレらの妨害ってとこだろ」
ババア「おそらく営業妨害で集中力を乱せば簡単に潰れると思ったんだろうね」
秀吉「所詮Ｆクラスと舐めていたんじゃろうな」
康太「……根本を脅したりもしていた」

そう考えると教頭を殴り飛ばしたい気分になってくる。

雄二「多分常夏コンビが主犯だろうな」
真琴「あいつらいちいちウザいんだよな……しかもご丁寧にしっかり準決勝まで残ってきてるし」
瑞希「どういうことですか？」
真琴「あいつらも出場してたんだよ。自分達で暴走を起こすつもりなんだろうな」

なるほど。

僕「で、あいつら強いの？」
真琴「３年Ａクラス所属。ここまで一回も攻撃を喰らわずに勝ち上がってきてる」
一同「Ａクラス！？」
みどり「あの二人そんなに頭いいの！？」
瑞希「Ａクラス相手なんですか……」
真琴「そんなに落ち込むことでもないだろ。恐らく準決勝であいつらと当たるのはオレと美波だ」
美波「どういうこと？」
真琴「今までの対戦は、全部あいつらが仕組んでたんだよ。だからＡクラスや３年ばかりと当たるんだ」
雄二「確かに俺たちの相手はＡクラスやＢクラス、３年ばかりだったな」
秀吉「じゃがどうしてそれがおぬしと戦うことに繋がるのじゃ？」
康太「……詳しく聞かせて欲しい」
真琴「単純な話さ。オレはあいつらを３回もボコッたんだぞ？」
一同「ああ、なるほど」

あの二人の性格なら腕っ節でかなわないなら召喚獣バトルでとか考えそうだ。
つまりは仕返ししたいってことだよね。

ババア「アンタはそこまで分かってて、なんでアタシをよぶんだい？アンタが説明すればいいじゃないか」
真琴「オレも一つだけまだ分からないことがあるからな」

真琴でも分からないこと？
なんだろう？

真琴「ババア。オレの召喚獣について、詳しく、包み隠さず話せ」

ババア「……気づいてたのかい」
真琴「オレの召喚獣は、明久や姫路たちのと何が違うんだ？」
僕「真琴、違うってどういうこと？」
ババア「まあ、しょうがないね。ここにいる全員を信用して話すことにするよ」

学園長ＳＩＤＥ

あれは文月学園創立から1年位経ったときのことだった。
試験召喚獣を研究していたあたしの元に、ある人物がきた。
同じ研究所で働いていたから面識くらいはあったけど、それでも普段は話すことのない人間だった。
なのにアイツはアタシをたずねてきた。
たずねてきて、アタシにこう言ったのさ。

『藤堂、最強の召喚獣に興味はないか？』

最強。
それは召喚者の点数に比例した強さを持つ召喚獣にはない概念だった。

『最強の召喚獣なんてものは存在しないよ。召喚者の点数で強さが変わるのだから』

『ならば、点数の大小関係なしに強い召喚獣がいれば、それが最強ってことになるだろう？』

最強の召喚獣。それは決して存在しないはずのものだった。
そしてアタシは、存在しないものを存在させることに夢中になってしまった。

ある一定以上の点数を取ることで与えられる腕輪。
その腕輪を点数に関わらず使えたらそれは大いなる武器だろう。
あたし達はそう考えて、腕輪の点数制限を、その召喚獣に限り外してみた。
結果は良好。

『すごいぞ藤堂。この召喚獣が完成すれば、試験召喚システムを完全に我々のものに出来る！！』

『まだまだ先の話さ。それより次の実験だよ』

腕輪のリミッターを外された召喚獣は、このあとに“決闘（デュエル）”という能力を持つことになる。

次に考えられたのは装備だった。

相手に合わせて装備を変えられれば、それは強大な力になるだろう。

どんなものにも負けない“最強”になるには、どんなものにも対応する必要があった。

『剣にランスに銃に弓……また最強に一歩近づいたな！』

この頃になるとアタシはこの召喚獣の存在に疑問を抱いた。

こんな召喚獣が存在していたら、試験召喚戦争のバランスを崩すことにならないかと。

これの所有者がいるクラスが勝ってしまうようにならないかと。

『装備変更の条件はどうするんだい？』

アタシは流石にここまで強力なものにはある程度のリミッターを付けるべきだと思っていった。

だけどその男はこう言ったのさ。

『条件？そんなものは無いに決まってるだろ』

その男は、最強の召喚獣を本気で考えていた。

またしばらくして、男は思いついた。

『腕輪の能力も自由に変えられたら、凄いんじゃないだろうか！？』

男は腕輪の能力のリミッターを外し、更にありとあらゆる能力を加えようとしていた。

流石にここまで来るともう行き過ぎた。

そう思ったあたしは男にこう提案した。

『召喚獣を心でコントロールしよう』

憎しみや怒りといった不の感情のエネルギーは凄まじく、それを召喚獣の力に出来ればそれは最強に最も近い存在になる。

そう言った。

『心でコントロールか……そうしよう』

結果はうまくいった。

このときのアタシは、男に秘密で、読み取る心の部分を表面の変わりやすい部分ではなく、もっと奥底、変わることの少ない、無意識の部分に設定した。

こうすることで、単純な憎しみや怒りで強化されることは無い。

心の最も純粋な部分がそんな感情で埋め尽くされることなど無いのだから。

こうして最強の召喚獣は、心を読み取る召喚獣になった。

最後の仕上げという形で、その召喚獣に自我と感情を持たせた。
自我と感情を持った召喚獣は、自分の主のことを信頼する。
それが出来ないような主なら、これはもう機能しなくなるだろう。
そう思って自我と感情を持たせた。
こうして心を読み取る召喚獣は、心を読み取り理解する召喚獣となった。
そして最強の召喚獣は、完成した。
あとは、これを完璧にてなづけることの出来る“適合者”を待つのみ……

召喚獣が完成してから数年たち、それは暴走した。

まるで赤子のように。

まるで駄々っ子のように。

まるで外の世界を欲しているかのように。

まるで愛情を欲しているかのように。

いつまで経ってもまともな適合者が現れず、自我を持ったそれは暴走した。

『こんなところにいつまでもいたくない！けんきゅうなんてもうたくさんだ！！』

それが、召喚獣の発した最初で最後の言葉だった。

それから二年後、今から2ヶ月ほど前のこと。
大した暴走をすることもなく、落ち着いていた召喚獣に“適合者”が現れた。
その人物はこの春から文月学園に転校してきた二年生。
振り分け試験で全問無回答というわけの分からないバカだった。

『適合者で頭の悪いこいつなら、問題は無いだろう。よかったね。あんたのご主人様が決まったよ』

だがこの人物は最強の召喚獣を持つにはあまりに不適格な人間だった。

まず点数が高すぎる。
教師クラスを簡単に超えて、でたらめな強さを発揮する。

その次に心の不安定さ。
過去を見て驚いた。
対人経験の少なさ、暴走しやすい感情。
どれをとっても明らかに不適格だった。
不適格なのに適合した。

その召喚獣も暴走することなく主の言うことを聞いている。

その異常な適合者の名は、峰嶋真琴。

明久ＳＩＤＥ

ババア「言うなればアンタの召喚獣は特別製。召喚獣の装備が変わ

ったのは、アンタの心に何かしらの変化があったからじゃないかい？」

真琴の召喚獣が特殊能力を持っていたのはそういうことだったのか……

でもまだ分からないことがある……

僕「でも、真琴の召喚獣は見た目は僕らとなんにも変わんないし、喋ったことだって無いですよ？」

真琴「ある」

僕「え？」

真琴「アイツはいつも喋ってた。オレの夢の中で」

それって前に言ってた夢の事？

アレに出てくる子供の姿をした真琴って召喚獣のことだったの？

瑞希「真琴君の召喚獣が例外だってことは分かりましたけど、どうしてそれを話さなかったんですか？」

真琴「話せなかった、だろ？」

ババア「そういうことさね。アンタはことごとく規格外の存在だ。だからアンタがその召喚獣を持ってるってことを教頭に知られるとまずいんだよ」

雄二「教頭が真琴の召喚獣を使って何かするってことか？」

ババア「そう、アタシのＰＣから出ないとソイツの召喚獣はいじれないのに、装備が変わってる時点ですでに規格外だからね。教頭の手に渡ったらどうなることやら……」

つまり……どういうこと？

真琴「そんな話はどうでもいいんだよ。アイツはオレの相棒だ。だ

からそれを奪おうってんなら全力で護る。それだけだ」
ババア「アンタが“適合者”だった理由が少しだけ分かったよ」
真琴「……ババア、オレを観察処分者にしろ」

は？　真琴は今なんて言った？

ババア「それは別にかまわないさね。だがどうしてそんなことを言うんだい？」
真琴「さっきも言ったろ？オレの相棒が一人で戦ってんだ。オレが一人で楽するなんてありえねーよ」
ババア「いいのかい？あんたの召喚獣は通常以上に疲労のたまりやすい代物だよ？」
真琴「覚悟の上だ」

真琴は、召喚獣を自分の相棒と言った。
そして、自分から観察処分者になろうとしている。
友達として、それを止めなくていいんだろうか。

真琴「みんな止めようとしても無駄だぞ」
雄二「止めるかよ。お前が観察処分者になれば、操作技術が上がるだろ？」
真琴「言うじゃねえか」
僕「真琴！！」
真琴「なんだ？明久」

真琴が決めたことだ。ならしょうがない。
僕から言うことは一つだけだ。

僕「フィードバックはキツいよ。覚悟してね」
真琴「だから言ってるだろう。覚悟の上だ」

ババア「なら明日までには設定しておいてやるよ」
真琴「頼んだぞ」
ババア「そうとなったらもうみんな帰りな。明日もよろしくお願いするから」
一同「はーい」

真琴が背負ってるものは僕なんかよりも相当重いのかな……
そう思いながら僕は瑞希と一緒に帰った。

「勉強を教えてもらいたいの……」

第三十七話　準決勝第一試合　ｖｓ常夏コンビ

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？

【？可愛らしさ　？統率力　？行動力　？その他】

また、その時のリーダーの候補も挙げてください

』

土屋康太の答え

『？可愛らしさ……姫路瑞希＆島田美波＆名川みどり』

教師のコメント

悩ましいところですね。

吉井明久の答え

『？可愛らしさ……姫路瑞希　？その他（彼女）……姫路瑞希』

教師のコメント

私情を持ち込まないように。

姫路瑞希の答え

『？可愛らしさ……吉井明久　？統率力……吉井明久　？行動力……吉井明久　？その他（運命の人）……吉井明久』

教師のコメント

まず吉井君はウェイトレスではなくウェイターであるという部分を認識しましょう。

峰嶋真琴の答え

『？可愛らしさ……島田美波　？その他（女の子らしさ）……島田美波』

島田美波の答え

『？可愛らしさ……峰嶋真琴　？統率力……峰嶋真琴　？行動力……峰嶋真琴　？その他（男らしさ）……峰嶋真琴』

教師のコメント

君達も十分お似合いだと思います。

名川みどりの答え

『？可愛らしさ……峰嶋真琴　？その他（女の子らしさ）……峰嶋真琴』

教師のコメント

それもどうかと思います。

真琴ＳＩＤＥ

美波「悪いわね。葉月の為に……」
オレ「別にいいって。それより勉強しとけよ？」
美波「分かってるわよ。きっと吉井と瑞希たちも勉強してくるだろうからウチも少しはしないと……」

オレは葉月ちゃんとの約束を守るために島田家に向かう。
お礼って言ってたけど何かくれるのかな？

オレ「そういえば年下と遊ぶなんてかなり久しぶりなんだよな。年上は結構あるんだけど」
美波「年上？」
オレ「一方的な虐殺という名の遊び」

よくチンピラに絡まれてはボコってたっけ。
となりで美波が苦笑いしてる。

美波「あの、ぜっったいにウチの部屋は入らないでよ！？」
オレ「はいんねーって。そんな趣味ねえもん」
美波「ならいいわ。上がって？」

どんだけ信用無いんだろうな？

葉月「怖くて可愛いお兄ちゃん、お帰りなさいです！！」
オレ「ただいま葉月ちゃん。それから怖いか可愛いかどっちかにしてくれるとありがたいんだけど」

怖くて可愛いお兄ちゃんって最悪のイメージしか浮かばない。

葉月「……じゃあ可愛いお兄ちゃんにするです！」

オレ「あはは……ありがとね」

怖いよりはマシだがそれでも中性的な顔って言われてるようでやるせなくなる……

オレ「それで、お礼って何かな？」

葉月「はいです！葉月、クッキー焼いたから可愛いお兄ちゃんにあげるです！」

！！

いやおちつけ、小学生の葉月ちゃんの作ったクッキーが姫路の料理みたいな破壊力を持ってるとは考えにくい……

あの殺意のこもった料理のようなものを葉月ちゃんが作れるとは思えない！

あれ塩酸とか入ってたしな……

オレ「ありがとう。頂くよ（可能な限りの笑顔で）」

葉月「はい！いーっぱい食べてくださいね！！」

笑顔で言われると言い辛いが夕飯の支度もしないといけないしここでいっぱい食べると夕飯が入らなくなるんだが……

美波「真琴、無理しなくてもいいのよ？」

オレ「いや、折角作ってくれたんだ。食べるよ」

でないと罰が当たる気がする。

クッキーをひとつ掴んで食べてみる。

オレ「……うん、おいしいよ」

葉月「ほんとですか！？葉月嬉しいです！」

うんうん、子供の純粋な笑顔は癒されるなあ……っと、オレはロリコンではないからな？

オレ「姫路の料理もこれくらい安全ならいいのに……（小声）」
美波「瑞希の料理もこれくらい安全ならいいのにね」

オレが小声で言った意味ってあった？

オレ「……思い出しちゃった！（ガタガタ）」

言ってて思い出しちゃった！
オレの完全記憶能力って味も覚えるんだ！！

オレ「ごぱぁ！！」
美波「ちょ……真琴！？」
葉月「可愛いお兄ちゃん大丈夫ですか！？」

薄れゆく意識の中でたった一言……

オレ「葉月ちゃん……クッキー、美味しかったよ……（ガク）」

味を思い出しただけで逝くとは……
恐るべし……姫路のりょ……う……（ちーん）

～翌日～

オレ「おはよ、雄二」
雄二「真琴か、おはよう」
美波「坂本、おはよう」
雄二「島田か。今朝は大丈夫だったか？」

雄二の言う大丈夫とは恐らく昨日の誘拐事件のことだろう。

美波「大丈夫よ。真琴が迎えに来てくれたから」
真琴「昨日あんなことがあったら流石にそれくらいはするさ」

昨日だって誘拐されるのを警戒して家まで送ったんだから今日もやらなきゃ意味はないよな。

雄二「それにしても島田、凄いくまだな……」

島田「そうなのよ……真琴に一晩中勉強教えてもらって寝てないのよ……」

オレ「少しは寝とけって言ってんのに聞かないから……」

雄二「で、その真琴はなんでそんなに血色いいんだ？」

え？オレ？

オレ「オレは完徹なんて珍しくないからな」

みどり「そうだね～」

雄二「おう、名川か。で、そうだねってどういうことだ？」

オレの徹夜の話なんてどうでも良くないか？

みどり「前に琴君ってば古本屋で買った本にはまっちゃってね～、授業中も睡眠時間も関係ないに読み続けてたよね～」

オレ「ああ、あの時は教師が本を読むなって言いながら問題出してきたから読みながら問題解いたんだったな」

解いたことのある式だったからどんだけ難しくても関係ないし。

オレ「で、その後めっちゃ怒られた」

雄二「そりゃそうだろ……」

四人で雑談してると明久と姫路が入ってきた。

オレ「お、おはよ……すごいくまだな」

明久「お、おはよ……（カク）」
瑞希「おはようござ……（カク）」

もうだめだなこの二人。
明らかにおきてねぇ。

美波「瑞希……おはよ（カク）」
瑞希「美波ちゃんすごいくまですよ……寝不足はお肌によくな（カク）」

そう思うのなら少しは寝て来い。

雄二「お前等の相手はオレたちだからな。準決勝の第２試合は１１時からで、少し時間もあるし寝てきたらどうだ？」
明久「でも皆にわる……（カク）」
オレ「既に寝てるぞ」

本当にこんなんで大丈夫なのか？

美波「真琴……うちらも寝てこよ……？」
オレ「オレたちの試合は９時からだから寝てる暇なんてないぞ」

現在８時３０分。
９時からって言うと一般公開開始と同時だな。

美波「うぇーー……」
オレ「しゃあないなぁ…。雄二、悪いんだが決勝までオレらも寝ていいか？」
雄二「かまわないぞ」
オレ「んじゃ美波。さっさと準決勝終わらせてくるぞ」

美波「……眠いわ…」

だから寝ておけって言ったのに。

明久ＳＩＤＥ

僕らの出場する準決勝第二試合が始まるまでは寝ていられることになった。

とりあえず誰にも邪魔されずに休める場所って言われて思いついたのが屋上。

僕「流石にここなら誰も来ないよね……」

瑞希「もうどこでもいいから早く寝たいです……」

今にして思えば瑞希はこの一週間ロクに寝ていない。

僕は普段から寝るのが遅いから耐性もあるけど瑞希からしてみればこの一週間はハードだっただろう。

瑞希「この辺りなんてどうですか？日当たりも良いですし……」

僕「じゃあここにしよっか」

ちなみに今日はちょっと涼しい。日陰だと寒いくらいだ。

瑞希「明久君……おやすみなさい……」

僕の膝を枕代わりにして先に寝てしまう瑞希。

一週間同じベッドで寝ただけあって、流石にこれくらいは慣れた。

僕「本当はこんなのに慣れていいのか微妙だけどね……」

と独り言を呟く。

瑞希と一緒に居られる時間を、この幸せな時間を、前みたいに緊張しなくなってよかったと思うべきなのか、僕なんかが瑞希と一緒に居ることに慣れてしまって悪いと思うべきなのか。

僕「瑞希の家族にもお世話になったし、今度お礼しなきゃな……」

瑞穂さんも政宗さんも僕にすごく優しくしてくれたっけ。

ロリコンだなんて言って悪かったなぁ……

僕「そういえば瑞希に色々言われたっけ……」

瑞希はベッドの中で僕が何かしてくると期待してたらしいんだけど、むしろそんなことがあれば大問題だろう。

そういう類の事は期待しないで欲しかった。

僕にそんな勇気も度胸も資格もないんだから……

なんだか余計に眠くなってきた……

召喚大会で失敗するわけにもいかないし、僕も寝よう。

真琴ＳＩＤＥ

司会『清涼祭の目玉イベント、召喚大会決勝戦第一試合を始めます！！！』

おお、司会も盛り上がってるぞ。

美波「眠い……」

オレ「これはオレ一人でやることになりそうだな……」

今までもほとんどそうだったからいまさら問題にならないけど。

それに美波には決勝で助けられることになるだろうし。

司会『まずは青コーナー、峰嶋真琴、島田美波ペア！！！』

オレ「美波、呼ばれたぞ」

美波「……ぐぅ」

ダメだこりゃ。

オレ「しゃあないなぁ……」

このまま放置するわけにも行かないので美波をおんぶして行く。

オレ「司会さん、パートナー寝ちゃったもんでオレ一人でもいいか

な？」
司会『ええと……』
？？「許可するよ」

うわ、このしわがれた声……

ババア「許可してやろうじゃないか。ただし、アンタが負けた時点で試合は終了さね」
オレ「かまわねーよ」

美波背負ったままやるのか……
大したハンデじゃないし問題ないな。

司会『続いて赤コーナー、三年Ａクラス、常村勇作、夏川俊平ペア！！』

司会の紹介で常夏コンビもやってくる。

司会『Ａクラス対Ｆクラス、これだけ見れば勝負は決まったようなものですが、峰嶋選手はここまで圧倒的な点数で勝ちあがってきております！！』

おお。この台詞は姫路の親父さんに聞かせてやりたいな。
けど来てないだろうな……娘が出てるわけじゃないし……

常村「よお、彼女おんぶして来るとはおもしれえじゃねえか」
オレ「仕方ないだろ。寝ちゃったんだから」

まあ準決勝は余裕だから寝ててくれてもいいんだけどね。

夏川「俺たちのプレゼントは気に入ってくれたか？」
オレ「ああ、ものすごく良かったぜ。お返しにオレもいいものやるから覚悟しな」
常村「できるならやってみろよ。２対１だからな。三年Ａクラスの実力、見せてやるぜ！！」
常夏「「試獣召喚（サモン）！！」」

Ａクラス　常村勇作　総合科目　３７８８点
　　夏川俊平　総合科目　３８２０点

常村「どうだびびったか」
夏川「Ｆクラスじゃ、見ることは無いだろうからなぁ」

別に大した点数じゃなくね？
もっと上の奴いっぱい知ってるし。
姫路とか霧島とか……オレとか？

オレ「しょぼいなぁ……そんなカスとやらなきゃならないのか……」

ちょっと挑発してみる。

夏川「んだとぉ！？」
常村「テメエもさっさと召喚しやがれ！そしてその低い点数を見せてみな！！」

うるさいなぁ……雑魚の癖に。

オレ「試獣召喚（サモン）」

Fクラス　峰嶋真琴　総合科目　９８７３点

オレ「誰の点数が低いって？」
常村「９８００！？」
夏川「んなバカな！？」

しょうがないだろ。
オレ規格外の存在って言われちまったし。

オレ「あんたたちは美波たちを傷つけすぎた。その罰を受けてもらう」

たった一つだけ考えた新技を放つ。

オレ「その罪、万死に値する。死刑（デスコール）」

二本の鎖がそれぞれの召喚獣を捕らえ、絞め殺す。
常夏コンビの召喚獣は、綺麗にバラバラになって消えた。

Ａクラス　常村勇作　総合科目　０点
　　夏川俊平　総合科目　０点

常村「んなバカな……」
夏川「Ａクラスの俺らが……」

こいつらが自分がＡクラスってことに溺れた事も失敗の一つだな。

オレ「これは美波に寝ててもらって正解だったかな……」

グロい。それが正直な感想だった。

第三十七話　準決勝第一試合　ＶＳ常夏コンビ（後書き）

次回は明久＆瑞希ＶＳ雄二＆翔子です！
感想お待ちしております！

第三十八話　準決勝第二試合　ｖｓ雄二＆翔子（前書き）

「前半部分が明瑞になってるぞ？てか全体的に明瑞ムードだよな？」
ｂｙ元神童
「それ即ち宇宙の真理なり」ｂｙ作者
「俺達の出番もあるからな！？」ｂｙ元神童

第三十八話　準決勝第二試合　ｖｓ雄二＆翔子

バカテスト　歴史

問　以下の問に答えなさい。

『冠位十二階が制定された年を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『６０３』

教師のコメント

正解です。

坂本雄二の答え

『６０３』

教師のコメント

どうしたのですか？驚いたことに正解です。

吉井明久の答え

『６０３』

峰嶋真琴の答え

『６０３』

教師のコメント

君達の名前を見ただけでバツをつけた先生を許してください。

明久ＳＩＤＥ

準決勝の第二試合が始まるのは１１時。
寝たのが９時ごろ。
大体２時間弱くらいは寝れる計算なんだけど、寝てから３０分後くらいに僕は目が覚めた。

ガチャ

僕「！！？」

誰も来ないだろうと思って選んだ屋上に人が来た。

僕「（マズイ……僕がここで瑞希と一緒に寝てたら、相手によっては問答無用で襲い掛かってきそうだ……）」

屋上のドアを開けて入ってきたのは……

真琴「ふー…流石に人一人担いで屋上はきついな……」

って真琴かい！

真琴「屋上なら誰もいないだろうな……明久たちがいたらシャレにならねーけど」

いるんだよ！！僕らが！！

ってよく見たら真琴が島田さんを背負っている。
島田さんも徹夜したって言ってたから寝ちゃったのかな？

真琴「この辺なら日当たりもいいし、ここで休むか……流石に3日連続完徹はきついな……」

真琴はそう言うと島田さんを下ろしてすぐに寝てしまった。
場所的にはお互いは見えないし、これだったら困ることもないだろう。

試合開始までまだ1時間以上ある。
もう少し寝ていようと思って僕は瞼を閉じた。

その次に目が覚めたのは大体1時間後。
携帯で時間を確認してみると10時40分。そろそろ行かないとマズイ。

僕「瑞希、起きて。そろそろ時間だよ」
瑞希「……」

マズイ。この人熟睡してる。
無理もないし、しょうがないけどここで起きてくれないと今までの苦労も全て水の泡。
準決勝からは一般の観客もいるわけで瑞希の両親も来ているだろう。
そんな中で不戦敗だけは絶対に避けたい。

僕「起きて……起きてってば」
瑞希「……」

さてどうしよう。
これが雄二や真琴やムッツリーニだったら殴って起こしてもいいんだけど相手は女の子。
手荒な真似は出来ない。

大体思いつく選択肢は3つ。

1、このまま瑞希を担いで会場まで行く。

いやダメだ。仮にそれで行ったとして相手は雄二と霧島さん。
瑞希が起きてくれなきゃ間違いなく瞬殺される。

2、大声を出して起こす。

そういうことすると真琴と島田さんまで起きちゃうんだよな……。
出来ればそれは避けたい。

3、とにかく無理やり起こす。

身体を揺さぶるなりなんなりしてとにかく起こす。

一番現実的だけど時間がかかりそう。
そんなこんなで既に時刻は１０時５０分。

僕「ヤバ……ほんとにどうしよう……」

とにかく瑞希を揺さぶってみる。
しかし起きる気配なし。

僕「ええとどうしよう……」

あんなことやそんなことして起こす？
いやでもそれだと試合に集中できなくなったりするだろうしあどうすればいいんだよ！！

僕「……この際だ！ごめん瑞希！」

そう言って瑞希の唇と僕の唇を重ねる。
本来こんな事するべきじゃないんだけど事情が事情。
あと寝顔があまりにも可愛かったからついやっちゃったって本音が８割。

瑞希「……！？　（あ、明久君！？）」
僕「……ぷはぁ……ごめん、あとで説明するから今は急ごう」

現在の時刻は１１時５分前。
ホントにヤバいんだって。

瑞希「え……？あ、もうこんな時間ですか！？急ぎましょう明久君！」

いろいろ言いたい事はあるけど僕は15分ほど前から急いでたよ?

僕「さっきのはその…あの…準決勝に集中しよう!」

我ながら悲しい現実逃避。

瑞希「……明久君なら、いいですよ?」

僕「え……?」

瑞希「なんでもないです。それより急ぎましょう。遅刻しちゃいます!」

僕「え、あ、そうだね」

何かよく分からないけどとりあえず結果オーライのようだ。

…

……

……

……

真琴「オレは何も聞いてねえぞ……」

オーライもへったくれもなかった。

準決勝第二試合会場。
時間ギリギリ（1分前）で間に合ったけど雄二と霧島さん相手になんの作戦も立ててなかった。

瑞希「な、何とか……間に合いましたね……」
僕「間に合うには間に合ったけど、あの二人相手に作戦なしはキツくない？」

いや、絶対にキツいだろう。
雄二のことだから色々作戦練ってきてるだろうし、言いたくはないけど雄二は僕よりも点数が上で、霧島さんは瑞希よりも点数が上。
操作技術ではこっちが勝ってるけど、点数ではあっちのほうが上だろう。

司会『召喚大会も残すところあと2試合！それでは準決勝第二試合を始めます！青コーナー、二年Fクラス、姫路瑞希、吉井明久ペア

！』

司会に呼ばれて前に出る。

司会『なんと準決勝まで残った４チーム８人のうち、５人がＦクラスの生徒です！既に決勝進出を決めている峰嶋・島田ペアもＦクラスであることを考えれば、これはＦクラスが学年の底辺であるという認識を改めなければならないですね！』

あ、真琴達はちゃんと勝ったんだね。
嬉しいことを言ってくれる司会だ。

僕「今の台詞、お父さんが聞いてるといいね」
瑞希「そうですね」

さてどうしよう。
僕の召喚獣の足掛けや牽制で隙を作って攻撃していくしかないかな……
でも雄二だったらそれくらいの対策はしてきそうだな……

司会『対するはＡクラスに咲く花とＦクラスの雑草（くさ）！！二年Ａクラス、霧島翔子、二年Ｆクラス、坂本雄二ペアです！！』
雄二「今俺が雑草扱いされた気がするんだが」

おお、いい感じしてる。

僕「雄二、よくここまで上がって来れたね」
雄二「その台詞、そっくりそのままお前に返してやる」
翔子「……吉井、如月グランドパークへ行くのは私達」

霧島さんはやっぱそれが目的か。

瑞希「明久君、頑張りましょう。私達ならきっと勝てます」
僕「勿論だよ」

そうだ。作戦なんかいらない。
僕達はお互いを信頼しあっているんだから！

雄二「明久！御託はもういいだろ。さっさと始めようぜ！」
僕「ああ、僕がただのバカじゃないってことを見せてやる！！」
司会『召喚してください！』
４人「試獣召喚（サモン）！！」

僕達４人の召喚獣が現れる。
瑞希と霧島さんの点数が高いせいか、点数がまだ表示されない。

瑞希「明久君、私、好きな言葉があるんです」
僕「好きな言葉？」
瑞希「『好きな人のためなら頑張れる』って。その言葉を、信じてみたいんです」
僕「……僕もその言葉、信じていいかな？」
瑞希「……はい」

好きな人のためなら頑張れる。
なるほど、確かにそのとおりだ。

僕がここまで勉強したのだって、召喚大会で優勝して、瑞希の転校を阻止したいがため。

僕がここまで清涼祭を頑張ったのだって、瑞希との大切な思い出が

欲しいがため。

僕がここまで戦いぬけたのだって、瑞希の笑顔を見ていたいがため。

大切な人の為に……

瑞希「私は、大好きな明久君のためにがんばります！！」

Ｆクラス　姫路瑞希　総合科目　５１７８点
　　吉井明久　総合科目　１５０３点

ＶＳ

Ａクラス　霧島翔子　総合科目　４７８５点
Ｆクラス　坂本雄二　総合科目　１７１４点

僕「５０００点オーバー！？」

総合科目で５０００点を越えた生徒って言ったら僕が見たことあるのは真琴だけ。

雄二に聞いたＡクラス戦の時の瑞希の総合科目だって４５００点ちょっとだったのに……

雄二「姫路…どうやってそんな点数を……」

翔子「……私よりも上」

雄二や霧島さんも驚いている。

そりゃそうだろう。

５０００点オーバーなんて真琴でしか見たことないし、学年主席の霧島さんよりも４００点近く差をつけているんだから。

瑞希「私、気づいたんです」

雄二「気づいた？」

瑞希「明久君の点数を上げるだけじゃダメだって。自分がもっと強くならないとダメなんだって」

僕「瑞希……」

守られてばかりは嫌だと言っていた。

特別扱いされたくないと言っていた。

一人になりたくないと言っていた。

これはその瑞希の努力の結果なのだろう。

なら、僕も本気を出さないわけには行かないじゃないか！

僕「全力で勝負だ！こい！雄二！！」

雄二「当然だ！あんなもの見せられたら、嫌でも全力出ちまうからなぁ！！」

翔子「……姫路、全力で来て」

瑞希「言われなくてもそのつもりです！！」

全力で勝負。

それはつまり出せる力と技術をフルに使って来いって言う意味だ。

瑞希は僕のためにあんなに頑張ってくれた。

だったら僕も、同じくらい頑張るしかないじゃないか！

僕「行くぞ雄二ィィィ！！」

僕の召喚獣が高速で動き出す。

観察処分者の仕事で、召喚獣の扱いに慣れているからこそどんなに早く動いている召喚獣でも完璧に使いこなせる！

雄二「流石に明久の召喚獣だ！スピードも正確さも申し分ねぇ！！」

雄二の召喚獣は特攻服にメリケンサックというチンピラ装備。
僕の召喚獣の武器は木刀。明らかにリーチが違う。
それに加えて点差も２００点程度。
状況は根本君のときと同じかもしくはそれ以上に良いかもしれない。

雄二「ぐぉっ！！」

木刀がうまく鳩尾に入る。
鳩尾とかは当たれば大きく点数が減る場所だから、集中して狙うべき場所のひとつだ。

Ｆクラス　坂本雄二　総合科目　１３８６点

僕「今回は代表があだになったみたいだね」
雄二「クッソ……！」
瑞希「どういうことですか？」
僕「雄二はクラス代表だから前に出て戦争するなんて事はない。Ａクラスとの試召戦争の時も召喚していなかったから、雄二は実戦経験が極めて少ない！」

今度はのど――――――当たれば点数に関わらず即死してしまう場所を狙う。

雄二「あぶねぇ！！」

今度はうまく避けられてかすった程度になってしまったが、それでも右腕にしっかり当てた。
小さくてもダメージはダメージだ。

Ｆクラス　坂本雄二　総合科目　１３０２点

雄二（流石だな明久。いつもはバカの癖に、姫路が絡むと途端に強くなりやがる）
翔子「……雄二、今助ける！」
瑞希「させません！翔子ちゃんの相手は私です！」

瑞希の召喚獣の腕輪が光る。
そこから放たれる熱線が霧島さんの召喚獣を直撃する。

翔子「……くっ……」

Ｆクラス　姫路瑞希　総合科目　４８０６点

ＶＳ

Ａクラス　霧島翔子　総合科目　３５７１点

もとから点数差があったのに加えて今の腕輪の熱線を喰らったんだ。
ギリギリで防御してダメージは最小限にとどめたみたいだけど、そ

れでも大ダメージに変わりはない。

雄二「翔子！大丈夫か！？」
翔子「……問題ない」
僕「雄二、よそ見してる暇なんてないよ！！」
雄二「うおぉっ！？」

今の狙いは目玉やのど元と言った当たれば必ず戦死するポイント。
うかつな防御は出来ないので、雄二もただかわしつづけるしかない。

僕「まだまだぁ！！」
雄二「なんだ！？まるで明久じゃねえみたいだ！！」

根本君のときでも、ここまでなったことはなかった。
どんどん連続で攻撃していく。
今度はピンポイントの急所を狙う作戦ではなく、どこにでもいいから攻撃を当てる作戦。

雄二「俺がやられっぱなしになってると思うな！！」
僕「無駄だよ！！瑞希！！」
瑞希「はい！！」

うまく雄二と霧島さんが同じ線上に立ったときを見計らって、瑞希の腕輪の熱線を使う。

雄二「しまった！！」

Ｆクラス　坂本雄二　総合科目　０点
Ａクラス　霧島翔子　総合科目　２２９０点

雄二「翔子……すまない……」
翔子「……大丈夫、私一人で何とかするから」
そう言って霧島さんも腕輪を掲げる。
僕「まずい！！霧島さんも腕輪持ちだったんだ！！」
翔子「……鉄針雨（ニードルシャワー）」
霧島さんが起動アクションを行うと、瑞希のいた辺りに大量の針が降ってきた。
瑞希「そんなっ！？」
翔子「……1点消費するごとに5本降らす。1本当たると1点減る」

Fクラス　姫路瑞希　総合科目　　0点

VS

Aクラス　霧島翔子　総合科目　1000点

瑞希「ごめんなさい明久君……戦死しちゃいました……」
僕「大丈夫だよ。あそこまで霧島さんの点数削ってくれてありがとう」
あとは……

僕「あとは僕に任せて」

Ｆクラス　吉井明久　総合科目　１１８６点

ＶＳ

Ａクラス　霧島翔子　総合科目　１０００点

とは言ったものの、あの腕輪の能力を喰らったらほんとにやばそうだ。
何より痛そうだ。（フィードバックで）

作戦としていけそうなのもあるけどチャンスは一回きり。
多分二度目は確実にやられる。

翔子「……鉄針雨（ニードルシャワー）」
僕「きたっ！！」

腕輪の能力が使われる瞬間に高速で移動すれば、うまく技の範囲に抜けられるかもしれない。
そして自分の上空に針降らす奴はいないだろう。
つまり……

翔子「……避けた！？」
僕「ぐぅっ……！」

どうやら針がかすったみたいだ。
フィードバックで左腕が痛む。

僕「けど……これくらい！！」

木刀を、霧島さんの召喚獣ののどに突き刺す。
うまく技をかわされて、一瞬判断が遅れたみたいで、こっちのほうが早かった。

Ｆクラス　吉井明久　総合科目　４９８点

ＶＳ

Ａクラス　霧島翔子　総合科目　０点

霧島さんの召喚獣は、消えていった。

司会『勝者、姫路瑞希、吉井明久ペア！！』
観客「「ワァーーー！！！」」

……あれ？勝った？

瑞希「明久君、やりましたね！」
僕「わっ！えっと。そうだね」

司会のコールと同時に抱きついてくる瑞希に一瞬でびっくりしながらも、言葉を返す。
瑞希が抱きついてくれるならフィードバックすらも……あれ？フィードバック？

僕「って左腕めっちゃ痛ッッッ！！」

うわ、僕の召喚獣の左腕すごいことになってる！！
ちょっと刺さったくらいかなとか思ったらめちゃくちゃ刺さってんじゃん！！
痛いよ！痛みでほんとに死んじゃいそうだよ！

召喚フィールドが取り消されて、召喚獣も消えていく。
直接の痛みはなくなったけど、まだ余波が……

僕「てててて……」
瑞希「だ、大丈夫ですか？」
僕「まあ、なんとかね……」

あんなの全身で喰らってたらどうなるか……
想像するだけで痛いわ。

翔子「……雄二、ごめん」
雄二「気にするな。姫路が絡んだときの明久は強い。それだけだ」
翔子「……雄二、お詫びに」
雄二「お詫びなんかいらねえって」
翔子「……この婚姻届に判を押させてあげる」
雄二「全力で拒否しよう」

雄二は負けてもああなるのか。
幸せ物だなぁ……

司会『見事勝利した吉井選手と姫路選手、そして惜しくも敗れてしまった坂本選手と霧島選手にも、盛大な拍手をお願いします！！』

これだけの試合なら瑞希のお父さんも満足してくれたかな？
いや、でも決勝戦が全員Fクラスって知ったらもっと満足してくれるかも……

瑞希「明久君！」
僕「あ、何かな？瑞希」
瑞希「さっきのアレはどういうことか説明してください！」

？？？
さっきのアレ？

さっきのアレ＝起こすためのキス

だあぁーー！！忘れてた！！

僕「ち、違うんだ！アレは瑞希の寝顔が可愛かったからつい……じゃなくて何言ってるの僕！？」
瑞希「でも、明久君ならいいです」
僕「……え？」
瑞希「明久君なら、寝てるときでもいいですよ？」
僕「……ええええ！？」

「なるほどね。おもしろい戦い方じゃないか」
『早く戦いねぇ……』
「そうだな……早くコレを使ってみたいな……」

第三十八話　準決勝第二試合　ｖｓ雄二＆翔子（後書き）

翔子さんの腕輪はオリジナル（一応）。
更新は明日になりそうです。

第三十九話　決勝戦　～敵は最強なり～（前書き）

なぜか恋愛ムードバリバリ……

オレらってかませ犬とかじゃないよな！？

総合評価１００ｐｔ・お気に入り登録件数４０突破！
これからもよろしくお願いします！

第三十九話　決勝戦　～敵は最強なり～

バカテスト　特別編

問　以下の問に答えなさい。

『清涼祭で行われる召喚大会の、優勝賞品と準優勝賞品を答えなさい』

峰嶋真琴の答え

『優勝：金色の腕輪、如月グランドパークペアチケット
準優勝：白銀の腕輪、如月グランドパークペアチケット』

教師のコメント

正解です。決勝戦頑張ってください。

姫路瑞希の答え

『優勝：明久君の愛情
準優勝：敗北　　』

教師のコメント

色んな意味で頑張ってください。

吉井明久の答え

『優勝：一生手放したくないもの』

教師のコメント

優勝の賞品ではないと思いますが、先生は君を応援していますよ。

真琴ＳＩＤＥ

オレ「明久。よくここまで来れたな？」
明久「僕達を潰すのは真琴なんだろ？来てくれなきゃ困るんじゃない？」
オレ「まあそうだけどな」

召喚大会決勝戦。
オレは別に金色でも白銀でもどっちでもいいし、準優勝でも如月グランドパークのペアチケットは手に入るから姫路と明久に優勝を譲ってやってもいいんだけど……

オレ「わざと負けたらつまんねえもんな」
美波「真琴……あの二人相手だとウチは役に立たないかもしれないけど……」
オレ「そんなことはない。しっかり戦ってもらうさ」

ちなみにここまでの４試合で、美波は召喚獣を動かしていない（全部オレが瞬殺してる）。

オレ「最強の称号を持つ者に簡単に勝てると思うなよ？」
瑞希「私と明久君なら、真琴君の最強も超えられます！」
美波「一応ウチもいるんだけど……」

コンビネーションが上か、パワーが上か、これはもう完全にＦクラス最強王者決定戦だな。

司会『さあさあ両者とも良いですか？では召喚してください！』

４人「試獣召喚（サモン）！！」

さて明久。
お前がどこまで成長したのか見せてもらうぞ。

Ｆクラス　姫路瑞希　日本史　５９９点
　　吉井明久　日本史　２７７点

ＶＳ

Ｆクラス　峰嶋真琴　日本史　８３４点
　　島田美波　日本史　８２点

……なんか美波が可愛そうになってきた。

美波「ウチなんて……ウチなんて……」
オレ「そう落ち込むなって。前より点数上がってるじゃないか。勉強の成果も少しは出てるみたいだぞ」

落ち込みたくなる気持ちも分からなくはないが。
自分以外の３人が３桁で自分だけ２桁だとまあ泣きたくもなるわな。

司会『あのー……始めてもよろしいでしょうか……？』
オレ「ほら美波。司会さんも困ってるだろ。落ち込むなって」
美波「……（コク）」

こりゃいろんな意味で大変だな。

司会『では試合を開始してもらいましょうか。はじめ！』

司会の合図で一気に召喚獣の間合いを詰める。
ちなみにオレの召喚獣のメインウェポンは鎖鎌だから遠距離戦のほうが得意なのである。
なのになぜ態々間合いを詰めるかというと……

オレ「姫路！悪いが最初に倒れてもらう！！」
瑞希「そうは行きません！！」

オレは鎖鎌ではなく日本刀で攻める。
姫路も大剣で応戦するがこっちのほうが点数が高いため、単純な力比べはこっちのほうが有利。

オレ「（美波、作戦の第一段階はまずオレたちが姫路を先に倒したがってると思わせることと、姫路の点数を削ることだ）」
美波「（了解）」

オレ達の意識が姫路にあると思わせること。
それが出来なければ作戦そのものが成り立たない。

オレ「なんとか防御は出来てるみたいだけど、いつまでもつかなぁ！？」
瑞希「流石に……厳しいです……」

もともとの点差が２００点以上あるんだから今の状況は当然といえば当然である。
ゆっくり姫路の点数を削っていけば、必ずアイツは突っ込んでくる。

明久「真琴！僕が相手だぁ！！」

オレ「（かかった！）」

明久の召喚獣が近づいてくると、それまで接近戦をしていた召喚獣を引き離し、技の構えをとる。
明久の召喚獣がついさっきまでオレが居たところについたところで技発動！

オレ「待ち構える蛇（スネークトラップ）！！」

鎖鎌が足元から出てきて、明久の召喚獣（とついでに姫路も巻き込んで）を攻撃する。

Ｆクラス　姫路瑞希　日本史　５０４点
　　吉井明久　日本史　１９３点

オレ「結構残っちまったな」

流石に迎撃型能力は攻撃力に劣るな。
今度はもっと派手にやってみるべきか……？

悩んでいるうちに攻撃された。
それも攻撃対象はオレではなく美波だ。

瑞希「美波ちゃん、ごめんなさい！！」

姫路の腕輪から熱線が放たれて美波へと向かう。

美波「え！？ウチ！？」

オレ「マズイ！！」

鎖鎌を高速回転させて熱線をはじこうとする。
だがあっちの威力のほうが上で食い止めるのが精一杯だ。

オレ「クッソ……このままだと直撃食らうな……」
美波「召喚獣は移動させたわ」
オレ「そうか。さて、どうするかな……？」

口では余裕で言ってるけど、観察処分者のフィードバックで体中が熱い。
ホントに焼けちまいそうだぞ……

『腕輪を！腕輪を使って！』

！？　腕輪！？
……そういうことか相棒！恩に切るぜ！

オレ「無効（ヴィゼンス）！！」

発動キーワードを唱えると、穴のようなものが出てきて熱戦を吸い込んでしまった。

瑞希「え！？」
明久「なんだ今のは！？」

ふう……装備と一緒に腕輪も変わっててよかった。
けど大分点数減らされちまった。

Ｆクラス　峰嶋真琴　日本史　５４７点

オレ「これは想像以上にきついな……」

姫路の熱線を武器で防御した後で腕輪を使ったんだからある程度の消費は覚悟してたが……

オレ「これなら素直に直受けてたほうがよかったんじゃ……？」

現に今、両腕はフィードバックで燃えるように熱いし、疲労も半端ない。

ここまで一気に減らされたとなると、できればアレを使いたいが……

相棒『アレを使うのは明久一人になってからだよ』

オレ「分かってるって。ただ、もともと立ててた作戦で姫路を倒せるか微妙になってきたんでな」

相棒『君が弱気とは珍しいね……』

オレ「ババアに最強の召喚獣って聞いてちょっと油断してた部分があったんだろうな」

相棒『どうでもいいけどとりあえずやってみれば？』

オレ「そうするさ。言われなくてもな！！」

うまく距離をとって鎖鎌で姫路に攻撃する。

流石にこれ以上熱線を使った攻撃を連発してくるとは考えにくいから、ここからは武器での応酬だろうな。

瑞希「その程度の攻撃なら避ける位……！」

オレ「軽いだろうな。なぜなら……」

オレたちの狙いは……

オレ「ハナッから明久だからな！！」

鎖の軌道を途中で変えて、放たれた二本の鎖鎌は明久へと向かう。
明久は島田に頼んで抑えてもらっておいたので、反応が遅れる。

明久「うわぁあっと！！」
オレ「チッ！外したか」
瑞希「真琴君、ごめんなさい！！」

今度は姫路の腕輪の熱線。
燃費悪いのによく連打できるなぁ……

オレ「んなの当たるかよ！」

いちいち無効使ってたら消費点数がシャレにならないので回避する。

瑞希「当たらないでしょうね……だって狙いは……」

！！　ヤベエ！！

瑞希「美波ちゃんですから！！」
美波「ウ、ウチーーー！！？」

Ｆクラス　姫路瑞希　日本史　３１２点

ＶＳ

Fクラス　島田美波　日本史　　0点

オレ「美波、大丈夫か！？」
美波「ごめん真琴……戦死しちゃった」
オレ「気にするな。行くぞ姫路！！」

Fクラス　姫路瑞希　日本史　　0点

VS

Fクラス　峰嶋真琴　日本史　523点

姫路が熱線を使った後の隙をついて鎖鎌で滅多切りにする。

瑞希「あぅぅ……ごめんなさい明久君……」
明久「いいよ、後は僕がやるから」

これでやっと条件が揃った……

オレ「やっと使えるなぁ……」
明久「？？？」
オレ「見てろ明久。獣化（ビースト）

明久ＳＩＤＥ

よく分からなかった。
なぜあんなことになってるのか。

Ｆクラス　吉井明久　日本史　１６５点

ＶＳ

Ｆクラス　峰嶋真琴　日本史　５２３×２（１０４６）点

真琴の召喚獣が光って、だんだん獣みたいになっていくのは分かっている。

真琴「止めだ明久ァァァー！！」

うまく拳が入るが、不完全らしいな。

ある意味で助かったといえる。

うまく衝撃を押し殺してなければ、今頃は天国……

Ｆクラス　吉井明久　日本史　　１６５点

ＶＳ

Ｆクラス　峰嶋真琴　日本史　５２３×２（１０４６）点

真琴「これで終わりだァァァ！！」

もう一発入れるだけで終わる。

そのもう一発を……

ポン↑召喚獣が元に戻る音

Ｆクラス　吉井明久　日本史　４３点

ＶＳ

Fクラス　峰嶋真琴　日本史　５２点

真琴「獣化が解けた!?」
僕「何かチャンス!!」

僕の召喚獣の木刀が真琴の召喚獣ののど元をつらいのだな。

Fクラス　吉井明久　日本史　４３点

ＶＳ

Fクラス　峰嶋真琴　日本史　０点

真琴「あちゃ～負けたか……あでで……」
美波「真琴、大丈夫?」

こっちもあっちもフィードバックの嵐。

僕「いってぇ～」
瑞希「明久君、大丈夫ですか?」
僕「なんとかね……はは……」

思わずその場に座り込む。

僕「なんか疲れちゃって……ンむ!?」

……？？？？？？？？？

なんだ？どういうことだろう？

瑞希の顔がすごく近くて、唇には柔らかい物が押し当てられていて、
いろいろ真っ白でェェ……

僕「……」

僕も腕を瑞希の頭と背中に回す。
お互いを大事に出来る時間。
幸せで、甘い時間。
そんな時間が……

司会『おーっと！？これはカップル誕生か！？』

続かなかった。

瑞希「ふぇ！？あ、明久君！？ええと、これはですね……」
真琴「お前ら……いくらなんでもこんな大勢の前でやるか？」
僕＆瑞希「……」

周りには観客。
なんかノリノリな司会。
これは……やっちゃった？

パチパチパチパチ！！

でなんでか拍手が聞こえる始末。

観客Ａ「Ｆクラスなのにすごいわ」
観客Ｂ「あの二人は仲がいいな」
観客Ｃ「お幸せにーー！！」

ってＣの人！？
それってまだ早くない！？

瑞希「あの……こういうのっていいんですかね？」
僕「……いいんじゃない？」

そう言って僕と瑞希はまたキスをする。
さっきは突発的にやってたみたいで周りの目は気にならなかったけど、今回は今回で気にならなかった。

僕「……ぷはぁっ……瑞希……大好きだよ。愛してる」
瑞希「私もです……明久君」

そして周りの目を気にしないで僕は瑞希を抱きしめる。

司会『優勝は、ここに誕生したすばらしいカップル、吉井明久さんと姫路瑞希さんに決定しました！！』

司会のナレーションで会場がいっそう盛り上がる。

ＦＦＦ団とか、どうなってるのかな？
それが僕の唯一の心配だった。

けど、そんなことも忘れさせてくれるくらいに、幸せだ。

君を愛してる。
手放したくない、君をこの腕の中に収めていたい。
君を、心の底から愛してる。

美波「真琴……駐輪場、覚えてる？」
真琴「忘れねぇーって」
美波「……真琴は、ああいう風に出来る？」
真琴「無理」
美波「そうよｎ『殺せー！殺せー！』『ガンホー！ガンホー！』…

……」

真琴「あいつら、片付けてくるわ」

美波「そうね。ウチも吉井と瑞希の仲を引き裂きたいわけじゃないから」

後日、Ｆクラスの一部を除く生徒が無残な状態で横たわっていた。

第三十九話　決勝戦　～敵は最強なり～（後書き）

清涼祭編はあと2話くらいで終わりのつもりです！
感想お待ちしております！

第四十話　油断とミスと結果オーライ？

バカテスト　英語

問　【？】と【？】に当てはまる語を答えなさい。

『マザー（母）から、【？】を取ったら【？】（他人）です』

姫路瑞希の答え

『マザー（母）から、【Ｍ】を取ったら【ｏｔｈｅｒ】（他人）です』

教師のコメント

そのとおりです。ＭｏｔｈｅｒからＭがなくなるとＯｔｈｅｒ（他人）という単語になります。
こういった関連付けによる覚え方も知っておくと便利でしょう。

土屋康太の答え

『マザー（母）から、【Ｍ】を取ったら【Ｓ】（他人）です』

教師のコメント

土屋君のお母さんが『ＭＳ』でも『ＳＭ』でも先生はリアクションに困ります。

吉井明久の答え

『マザー（母）から、【お金】を取ったら【親子の縁を切られるの】（他人）です』

教師のコメント

英語関係ないじゃないですか。

峰嶋真琴の答え

『マザー（母）から、【命】を取ったら【Ｋｉｌｌｅｒ】（他人）です』

教師のコメント

お母さんを大切にしましょう。

明久ＳＩＤＥ

真琴「やってくれたなこのバカップル」

僕と瑞希は真琴にお説教されていた。

真琴「あの会場には姫路の親父さんがいた確率が高いのに何やってんだ」

僕＆瑞希「言い返す言葉もありません……」

真琴が言ってることは正しい。

瑞希の転校を阻止したくて召喚大会に出たようなものなのに、決勝戦終了直後に大衆の面前であんなことをすれば普通の親でも何かしら考えるだろう。

まして瑞希のお父さんは瑞希の健康を心配して転校を進めてくるような人だから、自分の娘がああいうことをすれば何を言ってくるのやら……

真琴「姫路の親父さんが見てないことを祈るしかないな」
僕「……」
真琴「見られてたら転校の阻止は厳しいだろうな……」
僕「ぐ……」
真琴「最悪、もう明久と姫路を会わせないとか言い出すかも……」
僕「もうやめてェェ！！」

こ、これはキツイ……
ていうか真琴は何の恨みがあってこんなひどい仕打ちを……

瑞希「あの……私達はどうすれば……」
真琴「一応教室の改善は出来てるし、Dクラスくらいの設備を買う金は集まったから、あとは説得しかないな」
僕「なら僕が行って……」
真琴「お前が行っても逆効果だバカ」

ぐ……仕方ないとはいえ、それでも言われるとムカつく……

真琴「姫路の親父さんがもう転校しなくてもいいと言えばそれでよし。そうでなくても姫路が単独で説得できればまだいい。一番避けたいのはもう手遅れになってるってパターンだからな」
瑞希「説得できるでしょうか……」
真琴「微妙。物理的な意味で姫路を転校させなきゃならない理由はほとんどなくなったから、あとは感情の問題だからな。はっきり言ってオレの一番苦手な分野だ」
瑞希「……じゃあ私、行ってきますね」
僕「じゃあ僕も……」
真琴「逆効果だっつってんだろバカ」

ああ……この清涼祭二日間だけで難解バカって言われたんだろう……？

瑞希「あ……お父さん……」
僕「……（ダラダラ）」
真琴「まさか来るとは……」

うわぁ……ほんとに瑞希のお父さんだ。
しかもなんか結構真面目な顔してる！
もうだめだ！！手遅れなパターンだ！！

真琴「……終わったな」
瑞希「そんな……」

どうしよう！？こっち来るよ！？
結構すごい顔してこっち来るよ！？

政宗さん「……吉井君」
僕「はいっ！！」

怒られる！！これは間違いなく怒られる！！
真琴は首を横に振ってるし！！
助けてぇー！！誰か助けてください！！

政宗さん「……娘を……」

うわあ！！
これはドラマとかでよく見る『よくも娘をたぶらかしてくれたな！！』パターンだっ！！
死ぬ！！社会的に死んでしまうー！！

政宗さん「娘をよろしくお願いします！！」

そう言って頭を下げる政宗さん。
これはもうだめ……はい？

僕「あの……」
政宗さん「瑞希を幸せにしてやってください！！」

……いろいろ突っ込みたいんだけど。

僕「真琴。僕には説明が必要みたいだ」
真琴「よく分からんがこの人はお前を姫路の婚約者だと思ってるみたいだ」

はあ……婚約者ね……
いろいろと大事な手順を飛び越してるような気がする。

真琴「ちなみに日本における男性の結婚適齢は１８歳だから明久はまだ結婚なんて出来ませんからね？」

真琴。違うんだって。
確かに嬉しいけどいろいろと間違った部分があるんだって。

政宗さん「そうですか……ならまだ婚約者どまりですね……」
僕「いや、違うから！！いろいろと間違ってることに気づいて！！」
瑞希「明久君は……私じゃ嫌ですか？」
僕「嫌じゃないしむしろ嬉しいけどこの会話の内容自体が不自然って事に気づいて！！」
真琴「女性の結婚適齢は１６歳以上だから姫路は問題ないけどな」

僕「そういうことを聞いてるんじゃない！！」

おかしい。

この場に常識的な人が僕しかいない気がする。

瑞希「明久君……明久君が１８歳になって、もしまだ気が変わってなかったら……」

僕「……（ごく）」

瑞希「私と結婚してくれますか？」

……なぜこうなったのか思い返してみる。

なぜ結婚の話になったのか？

それは瑞希のお父さんが常識という枠から外れまくったことを言ったからだ。

？　待てよ？

瑞希のお父さんが認めるってことは、これは公認？

ならいいんじゃないか？

僕「……僕も「明久。ババアのとこ行くぞ」なんでいいとこで邪魔するの！？」

真琴「腕輪の件だ。さっさとババアのとこ行くぞ」

ぐ……

軽く流された気がするんだけどな……

瑞希「いいじゃないですか。あれは真琴君なりの気遣いですから」

僕「気遣い？」

瑞希「やるなら二人っきりのときにやれ……ってことですよ」

ああ、なるほど。

僕「……なら、早くいこうか？」

瑞希「はい！」

真琴「邪魔するぞババア」

ババア室に入るなり真琴の罵倒。

そこには既に雄二と霧島さん、島田さんがいた。

美波「いきなり入ってきてババアってあんたねぇ……」
瑞希「真琴君。目上の人にその言い方はないと思います」
真琴「大丈夫だ。このババアはホモ・サピエンスとともに過酷な時代を生き抜き、豊臣秀吉や織田信長とも刃を交えた妖怪だからな」
僕「噂ではティラノサウルスにまたがったとも聞いてるよ」
雄二「ああ、この地球の歴史の全てを知ってるからな」

ここぞとばかりに僕と雄二も便乗。

ババア「あんたたちにはこの学園で誰が一番偉いのかを教えたほうがよさそうだね」
真琴「御託はいいからさっさと始めるぞババア」
ババア「アンタが言いだしっぺさね！！」

最近真琴の罵倒にキレがかかってる気がする。

真琴「この金色の腕輪と白銀の腕輪はどうするんだ？」
ババア「この前も言ったとおり、まだ修繕できるわけじゃないから持っててもらうよ。ただし、暴走だけはさせるんじゃないよ」

ババアが僕と島田さんをみて言う。
そうか、真琴と瑞希の腕輪は暴走しないんだっけ。

ババア「全く、本当にやっちまうとは思ってなかったけどねぇ」
真琴「最強のＦクラスをなめるな」
翔子「……私はＡクラス」

いや、でも本当に勝てるとは思わなかったけどね。

真琴「で、さっきから盗聴してる天井裏の常夏コンビはなんなんだ？」

？？「……っ！」

僕「えっ！？」

天井裏からダッ！と駆け出す音が聞こえる。

真琴「姫路！」

瑞希「あ、はい！起動（アウェイクン）！！」

瑞希が起動ワードを唱えると召喚フィールドが展開される。

真琴「明久！」

僕「わかってる！」

僕＆真琴「試獣召喚（サモン）！！」

Ｆクラス　峰嶋真琴　現代社会　７７８点
　　吉井明久　現代社会　１３３点

ＶＳ

Ａクラス　常村勇作　現代社会　生身
　　夏川俊平　現代社会　生身

真琴の召喚獣がババア室の壁と天井をぶち壊して常夏コンビを引きずり出す。

ババア「学園長室を壊すんじゃないよ！！」

真琴「あとで親父の金で直すからいいだろ」

また脅迫でもするんだろうか？

真琴「じゃあ雄二、後はよろしく」

雄二「おう」

雄二が“パンチから始まる交渉術”で常夏コンビをシメる。

霧島さんも一緒になって楽しんでる。

僕「雄二、後任せてもいいかな？」

雄二「ああ、あとは任せろ」

僕「ありがとう」

雄二に許可をもらって瑞希と一緒にババア室を出て行く。

僕「瑞希、さっきの続き、屋上で話そう？」

瑞希「……はい」

「さて、オレは駐輪場だったな」

第四十話　油断とミスと結果オーライ？（後書き）

次回で清涼祭編終了です！

第四十一話　二組の絆（前書き）

今回はバカテストはお休みです。

第四十一話　二組の絆

明久ＳＩＤＥ

屋上。

後夜祭の放送設備がある以外には普段と何も変わらず、僕と瑞希の絆が一番深まりやすいところ。

今思えば、瑞希と付き合うようになったのもこの屋上だった。

瑞希「明久君。続きをお願いします」

そう言って瑞希はせかしてくる。

僕「あのね、僕はバカだし、甲斐性なしだし、金銭感覚に欠けるどうしようもない落ちこぼれなんだよ？」

成績は最悪、観察処分者、瑞希と僕ではあまりにも釣りあわなすぎる。

今はまだ、学生で、お互いが好きだから付き合っていられる。

でも、結婚となれば人生の大事な部分だとし、僕じゃホントに人生の墓場になりかねない。

瑞希「そんなこと言わないでください。明久君は落ちこぼれなんかじゃないです」

そういう風に易しく言ってくれるところも含めて、僕が瑞希とつりあう部分はひとつもない。

瑞希は完璧で、僕はダメダメなのだから。

瑞希「明久君は、自分と私じゃつりあわないなんて考えてますよね？」

僕「……」

言い返せない。

そう考えてたのは事実だし、それが真実だ。

瑞希「釣り合うとか、釣り合わないとかじゃないんです。その人がいいかどうかなんです」

僕「……瑞希……」

瑞希「私は、明久君がいいです。明久君じゃなきゃ嫌なんです！」

瑞希の言葉は、僕にとって嬉しい以外の何物でもない。

でも、僕で瑞希を幸せに出来るだろうか？

僕には、真琴のような頭の良さはない。

僕には、雄二のような狡猾さはない。

僕には、秀吉のような演技力はない。

僕には、ムッツリーニのような財力や計画性はない。

それでも、瑞希を幸せに出来るんだろうか？

瑞希「明久君……」

僕「でも、僕は何も得意な事なんてないし、特技だってないし……」

瑞希「そういうことじゃないんです！！」

瑞希の大声にハッとなる。

瑞希「何かが得意とか、何かが出来るとか、私が好きになった明久君はそういう部分じゃないんです」

僕「瑞希……」

瑞希「私が好きになったのは、いつも笑顔で、楽しそうで、優しい明久君なんです」

いつも笑顔で、楽しそうで、優しい。

それが僕の得意なこと。

彼女はそう言ってくれた。

僕「瑞希……本当に僕でいいの？」

瑞希「はい……私は明久君じゃなきゃ嫌です」

僕がいいと言ってくれている。

僕でなければ嫌だと言ってくれている。

そして、彼女がそうであるように、僕も彼女でなければダメなんだと思う。

僕「……なら答えはひとつだ。瑞希、僕が１８歳になったら、結婚しよう」

瑞希「嬉しいです……本当に嬉しいです……明久君」

そう言って瑞希を抱きしめる。

こんなにも幸せな気分は初めてだ。

このか弱くて、儚くて、何よりも愛しい存在を離したくない。

瑞希「知ってますか？明久君」

僕「何を？」

瑞希「清涼祭で結ばれたカップルは、とても幸せになるんですよ？」

僕「？　でも、僕達が付き合い始めたのは清涼祭じゃないでしょ？」

瑞希「でも私、気になるんです」

僕「？？？　ますますわけが分からないんだけど？」

瑞希「清涼祭で結ばれた夫婦は、どうなるんだろうって」

ちょっと吹いた。

瑞希「あ、明久君！笑うなんてひどいです！！」

僕「いや、だって、あまりにも分かりきったことを聞いてくるから……」

瑞希「分かり……きった……こと？」

分かりきったこと。

いや、絶対にそうさせること。

僕「僕達は幸せになる。いや、幸せにしてみせる。そういうジンクスに頼らないで、僕自身の力で、瑞希を幸せにするって決めたんだ」

瑞希「明久君……違いますよ」

僕「へ？」

瑞希「明久君も幸せになるんです。私一人だけなんて嫌ですから」

僕「瑞希が幸せなら、それが僕の幸せだよ」

瑞希の幸せは僕の幸せ。

……言ってて恥ずかしいかも。

でも、僕がそう思ってるのは真実だ。

だから、君を……

最愛の君を必ず幸せにして見せるから。

だから僕に、ついてきて欲しい。

美波ＳＩＤＥ

真琴「それで美波、何の用だ？」

今目の前にいるのは峰嶋真琴。
昨日、清涼祭が終わったら、駐輪場に来るように言ってきてもらった。

ウチ「あの、その……」
真琴「？？？」

やっぱりウチは恋愛対象として見られてないみたいで、昨日も女の子に見えるかどうか聞いたら女だろ？なんて言われたし……

真琴「用件ってなんだよ？後夜祭始まっちまうぞ？」
ウチ「あのね、えっと……」

やっぱり恥ずかしい！
しかも相手が今から告白されるなんて思ってない分余計に！

ウチ「ウチと……付き合ってください！！」
真琴「え……？」

言っちゃった！
どうしよう？きっと嫌われちゃう！

真琴「美波……オレ……」
ウチ「ごめん……忘れて……それじゃ」

そう言ってこの場を離れようとする。
真琴だってウチみたいなのじゃ嫌に決まってる。
そう思って逃げたかったのに腕をつかまれた。

ウチ「え……？」
真琴「待って美波。オレの話を聞いてくれ」
ウチ「い、嫌よ。どうせ断るんだろうし、そんなの聞きたく……」
真琴「いいから聞けって！！」
ウチ「！！」

真琴の大声にびっくりする。

真琴「オレ、今になってやっと分かったよ。美波が名前で呼べって言ったり、女に見えるかなんて聞いてきたりしてた意味が」
ウチ「……」
真琴「美波は、オレでいいのか？」

え？今のって……

ウチ「いいの？ウチは……」
真琴「いいに決まってんだろ。美波なら……」
ウチ「でも、ウチは瑞希みたいに胸が大きくないし、がさつだし、乱暴で……」
真琴「そんなこと言うなッ！！」

！！

真琴に怒鳴られて、一瞬ひるむ。

真琴「そんなこと言うなよ。美波だって言ってくれただろ……『真琴は化け物なんかじゃない』って……」

真琴はまっすぐに、ウチの目を見て言ってくれた。

真琴「美波が言ってくれたから、もう少し、人を信用してみようって思えたんだ……美波は、大事な存在なんだよ」

ウチ「真琴……」

真琴「……美波は、オレでいいんだよな？」

ウチ「うん……峰嶋真琴君、ウチと付き合ってください…」

真琴「オレの答えはＹＥＳだ。これからよろしくな、美波」

ウチ「……うん、よろしくね」

最高に幸せだった。

真琴が、ウチを好きになってくれる。

真琴「美波……」

ウチ「何？まこ…！？」

真琴に抱きしめられた。

抱きしめられて、キスされた。

真琴「……ふぅ…美波は初めてだった？」

ウチ「う、うん……」

真琴「良かった、オレも初めてだったから」

ウチ「／／／」

この笑顔。

純粋な、子供みたいな笑顔。

この笑顔が、真琴が今まで見せてくれた顔の中で、一番可愛くって……

そして、かっこよかった。

真琴「美波は、ドイツからの帰国子女だったよね？」
ウチ「そ、それがどうかしたの？」

突然質問されて、ちょっととまどう。

真琴「Ｉｃｈ　ｌｉｅｂｅ　Ｓｉｅ　ａｌｓ　ｅｔｗａｓ　ｄｅｒ　Ｗｅｌｔ」
ウチ「！！」
真琴「オレの気持ち、分かってくれたかな？」
ウチ「……うん、すごく嬉しい」

そう言って今度はうちからキス。
真琴も、それに答えてくれるかのようにウチを抱きしめる。

さっき真琴が言ってくれた言葉、最高に嬉しかった。
ウチも同じ気持ちだから。

Ｉｃｈ　ｌｉｅｂｅ　Ｓｉｅ　ａｌｓ　ｅｔｗａｓ　ｄｅｒ　Ｗｅｌｔ

私はあなたをこの世の何よりも愛します。

そう言ってくれた事が、とても嬉しかった。

「お、お姉さまの唇を奪うとは……見ていなさい峰嶋真琴！！」

第四十一話　二組の絆（後書き）

黒炉「はい、という訳で、清涼祭編終了です！」
明久「／／／」
瑞希「／／／」
真琴「／／／」
美波「／／／」
黒炉「？　どったのみんな？」
真琴「お前のせいだよ……」
黒炉「ハテ、ナンノコトヤラ？それより次なんだけどね」
明久「豪快にとぼけたよね……」
瑞希「絶対分かってるはずですよね……」
美波「ウチのファーストキス……」
黒炉「次は原作どおりで行けば強化合宿だよね」
真琴「そうだな。あの脅迫状、原作だと明久のとこに来てるけど、間違いなく矛先はオレだろうな」
黒炉「まあそういう発言は控えましょう」
明久「大丈夫だよ真琴。きっとまた、ｅｐｉｓｏｄｅ○・５とかが入ってくるから」
真琴「それにしたってどうせいつかは来るだろ」
黒炉「まあ入るんだけどね」
明久「ほらね」
黒炉「ちなみにサブタイトルも付くんだ♪」
真琴「へぇ……今まではついてなかったのにな。で、なんてつけるんだ？」
黒炉「僕らとオレらと如月グランドパーク」
真琴「よく分かった。ようはオレが美波と、明久が姫路と一緒に如月グランドパークに行くって企画だろう？」
黒炉「正解です」

瑞希「ほ、ほんとですかーー！？」
明久「大丈夫だよ瑞希。例えこの作者がうそつきでも、行くって約束したじゃないか」
瑞希「今からとっても楽しみです！」
美波「真琴も楽しみ？」
真琴「そうだな、楽しみにしてる」
美波「ウチもすっごく楽しみ！」
明久「あれ？真琴と島田さん、なんか仲良くなった？」
真琴「おい、結構前から仲良くなってたぞ」
明久「次回、『僕らとオレらと如月グランドパーク』！お楽しみに！」
真琴「うおい！？なんだ今の豪快なシカトは！？」
黒炉「ちなみに恒例のごとく誘拐ネタ」
明久＆真琴「今すぐ企画を考え直せ」
黒炉「し、仕方ないな……そのうち考え直す……」
明久＆真琴「今すぐ考え直せ！！」
黒炉「もうストーリー組んじゃってるんだよ！！しょうがないだろ！？」
明久「よーし、分かった！真琴！例のモードに！」
真琴「……」
黒炉「れ、例のモードってまさか……」
真琴「……右と左、どっちがいい？」
黒炉「わ、分かった！！じゃあ、こうしよう！二人に危害が及ばないように、措置を取るから！」
真琴「……譲歩してやる」
瑞希「明久君……私が誘拐されても、助けてくださいね？」
明久「勿論だよ！！」
美波「真琴も……助けてくれる？」
真琴「当然だ。美波に手を出したら闇魔大王に魂を謙譲させる」
黒炉「みんな熱いねぇ……ちなみにこの後書きでの会話は本編に入

ったら忘れるからね？」

明久＆真琴「意味ねぇじゃねぇか！！」

黒炉「あべし！！」

作者が死んだので続きません……と見せかけて次回へ続く！！

第四十二話　ヘビと真琴と桁外れなトラウマ（前書き）

唐笠さん感想ありがとうございました！

第四十二話　ヘビと真琴と桁外れなトラウマ

バカテスト　英語

問　以下の英文を和訳しなさい。

『Cette place est une place des m?moires』

峰嶋真琴の答え

『この場所は思い出の場所です　※これはフランス語だ。英語じゃない』

教師のコメント

こちらの手違いでフランス語の問題が混じってしまいました……
流石峰嶋君です。フランス語でも関係ありませんか。
この問題は解答に関わらず正解にしたいと

吉井明久の答え

『　　↑瑞希にだけ伝わる答え』

姫路瑞希の答え

『　　↑明久君にだけ伝わる答え』

島田美波の答え

『　　↑真琴にだけ伝わる答え』

教師のコメント

思いましたが君達3人は例外として×にします。
姫路さん島田さんはFクラスの毒気に犯されないように注意してください。
ただし君達のその信頼関係だけはすばらしいと思います。
先生はうらやましくなんかありません。

真琴ＳＩＤＥ

オレ「美波、待った？」

ここは如月グランドパーク。
召喚大会で準優勝の成績を収めたことで、プレミアムペアチケットを貰ったので美波と一緒に行こうと言うわけだ。

美波「ううん。今来たとこよ」
オレ「なら良かった。入ろうぜ」
美波「どんなアトラクションがいい？」
オレ「なんでも。絶叫系もお化け屋敷も怖くないからな」

はい。はっきり言って怖いものなんてないです。
……キレた母さん以外は。

美波「あれ？」
オレ「どうした？」
美波「アレって吉井と瑞希じゃない？」
オレ「そしてアレはムッツリーニだな」

みると明久と姫路がムッツリーニに写真を撮ってもらっている。
よく分からないがムッツリーニがいるということは雄二や秀吉もいるだろ……

オレ「……（ダラダラ）」
美波「どうしたの真琴？」
オレ「浮かれてて忘れてたけど、ＦＦＦ団の対策とかなんもしてなかった！！」
美波「……やっちゃったわね」
オレ「いや、でもきっと迎撃くらいなら余裕で……」
美波「向こうで吉井と瑞希が覆面集団に追いかけられてるわよ」
オレ「なんか……申し訳なくなってくるな……」
美波「あれで済めばいいけどね」
オレ「？？？　どういうことだよ？」
美波「そのうちフォークが飛んでくると思ったほうがいいわね」
オレ「フォーク？？？」

何を訳の分からんことを「シュッ！シュッ！シュッ！」ホントに飛んできたぁ！？

？？「チッ……次は当てます！」
美波「あ！待ちなさい美春！」
オレ「美春！？美春って清水美春か！？なんでホントにフォーク飛んで来るんだよ！？」
美波「あの子の特技なのよ……」
オレ「なんじゃその特技は！？」

全く、なんて危なっかしい特技を持ってるんだ！

オレ「とにかく中に入ろうぜ……」
美波「入る前から大惨事ね……吉井と瑞希はどうするの？」
オレ「助けてもいいけど、二人の邪魔をしたくないしな。明久なら何とかするだろ」
美波「本音は？」

オレ「めんどくさい」
美波「アンタかなりの鬼畜ね……」
オレ「そんなことないさ。さあ行こうぜ」

明久「何でこんなことにーーー!!?」
瑞希「明久君誰かに喋ったんですか!?」
須川?『吉井!貴様姫路さんと結婚の約束までしたそうだな!!』
横溝?『ガンホー!ガンホー!』
???『死の苦しみを思い知れ!!』

瑞希「明久君、ホントに覚えはないんですか！？」
明久「ないよーーー！！！」

？？『ねぇねぇそこのカップル～、このフィーが特別にオススメのアトラクション、教えちゃうよ～？』

……

オレ「河野妹、何をしてるんだ？」

麻奈美？『……』
美波「この人、なかったことにするつもりじゃないでしょうね？」
麻奈美？『このフィーが特別にオススメのアトラクション、教えちゃうよ～？』
オレ「なら聞かせてくれ。オススメはなんだ？」
麻奈美？『フィーのオススメはね、向こうに見えるお化け屋敷だよ～』
オレ「そうか。おかげでお化け屋敷には何かあるということと、お前の演技力がアニメの姫路並みだと言う事が良く分かった」
麻奈美？『そ、そんなひどくないよ！？』
オレ「姫路の演技力がないことは認めるんだな」
麻奈美？『とにかく、お化け屋敷に行きなさい！！』
オレ「断るね。明久と姫路を誘って来い。あのバカップルなら簡単に乗せられると思うぞ」
美波「真琴、瑞希がいるんだからそんなことには……」

瑞希『明久君、フィーちゃんがオススメがお化け屋敷っていってますよ？』
明久『なら行ってみる？』
瑞希『ちょっと怖いけど、行ってみたいです！』
明久『なら行こうか？』

美波「……」
オレ「そんなことには？」
美波「ウチが間違ってたわ……」

言っといてなんだが明久と姫路は今正直かなりバカになってると思う。
間違いない、いまなら誰でも信用するだろう。
そしてそれが明久の不幸につながる気がする。

？？『そこまでだ……フィーを困らせると、この俺が許さん……』
オレ「そんな暗いマスコットキャラクターの存在のほうが許されんだろ。声からして河野兄だな？」
重蔵？『……彼女さん、お化け屋敷、抱きつき放題……』
オレ「そんなことで行く訳が「行くわよ真琴！」って行くのか！？嫌な気しかしないんだけど！？」

こうやってオレも不幸の道を歩むのか……

オレ「結構本格的だな」
美波「そ、そそそうね、こ、ここ怖くなんかないけどどど」
オレ「思いっきりビビってるぞ」
なんで苦手なのに入ったんだ？
だけど怖がってる美波もこれはこれで可愛いからよしとしよう。
美波「て、手、離さないでね……」
オレ「離さないって」
そのとき聞こえてきたのは……
《……のほうが……よりも……ペッタ……》
オレ「？　これは明久の声だな」
美波「今ものすごく不愉快な単語があった気がするわ」
オレ「落ち着け。どうせ秀吉だろ」
《瑞希よりも、美波のほうが好みだよね。胸はペッタンコの方が好きだな》
ああ、これは明久死亡フラグだな。
瑞希『明久君！私と結婚の約束までしたのに何言ってるんですか！？』
明久『ち、違う！きっとこれは秀吉が……って釘バットォォォ！！？』
瑞希『お仕置きです！』
明久『ギャァァァァァァァ！！』

ああ、なんかオレもやばそうだ。

オレ「美波」

美波「なに？」

オレ「多分この後、オレの声で『美波よりも姫路のほうが好みだな。胸も大きいし』みたいなのが流れるが信用するな。恐らく秀吉だ」

美波「わ、分かったわ」

《美波よりも姫路のほうが好みだな。胸も大きいし》

オレ「一字一句違わず流れたぞ……」

美波「まさか本心じゃないわよね？」

オレ「違うって。オレが愛してるのは美波だけだよ」

美波「そ、そう？ならいいの」

うんうん。てれる顔も可愛いや。

オレ「さて、もう怖いものはないだろうし、さっさと……」

バン！（ヘビ登場）

美波「うわっ！なによヘビじゃない……このくらいならなんとも……」

オレ「$★…？＞＜！／¥ω％，＆～～～！！！？？？」（声にならない悲鳴）

美波「え！？真琴！？」

オレ「……（失神中）」

美波「え！？真琴ってヘビダメなの！？ちょ……係員さ～～ん！！」

そのあと急いで担ぎ出されたとか……
ヘビは本当にダメなんだって……

美波ＳＩＤＥ

真琴「……」
瑞希「大丈夫ですか？」
明久「真琴ってヘビがダメなんだね」

ウチ「声にならない悲鳴を上げるくらいだものね……」
真琴「ヘビ怖いヘビ嫌ヘビ来ないで……」

よっぽど苦手なのね。
こんなに怖がるなんて……一体何があったのかしら？

真琴「食べないで来ないで助けて怖いよ食べないで」

……本当になにがあったのかしら？

明久「真琴、流石にヘビに食べられることはないよ」
瑞希「そうですよ。そんな大きいヘビはいませんよ」
真琴「あ、明久に、姫路か……いるんだ。そういうヘビが……」
ウチ「いるわけないでしょ。しっかりしなさい」
真琴「いるんだよ。あれはオレが中２の頃だ……。いたずらでスズメバチの巣を親父の書斎に放り込んだんだ……」

既にいたずらの域を超えまくってるわよ……

真琴「そしたらあのクソ親父がキレてオレをアマゾンの奥地に一ヶ月放り込んだんだ……！」
美波「おかしいわよアンタたち！！」

いたずらもすごいけどお仕置きもすごいわ！！

真琴「そこには４ｍ級の大蛇がいて……一ヶ月間アイツから逃げることに集中して……！」

そんな中で生き延びた真琴だったらなんでもできると思う。
心の底からそう思ったわ。

真琴「何度かアイツの胃に押し込まれそうになって……２０日目には全身食べられて……！！（ガク）」
明久「また失神したよ……」
瑞希「今の話だけでとても同情したくなりました……」
ウチ「おかしいわよ……全てがおかしいわよ……」

そんな大蛇から１ヶ月逃げ延びるなんて、ある意味化け物かもしれないと、心の片隅でそう思ってしまった。

「ヘビが弱点……いいことを聞きました！」

第四十二話　ヘビと真琴と桁外れなトラウマ（後書き）

黒炉「さて、『オレと瑞希と召喚獣』連載できた～」
真琴「この物語、明らかに作者自身をオレに見立ててるだろ」
黒炉「そんなことないよ？それよりさ～…」
瑞希「私は明久君と結婚するんです！いますぐ中止してください！」
黒炉「いや、別物だから！『もし』の世界だから！！」
美波「ちょっと！真琴はウチのものよ！」
瑞希「私は明久君の物です！！」
真琴「それはちょっとどうかと思う」
明久「真琴！瑞希を盗ろうなんて許さないよ！？」
真琴「バカばっかりだ……黒炉、まとめてくれ」
黒炉「じゃあ落ち着こう！これは別の物語！登場人物が一緒なだけ！」
真琴「それは別の物語とはいえないくないか？」
黒炉「えーと、『オレ瑞』の真琴はこっちと大分違うよね」
真琴「そうだな。明久と知り合いじゃないとか」
明久「弟がいないとか」
美波「こっちよりもかなり閉鎖的よね」
瑞希「自殺願望も半端じゃないですよね」
真琴「おい、どうしてオレはこんなに物騒なんだ？」
黒炉「哀愁漂うヒーロー……これがカッコいい」
真琴「姫路が傍にいないと自殺を計る奴のどこがカッコいいんだよ！？」

黒炉「うそうそ。冗談。最初の設定で真琴は瑞希のことが好きってなってたじゃん」
真琴「そういえばそうだな。今は美波のことを愛しているが」
美波「真琴……嬉しい……」
黒炉「で、その頃の部分読んでたんだけど、真琴がかわいそうになった」
明久「本音は？」
黒炉「真琴×瑞希の展開を知りたい」
瑞希「私が好きなのは明久君だけです！！」
真琴「こんなに大雑把に振られたら結構傷つくぞ……」
明久「瑞希は僕のものだ！」
真琴「いい加減その発想から離れろ！既成事実でもなんでも勝手にやってればいい！！」
美波「真琴……ウチじゃダメ……？」
真琴「美波ならいつでも大歓迎さ……」
黒炉「真琴がいなくなると会話が続かないんだけど」
真琴「大丈夫。いるから」
瑞希「で、この後の展開はどうなるんですか？」
黒炉「ヒ・ミ・ツ」
真琴「美波、ペンチ」
美波「はい」
黒炉「爪切りいらずなんて嫌だ！！」
真琴「冗談だ。まあ本編で相当ネタバレめいた事してるからしょうがないよな」
明久「噂によると、強化合宿編のあとのその先にオリジナルストーリーを考えるとこまで行ってるらしいよ」
真琴「それかなり先だよな！？そんなことより勉強のほうは大丈夫なのか？お前は歴史と国語と英語は壊滅だろ？」
黒炉「平均点くらいだから……」
瑞希「数学はいいんですよね？」

黒炉「応！！数学は学年トップクラスだ！！」
明久「教科によって点数に差がありすぎるんだよね……」
真琴「５０点満点のテストで教科によっては『オマージュ！！』も差が出るなんて普通じゃないよな」
黒炉「そんなことより！『オレと瑞希と召喚獣』のほうもよろしくお願いします！」
４人「強引に押し切った……」

がんばれば続くかも……！？

第四十三話　友情と迷惑とウェディングドレス（前書き）

黒炉「本来なら誘拐だったのに……」
明久＆真琴「やらんでいい！！」
黒炉「はいはい……バカップルネタでもやりますよ……」
明久＆真琴「それもやらんでいい！！」

第四十三話　友情と迷惑とウェディングドレス

バカテスト　英語

問　次の単語を和訳しなさい。

『Ｋｏｒｅａｎ』

姫路瑞希の答え

『韓国語』

教師のコメント

正解です。流石姫路さんですね。

吉井明久の答え

『コーレアン』

教師のコメント

その意味を職員室でじっくり説明してください。

峰嶋真琴の答え

『？？？？』

教師のコメント

韓国語で書かれても。

明久ＳＩＤＥ

なぜこんなことになった？
こう聞かれれば間違いなくこう答えるだろう。
『雄二とムッツリーニのせいだ』と。

さかのぼること1時間前。

？？「ではスペシャルチケットをお持ちのお客様はこちらへどうぞ」
僕「……何やってるの秀吉？」

真琴がヘビに対するトラウマで再度失神したところへなぜか如月グランドパークのスタッフの衣装の秀吉がやってきた。

秀吉？「何を言っておられるのですか？私は如月グランドパークのスタッフ……。お客様の知人とは、縁もゆかりもございません」
真琴「明久……この秀吉は何を言ってるんだ……？」
美波「それに吉井と瑞希だけっておかしくない？ウチらも同じものを……」
真琴「あのババアが優勝者と準優勝者に同じもの渡すわけねえだろ……おおかた優勝者にはなんかイベントがついてて準優勝者にはそれがないってとこか。……ヘビ怖い」
明久「あ、なるほど」
瑞希「学園長先生をババア呼ばわりは酷いと思います……」
真琴「気にするな姫路。妖怪を人間と認めてやってるだけでも褒めて欲しいくらいだ。……ババアの姿想像したら気持ち悪くなってきた……」

あ、真琴がダウンしかけてる。
流石に苦手なヘビと醜悪な妖怪のコラボはきついよね。

秀吉？「そちらのお客様は、見るだけとなってしまい、体験はスペシャルチケットのお客様だけとなってしまいます。申し訳ありません」
美波「そういうことなら仕方ないわね。でも体験って何の体験？」
瑞希「私も気になります」
秀吉「決まっているじゃないですか。ウェディング体験ですよ」
４人「ウェディング体験？」
秀吉「はい。ウェディング体験です」

秀吉がここにいるということは雄二やムッツリーニもいるんだろう。
秀吉はともかく雄二とムッツリーニなら全力で僕と瑞希のウェディング体験を阻止するはず。というか邪魔するはず。
なら断ったほうが無難な気がする。

僕「（真琴。雄二やムッツリーニが何かしてる可能性高いよね？）」
真琴「（ほぼ１００％な）」
僕「（じゃあ断ったほうが安全？）」
真琴「（まあな。雄二のことだから嬉々としてお前を殺りにくるだろう）」
僕「（分かった。もったいないけど命のほうが大事だ。ここは断ろう）」

確かに瑞希のためなら命を懸けてもかまわないが雄二のバカに殺られるというのは気に食わない。

僕「もったいないけど丁重に断らせて「やらせてください！」僕の

命が尽きた瞬間だね」

瑞希は僕が死んでもいいんだろうか？
時々この天然っぷりを恨めしく思う。

秀吉？「ではこちらへどうぞ。スペシャルランチもご用意しています」

真琴「それはオレたちも食べられるのか？」

秀吉？「はい。体験はあくまでこちらのお二方だけですが、そのほかはペアチケットをお持ちの方なら誰でも」

瑞希「明久君、楽しみですね」

僕「あ、はは……そうだね……」

さて、どうやったら雄二の魔の手から逃れられるんだろうか。
そのこと以外に頭に浮かぶものは無かった。

そして現在雄二とムッツリーニに拷問されている。

雄二「オラ明久ァ！！姫路とデートとはうらやましいご身分だな！！」

康太「……殺したいほどに妬ましい」

僕「そう思うんなら放っといてよ!!まこ……」
雄二「真琴ならこねぇぞ」
僕「なぜ……!?」
康太「……真琴の弱点。それはこれ」
そう言ってムッツリーニが取り出したのはおもちゃのヘビ。
まさか、それで真琴を!?

僕「卑怯だぞムッツリーニ!!君はそれでも男か!」
康太「……弱点を調べるのは普通」
雄二「それに明久、卑怯と言われる筋合いもねぇぞ!」

ぐ……たしかに雄二の言う通りだし、ムッツリーニの言い分も正しい……
だけど!

僕「人の忘れたい過去を穿り返すなんて可哀想だと思わないのか!?」
雄二「十字架に貼り付けられた状態で言われてもなぁ……」
僕「雄二がやったんだろ!?」

なんなんだコイツは!?
僕の幸せを邪魔して一体何が楽しいんだ!?

真琴「明久!」
僕「真琴!」

ポイ←ムッツリーニがおもちゃのヘビを投げる音

$★:?＞＜!／¥ω%，&～～～!!!???↑真琴の声にならない悲鳴

バタン!↑真琴が倒れる音。

僕「真琴ォォォ!!」

なんて卑怯な!
こんなに短時間で3回もヘビを見たら真琴は立ち直れなくなるじゃないか!!

雄二「さて、お遊びはここまでだ」
僕「今までのがお遊び!?この後はどんな酷い展開がッ!?」
康太「……明久、覚悟」
僕「怖い!?怖いよムッツリーニ!?」

この後何をさせられるんだろう?
女装?焼却炉?宇宙?
思い浮かぶ選択肢は僕にとって最悪のものばかりだ。

雄二「これをさっさと着るんだ」
僕「へ?」

雄二が取り出したのはタキシード。
確かこのタキシードはウェディング体験で使うはずのものだ。
そうか!!
やっぱり僕の悪友、本当は僕の幸せを願ってくれてて

雄二「これを着て情けない姿を姫路にさらして来い」
康太「……撮影は任せろ」
前言撤回。こいつはやっぱり僕の敵だ。
雄二「……様になってる」
康太「……無念」
僕「怒っていいかな？」

タキシードを（無理やり）着せられて鏡で確認する。
雄二もムッツリーニも呆然としていた。

真琴「お、いい感じじゃないか」
僕「あれ？もう大丈夫なの？」
真琴「ヘビのことか？……思い出させないでくれ」
僕「あー……ごめん」

今日は真琴にとって最悪の一日も等しいくらい災難が降りかかってる。
よく精神が壊れないな。

雄二「そんなことよりさっさと行け。姫路を待たせてるんだぞ」
僕「拷問しといてよく言うよ。全く……」

雄二の思うとおりになるのは癪だがまあ我慢しよう。
これで晴れて瑞希とのウェディング体験が……！
と思いながら駆け足で部屋を出て行く。

真琴『さてと、明久も無事送り出したしやれることは全部やれたな』
雄二『まあな。もう少し拷問したかったが……』
康太『……心残り』
真琴『全く……。しかし雄二、姫路にあんなに優しくして、霧島のほうは大丈夫なのか？』
雄二『何を言ってる？翔子がこんなところにいるわけ無いだろ？』
翔子『……雄二、今の話詳しく聞かせて』
雄二『翔子！？何でここにいる！？』
翔子『……峰嶋が連絡してくれた』
雄二『！？　真琴テメェ！！』

真琴『そんなことより姫路に優しくするなんてお前もしかして姫路のこと――』

雄二『俺が悪かった!!だからその先は言わないでくれ!!』

翔子『……雄二、浮気は許さない』

雄二『その先が想像できるなら真琴の嘘の可能性も想像して頭盤がぁぁぁ!?割れるようにぃぃぃ!!真琴テメェ覚えてろよォォォ!!』

康太『……』

真琴『ムッツリーニ、これ』

康太『……!?卑怯な……（ブシャアアア!!）』

真琴『お前に言われたくないっての』

……この会話は聞かなかったことにしよう。

ところ変わって会場。
さすがに結構な人数が入ってるんだけど、それはそれで緊張する。

真琴「明久、緊張するな」
僕「！？　真琴！？」
真琴「大丈夫だ。様になってるから」
僕「そ、そうかな……？」
真琴「照れるなら姫路に言われてからにしろ。じゃあな、オレも仕事があるんで」
僕「あ、うん」

仕事？
真琴もグルだったのか……油断していた。

司会『それでは新郎の登場です！』

あれ？この司会の声って……

司会改め真琴『拍手でお迎えください！』

やっぱり真琴か！
ていうか一瞬であそこまで移動するなんて人間技じゃない！！
とか思いつつ呼ばれてるので歩き出す。

司会『それでは新婦のプロフィールを――――あっ！雄二テメ、何し

てやがっ…ぐわっ！』

なんだ！？何が起こってるんだ！？

司会改め雄二『腹いせも含めて省略します』

雄二ィィィ！！

あいつめ、さてはアニメとかその他もろもろでプロフィール紹介を省略したことを根に持ってるな！？

そんな小さいことをするなんてどれだけ器が小さいんだ！！

司会改め真琴『雄二！マイク返せ！！……それでは新婦の入場です！』

すごい！！今の乱闘を無かったかのようにして進めた！

その心意気に感動するよ！

司会改めもういいや『では姫路瑞希さんのご入場です！拍手でお迎えください！それから作者はもういいやとか書くな！！』

いい雰囲気だったのに最後の一言で台無しだ。

まあ気にするまい。今はそんなことより瑞希だ！

え？何？のろけだって？

そんな言葉、僕には届かない！見ろ！瑞希が……

瑞希「……」

僕「……あの、綺麗……だよ？」

瑞希「あ、ありがとうございます……」

なんだろう。

さっきまで雄二とムッツリーニに拷問されてたのも気にならないくらい不思議な気分だ。

司会改めゴリラ代表『さっさと誓いの口付けでもしやがれ！それからだれがゴリラ代表じゃ！！』

ゴリラ代表がうるさい上にこんなときまでギャグ要素を組み込まなくてもいい。

僕「瑞希……あの……」
瑞希「……幸せです」
僕「え……？」
瑞希「こうやって、形だけでも明久君のお嫁さんになれたことが、とっても嬉しくて……幸せです」
僕「瑞希……」

瑞希は涙を流している。
バカで甲斐性なしの僕のお嫁さんでいることで、嬉し泣きをしてくれている。
こんな僕でも良いと言ってくれた。
なら僕も……

僕「瑞希……僕も……」

リコ「あーあ、つまんなーい」

僕「!?」
リコ「つまんなーい。たかが高校生の癖にお嫁さんとか図々し過ぎるんですけどー?リュータもそう思うでしょ?」
リュータ「ああ、そうだな。そんなバカそうでブサイクな奴のどこがいいんだか」
リコ「さっすがリュータ!言うことが違う!その娘も、私と比べたら雑草みたいなもんだしねー」

!?

……あいつら……

真琴『雄二、あのバカ共はなんだ?』
雄二『事あるごとに明久と姫路に突っかかってくるバカップルだ』
真琴『そうか。だから明久よりもバカみたいな行動しか出来ないのか』
雄二『俺も同感だな。珍しく意見があったな』

!?

雄二に真琴!?
マイクのスイッチ入ってるのに何やってるんだ!?

リコ「なにこれ?あたしたちのこと?」
リュータ「ちげえだろ。俺たちはオキャクサマだからな。あの二人のことといってるんだろ」
リコ「なるほどー!リュータあったまいい!!」
真琴「テメエらの事だよ。バカップル」

真琴が飛び降りて言った。

僕「真琴!もういいから……」

真琴「迷惑だって気づけ。そのバカみたいにすっからかんの頭フル活動させて良く聞け。これ以上二人の邪魔するならオレが直々に処分してやる」

言いすぎだ！
いくらなんでもこれ以上言ったら向こうも何をしてくるか分からない。
清涼祭の時と違って、向こうは何も暴力をしていないのに！

リコ「なにコイツ？チョーシのってない？」
リュータ「そうだな。でも俺たちのことじゃないって。リコみたいな可憐な乙女にこんなひどい事言うわけねって」
リコ「そうよねー、アタシはそこの花嫁と違って、すんごく可愛いからー」

マズイ！このままだと多分真琴キレる！
なんとか止めないと……

真琴「雄二、コイツら殺っていい？」
雄二『殺すな。それだけだ』
真琴「了解。世の中には死よりも恐ろしい事があるって教えてやらないとな」

そう言って真琴はバカップルの首をつかんで出て行く。
恐らくあの二人はもう生きて帰れない。

雄二「明久。そんなことより、姫路を探して来い」
明久「え？　あ、瑞希……」

雄二に言われてとっさに振り返る。

そこにはもう瑞希はいなかった。

雄二「相当ショックだったんだな。今の姫路を慰められるのはお前だけだぞ、明久」

僕「……うん、ちょっと行ってくる」

雄二「がんばれよ」

なんでバカップルがあんなひどいこと言うのか分からないけど、僕は瑞希に伝えなくちゃならない事がある。

それを、瑞希に伝えなくちゃいけない。

第四十四話　大切な仲間

バカテスト　特別編

問　以下の問に答えなさい。

『如月とは何月の事か答えなさい』

姫路瑞希の答え

『２月』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『１～１３月のどれか』

教師のコメント

月は１２までしかないという事を理解してください。

峰嶋真琴のコメント

いくら明久でもこれはひどい。

明久ＳＩＤＥ

僕「瑞希……どこに行ったんだろ……」

今にして思えばあの時ちゃんと瑞希をみていればこんな事にはならなかったはず。

雄二たちも探してくれてはいるけど僕が見つけなきゃ意味が無いのに。

真琴「明久」
僕「真琴!?あれ?バカップルの相手をしてたんじゃ…」
真琴「ムッツリーニと美波に任せてきた。それより姫路ならあっち」

そう言って真琴は観覧車のほうを指差す。

僕「そう……。ありがと」
真琴「なぁ、ひとつ聞いてもいいか?」
僕「なに?」
真琴「さっき姫路が雑草呼ばわりされたのにすぐにキレなかったよな?お前ならあの段階でキレると思ったんだけど」

事実、オレも冷静じゃなくなったのはあの一言だ。と真琴は続けた。
どうして怒らなかったかって?
簡単な事だ。

僕「そんなことで怒らないよ。瑞希が雑草じゃないなんて当たり前だよ。そのことは僕が一番分かってる。だからそんな事で怒ったりしない。あんなやつ等は相手にする価値も無い」
真琴「ん。及第点と言ったところか。まあいい、早く行って来い」
僕「分かった。ありがとね」
真琴「良いってことよ」

僕は真琴をその場に残して駆け足で真琴が指差したほうへ向かう。

真琴「じゃあオレは暇潰しに人間を二人、壊してくるかな」

瑞希は、観覧車の下にあるベンチに一人で座っていた。

瑞希「明久君……」

僕「あの二人の言った事なら、気にしなくていいよ。あんなのは気にする価値も無い」

なんだか慰めてるのに逆効果な気しかして来ない。

瑞希「やっぱりそうですよね……」

僕「そうだよ。瑞希は雑草なんかじゃ……」
瑞希「やっぱりダメなんです」
僕「え……？」

何を言ってるんだ？
何がやっぱりダメなんだ？

瑞希「やっぱり私なんかが明久君の隣にいるなんておこがましいんです」
僕「何を言って……」
瑞希「最初からずっと分かりきっていた事です。私なんかが、人気者の明久君の隣にいる事なんか出来ないって。分かってたつもりなんです。でも分かってなかったから……」

それってどういうこと？
瑞希は、自分は僕とじゃ釣り合わないとか思ってるってこと？

瑞希「あの二人の言うとおりです。私なんかがお嫁さんなんて、図々しかったんです……。やっぱり私は、誰からも見向き去れない存在なんです……」
僕「何言ってるんだよ……」
瑞希「明久……くん……？」
僕「何言ってるんだって言ってんだよ！！」
瑞希「！！」

大声にびっくりして瑞希の体が震える。
でもそんなのも関係ないってくらいに力が入った。

僕「誰からも見向きもされない！？そんなわけ無いだろ！！なんで真琴や雄二、秀吉やムッツリーニや島田さんが瑞希と一緒にいると

思ってんだよ！！」
瑞希「でも、私は……」
僕「みんな瑞希の事が好きだからだよ！！」
瑞希「！！」
僕「みんな瑞希の事を仲間だと思ってて、みんなにとって瑞希は大切な存在だからだ！！」
瑞希「……」
僕「だからさ……誰からも見向きもされないなんて言わないでよ……そんな悲しい事……」
瑞希「……（コク）」
僕「それにさ、釣り合うとか釣り合わないとかじゃないって言ったのは瑞希だよ？」
瑞希「そう……でしたね……」

清涼祭の後夜祭で、屋上で瑞希が言ってくれた事。
そのおかげで、自分の考えは間違いだって気づけたんだ。
人が人を好きになるのに、釣り合うも釣り合わないも無いんだって。
瑞希のおかげで気づけたんじゃないか。

僕「僕は瑞希の事が好きだ。大好きだ。愛してる」
瑞希「明久君……私もです」
僕「真琴たちも瑞希が好きだ。瑞希は真琴達の事、嫌い？」
瑞希「そ、そんなこと無いです！」
僕「ならそれでいいじゃないか。僕たちみんな瑞希の事が好きで、瑞希も僕たちみんなのことが好きで、何か問題ある？」
瑞希「全然無いです……」
僕「でしょ？ならそれでいいんだよ」

今、生まれて初めて自分がバカでよかったと思ってる。
バカがバカなりに出した答えは、今は正しいって思えるから。

瑞希「明久君」
僕「何？」
瑞希「私、明久君と出会えてよかったです」
僕「へ？」

思わず間抜けな声が出てしまう。

瑞希「明久君と出会えて、好きになれてよかったです」
僕「……僕もだよ。瑞希」

お互いそれだけ言って、キスをする。
今日の、最初のキスを。

瑞希「……ぷはぁ……また、来ませんか？」
僕「瑞希が来たければ、いつでも来よう」

そう言ってまたキスをする。
こうしていられる時間がいつまでも続くようにと、願いながら……

～翌日～

瑞希「おはようございます、明久君」
僕「あ、おはよう瑞希」

この前と同じように、学校の前で瑞希と会った。

瑞希「昨日は楽しかったですね」
僕「いろいろ大変だったけどね……」

ＦＦＦ団とか、秀吉の偽造音声とか、雄二の拷問とか、バカップルとか……

瑞希「そういえば、もうすぐ強化合宿ですよね？」
僕「そうだね、実は楽しみにしてたりするんだよ」

なぜかというと三食きっちり出てくるから。

瑞希「また張り切って、お弁当作りますね」
僕「う、うん……楽しみだね……」
なぜかこの人の作る弁当は僕が食べる物以外には劇薬が混入される。
明確な殺意を持ってるとしか思えないんだけど……
瑞希「……あれ、坂本君ですよね？」
僕「……雄二だね」
瑞希の視線の先にはＦＦＦ団に追いかけられる雄二と雄二を追いかけるＦＦＦ団。
さては霧島さん関連でまた何かやったな？
瑞希「……遅刻したら怒られちゃいますし、教室に行きましょうか」
僕「そ、そうだね……」
教室に行けば寝込んだ真琴と看病する島田さんがいる始末。
僕「島田さん。状況の説明を頼めるかな？」
美波「美春がヘビのおもちゃ振り回してくるから真琴が倒れたのよ」
僕「ああ、なるほど」
昨日３回もヘビを見て今日も朝から見たんじゃそりゃ寝込むよね。
瑞希「……Ｆクラスらしいって言えばらしいんですけどね」
僕「まず清水さんはＤクラスだし、それはいくらなんでも真琴が可哀想だと思うよ？」
これは強化合宿も大変な事になりそうだな……

第四十五話　写真と脅迫と学力強化合宿！（前書き）

お気に入り登録件数５０件突破です！
ありがとうございます！

第四十五話　写真と脅迫と学力強化合宿！

バカテスト　国語

問　［］部、『私』がなぜこのような痛みを感じたのか答えなさい。

父が鎮痛の面影で私に告げた。
『彼は今朝早くに出て行った。もう忘れなさい』
その話を聞いた時、［私は身を引き裂かれるような痛みを感じた］。
彼のことはなんとも思っていなかった。彼がどうなろうと知ったことではなかった。私と彼は何の関係もない。そう思っていたはずなのに、どうしてこんなにも気持ちが揺れるのだろう。

木下秀吉の答え

『私にとって彼は自分の半身のように大切な存在であったから』

教師のコメント

そうですね。自分の半身のように大切であった為、いなくなったことで『私』はまさに身を引き裂かれたかのような痛みを感じたということです。最近、木下君の成績が上がりつつあるので、先生はとても嬉しいです。

姫路瑞希の答え

『私にとって明久君は半身のように大切な存在であったから』

教師のコメント

言いたい事は分かりますが不正解です。
姫路さんは最近珍回答が目立つので気をつけるように。
しかもこの回答のせいで吉井君、峰嶋君、島田さんの回答が予想できてしまいました。

吉井明久の答え

『僕にとって瑞希は半身のように大切な存在であったから』

峰嶋真琴の答え

『オレにとって美波は半身のように大切な存在であったから』

島田美波の答え

『ウチにとって真琴は半身のように大切な存在であったから』

教師のコメント

予想通りです。君達は本当に仲が良いですね。

霧島翔子の答え

『私にとって雄二は半身のように大切な存在であったから』

教師のコメント

坂本君が意識不明で発見される事があるのですが何か知っていますか？

清水美春の答え

『美春にとって美波お姉さまは半身のように大切な存在であり、峰嶋真琴は美春にとってハエ以下の存在価値も無い下衆クソ豚野郎にも等しい存在であったから』

教師のコメント

人の恋路を邪魔すると馬に蹴られますよ。

峰嶋真琴のコメント

いくらなんでも酷すぎるだろ！？

真琴ＳＩＤＥ

時は朝、場所は下駄箱前。
オレは自分の下駄箱の中に入っている一通の便箋を見てフリーズしかけていた。

オレ「……ラブレター？」

特にこれと言って特徴の無い便箋。
ラブレターとして使うにはあまり向いてないと思い、そのほかの可能性を模索する。

オレ「招待状……？いや、連絡事項？それとも……」

まあ中身が何であれ、確認すればいいのだが。

オレ「なんだろうな？差出人が書いてない辺り、告白の呼び出しと

かか？まあオレには美波がいるし、相手の話をしっかり聞いた上で丁寧に断れば……」

独り言を言いながら中身を確認し、完全にフリーズ。

『あなたの秘密を握っています』

オレ「最悪じゃーーー！！」

この脅迫状のせいで、後々大変な事になることを、このときのオレは知る由も無かった。

ところ変わって教室。

美波「真琴、さっきの悲鳴じみたのはなんだったの？」

オレ「ほっといてくれ……」

ラブレターか何か平和な物だと思ってたら脅迫状なんていう普通の高校生には無縁のものだったなんて恥ずかしくていえない。
それにもし誰かに喋ってオレの秘密とやらを言いふらされる事になるのも嫌だ。
なんとしても隠し通さねば……
美波「そのポケットの便箋は何？」
４秒で見つかった。
オレ「これ以上オレの傷口を広げないでくれ……」
雄二「どうした真琴。ラブレターでも貰ったか？」
は？何を言ってるんだこの短髪ゴリ（ボキボキボキボキ）背中の間接がぁあぁぁ！！
美波「どういうことよ！？しっかり説明しなさい！！」
オレ「あだだだ！！話す！話すからコブラツイストを決めるのやめてくれェェェ！！」
このクソゴリ短髪雄二のせいでえらい目にあった。
美波「脅迫状？」
オレ「ああ。『あなたの周りの異性にこれ以上近づかないこと。さもなくば同封した写真を公開する』ってさ」
美波「同封した写真ってどんなの？」
オレ「あんまり見せたくないんだが……」
美波「見せないとキャメルクラッチ決めるわよ」
オレ「分かったって……ほらこれ」

どうやらこの学校で人権やらプライバシーやらは尊重されないらしい。
またひとつ学んだな。

美波「……」
オレ「美波。勘違いしないでくれ。オレにこういう趣味は無いから」

とりあえず見せたのはメイド服姿のオレの写真。
同封の４枚の写真の中で一番ショックが少なかった奴。

美波「これは貰っていくわ。大切にしなきゃ……（で、他にもあるの？）」
オレ「本音と建て前が逆だぞ。まあ美波ならいいんだけどな。で、その次がこれ」

次に渡したのはメイド服姿（パンチラ☆エディション）。
これでもまだ２番目。

美波「真琴……。これって……」
オレ「落ち着け……トランクスだからセーフ……セーフなんだよ……」
美波「残念だけどアウトね。で、他には？」
オレ「見せられるのはこれで最後だ。後の１枚は……（ゾクッ）」
美波「ふーん。今度はどんなのかしら？」

メイド服着替え中（着崩れ仕様）。

美波「スキャナーで全国送信する必要があるわね」
真琴「もう生きていけない！！」

もうだめだ！！窓からダイブだ！さあ急げ！！

秀吉「なっ、何をしておるのじゃ真琴！！飛び降りなどするでない！！」

オレ「放せ秀吉！オレはもう死ぬには十分な屈辱を受けたんだ！！」

秀吉「何があったかは知らぬが落ち着くのじゃ！！」

みどり「ついでに言うと琴君は飛び降り程度じゃ死ねないよね？体強すぎるから」

……

誰か殺して……

明久「おはよう島田さん。ひとつ聞きたいんだけどどうしてFクラスのホームルーム前の教室は状況説明が必要なときばかりなのかな？」

美波「Fクラスだからよ」

明久「ああ、なるほど」

その説明で理解できる時点でおかしいと思う。

瑞希「では美波ちゃん。状況の説明、お願いできますか？」

美波「じゃあ質問なんだけど、吉井のメイド服姿の写真があったら瑞希はどうする？」

明久「僕にはその質問の意図が分からない」

オレも全く同意見だ。

瑞希「そうですね……スキャナーを買いますね」

明久「スキャナー？どうして？」

瑞希「だって……そうしないと明久君の魅力を世界中に送信できないじゃないですか……」

こんなところにもオレと同じ末路をたどろうとしている男がいた。

明久「真琴！僕は生きていけない！！」
オレ「オレもだ明久！一緒にお星様になろう！！」
秀吉「二人とも落ち着くのじゃ！！」

この後オレは美波の元祖サソリを喰らい、明久は姫路の涙目＋上目遣いにより制圧された。

瑞希＆秀吉＆みどり「脅迫状？？」
美波「そうみたい。『これ以上異性と近づかないように』って」
瑞希「真琴君の周りの異性って言うと、美波ちゃんかみどりちゃんか私か木下君ですよね？」
秀吉「姫路よ、木下“君”と言いながら女扱いは酷くないかの？」

明久「最有力候補は島田さんだよね」
みどり「と言うことは、みなみんに好意を抱いている人か、琴君本人に好意を抱いている人のどっちかってことだよね」
真琴「オレへの好意ってのは薄いな。だったら美波や秀吉に脅迫状を送ってくるはずだ」
秀吉「真琴までわしを女扱いするでない！！」

さて、とりあえず脅迫犯を見つけてマスターデータを削除しないと大変な事になるな……

秀吉「そうじゃ！ムッツリーニに相談して……」
明久「笑われそうだね」
オレ「……（声を殺して泣く）」
明久「ごめんね真琴……」

もう生きていけない……（いろんな意味で）

秀吉「そうではない！ムッツリーニに協力してもらうのじゃ！！」
明久「ああ、なるほどね。ムッツリーニはこういうの得意だから、脅迫犯とどんぐりの背比べと行くわけだね？」
瑞希「それを言うなら『目には目を、歯には歯を』だと思いますけど……」
みどり「そうと決まればはやくムッツリーニ君を探しに行こう！」
オレ「……（声を殺して泣く）」
美波「はいはい。ショックなのは分かったから、早く土屋を探すわよ」
オレ「……（声を殺して泣く）」

もう、お婿にいけない……

オレ「ムッツリーニ。ちょっといいか？」
康太「……取り込み中」
雄二「先に俺が話してるんだ。どっかいけチビ」
オレ「テメエがでかすぎるんだよ。長身ゴリ蔵」
オレ&雄二「……」
康太「……雄二、続きを」
雄二「おお、そうだったな」

？　雄二がムッツリ商会で買い物なんて珍らしいな。

それとも別の用件か？

雄二「……というわけで翔子に脅されそうなんだ。頼む」
康太「……分かった」
オレ「なんだ？また霧島にしてやられたのか？」
雄二「ちげえよ。これなんだ」

そう言って渡してくるのはＭＰ３プレイヤー。
再生ボタンを……やめとこう。壊しそうだ。

オレ「悪い。オレ機会音痴なんだ。再生してくれ」
雄二「どんだけ酷いんだ……？まあいい。ほら」

雄二が再生ボタンを押す。
流れてくるのは雄二の声。

《翔子》《好きだ》《結婚》《してくれ》

オレ「……合成か？」
雄二「ああ。何で分かった？」
オレ「お前が霧島に対してオープンになる訳が無いからな」

コイツは常に卑怯な手を使って霧島の純粋な恋心から逃げるだろう。
そういう男だ。

オレ「で、これがどうした？」

雄二「これを父親に聞かせるって翔子が言ってたんだ。アイツ、機会音痴の癖になんでこんなの持ってるのかわかんねえ。恐らくこれを作った奴がいるはずだからそれを突き止めたい」
オレ「隅から隅まで笑えないな……」

いくら有事の事が好きでもこれはやりすぎだ。
そもそもお互いの同意があって始めて成立するのにこんな物では一方的もいいとこだ。

雄二「真琴はどうしたんだ？」
オレ「雄二と同じ、脅迫されたんだ。清涼祭のときのメイド服姿の写真をばら撒かれたくなかったら、異性から離れろだってさ」
雄二「脅迫仲間かよ……」
オレ「こんなことで仲間できてもな……」

嬉しくない。

康太「……真琴のほうも調べておく」
雄二「悪いな。今度お前が気に入りそうな本を3冊持って来よう」
オレ「オレはそういうのは持ってないからな。ムッツリ商会で買い物するときの値段を2倍にしてくれ」
康太「……必ず調べておく」

こうして脅迫犯捜索作戦（？）が開始された。

明久ＳＩＤＥ

真琴「おまた」
僕「あ、真琴。どうだった？」
真琴「なんとかムッツリーニに調べてもらえる事になった」

大変だな、真琴も……
僕も気をつけないと……

鉄人「席に着けー。ＨＲ始めるぞー」

鉄人来たので全員着席。
僕と真琴は隣同士で、僕のもう片方の隣に瑞希、真琴のもう片方の

隣に島田さんが座っている。

鉄人「強化合宿のしおり分けるぞー。大体の事はこれに書いてあるから目を通しておくように」

合宿か……

皆で泊り込みのイベントは北海道のときぶりかな？

ほんの１ヶ月前のことだけどね……

瑞希「明久君、楽しみですね」

僕「そうだね。来年に向けて、もっと頑張らないと」

瑞希「来年……ですか？」

瑞希が首をかしげる。

僕「うん。来年は瑞希と一緒に、Ａクラスに行くんだから」

瑞希「明久君……もしよければ、また一緒にお勉強しませんか？」

僕「うん！よろしく頼むよ！」

ちなみにＦＦＦ団は最近おとなしい。

真琴の前ではどうやっても異端者（僕）までたどり着けないと悟ったようだ。

鉄人「いいかお前ら。クラスごとに集合場所が違うんだからな。他のクラスと間違えたりするなよ？」

Ａクラスはやっぱリムジンバスとかかなぁ……

Ｆクラスは普通のバスとか……？いや、補助席とか小さい車とか？

狭かったらそれはそれで瑞希とくっつけるからいいけど。

鉄人「いいかお前ら、Ｆクラスは……現地集合だからな」

『『『案内すらないのかよ!?』』』

あまりの扱いに級友全員が涙した。

第四十五話　写真と脅迫と学力強化合宿！（後書き）

いよいよ強化合宿編です！
次回は弁当が麻酔であの人が……！？

『いよいよ僕の出番だね』ｂｙとある天才の弟

第四十六話　異性と占いとバスの中（前書き）

オリキャラ紹介（訂正版）

峰嶋宗太　♂

中学三年生。見た目は小学生低学年くらいの男の子。一部ショタコンに隠れファンが多い（性格も小学校低学年）。
飛び級でハーバートに入れるくらいの頭脳の持ち主だが、本人の希望で中学にかよう。
得意科目は化学（真琴よりも上）。
またパソコンなどの電子機器にも強く、真琴にはその方面でいろいろと頼られている。

唐笠さん感想ありがとうございました！
では本編どーぞ！

第四十六話　異性と占いとバスの中

バカテスト　英語

問　次の英文を訳しなさい。

『Ｈｉｓ　ｌｏｖｅｒ　ｉｓ　ｍｅ』

名川みどりの答え

『彼の恋人は私です』

教師のコメント

正解です。名川さんは物理以外でも点数が高いのでまあ当然でしょうね。

吉井明久の答え

『瑞希の恋人は僕です』

島田美波の答え

『真琴の恋人はウチです』

教師のコメント

予想通りです。

姫路瑞希の答え

『明久君の恋人は私です』

峰嶋真琴の答え

『美波の恋人はオレだ』

教師のコメント

これ以上珍回答が目立つようであれば西村先生に特別に補習をつけてもらいます。

霧島翔子の答え

『雄二の妻は私です』

教師のコメント

妻という単語は出てきません。

坂本雄二のコメント

俺は独身だ！！

真琴ｓｉｄｅ

現地集合。
聞こえはいいがただ単に引率がめんどくさいだけという見方も出来る。
ただ、この場合の現地集合は……

オレ「引率の先生もいないってひどすぎるな」

ただ金が掛からないからである。

明久「流石Fクラス、だよね……」
雄二「まあその分自由に出来るからいいじゃないか」
オレ「自由も何もうち（のグループ）のバスだろうが」

現在いつもの8人組が乗っているのは買王グループ路線バス。
クソ親父のエロ本（訂正）成人向けの写真集の場所を母さんにバラすといったら快く貸してくれた。

美波「……」
オレ「？　美波、何読んでるんだ？」
美波「これ？百均で買った占いの本よ。暇潰しに買ってみたんだけど面白いのよ？」
オレ「占いねぇ……」

占いは嫌いだ。
たいてい散々な結果に終わるからだ。

明久「何の話してんの？」
オレ「占いだってさ」
美波「吉井達もやってみる？」
オレ「オレはパ「やる」……」

オレには関節技を決められてくたばっている自分が視える。

美波「じゃあ第1問、『次の色でイメージする“異性”を挙げてください』」

ん？この問題聞いたことあるぞ？

美波「『？緑　？オレンジ　？青　？黒』それぞれのイメージに合う人を挙げてって問題ね」

うん。間違いない。
この占いやった事ある！
これで関節技の未来は遠のいた！

明久「『？緑→島田さん　？オレンジ→秀吉　？青→瑞希　？黒→真琴』かな？」
オレ「ちょっとまてやコラ」
明久「どうかした？」
オレ「黒でイメージする異性は？」
明久「真琴」
オレ「……」
明久「なななな何！？何に怒ってるの！？」
オレ「美波。窓開けろ。このバカを捨てる」
美波「ダメよ真琴。ゴミはちゃんとゴミ箱へ入れなきゃ」
オレ「ああ、そうだな」
明久「君達ひどすぎる！！」

ひどいだと！？
ひどいのはお前だ！！

オレ「人を女扱いしておいて何を言う」
明久「訂正！訂正するから！！」
オレ「……許す」

ちなみに黒でイメージする異性は『近寄りがたい人』である。
だからなんとなく怒れた。

美波「真琴はどう？」
オレ「オレか？『？緑→秀吉　？オレンジ→みどり　？青→美波　？黒→霧島』かな？」
美波「合格」
雄二「なんにだよ？」
秀吉「真琴。緑でイメージするのはなんじゃ？」
オレ「秀吉」
秀吉「おぬしも十分ひどいのじゃ！！」

半分冗談なのに……

みどり「琴君。秀君は男の子だよ」
秀吉「やはりわしを男として見てくれるのはみどりだけじゃ！！」
みどり「……体のつくりは」
秀吉「……」
オレ「秀吉……悪かったな……」
秀吉「もういいのじゃ……もういいのじゃ……」

一体どれだけ時間のかかる占いなんだろうな？

瑞希「皆さん楽しそうに何をしてるんですか？」
オレ「占い。『色でイメージする異性』だってさ」
明久「瑞希もやってみたら？」
瑞希「私ですか？明久君がそういうならやっても良いですけど……」
雄二「バスの中でいちゃつくのは止めてもらっていいか？」

雄二には霧島がいるのに嫉妬か？
見苦しいな。

美波「じゃあ行くわよ。『次の色でイメージする“異性”を挙げてください。？緑　？オレンジ　？青　？黒』」
瑞希「そうですね…。『？緑→木下君　？オレンジ→坂本君　？青→明久君　？黒→真琴君』こんな感じです」
オレ「……」

もういいよ！
ここまで言われたのは初めてだ！！

美波「その……真琴、ごめんね？」
オレ「もういいよ……もういいんだよ……」

美波はイメージする色が何を意味するか知ってるので同情している。
なんで知ってるの？とかそういうツッコミすら出来ない。

美波「つ、次いくわよ！『1から10の数字で、今あなたが思い浮かべた数字を順番に二つ挙げてください』」

数字を二つ？これは聞いたこと無い……

雄二「俺は5・6だな」
秀吉「わしは2・7じゃな」
明久「ぼくは1・4かな」
瑞希「私は3・9です」
オレ「オレは8・10だ」
みどり「アタシはパスね。それ知ってるから」
美波「そう？『最初に思い浮かべた数字は、いつもまわりに見せているあなたの顔を表します』だって。えっと――」

「クールでシニカル」→雄二

「落ち着いた常識人」→秀吉
「バカっぷり全開」→明久
「温厚で慎重」→姫路
「無慈悲で冷酷」→オレ

となった。

雄二「ふむ。なるほどな」
秀吉「常識人とは嬉しいのう」
明久「これってバカにされてない？」
瑞希「温厚で慎重ですか～」
オレ「無慈悲で冷酷か……かなり的を射てる気がするな」

ちなみに明久のはどう考えても罵倒である。

美波「その次、『次に思い浮かべた数字はあなたがあまり見せない本当の顔』ね」

「公平で優しい人」→雄二
「色香の強い人」→秀吉
「誰よりも熱心」→明久
「意志の強い人」→姫路
「超ド級甘えん坊」→オレ

おかしい。
なにかがおかしい。

雄二「秀吉は色っぽいのか」
秀吉「姫路は意志が強いそうじゃな」
明久「真琴は超ド級甘えん坊だってさ」

瑞希「坂本君は優しいそうです」
オレ「おかしい。オレのは何かが絶対おかしい」

そもそも人に見せない顔なのに甘えん坊の時点でおかしいだろ。
なぜ誰もそれに気づかない？

康太「……（ムクッ）」
オレ「お、ムッツリーニ。起きたか」
康太「……空腹で起きた」
明久「え？もうそんな時間？」

手元の時計で確認するともう1時過ぎ。
たしかに腹も減るわな。

秀吉「確かにそろそろ腹も減ってきたころあいじゃし、昼にせんか？」
雄二「そうだな」
瑞希「あ、なら私今日お弁当持ってきたので皆さんで……」

はい来ました。死刑宣告。

雄二「悪いな。俺は今日弁当自前なんだ」
秀吉「すまないがわしもじゃ」
康太「……（スッ）」

なるほど、自衛策は万全という事か！！
だが甘い！オレはさらにその斜め上を行く！！

オレ「オレは腹が減ってないから気を使わないでくれ」
瑞希「そう言わずにどうぞ♪」

姫路の優しさに涙が出た。

オレ「そういえば姫路、味見はしたのか？」
瑞希「え！？そ、その……お料理中に食べちゃうと……が増えちゃうから……」

マズイ。これはマズイ。
太るとか太らないとかそれ以前に口にしていいものかどうかをこの人にはぜひ確認してもらいたい。
自分で食べてない辺りやはりオレたちを殺そうとしているのではないか？

オレ「そうか。じゃあ頂くよ」
瑞希「はい。召し上がれ」
雄二「どうした？随分といさぎいいな」
オレ「――――――――雄二が」
雄二「殺すぞ」

何を言う！！
女子の手料理を食べれるだけありがたいと思え！！

オレ「はい、あーん（さっさと食えや！！）」
雄二「いや、お構いなく（テメエが食え！！）」
オレ「いいから食えよ！オラァ！！（そう言わずに、ほらほら）」
雄二「ぐ、ぐお！？（いいから気にするな）」

あまりのショックに本音と建て前が逆になってたが気にすまい。
とりあえず助かった。

瑞希「坂本君、なんで嫌がるんですか？」
オレ「それはほら、雄二には霧島がいるからな。出来れば霧島に食べさせて貰いたかったんだろ」
雄二「……（フルフル）」

ヤバイ。目がうつろだ。
今日の姫路の手料理も破壊力バツグンか。
ちなみにさっきから明久が黙っているのは姫路の（安全な）手作り弁当を食しているから。
あいつの元に行く弁当はなぜか安全である。

オレ「よし、オレも行くか。姫路、弁当貰ってもいいか？」
瑞希「はい。どうぞ♪」

笑顔で暗黒物質（ダークマター）もどきを勧めてくる姫路。
だがオレにはこれがある！！

《麻酔薬　味覚用》

とある弟ルートから手に入れた至高の一品。
１０ｍｌ３万円。
これを飲んでいざ死地へ行かん！！

オレ「いただきまーす」
美波「真琴……瑞希の弁当がいいの？」
オレ「いや、折角作って来てくれたんだからさ」

あとは麻酔薬の被験体になる必要があるから。

美波「じゃ、じゃあ今度は、ウチが作ってくるわね」
オレ「お、それ楽しみ」

ならば尚の事、ここで行かねば。

オレ「（峰嶋真琴、いっきまーす！！）むぐむぐ……ガポァ」

味覚は完全に麻痺していた。
味も当然しなかった。
だが姫路の料理の破壊力は更にその上を行っていた……

第四十六話　異性と占いとバスの中（後書き）

『僕の出番麻酔だけ！？』
『次回からはしっかり登場できる』
『なら安心♪』
『大変だな……』

第四十七話　絆と信頼とバカの一念（前書き）

『僕の出番まだ～～～？？』
『ごめん！もうちょっと待って！！』
『次話にはだしてね？』
『がんばります！！』

ＰＶ８００００、ユニーク７０００突破しました！
これからもよろしくお願いします！

第四十七話　絆と信頼とバカの一念

バカテスト　英語

問　以下の英文を訳しなさい。

『Although Jhon tried to take the airplane for Japan with his wife's handmake lunch, he noticed that he forgot the passport on the way.』

木下秀吉の答え

『ジョンは妻の手作りの弁当を持って日本行きの飛行機に乗ろうとしていたが、途中でパスポートを忘れている事に気がついた』

教師のコメント

正解です。木下君は最近とても調子が良いですね。
誰か教えてくれている人がいるんでしょうか？

姫路瑞希の答え

『ジョンは妻の手作りの弁当を持って日本行きの飛行機に乗ろうとしていたが、途中でパスポートを忘れている事に気がついた　※今まで珍回答をしてすみませんでした。補習だけは許してください』

峰嶋真琴の答え

『ジョンは妻の手作りの弁当を持って日本行きの飛行機に乗ろうとしていたが、途中でパスポートを忘れている事に気がついた　※今までふざけた回答をしてすみませんでした。補習だけは勘弁してください』

教師のコメント

そんなに補習が嫌だったんですか？

吉井明久の答え

『ジョンは手作りのパスポートを持って日本行きの飛行機に乗ろうとしていたが、途中で妻の手作り弁当を忘れた事に気が付いた』

教師のコメント

手作りパスポートという言葉の意味をよく考えてみてください。

霧島翔子の答え

『坂本雄二は妻である坂本翔子の手作り弁当を持って、日本行きの飛行機に乗ろうとしていたが、途中でパスポートと妻の写真を忘れている事に気が付いた』

教師のコメント

妄想で答えを書かないように。

坂本雄二のコメント

俺は独身だと言ってるだろう！！
あと勝手に俺と翔子を入籍させるな！！

真琴ｓｉｄｅ

ここはどこだ……？
確かオレはバスの中にいたはずだが……
仕方が無い。思い出そう。
確か美波の占いの本でドンチャン騒ぎした後にムッツリーニが空腹で弁当の話になってオレが姫路の弁当をそれだ！！

オレ「姫路ィィィ！！」

何があったのかを綺麗に思い出して飛び起きる。

アイツまた殺人兵器を作ってきたな！？
明久には害が無いがあんなものをしょっちゅう作られたらオレと秀吉とムッツリーニの命が危ない！（雄二は別に死んでもいいんちゃう？）

明久「……なんで瑞希の名前を叫びながら飛び起きるの？」
オレ「明久か……いや、オレの身に何があったかを思い出したらついな……」

雄二「まあ何はともあれ無事で良かった」
秀吉「お主が世間に対する恨み言を吐き続け始めたときにはもうダメかと思ったのじゃ」

と言いながら色々なものをしまう二人。
え？何その電気ショックっぽい奴とか。
オレそんなに危なかったの？

明久「やっぱり瑞希の料理はうかつに口にしないほうがいいね……」

オレ「そうだな。で、雄二……さっきは悪かった」
雄二「……分かってくれればいいんだ」

なぜだろう？
雄二との絆が深まった気がする。

オレ「で、ここはどこなんだ？」
明久「合宿所だよ」
雄二「ここ、召喚獣を使えるようにするために文月学園が買い取ったらしいな」
秀吉「金使いの荒い学園長じゃ……」

あのババアか。
確かに金銭感覚とか麻痺ってそうだな。
買い取ったってことは、召喚獣を使ったイベントでもやるのか？

オレ「……そういやムッツリーニはどこへ？」
明久「覗きか盗撮じゃない？」
オレ「ああ、なるほど」
秀吉「友人に対してそのような言葉を言ったりそれで納得したりするのはどうかと思うのじゃが……」

仕方ないだろ。あのムッツリーニだ。
女子が風呂に入っていると知ってれば嬉々として飛んでいくだろう。

オレ「アイツは盗撮盗聴のエキスパートだからな。きっといろんなものを仕入れてくるに違いな……」

ここまで言って気が付いた。
アイツ、美波の入浴盗撮したりしないだろうな？

もしそんなことがあればデータを全て没収した後で拷問する必要があるな。

康太「……今戻った」
雄二「おう、どうだった？」
オレ「美波のデータがあればすぐにくれ。高値で買い取る」
康太「……何のことだ？」
雄二「落ち着け真琴。まだ入浴の時間になってねえし、ムッツリーニは調べ物をしてきたんだ」

調べ物？っていうと……

明久「脅迫状とかのこと？」
雄二「お前明久か？」
明久「その言葉の真意をお聞かせ願いたい」
オレ「雄二。今の明久は姫路に勉強教えてもらってるおかげで点数だけじゃなく頭の回転も速いんだ」
雄二「有り得ん……明久に限ってそんなことは……」
明久「よし雄二。君には死んでもらおう」
オレ「落ち着けバカども。それでムッツリーニ、結果はどうだった？」
康太「……尻尾は掴んだが犯人は分からなかった」

そうか……。
ムッツリーニにも犯人が分からないとなるといよいよやばいかもな……
尻尾をつかめただけでもよしとするか。

康太「……犯人はお尻に火傷のある女生徒」
オレ「お前は一体何を調べたんだ？」

秀吉「ムッツリーニらしい調べ方じゃ」
康太「……！？（ブンブン）」

いや、そこで否定されても困る。
というか本当にどうやったらそんなことが分かるんだ？

康太「……これを聞いて欲しい」
雄二「小型録音機か」
康太「……こっちは雄二の件のほう」

？？《いらっしゃい》

翔子《……雄二のプロポーズをもう一つお願い》

？？《毎度、二度目だから安くするよ》

翔子《……値段はどうでもいいから、早く》

？？《流石はお嬢様、太っ腹だね。それじゃあ引渡しは明日――と言いたいところだけど明日から強化合宿だからね。引渡しは来週になるよ》

翔子《……分かった。我慢する》

すごい内容だ。

雄二「あ、アブねぇ……」

秀吉「強化合宿があって助かったのじゃな」
明久「でもタイムリミットが少し伸びただけだよね…」

片方は口調や要求してるものから考えても霧島だろう。
だがもう片方が誰か分からない。女生徒である事は分かるんだがなんせ音質が悪いな……

オレ「音質は悪いが贅沢言ってられないな。まあこの霧島じゃないほうは間違いなく普段と違う口調で喋っているが」
明久「どうしてそんな事が分かるの？」
オレ「会話のところどころでわずかな綻びが生じている。普段の自分と違う喋り方をしている人間にはありがちな特徴だ。おおかた、盗聴対策といったところか」
雄二「そんな事まで分かるのか？」
秀吉「わしでも分からない演技を見抜くとは……」
康太「……脅威」

いや、そこまですごいものでもないんだけどな。

オレ「ちょっとした心理学だ。演技じゃない分、秀吉には分からなかったのかもな」
雄二「もうこの話はいいか？ムッツリーニ、他にもあるのか？」
康太「……こっちは真琴の件」

そう言って別の小型録音機を取り出す。

康太「……こっちのほうがヒントが多い」

？？《相変わらずすごい写真ですね。こんな写真を撮っているのが

バレたら酷い目に会うんじゃないですか？》

？？《ここだけの話、前に一度、母親にばれてね》

？？《大丈夫だったんですか？》

？？《文字通り、尻にお灸を据えられたよ。全く、いつの時代の罰なんだか》

？？《それはまた……》

？？《おかげで未だに火傷の跡が残ってるよ。乙女に対して酷いと思わないかい？》

？？《まあそのおかげで僕はこうして吉井君の秘蔵のお宝を手に入れられるのだから感謝してますよ》

？？《まあアンタもお得意様だからね、こっちも儲かってるんだけど》

康太「……ここまで」

明久「今ものすごい寒気がしたんだけど……」

オレ「忘れろ。気のせいだ」

雄二「……やつめ、ついに吹っ切れたか」

明久「やっぱ気になるよ！？」

秀吉「忘れるのじゃ、明久よ」

オレも同感。

コイツはそのほうが幸せ。

康太「……どうやって確認する？」
オレ「火傷はＸ線やγ線には写らないし、スカートをめくっても分からないだろうな」
秀吉「尻を見るためにそんなものを持ち出すでない！！」

秀吉の言うこともっともだ。
それにオレは美波の尻以外に興味は無い。（ギリギリな発言）

明久「そうだ！！入浴のときに秀吉に確認してきてもらえばいい！！」
秀吉「明久、わしが女子風呂に入るのは前提なのかの？」

うーん……イマイチな作戦だな……

雄二「それは無理だ明久」
明久「え？どうして？」
オレ「あ……明久、しおりの３ページを見てみろ」
明久「３ページ目？えっと……」

～合宿所での入浴について～

・男子ＡＢＣクラス…２０：００～２１：００　大浴場（男）
・男子ＤＥＦクラス…２１：００～２２：００　大浴場（男）
・女子ＡＢＣクラス…２０：００～２１：００　大浴場（女）
・女子ＤＥＦクラス…２１：００～２２：００　大浴場（女）
・Ｆクラス木下秀吉…２０：００～２１：００　個室風呂？

明久「……クソッ！これじゃ秀吉に見てきてもらうことが出来ない！！」
雄二「そういうことだ」
秀吉「どうしてわしだけ個室風呂なのじゃ！？」
オレ「お前が第３の性別“秀吉”だという説を、学園が認めたようだな」
康太「……（コクコク）

可哀想だがこれが現実だ。
さて、なにか妙案は無いか……

ドバン！

そのとき、部屋のドアが勢いよく開いた。

？？「全員頭を後ろに組んで伏せなさい！！」

明久ｓｉｄｅ

秀吉の第3性別疑惑が浮上したところでいきなりドアが開いた。

？？「全員頭を後ろに組んで伏せなさい！！」

突入してきたのは……誰か知らないが逃げる！！

小山「そうは行かないわよ！！」

雄二「クソ……」

しまった！窓から逃げようと思ったらふさがれた！？

秀吉「どうしてお主らはとっさの行動で窓へと迎えるのじゃ？」

真琴「気にするな秀吉。気にしたら負けだ」

そう、真琴の言うとおりだ。

気にする必要は無い。

真琴「明久も雄二もムッツリーニも座れよ。で、アンタは確か――」

――」

??「アタシはEクラス代表の――」

真琴「思い出した！中林きんにくん！！」

中林「中林宏美よ！ヘンな渾名つけないで！！」

中林きんにくんか。

いい名前だ（笑）

真琴「で、Eクラス代表が女子はぞろぞろ引き連れて何の用だ？」

中林「よくもまあ、そうシラを切れるわね。あんたたちが犯人だってことくらい、すぐに分かるのに」

僕「犯人？」

犯人ってなんの犯人だよ？

えっと――なんだろ？本当におもいつかない。

中林「これの事よ」

そう言って中林さんが見せてきたのは――

康太「……ＣＣＤカメラと小型集音マイク」

小山「そう。それが女子風呂に仕掛けられていたの」

なに！？

僕「誰がそんな事を！？」

真琴「おおかたオレらが犯人だとでも言いたいんだろ」

中林「良く分かってるじゃない。今のは自白と受け取っていいわね」
な!?今まで僕らは部屋を出てないのに!?

真琴「証拠はあるのか?」
小山「証拠なんて要らないわ。あなたたち以外にこんな事する人いないでしょ」
僕「そんな!?僕らはやってないよ!!」
秀吉「わし等はそんな事せんのじゃ!!」

僕と秀吉が食って掛かる。
真琴と雄二は以外に冷静だった。
ムッツリーニは無言。

真琴「話にならない。コイツら明久以上のバカだ」
雄二「警察行って事件の捜査ってのはどうやるのか聞いてくるべきだな」
中林「うるさいわね!!あんたたちが犯人に決まってるわ!!」
真琴「うるせえのはテメエだ!」
女子「!!」

あ、真琴怒ってるね。
まあしょうがないか。
危なくなったら止めよう。

真琴「証拠もなしに犯人って決め付けてんじゃねえ!!」
中林「な、なによ……?」
真琴「なにかあればすぐ『峰嶋がやった。峰嶋のせいだ』ってか?付き合ってらんねえんだよ!!起動(アウェイクン)!!」

真琴の白銀の腕輪が起動され、召喚フィールドが展開される。
真琴はつい最近だが観察処分者になった。
物理干渉が出来て、超高得点の真琴だと女子達を殺しかねない！

僕「まずい！雄二、秀吉、ムッツリーニ！真琴を止めよう！」
雄二「お、おう！」
秀吉「承知！」
康太「……（コクコク）」
５人「試獣召喚（サモン）！！」

フィールドは保健体育。
いくら真琴でも保健体育のムッツリーニがいれば少しは……

Ｆクラス	峰嶋真琴	保健体育	１２４７点
	ＶＳ		
Ｆクラス	吉井明久	保健体育	１４４点
	坂本雄二	保健体育	１８０点
	木下秀吉	保健体育	１７６点
	土屋康太	保健体育	６２５点

？　はい？　４桁？
真琴の点数跳ね上がってるんだけど？

小山「何よこいつら……Ｆクラスの点数じゃないでしょ……」
僕「秀吉、点数高くない？」
秀吉「みどりに散々教えられたのじゃ」

なるほど。名川さんは最近秀吉と仲がいいし、それでか。

康太「……バカな！？」

雄二「ムッツリーニ落ち着け！相手は真琴だ！油断したら瞬殺されるぞ！」

雄二の言うとおり。

召喚大会のときは瑞希が真琴の点数を減らしてたし、うまく技が決まらなかったみたいだった。

けど今の真琴はずっと点数が高い。

油断したら瞬殺されるだろう。

真琴「……」

僕「……真琴？」

真琴「やめーた」

はい？

真琴「殺る気が無くなった。フィールドも取り消す」

雄二「おい…」

真琴「オレが殺りたいのはそこのうぬぼれたバカ女どもだ。明久達と戦うつもりは無い」

中林「バカ女！？Ｆクラスの癖に生意気よ！！」

僕「中林さんはちょっと黙っててよ！！」

中林「なによ！？」

僕「そういうのが真琴が嫌いなんだよ！理由も証拠もなしに決め付けて悪者扱いされるのが！！」

僕が知ってる小学校の頃の真琴がそうだった。

能力がある故に妬まれて、全く関係ないことの原因にされて、罪をかぶせられ続けてきた。
真琴の能力を認めようとしない大人は真琴の言うことなんか聞かないし、今まで真琴の訴えに耳を傾けた人なんて数えるほどだろう。

真琴「……お前等程度でオレを抑えられると思うな。やるなら本気で来い」
中林「クッ……ならこっちも切り札投入よ！」
僕「切り札……？」

中林さんや小山さんが横に避けていく。
その先にいたのは瑞希と島田さん――――――――――――真琴を抑えられる可能性が、最も高い二人だった。

瑞希ｓｉｄｅ

明久『そういうのが真琴が嫌いなんだよ！理由も証拠もなしに決め付けて悪者扱いされるのが！！』

Ｅクラスの人に呼ばれて私と美波ちゃんが明久君たちの部屋に向かうと、明久君の怒鳴り声が聞こえてきました。

私「美波ちゃん……」
美波「瑞希、急ぐわよ！」
私「はい！」

明久君たちの部屋に着いたらすぐに中林さんの声が聞こえてきました。

中林「クッ……ならこっちも切り札投入よ！」

私達は切り札ですか……
中林さんには悪いですけど私は真琴君たちと戦うつもりはありません。

明久「瑞希……島田さん……」

真琴「……」
中林「姫路さんに島田さん。悪いけどあの化け物じみた人を抑えてくr「イヤよ」…なんですって？」
私「私もです。真琴君や明久君と戦うつもりはありません」
美波「真琴を化け物呼ばわりする人の為に戦いたくなんかないわ」

そもそも明久君たちが除き犯だと言う証拠も無いのです。
なのに犯人だなんて決め付けるなんて……

小山「あなたたち、自分が何を言ってるか分かってる？こいつら以外で覗きをする人なんていないでしょう？」
美波「アンタこそ何言ってるか分かってんの？証拠があるならまだしも、証拠もなしに決め付けてるのよね？」
小山「証拠なんて要らないわ。こいつらがFクラスってだけで十分なのよ」
美波「なによそれ……」

Fクラスってだけで十分……？

私「どうして……」
美波「み、瑞希……？」
私「どうしてFクラスじゃいけないんですか！！」
小山「な、なによ……」
私「どうしてFクラスってだけ犯人扱いするんですか！！みんな優しくて、いい人たちなのに……！」
中林「姫路さん。勘違いしてるようだから教えてあげるけど、こういうことしてるからFクラスなのよ」
私「だったら私も覗き犯です！！私もFクラスです！！」
明久「ちょっ…何言ってるのさ瑞希！」
真琴「……」

美波「そうよ！ウチだってFクラスよ！Fクラスってだけで覗き犯だって決め付けるなら、ウチらも吉井や真琴達と同じようにしなさいよ！！」

小山「ちょっと、何言ってるのよあなたたち……」

ただ単にFクラスであると言う事だけで明久君たちを犯人と決め付けるなら、私達も同罪です。

それに……

私「私は、明久君を信じてます」

中林「は……？」

私「明久君は、覗きなんかしないって信じてます」

美波「ウチだって同じよ。同じFクラスの仲間だもん」

私「美波ちゃん……」

小山「はあ……あなたたち、Fクラスにいる間にバカが移ったんじゃない？」

私「明久君を疑うくらいなら、バカになったほうがマシです」

こんな風に明久君たちを、大切な人を疑うくらいなら、バカだとのしられたほうがずっと楽です。

中林「ならあなたたちも敵ね。ちょっと計算が狂ったけど、問題は無いわ。あなたたちにも「おい中林きんにくん」その呼び方はやめてと……っひ！」

真琴「……少し、黙れ」

中林「……」

真琴君の威圧的で、攻撃的で、でも、ちっとも怖くない目。

真琴「姫路、美波」

私「…なんですか？」
美波「…なによ？」
真琴「お前達のやろうとしてることは大変だぞ。恐らく二人の想像以上にな。最悪、この学年全部を敵に回しかねない事だ。その覚悟はあるのか？」
私「あります」
ウチ「あ、あるわよ」
真琴「……分かった。おいヒス小山」
小山「ヒスってヒステリーのヒスじゃないわよね？」
真琴「今日は見逃してやるからさっさと帰れ」
小山「分かったわよ……でも、アタシはあんたたちが犯人じゃないって信じたわけじゃないから」
真琴「……消えろ」

真琴君がすごんで言うと小山さんたちはしぶしぶ撤収していきました。

真琴「……はぁ、疲れた」
美波「真琴、大丈夫だった？」
真琴「別に何もされてねえよ」
明久「でもよかったの？瑞希も島田さんも……」
私「いいんです。私言いましたよね？『明久君を疑うくらいなら、バカになったほうがマシです』って。私は明久君を疑いたくないんです、信じたいんです」

自分の好きな人を信じれなかったら……その人を好きになる資格なんてありませんから。

私「だから坂本君たちも――――あら？」
美波「ちょっと、坂本と土屋と木下はどこよ？」

真琴「あいつらならさっき『あそこまでされたんだ！！こうなったら本当に覗いてやる！！』とか言って走ってったぞ」
明久「雄二らしいね」
私「じゃ、じゃあ止めなくちゃ……」
真琴「ああ、その必要なし」
私「ど、どうしてですか！？このままじゃ坂本君たちが本当に覗き犯に……」
真琴「カメラと盗聴器が仕掛けられたんだ。鉄人が見張ってるだろ」
明久「そろそろ悲鳴が聞こえてくると思うよ」

『ぎゃあああああああ！！！』

……本当に坂本君たちの悲鳴が聞こえてきました。
さっきの私のあれはなんだったんでしょうか……？

真琴「さて、雄二は次はどう出るかな？」
美波「次ってまさか……」
真琴「雄二が今日失敗したままで終わるわけ無いからな。オレたちは迎え撃つつもりだが、どうする？」

真琴君が明久君を見ながら言います。

明久「当然やるさ。折角瑞希達が信じてくれてるんだ。その信頼にこたえなきゃ！」
真琴「オレも同感だな。オレたちが味方につかなかったら大変な事になりそうだ」

真琴君は少し楽しそうに、笑って言います。

私「でも、坂本君は……」
明久「瑞希。雄二はああなったら意地でも止まらないよ」
真琴「だから全力で相手をするんだ」
美波「あんたたちの信頼関係って本当にヘンね。あと真琴、西村先生が呼んでたわよ」
真琴「オレ？」
美波「なんでも急用だから早く来いって」

第四十八話　バカと弟と覗き騒ぎ（前書き）

もうすぐ５０話～～

第四十八話　バカと弟と覗き騒ぎ

強化合宿の日誌

強化合宿一日目の日誌を書きなさい。

姫路瑞希の日誌

『電車が停まり駅に降り立つと、不意に眩暈のような感覚が訪れました。風景や香り、空気までもがいつも暮らしている街とは違う場所で、何か素敵な事が起きるような、そんな予感がしました』

教師のコメント

環境が変わることで良い刺激が得られたようですね。姫路さんに高校二年生という今この時にしか作ることのできない思い出が沢山できる事を願っています。

吉井明久の日誌

『いきなり覚えのないことで犯人扱いされて、そのせいで真琴がキレたり大変だったけど、瑞希の信頼を再確認できたし雄二のバカを合法的にシバく口実も出来そうで良かった』

教師のコメント

姫路さんの信頼という素晴らしい物を台無しにする物で溢れ返って

いる事に気づいてください。

土屋康太の日誌

『電車が停まり、駅に降り立つと、不意に眩暈のような感覚が訪れた。あの感覚はなんだったんだろうか』

教師のコメント

乗り物酔いです。

坂本雄二の日誌

『駅のホームで大きく息を吸い込むと、少し甘いような、仄かに酸っぱいような、不思議な何かの香りがした。これがこの街の持つ匂いなんだな、と感慨深く思った』

教師のコメント

隣で土屋君が吐いていなければもっと違った香りがしたかもしれませんね。

峰嶋真琴の日誌

『きんにくんとヒステリーを殺り損ねた事だけが心残りだった』

教師のコメント

君ならやりかねないと思ってしまうのは何故でしょうか？

真琴ｓｉｄｅ

中林きんにくんとヒス小山を含めた女子軍団が撤退した後で鉄人に呼ばれている事を知り、何故か着いて来ると言って聞かない明久、姫路、美波を連れて臨時職員室へきた。

オレ「失礼しま～す」
鉄人「やっと来たか」
オレ「来てやっただけでも有難く思ってくださいよ」

こっちは覗き魔扱いされて疲れてんだから。

鉄人「用ってのはコイツの事だ」

そう言って鉄人が小柄な少年を……まてやコラ。

オレ「どうしてが宗太がここに居る？」
鉄人「お前の弟と言うのは本当のようだな」
オレ「質問に答えろよ……」
宗太「琴兄に会いに来たんだよ？2年ぶりくらいだよね？」

会いに来たってのもおかしいが……
まあおおかた文月学園のデータをハッキングして強化合宿の存在を知ったってとこだろ。

オレ「まあな。で、元気だったか？ここには忍び込んできたのか？」
宗太「うん！」
明＆瑞＆美「……」
オレ「ん？どうしたんだよ？」

3人ともまるで「こんな小さい男の子が学園のセキュリティを突破して忍び込んでるなんて」とでも言いたげな顔して。

明久「真琴、弟っていたんだね」
瑞希「でもこの前真琴君の実家に行ったときは居ませんでしたよね

？」
美波「それに忍び込んだってどうやってよ？この学園のセキュリティは万全のはずよ？」
女子二人の疑問は最もだ。
オレ「まあコイツはフランスに留学してたからな。いなくて当然だろ」
明＆瑞＆美「留学！？」
宗太「……そんなにおかしいの？」
明久「いやだってさ……」
瑞希「見るからに小学生ですよね……？」
美波「真琴の家の人ってどんだけ頭いいのよ……」
おお、みんな勘違いしてるな。
まあ普通だけどな。
オレ「勘違いしてるようだが宗太はこのなりでも中学３年生だ」
明＆瑞＆美「中学３年生！？」
宗太「……みんな酷いよ」
オレ「泣くなって。そんな風に泣いたら余計に幼く見えるだろうが」
明久「あ、ごめんね。気にしてたんだね」
オレ「……いっとくがコイツは本気になればハーバートくらいは余裕で行けるからな？」
瑞希「そんなに頭いいんですか！？」
化学以外ならまだオレのほうが上だろうが化学だけはダメなんだよな。
薬物系と機械系はコイツの専門だから。

オレ「まあ世界中に宗太にハッキング出来ないところは無いと言わせるくらいだからな。学園のセキュリティ突破くらいでは驚かないが……」
明久「そこ驚くところ」
オレ「んな事でずっと話してるのもアレだし軽く自己紹介でしたほうがいいだろ」

多分みどりの時のパターンで行けばこいつもオレの家に来る事になるだろうし……

宗太「んじゃ改めまして、峰嶋宗太です！特技は薬物調合とハッキングです！よろしくお願いします！」
明久「今ものすごい特技があったよね？」
オレ「気にするな。次、明久」
明久「あ、うん。僕は吉井明久。よろしくね」
宗太「はい！明兄！」
美波「ウチは島田美波よ。よろしくね～」
宗太「美波姉ですね！よろしくお願いします！」
瑞希「私は姫路瑞希です。よろしくお願いしますね」
宗太「……？　姫路……瑞希……？」
オレ「どうした？」
宗太「えっと確か……」

唐突に持ち歩き用のノートパソコンを開く宗太。
一体どうしたんだ？

宗太「……あった！」
明久「何があったの？」
宗太「これ！」

そう言って見せてきたのは宗太の経営する薬物販売サイトの顧客リスト。
その中に“姫路瑞希”の名前がきっちりあった。

真&明&美「……」
瑞希「べ、別人です！名前が一緒だけの別人です！」
宗太「……職業・学生、所属・文月学園2年Fクラス、性別・女、住所は……」
オレ「……別人だって？」
瑞希「……」

意外なところで姫路の薬品の出所が発覚した。
まさか宗太から買っていたとは……

宗太「いつもありがとね」
オレ「宗太。コイツにはもう売らなくていいからな？」
宗太「え？なんで？」
オレ「コイツはお前から買った薬物で料理を作りオレたちの命を狙っているんだからな」
瑞希「そ、そんなことないです！」
オレ「オレはついさっき死に掛けたんだがな……」

アレを兵器と呼ばずしてなんと呼ぶべきか。

瑞希「な、なら偽名を使ってでも……」
オレ「ああ、それはやめたほうがいいぞ？」
美波「なんで？」
オレ「コイツは相手が偽名を使ってログインしてる事に気づくと世界最凶のコンピュータウィルス送りつけるから」

過去にそれで泣いた奴が全世界に２０００万人ほど居る。

宗太「僕のサイトに偽名でログインだなんて甘いんだよ。でも瑞希姉、そんな危ない使い方するなら本当にもう売らないからね？」

瑞希「はい……」

よし、とりあえず姫路の料理で死ぬ事はもうなさそうだ。

危ない危ない……

宗太「あ、そうだ琴兄、あの麻酔はどうだった？」

オレ「完璧だったぞ。姫路の料理の前には無力だったけどな」

よくよく考えればあれは美味い不味い以前に食べられない有害物質だから味覚を麻痺させたところで意味が無かった。

まあ実験体として協力するくらいはいいんだが……

オレ「でも3万は高くないか？」

宗太「とか言って父さんにつけたんでしょ？」

オレ「当然」

今頃覚えのない請求書が来てないてるだろうよｗｗｗｗ

鉄人「で、コイツをどうするか決めなきゃならん」

オレ「どうせだから強化合宿中はオレんとこでいいでしょ。部屋もまだスペースあるし、布団もあるし」

鉄人「いやしかしこの子供は不法侵入でな……」

オレ「頑固だなぁ……それくらい見逃せよ……」

なら学園にとっての利益を上げさせれば許してくれんのか？

うーん……

オレ「宗太、文月学園のスポンサーになってくれ」
宗太「いいよ」
明久「即答!?」
宗太「お金とかだったらいっぱいあるからいいよ?全然問題なし!」

ちなみに宗太の月収は１５００万ほど。
調合した薬を売ったり、ハッキングでデータを盗んで売ったりしている。
え?犯罪者?
はっはっはっ。聞こえんなぁ。

オレ「あとはちょっと修理を頼みたいんだが……明久に美波、腕輪貸してくれ」
明久「腕輪?なんで?」
美波「あっ……そういうことね。いいわよ、ホラ」
オレ「ん、サンキュ。宗太、これの修理は出来そうか?」

宗太ならうまく行けば金色の腕輪と白銀の腕輪の修理が出来るかもしれない。
こんな学園存続の危機の種は早めに潰しておいたほうがいいだろ。

宗太「……時間かかるけどやってみる」
オレ「んじゃよろしく。いくらくらいだ?」
宗太「そうだね……１５００万でどう?」
オレ「んじゃ鉄人、払っといて」
鉄人「ふざけるな」

ふざけてないぞ?
学園存続に関わる火種を消せるんだから安いもんだろ。

ババア「それくらいいいさね」
鉄人「学園長！！」
オレ「ババア長か」
ババア「いきなり罵倒とは相変わらずのクソジャリさね！！」

いいじゃないか。
ババア長なんだから。

オレ「宗太、この妖怪は学園妖怪ババア長だ。好きに呼んでいいぞ」
宗太「はい！ババア長！」
ババア「いい加減にするさね！！子供に変な事教えるんじゃないよ！！」
明久「大声出すと身体に響きますよ老いぼれクソババア」
ババア「あんた等のせいさね！！」
瑞&美「ごめんなさい、ごめんなさい」

全く、うるさいババアだな。

オレ「で、宗太がスポンサーになることと、腕輪の修理を依頼する事を飲むんだな？」
ババア「まあね、腕輪の修理をどうしようか悩んでたんだ。丁度いいさね。んじゃこっち来なチビガキ」
宗太「はーい。それじゃまたね琴兄！」
オレ「おう。終わったら電話くれ。迎え行くから」
鉄人「俺も坂本達の指導があるからな、お前らはもう戻れ」

あ、そういや雄二達捕まったんだっけ。

明久「……嵐みたいだったね」

オレ「……否定はできないな」

第四十八話　バカと弟と覗き騒ぎ（後書き）

覗くぞおらぁ！ＢＹ雄二

第四十九話　覗きと防衛と自分だけ（前書き）

作者『あと1話！あと1話！』
真琴『後1話で50話行くって言いたいのか？』
作者『そう！で、強化合宿終わったらまたオリストーリーやるから』
真琴『好きだな、お前……』
作者『はっはっはっ』
真琴『豪快に誤魔化そうとするな』
作者『前の北海道旅行編はそんなにバトル系じゃなかったからね、次はもっと召喚獣バトルが多い内容になるよ』
真琴『いいけどな……』
作者『真琴とFクラスの面々の別れのときがくるかも……！』
真琴『なにぃ！？』
作者『それでは本編どーぞ！』
真琴『おい！！詳しく聞かせろ！！』

第四十九話　覗きと防衛と自分だけ

強化合宿の日誌

強化合宿二日目の日誌を書きなさい。

姫路瑞希の日誌

『今日は苦手な物理を重点的に勉強しました。みどりちゃんに教えてもらい、とても分かりやすかったです。いつもと違ってＡクラスの人たちと交流しながら勉強も出来たし、とても有意義な時間を過ごせました』

教師のコメント

Ａクラスと一緒に勉強する事で姫路さんに得られるものがあったようで何よりです。今度の振り分け試験の結果次第ではクラスメイトになるかもしれない人たちと交流を深めておくといいでしょう。それにしても名川さんは教えるのも上手ですか。すごいですね。

土屋康太の日誌

『前略。
夜になって寝た』

教師のコメント

前略はそうやって使うものではありません。

吉井明久の日誌

『全略』

峰嶋真琴の日誌

『よかった』

教師のコメント

あまりに豪快な手抜きに一瞬言葉を失いました。

明久ｓｉｄｅ

強化合宿二日目。
僕たちＦクラスはＡクラスと合同自習。

翔子「……雄二、一緒に勉強できて嬉しい」
雄二「待て翔子、当然のように俺の膝に座ろうとするな。クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている」

当然、異端者には死を。
それが我ら異端審問会の掟。

瑞希「それにしても坂本君、どうして昨日は覗きなんてしようとしたんですか？」
美波「そうよ。折角ウチたちが庇ったのに意味ないじゃないの」
真琴「やめとけ。言っても無駄だ」
僕「そうだよ。雄二なんかの説得より勉強やらない？」

真琴の言うとおりだ。
なぜなら……

雄二「翔子、アイアンクローはやめろと何度もノオオオオオオオオ！！」

翔子「……雄二、浮気は許さない」

霧島さんのお仕置きを受けてるからだ。

真琴「最近の霧島は雄二が女子に話しかけられただけでアイアンクローに走るからな」

僕「いくらなんでもやりすぎな気がするんだけどね……」

もはや一途を通り越して危ない。

？？「あ、代表ここでやるの？じゃあボクもここにしようかな？」

僕「あれ？君は確か、えーっと……」

康太「……工藤愛子」

愛子「へぇー良く知ってるね、ムッツリーニ君？」

康太「……！？」

なに！？ムッツリーニを知ってるだと！？

土屋康太＝ムッツリーニを知っているという事は、只者じゃないぞこの子！！

愛子「試召戦争のときはあんまり出番なかったからね、改めて自己紹介させてもらうよ」

へー、結構しっかりしてる子だなぁ……

愛子「Ａクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞。得意科目は保健体育で、スリーサイズは上から７８・５６・７９、特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよ」

おかしい。なにかがおかしい。

普通の自己紹介では絶対に出てこないであろう単語が出てきている。
特にスリーサイズ。
瑞希だったら一番上の数字がとんでもないことにブシャアアアア
（↑鼻血噴出音）

愛子「よ、吉井君!?鼻血がすごいことになってるよ!?」
僕「い、いや、チョット妄想してただけだから大丈夫（ダバダバダバ）」
愛子「あ、さては疑ってるね？なんならここで披露して見せようか？」

やめてくれ。そんなことしたら僕は出欠多量で死んだ後に瑞希に拷問されるという死亡フラグのオンパレードになってしまう。

【死亡フラグとか言うなよ……】

康太「……明久、工藤愛子に騙されるな」
僕「あれ？ムッツリーニ、鼻血出てないの？僕でさえこんなにドキドキしてるんだから、てっきり鼻血の海に沈んだとばかり……」

もしやムッツリーニにエロ耐性がついた？
いや、ムッツリーニに限ってそんなはずは……

康太「……ヤツはスパッツを穿いている……！！」

なかった。

僕「そ、そんな!?酷いよ工藤さん!!僕を騙したね!?」

畜生!!
僕の夢と雄二の目を返してよ!!

愛子「あはは。ばれちゃったか。流石はムッツリーニ君だね」
康太「……スパッツは男の敵」
僕「ムッツリーニ、そこはムッツリーニの敵と訂正してくれないかな？でないと僕までそういう目で見られてしまう」
え？お前も同類だろ？
何を言ってるんだい？僕にはまったく聞こえないなぁ。
愛子「でも最近凝ってるのはこれかな？」
といって取り出したのは小さな機械。
僕「これは……」
康太「……小型録音機」
愛子「うん。コレ凄く面白いんだ。例えば――」
《工藤さん》《僕》《こんなにドキドキしてるんだ》《やらない？》
最悪だった。
僕「わあああああ！？工藤さん！？僕はこんなこと言ってないよ！？変なもの再生しないでよ！！」
愛子「ね？面白いでしょ？」
やめて！！こんなものを瑞希に聞かれた日には――
瑞希「明久君、ちょっと聞きたいことが――」

明久「僕は瑞希だけを愛してます。瑞希以外の女の子に下心を持たない事をこの命を持って誓います。だからその斧をしまってください」

――――――――――おしまいだ！！

真琴「おい工藤。姫路に拷問される明久の身にもなってみろ」
康太「……明久が可哀想」
愛子「あはは。ごめんね」

本当にやめて欲しい。
命がいくつあっても足りない。

真琴「まったく、お前は何がしたいんだ？」
愛子「あはは。でも面白いんだよ？」
真琴「付き合ってらんねぇな。頼むからオレの声とか使って変なことしないでくれよ？でないとオレも美波に……」
愛子「……（ニヤリ）」

《工藤》《したいんだ》《オレ》《と》《付き合って》《くれ》

美波「真琴、ちょっと話が――――――――」
真琴「僕は美波だけを愛してます。美波以外の女の子に下心を持たない事をこの命を持って誓います。だからその斧をしまってください」

犠牲者が増えた瞬間だった。

僕「ねえ真琴、僕は工藤さんが脅迫の犯人だと思うんだけど……」
真琴「工藤が？なんでだ？」
僕「だってアレを使えばプロポーズの捏造くらいできそうじゃん」
真琴「確かにそうだが動機がない。雄二のほうはクラスメイトの応援っていう理由があるが工藤がオレを脅そうとする理由がまったく分からん」
僕「真琴の事が好きだとか？」
真琴「……違うと信じたい」

オレはアイツが苦手だ。と続ける真琴。
確かに僕も苦手かな……
工藤さんのせいで瑞希に1時間も説教されたんだし。

真琴「うーん……オレとしては大体犯人の見当はついてるんだが、決め手がないんだよな……」
僕「え!?誰!?」
真琴「美波大好きオレが大嫌いフォークを投げる同性愛者と言えば分かるか?」
僕「よく分かった」

そうか……。
あの子なら確かにやりそうだな……

真琴「証拠が要るんだよ。自白でも物証でもなんでもいいからアイツを捉えることの出来る証拠がな……」
僕「昨日の中林さんたちの事があるから余計に証拠なしじゃ動きづらいんだよね……」
真琴「そう。オレの推理はあくまで推測だしデタラメだと言われればそれまでなんだよな……」

うーん……
どうしたものか……

真琴「っと、そろそろ行くぞ」
僕「え?どこへ?」
真琴「鉄人のとこだよ。事情話してオレらも協力するんだ」
僕「協力……?」
真琴「なんだ?お前は雄二に姫路の裸を見て欲しいのか?」

んな訳あるか。

僕「……ユウジコロス」

真琴「殺すなバカ。……万が一覗かれたら殺すけどな」

真琴ｓｉｄｅ

『『『『うぉぉぉぉ！！女子風呂ーーーー！！！』』』』

布施「西村先生、大変です！変態が編隊を組んでやってきました！！」
鉄人「落ち着いてください！こっちにはあの二人がいるんですよ！！」
布施「そ、そうでしたね……、あの二人は敵に回すと恐ろしいですが、味方になってくれれば頼もしい限りです」
鉄人「これは姫路と島田に感謝する必要がありそうですね」

さて、そろそろ指示を出しておこう。
ある程度溢すように言っておかないとこっちまで来ないからな。
オレだって少しは暴れたいんだ。

オレ『やはり戦力を増やしてきましたか。予想通りですよ』
布施「コレだけの人数、私達だけで何とかできるでしょうか？」
オレ『西村先生、布施先生、少しくらいは溢してくれて良いですよ。オレたちも暴れたいんで。あと、隠し玉からの要望で、土屋康太はこっちに、だそうです』
鉄人「そんなこと言って、覗きに加担する気ではないだろうな？」
オレ『信用ないなぁ……。まあ仕方ないか。そのことなら大丈夫ですよ。入ってるのが前半クラスならともかく、今入ってるのは後半クラスですから。美波の裸を雄二達のバカに見せる気はありません』
鉄人「その動機は独占欲と受け取っていいか？」
オレ『どうぞご自由に。それにオレたちは姫路と美波から信頼されてるんですよ？その信頼に応えたいだけです。明久も同じですよ。オレたちは純粋に姫路と美波を守りたいだけです』
鉄人「ならその言葉、信じさせてもらうとするか」
オレ『少しくらいは……こっちにもくださいよ？』

そう言って鉄人と通信を切る。

鉄人「では布施先生、やりますか」
布施「そうですね」

バカ1『姫路さぁぁん!!その豊潤な胸で僕を抱いてください!!』
バカ2『島田を嫁にィィィ!!』
バカ3『誰でもいいから覗きテェェ!!』

流石にバカ3は酷くないか!?
誰の裸を見るのか明確に決めとけよ!!

雄二「行くぞおまえら!!死ぬんじゃねえぞ!!」

愛子「何してるのかな？ムッツリーニ君？」
大島「土屋、何をしている」
雄二「なっ…！？工藤に保体教師の大島！？」
秀吉「女子も参戦してるなんて、聞いてないのじゃ！！」
須川「クッソ……！」
康太「……皆、先に行け」

なるほど。そうしますか。
※真琴は大島先生のマイクから会話を聞き取っています。

愛子「いくらムッツリーニ君でもボクと大島先生を相手にして勝てるのかな？」
康太「……俺もあとで行く。早く行け！」
雄二「……分かった」
秀吉「！？　雄二よ、なにを……」
大島「通れ」
４人「！？」

そのとおり。
この二人、工藤と大島先生にはムッツリーニ以外の奴が来たら通すように言ってある。
そうしないと全員ここで止まっちまってオレ達の出番がないからな。

雄二「……いいんすか？」
大島「お前達の相手は俺ではない。この先で待っている奴だ」
秀吉「それは一体……」

須川「……行けば分かるってか？」

それ、オレたちのこと。

大島「どうした？行かないのか？」
雄二「……ムッツリーニ、必ず来い」
康太「……了解！」

どうやら雄二、秀吉、須川の3人がここまで来るようだな。
まあ期待してたほど多くないがいいだろ。

康太「……大島先生」
大島「なんだ」
康太「……これは覗きじゃない」

おいおい、ここまできて説得か？

大島「ではなんだと言うんだ？」
康太「……これは――保健体育の実習」

なんだそりゃ。

大島「試獣召喚だ」
康太「……ダメか」

当たり前だ。

愛子「ボクもやりますよ。試獣召喚」
康太「……試獣召喚」

Ｆクラス　土屋康太　保健体育　６２５点

ＶＳ

保体教師　大島武　保健体育　７０９点
Ａクラス　工藤愛子　保健体育　３８８点

康太「……なに！？」

二人の合計は１１００点弱。
これはムッツリーニでも流石に無理だろう。

大島「土屋、生徒が教師に勝とうなどという幻想を抱かないように、徹底的に指導してやる」

ムッツリーニは一撃で戦死した。

雄二「よう。やっぱりお前らがここに居たのか」

ふむ……。

情報どおり、雄二、秀吉、須川の3人か。

須川「吉井……それに峰嶋も……」

オレ「こんだけ待ってきたのは3人か。つまらんな」

明久「きっと先生達が頑張ってるんだよ」

いや、コイツラはあらかじめ溢すように言って置いたやつらだからいいんだが、もう少し寄越してくれても……

秀吉「明久に真琴、そこを退いてはくれぬか？お主らとは戦いたくないのじゃ」

明久「ごめんね秀吉。僕は雄二にこの先を見せるわけには行かないんだ。いや、雄二に限らず、誰にも見せはしない」

須川「吉井に峰嶋！お前らは姫路や島田の裸を見たくないのか！？」

美波の裸だって？

そんなもの――――――

オレ&明久「見たいに決まってる！！」
須川「なら俺達に協力するんだ！」

いや。絶対しない。

オレ「オレはお前らに美波の体見せたくねえんだよ。消えろ」
明久「“見たいから見る”じゃ獣と同じだよ？」
須川「ぐ……そこまでして……」
明久「それに僕たちは瑞希や島田さんの信頼に応えたいだけなんだ」
オレ「だからお前らは通さない。まあお前らのレベルで通れるとも思ってないけどな」
雄二「お前らが動く理由はそれだけか？」

ほぉ……
相変わらず良い感してるじゃねぇか。

オレ「当然それ以外にも理由はある。なあ明久？」
明久「そうだよ。ねえ真琴？」
秀吉「そ、それはなんだというのじゃ！？」

オレと明久が動くもう一つの理由。
それは……

オレ&明久「美波（瑞希）の裸を見ていいのはオレ（僕）だけだ！！オレ（僕）以外の誰にも見せはしない！！」
須川「ただの独占欲か！？」
雄二「そんなとこだろうと思ったぞ……」

何かめんどくさいな。もう……

オレ「御託はもういいだろ。見たきゃ通れよ。通れるならだけどな。起動（アウェイクン）」

白銀の腕輪で召喚フィールドを展開する。
教師がいなくてもいいから楽だし他の場所の防衛に戦力を注げるという利点もある。
ちなみに展開されたのは現代社会のフィールド。

５人「試獣召喚（サモン）！！」

雄二と秀吉はそれなりの点数だったから明久は注意が要るかもしれないが……オレには関係ないな♪

Ｆクラス	峰嶋真琴　現代社会	１４９７点
	吉井明久　現代社会	１４３点
	ＶＳ	
Ｆクラス	坂本雄二　現代社会	２１２点
	木下秀吉　現代社会	１４２点
	須川亮　現代社会	４５点

……オレ達本当にＦクラス？
週に２回ほど思ったりする。

須川「まてまて！お前らなんでそんな点数いいんだ！？特に峰嶋！

お前４桁っておかしいだろ！吉井もなんだその点数！？」
オレ「これが“それなりに”本気の点数だ」
雄二「まさかまだ上があるのか……？」
オレ「オレの点数が１５００弱な訳ないだろ」

暗記強化なら１８００、それ以外でも１７００くらいは行くはずだ。

明久「僕も瑞希に勉強教えてもらってるからね。もっと点数上げないといけないんだよ」
須川「何！？姫路の個人レッスンだと！？」

実際個人レッスンだがだれもそんな事は言ってない。

明久「来年は、真琴や瑞希と一緒にＡクラスに行くって決めたんだ。だから……」
オレ「明久……」

嬉しい事言ってくれるじゃないか……
そんなこと言われたら本気出ちまうだろ……

明久「だから雄二、瑞希の裸を見るのはこの僕だ！！」

台無しだ。全て台無しだ。
今までのカッコいい描写もオレの感動も全て台無しだ。
お前はもうやられてしまえ。

オレ「くだらない事言ってないでさっさとやるぞ明久」
明久「おっと、そうだったね」
雄二「確かにキツイ戦いだが……俺たちは負けねえ！！」
秀吉「明久、真琴、覚悟するのじゃ！！」

須川「異端審問会の名において、貴様等を……悪かった。だから峰嶋、そのジャックナイフはしまってくれ」

チッ。ばれたか。
まあいい。
ここは一つ……

オレ「うーん……試してみるか」

そう言って召喚獣の右手を前に出し、腰を落として踏ん張らせる。

明久「……真琴、また装備変わったの？」
真琴「まあな」

ちなみに新装備は、黒のTシャツ（半そで。髑髏入り）にジーンズとグローブ。それにヘッドフォンを首から提げている。
かなりの軽装備だが、面白い装備や仕掛けが満載だぞ。

雄二「オレ並みの軽装備だな」
オレ「それはどうかな？」

まずは……リミッターありの腕輪から！

オレ「零戦砲（ゼロセンホウ）！！」

構えた右手から青い極太ビーム発射！！

雄&秀&須「は？」

3人の召喚獣は跡形もなく消し飛んだ。

Fクラス　峰嶋真琴　現代社会　１２９７点
　　吉井明久　現代社会　１４３点

ＶＳ

Fクラス　坂本雄二　現代社会　０点
　　木下秀吉　現代社会　０点
　　須川亮　現代社会　０点

４人「……」

あれ？どしたのみんな？

明久「……なんちゅーデタラメな威力……」
雄二「３人の召喚獣を一瞬で消し炭にするとか在り得ねぇ……」
秀吉「……悲しいのじゃ……」
須川「……ひでえ」

いや、かなり抑えた一撃だったんだけど……
しかし２００点消費でこの威力なら、５、６００点くらい使ったら恐ろしいことになりそうだな。

鉄人「さて、補習の時間だ」
雄＆秀＆須「は？」

さて、彼らの後ろには捕まったムッツリーニと鉄人。
彼らは２日目の夜も鉄人と過ごすことになった。

瑞希ｓｉｄｅ

今は後半クラスの入浴時間♪
明久君と真琴君が女子風呂の前で防衛線を張ってるので安心してお風呂に入れて……

明久&真琴『瑞希（美波）の裸を見ていいのは僕（オレ）だけだ！！僕（オレ）以外の誰にも見せはしない！！』

……外では一体どんな戦いが…？

美波「瑞希……真琴と吉井は覗きを防ぐために戦ってるのよね？」

私「そのはずですけど……」

今の台詞はどう考えても覗こうとしてる人の台詞ですよね……

私「でもきっと頑張ってくれてるはずです！」

美波「それは分かってるわよ。でも最近、真琴もバカになりつつあるのも事実だし……」

何故か否定できないです……

中林「あの二人、やっぱり覗こうとしてるんじゃないの？」

私「あ、中林さん。そんなことないですよ。二人ともしっかりやるって約束してくれましたし」

美波「ちゃんとやってるわよ」

中林「どうかしら？普段からバカやってる人たちなんか信用できないわ」

美波「アンタの信用なんか要らないわよ」

私「きっと大丈夫です。真琴君、装備が変わったから早く試したいって言ってましたし」

美波「そういえばそうね。なら真琴は絶対本気で戦ってるわね……坂本達大丈夫かしら？」

私「あはは……どうでしょう？」

坂本君たち、死んでなければ良いですけど……

中林「何の話？装備がなんとかって」
美波「アンタには関係ない話よ」
中林「ふーん……それよりあなたたち、あのバカ二人と付き合ってるんですって？」
私「ひゃ！？　ど、どうしてそれを！？」
中林「ちょっと聞いたのよ。言っておくけど、別れたほうがいいわよ。あんなバカどものどこがいいのかしら？」
私＆美波「大きなお世話です（よ）！！」
中林「な、なによ……」
美波「何も知らないくせに好き勝って言わないでよ！」
私「中林さんが知らない、いいところがいっぱいあるんです！！」

明久『だから雄二、瑞希の裸を見るのはこの僕だ！！』

私「……」
中林「いいところが……なんですって？」
私「ある……はずなんです……」
美波「瑞希、大丈夫。吉井は悪い奴じゃないわよ」

明久君……お願いですから変なこと言わないでください……

私「（ちょっと嬉しかったりもしますけどね……）
美波「瑞希？何か言った？」
私「あ、いえ、なんでもないです」
中林「やっぱあの二人も覗こうとしてるんだわ！！そうに決まってる！！」

美波「ちょっと！いい加減にしなさいよ！！」
私「あ、あの、二人とも落ち着いて……」
中林「大体、真面目に戦ってる証拠はどこにも……」

ズドーン！！！！！

美波「これは……多分真琴ね」
私「コレだけの音となると……真琴君ですね」
中林「……」
美波「証拠が……なんでしたっけ？」
中林「……Ｆクラスなんて嫌いよ！！」

そう言い残して中林さんは言ってしまいました。

美波「なんだったのよ……」
私「さあ……なんでしょう……？」

ちなみに真琴君の召喚獣が開けたであろう大穴が女子風呂の目の前にあったときは心臓が止まるかと思いました。

第四十九話　覗きと防衛と自分だけ（後書き）

次回は3日目！
雄二、お前に覗かせはしない！

第五十話　馬鹿とバカに追い出され。（前書き）

５０話～５０話～座談会でもやろうかな～？

第五十話　馬鹿とバカに追い出され。

強化合宿の日誌

強化合宿三日目の日誌を書きなさい。

土屋康太の日誌

『前略。（※坂本雄二に続く）』

教師のコメント

今度はリレー形式ですか。次から次へとよく思いつくものです。

坂本雄二に続く

『明久と真琴の暴挙によって覗きは失敗に終わった。やつ等は下らない独占欲で俺達の目的を邪魔した。今すぐ制裁を加えたいところだが、何とか戦力に引き入れることは出来ないだろうかと考えていると（※峰嶋真琴に続く）』

教師のコメント

さも吉井君と峰嶋君が悪者かのように言わないでください。
しかもその続きが峰嶋君ですか。

峰嶋真琴の日誌

『雄二はどうやらオレと明久を懐柔するつもりのようだ。だがその手に乗るつもりはない。なぜなら………（※姫路瑞希に続く）』

教師のコメント

君も良く付き合いますねぇ……
次は姫路さんですか。まったく君達は何をして――
――え？

姫路瑞希の日誌

『坂本君の作戦には乗りません。明久君と真琴君は私達を裏切らないと信じています。明久君もきっと私のことを（※吉井明久に続く）』

教師のコメント

あなたは本当に何をしているんですか。

吉井明久の日誌

『後略』

教師のコメント

ここでその引きはないでしょう。

全体に対する教師のコメント

一つ一つの日誌を繋げるときに、文法が合いません。
しっかり勉強してください。

坂本・峰嶋・吉井のコメント

着眼点はそこ！？

雄二ｓｉｄｅ

俺「まったく、あのバカ二人は……」

強化合宿三日目。
午前中は戦力の増強に時間を費やして、ＥクラスとＤクラスの男子をうまく仲間に引き入れた。

康太「……あの二人は彼女持ちだから仕方ない」
秀吉「無理に誘うのは酷という物じゃ」
俺「いや、真琴はともかく俺は明久が姫路に愛想尽かされればいいと思ってるんでな」

俺はあの馬鹿の幸せが大嫌いだ。

秀吉「お主らは本当に友達なのかの？」
俺「勘違いするな秀吉。俺とアイツは別に友達でもなんでもない」
秀吉「お主鬼畜じゃろ！！」

知った事か。
昼飯も終わって午後の自習まで少し時間があるから作戦会議だ。

俺「今日の夜も攻めるんだからな。作戦立てるぞ」

そう言って部屋のドアを開けるとテレビを見て大笑いのバカ二人。

真琴「あっは、あは、ひ、腹、くるし、死ぬ～～」
明久「ま、ま…こっと、わら、すぎ……」

お前ら笑い死んでしまえ。

真琴「お、ゆ、雄二じゃん。おかえり……ギャハハッハ！！」
明久「し、死ぬ、死ぬ～～～～！！」

ガシッ（明久と真琴を掴む音）

ポイッ（明久と真琴を廊下に投げる音）

ピシャ（ドアをすばやく閉める音）

秀吉「……」
康太「……」
俺「これでよし」

邪魔者は排除した。

真琴『いいわけあるか！！さっさと開けろエロゴリ雄二！』
明久『いきなり何するんだよ！！まだテレフ○ンショ○キング終わってないんだよ！！』

こいつらはいい〇も！見てたのか……
ってそんな事はどうでもいい！！

俺「うるさい！！お前らは女子の味方だろうが！！」
真琴『別に女子の味方をしてるつもりはないが……形的にはそうなるな』
明久『女子の味方って言うよりは……瑞希と島田さんの味方だよね？』
俺「つまり作戦会議をするのにお前らが居ると困るんだよ」

ちなみに今からこの部屋は覗き作戦総合本部だ！！
中二病とか言ったやつは死刑だ！

真琴『だったらどうしろってんだよ！！』
俺「お前らは廊下で野宿だ」
明久『ふざけるな！！』

あ、そういえば忘れ物が……
そう思い、ドアを開ける。

真琴「なんだよ、結局は中に入れてくれるんゴフッ！！」
明久「雄二ったらいたずらが過ぎるんだかゴハッ！！」

こいつらの荷物も放り出しておかなきゃ。

俺「じゃあな。夜になっても風邪引くなよ？」
秀吉「お主最低じゃな！！」

いや、むしろ引いてくれたほうがいいかもしれんな……

ん?秀吉が何か言った気がするが、俺には聞こえない聞こえない。

真琴ｓｉｄｅ

オレ「雄二のやろ～～～、絶対に仕返ししてやる」
明久「どうするの?」
オレ「霧島を使いたいところだが……オレは霧島の番号やアドレスを知ってるわけではないからな」

明久「ていうか今夜寝るところはどうする？鉄人に言いつけて部屋に押し入るとか？」
オレ「いや、それじゃつまんないし、鉄人に借りを作るのも嫌だ」
少なくとも寝る場所の確保はすぐにできる。
野宿はありえない。

オレ「そうだな……今すぐ仕返しの方法が思いつくわけじゃないし、とりあえず寝る場所の確保から行くか」
明久「どうするの？」
オレ「あるだろ。オレたちに不信感を持ってなくて、話を聞いてくれて、なおかつオレたちが一番頼れる二人の部屋が」
明久「それってまさか……」

明久の想像通りである。
あいつらは二人で部屋を使ってるって言ってたし、それなりに広かったはずだ。
さて、寝る場所確保にレッツゴー！

明久「……真琴、本気でやるの？」
オレ「本気だ。……失敗すれば今夜は廊下で寝る事になる」

廊下で野宿なんて絶対に嫌だ。
それにあいつらからすれば断る理由が……ないといいな……（
※真琴の頭には何とかして入れてもらうとか強襲をかけるとかの選択肢は消えています）

オレ「……いくぞ（ゴク）」
明久「別にそこまで緊張しなくても……」

コンコン、とドアをノックする。
居なかったらどうしようとかもう考える余裕もない。（↑なら何故お前はそんな事をしてるんだ？）

瑞希『はい、どちらさまですか？』
オレ「オレだけど、ちょっと雄二に部屋追い出されちゃったから入れてくんない？明久も一緒」
瑞希『あ、はい。いいですよ』

そう言って姫路がドアを開けてくれた。
開けてくれて……言葉を失った。

瑞希「……」
明久「真琴、逃げよう」
オレ「まて。逃げたら負けだ。負けなんだ……！」

とりあえずこの雰囲気を何とかしよう。
恐らく姫路がフリーズしかけてるのはオレたちが旅行鞄を提げていて、ジャージやら短パンやらにまみれているからだ。

瑞希「……だれかと戦争でもしてきたんですか？」
オレ「その反応が出来るお前を心から尊敬するよ」

この状態で戦争後って解釈が出来るとは……

美波「瑞希ー、お客さん？……真琴、悲しい事があったなら聞くわよ？」
オレ「違う。これは全て雄二のせいだ。オレたちは悪くない」

なぜだろう。来なければよかったと後悔してる自分が居る気がする。

明久「ちょっと雄二に追い出されちゃって……」
美波「坂本に？なんで？」
オレ「『女子側の人間がいると作戦を立てられないから出てけ』だとよ」
明久「で、僕ら寝るところないから止めてくれないかなぁーーー……って……だめ？」
瑞希「別にそれは良いですけど……私達の部屋、お布団が人数分しかないんですよ」

美波「布団がないから……一緒に「明久、部屋から持ってくるか」「うんそうだね」……いってらっしゃい」

なぜだろうか、美波から黒い何かが出ている気がする。

オレ「んじゃ荷物中入れといてくれ」
明久「ダメだったら……どうする？」
瑞希「あの、一緒の布団で……」

それはうれしいがＦＦＦ団が黙っちゃいないだろうしあいつら潰すのめんどくさい。
さて、それは布団が入手できなかったら検討しよう。

明久「それじゃ言ってくるね」

とりあえず布団入手に元・オレたちの部屋に向かう。

瑞希『坂本君、お願いですからお布団を渡さないように……』
美波『坂本……なんとしても布団を守るのよ……！』

聞こえない。オレには何も聞こえない。

オレ＆明久「雄二！布団を寄越せ！！」

ゴッ！！（雄二の拳がオレと明久の顔面にフレンチキスする音　※詩的表現）

ガッ！！（雄二に足払いされる音）

ガン！！（何か鈍器のような物で殴られる音）

雄二「入ってくるな」
オレ＆明久「了解です……」

ひでえ……酷すぎる……
布団くらいくれてもいいじゃないか……

まさかあそこまでしてくるとは……
あのエロゴリ雄二、そこまで美波の水平線が見たいか……許せん！！
明久「雄二にボコボコにされるのは……久しぶりな気がするよ」
オレ「なんでだろうな……抵抗する気になれなかったな……」

雄二に妨害されたせい（もとい、おかげ）でオレが美波と、明久が姫路と布団は一つ、枕は二つ状態になった。
ヤバイ、超うれし……なんでもないです。

美波「あ、おかえり。どうだった……いいわ、言わなくても。そのボロボロの状態で分かるから」

恐るべし悪鬼羅刹……！
夜に仕返しするときまでは手を出さないようにしておこう……

瑞希「これで明久君と合法的に同じお布団で……（ダメだったんですか……残念でしたね）」
美波「真琴と一緒……真琴と一緒……（坂本の方が一枚上手だったのね）」
オレ「お前ら本音が駄々漏れだぞ」

本人を目の前にしてよくそんなことが堂々と言えるよなぁ……
ちなみに今ここでだすとヤバイ話があるんだが恐らくこのあと明久が言い出しそうで……

明久「そういえば真琴、宗太君は……」

ほら言った。言っちゃった。
美波と姫路がオレたちと一緒に寝れる事に喜んでるのにその話題を持ち出したら……

瑞希「そ、宗太君のことは、気にしなくていいんです！！」
美波「そうよ！まだ腕輪の修理が終わってないんだから、気にしなくていいのよ！！」

うるさくなってしまうじゃないか。

オレ「大丈夫だって。終わったら連絡してくるように言ってあるし、それがないって事はまだ終わってない証拠だからしばらくはこの面子だろ」

瑞希&美波「……ホッ」

オレ「そこで安心するのはどうかと思うぞ」

っと、そんなことより……

オレ「明久、さっきの続き見るぞ！」

明久「そうだった！早く見ないと明日のゲストが分からない！！」

オレ「悪い！テレビつける！！」

瑞希「え！？ど、どうしたんですか！？」

早くしないと曜日対抗なんちゃらや面白企画も根こそぎ見逃してしまう！！

ダッシュでテレビの前に陣取り、チャンネルをフ○テレビへ。

司会のあの人『それでは明日も来てくれるかなー？』

観客『いいともー！！』

……終わったよ？

そしてライオンのごきげ○ようが始まったよ？

オレ&明久「あんの……バカ雄二ィィィーーーーーー！！！」

雄二に仕返しをする口実がまた一つ増えた瞬間だった。

雄二「なんだ……！？今、物凄い殺気が……！？」
秀吉「？　どうしたのじゃ？雄二よ」
雄二「気のせいか……？」
秀吉「？？？」

第五十一話　奈良漬と人外とコロコロコロコロコロコロ……（前書き）

美波『ちょっと!?このタイトル不安しかないんだけど!?』
黒炉『ハハハ。ナニヲイッテルノカナ?』
美波『豪快にとぼけるのはやめなさい!!』
美春『ミナミオネエサマに近づくブタドモヲイマスグマッサツシマス……』
美波『ほら!美春がやばいことになってるのよ!!』
!?『ミナミニチカヅクドウセイアシャメ……イマスグオレガジキジキニショブンシテヤル……』
黒炉&美波『!!!!???』

第五十一話　奈良漬と人外とコロコロコロコロコロコロ……

バカテスト　物理

問　以下の問に答えなさい。

『観測者Ａが速度ｖで走っていると、正面から周波数ｆの音を発し速度ｖ′で走行してくる救急車がやってきた。音速をＶとしたとき、観測者にどのようなことが起きるのか答えなさい。またその現象の名前も併せて答えなさい』

姫路瑞希の答え

『観測者Ａには車が発する音の周波数がｆ　Ｖ＋ｖ／Ｖ－ｖ′となって聞こえる。
現象の名称……ドップラー効果
』

教師のコメント

Ｆ１マシンが通過するときもこれと同様の現象が起こっていますね。物理現象は一見難しいように思われますが意外と身近に存在するものです。

吉井明久の答え

『観測者Ａが速度ｖ′＋ｖで撥ねられる。

現象の名称……交通事故
』

教師のコメント

きちんと相対速度を補正している辺りが腹立たしいです。

峰嶋真琴の答え

『観測者Aが救急車に速度v′＋vで撥ねられたあと、その救急車に搬送される。
現象の名称……交通事故&救急搬送
』

教師のコメント

吉井君以上に腹立たしい人がこんなところに。

坂本雄二の答え

『観測者A（明久）が速度v′＋vでむごたらしく撥ねられる。
現象の名称……不可抗力
』

教師のコメント

吉井君があまりに不憫です。

峰嶋真琴のコメント

不可抗力の意味を辞書で調べて来い。

明久ＳＩＤＥ

強化合宿三日目の夜。現ＡＢＣクラスが入浴中。
真琴の読みでは雄二はそろそろ戦力を他のクラスまで伸ばしてくるはずなので、後半クラスの女子に防衛線にたってもらう手はずにな

っている。

僕「流石に雄二でももう諦めたんじゃない？」
真琴「ありえないな。出なければオレたちを部屋から追い出す意味が無い」
僕「あ。そっか」

言われてみれば雄二がやられっぱなしで終わるわけもないか。
ちなみに今日は鉄人が女子風呂の前に陣取り、僕らが前線で戦う事になっている。

僕「どうして僕らが前なのかな？」
真琴「鉄人曰く、オレたちじゃ安心して風呂入れないって女子から申し立てがあったらしい」
僕「仕方ない事だけど信用ないなぁ……」
真琴「信用があればこんな事にはなってなかっただろうけどな……」

ちなみに僕らのモチベーションは昨日ほど高くない。
なぜなら瑞希と島田さんが入浴中じゃないからだ。
昨日も言ったとおり、僕らは独占欲で動いてる部分が８わｒ……もとい、３割ほどある。
その二人が安全圏に居るとなればやる気が出づらいのも仕方ない。

布施「吉井君、峰嶋君！変態が編隊を組んで……」
真琴「そのネタ昨日もやりましたよね？とにかく化学フィールドの承認お願いします」
布施「あ、はい。承認します！」

布施先生に承認してもらって化学フィールド展開。

僕「瑞希達が安全圏に居るんじゃ昨日ほどやる気は出ないよね？」
真琴「まあな。だが雄二には個人的に恨みがあるしな……」
僕「そうだよね」

昼間いい○も！見逃したのは雄二のせいだ。
その恨み、今ここで晴らす！！

男子Ａ「うおっしゃぁぁ！！ここは二人だけだぞ！！」
男子Ｂ「さっさと突破して、理想郷（アガルタ）を拝むぞ！！」
男子郡「おおーー！！」

うお！？凄いやる気だ！！
今日の僕らは雄二以外に興味がないから対処できるか微妙なのに……！

真琴「と、とりあえずやるぞ！！試獣召喚（サモン）！！」
僕「う、うん！！試獣召喚（サモン）！！」
男子４人「試獣召喚（サモン）！！」

Ｆクラス　峰嶋真琴　化学　１５８４点
　　吉井明久　化学　１６８点

ＶＳ

Ｅクラス　源田康平　化学　７２点
　　岡島亮輔　化学　６９点
　　山田雄吾　化学　７０点
　　湯島修司　化学　７７点

Ｅクラス連中か。
特に問題なくいけそうだ。

モブＡ「よ、４桁！？」
モブＢ「吉井ってあんなに点数いいのか！？」
モブＣ「どう考えてもＦクラスの点数じゃないだろ！！」
モブＤ「ていうかモブって酷いだろ！！」

真琴が腕輪の能力――――――――――――零戦砲だっけ？を放射する。

Ｆクラス　峰嶋真琴　化学　１４８４点
　　吉井明久　化学　１６８点

ＶＳ

Ｅクラス　源田康平　化学　ＤＥＡＤ
　　岡島亮輔　化学　ＤＥＡＤ
　　山田雄吾　化学　ＤＥＡＤ
　　湯島修司　化学　ＤＥＡＤ

真琴「１００点消費だとこんなものか」
僕「いや、こんなものって凄すぎだけどね。向こうの人たち、皆ビビッちゃってるよ……」

真琴の零戦砲を見て、男子がビビリ出した。
当然だね。僕だって真琴と戦ったら間違いなく戦死だもん。
ちなみに真琴の腕輪の能力は物理干渉の効果範囲外らしい。

まあ当然だよね。あんなビーム砲生身の人間が喰らったらマジに死んじゃうから。

秀吉「昨日はやられてしまったが、今日はそうは行かないのじゃ」
真琴「秀吉か」
秀吉「こっちには……Bクラスがついておるのじゃ」
真琴&僕「何!?」

あれは……Bクラス代表の根本君!?
クソ!!雄二の奴、既にBクラスにも話をつけていたのか!?

根本「悪いな。俺は……友香の風呂を覗きたい!!」
真琴「お前最低だな!?」
根本「うるさい!!いくぞ!!試獣召喚(サモン)!!」
Bクラス男子5人「試獣召喚(サモン)!!」
僕「うっ!」

Fクラス	峰嶋真琴	化学	1484点
	吉井明久	化学	168点

VS

Bクラス	根本恭二	化学	195点
	モブA	化学	176点
	モブB	化学	180点
	モブC	化学	189点
	モブD	化学	185点
	モブE	化学	160点

真琴「Bクラスまで参加してんのか……！？」
僕「雄二だったらこのままAクラスまで引き込みそうだよ！？」
真琴「流石にAクラスまで出てきたらつらいけど……どうするか！？」

真琴も悩んでるみたいだ。
とりあえずBクラスのこの人たちは倒すとして、そのあとはやっぱり女子に頼んで僕たちは一時撤退を……
などと考えていると嬉しい二人がやってきた。

瑞希「明久君、大丈夫ですか！？」
美波「真琴、大丈夫！？」
真琴「美波！？それに姫路も！？一回で鉄人と一緒だったはずじゃ……！？」
美波「それが、西村先生が行って来いって……」

なんだ！？鉄人は何を企んでるんだ！？

瑞希「あの、明久君、応援してますから、頑張ってください！」
美波「真琴！頑張って！」

リミッター解除！！

僕&真琴「俄然やる気出たァァァーーーー！！」

恐るべし感謝するべし鉄人！！
めっちゃやる気出たじゃないか！！

真琴「ぶっ飛べ！！零戦砲！！」

真琴もやる気出たみたいで、零戦砲を乱射してる。

根本他「ぎゃあああ！！」
真琴「雑魚は退いてろよ！！」
根本他「ぎょへえええ！！」

あ。みんな戦死した。

Ｆクラス　峰嶋真琴　化学　１０８４点
　　吉井明久　化学　１６８点

ＶＳ

Ｂクラス　根本恭二　化学　ＤＥＡＤ
　　モブＡ　化学　ＤＥＡＤ
　　モブＢ　化学　ＤＥＡＤ
　　モブＣ　化学　ＤＥＡＤ
　　モブＤ　化学　ＤＥＡＤ
　　モブＥ　化学　ＤＥＡＤ

秀吉「び、Ｂクラス６人がかりでもダメじゃと！？」
真琴「よっしゃーー！！そのまま雄二出て来い！！」

それでも真琴は昼間の恨みは忘れてはいなかった。

秀吉「ま、真琴の相手はわしじゃ！！試獣召喚（サモン）！！」

Ｆクラス　峰嶋真琴　化学　１０８４点

ＶＳ

Ｆクラス　木下秀吉　化学　１７１点

真琴「へえ……なかなかの点数だな。だがな……オレの敵じゃねえ！！」

秀吉「ぐ……やはりわしでは力不足じゃ……！」

秀吉の召喚獣は真琴の召喚獣の右フックでノックアウト。

真琴「……どうやら雄二は居なさそうだな」

僕「僕もう真琴が怖いんだけど……」

ここまで大暴れしておいて、召喚獣使用による疲労もフィードバックもものともしないなんて……

美波「他の階で女子が苦戦してるの。早く移動しましょう」

真琴「でも、ここを空にするわけには……」

真琴が辺りを見回す。

真琴が大暴れしたせいで、数人いた女子も補習室送りになってしまってこの場に居るのは僕、真琴、瑞希、島田さんの４人だけ。

僕「真琴が見境なく暴れたせいだよね？」

真琴「反省してます……」

瑞希「なら、私と明久君がここに残って美波ちゃんと真琴君が他の

階に加勢に行くのはどうですか？」
真琴「うーん……それでもいいか……。明久、頼めるか？」
僕「うん。まかせ「お姉さま～～！！」……」

まさかのここで清水さん乱入。

美春「お姉さま！そんな薄汚い豚どもから離れて美春と『オマージュ！』なことや『自主規制！』なことをいたしましょう！！」
美波「い、いやよ！そういうのは……真琴とがいいの！」
真琴「ちょ……この展開でそんなこと言ったら……」
美春「ミハルノオネエサマヲタブラカシクチビルヲウバッタアゲクニテヲダソウトスルブタヤロウ……コノバデコロシマス……コロコロコロコロコロコロコロコロコロコロコロ」
真琴「人外化するだろう……」

なんだろう？
最近清水さんからいろいろ危ないものが出てる気がする。

美春「オネエサマ……オネエサマノカラダヲミハルニササゲテクダサイ……キシャアアアア！！」
美波「ちょ、美春！？」

うわっ！？清水さんの動きはもう人間じゃないよ！？

真琴「……ッ！」

真琴が召喚獣で清水さんを押さえつける。

美春「キュアァ！？」

悲鳴も人間のものではなかった。

美波「ま、真琴……ありがと……」
美春「キュ、キュオオオオ！！」
真琴「！？」
僕「ええ！？」
瑞希「し、清水さん！？」

なんて力だ！
１０００点オーバーの召喚獣を吹っ飛ばすとか人間じゃないよ！もう！

美春「ミネシママコト……ソノクビヲミハルトオネエサマノＩノショウチョウトシテササゲナサイ……」
美波「ちょっと！？何言ってるのよ！？」
美春「オ……オネエサマァァァ！！」
美波「ウチは真琴のことが好きなのに～～！」
真琴「……ッ！」

はい？

美春「……！？」
美波「え……？」
真琴「ミナミニテヲダスヤツハタトエダレデアロウトブッツブス……」

あ。真琴も人外化した。

美春「ミネシママコト……オネエサマトノＩヲジャマスルブタ……シニナサイ……！！」

真琴「シミズミハル……ミナミニツキマトウストーカーメ……セイバイシテクレル！！」

この二人の人外な動きにびっくりして聞こえてきた雄二の悲鳴には気が付かなかった。

よくわかんないけど主犯の雄二が鉄人に鎮圧されたらしく、強化合宿三日目の夜は平和に更けていく……

ことはなかった。

真琴ＳＩＤＥ

場所は美波と姫路の部屋。
だめもとで自分達の部屋に戻ったのだが補習を終えた雄二に案の定追い出された。

オレ「あー……疲れた」
明久「まさかあそこで真琴が人外化するとは思ってなかったよ」

それについては自分のことながら同感だった。
まさか清水と同レベルの状態になるとは……

明久「清水さんはよく絡んでくるの？」
オレ「美波と二人で出かけるとしょっちゅうだ」

まったく、アイツはなんでオレと美波の居所が分かるんだか……
オレが美波と同じ布団で寝ると知ったら飛んできそうだな……

オレ「ってそんなこと想像したらマジに飛んで「ガラッ！！」マジに来たのか！？」

勢いよくドアが開いたのでびっくりして振り返るとそこに居るのは姫路と美波。

オレ「なんだ。姫路と美波か……」
明久「あ、真琴いま清水さんが来たと思ったでしょ？」

オレ「……うん」
明久「……ごめん。面白がったりして」
いいんだ。関係ないやつは見てれば面白いよな……！

瑞希「……」
美波「……」
オレ「ん？どした？」

この二人、ドアを開けてから一歩も動かない。まさに直立不動。
こころなしか顔が赤い気がするが……？

瑞希「明久君……えい♪」
明久「は！？」

唐突に姫路が明久に抱きつく。
明久は突然のことに驚きそのまま倒れこむ。ちなみに布団は敷いてるから怪我はしない。
姫路は明久の胸に顔をうずめてて……

オレ「まさか……」
明久「これって……」
美波「真琴～～♪」
オレ「やっぱりか！！」

今度は美波がオレにダイブ（ル○ン的表現）。
そのまま転がってしまい……

オレ「／／／／／／／／」
美波「真琴～～～……んむっ」

オレ「！！？？！！？？」

ちょ……思考回路停止思考回路停止思考回路停止思考回路停止……
って停止してる場合じゃない！
なんだ！？なんでこうなった！？
美波がオレにキスって……

美波「……ぷはっ……真琴ダイスキ」
真琴「あ……うん、オレも……だけど……」

なんだこれ？
一体何が原因でこんなことに？

明久「ま、真琴！二人の暴走の原因わかんない！？」
オレ「……奈良漬？」
明久「奈良漬！？」

奈良漬は微量のアルコールを含むが……それで酔うか？
どんだけ酒に弱い……弱いんだった。
コノ二人に限らず、オレの周りの女子は皆酒に弱い。

オレ「まさか奈良漬ってことは……。でも、それ以外考えられないし……」
明久「奈良漬に含まれるアルコール分ってかなり少ないはずだよね！？それで酔うの！？ていうか酔えるの！？しかもついさっきまで平気だったじゃん！！どんだけ特殊な酔い方なんだよ！？」
瑞希「むぅ～。明久君、真琴君のほう見ちゃダメです。えい♪（ゴキュ）」
明久「痛い痛い！♪マークつけながら手首ひねらないで！！」

酔ってる。完全に酔ってる。
もう暴走モード入りまくりだよこの人。

美波「……（すやすや）」
オレ「？　寝ちまったか？」
美波「……（ぐっすり）」
オレ「／／／」

どしよ？ムチャクチャ可愛いんですけど？
どしたらええとですか？

美波「……（すやすや）」
オレ「…オレも寝るか」

明久は……いいか。姫路と好きにやってれば。

オレ「んじゃオレは寝るからな？後はお二人でどーぞ♪」
明久「ええ！？ちょっと待ってよ！」
オレ「ぐぅ」
明久「ま、真琴！？おまムグゥ！？」
瑞希「二人の邪魔しちゃダメです。明久君はこっちに注意を向けるべきです」
明久「いや、酔ってるときの瑞希はシャレにならないんだって！マジで！！ていうか落ちる！！意識が！！」

うん。そこ同感。
だが姫路。明久にヘッドロックかけるのはやめような？

第五十一話　奈良漬と人外とコロコロコロコロコロコロ……（後書き）

今回は恋愛＆ギャグ要素が強かったですかね？
強化合宿編も中盤に入ったかな？
感想お待ちしております！

第五十二話　最終決戦開始！

バカテスト　数学

問　以下の問に答えなさい

『一次関数を文字式で表しなさい』

姫路瑞希の答え

『ｙ＝ａｘ＋ｂ』

峰嶋真琴の答え

『ｙ＝ａｘ＋ｂ』

教師のコメント

正解です。復習問題でしたが、姫路さんと峰嶋君には必要なかったかもしれませんね。

吉井明久の答え

『１ＺＩ＋ＫＡＮＳＵ』

教師のコメント

君は中学校からやり直してきなさい。

真琴ＳＩＤＥ

強化合宿４日目。
明日には合宿所を出発するので覗きをすることが出来るのは今日が最後。
つまり今日の夜は男子女子ともに最高戦力を投入しての最終決戦と

なるわけだ。

明久「今日が覗きのラストチャンスだから……雄二もきっと今日はAクラスの戦力を投入してくるよね……」

オレ「Aクラスの戦力を引き入れることが出来ればの話だけどな」

美波「Aクラスって言っても男子だから……」

瑞希「覗き騒ぎに参加する人は少なからず出てくると思いますけど……」

うん。昨日までの騒ぎのおかげでこの二人でもオレと明久以外の評価は大分下がってるみたいだ。

オレ「まあ雄二なら久保を筆頭にAクラスでも引き入れるだろ」

明久「ならこっちもAクラスの女子を戦力として投入する？」

美波「でも、それはキツいんじゃないかしら？」

明久&瑞希「え？なんで（ですか）？」

オレ「美波の言うとおりだ。男子は女子風呂を覗けるとあってモチベーションは最高潮。かたや女子は勝っても負けてもデメリットしかない上に体力も労力もかなり必要な戦いとなるからな。点数以前にやる気の問題だな」

Aクラスで率先して協力してくれそうな女子って言うと、霧島を初めとして工藤、木下姉、佐藤くらいか……

オレ「こうなるときついな……」

明久「真琴と瑞希の高得点で押し切るのは？」

オレ「ダメだな。オレたちは覗き阻止って言うデメリットしかない戦いをずっと続けてるんだ。オレですら疲れが抜けてない上にテストでも集中できなくなってるからな」

瑞希「確かに私も全然疲れが抜けてないです……」

姫路はもとから体力がある訳じゃないし、オレは只でさえ疲れやすい召喚獣を使ってる上にフィードバックもあるからな。
もしかしたら一番消耗してるかもしれない。

明久「じゃあどうするの？」
美波「女子と男子のモチベーション差は明白、こっちの切り札は消耗してるんじゃ、本当に突破されかねないわよ？」
瑞希「頼みは先生達ですけど……」
オレ「教師陣は今回の覗き、いいように利用してやがるからな……」

そもそもこの強化合宿自体、モチベーションの向上が目的だからな。
召喚獣で防衛線を張ってる限り、覗きにはテストの点数が必要になってくる。
だから理由は別にしても、勉強に対するモチベーションが上がってる以上、教師は必要以上に口を出すことはない。

瑞希「八方塞がり……ですか？」
オレ「いや、そんなことはないぞ？」
明久「でも、覗きを阻止できないんじゃ……」
オレ「阻止できないなら阻止しなければいいって事だ」

三人はわけが分からないといった顔をしている。
まあそうだよな。まだ説明が足りないかな。

オレ「つまりだな、なんで女子風呂を覗かれると困るのかって事なんだけど……」
美波「だって裸見られて嬉しい人なんて普通いないでしょ？」
瑞希「お風呂を覗かれるのは誰だって嫌だと思いますけど……」
明久「そうだよね。雄二たちなんかに見られたくないもんね」

オレ「じゃあ見られなきゃいいじゃんか」
美波「言ってることが矛盾してるわよ？」

覗きが阻止できないなら阻止しなければいい。
そういった後に見られなければいい。
確かに一見矛盾してるように聞こえるけどな。ちょーっとばっか違うんだな。

オレ「そもそも困るのは、“女子風呂の中に女子が居る状態で、男子に覗かれること”だろ？」
瑞希「それはそうですよ。女の子が入っていないお風呂なんて流石に覗く人は居ないでしょうし……あ、そういうことですか」
明久「え？瑞希は分かったの？」
美波「ど、どういうことよ？」
オレ「つまり、女子が入ってなければ覗かれても問題ないってことだ」
明久＆美波「あ！！」

この二人も理解できたみたいだ。
だがここでもやっぱり問題は出てくる。

オレ「問題は、空の女子風呂を守るのは大変だって事」
瑞希「中に誰もいないって知ってたら、点数を消費してまで戦いたくはないですもんね」
オレ「ご名答。学年次席レベルと名高い才女だけあって、頭の回転は速いな」
瑞希「真琴君ほどじゃないですよ」

とどうでもいい会話はおいといて、

オレ「この作戦で女子の代わりに犠牲になってもらう奴なんだが……」
明久「鉄人の風呂！！」
オレ「そもそも鉄人は防衛線に立つから無理だし気色悪くて想像するのも嫌だし後ろで気持ち悪そうにしてる美波と姫路に謝れ」
明久の最悪発言を聞いた美波と姫路が口を押さえてダウンしてる。
そんなにきついのか……
明久「ご、ごめん……瑞希、島田さん……ぅおえっ」
言い出した本人すらもこのざまか。
すごいな鉄人。
オレ「と、とにかく、鉄人を使えないのは確かだ。それ以上に破壊力のあるものは用意してある」
明久「鉄人以上の……破壊力？」
オレ「白髪、紀元前から存在する老体、醜悪なオブジェ、妖怪……」
明久「もういい。言わなくていい」
あれの裸なんか見たらマジに自殺したくなる。
恐らく見たもの全員が自己防衛のために心を閉ざすだろう。
美波「あんたたちねぇ……目上の人なんだからそういうことはやめなさいよ」
瑞希「学園長先生をそんな風に利用するのはちょっと……」
オレ「白髪で紀元前から存在する老体、醜悪なオブジェの妖怪＝学園長が通じてるお前らが言っても説得力ないからな？」
明久「学園長＝ババアもおぼえておいたほうがいいよ？」

何を覚えさせようとしてるんだコイツは。

オレ「で、ババアが入浴に入る時間もきっちりチェックしてある。雄二への仕返しはこれで十分だろ」

明久「テレフ○ンショ○キングの恨みは怖いぞ……」

美波「まだ怒ってたのね……」

瑞希「あ、あはは……」

あのクソゴリエロ雄二を陥れるために練った作戦だぞ。フフフ……

??「へぇー…。琴君はそういうこと企んでるんだ。これは秀君に教えてあげなきゃなぁ～」

４人「!?」

だがそれでも邪魔や問題は入るのであった。

明久ＳＩＤＥ

夜。
今日が覗きのラストチャンス。
真琴の読みでは雄二は既にＡクラスを懐柔していて、久保君が要注意人物だとか。

僕「真琴、久保君が要注意人物ってのは分からなくもないけど、点数では瑞希や霧島さんのほうが上だよ？」
真琴「単純な点数ならな。明久。お前の2倍くらいの点数の相手がいたら勝てるか？」
僕「多分、だけどね。勝てると思うよ？」
真琴「同じことだ。点数だけで勝負が決まるほど、召喚獣バトルは甘くない」

でも久保君がそこまで操作技術高いなんて聞いた事ないけどな……

真琴「操作技術じゃないぞ？」
僕「え？違うの？」
真琴「お前の疑問は前線におく戦力がオレでも姫路でも霧島でもないのは何故かって事と、オレがなぜ久保を警戒しているかの二つだ

ろう？」

あ、大正解。

真琴「一つ目の理由として、オレは今回前線での戦闘には参加しない。目的を見失ってる奴が多いが、今回オレは本来の目的を果たすつもりでいる」

僕「目的？」

真琴「脅迫犯を探す」

僕「でもそれは雄二たちがやってるんじゃ……」

真琴「そういや雄二が女子風呂を覗いて尻に火傷のある女子を探すとか言ってけど……今風呂に居るのは……」

僕「……そうだったね」

今女子風呂にいるのは醜悪な妖怪のオブジェだ。

火傷の女生徒なんて居るはずがない。

真琴「そこで今回はこの紙に書いてある内容を、できるだけさりげなく広めて欲しい」

そう言って真琴は一枚の紙を渡してくる。

僕「これって……ああ、そうやるんだね？」

真琴「うまく行ったら姫路と美波が鉄人を動かすことになってる。お前はここでギリギリ耐えてるって感じを出しながら戦うんだ」

僕「本当に大丈夫なの？」

真琴「ああ。昨日の様子を見る限りじゃいけるだろ」

真琴は自信満々に言い放つ。

何か根拠があるのだろうか？

僕「で、瑞希と霧島さんが前に居ない理由と久保君を警戒してる理由は？」
真琴「前者は簡単。倒されると困るからだ」
僕「は？」

瑞希や霧島さんが戦死するなんて考えられないけど……

真琴「いいか？いくら５０００点台をキープしてる姫路や学年主席の霧島でも、Ａクラスが束になって襲い掛かってくれば戦死する可能性は高い」
僕「でも、Ａクラスが来るって決まったわけじゃ……」
真琴「……ところが来るんだよ。雄二が久保の部屋から満足そうな顔して出てきたところを見てるからな」

それはもうＡクラスは参戦してると考えていいね。

真琴「それに姫路を久保とぶつけるのはあまりに危険すぎる」
僕「ほぇ？どういうこと？」
真琴「お前は気絶してて知らないだろうけど、Ａクラスとの試召戦争でＦクラスの４敗目、勝負の決め手になった戦いは……」
僕「まさか……瑞希……？」
真琴「……ああ。久保の腕輪の能力にやれらたらしくてな。本人は気にしてないって感じで振舞ってたけど、本当は凄く気にしてたはずだ」

自分のせいでＦクラスが負けたと思ってたからな。と真琴は続けた。

真琴「姫路はあのときのこと、絶対に後悔して、自分を責めてたはずなんだ。だから、姫路を久保とぶつけるのは極力避けたい」

僕「……瑞希じゃ勝てないと思ってるんでしょ」
真琴「姫路どころかオレだって下手すりゃ負けんだよ。アイツの腕輪の能力、自爆でな」
僕「それが久保君を警戒してる理由……」
真琴「そうだ。とにかく、久保だけは全力で抑えろ。教師を2、3人ぶつけるでもしてな」

簡単に言ってくれるよ……
学年次席の久保君を通すなって……

僕「まあ、なんとかやってみるよ」
真琴「頼んだぞ。そろそろ時間だ。配置に着こう」

今日の夜がラストチャンス。
この作戦、絶対に成功させる！

第五十三話　最終決戦開始！　？（前書き）

今回ちょっと短めです。

第五十三話　最終決戦開始！？

強化合宿の日誌

この強化合宿全体についてのまとめを書きなさい。

姫路瑞希のまとめ

『他のクラスの人と勉強する事で良い刺激が得られました。伸び悩んでいた科目についての学習方法や使いやすい参考書についても教えてもらうことが出来たので今後は更に頑張って生きたいと思います。残念なのは、今回の覗き騒ぎで男子と女子の溝が深まってしまった事です。明久君や真琴君が女子側についてくれたことで、少しは良かったかもしれないけど、これからの学園生活でクラス内の男子と女子の対立が起きないか少し不安です。ある人と一緒に寝れたこともあって、私はとっても大満足な強化合宿でした！』

教師のコメント

姫路さんは全体的にそつなくこなしている様子だったので伸び悩んでいる科目があったということには驚きました。本来なら先生が気づくべきなので申し訳ないです。ですが無事に解決できそうなので何よりです。姫路さんの言うとおり、これからクラス内で男子と女子が対立する事になりそうですが、Ｆクラスは男女仲がいいので大丈夫かもしれませんね。そして最後の一文について詳しく聞かせてください。

島田美波のまとめ

『真琴と吉井が女子側についてくれて、安心して入浴する事が出来ました。三日目の夜は良く分からないけどボーッっとしてしまい、気づいたら真琴と一緒に寝ていました。それはそれでうれしかったです』

教師のコメント

峰嶋君に詳しい話を聞いてきます。

峰嶋真琴のまとめ

『良かった点
・美波と一緒に寝れた事。
・姫路と美波が信用してくれた事。
・召喚獣が新装備と新能力を手に入れたこと。

悪かった点
・テレフ○ンショ○キングを見逃した事。
・覗き騒ぎが起きた事
・結果的に美波に迷惑をかけてしまった事。
・坂本雄二（文月学園の汚点）
・清水美春（人類の汚点）
』

教師のコメント

最後の二つは酷くないですか？

それと島田さんとの不純異性交遊についての説明を求めます。

峰嶋真琴のコメント

何の事だか？

吉井明久の答え

『瑞希と一緒に寝れたことが何よりうれしかった』

教師のコメント

こんなところにもう一人。

西村宗一のコメント

吉井に峰嶋！鉄拳フルコースだ！覚悟しろ！

峰嶋真琴のコメント

明久！逃げるぞ！

吉井明久のコメント

了解！

最終決戦開始1時間前。

瑞希ＳＩＤＥ

真琴「は……？」

私「だから、久保君と戦いたいんです」

Ｆクラスが試召戦争に負けて三ヶ月間宣戦布告を禁止されている以上、久保君と戦える最大のチャンスはこの強化合宿です。

試召戦争で負けてしまった……これは私のリベンジです。

真琴「申し訳ないがそれは無理だ。久保には明久と教師を2、3人ぶつける。姫路には女子風呂の前を鉄人と美波と一緒に守ってもらう」

私「お願いします！どうしても、試召戦争の時のリベンジがしたいんです！」

そう言って私は頭を下げます。

これが自分勝手なわがままだという事は百も承知です。

それでも、どうしてもリベンジがしたいんです。

真琴「……どうしてそこまで久保と戦いたがる？」

私「前に真琴君言ってましたよね？『オレたちはクラスで負けたんだ』って。確かに試召戦争はクラス単位で行うもので、負けたのはFクラスです。でも私はFクラスの、みんなの代表として久保君と戦ったのに勝てなかったんです……」

真琴「だからもう一度久保と戦って、勝ちたいと？」

私「お願いします！絶対に、久保君に勝ちますから！」

そう言ってまた頭を下げます。

真琴君は思案顔で少し悩んだ後、

真琴「……久保の攻略法を教えてやる。勝て。それが条件だ」

私「……！！　ありがとうございます！」

久保君との再戦が決まったのでした。

真琴「久保と姫路では点数差はおよそ１２００点。これだけなら明久レベルの操作技術でもない限りはまず負けないんだが……」
私「あの“自爆”で覆る可能性があるってことですよね……」
真琴「そういうことだ。そこで久保を倒すために考えられる作戦としては一気に攻め込んで“自爆”される前に倒すか、“自爆”を使われるまでひたすら防御に徹するか、おおまかにはこの二つが浮かび上がる」

ちなみに久保君の腕輪は総合科目限定の腕輪なので当然対戦科目も総合科目になります。

私「どっちのほうがいいんですか？」
真琴「自分で挙げといてなんだが短期決戦で決めるのはほぼ無理だな。攻めてる間に自爆されて直撃喰らって戦死がいいとこだろ」
私「じゃあ……防御に徹して自爆後の隙を狙うんですか？」
真琴「もとからそれくらいしか浮かばないしな。で、問題はその“自爆”の威力と範囲なんだが……」
私「威力については分からないですけど、範囲はかなり広かったです」
真琴「じゃあ回避は無理って前提で話を進めるか……爆風の直撃さえ受けなければ点数は残る筈だ」
私「どうすればいいんですか？」
真琴「姫路の召喚獣は確か大剣が装備だったよな？盾とかはなかったと」
私「そうですね。盾みたいな防具類は持ってないです」
真琴「なら大剣を盾代わりにするしかない。あとは顔面部に直撃を受けない事。これだけでかなり変わる」

えっと……剣を盾代わり、顔に直撃を受けない……

私「……」
真琴「……ついてきてるか？」
私「……（フルフル）」
真琴「まあ荒事は確かに得意ではないだろうがこれくらいは分かってくれ……」

真琴ＳＩＤＥ

時間帯からしてそろそろ雄二たちが攻め込んでくる頃か？
情報については明久と美波に任せたから大丈夫だと思うが……

オレ「それでも奴が来るまで暇なんだよな……」

明久達がうまく噂を伝達して奴が引っかかってくれるまではオレは待機。
暇。暇。暇である。

オレ「……つまんねぇー！！」

外ではほとんどの奴が大暴れしてるのに自分は待機。
自分で立てた作戦なのにすでにうんざりしている。

オレ「……は？明久に渡した紙にはなんて書いてあったのかって？」

というかオレは何を言ってるんだ？
あの紙に書いてあったのは……

『峰嶋真琴は奇襲を喰らって戦死ギリギリ、個室で休んでいる』

この噂を聞きつけたら犯人（だと思われる奴）は飛んでくるだろう。
それが目的だからな。
あとはタイミングを見計らって美波と姫路に指示を出す。

オレ「…姫路の奴、勝てるかな？」

第五十三話　最終決戦開始！　？（後書き）

強化合宿編が終わったら座談会をやりたいと思います。

第五十四話　決戦！　瑞希ＶＳ久保！（前書き）

因縁の対決！
瑞希は無事リベンジを果たす事が出来るのか！？

第五十四話　決戦！　瑞希ＶＳ久保！

バカテスト　国語

問　次に示す四字熟語の漢字を答え、適切な例文を作りなさい。

『あいまいもこ』

姫路瑞希の答え

『漢字　【曖昧模糊】
例文　【責任の所在が曖昧模糊としていた】』

教師のコメント

【あやふやではっきりしないさま】を表す四字熟語ですね。読める人は多いのですが、書ける人はそう多くありません。良く出来ました。

峰嶋真琴の答え

『漢字　【曖昧模糊】
例文　【オレの財布の所在が曖昧模糊としている】』

教師のコメント

早く探してください。

吉井明久の答え

『漢字　【合間妹子】』

教師のコメント

何とか答えようと言う気持ちだけは伝わってきました。

土屋康太の答え

『例文　【小野小町・小野妹子・合間妹子の日本三大美女は遣隋使として旅立った】』

教師のコメント

一名男性が混ざっているので気をつけてください。

島田美波の答え

『例文　【Wie f?r Makoto wird eine Stelle zu Aufenthalt manchmal die Vagheit】』

教師のコメント

ドイツ語で書かれても……

峰嶋真琴のコメント

『真琴は時々居場所が曖昧模糊になる』だと？……以後気をつける。

瑞希ＳＩＤＥ

Eクラス女子『4階が男子に落とされたわ！！1階も危ないわ！』
Dクラス女子『1階は＿＿＿＿＿＿が居るわ！！それよりも2階が……』
優子「落ち着きなさい！1階を中心に形勢を立て直して！2階は……姫路さん！お願いできる！？』
私「は、はい！！」

私が配置されたのは3階です。
ここでは木下さんが指揮を執っています。

ちなみに各階に配置されてるおもな人は……

女子風呂前……西村先生
　　美波ちゃん
1階……高橋先生
　大島先生
　翔子ちゃん
　工藤さん
2階……小山さん
　中林さん
　清水さん
3階……私
　木下さん
　佐藤さん
4階……みどりちゃん
待機……真琴君
各階を状況に応じて移動……明久君

です。
４階が落とされたという事はみどりちゃんは戦死してしまったんでしょうか？

優子「姫路さん！早く行って！」
私「あ、はい！行ってきます！」

真琴君の指示では久保君が現れるまでは予定通りに動くことになっています。
そして移動中でも作戦通りに……

私『峰嶋真琴君が奇襲を受けて戦死寸前です！別室で待機に入りました！』
女子『峰嶋君が戦死寸前！？』
女子『男子にそんなことが出来るなら、私達じゃ無理でしょ！？』
女子『いいえ、何とかして峰嶋に頼らずに男子を鎮圧するのよ！』

うまく行ったみたいです。
この作戦の目的は三つです。
一つ目は女子のモチベーションを下げて、男子の突破確率を上げること。
二つ目は男子のモチベーションを上げて、また男子の突破力を上げること。
そして三つ目は、『ある人物』をおびき寄せること。
重要なのは三つ目で、真琴君は最終的に三つ目さえ達成できればいいと言っていました。

そうやって嘘を広めているうちに目的地――２階に着きました。

男子『！？姫路瑞希！？』

男子『彼女が出てきたら突破なんて無理だぞ！？』
男子『それに彼女がここにいたら覗いても裸を見れないじゃないか！！』

……確かに想像以上に不愉快でした。
真琴君が男子側だったときのことを考えたら恐ろしいです。

私「姫路瑞希、行きます！試獣召喚（サモン）！！」

ポンッ！と音がして私自身をデフォルメした召喚獣が登場します。

Fクラス　姫路瑞希　　化学　５８２点

ＶＳ

Cクラス　黒崎トオル　化学　１４４点
　　野口一心　　化学　１３２点
Bクラス　野島翔　　化学　１７２点

私「ごめんなさい！！」
男子3人「うそだろ！？」

固まっていた3人の召喚獣を大剣でなぎ払います。
一撃で戦死です。

男子『霧島といい姫路といい、入浴してないんじゃ覗いても意味ないんじゃないか！？』
男子『一体この時間は誰が入ってるんだ！？』

当然の疑問ですよね。
この時間に入っているのは……想像しないように明久君に言われてますので。

？？『皆どくんだ。彼女の相手は僕がしよう』
男子軍『！？』
私「ここに居たんですか……！？」

男子の中から出てきたのは、学年次席で、そしてどうしても私がリベンジしたかった久保君でした。

久保「姫路さんがここにいるなんて聞いてなかったよ。坂本君の読みも外れる事があるんだね」
私「3階が危なくなったから移動してきただけですよ。坂本君が読み違えたわけじゃありません」
久保「……」
私「……」

お互いにお互いを見つめて、一歩も動きません。

私「……布施先生、召喚フィールドを取り消してもらえますか？」
布施「あ、はい。話しは峰嶋君から聞いてますよ。頑張ってください」

布施先生はそう言って化学の召喚フィールドを取り消してくれました。
腕輪もちの久保君に勝って初めてリベンジが果たされる以上、対戦教科は総合科目しかありません。

久保「どういうつもりだい？姫路さん。フィールドを取り消してしまったら……」
私「大丈夫です。起動（アウェイクン）」
金色の腕輪の起動ワードを叫ぶと、召喚フィールドが展開されます。
私「試獣召喚（サモン）」
一度消えてしまった召喚獣をもう一度呼び出します。
久保「金色の腕輪か……。しかし解せないな。試獣召喚（サモン）！」
久保君も召喚獣を再び召喚します。

Ｆクラス　姫路瑞希　総合科目　５３０４点

ＶＳ

Ａクラス　久保利光　総合科目　４１１９点

久保「……どうして総合科目なのか」
私「腕輪持ちの久保君でなければ、意味が無いからです」
久保「リベンジマッチということかい……？姫路さんらしくないね。そんな荒事を自分から進んでやるなんて」
私「私らしさなんて関係ありません」
久保「？」
私「私は、Ａクラスとの試召戦争のときにみんなの足を引っ張ってしまいました……。あの時私が勝ってれば、もしかしたらＦクラス

の勝利もあったかもしれなかったのに、私のせいでそのチャンスを消してしまったんです……」

『オレたちはクラスで負けたんだ。だからお前が全部抱え込んで責任を感じる必要はないんだ』

真琴君が言ってくれた慰めの言葉。

でも、勝敗を分ける戦いで私が負けてしまったのはどうしようもない事実です。

だから、またいつかAクラスと戦うときにみんなの足を引っ張らないように、今ここで久保君に勝ちたいんです！

久保「どうして総合科目なのか……そういうことか。なら僕は遠慮なく行かせて貰う」

私「私も全力で行きます！」

お互いに召喚獣を構えさせます。

それでも間合いを詰めずに、お互いの出方を伺うだけ。

久保「……」

私「……」

真琴『久保は恐らくそう簡単には攻撃を仕掛けてこない。“自爆”に耐えられる可能性が上がってるからな』

真琴君の言うとおりでした。

久保君は私の出方を伺うだけで、ちっとも攻撃してきません。

久保「……ッ」

久保君が小さく舌打ちします。

私も頭では『先に動いてはいけない』と理解してはいるんですが、
ただ待つだけというのは大変です。

久保「……ッ」
私「……えい！！」

もう我慢できません！！
召喚獣を走らせ、一気に間合いを詰めます！

久保「だめだよ？姫路さん」
私「え！？」
久保「こういうときは最後まで我慢しなくちゃ、ね。“自爆”」
私「そんな……！？」

引っかかった。とでも言うように笑う久保君。
まさかさっきの舌打ちは……演技！？

久保「姫路さんの点数だと一撃でいけるかどうか分からないけどね、
それでもだめもとさ」
私「な、なんとか防御……！！」

ギリギリ間に合うか間に合わないかで防御の体勢だけはとりました。
あとは――――――――単純な点数による攻撃力と防御力による結
果です。

ドーン！！！！！

大爆音が響き、爆煙が立ち込めます。
この煙に物理干渉能力はありませんが……視界が悪くてどうなったのかが分かりません。
やがて煙が晴れてくると……

私「あっ……」
久保「なっ……」

Fクラス　姫路瑞希　総合科目　1点
VS
Aクラス　久保利光　総合科目　1点

久保君は腕輪の能力で1点に、そして私も爆発を喰らい、1点になっていました。

久保君「……これで条件はまったく同じになったね」
私「そうですね……」

お互いに腕輪を使えない以上、あとは単純な操作技量や小さなミスで勝負が決まります。

私「……行きます！」
久保「……行くよ！」

私と久保君の召喚獣がぶつかり合います。
そして立っていたのは……

真琴ＳＩＤＥ

ドーン！！！！！

オレ「おお、やってるな」

今の轟音……
久保の自爆だろうな。
ということは姫路は作戦通り出来てるのか？

オレ「って考えても仕方ねぇか。助太刀にもいけるわけじゃねぇし」

援護にいけないならオレは自分のやる事をやるだけだ。
明久や姫路、美波があの話を広めてくれていればそろそろのはずなんだが……

オレ「もう戦死しちまってるって事はねえよな……？」

それは困る。
戦死されると作戦がいっきにパァだからな。
……っと、やっときたか。

キィ……

ドアがゆっくり開けられる。

オレ「やっと来たか。待たせんじゃねーよ。戦死したかと思ったろ」
？？「……」
オレ「んじゃ行くぜ……起動（アウェイクン）」

白銀の腕輪の起動ワードを言う。
召喚フィールドが展開され、科目はランダムで古典になった。

オレ「試獣召喚。お前……覚悟できてんだよな？」
？？「……試獣召喚」
オレ「シカトかよ……まあいい。美波に手ェ出したらどうなるか、オレにガチで喧嘩売ったらどうなんのか、たっぷり思い知らせてやるよ」

試獣召喚の声とともに出てきた召喚獣に右手を拳銃の形にさせる。

オレ「零戦砲がアレだけだと思うなよ。能力ってのは応用してなんぼのもんなんだよ」
？？「……」
オレ「テメェみてぇなただ力をぶん回すだけの奴にはもったいないが……消し飛べ」

これは零戦砲の応用技の一つだ。
指を拳銃の形にして、人差し指一本からビームを打ち出す。
攻撃範囲が狭くなる代わりに同じ点数でも密度が高い分威力も段違いに上がるし、一撃ごとに消費点数を抑えられるのが利点だ。

オレ「零戦砲・バーストライフル」

瑞希ＳＩＤＥ

私「……」

久保「……」

お互いの武器がお互いを掠めて……いえ、どちらか一方の武器だけが相手を捕らえ、もう一方は捕らえなかったのです。

Ｆクラス　姫路瑞希　総合科目　１点

ＶＳ

Ａクラス　久保利光　総合科目　０点

私「や、やった……」

この勝負は……私の勝ち……？

久保「まさか、“自爆”に耐えられるとは……って大丈夫かい！？」

私「あ、は、はい。ちょっと腰が抜けちゃっただけですから……

なんだか緊張の糸が切れてしまって……」

私は腰が抜けてヘナヘナとその場に座り込んでしまいました……

なんだか一気にどっと疲れました……

私「あっ……」

今ここで気が付きます。

残りの点数が1点じゃ、金色の腕輪を起動できません。

これでは高橋先生の居る1階を男子の皆さんに突破させる事が出来

ません……

私「ど、どうしましょう……？」

久保「？　どうしたんだい？」

私「あ、なんでもないですから……」

男子である久保君に話すわけにも行かず、真琴君も動けない状態……

どうしたら……

男子『1階突破！高橋女史を討ち取ったぞ！』

男子『おおーー！！』

あ、1階突破できたんですか!?よかった……
って、ええ!?
高橋先生を討ち取ったって誰がですか!?

高橋先生を討ち取った人物は、意外な二人組みでした。

第五十四話　決戦！　瑞希ＶＳ久保！（後書き）

高橋女史を討ち取った二人組みとは！？
そして真琴と対峙するのは誰！？……ってこっちは予想つきますよね（笑）
感想お待ちしてます！

第五十五話　決戦！　ムッツリーニＶＳ愛子＆大島　そして……？（前書き）

ムッツリーニＶＳ愛子＆大島戦と、高橋先生ＶＳ？？？＆？？？＆？？？戦ですよ。
え？誰かって？それは読んでのお楽しみ♪

第五十五話　決戦！　ムッツリーニＶＳ愛子＆大島　そして……？

バカテスト　国語

問　以下の問に答えなさい。

『有名な俳人を一人挙げなさい。またその人物の読んだ句を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『俳人　松尾芭蕉
読んだ句　古池や蛙飛びこむ水の音』

教師のコメント

正解です。松尾芭蕉なら他には『名月や池をめぐりて夜もすがら』などがありますね。

峰嶋真琴の答え

『俳人　正岡子規
読んだ句　松山や　秋より高き　天主閣』

教師のコメント

今回は真面目に答えてくれましたか。

ちなみに正岡子規は歌人としても有名ですよ。

土屋康太の答え

『俳人　合間妹子』

教師のコメント

合間さんは俳人だったのですか？

吉井明久の答え

『読んだ句　ああ妹子　合間妹子よ　ああ妹子』

教師のコメント

土屋君に続くのならもう少し完成度の高い俳句を考えてください。

ムッツリーニ（訂正）康太ＳＩＤＥ

今俺が居るのは1階。
雄二と秀吉が何とか作った抜け道をとおり、今、最大の敵と対峙している。

大島「土屋、まだ懲りないのか？」
愛子「ムッツリーニ君、そんなにボクの裸が見たいのかな？」
俺「……そんな事実は無い（ダバダバダバ）」

……体は嘘つき。

大島「まったく、生徒が教師を超える事などないと厳しく教えたはずだがな」
俺「……消せ？」
大島「何？」
俺「……取り消せ……！」

愛子「ど、どうしたの!?ムッツリーニ君!?」

生徒が教師を超える事など無いと誰が決めた!?
それじゃあ真琴はどうなんだ!?
姫路や名川の物理だって、教師クラスを超えるんだ!

俺「……『生徒が教師を超える事は無い』って言葉は、超えようと努力する人を侮辱する言葉だ……!」
大島「だがそれが現実だ」
俺「……なら俺は大島先生を超える!」
大島「出来るのならやってみろ。試獣召喚(サモン)!!」
愛子「大島先生、加勢しますよ?試獣召喚(サモン)!」

保体教師　大島武　保健体育　７０１点
Ａクラス　工藤愛子　保健体育　３７３点

確かに凄い点数ではある。
７００点の壁は俺も中々越えられない。でも……

俺「……仲間を馬鹿にする奴を、俺は許さない。試獣召喚(サモン)」

だが俺は……

ＶＳ

Ｆクラス　土屋康太　保健体育　１６０９点

保体教師　大島武　保健体育　７０９点
Ａクラス　工藤愛子　保健体育　３８８点

大島＆愛子「……は？」
俺「……真琴、保健体育１位の座は渡さない」
愛子「ちょ、ちょっとムッツリーニ君？その点数、峰嶋君より高いよね？」
大島「土屋、どうやってそんな点数を……？」

どうやったかだって？
……愚問だな。

俺「……王者のプライド、仲間への想い、そして欲望は不可能を可能にする」
愛子「最後の一つで台無しだからね！？」
俺「……行くぞ、加速！」
大島「くっ……」
俺「……“閃光加速”！！」
愛子＆大島「！？」

驚く愛子と大島先生。
最初は俺も驚いた。

大島「な、なんだ今のは！？」
愛子「光が……どうなったの……？」

Ｆクラス　土屋康太　保健体育　１３２１点

ＶＳ

保体教師　大島武　　保健体育　　０点
Ａクラス　工藤愛子　保健体育　　０点

一瞬で二人の召喚獣は戦死する。
俺の“閃光加速”は……音速を超え、光速に至り、光速を超える。

俺「……これは真琴から聞いた話だが、４００点を超えると特殊能力を持つ腕輪が使えるようになるように、１６００点を超えると“指輪”が使えるらしい」
大島「そんな話聞いた事無いぞ！？」
愛子「そもそも１６００点オーバーってほとんど居ないでしょ！？」
確かに１６００点オーバーなんて真琴でも無ければ無理だ。

俺「……指輪を使うために猛勉強した」
愛子「勉強って……」

真琴は俺の保健体育の勉強に付き合ってくれた。
完全記憶能力者の暗記方法は俺にはできないということを考慮して、分かりやすく教えてくれた。その恩を返すためにも、指輪を使えるようになると真琴と約束した！！

俺「……俺の指輪の能力は“閃光加速”。音速の加速を閃光……光速の加速へと進化させる。その一閃は光に至り、光を超える」
大島「クッ……土屋、俺の負けだ……」
愛子「まさか指輪なんて物があるなんてねぇ……」

教師でもある大島先生すら知らなかった事。
なぜ真琴がそんな事を知ってるのかは別としても、今回勝てたのは真琴のおかげだな。

俺「……愛子、大島先生、また戦おう」
大島「……次は負けないぞ」
愛子「ボクだってね☆」
俺「……（コク）いい勝負だった」

雨降って地固まる、と言うやつか……？　何か忘れているような……？

俺「！！　……覗き！！」
大島「そういえばそうだな」
愛子「忘れてたね」
俺「……ここは通させてもらう」
大島「ああ、通っていいぞ」

行くぞ……理想郷（アガルタ）へ……！

雄二ＳＩＤＥ

ムッツリーニは通した。
アイツならきっと大島工藤ペアを打ち破ってくれるだろう。
だが問題は……

高橋「土屋君は逃がしましたが、あなたたちは通しませんよ？」
俺「上等じゃねえか。力づくでも通ってやる！」
秀吉「雄二……わし等ならできると信じるのじゃ！！」
俺「おう！！当然だ！！」

この高橋先生だが、もう関係ねえ！！
全力で叩き潰すぜ！！

え？翔子はどうしたのかって？
翔子なら……

翔子「……雄二、つ、つよ…い……」

腕輪の能力で瞬殺したぞ？

俺＆秀吉「行くぜ（行くのじゃ）！！試獣召喚（サモン）！！」

高橋「！？」

Ｆクラス　坂本雄二　総合科目　３９２４点
　　木下秀吉　総合科目　２８４９点

ＶＳ

学年主任　高橋洋子　総合科目　７８９３点

高橋「君達……どうやってそんな点数を！？」

俺「俺だって伊達に神童って呼ばれてなかったんだぜ？これくらい楽勝だぜ」

秀吉「わしもじゃ。わしはみどりと一緒に居られる男になるために、勉学にも力を入れ続けてるんじゃ！！」

もしかして秀吉と名川って付き合ってるんじゃ……？

っとそんなこと気にしてる場合じゃねえな！！

俺「油断するなよ秀吉！点数でも操作技術でもあっちのほうが上だからな！！」

秀吉「了解じゃ！！」

俺の召喚獣が高橋女史の間合いに突入する。

高橋女史の武器は鞭。

つまり接近戦に持ち込んでしまえばこちらにも勝機はある！

高橋「クッ……流石坂本君ですね。こっちの特性と弱点まで分析されてますか」

俺「そうでなきゃ勝てねえからな！！」

うまく懐に潜り込んで一撃をくれてやる。

見事にクリーンヒットして高橋女子の召喚獣は一気に吹っ飛ぶ。

高橋「……距離が取れればこちらに分がありますね」

俺「しまった……！？」

俺からうまく離れたのを利用して鞭を振るってくる。

やられる……！？

秀吉「雄二！！」

俺「秀吉！？何してる！？」

秀吉「雄二を助けるのじゃぁぁ！！」

秀吉の召喚獣が俺を庇って鞭を喰らった。

秀吉が俺を庇ったんだ。

秀吉「ぐ……さすがにもたんか……」

Ｆクラス　坂本雄二　総合科目　３８４５点

木下秀吉　総合科目　０点

ＶＳ

学年主任　高橋洋子　総合科目　７０１２点

秀吉は一撃で沈んだ。

俺「秀吉!?何でだ!?俺を助けるなら隙を突いて攻撃しろよ!!」
秀吉「雄二……おぬしは忘れておらぬか……？」
俺「……？」
秀吉「わし等は仲間じゃ。仲間を助けるのは当然じゃろう？それに……雄二が居なければダメなのじゃ。高橋先生を倒すためには……」
俺「秀吉……」

俺もまた馬鹿な勘違いをしたものだ。
そうだ。俺たちは仲間だ。
仲間が助けてくれたのに、その行動を咎めるなんて俺は……

俺「すまない秀吉。助かった。あとは任せろ」
秀吉「うむ……あとは任せるのじゃ。代表」

秀吉の犠牲、無駄にはしねえ!!

俺「行くぜ!!Ｆクラスの意地、見せてやらぁ!!」
高橋「く……木下君を倒したのは逆効果でしたか……」
俺「秀吉の敵、とってやる!!うぉぉ!!」

行くぜぇ……「待ってゆーくん!」なに……!?

みどり「あたしもやるよ。秀君の敵討ちたいのは、ゆーくんだけじゃないよ」
俺「名川……よし、頼むぜ……!」

高橋「ここに来てまたですか……？名川さんは女子側のはずですが？」

みどり「そんなの関係ないです。あたしは秀君を傷つける全てのものを破壊するだけですから」

何気に怖えこと言うな……

みどり「あたしだって本気になる事あるんだよ？試獣召喚（サモン）」

幾何学模様が名川の足元に現れ、召喚獣が召喚される。

装備は姫路と同じ大剣に西洋風鎧だ。

そして……

Ｆクラス　名川みどり　総合科目　４３７４点

俺「これはまた凄い点数だな」

みどり「いくよ？ゆーくん」

俺「おう、いつでもいけるぜ？」

名川の参戦はうれしい誤算だな。

これで一気に勝率が跳ね上がるぜ。

Ｆクラス　坂本雄二　総合科目　３８４５点

名川みどり　総合科目　４３７４点

ＶＳ

学年主任　高橋洋子　総合科目　７０１２点

俺「一気に攻めるぞォォ！！」

さっきと同じように間合いを詰める。
次は一気にかたをつける！！

高橋「ッ……！　次は防御します！」

流石は高橋女子だ。
避けるのは不可能と踏んで防御してきたか！
だが無駄だ！

俺「遅え！！“自動連撃（オートナックル）”！！」
高橋「！？」

これが翔子を一撃で倒した俺の腕輪の能力だ！！

俺「オラオラオラァァ！！」
高橋「は、早い！？」

“自動連撃（オートナックル）”は俺の意志に関係なく自動操縦で対象に攻撃を加え続ける能力だ。ある程度以上のダメージを食らうか、時間がたつと止まるんだが……

俺「どうっすか！？」
高橋「これで！！」

高橋先生の鞭が俺の召喚獣の鳩尾に入る。

これで“自動連撃（オートナックル）”は止まるわけだが……

俺「名川、やれ」

みどり「おーけー、ゆーくん！！“滅亡流星（ハルマゲドン）”！！」

ここで名川の腕輪の能力を使わせてもらう！！

名川の能力が超広範囲攻撃だと言う事は前に聞いてたからな！

俺もろとも消し飛んでもらう！！

俺「ぶっとべぇーー！！」

高橋「そ、そんなッ……！？」

Ｆクラス　坂本雄二　総合科目　２点

名川みどり　総合科目　２８０５点

ＶＳ

学年主任　高橋洋子　総合科目　０点

みどり「いやったぁーーー！！！！」

俺「高橋女子を討ち取ったぞぉぉぉおおおおぉ！！！」

最後は名川においしいところを持ってかれたが、勝ちは勝ちだ！！

俺「このまま女子風呂までまっしぐらだぁーー！！」

男子『『『『おおーーーーー！！！！！！！！』』』』

高橋女史は負けた事に相当驚いてるのか、何も言ってこない。
このまま理想郷（アガルタ）までまっしぐらだ！！

みどり「あはは……秀君はあたしにまかせて？」
俺「そうだな……秀吉、お前も後からこいよ？」
秀吉「うむ、そうするのじゃ……」
みどり「だめだよ？秀君？」
俺「はは……」

とにかくもうすぐ突破だ！
行くぜ！！

みどり『ねえ秀君？』
秀吉『なんじゃ？』
みどり『今女子風呂に入ってるのはね……なんだよ？』
秀吉『！？　なぜじゃ！？』
みどり『琴君の作戦だよ。面白くなりそうだって』
秀吉『雄二とムッツリーニが危ないのじゃ……！』
みどり『その前に、琴君のとこ行こうね？』
秀吉『ぐ……すまぬ、雄二、ムッツリーニ……』

第五十五話　決戦！　ムッツリーニＶＳ愛子＆大島　そして……？（後書き）

次回、最終決戦もいよいよ終わりを迎える！！

真琴ＶＳあの人です！

さて、ここでちょっとしたお知らせです。

この強化合宿編が終わったあと、閑話集をやる予定なのですが……
オリ閑話が多すぎて原作のやつを出来なくなりそうです……（涙）
なので、原作３・５巻の中から１話だけ選んでやることにしたのですが……
『どれやろう？』ってなりまして……
投票で決めたいと思います！

『～予習編～』
『僕と暴徒とラブレター』
『俺と翔子と如月ハイランド』
『僕とプールと水着の楽園』
『僕とバイトと危険な週末』

の５つから一つ皆さんに選んでもらい、一番票の集まったものにしたいと思います！
期限は……オリ閑話が４話くらいあるのでそれが終わるまでで……

曖昧でスミマセン……

ではご意見ご感想お待ちしてます！

第五十六話　決戦！　真琴ＶＳ美春　そして……（前書き）

あはは、召喚獣は？

第五十六話　決戦！　真琴ＶＳ美春　そして……

バカテスト　家庭科

問　以下の問に答えなさい

『一般的に用いられる肉の種類を3種類挙げなさい』

吉井明久の答え

『牛肉・豚肉・鶏肉』

教師のコメント

正解ですね。吉井君は料理家事が関わると模範的な回答をする事が多いですね。

峰嶋真琴の答え

『黒毛和牛・ラム肉・フィレ』

教師のコメント

君の食卓が一般的ではありません。

吉井明久のコメント

金持ちパワー炸裂だね。

姫路瑞希の答え

『王水・濃硫酸・クロロホルム』

教師のコメント

皆さん姫路さんが台所に立たないように注意――――――いえ、絶対に立たせないでください……

真琴ＳＩＤＥ

おかしい。何かがおかしい。
オレは召喚獣バトルでアイツを倒したはずだ。
なのに……なのに……

オレ「どうして格闘技戦になってるんだァァーー！？」
美春「うるさい豚です！！さっさと美春に殺されなさい！！」
オレ「居ないからな！？じゃあ殺されますなんて言うやつ居ないからな！？」

清水はフォークをオレに向かって投げつけ、オレはそれをはじきながら蹴りなどで応戦している。
……なんで召喚獣バトルじゃないんだ？

美春「オネエサマ……オネエサマァァァ！！」
オレ「怖っ！？え！？何あれ怖い！！」
美春「キシャアアアアアア！！」
オレ「えーい、いい加減に……」

突っ込んでくる清水の移動経路を予測して回し蹴りを放つ。
放ったはいいが……

オレ「しろよ！！」
美春「きゃああ！？」

本気で蹴っちまった。

オレ「ヤベッ！？つい本気で……」

本気で蹴ったらあごが砕けてもおかしくないし、打ち所が悪いと最悪死んだかも……

オレ「おい清水！？大丈夫か！？」

かなりぶっ飛んだ上に壁に打ち付けられたんだ。
無傷では済まされない。
ちょっとした砂煙の中から清水が立ち上がる。

――――――――――――――――――――――――何事も無かったかのように。

美春「お姉さまの愛を邪魔するもの……殺します！！」
オレ「おいぃぃぃ！！今のってプロボクサーでも気ィ失うような一撃だぞ！？お前の体どうなってんだ！？」

なぜ立ってられるんだ！？
気絶してないだけでもおかしいけど！！

美春「美春は……美春は……」
オレ「……？」
美春「美春は……お姉さまが大好きで、なのになんで美春ではなくあなたみたいな豚野郎がお姉さまの隣にいるのですか……？」

？　つまりコイツはオレが居る立場に自分がいたいって事か？
……そんなのは決まってる。

オレ「お前のそれは愛情じゃない。ただ自分の感情を一方的に押し付けてるだけだ」
美春「み、美春の愛を侮辱するつもりですか……！？」

どうやら回し蹴りは効いてたみたいだ。
なんで足に来てるのかは知らねえけど。

オレ「自分が相手を好きだって一方的に押し付けて、答えさせないようにしてるだけだ」
美春「……何が言いたいんですか？」
オレ「分かってるんだろ？自分が美波に恋愛対象として見られてないってこと」
美春「そんな事無いです！お姉さまは美春を愛してくれているはずです！！」
オレ「じゃあなんで美波の話を聞かない？」
美春「！！」

これは昔のオレにも言えることだ。
何度も犯してしまった過ちだ。
ただ嫌われるのがいやだと言うだけで、今の世界を失いたくないというだけで、でも今以上の関係が欲しくて、相手の……姫路の意見なんかちっとも聞こうとしなかった。

オレ「お前は分かってんだよ。だけどそれを面と向かって言われるのが嫌で、美波に話すチャンスを与えないようにしてるだけだ」
美春「そ、そんなことは……」
オレ「美波がお前の事をどう思ってるかなんてオレには分かんねえ

よ。でも、美波はお前とも仲良くしていたいと思ってるって――
――これはそう思う」

あくまで主観だけどな、と付け足して。

美春「美春は……美春はどうすればいいのですか……？」
オレ「簡単だよ。ただ、美波と面と向かって話し合えばいい。少なくとも、お前ならできるだろ」

過去のオレのような過ちを繰り返させないためにも、そして、清水は美波のことを本気で好きなんだ（恋愛対象としてみるのはどうかと思うが）。
なら、美波のそばにいたいと思うなんて当然じゃないか。
その気持ちは、尊重してやりたい。

美波「真琴！！西村先生連れてき……た……？」
鉄人「……なぜ壁が壊れていてこんなにも部屋が荒れているのか聞かせてもらおうか峰嶋」
オレ「あーっと……ちょっと待ってください」

と言ってポケットからＣＣＤカメラと小型集音マイク。

オレ「清水。これはお前が仕掛けたもので間違いないな？」
美春「……（コク）美春がやりました……」
鉄人「どういうことだ……？」
オレ「簡単な事ですよ。今回の覗きの最初の犯人は、清水――
――女子の仕業だったって事です」

おそらくこれも行き過ぎた愛情からくるものだろう。
間違った方法をとらなければ、素晴らしい物なのに。

鉄人「そうか……。清水、詳しい話を聞かせてもらうぞ」
美春「はい……」
オレ「（おい清水）」
美春「（……？）」
オレ「（オレが言えた事じゃないけどさ、頑張れよ？オレはお前の事、悪い奴じゃないと思ってるからさ）」
美春「（！？／／／／／／）」

あれ？なんか今清水の顔が赤かったような……？

鉄人「いくぞ清水」
美春「あ……あの、少し待ってください」
鉄人「なんだ？」

清水は鉄人を引き止めると。こっちを向いた。

美春「あの……これからは美春の事を『美春』と呼んで貰えませんか？美春も『お兄さま』と呼びたいのですが……」
オレ「あ、ああ。いいけど？……ん？お兄さま……？」
美春「はい。では行きましょう。西村先生」
鉄人「もういいのか？」
美春「はい、もう十分ですから」

……あれ？
なんか忘れてるような……

オレ「鉄人、なんか忘れてない？」
鉄人「西村先生と呼べ！……忘れている事……？」

なんだろう？
なにか大事な事を忘れているような……？

『『『『『『割りに合わねぇぇーーーーー！！！』』』』』』

その場にいた４人「あ……」

覗き、成功しちゃったんだ……

明久と姫路も戻ってきて打ち上げ――――――

オレ「うまく行ったけど、なんかこう釈然としないものが……」
明久「そう？雄二もうまく引っかかったみたいだし、全部オッケーなんじゃない？」
美波「なにが釈然としないのよ？（釈然としないと言えば、美春が真琴のことを『お兄さま』と読んでた事もだけど……）」
瑞希「でも確かになにか見落としてるって言うか……」
みどり「そうだねー」
秀吉「それはみどりが今までの会話を盗み聞きしてた事ではないのじゃろうか？」

うーん……秀吉の言うとおりかもなって……秀吉？

オレ「……何でここに居る？」
みどり「秀君には全部話して助けちゃったんだ☆」
秀吉「危うくわしも停学処分を受けるところじゃった……」

確かにアレを見た後で停学はきついよな……

オレ「まあ秀吉が無傷な事は別にいいんだが……みどりだよな。問題は……」
みどり「えへへ～分かってるぅ～。それじゃ交渉と行こう？これ、今までの作戦会議全てを録音したボイスレコーダー。これを先生達に渡されたくなかったら……」
オレ「やっぱそうきたか……」
明久「ちょっ、名川さん！？」
美波「そんなことされたら……」

瑞希「私達も停学になっちゃいます！！」

むしろ停学で済めば儲けものだろ。
最悪退学になりかねない。

みどり「まあまあ。で、これを返してあげるから……」
オレ「何を要求するつもりだ？」
みどり「あたしと秀君を琴君たち４人のグループに入れて欲しいの」

……は？

オレ「そんなことでいいのか……？」
みどり「うん♪」
秀吉「わしからも頼むのじゃ」
瑞希「べ、別に私達はグループってわけじゃないですけど……」
オレ「別にいいだろ。みどりと秀吉も交えた仲良し６人のグループってことで」

断る理由が無いし、断らなきゃオレらの身が危ないし。

みどり「やった！じゃあみんなこれからよろしくね♪」
秀吉「改めてよろしくなのじゃ」
瑞希「こちらこそよろしくお願いしますね」
みどり「へっへ～、じゃあルール決めようか？」
５人「ルール？」

なんだそりゃ？
いや、ルールって言葉は分かるよ？

みどり「今からあたし達は、お互いを下の名前で呼ぶこと！」

5人「はぁぁあああぁぁああ！？」

な、何だそりゃ！？

みどり「例えば、姫ちゃんは瑞希でー、みなみんは美波でー……」

秀吉「み、みどりよ……それつまりわしも姫路や島田の事を『瑞希』とか『美波』と呼ばねばならぬということなのじゃろうか……？」

みどり「そゆこと☆」

いや、そゆこと☆じゃねえだろ……

みどり「あたしもいまから、瑞希ちゃんとか明久くんとか呼ぶね？」

明&瑞「えええ！？」

オレ「もうしらねえ……勝手にしてくれ……」

みどり「へへ、じゃあよろしくね、琴君♪」

オレ「そこだけは変えねえのな……」

第五十六話　決戦！　真琴ＶＳ美春　そして……（後書き）

次回、強化合宿編最終話です！

第五十七話　戦いの後（前書き）

強化合宿ラストエピソードです！
このあと座談会をして、閑話集の予定です！

今回はバカテストお休みですよ～♪

第五十七話　戦いの後

処分通知

文月学園第二学年

吉井明久、峰嶋真琴、木下秀吉を除く総勢１４６名及びＤクラス清水美春。

上記の者たち全員を一週間の停学処分とし、清水美春を観察処分者に認定する。

また、木下秀吉、名川みどりの２名を二日間の停学処分とする。

ついムラっときてやった。
今は心の底から後悔している。

～とある生徒の反省文より抜粋～

真琴ＳＩＤＥ

雄二率いる男子軍団との最終決戦の翌朝。
いまさら男子部屋に戻る気も無いので美波と同じ布団で寝ていた。

オレ「……」
美波「……（すやすや）」
オレ「……可愛い／／／」

今すぐお持ち帰りしたい。
美波と身体を寄せ合って寝てるだけあって美波の温かさが肌を伝わってくる。
とってもあったかい美波の体と比べてオレの足のほうが冷たくて冷てェェ！？

オレ「冷てぇぇぇ！！」
美波「な、なに！？」
明久「どうしたの！？敵襲！？」
瑞希「落ち着いてください明久君！強盗を刺激しちゃダメです！！」
美波「まずは瑞希が落ち着きなさい！！」
オレの叫び声でこの空間は混沌（カオス）と化した。
オレ「なんだ！？何故に足元がこれ以上ないくらい冷たいんだ！？」
宗太「えへへ～、これだよ」
何故宗太がここに居る！？
いや、それは恐らく腕輪の修理が終わったからだろう。
では何故こんなことをしてるのか？
決まっている。こいつは……
オレ「おい。茶目っ気たっぷりな笑顔でオレの足に保冷剤を押し付けるな」
こいつは想像をはるかに超えて母さん似だからだ。
宗太「あはは、ばれちゃった？母さんが琴兄を起こすにはこれが一番って言ってたよ？」
美波「アンタの家族って危ない人ばかりね……」
それに関しては同意する。
お仕置きと称して息子をアマゾンの奥地に放り込む父親に息子への体罰や拷問を楽しむ母親、その母親の言うことを疑うことなく真に受ける弟。
よくオレが今まで生きてこれたなと疑問に思うことも少なく無い。

明久「真琴、足大丈夫？」
オレ「まあなんとかな……」
瑞希「宗太君、そういう悪戯はしちゃだめですよ？」
宗太「……分かったよ」
オレ「そのやり取りをこの目で１０００回以上見てるオレが居るんだが？」
美波「ほら、早く真琴に謝りなさい」
宗太「琴兄、ごめんね……？」
オレ「お前の“ごめんね”をこの耳で２０００回以上聞いているオレが居るんだが？」

会ったのは中卒ぶりくらいだったけど、それよりも前からあの悪影響の強い母親のせいで宗太の悪戯は時々オレを殺しそうになる。
本当にオレに平穏は訪れないんだろうか？

オレ「まあ宗太のこれは今に始まったことじゃないし、別に怒ったりしないけどな」
宗太「えへへ。ありがと、琴兄」
瑞希「真琴君、いいお兄さんですね」
オレ「まて姫路。そういう言い方をするとコイツは……」
宗太「いいお兄さんジュース買って欲しい！」
オレ「オレより金持ちの癖にオレにねだって来るから辞めてくれ……」

なぜオレよりも金持ちの癖にオレに物をねだってくるんだ？
まったく持って分からない。

みどり「琴君、ルール、忘れてないよね？」
オレ「思い出した。思い出したからそのカッターを喉元から離して

くれ。そしてお前は何故ここに居る！？」
みどり「ルールを破る者あるところ、あたしあり。だよ♪」
オレ「だよ♪じゃねえ！！」

オレの周りに常識人は居ないのか！？

秀吉「ぬぅ……朝から騒がしいの。姫路に島田おはよ……瑞希に美波……」

秀吉を見るみどりの目が怖い。
どうしてそこまで名前呼びにこだわるんだ？

秀吉「わしが居ることには突っ込まないのじゃな……」
オレ「みどりが居る時点で想定可能だ」

そんな想像が出来るオレが自分で怖い。

宗太「あはは、みんな元気だなぁ」
みどり「あれ？宗君じゃん？どうしてここにいるの？」
オレ「ここまで忍び込んできたんだと」
みどり「ああ、なるほど」
瑞希「その説明で納得できるんですか……？」

宗太のことを良く知る人物ならば十分すぎるくらいだ。

明久「……そろそろ朝食の時間終わりそうなんだけど？」
自&美&瑞&秀&み「それを早く言え（いいなさい）（言ってください）（言って）！！」

Fクラスはカオスを生み出す天才だと言うことが良く分かった。

明久ＳＩＤＥ

僕「やあ雄二、おはよう（ニヤニヤ）」
真琴「おっす、おはようさん（ニヤニヤ）」
雄二「お前ら目を食いしばれ」

目を食いしばるってどうやるんだろうか。

康太「……思い出させないで欲しい」
真琴「覗きなんて企むからだろ。ちっとは反省しろ」
美波「でも自業自得とはいえ、さすがにちょっと可哀想ね……」

ババアの裸だもんね。
同情したくなる島田ｓ……美波の気持ちも分かる。

真琴「美波の裸を見たら殺す。美波の裸を見ようとしたら地獄を見せる」
雄二「あれは……本当に地獄だッ……！」
康太「……！！（ケポケポケポ）」

あ、ムッツリーニ吐いた。
そんなにきつかったのか……
ムッツリーニの想像力のせいだろうけど。

僕「でも一週間学校が休みだと考えれば……」
瑞希「停学中は課題が沢山出るはずですけど……」
僕「考えられないよね……」

フォロー失敗……
まったくもう。仕方ないな……

僕「まったく、今回ばかりは雄二たちに同情……」
雄二「明久……お前はいい奴だな……」
康太「……流石明久」
僕「……するわけないだろ」
雄二「耳を食いしばれ」
康太「……覚悟」

瑞希の裸を見ようとする奴に同情の余地は無い。
しかし耳を食いしばるにはどうすればいいのか気になるところだ。

瑞希「でっ、でも、坂本君たちも反省してるようですし……」
美波「瑞希も甘いわね。ここは一発ガツンと言ってやるのよ」
真琴「はは、美波らしいな。ところで秀吉とみどりが静かなんだが……」
僕「あ、二人ならそこで……」

真琴は僕が指差すほうを見る。
そこに居るのは二人の世界にトリップしてる秀吉と名川ｓ……みどりさん（ちゃん？）。

真琴「……平和だ」
僕「……そうだね」

雄二『平和なわけあるか！？おい翔子！お前はなぜ俺の頭を掴んでむぎゃあああ！！』
翔子『……雄二、浮気は許さない』
愛子『ムッツリーニ君……えいっ（ピラ）』
康太『……卑怯なっ！？（ブシャアアア）』

……平和だなぁ。

鉄人「お前達は何をやっているんだ……」
瑞希「あ、西村先生。おはようございます」
美波「おはようございます」
鉄人「ああ、おはよう」
僕「おはよう、てっつん」

真琴「おはよう、てっちゃん」
鉄人「吉井、歯を食いしばれ」

理不尽だ。

鉄人「まったくお前達は……吉井、峰嶋兄弟、姫路に島田。学園長がお呼びだ」
僕＆真琴＆宗太「ババアが？」
鉄人「３秒以内に行け。さもなくば補習だ」

やっぱ理不尽だ。

僕「瑞希！行こう！」
真琴「美波行くぞ！」
瑞希＆美波「え？え？」

補習は勘弁願いたい。
僕たちは臨時学園町室へと急いだ。

僕「失礼します。ババア」
真琴「邪魔するぞ。クソババア」
宗太「お邪魔します。クソババア長」
ババア「本当に失礼なクソガキどもさね！！」
瑞希＆美波「ごめんなさい、ごめんなさい」

このやり取り、デジャヴ？

真琴「んなことといいから早く用件言えよ。こっちは支度で忙しいんだから」
ババア「もうアンタたちに礼儀とか失礼とかいうのはやめるさね……」
僕「さっさとお願いします。クソババア長」
ババア「つっこまない……つっこまない……」
宗太「お願いします。妖怪ババア長☆」
ババア「語尾に☆をつけられたのは初めてさね！！」
真琴「マジに早くしてくれ……」

そこ僕も同感。

ババア「ハァ……まあいいさね。用件ってのは腕輪のことさね。そこのチビガキには驚かされたよ。まさかこんな短時間で仕上げるとはね……」
真琴「宗太にしては時間が掛かったな？」
宗太「うん。結構大変だったよ？」

ババアが何日も頭を悩ませていた腕輪の修理を４日で終わらせたなんておかしい。
もはやこの兄弟も人外だ。

ババア「金色の腕輪と白銀の腕輪、二つの腕輪の不具合は完全に直ってるさね。誰がどんな点数で使っても大丈夫だよ」
真琴「明久も美波も最近成績がうなぎのぼりだからな。既にＢクラス上位からＡクラス下位くらいの点数だし、このタイミングで腕輪の修理が出来たことはラッキーだったな」
僕「あはは、褒めてくれてありがと」
美波「そう言ってもらえるとうれしいわ／／／／／」
真琴「事実そうだろ？」

Ｆクラス　吉井明久　総合科目　２１４８点
Ｆクラス　島田美波　総合科目　２０９４点

瑞希「でも、明久君も美波ちゃんも凄く頑張ってると思いますよ？」
ババア「……もういいかい？話はそれだけさね。さっさと戻りな」

呼び出しておいてその態度か。
本当にムカつくババアだ。

瑞希「では、失礼します」
美波「失礼しました」
宗太「また遊びに来るね」
僕「また来ますババア」
真琴「次あうときはあの世……いや、来世……？」
ババア「最後の奴！ちょっと残りな！！」
真琴「遠慮する。こんなババアと一緒にいるなんて美波抜きじゃ耐えられない」

さりげない真琴の惚気。
いやあ、仲良いねえ。

ババア「ハァ……もういいさね。出て行きな」
5人「失礼しました」
ババア「……本当に失礼さね」

やっとババア室から出られた……。

美波「帰りはどうするの？」
僕「帰りも真琴が呼んだバス？」
真琴「いや、帰りは流石に無理だったんでな。帰りは電車とかだろ」
宗太「わーい♪電車～♪」
瑞希「宗太君、はしゃいでますね」
真琴「本当にガキっぽい……」
僕「それが可愛いんじゃないの？それより二日間は僕ら４人だけだよね？」
真琴「そうだな。しばらく静かに過ごせる」
瑞希「あはは……」

平和なＦクラスか……
想像できないなぁ……

明久「とりあえずもうすぐ出発だから支度しよう？」
３人「おう（ええ）（はい♪）」

ちなみにこの後僕らは平和なFクラスなど存在しないと思い知らされることとなる……

第五十七話　戦いの後（後書き）

次回は座談会！いろいろな記念だッ！！

理由は色々あるけどとりあえず座談会！（前書き）

メタ発言・パロディネタが若干（かなり？）含まれます。
お気をつけください。

※この回は読まなくても本編とまったく関係ないので大丈夫ですよ。

理由は色々あるけどとりあえず座談会！

黒炉「お気に入り件数７０件突破他記念！」

明久「ついでに言うと強化合宿編終了記念！」

美波「座談会～！！」

黒＆明「イェ～～！！」

真琴「なんだこのテンションは……」

瑞希「あはは……」

真琴「今回の座談会はお気に入り件数が７０件突破のほか、ＰＶ１２万アクセス、ユニーク１万アクセス突破、本編５０話突破、ｅｔｃ……などの若干「え？今更？」的な理由が含まれてたり、微妙な数字の記念でお送りすることになるぞ」

黒炉「本当はもっと早くやる予定だったんだけど、区切りがいいところでやったほうがいいかな？って思って」

瑞希「それでこのタイミングだったんですね」

明久「で、具体的には何するの？」

黒炉「さあ？とりあえずゲストを４名ほど呼んでるからその人たちにでも聞いてみたら？」

美波「誰を呼んだのよ？」

黒炉「それはバカテスファンなら知らない人は居ないあの４人です！」

真琴「バカテスファンなら大抵のキャラは知ってると思うのはオレだけか……？」

黒炉「では登場していただきましょう！どうぞ！」

明久「綺麗にスルーされたよ？」

真琴「ついていけねえ……」

瑞希「あはは……」

バン！　（根本登場）

バン！　（小山登場）

バン！　（中林登場）

バン！　（美春登場）

真琴「人選ミス率７５％だな」

根本「その言葉の意味を聞かせてもらおうか？」

真琴「黙れクズ代表。なんならお前の数々の悪行を教師陣にチクってもいいぞ？」

根本「な！？　おのれ卑怯な！！」

明久「根本君にだけは言われたくないよね」

美波「まったくね」

瑞希「本当ですね」

真琴「はは。瑞希にまで言われたら本当におしまいだな」

根本「もういいさ！こうなったらとことんクズに成り下がってやる！！」

ダッ！　（根本逃亡）

明久「あ。逃げた」

黒炉「ざまぁｗｗｗ」

真琴「お前根本を苛めたくて呼んだだけだろ……」

黒炉「さて、自分の不始末は自分で何とかしなきゃね（ポチ）」

パカ×２　（ヒステリー代表と筋肉代表の足元が落とし穴に）

ヒュゥゥゥ×２　（ヒステリーと筋肉が落ちる）

「覚えてなさいよぉぉぉ！？」　（ヒス＆筋の叫び声）

真琴「容赦ねぇ……」

黒炉「まああの二人を何で呼んだか自分ですら分かってないからね」

明久「苛めるつもりすらなかったの！？」

美波「鬼ね……」

瑞希「あはは……」

美春「皆さん美春の事を完全に忘れてますね！？」

黒炉「……美春ってアウトかな？」

真琴「いやいいだろ。―《根本》クズ代表と《小山》ヒステリー代表と中林（筋肉代表）に比べればまともだからな」

美波「今すぐ退場させなさい！！」

美春「お兄さま！！美春はたとえ作者の力で退けられたとしても一生お兄さまを愛していますわ！！」

瑞希「あれ？清水さんって男の人嫌いで有名じゃなかったですか？」

真琴「どういうわけか、強化合宿の後からオレについてくるようになっちまって……」

明&瑞&波&黒　（気づいてないのか!?）

美春「お兄さま～～!!」

真琴「ル〇ンダイブはやめろ」

美波「ちょっと美春!?真琴から離れなさいよ!!」

美春「いくらお姉さまの頼みと言えど、これだけは譲れません!!」

真琴「オレの意見は尊重されないのか!?美春、お前は何も成長してないぞ!?」

美春「そんなことありません!!お兄さまの為に一生懸命バストサイズを大きくさせてます!!」

真琴「成長の意味が違ぇんだよぉぉ!!」

美波「真琴!!アンタ美春に手を出したの!?」

真琴「誤解だぁぁ!!」

～しばらくお待ちください～

真琴「ひ、酷い目に会った……」

黒炉「それじゃあそろそろ本題に入ろうか」

真琴「その前にオレへの　（主に人選ミスからくる）謝罪はないのか！？」

黒炉「ないね。で、次は閑話集で、その次がオリストーリーをやる予定なんだけど……」

真琴「覚悟しろやテメェ」

明久「まあまあ、落ち着いて」

瑞希「悪気があったわけじゃないですし……」

真＆明　（それは違う……！絶対に違う……！！）

黒炉「内容はアニメオリジナルの『暴走と迷宮と召喚獣補完計画』のアレンジ版だね」

真琴「裏情報によると、オレや明久が召喚獣になるみたいだな」

明久「は！？」

黒炉「情報早……」

瑞希「きっと凄く可愛いですよね……／／／」

美波「真琴が召喚獣に……楽しみだわ……／／／」

美春「お兄さま……キャッ／／／／／／」

真琴「お前ら趣旨が間違ってるからな!?それから美春は「キャッ／／／／／／」じゃない!!」

黒炉「観察処分者コンビとしての実力を見せてもらおうｗｗｗ」

真琴「コイツまた楽しんでやがる」

明久「観察処分者っていうなら清水さんもそうじゃないの?」

美春「美春はやりますわ!!見ててくださいお兄さま!!」

黒炉「頑張れ!!本編で活躍できるぞ!!」

真琴「……明久?」

明久「ごめん……凄く反省してる」

瑞希「と、とりあえず閑話集が先に入りますから大丈夫ですよ?」

美波「そ、そうよね」

真琴「ははは……ありがとよ……」

明&波&瑞　（真っ白に燃え尽きてるーー！！？）

黒炉「閑話集で『こんな話やって欲しい』みたいなのがあったらぜひ教えてください！可能な限りお答えします！」

美春「それではさよ～なら～」

黒炉「おいしいとこもってかれた！？」

明久「強引に閉めた君にいえることじゃないと思うけど……？」

理由は色々あるけどとりあえず座談会！（後書き）

次回は真琴と美波の出会いの物語です！

閑話　ウチとマコトと1年前のあの日。（前書き）

今回は真琴と美波の出会いの話です！
『』内の会話はドイツ語ですよ。

閑話　ウチとマコトと1年前のあの日。

バカテスト　英語

問　以下の問に答えなさい。

『時に食用できる地下茎を持つ、英語で『ｌｉｌｙ』という植物を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『ユリ』

教師のコメント

正解です。流石ですね、姫路さん。地下茎は鱗茎と呼ばれ、養分を蓄えて熱くなった葉で、ネギやラッキョウなども鱗茎に含まれます。

峰嶋真琴の答え

『ひまわり（種を希望）』

教師のコメント

君はハ○太郎ですか。

吉井明久の答え

『山芋！　ジャガイモ！　サツマイモ！』

教師のコメント

『食用』以外にも注意を向けてください。

美波ＳＩＤＥ

強化合宿が終了して週明け……
ウチと真琴、瑞希とアキ以外のFクラス全員が停学処分を受けていた。

真琴「美波と二人っきりで昼飯は久しぶりだな」
ウチ「そうね」

時は昼休み。
場所は中庭。
アキと瑞希は二人で屋上でお昼にするって言ってたから、ウチらも見習って（？）中庭でお昼に。
二人の邪魔もしたくないしね♪

ウチ「この間の約束よ。お弁当作ってきたわよ」
真琴「お、美味そう♪」

今日は張り切って4時起きしたんだからね。
真琴も喜んでくれてるみたい。

真琴「いっただきまーす。……美味いっ！」
ウチ「ほんと？よかったぁ……」
真琴「美波の作ったモンだったら何でも美味いけどな」
ウチ「／／／／／／」

恥ずかしいを真顔で言ってくるんだから……／／／／／／

真琴「このエビフライも美味ぇ！」

真琴はおいしそうに食べてくれてる。
本当にこういうときは子供みたいな顔するんだから……？

ウチ「ねえ真琴、覚えてる？」
真琴「覚えてる」
ウチ「即答ね……」
真琴「伊達に完全記憶能力者やってないからな」

だとしても即答するかしら普通……？

ウチ「ウチが言ってるのはウチと真琴が初めて会った時の事よ」
真琴「覚えてたのか？」
ウチ「ええ。と言っても思い出したのは最近だけどね」

ウチと真琴が出会ったのは、今から1年と少し前……

『美波、頼めるかい？』

『うん、大丈夫だよ、パパ』

『それじゃあ頼むよ。えっと必要なものは――――』

どうして簡単に引き受けてしまったんだろう…

ワタシ「ミネアル、オーアー、アマゴ、くだサイ」

店員「えっと、もう一回言ってもらえます？」

まともに日本語の発音が出来ないのに、お使いなんて出来るわけないじゃない。

しかも――――

Die Sache, die Sie will, es zu kaufen

・Mineralisches Wasser

・Ｅｉｎ　Ｅｉ
・Ｓｏｊａｓｏ？ｅ

全部ドイツ語だからお店の人にも分からないなんて……

【ちなみに日本語訳は、
買ってきて欲しいもの
・ミネラルウォーター
・卵
・醤油
ですよ】

ワタシ「エッと――――アマゴと……」
店員「えっと、アナゴ……？」

お店の人が何か言ってるけどうまく伝わってないみたいだ。
やっぱりドイツで暮らしてたほうが良かったかも……

入学早々バカで変態な奴に馬鹿にされるし高校生になってもまともなお使いも出来ないし、友達だって全然できないし……

ワタシ「モウ、イヤ……」
店員「わ！？ど、どうしたんですか！？」

こらえたかったけど涙が出てきた。

こんなところで泣いたらお店に迷惑が掛かっちゃうのに……

??「どうかしたんですか?」

店員「あ、それが、こちらのお客様が急に泣き出してしまいまして……」

??「何したんですか?場合によっては警察呼びますよ?」

店員「違いますって!!」

??「じゃあ何で泣いてるんですか!?」

店員「私にも分からないから困ってるんです!」

お店の人と誰かが口論してる……

伏せていた顔を上げるとそこにいたのは伸ばした髪を後ろで一つにまとめた男の子だった。

少年「一体何したんですか!?」

店員「何もしてないですって!!」

少年「何もしてないのにいきなり泣き出す訳ないじゃないですか!!」

な、なんかドンドン険悪な雰囲気になってるわ……

止めなきゃ……

ワタシ「ア、アの、ワタシハダイジョウブですカラ……」

少年「? 訊りがある……」

ワタシ「???」

少年「……Ａｒｅ ｙｏｕ ａ ｒｅｔｕｒｎｅｅ ｓｔｕｄｅｎｔ? (あなたは帰国子女ですか?)」

え、英語!?

しかもすっごく綺麗な発音!!でもなんて言ってるか分からない……

ワタシ「ワ、ワカリマセン」
少年「……Ｅｓｔ－ｃｅ　ｑｕｅ　ｖｏｕｓ　ｐｏｕｖｅｚ　ｐａｒｌｅｒ　ｆｒａｎ？ａｉｓ？（あなたはフランス語が話せますか？）」
今度はどこの国の言葉かも分からない……
ワタシ「ワカリマセン……」
そう言うと男の子（と言うには可愛いけど）はまた思案顔になる。
でもなんだかドイツ語が出てきそうな気が……
少年「？？？　？？　？　？？？？？　（韓国語しゃべれますか？）」
……どうしてそこで韓国語が出てくるのかしら？
少年「？是要是中文是不是能？？（それとも中国語ならしゃべれますか？）」
その次は中国語！？
ドンドン遠ざかってるわ！！
ていうか……
店員「き、君、一体何ヶ国語喋れるの……？」
少年「８ヶ国語くらいですけど？」
店員「君凄いね……」
あ、ドイツ語でこっちから話しかければ……

ワタシ「Ｉｃｈ　ｂｉｎ　ｒｅｔｕｒｎｅｅ－Ｋｉｎｄｅｒ　ｖｏｎ　Ｄｅｕｔｓｃｈｌａｎｄ．Ｉｃｈ　ｋａｎｎ　Ｄｅｕｔｓｃｈ　ｓｐｒｅｃｈｅｎ（ワタシはドイツからの帰国子女です。ドイツ語なら喋れます）」

少年「Ｗａｒ　ｅｓ　ｄｅｕｔｓｃｈ?Ｓｏ，　ｗａｒｕｍ　Ｓｉｅ　ｗｅｉｎｔｅｎ?（ドイツ語でしたか。それで、どうして泣いていたんですか?）」

ワタシ「Ｏｂｗｏｈｌ　ｉｃｈ　ｅｓ　ｂｅｎｕｔｚｅ　ｕｎｄ　ｅｓ　ｍａｃｈｔｅ，　ｖｅｒｓｔｅｈｅｎ　Ｓｉｅ　Ｊａｐａｎｉｓｃｈ　ｎｉｃｈｔ（おつかいしてたんですけど、日本語が分からなくて……）」

そう言ってワタシはお使いの紙を彼に見せる。
それを見ると彼は満足そうな顔をした。

少年「どうやら彼女は帰国子女で日本語が分からなかったみたいです」
店員「それでですか……」
少年「先ほどはすいませんでした」
店員「いえいえ、大丈夫ですよ」

男の子はお店の人と少し話すとどこかに言ってしまった。
お店の人も言ってしまうし、根気良く探さないといけないのかな……
トボトボしながらワタシは必要なものを探し始める。

※ここから先の会話は全てドイツ語です。

全然見つからない……どうしよう……

少年『あ、ここにいたのか』

ワタシ『？』

後ろから声がしたので振り返るとさっきの男の子がいました。

ワタシ『なんですか？ワタシはあなたに用は無いんですけど』

少年『そう言うなって。ホラ』

そう言ってワタシに見せてきたのは卵にお醤油にミネラルウォーター。

これって頼まれてたお使いの……！

少年『これ、探してたんだろ？簡単に見つかってよかったぜ』

ワタシ『あ、ありがとう……』

少年『いいって。それよか早く買ってこいよ』

ワタシ『そ、そうするわね』

なんであの人はワタシにこんなに親切なんだろう……？

そんな風に思いながら男の子に渡されたものを買いにレジへと走った。

少年『よっ。買えたみたいだな』
ワタシ『あ、さっきはありがとうございました』
少年『いやいや、どうってことねえよ』

こうやってまじまじと近くで見ると……

少年『な、なんだよ……？』
ワタシ『……本当に男の子？』
少年『キレるぞ』

男の子から黒い何かが出てきた。

ワタシ『だってそんな髪型だし顔つきも可愛いし身体も細いしその眼鏡も女の子っぽさが出てるし……』
少年『オレの外見的特徴全てにおいてオレを女扱いしたな！？』
ワタシ『可愛いわよ？』
少年『うれしくなーい！！』

怒ってる顔も可愛いわ……
もうお持ち帰りしちゃいたいくらいに……

少年『なんだろうな？今地の文がムチャクチャ腹立つ気がしたんだけど？』
ワタシ『キ、キノセイヨ？』
少年『まあいいか……』

なんて感してるのかしら……？
地の文から察するなんて……！！

少年『メタ発言は控えめにしないとな。んじゃオレは行くから』

ワタシ『あ……待って！』
少年『ん？なんか用か？』
ワタシ『お礼もしたいし、家に来てよ！』
少年『えー……オレ忙しいんだけど……』

人の好意をあからさまに嫌な顔で断ろうとするこの人はどんな神経してるんだろう？

ワタシ『そ、そう言わずに！！』
少年『うーん……んじゃその辺の自販機でコーヒーでも奢ってよ』
ワタシ『でもそれじゃ……』
少年『それくらいでいいって。別に大したことしてないし』
ワタシ『……じゃあ、その辺の自販機のコーヒーでも』

ワタシ『下見？』
少年『そ。来年転校して来るんだ。その下見』
ワタシ『この辺に住んでるんじゃないの？』
少年『いや、もっとずっと北のほう。ここよりも寒いところだよ』

彼が言うにはワタシの通う文月学園の『試験召喚システム』に興味があるとか……
興味だけで転校なんて普通じゃないわよ……

ワタシ『親の都合とかじゃないの……？』
少年『親？んなもんの都合に振り回されるなんざ死んでもゴメンだな』
ワタシ『……仲悪いの？』
少年『ああ。一昨日も危うく足を撃ち抜かれるところだった』

……あなたはマフィアのボスの息子か何かですか？
本気でそうツッコミたくなった。

ワタシ『それじゃもう帰っちゃうの？』
少年『いや、しばらくはこっちにいるつもりだけど？一週間くらいかな』
ワタシ『じゃあ、また会えるの？』
少年『もしかしたらな』

そう言うと彼は立ち上がった。

少年『コーヒーご馳走さん。んじゃ今度こそさよならだな』
ワタシ『あ、あと一つ！！』
少年『……今度は何？』

そんな嫌そうな顔しなくても……

ワタシ『名前、名前教えて！』
少年『名前？……オレはマコトだ』
ワタシ『ワ、ワタシはミナミ！マコト！また会おうね！！』

ワタシはマコトに向かって手を振る。

マコト『おー、また会えたら、な』

マコトは手を小さく振って返してくれた。
ゆっくり歩いて、マコトはいなくなってしまった。

ワタシ『……こういうの、一目惚れって言うのかしら？』

小さく、誰にも聞こえないようにワタシは呟いた。

真琴「そういやそうだったな」
ウチ「実家が北海道で、真琴という名前。もしかしたらって思ってたけど真琴が清涼祭の出し物決めのときに色んな言葉を喋れるってことが分かったときに予想は確信になったわ」
真琴「そりゃ８ヶ国語喋れるマコトさんはそういないだろうからな……」

今の真琴は髪を切って短髪にしている。ついでに眼鏡もかけてない。
髪型と眼鏡だけでここまで印象が変わるものなのね……

ウチ「真琴はウチを見たときに気づいた？」
真琴「気づいたよ。でもオレのことは忘れてるだろうと思ってた」
ウチ「否定できないわ……」

でもその後で思い出せた。
自分の初恋の相手が自分のクラスに転校してくれた。

ウチ「でも……ウチは真琴のこと、あの頃から好きよ？」
真琴「そんな前からだったのか？」
ウチ「うん……。今は1年前よりももっと好き」
真琴「はは、ありがと」

そう言って真琴の腕に抱きつく。
男子は停学中で女子もおとなしいから今は誰も来ない。

真琴「なぁ美波」
ウチ「何？」
真琴「前のオレと今のオレとどっちの髪形が好きだった？」
ウチ「……前かな？でも今の真琴も好き♪」
真琴「そ、そっか／／／／／／」
ウチ「？」

真琴は少し顔を赤らめる。
小さな声で「エクステ」と聞こえた気がしたのは気のせいかしら？

真琴「さて、そろそろ時間だ。戻るか」

ウチ「そうね。それじゃ……」
真琴「!?」

完全に油断してたがら空きの真琴に一気に近づいてキスをする。

真琴「……／／／／／／」
ウチ「……ぷはっ、ふふ、行きましょ？」
真琴「お、おお」

ちょっと赤くなった真琴も可愛くてかっこよかった。

閑話　ウチとマコトと1年前のあの日。（後書き）

さて、次はどんな物語にしようかな……？
感想お待ちしております！

閑話2-1　天才の出会い　序章（前書き）

しばらくは真琴、明久、瑞希の小学校時代のお話です。

閑話2-1　天才の出会い　序章

バカテスト　家庭科

問　以下の問に答えなさい。

『家計の消費支出の中で食費が占める割合をなんと言うか答えなさい』

姫路瑞希の答え

『エンゲル指数』

正解です。流石ですね姫路さん。
一般にエンゲル指数が高いほど生活水準は低いとされています。

吉井明久の答え

『今週は塩と水だけです！』

教師のコメント

食事の内訳は聞いてません。

峰嶋真琴の答え

『今週は贅沢にすき焼きです』

教師のコメント

自慢のつもりですか？

真琴ＳＩＤＥ

強化合宿から４日ほどたったある日。
みどりと秀吉の停学もあけてＦクラスの生徒は６人に増えた。
そんなある日の昼休み……

オレ「……」
明久「……」
瑞希「……」
美波「……」
秀吉「……」
みどり「……」

オレたちはお互いにお互いを睨み合い、来るべき決戦のときに向けて策を練っていた。

オレ「行くぞ……準備はいいか……？」
明久「……いつでも来い！」
瑞希「今日は負けませんからね……！」
美波「絶対勝つんだから！」
秀吉「負けぬのじゃ……！」
みどり「いざ尋常に……勝負！」

この戦い、負けられないものがここにある。

オレ「行くぞぉっ！！」
５人「おう！！」

大切なものをかけた――――――

全員「最初はグー！！じゃんけんポイ！！」

じゃんけんという戦いが。

オレ→チョキ
明久→グー
瑞希→グー
美波→グー
秀吉→グー
みどり→グー

惨敗だった。

オレ「クソッ……！オレの負けか…」
明久「やったー！！初めて真琴に勝ったぞ！！」
秀吉「今日こそは奢ってもらうのじゃ！！」

手放しで喜んでるバカ二人がムカつく。

美波「じゃあウチはジンジャーエールね」
瑞希「紅茶をお願いしますね」
みどり「コーラ買ってきて～♪」
明久「レモンスカッシュよろしく！」
秀吉「わしは緑茶をお願いするのじゃ」

それぞれが自分の飲みたいものを口にする。
じゃんけんで負けたものは全員に奢る。
それがルールだ。

オレ「しゃあねえ。行ってくるか」

明久「いってらっしゃ～い♪」
オレ「お前のレモンスカッシュは２００回ほど振っておいてやるから安心しろ」
明久「ハァ！？」

笑顔で送り出されるというのは心底ムカつくな。
明久が炭酸を注文してきたのがせめてもの救いか。

オレ「んじゃ行ってくる」
秀吉「明久はわしが抑えておくのじゃ」
明久「離して秀吉！！アイツが僕の飲み物をこれ以上ないくらいに振る前に止めないと……待てええ！！」

明久の悲鳴が聞こえた気がしたが気のせいだろうな。

明久ＳＩＤＥ

僕「真琴もたまには負けたほうがいいよね？」
秀吉「うむ。あやつは最近一人勝ちが多かったからのう」
みどり「たまには負けてもらわないとこっちが損しちゃうよね～」

はたから見れば最低の会話だ。

瑞希「私も最近負けが多かったので勝ててうれしいです」
美波「瑞希までＦクラス色に染まってるわね……」

島田ｓ……美波の言うとおりだ。

みどり「そういえばさ、アッキーや瑞希は琴君とは小学校からの友達なんでしょ？どういう風に知り合ったの？」
秀吉「そういえば聞いた事がないのう」
美波「ウチも聞いてみたいわね」
明久「僕が真琴にボコボコにされて知り合ったんだ」

あれは本当に痛かった。

美波「全然分からないわよ……」
瑞希「えっと、その話はもう少し前から話さないといけないんです

けど……」
僕「真琴と知り合ったのは僕よりも瑞希のほうが1ヶ月くらい速かったよね？」
瑞希「はい。それくらいだと思います」
秀吉「ということは真琴が言っていた言葉を信じるのならば真琴の最初の友達はひm……瑞希ということになるのかのう？」
みどり「良く出来ました♪」

みどりから恐ろしい殺気が飛んでいる気がする。

美波「どんな感じだったの？話してよ」
秀吉「わしも興味があるのう」
みどり「話してよ」
瑞希「ち、近いですよ！？」

美波、秀吉、みどりの3人が一斉に瑞希に迫る。
そこまでして知りたいものなんだろうか？

美&秀&み「話して！！」
瑞希「わ、わかりました。あれは私が小学校の2年生に進級した頃なんですけど……」

真琴ＳＩＤＥ

オレ「売り切れかよ……」

今日はなぜだかムチャクチャ当たりが悪い。
この自販機で３件目だが買えたのは緑茶と紅茶だけだ。

オレ「しゃあね。購買行くか」

購買ならジュースくらいあるだろうと思い購買を目指す。
その途中でふと窓を見ると近くの小学校が目に入った。

オレ「小学校か……。そういや瑞希や明久とも小学校で知り合ったんだよな」

あの頃もウザイ奴やムカツク奴など山ほどいたがそれでも二人がい

たおかげで初めて学校に行くのも悪くないと思ったんだっけ。
そう考えると感謝してもしきれないくらいだ。

オレ「あれは2年の頃だったか……。おかしな奴だとか思ってたんだよな」

ガキの頃のことを思い出しながら購買へ向かって歩く。
懐かしい思い出を思い出しながら……

閑話2-2　天才と才女の出会い

バカテスト　音楽

問　以下の問に答えなさい。

『マザーグースの中で『スパイスと素敵なもので出来ている』と表現されているものはなんでしょう』

姫路瑞希の答え

『女の子』

教師のコメント

正解です。流石ですね姫路さん。
女の子の材料は砂糖とスパイスと素敵なもので、男の子の材料はカエルとカタツムリと子犬の尻尾と歌われています。

峰嶋真琴の答え

『人造人間』

教師のコメント

手足を持っていかれますよ。

吉井明久の答え

『カレーライス』

教師のコメント

女の子は食べ物ではありません。

真琴ＳＩＤＥ

その日は小学校に上がってから二度目の1学期始業式だった。
始業式。1年で1番つまらない日だ。
その次の日も、またその次の日も等しくつまらないけど。
校長が長ったらしい話を延々続けてそれが終わったら教師がなんやかんやで色々言ってそれも終わったら教室に戻って新しいクラスメイトと自己紹介しあう。

オレ「どうしてこう毎回毎回同じことしかしないんだか……」

その年ごとに違った事でもあればまだ面白味がある。
それすらもないんだからつまらない事この上ない。
新しく来た教師の名前や顔なんざ覚えるのに5秒も要らないし。

教師「それでは教室に移動してください」

教師の合図で生徒が移動を始める。
いっそのことこのままバックレてもいいけど出席をとり終わった後なので自重する。

集会所から2年1組の教室まで移動する。
別に集団で移動する必要はないだろうが。個人の特性を生かしきれてない集団行動しか出来ない三流教師だから仕方ないけど。

教師「この一年間このクラスの担任を務める――――だ。」

あんたの事はどうでもいいんだよ。
話は半分聞いておいて黒板や教師は見ない。
出席番号の順に自己紹介が始まる。
……眠ぃ。
「……です。よろしくお願いします」
zzz……
「……です。特技は……」
zzzzz……
「……です。一年間よろしくお願いします」
zzzzzzzzz……
教師「次……峰嶋？峰嶋真琴！！」
zzzzzzzzzzzzzzzzzzzzzzzzzzzzz……
………
??「あ、あの、起きてください。自己紹介の順番、回ってきましたよ……？」
オレ「ん？ああ、えー……峰嶋真琴。よろしく」
それだけ言って椅子に座る……もといもとから座っている。
教師「私のクラスで居眠りなど許さないからな。次はないと思って

おけ」
オレ「うっせーよ。ド三流のアホ教師。文句あるならそれなりの態度見せろってんだ、バーカ」
教師「うるさい！！私は東大卒のエリートだ！お前こそ態度を改めたらどうだ！！」

この程度の挑発で逆上する奴なんてたかが知れてるし東大出てるからって別にそれ単体では凄い事ではない。

オレ「別にそれがどうした？アンタみたいな三流がどこ出てようが知った事じゃねえし」
教師「ぐ……、ならこの問題を解いてみろ！！」

うわ、すごい古典的……
ていうか小2にそれやるか普通？

教師「名門私立中学の入試だ。これくらいは解けるよな？」

2次方程式が中学入試で出るのか？
まあそんなことどうでもいいけど。

オレ「……これでいいか？」
教師「んなぁ……」

別にどんな難問だろうと一度解いた問題であれば小学1年生の計算と何も変わらない。

オレ「だからアンタは三流教師なんだよ」
教師「……」

とどめのフィニッシュブロー決めとくか。

オレ「中学程度の問題でオレを罰しようなんざ１００年早い」

教師「……」

おお、自信喪失してるみたいだな。

そう落ち込むなよ。完全記憶能力者が相手じゃそんなもんだろ。

オレ「……眠ぃ」

席に戻るなりまた机に突っ伏す。

超眠ぃ……。なんでこんなに眠いんだ……？

？？「あ、あの……」

オレ「んあ？」

もう一眠りしようかと思ってたところで隣から声をかけられた。

オレ「あー……何か用？」

？？「そ、その……先生も居眠りはよくないって言ってましたし、また寝るのは……」

オレ「いや、アレはただの嫌がらせ見たなもんだし……」

あんなドサンピンの言うことを真に受けるなんてこいつはバカか？

オレ「それだけならオレは寝る。えーっと……」

瑞希「あ、姫路です。姫路瑞希です」

オレ「わかった。んじゃ寝るから起こさないでくれ」

とりあえず就寝……ＺＺＺＺＺ……

瑞希「あ、あの、峰嶋君……」

姫路……だったか？に身体を揺さぶられて目が覚める。

オレ「あ……？もう終わり？」

瑞希「はい。あと、先生が峰嶋君には明日の予定は教えるなって……」

そこまでやるのかあのド三流は。
まあ関係ないけどさ……

オレ「ん……オッケ。覚えてる」
瑞希「え……？」
オレ「まあオレの特技だと思ってくれ。寝てる間の音声も覚えてられるんだよ」

完全記憶能力だけど。

オレ「んじゃ明日な」
瑞希「あ、はい。また明日」

来るかどうかは知らねえけど。

オレ「ただいま」
母さん「あら、お帰りなさい真琴。今日はどうだった？」
オレ「ムカツク三流教師が一人と面白い奴が一人」
母さん「先生を三流なんて言っちゃダメよ？たとえどうしようもないクズだとしてもね？」
オレ「母さんも軽くけなしてんじゃん……」

まあそっちはどうでもいい。
むしろ面白いのはあの姫路とか言うやつだ。
オレのことを知らないだけだったんだろうか？
それとも知ってて話しかけてきた？
仮に後者だとすれば面白いを通り越して変な奴だ。

オレ「まあ……退屈しのぎにはなるか」

閑話2-3　君との約束

バカテスト　体育

問　以下の問に答えなさい。

『地図と方位磁石を頼りにチェックポイントを辿るスポーツを何と言うでしょう』

姫路瑞希の答え

『オリエンテーリング』

教師のコメント

正解です。特にコメントはありません。

峰嶋真琴の答え

『最近流行の……探検ゲームの類？』

教師のコメント

なぜ疑問系なのでしょうか？

吉井明久の答え

『ロールプレイングゲーム！』

教師のコメント

そう答えると思っていました…。

真琴ＳＩＤＥ

始業式から１０日ほど経った。
あれから毎日…とまでは言わずとも、かなりの確率で朝、姫路と遭遇する。

瑞希「おはようございます。峰嶋君」
オレ「……」
瑞希「……どうして挨拶しても無視するんですか？」
オレ「……」
瑞希「峰嶋君」
オレ「……あのなぁ、どうして会うたびに話しかけてくる？」
瑞希「だって、それが普通じゃないですか」

一般常識っていうのはオレという存在から著しくかけ離れてる存在だ。
というか顔を見るたびに話しかけられるほどオレ達は親しくない。
ただ席が隣だというだけである。

オレ「とにかく用事があるとき以外は話しかけないでくれ」
瑞希「はい……」

そもそもオレは他人と仲良しごっこをするつもりなんて毛頭ない。
姫路だってオレみたいな奴より、吉井だっけ？とかといた方が有意義だろう。

瑞希「あの……」
オレ「用が無ければ話しかけるなと言ったはずだが？」
瑞希「す、すいません……。でも。昨日先生が峰嶋君を探してたので……」
オレ「それを早く言えよ……」

姫路をその場に残して一人で先に登校した。

オレ「あんな長ったらしい説教聞いてられるか……」

先生様がオレを探していたのは実に覚えの無い用件でのありがた～いお説教をするためだった。

どうせその辺の小物が嫌がらせでオレの名前を使ったんだろうが……

オレ「んな根拠も無いような話を信じるなよな……」

どうせこの前の仕返しだろうがとことん底の知れてるドサンピンだな。

そんなことを考えながら教室に向かう。

男子Ａ「おい。峰嶋」

オレ「……Ｗｈｏ？」

男子Ｂ「はい？訳分からん事いってんなよ。ちょっと勉強できるからってなぁ」

えーっと……３人か。

用件は大体想像できるが……

オレ「何か用？」

男子Ａ「いや、ちょっとお前がムカつくだけだよ」

男子Ｃ「勉強は出来てもそのほっそい身体じゃ喧嘩は出来ないだろ？」

男子Ｂ「だから俺らがいろいろ教えてやろうと思って……さ！」

そう言って殴りかかってくる。

まったく、こんなすきだらけの動きでよく大口を叩くものだ。

オレ「見た目で判断しない事だな。こんな細い腕から、こんな重い一撃が出るかもしれないぞ？」

男子Ｂ「フゴァ！？」

顎にアッパーをお見舞いする。

何度も言うけど動きに隙が多すぎるしまともに殴る事も出来ない奴等が……

オレ「まだやる？」
男子Ａ「クッソ……覚えてろよ！！」

捨て台詞もとことん古典的だな……
あー……遅刻すると面倒だしさっさと行くか。

オレ「あの三流教師……もう生かしちゃおかん……！」

また呼び出されたかと思ったら今度も同じ訳の分からん言いがかりか！！
いい加減嘘だってことに気づけよ！！
だから三流って呼ばれんだよ！！

オレ「……すっかり遅くなっちまった……。早く帰ろう……」

時計を見ればもう5時を回っている。
そろそろ帰らないと母さんに心配かけちまう。
鞄を取りに行くために教室に向かう。

オレ「さっさと帰って本でも読むか……」

教室には当然のごとく誰もいなかった。
姫路の鞄が残ってるような気がしたけどまあ大方教師の手伝いでもさせられてるんだろう。
一番可能性の高い解釈を勝手にして玄関に向かう。

それを見かけたのは偶然だった。
本来なら気づくことすらなかったのだろう。

オレ「なんだよ……それ……」

いくらなんでもそこまでやるか……!?
特に理由も無い、ただ気に食わないというだけで……!!

気に食わないそいつの近くにいる人間に敵意を向けるのか……!?

男子『お前いつも峰嶋にくっついてるよな!?』
男子『どうせお前も峰嶋も一人だもんな!!』
男子『お前みたいなブスを好きになる奴なんざいねえよ!!』

朝オレに突っかかってきた3人が苛めている、3人の敵意がぶつけられてるのは――――――

姫路だった。

オレには個人的な繋がりがなく、学校でも特に親しい友人がいるわけでもない。
時々話す程度でも、嫌がらせの矛先としては十分ってわけかよ……！

気になるのはアイツがひとりだってこと。好きになる奴がいないってこと。
確かに姫路は一般水準よりも体重は多いほうだろうがそんなことは些細な問題だ。
事実オレが周囲に嫌われ、さげずまれるのだって容姿の問題ではない。
単純にオレが強すぎるのがいけないんだ。
“普通”よりも強いから。
“普通”じゃないから。

別に自分が“特別”だろうが“異常”だろうが“化け物”だろうがそんなことはどうでもいい。
自分の力を自分でコントロールできるうちは只我慢すればいいのだから。
だけど……自分の恵まれすぎた才覚のせいで誰かが罪も理由も無く傷つくのはイヤだ。見ていて不愉快だ。罪悪感を感じる。
現に姫路はオレがロクに考えもせず3人を攻撃したせいで意味もなく傷つけられている。

オレ「何でだよ……！何でオレじゃなくてアイツなんだよ……！」

それに姫路も姫路だ。

助けを呼ぶなり抵抗するなりいくらでも方法はあるはずだ。
なんでただ一方的にやられ続ける!?

瑞希『……ッ！……ぐす……！』
オレ「！！」

……どうするべきだ。

別に姫路が苛められようがどうなろうがオレの知った事じゃない。
あの小物が勝手にやっただけだ。オレは悪くない。

……悪くない？本当に？

そもそもオレが特別だからこうなったんじゃないか。
だったら……別にやる事は決まってるんじゃないのか？

オレのバカみたいにぶっ飛んだ能力が引き起こした結果なら、オレが片を付けるのは当然じゃないのか？

オレ「……何やってんだろうな、オレ」

他人の為に何かをするなんて初めてだな。と思いながら呟く。

話しかけられるたびに鬱陶しいとか面倒くさいとか思ってたけど……

本当は……

オレ「……おい、何してる？」
男子「！？」
男子「何で峰嶋がここに！？」

本当は……

誰かに話しかけられることが、誰かが優しく接してくれる事が

ただ嬉しかっただけだったんだろ。

誰からも認められない。

腫れ物の様な扱い。

そんな風に生きてきて、初めて家族以外で優しく声をかけてくれた
存在が、

姫路瑞希って言う一人の人間の存在が、

ただ嬉しかっただけなのだろう。

オレ「お前ら、人の友達に手ェ出しといて無事でいられると思うなよ…！！」
男子「んだと……！？３人がかりなら余裕だろ！！」

男子3人が一斉に殴りかかってくる。
体格で言えばオレよりもはるかにガタイのいい奴ばかりでまともな喧嘩ならオレに勝ち目は無いだろう。
そう、まともな喧嘩なら、な。

男子「フガァ！？」

先攻してきた奴を一本背負いで投げ飛ばす。

オレ「今オレぁムチャクチャムカついてんだよ」

自分で自分の気持ちに気づけなかったことに。

姫路が傷つく原因を作ってしまった自分に。

初めて友達と呼べるであろう存在を傷つけたコイツらに。

オレ「テメエら一人たりとも生きてかえさねえ」

それが、初めて本気でキレた時の喧嘩だった。

瑞希ＳＩＤＥ

峰嶋君が助けてくれました。
上級生かどうかは分かりませんが、とにかく体の大きな3人組から。
そして、初めて見た怒った峰嶋君の目を見て、それに恐怖を感じました。

真琴「……姫路」
私「は、はい！」
真琴「……立てるか？」
私「え？は、はい……」

なんでしょう？
なんだかさっきまでの凄く怖い何かはもうなくなってるような……

真琴「……悪かった」
私「え？」
真琴「お前はもうオレに近づくな。オレと一緒にいても、いい事なんか一つも無いからな」
現に今がそうだった。と峰嶋君は続けました。
私「でも……」
真琴「でもじゃない。オレに話しかけるのも、近づくのも、もうやめるんだ」
私「どうして……」
どうしてそんなことを言うのか。
そう聞きたかったのです。
私「どうしてそんなことを言うんですか……？」
真琴「どうしてもなにも、それが事実だからだ。オレはお前の近くに居てやれるほど、出来た人間じゃない」
私「そんなこと無いです！！」
真琴「！？」
私「峰嶋君はお勉強も出来るし、スポーツだって出来るし、そして……さっき私を助けてくれたじゃないですか！！」
真琴「それは……」
私「それに、友達は近くにいるものですよ？」
真琴「……わかった。それじゃ一つだけ約束してくれ」
私「約束？」
真琴「また今日みたいなことがあったら、すぐに助けを呼ぶこと。そしたらオレがまた守ってやる」
そう言って峰嶋君は立ち上がり、手を出します。

真琴「ほら、かえんぞ」
私「は、はい！」

峰嶋君の手を掴んで立ち上がります。

真琴「怪我とか無いか？」
私「大丈夫です。どこも怪我なんてしませんよ」
真琴「ならいいが……」

ちょっと峰嶋君の……真琴君の顔を見て笑います。

真琴「？　なんだよ？」
私「なんでもないですよ。真琴君」
真琴「名前呼び？いいけどな」

私と真琴君は、別れるところまで手を繋いで帰りました。

「君との約束は必ず守ろう。だから――

――だから、いつまでもオレにとっての特別で居て欲しい」

閑話2-3　君との約束（後書き）

次回は明久と真琴の出会いです！

閑話2-4　ムカつく親友（前書き）

気づけば総合評価２００ｐｔ突破！
ありがとうございます！

閑話2-4　ムカつく親友

バカテスト　保健体育

問　以下の問に答えなさい。

『水泳の個人メドレーの種目を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『1．バタフライ　2．背泳ぎ　3．平泳ぎ　4．自由系』

教師のコメント

正解です。流石姫路さん。
回答は正解ですが、姫路さんは実際に泳ぐのが苦手なようですね。
吉井君、峰嶋君、島田さんとあなたの周りには運動の得意な人が多いのですから、教えてもらってはどうでしょう。

峰嶋真琴の答え

『1．前菜　2．スープ　3．メインディッシュ　4．デザート』

教師のコメント

先生のお給料ではコース料理は食べられません…。

吉井明久の答え

『懐メロメドレー、アニソンメドレー、鳩サブレー！』

教師のコメント

鳩サブレーは先生も好きです。

真琴ＳＩＤＥ

オレ「いい加減にしやがれあの三流ドサンピン教師ィィ！！」

またか！！また身に覚えのない言いがかりの説教か！！
新学期に入ってからこれで１３回目だぞ！！
いい加減気づけ！わざとやってんじゃねえだろうな！！

瑞希と友達になった一件から１ヶ月ほど経った。
ことあるごとに瑞希を苛める小物どもを潰してはいるんだけど、なかなか減らない。
いい加減にマジに殺すべきか？

オレ「まったく、オレにはどうやったって勝てないって学習すればいいものを……」

ポロっと愚痴がこぼれる。
あの三流ドサンピン教師といい、あいつらと言い、いつまでもしつこいったらありゃしない。

オレ「また今日も遅くなっちまった……。瑞希も帰ったみたいだし、さっさと帰るか……」

あの迷惑集団どうするかなぁ……
潰しても潰してもしぶとく絡んでくるんだよな。
まるでゴ○ブリだ。

自分の鞄を掴んで教室を出ようとする。

するとオレが出ようとしていたのと反対側のドアから誰かが入ってきた。

??「待てよ」

オレ「あ?」

えーっと、あの顔は確か……

オレ「……クラスの人気者の吉井明久が嫌われ者のオレに何の用だ?」

ウチのクラスで女子からも男子からも高い人気を誇るリーダーのような存在、吉井明久。

表に立って脚光を浴び、人気を得る事の出来る幸せ者がオレに何の用だか……

明久「瑞希ちゃんがどこにいるか教えろ」

オレ「瑞希?帰ったんじゃないか?ていうかオレはついさっきまで三流のありがた〜いお説教を受けてたんだぞ?わざわざオレに聞かなくても靴箱見るなりすれば分かるだろ……っ!!」

明久「知らないわけないだろ……。どこにいるか答えろよ!!」

吉井はいきなりオレの鳩尾めがけて拳を放つ。

避けるくらいは造作もないが、台詞に少々引っかかる部分がある。

オレ「……知らない。帰ったんだろ」

明久「嘘つくなよ!!」

オレ「あーもう!!なんでオレが瑞希がどこにいるか知ってることになってんだよ!!どうせ家か親と一緒にスーパーで買い物でもしてんじゃないのか!?」

明久「お前が連れてったってことぐらい分かってるんだ！！さっさと教えろよ！！」

……は？

オレが？瑞希を連れてった？

落ち着こう。状況を整頓するんだ。

オレは放課後は瑞希とは会ってない＝オレが瑞希を誘拐するのはありえないというか不可能。

吉井が嘘をついてるようには見えない＝吉井は本当の事だと思ってる。つまり勘違い。

ではなぜそんな勘違いをしているのか→吉井はバカで単純なのでだまされやすい＝誰かに嘘を吹き込まれた。

……ないな。

そんな回りくどい事をする意味がないし、そもそも吉井をオレにぶつけても結果は変わらないだろ。

ではその他の選択肢はどうだ？

・三流教師が吹き込んだ。

いや、アイツも放課後はずっとオレと居たからありえないな。

・勘違いする何かを吉井は見た。

何を見たらそう勘違いできるんだ？

・被害妄想

……一番ありえないな。
こう考えると一番最初の説が一番うなずけてしまう。
嗚呼、誰かこのバカの誤解を解いてください……

明久「くたばれぇぇぇ！！」
オレ「おっと」

いや、くたばらせちゃダメだろ。
瑞希の居場所聞けないんじゃん。

明久「オラァァ！！」
オレ「あー……鬱陶しい！！」

吉井の拳を掴んで前に押す。
と同時に足払いをかけて転ばせる。

明久「ぐあっ！」
オレ「ハァ……。リーダーもこの程度か……」

もっと手応えがあればまだマシなんだけど、ロクに強いやつ居ないんだよな……

オレ「おい吉井。オレは放課後になってから瑞希とは会話してない。それどころかお互いをほとんど見てすら居ないんだぞ？そんなオレがどうやって瑞希を連れてくってんだ？」

冷静になれば先に帰ったって考えるのが普通。
それが思い浮かばないってことはそう考えない根拠があるって事だ。
それに関してはコイツから聞きだす必要がある。

オレ「で、オレが瑞希を連れて行ったとお前に吹き込んだのは誰だ？」
明久「しらばっくれるなぁぁ！！」
オレ「…ッチ、聞く耳持たずか」

ロクに会話も出来ないな。と心の中で呟く。
こりゃあ情報を聞き出すなんて無理かもな。

オレ「おい吉井。こっちだってお前に構ってる暇はないんだ。さっさと黒幕吐けよ」
明久「僕だってさっさとお前ブッ倒して瑞希ちゃんのところに行くんだよ！！」
オレ「いや、多分お前じゃ無理だから」

そもそも瑞希が今危ない状況にあるってどういう根拠で信じてるんだこいつは？
嘘って可能性も考えられないのか？

明久「……可哀想じゃんか」
オレ「は？」
明久「瑞希ちゃん、一年の頃からずっと苛められてんだぞ……。可哀想じゃないか……！！なんでお前は、そんな女の子を平気で傷つけられるんだよ！！」

どうやら吉井の脳内想像では瑞希を苛めてる犯人はオレということ

になってるらしい。
とんだ迷惑だが……そんなことはどうでもいい。

オレ「……テメエに何がわかんだよ」
明久「分かるよ！だって――――」
オレ「だってなんだよ……。僕はみんなのリーダーで、クラスの人気者だからですってか？」
明久「違う！！僕と瑞希ちゃんは……」
オレ「いつも周りに人が居て、周りはいつも明るくて、誰からも愛されてるような幸せ者のお前に、何が分かるってんだよ！！」

これだからオレは吉井が嫌いなんだ！！
みんなの人気を集めることの出来る、光が当たる人間がいれば、誰からも疎まれ嫌われる、影の中でしか存在できない人間がいることを知らない奴！！

オレ「分かるわけないよな！？人気者のスターには、化け物怪物と罵られて、まるで獣を見るような目で見られて、何をやっても認められないような、人じゃないような奴の気持ちなんか！！」

分かるわけがない。
吉井にオレが今までどんな風に扱われて、どんな風に見られていたかなんて。
こういう感情を理解しあえるのは同じ境遇の人間だけだ。
こんな幸せ者に、理解されてたまるか。

明久「でも、僕と瑞希ちゃんは友達で、幼馴染で……」
オレ「『僕と瑞希ちゃんは知り合いです』『僕と瑞希ちゃんは友達です』『僕と瑞希ちゃんは幼馴染です』『だからお互いの考えてる事が良く分かります』ってか！？ンな訳ねえだろ！！」

なんでコイツなんだよ……

オレ「何でお前なんだよ……！」

なんでだ……！

オレ「何で皆の人気を得るのがお前で……！」

彼女から好かれるのがコイツで……！

オレ「何で嫌われるのがオレで……！」

彼女のそういう存在になれないのがオレで……！

オレ「なんでお前なんだよォォォォ！！」

大声で叫んで、右足を思いっきりその場で踏み込む。

教室の床に、ちょっとひびが入った。

明久「峰嶋君……」

オレ「完全記憶能力も、優れた運動神経も、そんなものなくても良かったんだ！物覚えも悪くていい！運動音痴で結構！だから、だから……！」

ただ一緒に、いられる人が。

オレ「一緒に笑える友達が欲しかったんだ……！」

生まれつきの完全記憶能力に人間の領域すら超える運動神経。

そんなものは生きていく上であってもなくても大差ないものだ。
むしろ、そんな余計なものを生まれ持ったせいで、化け物扱い、いじめ、差別……

オレ「好きで完全記憶能力者になったわけじゃないのに……！どうしてたったそれだけで迫害されなきゃならないんだよ！！」

性格が悪いとか、人を見下してるとかよく言われるけど、こうなったのはつい最近。小学校に上がった頃から。
それより前は、もっとおとなしかったし、暴力を振るう事もなかった。
それでも周囲の対応は今と何も変わらない。

『峰嶋真琴は危ないかもしれない』
『何を考えてるか分からない』
『とても子供とは思えない。おかしい』

ようはそういうことなのだ。
臭いものには蓋を。異常なものは迫害。
何もしないのに、何もしてなかったのに、何かをされた。

オレ「お前も、三流も、クラスの奴だって、皆オレの事を化け物か妖怪の類だと思ってんだろ！！他人なんてそんなもんなんだよ！！」

ただ一人、姫路瑞希を除いて。
最初はただ単にオレの事を良く知らなかったから、声をかけれたに過ぎなかった。
そして、オレが完全記憶能力者と知った後も、オレの人外の身体能力を見た後も、以前と何も変わらず接してくれた唯一の人物。
初めての友達。

オレ「アイツは、家族以外で唯一オレの事を認めてくれたんだ！！なら何故オレがアイツを苛めなきゃならない！！」
明久「……」
オレ「テキトー並べた後は黙秘かよ……。そっちがそうならもうオレも手加減しねえ」

教卓を掴む。
掴んで、片手で持ち上げる。

オレ「吉井明久。お前を殺す」
明久「……」
オレ「マジだからな。オレに言いがかりを付けたあの三流も、ウザい小物も、全員殺す。そんでもってオレ自身が死んで、ゲームオーバーだ」

もうこんな空間に居る意味はない。
瑞希だって、オレの事はあくまで友達。それ以上にはなる事はない。
結局、最後にはオレは自分で死ぬ以外に選択肢は無いんじゃないか。
こんな化け物が生きてたところで、特に意味はない。

オレ「恨むんならお前にデタラメ吹き込んだ小物を恨むんだな！！」
明久「僕さ……君の事、凄いと思うよ？」
オレ「今更助かろうったって意味ねえよ！！」
明久「助かりたいとかじゃなくてさ、普通に凄いじゃん。一度覚えたら絶対に忘れない能力」
オレ「！？」

吉井に向かって投げようとした教卓を、寸前で止める。

明久「僕は物覚えよくないし、たいして運動が出来るわけでもないから君の事、凄くうらやましいよ」

羨ましい？それはこっちの台詞だ。

明久「でもさ、良く考えてみてよ。君は瑞希ちゃんのこと分かってるみたいな事言ってたけど、君が僕を殺して君自身も殺したら、瑞希ちゃん、一気に二人も友達を失うんだよ？」

オレ「！！」

明久「君がいつどこでどうやって死のうと君の勝手だけどさ、それで悲しむ人が居るってことも考えたほうがいいよ」

オレ「……」

明久「それにさ、ずっと友達が欲しかったんでしょ？それでやっと出来た初めての友達なのに、今やめるのってもったいないと思わない？もっと一緒に遊んだり、笑ったりすればいいじゃん」

オレ「……奇麗事を」

そう小さく呟いて、手に持っていた教卓を教師用の机に向かって投げる。

バキィ！！

明久「はい！？え！？何してんの！？」

オレ「あの三流教師への嫌がらせだ。別に気にする事じゃない」

明久「いや、思いっきり気にするところだから……」

あの三流が困ろうがどうなろうが知った事じゃない。でも……

オレ「吉井、その情報、確かめるぞ」
明久「当然！瑞希ちゃんが家にいればそれで良し！居なければ探す！」

オレ「いたか！？」
明久「居ない！！そっちは！？」
オレ「その辺の人に聞いても、誰も見てないって…」

瑞希はまだ家に帰ってないらしい。

商店街にいる人にも手当たり次第に聞いてみたけど収穫なし。

明久「なんで……やっぱり警察に……！」
オレ「おかしい……」
明久「峰嶋君！やっぱり警察に知らせたほうがいいよ！！」
オレ「おかしくないか……？」

吉井が分からないといった顔をしている。

オレ「なあ吉井……瑞希ってかなり目立つよな？」
明久「そうだね。ピンク色の髪なんてそうそういないし、いやでも目につくでしょ」
オレ「じゃあなんで瑞希を見た人が独りもいないんだ？」
明久「あ！！……でもそれだけじゃ……」

時計を見ると既に6時になりかかっている。
考えろ…！考えるんだ……！
人に見られず、長時間見つからない場所があるはずなんだ！！

明久「もしかしたらまだ学校にいたりするかな……？」

学校……？
学校、学校……

オレ「ソレだ！！」
明久「は！？」
オレ「多分瑞希はまだ学校にいる！」
明久「でも、この時間じゃもう見回りの先生が教室を確認してるはずだよ？校舎の中にいれば見つかってるはず……」
オレ「校舎じゃないさ」

明久「でも、用具室や体育館は夜になれば閉められちゃって、入る事は出来ないし……」
オレ「だからあるんだって。いつでも誰でも入れて、誰も来なくて何かを隠すのに最適な場所が」

瑞希ＳＩＤＥ

どうして私がこんな目に会わなきゃいけないの？

帰ろうとしたら知らない上級生（多分6年生）が来て、この倉庫に閉じ込められて……

私「帰りたいよう……」

何故かおいてあったお菓子やパンやお茶があって助かってるけど、もしこのまま誰にも見つけてもらえなかったらどうしよう……

私「助けて……明久君……真琴君……」

『また今日みたいなことがあったら、すぐに助けを呼ぶこと。そしたらオレがまた守ってやる』

いくら真琴君でも、きっと今度は見つけてくれない。

今いるのは学校の敷地の一番外れにある古倉庫で、生徒が立ち入るのは禁止されてる場所（その割には入り口の鍵がついてなかったりするけど）。校舎からも離れてて、見回りの人も来ない。

誰かに見つけてもらうなんて無理だよ……

私「お母さん……お父さん……」

助けて……

ドンドンドン！

私「！？」

と、扉を叩く音!?
誰かが来てくれた!?

明久『瑞希ちゃん!!中にいる!?』
真琴『いるなら返事しろ!!』
私「明久君!!真琴君!!」

こっちも中から大声で返す。

明久『やった!中にいるんだ!!』
真琴『……鍵が掛かってる。昼間はついてなかったのに』
私「あ、明久君!真琴君!」

外から鍵が掛かってるんじゃ……

明久『鍵は掛かってないんじゃなかったの!?』
真琴『昼間はついてなかった鍵がついてる、誰かが鍵を取り付けたんだ』
明久『そんな……』
真琴『諦めるのはまだ早い……!瑞希!下がってろ!!』
私「え?は、はい……」

真琴君に言われてもともといたところより更に後ろに下がります。

真琴『うぉおおらぁぁ!!』

ガキン!!

と軽い金属音がして、カランカランと響きます。

明久『すご……』

真琴『さっさと開けるぞ！』

古倉庫の扉が徐々に開かれて、光が差し込んできます。

そして……

明久「瑞希ちゃん、大丈夫！？」

真琴「瑞希、無事か！？」

私「明久君！真琴君！」

扉が開くと同時に飛び込んでくる私の友達。

私「よかった……明久君たちが来てくれて……」

明久「大丈夫瑞希ちゃん？怪我とかは……」

私「大丈夫です…」

真琴「本当にここでよかった……！」

私「え？」

真琴君の言った言葉に聞きかえします。

真琴「ここ、お茶やパンがあっただろ？」

私「は、はい。誰のかはわからなかったけど、そ、その食べちゃって……」

真琴「気にすんな。アレはオレのだからな」

ええ！？

明久「なんで！？」
真琴「あの小物どもが嫌がらせでロクに給食くれないからここに少しずつ持ってきて溜め込んどいたんだよ。ここはいわば、オレの隠れ家みたいなものだったからな」
明久「それで、ね……」
私「あ、あの、助けてくれてありがとうございました！」

古倉庫の外にでて、二人にお礼を言います。

明久「ううん、気にしなくていいよ。ね、真琴」
真琴「そうそう。困ったときはお互い様ってな。明久」
私「？？？」

明久ＳＩＤＥ　～Ｆクラス教室～

僕「てなわけよ」
美波「そんなことする奴が居るなんてサイテーね。で、どうなったの？」
瑞希「私が上級生の顔をしっかり覚えてたので、ちゃんと犯人を捕まえられました」
僕「最初は真琴の自作自演だって言い出した先生もいたんだよ」

ほんと、あの先生には心底はらがたったよ。
真琴が居なければ瑞希は見つけられなかったかもしれなかったのに……

みどり「そりゃあ琴君大活躍だったねぇ～」
秀吉「その鍵を蹴りで壊したというのもスゴイのじゃが、あ奴は何から何までぶっ飛んでおるのう」

そこは１００％同意する。

瑞希「あの時は本当にこのままだったらどうしようって思っちゃって、真琴君が『オレが守ってやるから』って言ってたのをずっと信じてたんです」
美波「真琴ったら、ウチというものがありながら、瑞希にそんなこと言ってたのね……」
僕「み、美波！？おちつこう！！その頃はまだ美波も真琴もお互いの事知らなかっただけだからさ」

美波「そうね……」

あ、危ない……
美波から黒い何かが……

僕「にしても真琴遅いなぁ……そろそろ帰ってきてもいいはずなんだけど頭が痛いです」
真琴「オ前ハ何ヲ勝手ニベラベラト喋ッテルノカナ？」
僕「ひ、ひぃぃぃぃーーーー」

「まったく、そういう話はしなくていいってのに……。
まあ、嫌いなわけじゃないんだけどな……
あの最高にムカつく親友のおかげでな……」

閑話2-4　ムカつく親友（後書き）

次回、康太×愛子！？
保健体育コンビの日常を追え！！

感想お待ちしてます！

閑話3　ボクと康太君と伝えたかった気持ち（前書き）

次回予告のとおり、康太×愛子です！
唐笠さん感想ありがとうございました！

閑話3　ボクと康太君と伝えたかった気持ち

バカテスト　政治・経済

問　以下の問に答えなさい。

『日本の民法における結婚適齢は何歳か答えなさい』

姫路瑞希の答え

『男性は１８歳、女性は１６歳』

教師のコメント

正解です。流石ですね。姫路さん。
２００９年の法制審議会で男女ともに１８歳に統一すべきとの最終答申が報告されており教育方針として改正する方向のようです。
改正されると、姫路さんの結婚できる日が先延ばしになるかもしれませんね。

峰嶋真琴の答え

『この法律、今すぐ男性の結婚適齢を１６歳にすべきであると主張する』

教師のコメント

吉井君と姫路さんに幸せになってもらいたいのは分かりますが無理です。

吉井明久の答え

『愛があれば、年の差は関係ありませんよ』

教師のコメント

夢と希望をありがとうございます。

康太ＳＩＤＥ

日曜日の朝、強化合宿が終わり停学処分を受けていた。

俺「……課題めんどい」

家の電話から真琴の携帯に電話をかける。
アイツは早起きだからもう起きてるはず。

真琴『もしもし』
俺「……俺」
真琴『オレオレ詐欺なら間に合ってる』
俺「……違う。康太」
真琴『分かってるって。何か用か？』

真琴の悪ふざけは時々明久以下になる。

俺「……課題を手伝って欲しい」
真琴『断る』
俺「……酷い」
真琴『お前が覗きなんかするからだろ。自業自得だ』
俺「……そこを何とか」
真琴『断る』

仕方ない。こうなったら物で釣るか。

俺「……島田の体操服写真１０枚セット」
真琴『！！　ぐ……こ、ことわ……！』

あと一押し……

俺「……姫路もつける」
真琴『！！　わ、分かった！！て違う！！瑞希のは無くていい！！美波に殺される！！』

確かに島田なら殺りそうだ。

真琴『あ、悪い。オレは今日は都合が悪いんだ。勉強できる奴をお前の家に向かわせるからそれでいいか？』
俺「……構わない」

本来なら真琴に教えて欲しかったところだが仕方ない。
真琴に勉強の方法を指南してもらうと凄いことになる。

Ｆクラス　土屋康太　保健体育　１３２１点

真琴が考えた方法だと簡単に４桁が取れた。
流石としか言い様がない。

勉強が出来る奴というと姫路か名川辺りか？
まあ課題が終わらせられればそれでいい。

～1時間後～

愛子「やっほ～、ムッツリーニ君、遊びに来たよ～」
俺「……あの野郎」

速攻で家の固定電話に駆け寄り真琴の携帯に電話をかける。

真琴『もしもし？』
俺「……オマエヲコロス」
真琴『え！？何！？ちょ、マジ怖ッ！？』

これで少しすっきりした。

愛子「ムッツリーニ君、何してるのかな？」
俺「……何もしてない。工藤こそ何故俺の家にいる？」
愛子「峰嶋君に『ムッツリーニが課題終わんなくて困ってるから助けてやれ』っていわれてね」

工藤が真琴の口真似で説明してくる。
あの野郎、やっぱり殺す…

愛子「それじゃさっさと終わらせようよ」
俺「……別にいい」
愛子「終わったら一緒にクレープでも食べに行きたいなって思って

たのに……」
俺「……」
愛子「はやくやっちゃおうよ！」
俺「……ここがわからない。教えて欲しい」

これはただの勉強会である。
決して疚しいことは無い（ブシャアアアアア）

愛子「ム、ムッツリーニ君！？もう鼻血出ちゃうの！？早すぎない！？」
俺「……死しても尚、課題を終わらせる……！」
愛子「ちょ、無理しちゃダメだよ！！」
俺「……！！（ブシャシャシャシャアアアアアアアアアアアア！！！）」
愛子「ムッツリーニ君！？」

これはこれで……（ガク）

愛子ＳＩＤＥ

ムッツリーニ君は意外に飲み込みが早い。
保健体育意外は春先の頃の吉井君より酷いって聞いてたから教えるの大変かなって思ってたけど、やれば出来るし、分かってるところは分かってる。
興味が無いからムチャクチャ点数が低いだけというのが良く分かった。

ボク「やった～！！終わった～！！」

ムッツリーニ君が意外に各分野ごとの重要な部分を理解できてたおかげで想像よりも早く終わった！

ボク「さあムッツリーニ君！クレープ食べに行こう？」
康太「……工藤。ありがとう」
ボク「ふぇ！？あ、ううん、気にしない気にしない♪」
康太「……？　工藤、顔が赤いぞ。熱でもあるのか？」

うわ、超鈍感……

ボク「だ、大丈夫だよ！それより早く行こう！！」
康太「……俺が奢る。遠慮するな」
ボク「え！？そ、そんな、悪いよ！！」
康太「……課題を手伝ってくれたお礼。俺に奢らせろ」

うーん、意外なところでかなりの男前。

ボク「じゃあ、お言葉に甘えちゃおうかな？」
康太「……さっさと行くぞ」

男の子（ムッツリーニ君）と二人でクレープを食べに行く（しかもムッツリーニ君の奢り）のってこれって……デート？

クレープといえば喫茶店『ラ・ペディス』。
女子高生の穴場スポット♪

康太「……真琴」
ボク「へ？峰嶋君？」

康太君の視線の先にはウェイターをやってる峰嶋君。

真琴「こちら、アイスコーヒーになります。ごゆっくりどうぞ」

おお、様になってるぅ！
と真琴君がこっちに気づいたみたいで駆け寄ってくる。

真琴「お客様は2名様で……ムッツリーニと工藤？」
ボク「あはは、こんにちは～」
康太「……バイト？」
真琴「そう。みどりに続いて宗太まで来たせいで食費が危なくなってな」
ボク「仕送りとか無いの？」
真琴「あれば働いてない」

なんだろう。峰嶋君の背中から哀愁が漂ってる気がする。

真琴「まあそこは気にするな。二人でいいか？」
康太「……（コクリ）」

真琴「じゃあこっちだ」

そう言ってボクと康太君を案内してくれる峰嶋君。
案内されたのは端っこの二人席。

真琴「こちらメニューになります。ごゆっくりどうぞ（ニヤニヤ）」

なぜか峰嶋君の笑顔にいやらしいものを感じる。
メニューを渡すと峰嶋君は別のお客さんのオーダーをとりに行った。

康太「……どれにする？」
ボク「じゃあこのクレープにしようかな？」
康太「……俺はこっち」

結局康太君はイチゴの、ボクはブルーベリーのクレープにした。

ボク「おーい、峰嶋君、ちょっといいｋ……」

美春『お兄さま！早くお兄さまとお姉さまと美春の３人で幸せな家庭を作りましょう！！』
真琴『美春！？お前何やってんだ！？働け！』
美春『はい！美春は（お兄さまの服を奪うという）仕事を忠実に遂行しております！』
真琴『ちょ、やめ、おい！ベルト返せ！！』
店長『ミハルヲオカソウトスルオトコハオマエカ……キシャアアアアアア！！』
真琴『ちょ、店長！？』
美春『お兄さまに手を出す豚野郎はこの場で始末します！！』

ガガガ！（美春の猛攻）

ババババ！（店長の猛攻）

……（呆れる真琴）

……うん。この会話は聞かなかったことにしよう。

クレープも食べ終わってムッツリーニ君と公園で二人っきり。

康太「……何の用だ？」

まだ首を傾げてるムッツリーニ君。

よし、少し説明しよう！

ボク「ボクね、ムッツリーニ君のこと好きだよ」

康太「……！！？？」

ボク「強化合宿のときのような、仲間のために一生懸命になる康太君が」

康太「……俺もだ」

ボク「！？」

え……！？

ムッツリーニ君、いまなんて……！？

康太「……俺も工藤のことが好きだ」

ボク「……！！」

ムッツリーニ君……いや、康太君の台詞を聞いて思わず康太君に抱きつく。

最初は保健体育が得意な奴って聞いて、ちょっと興味があるだけだった。

でも、強化合宿で（目的は別にしても）頑張ってる姿を見て好きになった。

こういうのって、一目惚れ……なのかな？

康太「……工藤……いや、愛子。俺と付き合って欲しい」

ボク「うん……嬉しいよ。康太君……」

康太君の顔にうずめていた顔を上げる。

そしたら目の前には康太君の顔。

康太君の顔がボクに近づいてきて、ボクの顔も康太君に近づいた。

そして、二人でキスをした。

閑話3　ボクと康太君と伝えたかった気持ち（後書き）

結構ぐだぐだですが更新です……
え？こんなムッツリーニはムッツリーニじゃない？
いやいや、彼だってやるときはやりますよ。
次は……なにしようかな？

閑話４　バカ短歌祭！（前書き）

ふと思い立った短歌ネタ。
さあ（短歌を考えるのを）ガンバルゾ！
ちなみに台詞が多いと思います。

閑話４　バカ短歌祭！

バカテスト　英語

問　以下の問に答えなさい。

『“コンピューター”のことを日本語で何と言うか答えなさい』

姫路瑞希の答え

『電子式汎用計算機』

教師のコメント

正解です。流石姫路さんと言っておきます。

吉井明久の答え

『超電子頭脳！』

教師のコメント

強そうですね。

峰嶋真琴の答え

『超電磁砲！』

教師のコメント

強いですね。

明久ＳＩＤＥ

強化合宿の一週間前。
僕たちは悩まされていた。

僕「どうする……？」
真琴「やるしかないだろ……」
美波「そうね……」
雄二「回避は出来ないか……」
秀吉「ここまで来たら同じじゃと思うぞ」
康太「……同意」
みどり「さあ、どう動く…？」

僕ら7人はそれぞれの目の前に置かれた紙に悩まされていた。

真琴「ここは……『提出しない』でどうだ？」
他6人「異議なし！」
瑞希「ダメですよ！？」

古典の課題プリントに。

僕「だっていきなり短歌を作れなんていわれても無理だよ！！」
真琴「明久の言うとおりだ！テーマも決まってないのに出来るか！！」
雄二「いいか姫路、俺達は死力の限りを尽くしたんだぞ！」
秀吉「その結果がこれなのじゃ！！」
美波「帰国子女のウチに短歌なんて無理よ！！」
康太「……保健体育意外に興味は無い！」
みどり「お願い姫ちゃん。見逃して？」

古典教師の竹中先生の気まぐれで出された課題。
それはそれぞれ自分でテーマを決めて短歌を一つ作ってくること。
テーマもロクに決まらずに提出しなければならない5時限目が始まるまであと1時間ほど。
昼休みはあと30分。

瑞希「ダメですよみどりちゃん。それにいきなりって言っても、課題が出されたのは一週間前ですよ?時間なら沢山あったじゃないですか」
7人「……」

そう。本当は期限は一週間もあって、十分間に合うはずだった。
はずだった。

僕「……」
真琴「……」
雄二「……」
美波「……」
秀吉「……」
康太「……」
みどり「……」
瑞希「皆さん課題そっちのけで遊んでたんですね……」

遊んでいたわけではない。ただ課題の存在を忘れ、課題と言う単語を忘れ、自分の真にやりたいことに時間を費やしていただけである。

秀吉「じゃがそういう姫路は課題は終わらせてあるのかのう?」
真琴「何言ってんだよ秀吉。学年主席の霧島翔子をも超える点数を保持する姫路だぞ?もう終わらせてあるに決まってるだろ」
雄二「そうだぞ秀吉。姫路に限って課題を終わらせてないなんてこ

とはありえない」
僕「そうだね。瑞希だったら課題が出されたその日のうちに終わらせてそうだもんね」
秀吉「それもそうじゃの。姫路が課題を終わらせてなかったら、それこそ世界が滅びるかもしれんからの」
みどり「あ、それありえる」
康太「……それくらいのことが起きても不思議じゃない」
美波「そうね。瑞希に限って課題が終わらないなんて事は――――」

島田さんが瑞希のほうを見ながら言う。
その視線の先には――――

瑞希「……」

目が泳いでる瑞希が居た。

（（（（（（（まさか、終わってないのか!?）））））））

そんな最悪の展開が僕らの脳裏をよぎる。

瑞希「そ、そんなことないですよ!?ちゃんと終わってます!ただ、もうすこしひねったほうがいいかな～って思って……」

僕「世界が終わるゥゥ!!」
雄二「クソ!こんなことなら真面目に勉強してAクラスに勝っておくんだった!!」
真琴「まだだ!まだ終わってねぇ!!」
康太「……まだ【バキューン!】なことも【ズキューン!】なこともしてない……!!」

秀吉「落ち着くのじゃお主ら！さっきのは物の喩えじゃ！それからムッツリーニはそういうことを言う出ない！！」

※ムッツリーニの台詞はご想像にお任せします。

美波「はは……終わったわ……瑞希の作品真似しようと思ってたのに……」

みどり「やっぱりあたしたちは弱き者の側だったんだね……」

秀吉「お主らもか！？というか島田は何を盗作をしようとしておるのじゃ！？」

一瞬でカオスが生まれた。

瑞希「あ、あの、まだ時間はありますし、皆で考えましょう」

バカ４人「！！」

僕「そ、そうか！まだ世界が終わったと決まったわけじゃないんだ！」

雄二「そうだ！俺たちには、生き残った３０億人の人々の命と未来が掛かってるんだ！」

真琴「姫路の短歌とエヴ○を完成へと導き、使○を倒せば希望はある！」

康太「……シ○ジを連れてくる！」

秀吉「何故にエヴ○ンゲリオン設定なのじゃ……？」

それは作者が最近エヴ○にはまりだしたからだ！

瑞希「よ、よく分からないですけど皆さんやる気になってくれてよかったです……」

秀吉「姫路よ。もはやこやつらはわしらでは手の届かないところに

おるのじゃ……」

真琴「というわけでとりあえずオレが軽く作ってみたんだが……」
僕「あれ？真琴も出来たの？実は僕もなんだ」
雄二「お前らもか？俺もできたぞ」

僕、真琴、雄二が短歌が出来た。

瑞希「もう出来たんですか？」
美波「参考ついでにちょっと聞かせてみてよ」
僕「うん。いいよ」
真琴「どうせだから読み比べしようぜ」
雄二「お前らとの格の違いを見せてやる」

ほう……言うじゃないか雄二。
ならば僕の最高傑作を見ろ！

吉井明久の短歌

『バカ雄二
醜く汚く
最低で
代表でなければ
奴に価値はない
』

坂本雄二の短歌

『バカアホで
カスクズマヌケな
二人組み
吉井明久と
峰嶋真琴　　』

峰嶋真琴の短歌

『赤髪で
無駄に大きい
バカ野郎
このヒントだけで
誰だか分かるｗｗｗｗ』

「「「……（ガンのくれあい）」」」

この野郎……！
課題でも僕のことをバカにしてくるか……！

秀吉「おぬしら全員同レベルじゃの……」
僕＆雄＆真「こんなアホ短髪（バカども）と一緒にするな！」

こんな奴と同レベルだなんて心外もいいところだ。

雄二「お前みたいなバカに言われたくないな」
僕「そのバカに召喚大会で負けたのはどこの誰だっけ？」
真琴「あ……それオレ……」

あ、真琴が……

美波「ちょっと吉井！真琴の過去の醜態さらして酷いじゃない！古傷えぐって何が楽しいのよ！！」
瑞希「いくら真琴君が明久君に負けたからってその言い方は無いと思います！」
真琴「そんな悲しすぎてフォローにもなってないようなフォローなんか要らねえよ！！」

正直一番古傷えぐったのはこの二人だと思う。

雄二「そういう秀吉はどうなんだ？」
僕「そうだね。秀吉はできたの？」
秀吉「当たり前じゃ。こんな喋り方をしておるからのう。短歌くらいは作れないといけないと思って、今考えたのじゃ」

さっきも思ったけど簡単にできてるな。僕たち。

秀吉「それでは読むのじゃ」

自身たっぷりに言い放つ秀吉。
秀吉のことだからきっとまともな作品が――――――

木下秀吉の短歌

『男らしい
何から何まで
男らしい
誰よりも男な
木下秀吉
』

出来てなかった。

雄二「嘘ばっかりだな」
真琴「虚構と偶像だけで成立してるな」
瑞希「木下君、あとは『男』の部分を『女』に変えれば完成ですね」
秀吉「おぬしらなんて嫌いじゃ！！」

あ、秀吉逃げた。

真琴「それじゃ次は美波と姫路だな」
瑞希＆美波「！？」
真琴「いや、『！？』じゃなくて……」
瑞希＆美波「！！？」

このネタ分かる人いるんだろうか……
というかこの二人がここでネタに走る意味が分からない。

美波「ウ、ウチは別にちゃんとしたのが出来てるからいいのよ……／／／」
瑞希「そ、その、私はちょっと恥ずかしいので……／／／」

恥ずかしいのは分からなくも無いけどそこまで顔を赤くする必要が

あるのだろうか。

須川「おう、お前ら短歌やってるのか」
僕「あ、須川君。須川君はもう終わったの？」
須川「まあな。なんなら見せてやろうか？」
雄二「いいのか？」
真琴「ちょっと見てみたいな」
須川「おう。これだ」

須川亮の短歌

『天津飯
餃子に焼売
八宝菜
麻婆豆腐だ
中華は最高！
』

一同「……」
須川「な。凄いだろ？」
真琴「ただ中華料理の名前を集めただけじゃないか……」
雄二「これは……」
明久「ひねりも何も無いね……」
瑞希「これって短歌っていえるんですか……？」
美波「言えないわ」

これを短歌と呼んだら正岡子規あたりに失礼な気がする。

竹中「それでは授業を始めます」

大部分のひと「げっ！！」
竹中「課題の提出が出来ない人は…」
鉄人「俺の補習だ」
ほぼ全員「いやぁぁ～～！！」

NO　SIDE

瑞希「み、美波ちゃん。美波ちゃんは、どんなのにしたんですか？」
美波「ウ、ウチは、その、…いくら瑞希でも恥ずかしいのよ！」

瑞希「そうですよね……」
美波「そういう瑞希はどうなのよ！」
瑞希「わ、私ですか！？私はその……」
美波「ほら、やっぱり恥ずかしいじゃない」
瑞希「そ、そんなこと無いです！これくらいは言えないと……」
美波「無理しなくてもいいわよ。別に聞きたいってわけじゃ……」
瑞希「言います！」
美波「……は？」
瑞希「そ、その、やっぱり恥ずかしいけど、こういうのは恥ずかしがったらダメだと思うんです！」
美波「そ、そうよね！恥ずかしがったらダメよね！」
瑞希「よ、読みますね……」
美波「よ、読むわよ……」

姫路瑞希の短歌

『凛々しくて
強く優しく
大きな背中
私の大事な
吉井明久君』

島田美波の短歌

『カッコよく
誰よりも強く
生きていく
ウチの愛する

峰嶋真琴　『

瑞希「……／／／」
美波「……／／／」
瑞希「や、やっぱりこういうのは、自分の心の中にしまっておいた方が良いですよね！」
美波「そ、そうよね！そうするべきよね！」

二人の短歌は短歌としてみれば決して良作ではない。
だが、その一文一文に秘められた想いはとても強いものであり、

真琴「？」
明久「？」
真琴「今なんかいいことがあったような気が……」
明久「僕もだよ。気のせい……かな？」

別のところにいる鈍感な二人にも届くほどであった。

閑話4　バカ短歌祭！（後書き）

感想お待ちしてます！

閑話5‐1　僕とプールと水着の楽園――――で（前書き）

はい。アンケートの結果がＡＨＡＨＡ☆なことになったので周囲のバカテスファンのアンケートの結果、『僕とプールと水着の楽園』になりました（号泣）
僅差で『俺と翔子と如月ハイランド』が1位だったのですが、ペアチケットがないと言う（明久と瑞希で使っちゃった♪）作者の計画性皆無な結果でございます…

時期的には強化合宿の前なので宗太君はいませんよ。

閑話5‐1　僕とプールと水着の楽園――で

バカテスト　現代国語

問　以下の問に答えなさい。

『“少年探偵団”や“怪人二十面相”を世に送り出した日本の小説家の名前を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『江戸川乱歩』

教師のコメント

正解です。流石ですね。姫路さん。

吉井明久の答え

『犯人はこの中にいる！』

教師のコメント

先生ではありません。

峰嶋真琴の答え

『オレの弁当泥棒の犯人もこの中にいる！』

教師のコメント

それも先生ではありません。

明久ＳＩＤＥ

ある週末。
僕の家には悪友の坂本雄二と親友の峰嶋真琴が泊まりに遊びできていた。
え？なぜ僕の家の隣に住んでる真琴が僕の家に泊まりに来るのかって？
それは……

「みどりが秀吉のうちに泊まりで遊びに行ってるからな。オレ一人家にいてもつまらない」

だそう。
あの二人も結構仲いいなあ。
知らない人が見ると美少女×美少女なんだけど。

僕「あれ？二人ともその袋は何？」
雄二「食いもんだ。お前の家にはロクに食材もないからな」

じゃあ何で来た。

真琴「お前の分もちゃんとあるから安心しろ」
僕「あ、ほんと？いやぁ、瑞希と付き合い始めて多少はよくなったけど、それでも主食はごま油とこしょうだからね。助かるよ」
真琴「それは『よくなった』と言えるのか……？」
僕「え？全然いいじゃん」
真琴「姫路が不憫だ……」

その隣では雄二が袋から買って来た物を取り出していた。

さて、雄二は何を勝ってきたのかな？

・コーラ
・アイスコーヒー
・カップラーメン
・カップ焼きそば

飲み物と食べ物が二種類ずつ。
真琴は自分の分は自分で用意すると踏んだのだろうか。

僕「で、雄二はどれを食べるの？」
雄二「コーラとコーヒーとラーメンと焼きそばだ」
真琴「全部じゃねえか…」
僕「貴様！僕に割り箸しか食べさせないつもりだな！？」

なんて鬼畜な奴なんだ！

真琴「割り箸食う気かお前は」
雄二「お前に割り箸はやらん！俺が素手でラーメンを食う羽目になる！！」

結構だ。

雄二「安心しろ。お前の分もちゃんと用意してある」
僕「え？本当？やっぱ僕の悪友、僕のことを考えてくれて――」

・ダイエットコーラ
・こんにゃくゼリー
・ところてん

微塵も考えてくれてなかった。

僕「全部カロリー0じゃないか！！」
雄二「お前は栄養の偏ったものばっか摂ってるからな」
僕「そういうのしか摂れてないんだよ！！もういいよ！これはありがたく貰っておくけど、まことに期待するから！」

ありがたく貰っておく事だけは忘れない。

真琴「結局オレかよ……。えーと、買ってきたのは……」

真琴は袋に手を入れて中身を取り出す。

・カップラーメン
・四つ矢サイダー
・スナック菓子

僕「僕の分は！？」
真琴「あるから安心しろ。ほら」

・オロ〇ミンC

僕「雄二より酷い！！もう怒ったぞ！」
雄二「なんだ？やるか？」
真琴「やるってんなら相手になるぜ？」

僕たちはお互いにジュースを手ににらみ合う。

３人「……」
３人「！！」

シャカシャカシャカシャカ　（一斉にジュースを振る音）

ブシャアアアアアアアア　（３人でお互いに向けてジュースを放つ音）

バタバタバタバタバタバタ　（目を押さえてのた打ち回る音）

３バカ「目がァァ！！目が染みるゥゥゥゥ！！」

コーラが！！サイダーがァァ！！！

雄二「やるじゃねえかテメエら……」
真琴「雄二こそな……」
僕「流石は僕がライバルと認めた二人……」

そして僕はところてんとオロ〇ミンC、雄二は焼きそばとアイスコーヒー、真琴はカップめんとスナック菓子を手に勝負は第２ラウンドへ。

～しばらくお待ちください～

僕「……雄二、真琴。ここは一時休戦にしない？」
真琴「異議なし……」
雄二「ああ。この戦いは不毛だ……」

気づけば皆コーラやらゼリーやらでべとべとになっていた。
気持ち悪い事この上ない。

雄二「明久、シャワー借りるぞ」

そう言って雄二が立ち上がる。

僕「あ、うん。タオルはその辺の適当に使ってよ」
雄二「言われなくてもそうする」

そういうと雄二は風呂場に移動する。
少ししてバシャバシャとぬれた服を脱ぎ捨てる音が聞こえてきた。

僕「あ、そういえば雄二、一つい忘れてたんだけど」
雄二『あ？なんだ？』

そして浴室に入り、蛇口をひねる音。

僕「ガス止められてるから水しか出ないよ」

雄二『ほわあぁぁぁぁぁッッッ！！？』

ガチャ　ズカズカズカ

雄二「……先に言えやコラ」
僕「ゴメンゴメン。まずは手や足みたいな心臓から遠いところに冷水を――――」
真琴「誰も冷水シャワーの浴び方を言えなんていってないからな」
雄二「もういい！！お前に家のシャワーは借りん！！」
僕「じゃあどうするの？真琴の家のお風呂使う？」
雄二「それでもいいが――――――――どうせならプールもついてるところに行くぞ」
真琴「そんなとこの近くには――――ああ、あそこか」

？　どこ？

雄二「ホラ明久。早く支度するぞ」
僕「う、うん」

なんだかよく分からないまま雄二と真琴についていった。

鉄二「……で、何か言い訳はあるか？」

その二時間後、僕ら三人は鉄人に捕まった。

３バカ「コイツらが悪いんです」

僕らは全員で他の二人を売った。

僕「雄二と真琴がまともな差し入れ持ってこないのが悪いんだろ！！」

雄二「ガス代払ってない明久とオロ○ミンＣ持ってきた真琴が悪いんだ！！」

真琴「お前らがバカなのが悪いんだよ！！」

僕らの低レベルな言い争いが始まる。

それを見た鉄人は……

鉄人「お前らが真性のバカだという事がよく分かった！！」

両サイドにいた僕と雄二の顔面をわしづかみにし、中央にいた真琴の頭を足でコンクリにダイブさせた。

鉄人「お前らは次の週末、プール掃除をするように！！」

３バカ「了解です……」

そして週明け……

雄二「というわけだ」
秀吉「それは大変じゃったのう」
僕「ほんと、あんな大きいプールの掃除なんてね……。気が滅入るよ」
康太「……重労働」
真琴「そう言うなって。掃除の代わりにプール自由に使っていいって言われたんだし」

とはいえ大変なものは大変。
少しでも手数が欲しいところだ。

雄二「で、どうだ？秀吉とムッツリーニも週末プールに来ないか？」
秀吉「いいのかのう？」
康太「……ありがたい」
真琴「ただし、ムッツリーニにはプール掃除手伝ってもらうけどな」
康太「……」

一瞬でムッツリーニの表情が凍った。
さっきムッツリーニが言ったとおり、プールの掃除は重労働だ。
おそらく秀吉の写真とプール掃除を秤にかけてるんだろう。

真琴「ああ、美波と姫路とみどりも誘っておこうかな？」
康太「……ブラシと洗剤を用意しておけ」

どうやらムッツリーニの中で

プール掃除＜瑞希＆秀吉＆島田さん＆名川さんの水着

という方程式が確立したようだ。

瑞希「皆さん楽しそうに何を話してるんですか？」
美波「何の話してるの？」
みどり「プールがどうとかって聞こえたけど？」

と今話題に上がったFクラスを代表する美少女3人がやってきた。
噂をすれば影とはこのことだろう。

瑞希「……」
僕「？　どうしたの、瑞希」
瑞希「いえ、その、今明久君がとても的を射たことを言った気がしたので……あの、熱とかないですか？」

失敬な。

僕「今さらっと酷いこと言ったよね？」
雄二「いや、そんなことはないぞ」
僕「雄二黙れ」
真琴「まあバカ二人はほっといて、実は週末にプールをオレたちの貸切で使えるんだがどうだ？」

別にプール掃除の事は言わなくていい。という真琴の配慮だろうか。
まあ瑞希にそんなことさせられないけど。

瑞&美&み「プ、プール（ですか）！？」

3人同時に叫ぶ。
瑞希と名川さんは自分の腹部へ、島田さんは胸部へ視線を落とす。
……ああ、そういうことか。

真琴【明久、秀吉、やるぞ】
僕【うん。分かってる】
秀吉【こんな千載一遇のチャンスを逃すわけには行かぬからのう】

秘技、アイコンタクト。
僕らは自分の目的の為に協力することを誓った。

僕「僕、瑞希の水着見てみたいな～（棒読み）」
真琴「オレも美波が水着見せてくれたらうれしいな～（超棒読み）」
秀吉「わしもみどりの水着姿を見てみたいの～（超ド級棒読み）」

そろいも揃って棒読み祭。
ちょっとやりすぎたかな？
流石にこんなあからさまなのに引っかかるわけは――

瑞希「行きます！何があっても行きます！！」
美波「行かせて貰うわよ！！何が何でも！！」
みどり「Ｗａｉｔｉｎｇ，ｉｔ ｉｓ ａ ｐｏｏｌ！！ Ｉｔ ｇｏｅｓ ｒｉｇｈｔ ｎｏｗ！！（待っててプール！！今すぐ行くよ！！）」

あった。ムチャクチャ綺麗に引っかかった。
名川さんに至っては何故か英語だし。

雄二「そ、そうか。ならあとは翔子に声をかければ終わりだな」
僕「へぇー、雄二も素直になったじゃん」
真琴「霧島の思いもついに成就したか」
雄二「いいや違うぞ」

雄二の言葉に首をかしげる僕と真琴。
違うってどういうことだろう？

雄二「いいかお前ら。姫路に島田、名川に秀吉。この面子で翔子に黙ってプールに言ったら俺はどうなると思う？」

雄二がどうなるか？
軽く想像してみる。

僕「富士の樹海……いや、富士山の火口……？」
真琴「深海魚のえさ……いや、宇宙塵（デブリ）……？」
雄二「俺の末路まで想像する必要は無いがそんなところだ」

確かにあり得る。
霧島さんは雄二が女子（またはそれに相当する何か）と仲良くしてると襲い掛かってくるから。

雄二「とにかく全員ＯＫのようだな。じゃあ土曜日の朝十時に校門前に集合だ。タオルと水着を忘れるなよ」

ちなみにこの後瑞希が勝負水着がどうとか言ってた。

閑話5‐2　僕と皆といつまでたっても入れない。（前書き）

ノッポガキさん感想ありがとうございました！
そしてＰＶ１８００００、ユニーク１５０００行きました！
これからも『バカとＦクラスと転校生』を宜しくお願いします！

閑話5‐2　僕と皆といつまでたっても入れない。

バカテスト　歴史

問　以下の問に答えなさい。

『第二次世界大戦でドイツ軍が得意とした爆撃と機甲師団の連携による戦術を何と言うでしょう』

姫路瑞希の答え

『電撃戦』

教師のコメント

正解です。流石ですね、姫路さん。
航空機部隊と機甲師団が連携をとって、敵陣の弱い所を素早く攻めることで、少ない兵力で効率よく攻め入る戦い方です。突破した防衛線を敵が修復する隙を与えず、迅速に攻め続ける戦法は、ガソリンエンジンによる機動力と、無線機による通信技術が不可欠でした。

峰嶋真琴の答え

『集団リンチ』

教師のコメント

そこまで一方的だったのでしょうか。

吉井明久の答え

『ガンガン行こうぜ！』

教師のコメント

命を大事にしましょう。

明久ＳＩＤＥ

僕「おっはよー。絶好のプール日和だね」
真琴「おう、晴れてよかったな」
瑞希「おはようございます。明久君」

週末。場所は校門前。
休日に学校と言ったら普段は補習だけど今日は違う。
なんたって瑞希の水着姿が拝めるのだから！！

秀吉「おはようじゃ、明久」
みどり「アッキーおはよう～」
僕「うん。おはよう」

雄二と霧島さんはまだ来てないみたいだから、あとは……

僕「おはよう。ムッツｒ――」
康太「……！！（カシャカシャカシャ）」

すごい勢いでカメラの手入れをしているムッツリーニだ。

僕「ムッツリーニ、おはｙ――」
康太「……今忙しい（カシャカシャカシャ）」
秀吉「さっきからずっとこの調子なのじゃ……」

流石ムッツリ代表としか言い用がない。
でも――

僕「それって無駄になるんじゃない？」
康太「……なぜ？」
僕「だってムッツリーニじゃ鼻血の海に沈んじゃいそうだし」
真琴「あ、あり得る」

チャイナドレスの想像だけで鼻血を出すムッツリーニのことだ。
水着では即死だろう。

康太「……この俺を甘く見てもらっちゃ困る」

自信たっぷりに言い放つムッツリーニ。
そして大きなスポーツバックの中身を見せてくる。
まさか、鼻血を出さなくなる何かが……！？

康太「……輸血の準備は万全」
真琴「コイツは鼻血を出さないようにすることを諦めてる……」

スポーツバックの中身は大量の輸血パックだった。
どうやって手に入れたかはあえて聞かないでおこう。

僕「そういえば雄二は？まだ来てないの？」
真琴「いや、きてんぞ」
瑞希「はい。さっき翔子ちゃんと一緒に鍵を取りに行きましたよ」

なるほど。霧島さんと一緒とはまた異端審問会にかける必要がありそうだな。

葉月「バカなお兄ちゃんと可愛いお兄ちゃん～～！！」
僕＆真琴「「おわっと！？」」

うしろから何かが乗ってくる。
僕と真琴は予期せぬ衝撃にちょっと倒れかけた。

真琴「って葉月ちゃんかって葉月ちゃん？」
僕「びっくりした～ってなんで葉月ちゃんが？」

僕と真琴がびっくりしてるとちょっと遅れて島田さんがやってきた。

美波「こら葉月。真琴と吉井が困ってるでしょ。はやく真琴からハナレサナイ……」

最近島田さんが怖い。

真琴「葉月ちゃんがなんでここにいるのかはさておいて、おはよう美波」
美波「おはよう真琴」
瑞希「おはようございます。美波ちゃん」
美波「おはよう瑞希。晴れてよかったわね」

ちなみにこの会話の間、葉月ちゃんの頭は僕の鳩尾にぐりぐりと押し付けられている。

僕「は、葉月ちゃん……そろそろどいて……くれないかな……」
真琴「あ、明久！？まずいのじゃ！！明久がお花畑を見始めておるのじゃ！！」
美波「葉月！！早く吉井から離れなさい！！」
葉月「むうぅ～～……しょうがないです……」
瑞希「明久君！？目がうつろですよ！？しっかりしてください！！」

あ、あはは……お花畑だぁ～……あはは……

雄二「おう、待たせたな……って明久はどうしたんだ!?」

翔子「……どうしてこうなってる?」

僕が意識を取り戻すまでに要した時間１３秒。

普段からＦＦＦ団や雄二に拷問されてるおかげで少し耐性がついてたみたいだ。

瑞希「あ、明久君!大丈夫ですか!?」

僕「ま、まあなんとかね……」

この瞬間だけは級友の暴徒どもに感謝しておこう。

秀吉「しかしおぬしの回復力は凄いのう」

僕「まあアレだけ普段から追いかけられればね……」

真琴「ご愁傷様…」

僕「手を合わせないでくれるかな。まだ生きてるから」

康太「……明久」

僕「?　どしたのムッツリーニ?カメラの手入れしてると思ってたんだけど?」

康太「……秀吉から重大発表があった」

重大発表?なんだろ?

雄二「アレを重大発表と言うのはムッツリーニだけだと思うぞ」
真琴「悲しいことにオレも同感だな」
康太「……！？（ブンブンブン）」
僕「そんなことどうでもいいから早く教えてよ！」

気になる。ムッツリーニが言う重大発表の中身が非常に気になる。

康太「……今日の秀吉の水着はトランクスタイプ」
僕「ばかなぁーーーー！！？」
秀吉「明久！どうしておぬしはそこで取り乱すのじゃ！？」

秀吉がトランクスタイプだと！？
まさかそんなはずは無い！！

僕「秀吉！嘘だと言って！！お願いだから！！」
康太「……俺からも頼む」

ムッツリーニも懇願する。
どうやらコイツも認めたくないようだ。

秀吉「いや、本当にトランクスタイプの水着を買って来たのじゃが……」
僕&康太「ばかなぁーーーーー！！？」
秀吉「だからどうしてそこまで取り乱すのじゃ！？」
真琴「気にするな秀吉。気にしたら負けだ」

あ。この台詞、前にも聞いたことある。

瑞希「明久君……木下君の水着がトランクスタイプじゃダメナンデ

スカ……？」

ハッ！？殺気！？

明久「そんなこと無いよ！？トランクスタイプでいいじゃないか！！なあムッツリーニ！？」

康太「……トランクスタイプも立派な水着（コクコクコクコクコクコクコクコクコクコク）」

ムッツリーニが凄い勢いで頷いている。

本来瑞希の殺気は僕一人に向けられたはずのものなのにムッツリーニがここまでおびえるとは……

瑞希「木下君モだめデスヨ……？明久君ヲ誘惑シチャァ……」

秀吉「ひ、姫路！？待つのじゃ！！わしの腕はその方向には――ぎゃあ！！」

どうやら秀吉が犠牲になったようだ。

このままだとこの場にいる全員が人類の新境地へと達しかねない。

僕（真琴！！なんとかならない！？）

真琴（……やってみる。オレも流石に秀吉のようにはなりたくない）

秘技、アイコンタクトで真琴に救援要請。

僕も秀吉のようにはなりたくない。

真琴「そういえば明久が前に、『人の関節を平気でありえない方向へ導く女子は嫌い』とか言ってたなー（ＭＡＸ棒読み）」

勿論そんなこと一言も言ってない。

けどそんな危険人物を好きになれるかどうかといわれれば自信は無い。

瑞希「……（ピク）」

なんか反応してる。

真琴「そういや、『暴力振るう女子も嫌い』とか言ってたかもー（EX棒読み）」

瑞希「……（ピクピク）」

お。反応具合が強まった。

真琴「あ、『嫉妬する女子も嫌い』とか――」

瑞希「ごめんなさい明久君!!もうしませんから!!」

瑞希が光の速度で謝罪＆ハグ。

凄い。

僕（……真琴）

真琴（正直、やりすぎたと思ってる）

やりすぎだろう。ここまで行くとも思ってなかったが。

雄二「遊んでないで早く行くぞ」

僕「あ、雄二いたんだ」

雄二「殺すぞ」

そんなのゴメンだ。

真琴「じゃれてないでさっさと行くぞ。着替えてプールサイドに集合な」
一同「はーい」

男子と女子がそれぞれの更衣室に向かって歩き始めて……ってあれ？

僕「ダメだよ。葉月ちゃんと秀吉はあっち」
葉月「えへへ、冗談です♪」
秀吉「わしは冗談ではないのじゃが……」

秀吉が男子更衣室で着替えたら僕とムッツリーニの命が危ない（主に瑞希＆鼻血関連で）。

僕「ダメだよ秀吉。わがまま言っちゃ」
秀吉「いいのじゃ！わしは男じゃから、男子更衣室で着替えてもいいのじゃ！！」

わがままを言い続ける秀吉に瑞希と霧島さんが近寄る。
どうしたんだろう？

翔子「……雄二の前で脱いだら、許さない……！！」
瑞希「木下君……まさかとは思いますけど、もし明久君を誘惑シタラ……！！」
秀吉「どうしてそうなるのじゃ……！？」

ダーク・オブ・瑞希（真琴命名）と化した瑞希と霧島さんが秀吉に迫っている。
秀吉ヴィジョンではムチャクチャ怖いんだろう。

雄二「大丈夫だ秀吉。ほら」

雄二が助け舟を出す。
雄二が指差す先には――

・男子更衣室
・女子更衣室
・秀吉更衣室

――秀吉更衣室があった。

『秀吉って性別なんだ……』

僕と真琴は同時にツッコんでいた。

閑話5-2　僕と皆といつまでたっても入れない。（後書き）

いつになったらプールに入れるのやら……

閑話5-3　僕と水着と生物兵器（＝瑞希？）（前書き）

ＳＨＩＮさん感想ありがとうございました！

閑話5‐3　僕と水着と生物兵器（＝瑞希？）

バカテスト　国語

問　以下の問に答えなさい。

『小説や劇などの物語で、めでたく解決を迎える最後の場面を何と呼ぶでしょう』

姫路瑞希の答え

『大団円』

教師のコメント

正解です。流石姫路さんですね。
物語はハッピーエンドばかりではなく、悲劇的な結末の場合はカタストロフィーと呼んだりします。姫路さんはどんな物語が好きでしょうか。世界には、一人の人間が生きてる間だけでは読みきれないほど沢山の素晴らしい物語が存在します。より多くの物語に触れ、見聞を広めてください。

峰嶋真琴の答え

『この物語がハッピーエンドになるとは限らない』

教師のコメント

ハッピーエンドであることを願います。

吉井明久の答え

『ラスボス戦』

教師のコメント

経験地が足りません。

明久ＳＩＤＥ

秀吉が秀吉更衣室で着替えるというわけの分からない譲歩であの場は治まった。
今、僕ら男子軍はプールサイドにいる。

僕「プールに入る前にしっかり準備運動しとかないとね～」

水の中で足が攣ると悶絶するくらい痛い。

雄二「にしても女子は遅いな」
真琴「いろいろあるんじゃないか？男には分からない苦労が」
雄二「なんだ？お前なんか分かってるみたいな言い方だな」
真琴「ふ……伊達にみどりに女装強制されてないぜ……！」

何故か真琴が遠い。

康太「……血液パックが痛まないか心配」
僕「その台詞はどうかと思うけど確かに日差し強いよね」

ちょっと強すぎるくらいかも。
これ以上強くなられたら焼けすぎてひりひりしそうだ。

真琴「とは言え、早く来て欲しいのは確かだな」
僕「やっぱ真琴は島田さんの水着」
真琴「当然だ」

ちなみに僕は瑞希の水着が気になって仕方ない。

葉月「お兄ちゃんたち～～！お待たせです～～！」

僕「あ、葉月ちゃんだ」

どうやら女性陣一号は葉月ちゃんのようだ。

ふぅ……葉月ちゃんの水着は学校で使われる俗に言う「スクール水着」と言うやつだが、さて……

僕「さて、どうしようかムッツリーニ」

康太「……懲役は二年程度」

雄二「小学生の水着にそこまで動揺するなバカ」

とは言ったものの、ぼくは刑を受けるつもりなんてさらさらぎゃあああ！！

なんてことだ！！葉月ちゃんのある部分が小学生とは思えないレヴェルに！！

僕「どどどどうしよう真琴！！これじゃあ捕まっても文句言えないよ！！」

康太「……極刑は免れない（ダバダバダバ）」

真琴「落ち着け。別になんもないから。それから葉月ちゃん。恐らくそれはお姉ちゃんのだから悪戯しちゃダメだよ」

真琴が葉月ちゃんのありえないくらい出てる部分を指差して言う。

へ？お姉ちゃんって島田さんのこと？

どういうこと？

葉月「あうぅ……そうですか……」

美波「こらぁ！！葉月それ返しなさい！！」

よく分からないまま島田さんが物凄い表情で走ってくる。
それって何のこと？？

葉月「あうぅ……ずれちゃいました」

しかもありえないそれがあるべきところから御仲の辺りへと移動していた。
まさかあれって……

葉月「はいお姉ちゃん。返すです」
美波「もう！悪戯しちゃダメでしょ！！」

葉月ちゃんが水着の中から見てはいけないもの“X”を取り出す。
そし島田さんがそれを目に留まらぬ速さで回収。

僕&真琴「島田さん（美波）それって胸パッ――――」
美波「この一撃にウチの全てをかけるわ……！！」

ヤヴァイ。島田さんの戦闘力が5桁ほど増えてる。

真琴「待つんだ美波！オレは何も見ていない！！だからこの場は明久一人で抑えてくれ！！」
明久「真琴！？売る気！？僕を売る気！！」
真琴「うるさい！お前一人でこの場が収まるなら安い！！」
明久「最低だぁ！！」
美波「さあ吉井。ウチの最凶の一撃を喰らいなさい……！」
明久「ストップ！！島田さん落ち着いて！！落ち着いて冷静にゴハァ！！」

この瞬間本日二回目の気絶を迎えた。

瑞希「…………さく…………久君！…………明久君！！」

なんだろう？瑞希の声が聞こえる。

瑞希「明久君！しっかりしてください！」

瞼を開けてみると、瑞希が膝枕で手当てしてしてくれていた。
――水着姿で。

僕「ふぬぉ！？」
瑞希「あ、明久君！？どうしたんですか！？」

ヤバイヤバイヤバイ！
僕の鼻の奥から広がる鉄分の香りが余計な赤い衝動を引き起こし、目の前に広がるありえない生物兵器（瑞希）が余計に僕の赤い衝動を落ち着け僕！
周囲を見回せ！きっと何かあるはずなんだ！僕が助かる何かかが！！

・鼻血を出して痙攣しているムッツリーニ。
・霧島さんに目潰しをされている雄二。
・島田さんにアイアンクローをかけられている真琴。
・それらを見て楽しそうに笑っている葉月ちゃん。

おおおおお落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け！

瑞希「あ、明久君！大丈夫ですか！？」
僕「うん。もう大丈夫だよ（ダバダバダバ）」
瑞希「ぜ、全然大丈夫じゃないじゃないですか！！」

ははは、身体はうそつき……

真琴「あ、明久……落ち着け……」
僕「あれ、真琴。もう許してもらったの？」
真琴「まあな……。ちょっと地獄を見たからな……」

僕を売ろうとしたんだから当然の報いだろう。

瑞希「明久君。もう大丈夫なんですか？」
僕「うん。なんとかね」
瑞希「ならよかったです」

今の僕の窮地は彼女の生物兵器によってもたらされたものだけど当然本人には自覚は無い。
まあ当然かもしれないけど『翔子……心配するくらいなら最初から目潰し（ブス）殺せェェェェ！！いっそ殺せェェェェェェ！！』
……無自覚でも許されるのかな？

秀吉「おーい、お主ら、待たせたのじゃ……ってなんじゃこのカオ

スは！？」
みどり「あはは……流石Ｆクラス……」
遅れてきた秀吉と名川さんは混乱していた。

その場を真琴が（身体を張って）治めて１０分後。
瑞希「明久君、泳ぐの上手なんですね」
僕「まあね。人並みにはできると思うけど」
美波「真琴は……想像より速くないわね」
真琴「悪かったな。水泳は別に得意じゃないし、明久と同じくらいには出来てるつもりだ」

改めて見ると瑞希はピンクのビキニにパレオ、島田さんはスポーツタイプのセパレートだ。
瑞希は言わずもがな、島田さんもほっそりとしたモデル体型でかなりレベルが高い。
これならムッツリーニが即死するのも分かる気がする。
瑞希「あの、私実は全然泳げないので、皆さんに教えてもらえたらいいなぁ……って思ってたんですけど……」

なるほど、確かに瑞希が凄いスピードで泳ぐ姿は想像できない。
努力家の瑞希のことだから苦手な運動も何とかしたいのだろう。

美波「そういうことだったら協力するわよ」
真琴「オレも付き合うぞ。当然明久もやるだろ？」
僕「僕もやるよ」
瑞希「皆さん、ありがとうございます！」
僕「ううん、気にしなくていいよ」

これからのシーズン、海やプールに行くことは多くなるだろう。
なのに泳げないんじゃつまらないだろう。

美波「……」
真琴「？　どうした美波」

なぜか島田さんが瑞希のある部分を凝視している。
一体どうしたんだろう？

美波「瑞希。アンタが泳げない理由が分かったわ」
瑞希「え？ほんとですか？」
美波「その浮き輪をいつまでもつけてるからよ！！外しなさい！そしてウチに寄越しなさい！！」
真琴「うわ！？ちょ、落ち着け美波！！」
僕「そうだよ島田さん！冷静になって！！」
美波「離しなさい真琴に吉井！」
瑞希「美波ちゃん！？目が怖いですよ！？」

島田さんが瑞希に向かって駆け出そうとする。
そこを僕と真琴で羽交い絞めにする。

美波「離しなさい！！寄越しなさい！！」
瑞希「だ、ダメです！これは明久君のものです！！」
真琴「待て姫路！！その台詞は美波を煽るだけだから！！」
康太『……魅惑の会話……！（ブシャシャシャシャシャアアアア！！）』

ムッツリーニィィィ！
君の死は忘れないよぉぉ！

みどり「あはは～、皆楽しそうだね」

さらにそこへ別の生物兵器を持った名川さん登場。
これはマズイことになりそうだ。

美波「みどり！アンタでもいいから寄越しなさい！！」
みどり「え！？みなみんどしたの！？何事！？」
瑞希「みどりちゃん！逃げましょう！」
みどり「は！？え！？なに！？」
美波「待ちなさいあんたたち！真琴も吉井も、離しなさい！！（ブン！）」
真琴「は！？」
僕「え！？」

島田さんが僕と真琴が掴んでる腕を思いっきり振り回す。
そしてそのまま……

僕&真琴「なああ！？」

ザッパーン！！

思いっきりプールに投げ出された。
僕「ガバガバ……あー、びっくりした……」
真琴「……今何が起こったんだ？」
島田さんたちは3人で追いかけっこを始めていた。
僕らが介入する余地はなさそうだ。
葉月「お兄ちゃんたち、水中鬼して遊ぶです！」
そこで後ろから葉月ちゃんに声をかけられる。
僕「水中鬼？水中でやる鬼ごっこかな？」
真琴「へぇー、面白そうだな」
葉月「違うです。水中鬼って言うのはですね……」
え？違うの？
僕らが頭上に？を浮かべていると葉月ちゃんが説明してくれる。
葉月「鬼になった人がそうじゃない人を水中に引きずりこんでおぼれさせるゲームです！」
僕&真琴「鬼だ！それは確かに鬼だ！」
僕と真琴が同時に突っ込む。
「ごっこ」がついてないと思ったらそういうことか！！
僕「って葉月ちゃん。その遊びは危ないから、しちゃだめだよ」
万が一死人が出たらシャレにならない。

葉月「あうぅ……。ダメですか……」
真琴「どれくらい危ないか教えてあげるからさ。見てろ。おーい、霧島！」

真琴が霧島さんを呼ぶ。教えるってどうやって……ああ、そういうことか。

翔子「……何？」
真琴「雄二と水中鬼って遊びをやって欲しいんだよ。ルールは簡単で、霧島が雄二をおぼれさせてから人工呼吸したら霧島の勝ち」
翔子「……行ってくる」

風のように現れ、風のように去っていく霧島さん。
あのスピードは凄い。

雄二『おわ！？なんだ！？足が急にガバガバガバ』
翔子『……雄二、速くおぼれる』
雄二『翔子！？お前いきなり何をトチ狂って……ガバガバガバ！！』

真琴「な？危ないだろ？」
葉月「はい……危ないからやめるです……」
僕「うんうん。葉月ちゃんは偉いね」

コポコポコポ……

？　何の音だろ？

雄二「ブハア！！お前らの差し金か！！」
僕「うわ！？雄二！？」

真琴「霧島！旦那が逃げてる！オレらを犯そうとしてる！！」
雄二「！？　テメ、名に言ってやがギャアア！！翔子か！？」
翔子「……雄二、浮気は許さない」
雄二「ガバガバガバガバガバガバガバガバガバガバ（お前ら、後で覚えてろよ！！）」

雄二のおかげで水中鬼がどれだけ危険なのかがよく分かった。

閑話5-3　僕と水着と生物兵器（＝瑞希？）（後書き）

感想お待ちしてます！

閑話5-4　オレとワッフルと最速王者決定戦（前書き）

映画のチケットがないのでバレーボールのネタは無しです。

閑話5‐4　オレとワッフルと最速王者決定戦

バカテスト　特別問題

問　以下の問に答えなさい。

『文月学園において採用されている試験を用いて行う戦いを何と呼ぶか答えなさい』

姫路瑞希の答え

『試験召喚戦争』

峰嶋真琴の答え

『試召戦争』

教師のコメント

正解です。
君達二人の所属するFクラスは春の試召戦争でAクラスに負けてしまい、3ヶ月間の宣戦布告を禁止されていますがもうすぐ解禁です。
勝利を目指して頑張ってください。

吉井明久の答え

『お受験戦争』

教師のコメント

この作品の根幹を間違えないでください。

真琴ＳＩＤＥ

??「あー、誰かと思ったらプール使ってたの代表だったんだ」

雄二と霧島が水中鬼に花を咲かせていると誰かがやってきた。

明久「あれ？どこかで見たような……」

雄二「誰かと思ったらＡクラスの工藤じゃないか」

君を短く切ったボーイッシュな感じの女子だ。

翔子「……なんで愛子が？」

愛子「あはは、ボク水泳部だから」

雄二「だが今日は水泳部は休みのはずだが？」

そう。今日オレたちがこうやってプールを貸しきれるのだって水泳部が休みだからだ。

その水泳部の工藤がここにいる訳が無い。

愛子「そうなんだけどさ、ボクすっかり忘れてて、学校来てから気づいたんだよね。しょうがないから帰ろうかと思ったらプールのほうから声がしたから来てみたんだ」

オレ「それでここにいるのか」

愛子「うん。でさ、ボクも一緒にいいかな？」

雄二「いいんじゃないか？なあ」

全員「うん（おう）（はい）（ええ）」

愛子「よかったー。じゃあ着替えてくるねー……っと、覗くならばれないようにね？」

工藤が去り際に一言残していった。

翔子『……雄二、浮気は許さないと言った』

雄二『まて翔子。俺は何にもしていな（ブス）ギャアアア！！』

明久『……』
瑞希『明久君？余計な動きを見せたら、大変なことになりますよ？』
美波『生きて家に帰りたくないの？真琴』
康太『……！！（ブシャアアアア）』

……工藤には色々教えたほうが良さそうだなぁ……

工藤が生み出したカオスも消え去った頃、事件はおきた。

きっかけは明久のこの一言。

明久「はぁー、なんかおなか空いて来たね」
秀吉「うむ。そろそろ昼時じゃしのう」

確かに言われてみれば腹が減ったような気もする。

オレ「けど弁当もなにも持ってきてないぞ？」
雄二「その辺のコンビニで弁当でも買ってくるか？」

しょうがないからそうしようかと思ったとき、ピンクの悪魔は舞い降りた。

瑞希「あの、でしたらここにワッフルが３（＋１）つ……」

雄二『第一回！』
オレ『最速王者決定戦！』
オレ＆雄二『ガチンコ水泳対決ーー！！』
秀吉＆康太『イェーーー！！』

４人で仲良くタイトルコール。
女性陣は訳が分からないと言った顔をしている。分からないほうが幸せだが。
え？なんで明久が参加してないのかって？それは……

瑞希「はい。これ、明久君の分です」
明久「ありがとう。（モグモグ）……うん。美味しいよ」
瑞希「ほんとですか？よかったです♪」

アイツは安全圏にいるからである。

雄二「真琴！ルールの説明頼む！」
オレ「オーケー！ルールは簡単！この文月学園のプールを往復して、最初にゴールした奴の一人勝ちだ！」

姫路瑞希（ひっさつりょうりにん）の殺人ワッフルは３つ。
参加者は４人。
つまり最初にゴールした王者だけが死を免れるのである。

愛子「よく分からないけど、競争するならボクが審判やるよ」
翔子「……雄二、応援してる」
美波「真琴！負けたら許さないからね！」
みどり「秀君！応援してるよ！」
瑞希「皆さん頑張ってくださいね！」

女性陣からの応援が入る。
その中に全ての元凶がいるのは気に食わないが。

葉月「可愛いお兄ちゃん！頑張ってくださいです！お兄ちゃんのプライドをかけた戦い、応援してるです！」

違うんだよ葉月ちゃん。
かけてるのはプライドじゃなくて命なんだ。

参加者４人が位置につく。
オレ個人の水泳のレベルは高くないがそれでも秀吉には負けないだろう。
ムッツリーニはさっきから出欠のオンパレードで弱ってる。となると……敵はただ一人！

愛子「それじゃ位置について、よーい……どん！」

工藤がスタートの合図をする。と同時に……！

オレ＆雄二「くたばれェェェーーー！！」

オレと雄二の取っ組み合いスタート！！

オレ「チィッ！やっぱ同じこと考えてたか！！」

雄二「いきなり仕掛けてくるとはやるじゃねえか！！」

パンチキック延髄切り。

くたばれ雄二！そしてオレの生命の礎となれ！！

愛子「取っ組み合いもいいけど、先頭はもう折り返しだよ？」

オレ＆雄二「は！？」

二人揃って同じ方向を見る。

秀吉はもう折り返しだと！？

雄二「まずい！！俺はムッツリーニを殺る！！真琴は秀吉は殺れ！！」

オレ「了解！」

雄二の指示に従って秀吉のいるレーンに飛び込む。

え？字は間違ってないぞ？

オレ「秀吉！ここは通さねぇ！！」

秀吉「真琴！？なにをしておるのじゃ！？おぬしは隣のレーンじゃろう！？」

オレ「ダメだ！オレの生命の為にも、ここで散ってくれ！！」
秀吉「ええい！わしだってまだ死ぬわけには行かぬのじゃ！！」

そしてオレと秀吉が接触する。
手を前に出して、防御すると……手になにやら布のような感触が。

美波「ちょっと真琴！アンタ何やってるのよ！！」
瑞希「あ、明久君！見ちゃダメです！（モフ）」
明久「ふぁふぃ！？ふぇ！？ふぁふぃふぁほほっへるお！？は、へもほれはほれへひひはも……（何！？え！？何が起こってるの！？あ、これはこれでいいかも……）」

え？何って……

オレ「……は？」
秀吉「む……？なにやら胸元が涼しいのう」
オレ「これって……わ、悪い秀吉！返す！返すから！！」
秀吉「真琴！？おぬしは何でそこまで慌てるのじゃ！？」

いや慌てるだろ！！

雄二『なんだ！？何が起こって……うお！？ムッツリーニ、この出血量はやばくないか！？』
康太『……死して尚、一片の悔い無し……！』

美波「き、木下！速く胸を隠しなさい！」
秀吉「い、嫌じゃ！わしは男じゃから、胸を隠さずともいいのじゃ！！」
みどり「秀君！今はムッツリーニ君の命かかってるから！！」

瑞希「木下君。わがまま言っちゃダメです！土屋君が死んじゃいます！！」

オレ「待て姫路！その前に明久が窒息死しそうだ！！」

明久は姫路の胸に顔を押さえつけられ、若干幸せそうな顔をして痙攣していた。

愛子「あはは……これはお掃除大変そうだね……」

工藤の言うことが妙に心に残った。

鉄人「吉井、坂本、峰嶋。ちょっと聞きたいことがある」

朝現れるなりいきなり鉄拳尋問タイム。

雄二「断る」
オレ「喋んない」
明久「黙秘します」

当然黙り込みを決めるオレたち。
その反応に鉄人はプルプル震えだす。

鉄人「どうして……どうしてプール掃除を命じたのにプールが血で汚れてるんだ!!鉄拳をくれてやるから生徒指導室で話を聞かせろ!!」
雄二「冗談じゃない!死人を出さなかっただけでも褒めて欲しいくらいだ!」
オレ「まったくだ!感謝しろ鉄人!」
明久「そうだそうだ!」
鉄人「黙れ!お前らの日本語はさっぱり分からん!拳で語り合ったほうが早い!」

暴力か!また暴力か!

結局鉄人と拳で（一方的に）語り合った後事情は理解してもらえた。

鉄人「……今度の強化合宿の風呂は木下を別にする必要がありそうだな……」

この台詞も妙に心に残った。

ＮＯ　ＳＩＤＥ

美春「あの豚野郎……！美春をこのような目にあわせるとは……覚えていなさい！！」

そこには峰嶋真琴によって逆さ釣りにされた清水美春がいた。

閑話5-4　オレとワッフルと最速王者決定戦（後書き）

次回、オリストーリーです！
感想お待ちしてます！

第五十八話　聖獣型召喚獣編　プロローグ（前書き）

時期的な関係で雄二とムッツリーニの出番が皆無です！
二人のファンの皆様、ごめんなさい！
駄文ですが、我慢して読んで頂ければ幸いです。

第五十八話　聖獣型召喚獣編　プロローグ

バカテスト　歴史

問　以下の問に答えなさい。

『西暦１４９２年、アメリカ大陸を発見した人物の名前をフルネームで答えなさい』

姫路瑞希の答え

『クリストファー・コロンブス』

教師のコメント

正解です。卵の逸話で有名な偉人ですね。
コロンブスという名前は有名ですが、意外とファーストネームが知られていない事が有名です。
意地悪問題のつもりでしたが、姫路さんには関係なかったようですね。良く出来ました

清水美春の答え

『コロン・ブス』

教師のコメント

フルネームはわかりませんでしたか。
コロンブスは一語でファミリーネームであって、コロン・ブスでフルネームと言う訳ではありません。気を付けましょう

島田美波の答え

『ブス』

教師のコメント

過去の偉人になんて事を。

峰嶋真琴の答え

『ミステリアス・ゴードン』

教師のコメント

君の思考がミステリアスです。

NO　SIDE

文月学園学園長、藤堂カヲルは悩まされていた。
その傍らに立つのは文月学園第二学年主任、高橋洋子。

ババア「さて、どうした物かねぇ……」
高橋「過去にこのような事はあったのですか？」
ババア「一度も無いよ。それこそ、峰嶋弟の仕業じゃないかと疑いたくなるさね……」
高橋「本人は『やってない』と言っていましたが」
ババア「まああそこまで否定するって事は違うんだろうね。さて、どうするか……」

カヲルの悩みの種、それは試験召喚システムの『不具合』だった。
もっとも、ただの不具合ではない。
強化合宿以来、全てのシステムの管理・調整を峰嶋宗太が引き受け

ている以上、その手の不具合は起こらない。
今回の不具合は、『誰かが何かの目的で起こした不具合』である。
というのが宗太の見解だった。

高橋「我々教師だけでなく、生徒の召喚獣にも不具合が生じているそうです。このままでは手のうち用がないかと……」
ババア「まあ……いろいろと不安ではあるけど、バカに任せるとするさね」
高橋「……？」

高橋女史には、このときのカヲルの言葉の意味は分からなかった。

真琴ＳＩＤＥ

オレ「で、その不具合を直してもらうためにオレらを呼んだのか？」

オレたち、オレ、明久、美波、瑞希、秀吉、みどり、そして何故か美春と宗太が学園長室に呼ばれた。

ババア「まあまずは状況の説明から入るさね」
オレ「誰も引き受けるなんて言ってない」
明久「そうですよババア」
宗太「まったくですよババア長」
ババア「ババアババアうるさいガキどもさね！！」

うるさいババアを瑞希と美波がなだめる。ちなみにみどりは大爆笑。

ババア「まあ『やらない』なんて言うつもりなら１ヶ月くらい停学にしてやっても……」
オレ「な！？卑怯だぞババア！」
明久「そうですよババア！！」
宗太「それ僕関係ないよね？」
秀吉「せっかく停学が明けたのに、また停学とは納得いかぬのじゃ！！」
ババア「だからあんたたちが引き受けてくれたら全て丸く収まるんじゃないか」

卑怯だ……！

卑怯すぎる……！！

オレ「まあいい。話だけでも聞かせてみろ」
ババア「ほう、話が分かるじゃないか。まずはこれを見な」

そう言ってババアがモニターの電源を入れる。
そこに映し出されたのは……

オレ「……！？」
瑞希「な、なんですかコレ！？」
明久「繭！？」
美波「気色悪いわね……」
美春「気持ち悪いですわ……」
秀吉「流石にこれはわしでもきついのじゃ……」
みどり「……おぇ」
宗太「おーおー、いつ見ても気持ち悪いなぁ……」

画面に映し出されたのは繭。
大きな繭が一つ。その周りに、小さな繭がおよそ５０ほど。

オレ「……」
明久「？　真琴どうかした？」
オレ「いや……なんでもない……」
明久「そう？ならいいけど」

まさかそんな訳は……
ありえないな。偶然だ。

ババア「……」
オレ「で、コイツがなんなんだ？」

ババア「コイツのせいで試験召喚システムに不具合が起きててね、教師生徒問わず、召喚できなくなってるんだよ」

なるほど、最近宗太が言ってたのはコレだったのか。

ババア「ところが、観察処分者だけは別さね。システムとは別領域で走ってるからね」

明久「つまり観察処分者である僕と真琴、清水さんにコレを何とかしろって事ですか？」

美春「それで停学中の美春が呼び出されたのですね？」

ババア「まあそういうことさね」

瑞希「でも何とかって言ってもどうするんですか？それに私や美波ちゃんは協力できないですし……」

ババア「単純にあの繭を破壊すればいいだけさね。そこで姫路、島田、木下、名川、峰嶋弟には作戦室でバックアップを担当してもらうさね」

は？バックアップ？

秀吉「バックアップが必要なほどなのかのう」

みどり「それに破壊するだけなら別に召喚獣じゃなくてもいいんじゃない？」

二人の疑問も最もだ。

まあ大体想像はつくが……

オレ「おおかたシステムルームがロックされて、篭城でもされてるんだろ。それと、何かいるんだろ？」

ババア「相変わらず鋭いクソジャリさね。ああそうだよ。おかしな奴が居てね」

ババアが再度画面を切り替える。
すると映ったのは……

一同「!?」
オレ「ユニコーンにケルベロス、熊みたいなのもいるな……。さしずめ“聖獣”とでも言ったところか」
ババア「呼び名は別にどうでもいいさね。とにかく本体の繭の周りをコイツらが徘徊していて、コイツらを片付けながら行く必要があるんだよ」
明久「うわ……メンド……」
ババア「それだけじゃないさね。吉井、峰嶋、清水、あんたたち、ちょっと召喚しな」
3人「は?」
ババア「フィールドは展開してある。さっさとやりな」
オレ「なんだかよく分かんねえけど……」
美春「召喚すれば……」
明久「いいんだよね」

3人「試獣召喚(サモン)!!」

何故かそこで、一度意識を失った

気がついた瞬間に明久が叫んだ。

明久「なんじゃこりゃーーー！！？」

ッ……うるさい……

重い身体を起こしてみる。

なんだかやけに体が小さい気がする……って、はい？

オレ「なんで体が召喚獣になっている？」

サイズは召喚獣と同じ８０ｃｍ、服装はＴシャツにグローブ……３番目の状態か。

ババア「あんたたちにはその状態で行ってもらうさね」

明久「冗談じゃない！この状態で戦死したらどうなるんですか！！」

美春「豚野郎と同じ意見と言うのも気に食いませんが、美春も同意

見です！」
ババア「知らないね」
明久&美春「ババアーー！！」
ババア「し、清水までアタシをババア呼ばわりかい！？」

あー、うるさいうるさいうるさい。

オレ「別にこの状態で戦死したってなんもねーよ。オレはどうなるか知らねえけど」
美波「ちょっと真琴。アンタなんでそんなこと知ってるのよ？」
オレ「……話したくない」
美波「ふーん……」

あの頃の話なんてしたくない。
もししてしまったら……いや、余計なことを考えるのはよそう。
いまはそれより任務に集中するほうが大事だ。

オレ「んじゃババア。さっさとやってくる」
ババア「おや、急にやる気になったじゃないか」
オレ「……こっちにも色々あんだよ」

まったく、こんなもん送りつけてきやがって……
嫌がらせもいいとこだっつの。

美春「お兄さまが行くなら美春もついていきますわ」
ババア「そうしてもらえるとありがたいね。峰嶋。あとでゆっくり話を聞かせてもらうさね」
オレ「……行くぞ明久」

こんなババアに付き合うつもりはない。さっさと行って……？

オレ「明久？」

返事がないので振り返ってみる。

そこには……

瑞希「すっごくかわいいです～～～♪」

明久「ちょ、瑞希、息……苦し……」

オレ「何やってんだか……」

じゃれあってるバカップルがいた。

ババア『じゃあ三つのルートに分かれて突入してもらうさね』
明久「どうして一緒に行かないんですか？」
ババア『道が狭いんだよ。３体も召喚獣が入れるほど、広くないからね』

オレ達は通気口から侵入することになった。

瑞希『明久君のバックアップは私と秀吉君で行います』
秀吉『バックアップはわしらに任せて、思う存分暴れるのじゃ』
明久「ありがとう！瑞希、秀吉」

みどり『清水さんのバックアップはわたし、名川みどりと』
宗太『僕、宗太でお送りしま～す！！』
美春「美春はお姉さまのバックアップがよかったですわ……」

美波『で、真琴のバックアップはウチが担当するわね』
オレ「……」
美波『どうしたの真琴？』
オレ「ああ、悪い。頼む」
美波『なんかあった？何かあったなら言ってくれれば……』
オレ「なんもない。今から侵入する」

余計なことを考えるな。
今は集中しろ。初めての実践だけど、行ける筈だ……！

ババア『全員健闘を祈ってるよ。それから峰嶋。くれぐれも……』
オレ「分かってる。戦死はするな。だろ？」

ババア『……まあ分かってるならいいさね』

オレの召喚獣はいろいろと普通じゃないし、普段から同調率に応じてフィードバックも変化する。
今の状態では同調率は１２０％くらいいってそうだし、戦死が現実の死に繋がると思ってやらなきゃな。

オレ「んじゃ行くぞ」
明久「目的地、システムルームで」
美春「またお会いしましょう。お兄さま」
オレ「おう。じゃちょっくら行ってくるか！」

こうして聖獣型召喚獣殲滅計画が開始された。

第五十八話　聖獣型召喚獣編　プロローグ（後書き）

オリストーリー開始です。
分かってます。批判くらい来るであろう事は。
こんなバカテスはバカテスじゃない！って１８０回くらい言われそうです。
それでも我慢して読んでくだされればうれしいです。
では感想・アドバイスお待ちしています。
明日は予定があるので、更新は明後日か明々後日くらいになりそうです。

第五十九話　突入開始！（前書き）

バカテスらしくないです。ごめんなさい。

第五十九話　突入開始！

バカテスト　英語

問　以下の言葉を英訳しなさい。

『ハートフル　ラブストーリー』

坂本雄二の答え

『Ｈｅａｒｔｆｕｌ　ｌｏｖｅ　ｓｔｏｒｙ』

教師のコメント

正解です。映画や本の謳い文句によく見かける単語ですが、たまにｈｅａｒｔの部分を間違える人がいます。身近にある英語なのですが、意外と分かりにくいようですね。
ちなみに日本語に訳すと『愛に満ちた恋物語』となります。是非そのような青春を皆で過ごしてもらいたいと思います。

姫路瑞希の答え

『Ｈｅａｒｔｆｕｌ　ｌｏｖｅ　ｓｔｏｒｙ　ｔｏｇｅｔｈｅｒ　ｗｉｔｈ　Ａｋｉｈｉｓａ』

吉井明久の答え

『Ｈｅａｒｔｆｕｌ　ｌｏｖｅ　ｓｔｏｒｙ　ｔｏｇｅｔｈｅｒ
ｗｉｔｈ　Ｍｉｚｕｋｉ』

峰嶋真琴の答え

『Ｈｅａｒｔｆｕｌ　ｌｏｖｅ　ｓｔｏｒｙ　ｔｏｇｅｔｈｅｒ
ｗｉｔｈ　Ｍｉｎａｍｉ』

島田美波の答え

『Ｈｅａｒｔｆｕｌ　ｌｏｖｅ　ｓｔｏｒｙ　ｔｏｇｅｔｈｅｒ
ｗｉｔｈ　Ｍａｋｏｔｏ』

教師のコメント

ああそうですか。

霧島翔子の答え

『Ｈｕｒｔ　ｆｕｌｌ　ｒｏｕｇｈ　ｓｔｏｒｙ』

教師のコメント

そのようなハートフルラブ　ストーリーを演じるのは貴女だけだと思います。

真琴ＳＩＤＥ

現在通気口を通って進入中。

美波『その角を右ね』
オレ「……了解」
美波『……ホントに何かあったら言ってよね』
オレ「分かってるって……」

別になんもないって言ってんのに……ん？

オレ「美波。あれなんだ？」

オレの目の前に行く手を阻むように現れる三つの幾何学模様。
この狭い空間でよく出てくるな。

美波『待って……　！？　真琴、早く逃げて！！』
オレ「あ？逃げる？何で？」

何で逃げなきゃならないんだ？

美波『何でって、そいつらは……』

Ｆクラス　峰嶋真琴　　日本史　１７９４点

ＶＳ

ランクＡ　ワイバーン　日本史　７００点
ランクＡ　ユニコーン　日本史　６８０点
ランクＡ　フェンリル　日本史　７３０点

美波『３体合計がアンタよりも高いからよ！！』
オレ「……関係ない」

一番手前にいたユニコーンが角を前に出して駆けて来る。

オレ「そもそもこの狭い空間で……」

オレはその場で右手を前に出し、発射準備。

オレ「3体同時に戦えるわけないだろ。零戦砲（ゼロセンホウ）」

４００点消費して零戦砲を放つ。
２００点消費でもかなりの威力をもつのだから、その2倍となれば
それは凄まじいものになるだろう。
道が一直線になっていたために、後ろにいる2体も同時に攻撃する。

Ｆクラス　峰嶋真琴　　日本史　１３９４点

ＶＳ

ランクＡ　ワイバーン　日本史　　ＤＥＡＤ
ランクＡ　ユニコーン　日本史　　ＤＥＡＤ
ランクＡ　フェンリル　日本史　　ＤＥＡＤ

美波『すご……』
オレ「この程度か……」

流石にもうちょっとてこずるかと思ってたけど、大したことはなかった。
3体同時に出てきても同時に戦えなければいないのと大差ない。
そう考えながらそのまま歩き続ける。

美波『真琴。アンタやっぱり何か知ってるんでしょ』
オレ「……なんも知らねぇ」
美波『ねえ、話してよ。困ってるなら力になるし……』
オレ「なんもないって言ってるだろ！！」

思わず大声を出して後悔する。
美波『……そう。じゃあいいわ』
オレ「ッ……最初からそうしてくれ」
クソ、気にしないって決めたのに……
そう思いながらも歩みは止めない。
オレ「……またか」
思わず呟く。
また幾何学模様が現れたからだ。今度は……１０か。どうせさっきと同じでかい奴ばかり……

Ｆクラス　峰嶋真琴　　日本史　１３９４点

ＶＳ

ランクＢ　スティール×１０　日本史　５００×１０点

前言撤回。今度は小さいコウモリが１０体。
これは多ｖｓ一になりそうだ。
美波『……相手、強いから』
オレ「クソ……」

美波の奴、何不貞腐れてんだよ……
聞かないで欲しいとは言ったが手を抜けとは言ってないだろうが。
こっちのことなんか露知らず、コウモリ軍団の眼が赤く光る。

オレ「……“防御障壁（ウォール）”」

赤く光った眼から細いビームのようなものが飛んでくる。
その全てがオレの顔を狙って。

美波『！？　真琴！！』
オレ「……生きてるよ。心配すんな」

勿論攻撃は一つも当たっていない。
全て防いだ。

美波『真琴、それって……』
オレ「もうひとつの第三の能力、“防御障壁（ウォール）”だ。点数を消費してこうやって薄い膜のようなバリアを張る。一度に一枚しか出せないし、あんまり強度はないんだけど……なんとか防げたみたいだな」

あっちは攻撃の反動なのか、出方を伺っているのか動かない。

オレ「そっちがやるってんならこっちも殺り返すぜ。“装備変換（デフォルトチェンジ）、バージョン？（セカンド）”！」

オレが左手にしていた指輪が光りだす。
そして身に着けていた装備が換わっていく。

オレ「逝け」

バージョン？、召喚大会のときに手に入れた鎖鎌の装備。
その鎖鎌を両手に持ち、目一杯振るった。
それはコウモリ軍団を蹴散らす。

Ｆクラス　峰嶋真琴　　日本史　９９４点

ＶＳ

ランクＢ　スティール×１０　日本史　ＤＥＡＤ

オレ「その程度じゃまだまだ甘い」

振り回した鎖鎌を手元に戻し、先に進む。

美波『真琴……その、ごめんね？』
オレ「あ？何がだよ？」
美波『その、真琴だって聞かれたくないことあるはずなのに、無理矢理聞こうとして、しかも聞けなかったからって手を抜いたり……』
オレ「別に勝てたから気にしてねーよ」

それに今回は最初から話すべきなのに話さないオレが悪い。
美波に落ち度はない。

美波『もしかしたら、ウチは真琴に頼られてないのかなって……。
真琴はなんだって一人で出来るし、今だってバックアップなしでも勝っちゃったし、ウチが居る意味ないのかなって思ったら……』
オレ「……」
美波『そしたら、なんか怖くなって、少しでも真琴の役に立とうっ

て思って……』
オレ「……オレは役に立つかどうかで人を好きになったりしない」
美波『え……？』
オレ「美波がいるだけで、それだけでも十分助かってるよ。役に立たないなんて言うなって」
美波『……うん』
オレ「それに、お前にも活躍のチャンスはありそうだぜ？」

あれだけ蹴散らしたのに、もう次の奴が来たみたいだ。
その証拠にまた幾何学模様が二つ現れた。

美波『……うん、ウチがしっかりバックアップするから、真琴は思う存分暴れてよ！』
オレ「言われなくても暴れてやるさ！！」

この先、オレの前に立つ奴は全員ぶっ飛ばす！

第五十九話　突入開始！（後書き）

次回は明久ＳＩＤＥです。
感想・アドバイス頂けると嬉しいです。

第六十話　明久の懸念

バカテスト　化学

問　以下の文章の（　）に入る正しい単語を答えなさい。

『分子で構成された固体や液体の状態にある物質において、分子を集結させている力のことを（　　）力という』

姫路瑞希の答え

『（ファンデルワールス）力』

教師のコメント

正解です。別名、分子間力ともいいます。ファンデルワールス力はイオン集結の間に発生するクローン力と間違え易いので注意してください。

土屋康太の答え

『（ワンダーフォーゲル）力』

教師のコメント

なんとなく語感で覚えていたのだということは伝わってきました。
惜しむらくは、その答えが分子間ではなく登山家の間ではたらく力

だったということです。

吉井明久の答え

『（　　努　　）力』

教師のコメント

先生この解答は嫌いじゃありません。

峰嶋真琴の答え

『（　　バ　　）力』

教師のコメント

カタカナの『カ』ではなく漢字の『力』です。

明久ＳＩＤＥ

現在進入中。

僕「それにしても全然敵来ないね」
瑞希『ほとんどの敵が真琴君の所に向かってますからね』

やっぱり真琴の点数が高いからだろうか。
僕の通る道ではいまだに一体も敵が出てこない。

瑞希『真琴君には悪いですけど、早く先に進ませてもらいましょう』
秀吉『そうじゃのう。敵が出てこないなら……明久、前方に何かおる。気をつけるのじゃ』

秀吉に言われて身構える。
５ｍくらい離れたところに僕らが召喚するときのような幾何学模様が現れ、少ししてから狼のような奴が出てくる。

Ｆクラス　吉井明久　数学　２０９点

ＶＳ

ランクＦ　ビースト　数学　１５０点

僕「……ランクＦって出てるのにＣクラス並みの点数なんだけど」

思わずツッコミが出てしまう。

Ｆでコレだけなんて、Ａだったらどれくらい高い点数なんだろう。

瑞希『敵、来ます！』

秀吉『明久、来るぞい！』

僕「オーケー！」

相手の体の大きさは僕と同じ程度。

普段ならこれくらい点差があれば余裕なんだけど……

僕「ぐ……」

相手の爪がかする。

普段と違い、召喚獣を操作するのではなく、召喚獣となって戦っているために苦戦を強いられてしまう。

なれない身体と言うこともあってか、かなり動きづらかった。

僕「くっそぉ！！」

ビーストが突き出してきた腕を木刀で思いっきり叩きつける。

でもあまりダメージはないみたいだ。

Ｆクラス　吉井明久　数学　１７４点

ＶＳ

ランクＦ　ビースト　数学　１２２点

こっちはかすっただけ、あっちはしっかり攻撃が入ったのに消費した点数に差がない。
というかこっちのほうが多い。

僕「やっぱ不慣れな分、あっちに分があるのかな……」
瑞希『明久君、大丈夫ですか！？』
秀吉『無理するでないぞ！危なくなったらすぐ逃げるのじゃ！』

瑞希と秀吉が心配してくれている。
ちょっと無理があるかもしれないけど……やってみるか！

瑞希『！？　明久君、何してるんですか！？』
秀吉『明久、はやまるでない！』

僕はビーストに向かって勢いよく走り出す。
ビーストはさっきと同じ爪での攻撃を繰り出す。

僕「これを避けて……！」

その攻撃を間一髪で避けて、ビーストの懐に潜り込む。

僕「いっけぇぇ！！」

そしてそのまま木刀を喉に突き刺す。
普通の召喚獣も喉や心臓を攻撃されれば点数に関わらず即死する。
それが当てはまるかどうかは分からないが、やってみる価値はあっただろう。

うまく行ったようで、ビーストは消えていく。

Ｆクラス　吉井明久　数学　１６８点

ＶＳ

ランクＦ　ビースト　数学　ＤＥＡＤ

僕「ふぅ……」
瑞希『明久君、大丈夫ですか！？』
僕「うん。なんとかね……」
秀吉『おぬしは相変わらず無茶ばかりするのう』
僕「あはは……」

普段からＦＦＦ団に追い掛け回されてたせいで鍛えられてたからね。
なんか複雑……

僕「しかしＦでコレだけ強いとＡだと大変なことになってそう……」

真琴のところにほとんどの敵が行ってるとするとランクＡも行って

そうだし、真琴の点数なら大丈夫だと思うんだけど……

僕「ねえ、さっきの真琴、なんか変じゃなかった？」

瑞希『そうですか？』

秀吉『わしも特になにも思わなかったがのう』

僕「そう……」

なんかこう……悩んでるみたいな、迷ってるみたいな感じだったけど……気のせいかな？

瑞希『真琴君も清水さんも進んでるみたいですし、早く移動しましょう』

僕「うん、わかった」

とりあえずその心配は後で片付けるとして、今は先に進むことを考えよう。

第六十一話　美春の悩み（前書き）

今回短め。
ちなみに今回バトルは無しです。

第六十一話　美春の悩み

バカテスト　国語

問　次の熟語の正しい読みを答え、これを用いた例文を作りなさい。

『相殺』

姫路瑞希の答え

『読み……そうさい
例文……取引の利益で借金を相殺する』

教師のコメント

そうですね。差し引いて帳消しにする、と言う意味なので貸し借りなどに使われる意味です。

吉井明久の答え

『読み……そうさつ
例文……パンチにパンチをぶつけて威力を相殺した』

教師のコメント

惜しいですが間違いです。『そうさつ』と言う読みも一応ありますがその場合の意味は『互いに殺しあうこと』というものです。この

場合の吉井君の例文では互いに打ち消しあうという意味なので、読みとしては『そうさい』が正解となります。

峰嶋真琴の答え

『読み……あいごろし
例文……アイツとアイツを相殺にする』

教師のコメント

誰を殺るのか教えて欲しいものです。

島田美波の答え

『読み……あいさつ
例文……のどかな朝、ウチは真琴と相殺した』

教師のコメント

真琴君の身を案じてあげてください。

美春ＳＩＤＥ

美春「まったく、敵が少なすぎますね……」

本来ならお兄さまについていきたいところですが、美春がいても足手まといにしかならないので仕方ありません。

みどり『その一帯には敵はいないよ～』

宗太『ほとんど琴兄のところに集まっちゃってるからね～』

名川さんと弟さんのバックアップ（といえるかどうかは微妙ですけど）が入ります。

美春「お兄さま……」

お兄さまのところにほとんどの敵が集まっている聞いて、少し不安になり、その不安を振り払います。

美春「いいえ、お兄さまならきっと大丈夫です。お兄さまに限って負けるなどと言うことはありませんね」

そう。お兄さまは絶対とも言えるくらいの強さを持っていますから。まさに最強とでも言うかのように……

だからこそ、美春は時々悩んでしまいます。

美春はお兄様のことを何も知らない、と……

美波お姉さまはお兄さまとお付き合いしているくらいの仲ですし、姫路さんや豚野郎（よしい）は小学校の頃からお兄さまのことを見ています。

それに比べて、美春がお兄さまについて知っていることと言えば、成績優秀スポーツ万能、思考レベルはFクラスのバカ集団に近い部分がある、冷たいときもあるけど、根は優しい人くらいです。

お兄さまのことをほとんど何も知らない美春がお兄さまを好きになるなんてやっぱりおかしいんでしょうか……？

みどり『清水さん、琴君のことで悩んでるね～』

美春「！？　な、何を言ってるのですか！？」

宗太『あはは、分かりやすいね、清水さんって』

美春「！！？」

ど、どうしてわかるんですかこの二人は！？

宗太『気にしなくても大丈夫だと思うよ～』
みどり『そうそう。それに琴君だったら“気にするな”って言うもん。絶対！』
美春「は、はぁ……」

一体何を根拠に……

みどり『琴君なら、“人が人を好きになるのに理由なんかいらない”って言うよね？宗君』
宗太『ＹＥＳ！』
みどり『ってね。だから、きっと清水さんが考えてることは杞憂なんだよ』
美春「そ、そうなんですか……」

でもこういうとき、お兄さまならどう言うかを分かってるとうだけでも、美春はこの二人よりも鬼様から遠い存在だと言うことなんです。

……“人が人を好きになるのに理由なんかいらない”ですか……。

美春「……分かりました。少し自分でも考えて見ます」
宗太『そうそう。そういうの大事だよね。それに琴兄だったら『今は任務中だ！任務に集中しろ！』くらい言いそうだし』
みどり『あ、それあり得る』
美春「……あなたたち楽しんでますね？」

まったく……

でも、弟さんの言うとおりかもしれませんね。

任務に集中、ですか……

美春「では美春も任務に集中するとします。バックアップを頼みますわ」

宗太『おっけ～』

みどり『まかしといて！』

システムルームで胸を張ってお兄さまをサポートできるように、美春も任務に集中します！

第六十一話　美春の悩み（後書き）

初めての美春ＳＩＤＥでした。
うまく行ったか心配です……。
次回、決戦！？

第六十二話　真琴の異変（前書き）

わー、バカテスらしさが消えていくー　ｂｙ作者

第六十二話　真琴の異変

バカテスト　英語

問　以下の英文の（　）に正しい単語を入れて正しい文章を作り訳しなさい。

『Ｓｈｅ　（　）　ａ　Ｂｕｓ』

姫路瑞希の答え

『Ｓｈｅ　（ｔｏｏｋ）　ａ　Ｂｕｓ
訳：彼女はバスに乗りました』

教師のコメント

正解です。他に“ｂｕｓ”に使われる単語としては“ｇｅｔ”などがありますね。

峰嶋真琴の答え

『Ｓｈｅ　（ｂｒｏｋｅ）　ａ　Ｂｕｓ
訳：彼女はバスを壊しました』

教師のコメント

どんな過激娘ですか。

吉井明久の答え

『Ｓｈｅ　（ｉｓ）　ａ　Ｂｕｓ』

教師のコメント

なんて訳すのでしょうか。一見正しい文章として見えそうですが、明らかに間違いです。日本語として訳せない文章を書くようではまだまだ――――――

土屋康太の答え

『訳：彼女はブスです』

教師のコメント

目から鱗が落ちました。

真琴ＳＩＤＥ

オレ「よっと！」

格子を蹴っ飛ばしてシステムルームに入る。
どうやらオレが一番乗りのようだが……

オレ「てっきりオレが一番最後だと思ったんだけどな」
美波『いや、アレだけの数をあの短時間で突破してればそうもなるでしょ』
オレ「ん？そんなに数倒してたか？」
美波『凄いわよ。ちょっと待って……』

峰嶋真琴　通算成績

ランクＡ　１２体

ランクB　２８体
ランクC　１７体
ランクD　１５体
ランクE　　９体
ランクF　　５体
合計　　８６体

美波『これを凄いといわずして何と言うのよ！？』
オレ「普通」
美波『もういいわ……。もう何があっても驚かないから……』

とまあそんな息抜き程度の会話でリラックスしてから……

オレ「さて、あちらさんもお待ちかねのようだし……やるか」

繭の前に鎮座している、恐らく最後の番人の役割を果たしているであろう不死鳥（フェニックス）に向き直る。

オレ「こんなもの送りつけてきやがって……嫌がらせのつもりか？」
美波『送りつけてきた？』
オレ「あ、いや、なんでもない」

っと話してる間にやったほうが早いな。
と思い構える。

Ｆクラス　峰嶋真琴　　総合科目　１７０９４点

ＶＳ

ランクS　フェニックス　総合科目　２５０００点

美波『え!?ラ、ランクS!?しかも２５０００って……!』
オレ「取り立てて騒ぐものでもない。さっさとぶち壊してしまいだ」

フィールドが総合科目に変更されたので、装備は？(サード)に戻っている。
さて、装備変換で一気に攻めるか。それともこの状態でいくか。

オレ「どっちにしようか……」

迷ってる間にあっちから仕掛けてきた。
フェニックスが翼を振り回すと火の粉が大量に飛んでくる。

オレ「ん?、防御障壁(ウォール)」

オレは左手を前に出し、防御障壁を張る。

オレ「んー、このままでやってみる……か!」

次はこっちからだ!

オレ「零戦砲(ゼロセンホウ)!」

手のひらから放たれる極太ビーム砲。
とりあえず小手調べで撃って見るも、本体に届くか届かないかのところではじき返される。

オレ「やっぱ効かないか……化け物め」

こうなったら……一点集中かな。
右手をピストルの形に構えて発射準備。

オレ「零戦砲・バーストライフル！！」

人差し指から放たれるビーム砲。攻撃範囲が狭くなる分、エネルギー密度や一点の威力は跳ね上がる。

ピィィィン……

オレ「チッ、これでもダメか」

また障壁ではじき返される。
この次はどう出るかを考えているとまた火の粉が降りかかってくる。

オレ「クッソ……舐めやがって……！」

火の粉を避けてフェニックスとの間合いを一気に詰める。

美波『！？　ちょっと真琴！！』
オレ「装備変換（デフォルトチェンジ）、バージョン？！んでもって獣化（ビースト）！」

移動しながら装備変換して獣化を発動する。

Fクラス　峰嶋真琴　　総合科目　２７６９６（１３８４８×２）

点

VS

ランクS　フェニックス　総合科目　２４０００点

獣化（ビースト）の効果で一時的にだが、フェニックスを点数で上回った。

オレ「うおぉぉぉ！！」

さらに跳躍してフェニックスに一気に近づくが防御障壁に阻まれる。

オレ「こんなもので、防御できると思うなァ！！」

障壁を割っては障壁を張られ、割っては張られを繰り返す。

今は精神と召喚獣が完全に同調しているため、永遠にも等しいほど長い時間獣化状態でいられるという訳だ。

オレ「ラスト1枚！」

最後の障壁を思いっきり叩き割る。

これで完全に無防備な状態になった。

オレ「おらぁ！その余裕そうな面に一発ぶち込んで……　！！」

やる。と言おうとしたところで自分の無計画さを恨んだ。

もしここでカウンターを撃たれたらどうする？

こっちは完全な攻撃態勢に入ってしまっているせいで、防御の動作に入るまで時間がかかる。

この場面でスピードの高い攻撃されたら間違いなく直撃だ。
そして、今目の前にある鳥野郎のくちばしが開けられ、何かが放たれようとしている！

オレ「ヤッバ……！　強制解除ッ……！」

ギリギリで防御体制をとろうとする。間に合ったかどうかは分からない。
そして、鳥野郎から火炎放射をする。
一瞬、明久の声が聞こえた気がした。

明久ＳＩＤＥ

僕がシステムルームに到着したのと、赤い鳥の火炎放射が真琴を直撃したのは同時だった。

僕「真琴ォーーーーー！！」

真琴が一瞬左手を前に出していた気もする。
もしかしたら防御できたのかもしれない。
でもあの至近距離で２００００点台の攻撃を受けてるんだ。真琴は……

美春「お兄さまぁぁ！！」

そこへ清水さんが真琴のことを大声で呼びながらシステムルームに入ってきた。

美春「豚野郎！お兄さまはどこですか！？」

僕「それが……その……」

赤い鳥を見ながら言う。

美春「まさか……お、お兄さまがやられるわけがありません！」

僕「そうだけどさ……」

はっきり言って、あの鳥には勝てる気がしない。
真琴でさえも一撃を貰うような奴に、僕なんかが挑んだところで瞬

殺されてしまうだろう。
もし本当に真琴がまだ戦死していなくても、アレだけの攻撃を受けて無傷とは思えない。
どの道手詰まりなのだと心の中で思ってしまう。

瑞希『明久君、まだ真琴君は生きてます！』
僕「！？」
秀吉『そうじゃぞ明久！まだ真琴の反応はあるのじゃ！』
美春「ほら見なさい豚野郎！お兄さまがやられるわけがありませんわ！」

清水さんが指をさしながらいう。
その指が指す先には、確かに真琴がいた。

僕「真琴！良かった！無事……」

Ｆクラス　峰嶋真琴　　総合科目　　５９０２点

ＶＳ

ランクＳ　フェニックス　総合科目　１７５００点

僕「じゃないか……」

あの火炎放射の直撃を食らって点数が残ってるだけでも運が良かったかもしれない。

僕「真琴！僕たちも加勢するよ！」

真琴に声をかける。
だけど真琴は聞いてないのか聞こえてないのか反応しない。
それどころか、一人で戦い始めてしまった。

僕「どうしたんだろう……真琴……」

ずっと真琴が押されっぱなしだ。
真琴には美波のバックアップがついてるから、それで指示を仰いでるはずなのに……

美春「お兄さま……なんだか様子がおかしいです」
僕「あ、清水さんもそう思う？」
美春「豚野郎と同じ考えと言うのは気に食いませんが」

こういうときでも罵倒はきっちりしてくるようだ。

美春「まるで、何かに取り憑かれたようです」
僕「そうゆう感じだよね……」

まるで『自分一人で倒す』と言い張っているかのように。
にしては動きが雑で、攻撃してくださいと言ってるように見える。
素人目の僕にも分かるんだから、恐らく誰にでも分かるくらいなんだろう。

美春「！！　お兄さま！！」
僕「！？」

清水さんの言葉に驚き顔を上げる。
清水さんの視線の先には、つまずいたのか、倒れている真琴がいた。

僕「ヤバイ……！」
美春「ぶ、豚野郎！？」

僕は真琴のところへダッシュで駆け出す。
相手からすればこれは絶好のチャンスだ。この隙を狙って攻めてくるに決まってる。

僕「真琴！！」
真琴「明久！？」

倒れている真琴の手をとって一気に逃げる。
その直後に真琴がいたところに火の粉が降り注ぐ。あと1秒避けるのが遅かったら手遅れだった。

僕「あ、あぶな……。真琴、大丈夫だった？」
真琴「……ああ。礼を言う」

それだけ言って立ち上がる真琴。
そして鳥の方へとまた歩き出す。

僕「ちょ、ちょっと！一人でやらないで、皆で協力して……」
真琴「必要ない。オレの獲物だ。手を出すな」

真琴はそう言って右手を拳銃のように構えた。
まるで僕の事なんか見てないかのように。

第六十三話　絆と力

バカテスト　政治・経済

問　日本国憲法第７６条『裁判官の職権の独立』について、以下の（　）に正しい語句を記入しなさい。

『すべての裁判官はその（　　）に従ひ、（　　）してその（　　）を行ひ、この（　　）及び（　　）にのみ拘束される』

姫路瑞希の答え

『すべての裁判官はその（良心）に従ひ、（独立）してその（職権）を行ひ、この（憲法）及び（法律）にのみ拘束される』

教師のコメント

大変よく出来ました。これは日本国憲法における重要な条文の一つですね。裁判官の権限の行使にあたっては、政治的権力や裁判所の上級者からの指示には拘束されないことが憲法上保障され、それによって独立して職務を執行できるということです。この内容には裁判官の身分保障なども含まれていますね。豆知識として覚えておくといいでしょう。

吉井明久の答え

『すべての裁判官はその（ピー）に従ひ、（ピー）してその（ピー）

を行ひ、この（ピー）及び（ピー）にのみ拘束される』

峰嶋真琴の答え

『すべての裁判官はその（ズキューン！）に従ひ、（バキューン！）してその（自主規制！）を行ひ、この（聞かせられないよ！）及び（ピー！）にのみ拘束される』

教師のコメント

憲法第７６条が大変なことに。

土屋康太の答え

『すべての裁判官はその（本能）に従ひ、（脱衣）してその（全裸体操）を行ひ、この（現行犯により警察の手が）及び（手錠）にのみ拘束される』

教師のコメント

全ての裁判官の皆様に対して誠意ある謝罪文を要求します。

坂本（訂正）霧島翔子の答え

『すべての裁判官はその（坂本翔子）に従ひ、（命をと）してその（坂本雄二の捕獲）を行ひ、この（坂本翔子の命令）及び（己の使命）にのみ拘束される』

教師のコメント

学年主席の霧島さんからこんな珍解答が出るとは…。

坂本雄二のコメント

なにやら悪寒が…

黒炉の答え

『すべての裁判官はその（ピンク色の悪魔）に従ひ、（全力を持って）してその（悪魔の所業）を行ひ、この（姫路瑞希）及び（姫路瑞希の手料理）にのみ拘束される』

教師のコメント

あなたに一体何があったのですか。

姫路瑞希のコメント

あの、私今日皆さんにクッキーを……

吉井明久を除く４名のコメント

逃げろお前ら！

応！！×３

真琴ＳＩＤＥ

今退治してるのは点数にして２５０００点。
Ｓランクなんて言う存在しないはずのランクに属する化け物、鳥野郎だ。

明久「だから一人で勝手にやらないで、３人で協力しようって言ってるだろ！」
美春「豚野郎と一緒というのは気に入りませんが美春も同じ意見で

す」
オレ「だから要らないって言ってるだろうが。オレ一人で十分なんだよ」

当然こんな鳥野郎一羽潰すのに二人の手を借りるまでもない。
そうでなくてもオレ一人でやらなければ意味が無い。

明久「でも真琴はもう６０００点を切ってるのに、向こうはまだ１５０００点以上も残ってるんだよ!?」
オレ「んなもん、戦闘技術でなんとか……するッ！」

腰にぶら下げた刀を抜く。
一気に跳躍して鳥野郎の横から刀で攻めるも障壁で防御される。

オレ「クッソ……邪魔な障壁だッ……！」

一度元居た場所まで下がる。

明久「ほら、やっぱり皆でやったほうがいいでしょ？」
美春「美春も助太刀しますわ」

明久と美春がそれぞれの武器を構える。
コイツらは……！！

オレ「いらねぇッつってんだろ!!一人でやらせろよ!!」
明久「そんなの無理だよ!全員で協力しなきゃ勝てないでしょ!」
オレ「オレじゃ役不足だってのか!?」
明久「そうじゃない!!」

美波『やめなさい二人とも!仲間割れしてる場合じゃないでしょ！

！』

瑞希『落ち着いてください！喧嘩してる場合じゃないです！』

クッソ……！

美春「お兄さま！この豚野郎の言うとおりですわ！今は協力するべきです！」

オレ「だから、オレ一人でやるってんだよ！」

明久「それで今無理だったじゃん！」

さっきからオレ一人で無理って決め付けやがって……

明久「ねぇ……。なんで一人でやりたがるのさ」

オレ「……話す義理は無ぇ」

明久「じゃあ話して」

オレ「……会話が繋がってないぞ」

バカかコイツは……バカだったな。

美春「お兄さま。美春にもお話してください」

オレ「だからしないってんだろ。……オレがフェニックスを突破する。だからあの繭を破壊するのはお前らがやれ」

明久「でも、あの鳥は皆で協力しなくちゃ……」

オレ「そんな必要ないって言ってるだろ？オレを信じろ。必ず突破してやる」

そう言って鳥野郎の方へ向き直る。

さて……

オレ「さて、装備変換（デフォルトチェンジ）、バージョン？（サード）！」

もう一度現在の初期設定装備にもどす。
どうやら初期設定装備になるときは点数の消費が無いようだ。

オレ「一発、決めるか……」

一撃の威力を高めるために密度を可能な限り高くする。
残り点数全部使えば障壁を打ち破って本体に届かせるくらいの威力は出せる。
だせる。……けど、それをやってオレが無事でいられる保証は無い。
この状況の戦死は、オレにとっては現実の死に直結する可能性もあるからだ。
死ぬのは怖くない。死ぬ事は怖くない。怖くない筈なのに……

オレ「オレ……震えてる……？」

オレの手は震えていた。
鳥野郎の脳を一発でぶち抜くためには正確な射撃能力が要求されるのに、これじゃあ……！

オレ「なんでだ……！」

死ぬ事も、傷つく事も怖くない。なら何故オレは震えている？
怖い事なんて一つも無いはずなのに……！！

オレ「くそ……くそ……！」

今までと何も変わらないだろうが……
撃ってぶち抜いて終わりだろうが。
ただ今回はもしかしたら死ぬかもってだけだろうが！

オレ「……！？明久！？」
明久「真琴、手震えてるよ。やっぱ皆で協力しようよ」
明久は震えるオレの手を支えてきた。
オレ「お前、何をして……！？」
明久「僕にはどうして真琴が一人でやりたがるかなんてわかんないけどさ、もう少し僕らを頼ってくれてもいいじゃん」
美春「豚野郎の言うとおりですわ、お兄さま」
オレ「美春！？」
美春も明久と同じようにオレの手を震えないように支えてくる。
美春「お兄さまはとても強いです。でも、もしそんなお兄さまでもどうにもならないことがあったなら、そのときは美春たちを頼ってください」
オレ「美春……」
なるほどね……そういう事だったのか……
オレ「……よっしゃ、お前らそのまま支えててくれ。オレが鳥野郎を一撃で殺ってやる！」
明久「全力でやってよ！」
美春「お兄さまなら出来ます！」
オレが恐れていたのは死ぬ事なんかじゃない。
オレが恐れていたのは――――

――――――――仲間と離れる事。

明久や美波や瑞希、美春や秀吉やみどりや宗太、雄二やムッツリーニ。

今まで一緒にやってきた仲間ともう会えなくなるってことが怖かったんだ。

だったら――――――――

オレ「生きて帰るのみ！零戦砲（ゼロセンホウ）・バーストライフル！！」

最高レベルまで圧縮した零戦砲を放つ。

狙いは鳥野郎の脳みそ。いくら化け物でも召喚獣は召喚獣。脳や心臓をやれば点数に関係なく一撃だ！

キィィィン！

障壁で防御される。

明久「そんな！？」

オレ「まだだ！！」

残り点数を全部使い切る！！

オレ「うおぉおおぉぉぉおお！！」

最大出力で零戦砲を撃ち続ける。
美波『真琴！？なにやってんの！？やめなさい！！』
オレの召喚獣のことを知ってる美波は止めようとしてくる。
でも……
オレ「それじゃダメなんだよ……」
美波『え？』
オレ「これはオレが引き起こした不始末なんだよ……。だからオレが、我が身可愛さに全力出さなかったら、意味がねぇんだよぉぉぉ！！」
最大出力の零戦砲に、さらに力を注ぎ込む。
このまま障壁をぶち破る！！
ピキ！
鳥野郎を守っている障壁にひびが入った。
オレ＆明＆美「いっけぇぇぇーーーー！！」
最大出力最大密度の零戦砲は、少しそれてフェニックスの右目を貫いた。
それでも致命傷だったようで、フェニックスの点数は０になり、消えた。

明久ＳＩＤＥ

僕「やった！」

真琴の零戦砲はきっちりフェニックスを倒した。

けど……

ドサ

僕「真琴！？」
美春「お兄さま！？」
真琴も点数を使い切ってしまい、その場に倒れこんだ。

Ｆクラス　峰嶋真琴　総合科目　０点

僕「真琴！点数が！」
真琴「はは……別に大丈夫だろ……それよりも……あとは頼むぞ……」

真琴は僕らの後ろを指差す。
指差した先にあるのは、あの繭だ。

真琴「お前らであれを壊すんだ……悪いがオレは手伝えない……」
美春「お兄さま……わかりました」
僕「絶対に勝って見せるよ」

あの繭を、全ての元凶を壊してしまえば終わりだ。

僕「清水さん。手伝って欲しい」
美春「当然ですわ。豚や……吉井。お兄さまが身体をはって作ってくれたチャンスです」

そうだ。真琴が身体を、命を掛けて作ったチャンスなんだ。

僕「わかってるよ。絶対に無駄にはしない」

僕らは繭のほうへ向き直る。
真琴がフェニックスを打ち破ったんだ。
僕「あとは、僕らの仕事だ。行くぞ！」

第六十四話　もう一人の（前書き）

気づけばＰＶ２１００００越え……
皆様こんな文才なき駄文にお付き合いいただきありがとうございます！！

シリアス回かと思いきや地味にボケ要素が入っております。

第六十四話　もう一人の

バカテスト　生物

問　以下の問に答えなさい

『熱いやかんなどに触れたとき、とっさに手を戻してしまうなどの無意識に起きる反応を何と言うか答えなさい』

姫路瑞希の答え

『反射』

教師のコメント

正解です。しっかり勉強していますね。

峰嶋真琴の答え

『カウンター』

教師のコメント

やかんにカウンター決めてどうするんですか。

土屋康太の答え

『ベクトル操作』

教師のコメント

確かに普段の設定は『反射』ですが……

吉井明久の答え

『一方通行』

教師のコメント

ここまで行くと逆に清清しいですね。

明久ＳＩＤＥ

今、僕と清水さんは全ての元凶である繭と戦っている。
繭と戦うって言っても想像できないだろうけど……実際に戦っている。

Ｆクラス　吉井明久　総合科目　１９４３点
Ｄクラス　清水美春　総合科目　１３７０点

ＶＳ

？？？？　繭　総合科目　２５００点

さて、ここで今の繭の状況を説明しよう。
……手が生えてる。

僕「うわっ！！」

こっちが近づいた途端に生えてきた２本の腕がそれぞれ僕と清水さんに襲い掛かってきた。

結構速いな……

僕「よっと！！」

振り下ろされた腕を避けて一気に繭本体に近づく。
グッと強く握った木刀で思いっきり全力で繭を叩く。

Ｆクラス　吉井明久　総合科目　１９３４点
Ｄクラス　清水美春　総合科目　１３７０点

ＶＳ

？？？？　繭　総合科目　２１９１点

全力の一撃で３００点くらいしか減らないのか……
フィールドは総合科目だから単科目では３０点くらいしか減ってない事になる。

僕「ちょっと硬すぎでしょ……」

全力の一撃で２５０点中の３０点。
一体あと何回全力を打ち込めばいいんだろう？

美春「吉井！！」

僕「！！」

ドォン！

僕「あっぶな……」

ついさっきまで僕がいたところには腕が振り下ろされていた。
清水さんに名前を呼ばれなかったら大ダメージだったかも……

僕「助かったけど……どうやったら勝てるんだろう……」

何か使えるものはないかと辺りを見回す。
その次に自分の身体を調べると、右手にあるものを見つけた。

僕「金色の腕輪……」

二重（ダブル）召喚の起動キーでもう一体召喚獣を呼び出すことの出来る腕輪。
でも、この状況で使ったらどうなるんだろうか？
両方の身体を僕がコントロールしなければならないんだろうか？
はっきり言って……それは不可能だ。

普通の召喚獣なら出来たかもしれない。
けど、今僕は自分自身の身体を動かしてる感覚だ。
流石に自分の身体を二つ同時にコントロールなんてできない。
できない……けど、

僕「やってみるしかない……」

もしもう一方にも精神が宿っていれば、こっちの手数は3になり、
向こうの2本の腕では対処できなくなる。
うまく行けばこっちが有利に、失敗すれば向こうが有利になる、一
か八かの賭けだ。

僕「行くぞ……二重（ダブル）召喚！！」

僕？「さて、呼び出されたからには仕事すっか」

僕「……はぁ」

目の前に僕……じゃない、もう一人の僕、副獣がいる。

僕？「はぁじゃねえだろうが。さっさとやるぞ、オレ」

僕「なんか大分性格違う……？」

僕は自分のことを“オレ”なんて言わないし、口調も違うような……

僕？「それはあれだ……製作用の都合でお前みたいなしゃべり方で同一人物だとわかりにくくてしょうがねぇんだよ」

なんだそれは。

もう一人の僕「それより早くやるぞ。清水一人に負担かけらんねぇ」

僕「あ、うん。そうだね」

なんかよく分かんないけどうまくいったみたいだ。

ここからはこっちの独壇場にしてやる！

Fクラス　吉井明久Ａ　総合科目　９６７点
　　吉井明久Ｂ　総合科目　９６７点
Ｄクラス　清水美春　総合科目　１３７０点

ＶＳ

？？？？　繭　総合科目　２１９１点

ニ分割してるせいで点数自体はこっちの方が低い。けど……

僕＆僕「うおおぉぉぉ！！」

二人で同時に跳躍する。
腕一本で二人を同時に対処するには限界があるようで、もう一人の方の僕を止めるだけで精一杯のようだ。

僕「だぁぁらっしゃぁぁぁあぁぁあぁ！！」

もう一発、さっきのよりも重い奴くれてやる！！

Ｆクラス　吉井明久Ａ　総合科目　９６７点
　　吉井明久Ｂ　総合科目　８８３点
Ｄクラス　清水美春　総合科目　１３７０点

ＶＳ

？？？？　繭　総合科目　２０５３点

点数が減ってる分攻撃力も落ちて、与えるダメージも少なくなってる。
それでも１５０点ほどのダメージを与えれた。

僕「まだ全体の１／５か……」
もう一人の僕「打開策が欲しいな……」

打開策って言っても４００点オーバーでもらえる腕輪もないし、どうしろって……

もう一人の僕「おい清水！真琴がこの前美波以外の女子と仲良くしてたぞ！！」

それは瑞希かみどりか霧島さんあたりの誰かでは？

美春（？）「お兄さまをたぶらカスメギツネハイッタイドコノドイツデスカ……」

うわぁ…人外化してるよ……

もう一人の僕「この繭のせいで真琴は辛い目に会っているとも考えろ！！」
美春？「コノワケノワカラナイマユノセイデオニイサマハイマモクルシイオモイヲシテオラレノデスカ……コノマユブチコロシマス！！」

清水さんの動きが一気に速くなる。
っていうか速すぎない！？

Ｆクラス　吉井明久Ａ　総合科目　９６７点
　　吉井明久Ｂ　総合科目　８８３点
Ｄクラス　清水美春だった何か　総合科目　１３７０点

ＶＳ

？？？？　繭　総合科目　２０５３点

試験召喚システムも、バグのせいか清水さんを清水さんと認識していないような……？

美春だった何か「一貴社者者者者者者者者者（キシャシャシャシャシャシャシャシャシャ）」

怖い。怖すぎる。っていうか……

僕「君……性格真琴に似てる気がするし……」
もう一人の僕「気のせいだ。それより清水が一発決めたぞ」
僕「あ、本当だ」

凶気のオーラを纏った清水さんの剣が繭を攻撃する。

Ｆクラス　吉井明久Ａ　総合科目　９６７点
　　吉井明久Ｂ　総合科目　８８３点
Ｄクラス　清水美春だった何か　総合科目　１１５６点

ＶＳ

？？？？　繭　　総合科目　１３０９点

僕「一撃で７００点！？」

僕なんか全力で３００点だったのに！！

どんだけ強いんだ！？

もう一人の僕「ははは……よし、オレ達もやるぞ！！」

僕「う、うん！」

もう一度二人同時に跳躍する。

止めようとする腕を避けて……

僕＆僕「消えろ化け物ぉぉぉぉ！！」

美春「一貴社者者者者者者者者者者者者者《キシャシャシャシャシャシャシャシャシャシャシャシャシャシャシャシャ》！！」

３人全員で攻撃を叩き込む。

最高威力の、全力を。

Ｆクラス　吉井明久Ａ　総合科目　９０４点

　　吉井明久Ｂ　総合科目　８５７点

Ｄクラス　清水美春だった何か　総合科目　９９２点

ＶＳ

？？？？　繭　総合科目　ＤＥＡＤ

繭はフェニックスと同じように、ゆっくりとその姿を消した。
繭の周囲にあった、小さな奴と一緒に。

僕「や、やった……」
もう一人の僕「あー、んじゃそろそろオレは戻るな」
僕「あ、うん。えっと、解除（キャンセル）」

解除キーを言う。もう一人の僕は消えていった。

僕「……そうだ真琴！！」
美春「そうですわ！お兄さま！」

真琴が居た場所に目をやると、まだ真琴は倒れていた。
戦死したのにまだ身体があるが何故かは分からないけど、はやくフィールドを解除して……

僕「解除して……いいのか……？」

解除して、もとの身体に戻れる保証は無い。
なのに不用意にフィールドを解除していいのか？

美春「吉井！」

清水さんに名前を呼ばれ、指差すほうを見ると、召喚フィールドが解除されていく。
逃げ切るまもなく、僕らの身体は召喚フィールドの外に出て、意識は消えた。

第六十五話　目的と決意と黒幕（前書き）

今回台詞多めです！

第六十五話　目的と決意と黒幕

バカテスト　英語

問　以下の英文を訳しなさい。

『Die Musik gef?llt Leuten und bereichert auch den Verstand.』

島田美波の答え

『音楽は人々を楽しませる上に心を豊かにします。
※これは英語ではなくドイツ語だと思います』

峰嶋真琴の答え

『音楽は人々を楽しませる上に心を豊かにします。
※これは英語ではなくドイツ語のような気がする』

姫路瑞希の答え

『問題が英語ではなくドイツ語になっているので答えられません』

坂本雄二の答え

『問題が英語でないため回答不可』

教師のコメント

申し訳ありません。またこちらの手違いで違う問題が混入してしまいました。特に姫路さん島田さんは今回は珍回答でなくて良かったです。この問題は無回答者も含めて全員正解にしたいと

土屋康太の答え

『　　↑あぶり出し』

吉井明久の答え

『　　↑バカには見えない答え』

教師のコメント

思いましたが君達二人はやっぱり無得点にしておきます。

真琴ＳＩＤＥ

オレ「あー……三途の川？」

目の前に流れる第一級河川『三途の川』。非常に水がきれいだなぁ……

オレ「ってちげぇーーー！！」

なんで三途の川！？オレ死んだってことか！？

オレ「何だ何だよ何ですかぁ！？あれか！？一週間生死の境を彷徨ってます的な何かかぁ！？」

ちょっと待てよ！オレ二話くらい前にも言ったと思うけどまだ死にたくないからな！？

よし明久だ！でなければ雄二を道連れにしてやる！

オレ「って違うよな……」
相棒「分かってるじゃないか」

さっきから静かに傍観者になってるコイツに気が付かないとでも？

オレ「まあマジに三途の川横断するところだったのは分かってるけどさ……」
相棒「もう少し僕の身体を丁寧に扱って欲しいね。あれ修理すんの大変だったんだから」
オレ「はは……、まあ次は意識するよ……」

というか次なんてあってたまるか。

相棒「まったく、君は美波ちゃんに心配ばっか掛けて……」
オレ「心配？ていうかあの日から今何時間くらい経ってる？」
相棒「ざっと１７０時間と言った所かな？」

１７０時間っていうと……

相棒「一週間と2時間だね」
オレ「マジに一週間!？ってかオレ一週間も眠ってたの!？」
相棒「厳密には意識不明の重態、ね」
オレ「あちゃぁ……そりゃ心配もするわな……」

まあ今からでも戻れれば影響ない……

オレ「……ってか戻れるのか？」
相棒「まぁ……死んではいないし？」
オレ「ならいいや。オレ戻ってもいい？」
相棒「わりィがこっから先は一方つうｋ……」

オレ「現世への一方通行なのでさよ～なら～」
相棒「あ、ちょ、ま……」

と、まぁ軽い冗談はさておいて……

オレ「なんかあったのか？」
相棒「よく分かんないけど、かなり面倒な況になってる」
オレ「面倒ってどんなだよ」
相棒「わかんない」

即答ですか……

オレ「まあいい。んじゃちょっくら戻ってくっか」
相棒「僕としても、君にはまだ死なれたくないしね」
オレ「んなのオレもだっつの。久しぶりに話せて楽しかったぜ」
相棒「また時々呼び出すね」
オレ「はは……。寝不足にならない程度にな」

目が覚めたら病院に居た。

オレ「……このくだり定番過ぎやしねぇか？」
美波「真琴……？」
オレ「美波……えっと……おはよう？」

身体を起こして言ってみる。
自分で言っといてなんだが、おはようじゃねぇだろ。

美波「ぅ……ぐす……ぅ……」

え！？何！？オレなんかした！？

オレ「美波！？ど、どうした！？」
美波「バカバカ！何やってんのよアンタ！」

泣きじゃくりながらオレに抱きついてくる美波。

美波「……すっごく……心配したんだから……」
オレ「……ゴメン」

謝りながら美波を抱きしめる。
一週間も気絶してれば心配するよな……。

美波「もう……危ない事はしないで……自分のこと、大事にして……」
オレ「……わかった」

またお互いを強く抱きしめる。
病室のドアからは明久と瑞希が顔を覗かせて何やってんだアイツ等ァ！？

オレ「そこ！何やってんだ！！」
明久「……ボクタチハナニモミテナイヨ？」
オレ「思いっきりカタコトじゃねぇかぁーーー！！」

まさか今までの見られてた！？

オレ「お前等！いつから見てた！？」
瑞希「えっと、『このくだり定番過ぎやしねぇか？』の辺りから……」
オレ「最初からじゃねぇかぁーーー！！」

なんでコイツ等見てんだよ！
一体何が目的だ！？

明久「ま、まぁ落ち着いて。ね？」
オレ「お前と瑞希のせいだって分かってるか……？」
明久「それよりちょっと今面倒な事になってるんだけど」
オレ「それよりじゃねぇだろ……で、どうなってんだ？」
瑞希「私、また転校になるかもしれないんです……」

オレ「……は？」

また転校？
一体何があったらそうなるんだ？

美波「ど、どういうことよ？それに“また”って……」
オレ「ああ、美波は知らないんだっけ。清涼祭のときに設備やらFクラスのバカ共やらが原因で一度瑞希の転校騒ぎが起きてな。んで、今度は何があったんだ？」
瑞希「この前の聖獣型召喚獣騒動が私の両親に知られちゃって……」
明久「それでそんな危ない学校には居させられないって……」

一体どういう伝わり方をしたらそうなるんだ……

オレ「で、オレにどうしろと？」
明久「ババアが真琴なら何か知ってるって瑞希の両親に言っちゃって……」
オレ「それでオレに事情を説明しろ、と……」

あのババア余計なことしてくれるじゃねぇか……
人が話したくないの分かっててやってやがんなあの妖怪。

明久「そういうことなんだよ。お願い！」
オレ「……で、その両親はどこにいるんだ？」
瑞希「え？」
オレ「話してやるから連れて来い。ただ、それで何かが変わるとは限らないけどな」
明久「ほんと！？」
瑞希「ありがとうございます！今から呼んできます！」
明久「あ、待って瑞希！」

明久と瑞希は病室から出て行った。

美波「案外あっさり決めたわね」

オレ「……あれのせいで仲間が傷つくのは後味が悪い。聞きたければ美波も同席していいぞ」

美波「最初からそのつもりよ」

オレ「んじゃぁオレも、腹括るかなぁ……」

まさかこんなに早く話すことになるとは思ってなかったし。

それから1時間くらいして二人が戻ってきた。
おそらくオレが目覚めたらすぐに呼ぶようにでも言われてたんだろう。

オレ「んで……“両親”じゃねぇのかよ……」

今目の前に居るのは真面目そうな眼鏡の男性、姫路政宗さんと……
自称母親の姫路瑞穂さん。

政宗「立派な“両親”なのだが」
瑞穂「私、そろそろ成長期来てもいいと思うんですけど」
オレ「間違いなく来ないだろ」

どうして家の親といいオレの周りにはこんな破天荒は家族が多いんだろうな？

政宗「君が峰嶋真琴君でいいんだね？」
オレ「ああ、初めましてかな？」
瑞穂「初めまして～。いつも瑞希ちゃんがお世話になってます～」
オレ「いやいや、こちらこそお姉ちゃんにお世話になってるよ」
政宗「私の妻なのだが」
オレ「信じられるか」

何をどうしたら小学生みたいな母親が出来上がるのか教えて欲しい。

瑞穂「本当なんですよ～？」
オレ「アンタこんな純真無垢な少女洗脳してんなぁ！！」
政宗「だから私の妻だと言ってるだろうが！」

オレ「アレか！？アレですか！？アンタはロリで始まってコンで終わるアレですか！？」
政宗「そこまで言うならはっきり言えばいいだろう！！」
オレ「ロリコンかアンタはァ！！」

～しばらくお待ちください～

オレ「……それで、どこから説明すればいい？」
明久「最初から……かな？」
政宗「今回の騒動は誰の仕業なのかという点も頼むよ」
瑞希「そもそもどうしてこんな事になったのか知りたいです」
オレ「注文多いな……」

最初からって言うと……

オレ「そもそものことの発端は7年前、オレが北海道に転校してから1ヶ月くらいの頃なんだけど、その頃から、オレは試験召喚システムの研究者をしていた」
全員「……は？」

オレ以外の全員が同じ反応をする。

明久「いやいや、真琴って機会音痴じゃん」
オレ「ああ、あれは演技だ」
明久「演技！？」
オレ「なんか出来ない事が欲しいなぁって思って、小学校に上がる

前からずっとやってた演技。話を戻すと、オレが担当していた研究分野は召喚獣の形状変化と人体の召喚獣化だ」

美波「つ、つまりどういうことよ？」

オレ「単純に言うと、『召喚者をデフォルメする事で形状を維持する』っていう召喚獣の概念を覆す研究と、人間を召喚獣にする研究だ」

瑞希「それって……」

オレ「今回の騒動で使われた聖獣型召喚獣のことだ」

通常召喚獣は召喚者と言う基礎にする姿が必要不可欠だ。

その基礎が無くても形状の作成・維持が可能になった形が聖獣型召喚獣という訳だ。

政宗「つまり……その召喚獣は君が創ったものということかい？」

オレ「他にも研究者は居たがメインはオレだったな」

政宗「……君が今回の騒動の原因という事か」

オレ「責任感じてるから自分で処理したんだろうが」

そもそもアレはそんな安い目的で作られたものじゃない。

オレ「大体アレはまだ未完成だった。だから早急に処理できたんだ」

瑞希「ど、どういうことですか？」

オレ「ちょっと質問するけど、もしあの聖獣どもが物理干渉能力を持っていたらどうなったと思う？」

瑞希「えっと……」

明久「その辺を壊しまくる……かな？」

オレ「明久正解。それを利用する研究がオレが担当していた研究だ」

瑞穂「あの～、話が見えないんですけど」

オレ「只でさえ普通の人間の数倍の力を持つ召喚獣が何万点という超高得点を持って物理干渉も出来たら、世界中の軍事国家がこぞっ

て欲しがるだろうが」
美波「それってまさか……」
政宗「戦争兵器、か……」
オレ「そういうことだ」

フェニックスのように防御障壁を張れる奴はなおさら兵器としての需要が高いだろうしな。

明久「試験召喚システムを戦争に利用……」
オレ「人体の召喚獣化も同じ理由だ。召喚獣サイズなら戦地でも小回りが効くし、力も数倍だしな」
美波「アンタはその研究に参加してたって言うの……？」
オレ「何の為の研究かなんてそうそう知らされるわけ無いだろ。それに目的が発覚した時点でそこまで作ってあったデータは丸ごと消去した」
瑞希「じゃああの召喚獣は……」
オレ「誰かが破壊しつくされたデータの一部を拾って復元したんだろうな。オレが話せるのはここまでだ」

これ以上はちょっと機密過ぎる。

政宗「一つだけ質問してもいいかね？」
オレ「内容によりきり」
政宗「これから先、今回のような騒動が起こる可能性はあるのかね？」
オレ「なんとも言えない。ただ、可能性は０じゃないのは確かだ。オレがしていた研究データは今回の騒動で全て出てきたけど、戦争兵器として利用する事を目的にしたものは他にもあったはずだからな」

全員「……」

その場が沈黙で包まれる。

政宗「……黒幕に心当たりは？」

オレ「……一人だけ。ただ、ソイツは４年前に死んでるから有り得ない」

政宗「そうか……。話してくれてありがとう」

オレ「いいや、このくらいは……」

瑞希の両親は病室を出て行った。

オレ「歯止めになれたかどうかは分からないな」

明久「……真琴」

オレ「なんだ？」

明久「僕はどうしたらいい？」

オレ「……オレに聞くな。好きにすればいい」

明久は瑞希を見て、もう一度オレを見る。

明久「……協力してくれる？」

オレ「当然だ。文月が誇る観察処分者コンビ敵に回したらどうなるか、思い知らせてやろうぜ」

明久「うん！」

さて、どこの誰だか知らないが人が作ったものを好き勝手に使ってくれやがったな。

思い知らせてやる。

「守るものがある奴は強いんだよ」

明久は瑞希を、オレは美波を守るためなら、なんだってしてやる。

第六十六話　聖獣型召喚獣編　エピローグ

バカテスト　日本史

問　以下の問に答えなさい。

『長篠の戦いが起きたのは何年か、ユリウス暦で答えなさい』

姫路瑞希の答え

『１５７５年』

教師のコメント

正解です。特にコメントはありません。

吉井明久の答え

『天正３年』

教師のコメント

長篠の戦いが何年に起きた戦いか、という問題に対する解答としては正解ですが、問題文にユリウス暦で答えなさいとあるので残念ながら不正解です。
ただ、吉井君は最近成績がとてもいいので先生はうれしいです。

峰嶋真琴の答え

『君と歩く道、君の存在だけをただ抱きしめ続けた１６６３年』

坂本雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震える君の手を握った１９９６年』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。しかも両者の差が３３３年というのが妙に腹立たしいです。

土屋康太の答え

『２３００年』

教師のコメント

まだ来てないじゃないですか。

真琴ＳＩＤＥ

オレが目を覚ましてから3日後、つまり騒動終息から１０日後、オレはババアに呼び出された。

ババア「まさかアンタが試験召喚システムの研究者だったとはねぇ……」

オレ「どこ情報だコラ」

いや、過去の研究者のリスト調べれば分かる事か。

ババア「で、今回の騒動、アンタはどう見てるんだい？」

オレ「どうも何も、研究者の誰かの仕業だろうが。一度破壊しつくされたデータを完全に近い状態まで復元するほどのな」

ババア「となると、容疑者はかなり絞れるねぇ……」

当時オレは年齢を抜きにしても指折りだったらしい。
出来る事をしてただけだから自覚は無かったが。

ババア「アンタ、心当たりはあるのかい？」
オレ「“武藤戒夜”って線は無いか？」
ババア「有り得ないね。戒夜は４年前に事故で死んでいるはずさね」
事故ですか……

オレ「だが死体は出てないだろ。どうして死んだって言い切れる？」
ババア「あの爆発で人の形が残ると思うかい？」
オレ「まあ確かにそのとおりだが……」

だがそれにしては引っかかる。
今まで文月学園でこういうトラブルは一度も起きていないはずだ。
それがオレが転校してきた今年に、オレが関わった研究のデータが送りつけられてきた。
これを偶然の一言で片付けていいのだろうか？

ババア「だがもし仮に戒夜が生きているとすれば……アンタ相当危険だよ」
オレ「オレはまだいい。問題は……明久達だな」
ババア「深く考えるのはおよし。まだ戒夜が生きてると決まったわけじゃないんだ」
オレ「けどな……」

はっきり言おう。戒夜さんは生きてる気がする。
できれば死んでて欲しいんだが、オレの第六感は生きてると訴えて

る。

ババア「まああの繭のデータも保存してあるさね。アンタも解析を手伝いな」
オレ「断る……とはいかねぇよな」
ババア「当然さね」

まあ演技は一時中断と行きますか。

オレ「これからどうする？体育祭やら何やら色々あるだろ？」
ババア「予定は何も変えないよ。体育祭を中止するとなればそれ相応の理由が要るからねぇ」
オレ「研究者が裏切って色々するかもしれないから中止しますなんて言えない訳だ」
ババア「まあそういう訳さね」

なんか面倒な事になってるなぁ……

ババア「繭のデータの解析もそうだけど、アンタはさっさと授業に戻りな」
オレ「テメェから呼び出しといてその言い草かよ……」
ババア「ほれ、さっさと戻れと言ってるんだよクソガキ」
オレ「へいへい……っと、一つ聞いてもいいか？」
ババア「何だい？」

危ない危ない、忘れるところだった。

オレ「試召戦争、出来そうか？」
ババア「今のところは問題なく行えそうさね。だがそうしてそんなことを聞くんだい？」

オレ「近々戦争が起きる予定だからな」
ババア「アンタたちFクラスは解禁までまだ2週間ほどあるのにかい？」
オレ「ババア。設備を手に入れるには戦争を仕掛けるしかないって概念は捨てたほうがいいぜ？」

それだけ言い残してババア室を後にする。
さて、予定ではあと3日ほどであの人が帰ってくる頃か……

オレ「……恐ろしいことになりそうだ」

第六十七話　姉と男と真琴の実力（前書き）

玲さん登場です！そして新章突入です！

第六十七話　姉と男と真琴の実力

バカテスト　英語

問　以下の英文を日本語訳しなさい。

『Ｈｉｓ　ｗｏｒｄｓ　ａｒｅ　ｌａｗ』

姫路瑞希の答え

『彼の言葉は法律です』

教師のコメント

正解です。姫路さんの回答でも正解ですが、他にもことわざでこの英文の日本語訳があります。そちらは峰嶋君が答えてくれたようです。

峰嶋真琴の答え

『鶴の一声』

教師のコメント

この訳を知っているとは流石峰嶋君ですね。直訳すると『彼の言葉は法律です』となり、『優れた人物の一言』という意味がある鶴の一声となります。日本のことわざを英語にするとこのような言い回

しのようになり、面白いのでほかにも調べてみるといいかもしれません。

吉井明久の答え

『鶴の恩返し』

教師のコメント

君の回答に『鶴』が出てきただけでもまだ良い方なのでしょうか？

土屋康太の答え

『彼の性欲は法律だ』

教師のコメント

そんな法律はありません。

明久ＳＩＤＥ

どうしてこうなった。
今……僕は窮地に立たされている。

？？『アキくん。ドアを開けてください。姉さんはまだ家の中に入っていませんよ？』

そんな事は分かっている。分かっててやってるのだから当然だ。

ピンポーン

自称姉『アキくん。聞こえないのですか？それとも姉さんが外に残されたままだという事に気が付いてないのですか？』

どうしよう。まさか姉さんが来るなんて想定していなかった。
テストの点数は4月に比べればかなりよくなったし、（バラつきはあるけど）Aクラスぎりぎりくらいの点数を保っている（時々下がるけど）。
問題はそこじゃない。問題は……

僕「瑞希と付き合ってることがバレたら……殺される」

姉さんは不順異性交遊全面禁止というお堅い人だ。
しかも何かにつけて僕に接吻はじめ性的悪戯をしようとしてくる。
この状況はまさに前門の狼、後門の虎だ。※正しくは『前門の虎、後門の狼』です。

ピンポーン

認めたくないけど姉『アキくん。もしや、姉さんにイジワルをしているのですか?そんなに姉さんのバスローブ姿は気に入りませんでしたか?』

しかもこの出来れば赤の他人であって欲しい姉は何故か初登場でバスローブ姿だった。
なして!?なしてバスローブ!?
ここで着替えたよね!?まさか天下の往来を風呂上り専用衣類で歩いたりしてないよね!?

姉と思われる人物『どうして姉さんを家に入れてくれないのですか。何か姉さんを中に入れたくない理由でもあるのでしょうか?……姉さんを中に入れたくない理由……なんでしょうか?』

この人物を家に入れたくない理由など決まっている。
この人はどうせ母さんに言われて抜き打ち生活チェックをしに来たに決まっている。
そしてお隣さんが僕の友人と知れば躊躇なく上がりこみ、僕の学校での生活態度や異性との友人関係を聞きまくるにきまってる。それ位しても何もおかしくない。

姉疑惑のある人物『――――ああ、分かりました。つまりアキくんはこう言いたいのですね？』

なんだろう？姉さんなりに僕のことを考えてくれたのだろうか？
まあそうだよね。僕も高校2年生になるわけだし、ある程度の異性交遊は容認してくれても――――

こんのバカ姉がぁぁーー！！『家に入れて欲しければ、バスローブではなくメイド服を着て来い、と』

訂正、この人は僕の何一つ考えてない。
この人が考えているのはどうやって僕を自殺に追い込むかだけだ。

僕「だ、ダメだ……っ！これは姉さんの天然の罠なんだ……っ！ツッコみのためにドアを開けたら最後、獲物を狩る鷹のように家に踏み込まれる……！」

ツッコんじゃダメだぞ……！
耐えろ。耐えろ。耐えろ。耐えるんだ！

現実を認めよう。姉『……仕方がありませんね。今からお隣さんに事情をお話しして、メイド服を借りてきます』

僕「やめてっ！バスローブ姿でお隣さんにメイド服を借りに行かれるくらいなら、家に入れるから！あと、さも日本の一般家庭にはメイド服が常備されているかの言うな認識は改めて！」

しかもお隣さんって真琴だよね！？

この人の説明力で真琴と会話したら何かとんでもない勘違いをされてしまう気がする！

姉「そうなのですか？でも、先月知り合った海外の方は『Ｆｕｊｉ（フジ）ｙａ－ｍａ（ヤーマ），Ｔｅｎｐｏ－ｒａ（テンポーラ），メイド服』が日本の文化だと言っていましたよ？」

僕「ソイツ絶対におかしい！！なんで富士山も天ぷらもまともに発音できてないのにメイド服だけそんな流暢なのさ！？」

姉「『Ｅｖｅｒｅｓｔ（エヴェレスト），Ｐａｅｌｌａ（パエリア），メイド服』も日本の文化だと言っていました。

僕「百歩譲ってパエリアはまだ得心行く部分もあるけどエベレストは絶対違う！！」

いくらなんでもこれは酷すぎる。

エベレストが日本の文化だなんてどういう解釈をしたらそうなるんだろうか。

姉「とにかく家に上がらせてもらいますね」

僕「あ」

予想通り、姉さんは獲物を狩る鷹のような勢いで踏み込んできた。

まあ今は見られても困るものはほとんどないから大丈夫かな……？

姉さんはリビングへと突入していく。

さあ見るがいい！だらしないと思っていた弟の素晴らしい生活空間を！

と、思った僕が甘かった。

姉「……（バサバサバサ）」

姉さんはリビングに入った途端、無言でエロ本をばら撒き始めた。

僕「何してんのさアンタァ！？」

姉「……アキくん。こんなに沢山のエロ本をどうやって買ったのですか？」

僕「今アンタが撒いたんだろうがぁぁーーー！！」

何なんだ！？ここまでやるのか！？

しかも姉さんがばら撒いたエロ本をよく見てみると……

僕「姉萌え本しかない……」

相変わらず奇天烈な人だなぁ……

姉「冗談はさておき」

僕「冗談！？ここまで僕を追い詰めておきながら冗談の一言で済ませるの！？」

姉「まったく、アキくんはいつまで経っても騒がしいままですね」

僕「アンタのせいだろうがぁ！！」

帰ってくるなりこれか！？

この人ホント何考えてるか分からない！！

姉「ではアキくん。瑞希さんと真琴君を呼んで下さい」

僕「……は？」

なんで姉さんが……瑞希と真琴のこと知ってるの……？

そして僕、姉さん、瑞希、真琴の４人がダイニングの椅子に座っている（姉さんはバスローブから普通の格好に着替えた）。

姉さん「瑞希さんとは初対面でしたね。初めまして。吉井明久の姉の玲です」

瑞希「あ、えっと、姫路瑞希です」

お互いにぺこりと頭を下げて挨拶する女性陣。
しかしさっきからずっと気になってたんだけど……

僕「姉さんと瑞希って知り合いなの？」
瑞希「い、いえ、今日初めて会いました」
玲「姉さんが一方的に瑞希さんの事を知っているだけで、瑞希さんの言うとおり、お会いしたのは今日が初めてです」
僕「ふーん……」

なるほどなるほど。それでさっきから約一名黙りこくってるわけか。

僕「真琴。僕には説明が必要みたいだ」
真琴「……オレ知らね」
玲「アキくん。真琴君から話は聞いています」
僕「やっぱ真琴か！」

真琴姉さん間に一体どんな繋がりがあるのか知らないけど勝手に何やってんのコイツ！？

玲「真琴君には、アキくんの成績や生活態度について定期的に報告してもらっていました」
僕「真琴、遺言を考える時間をあげるよ」
真琴「待て！落ち着け！これには理由があるんだよ！！」

リユウ？ハテナンノコトヤラ？

玲「真琴君には報告をしなければ性的悪戯をしますと言っただけですが」
僕「アンタ人ん家の子供に何する気！？」

真琴に対する憤怒も消え去るほどの常識のなさにびっくりだ。

玲「話を戻します。アキくん。姉さんは瑞希さんとのお付き合いについては容認するつもりでいます」

ほらきた！どうせその件についても知ってると思ってたさ！例え姉さんの魔手が僕を（いろんな意味で）脅かそうとも瑞希と――――

――――え？

僕「い、今……何て言ったの……？」

玲「瑞希さんとのお付き合いについては容認するつもりですと言いました」

明日は台風のち隕石だろうか。

真琴「明久、明日は台風でも隕石でもないぞ？」

僕「はっ！？で、姉さん。どうして急に？」

恐らく姉さんなら僕に足払いを掛けて倒した後、マウントをとって拳を振り下ろし続けるかコーヒーをかけた後にシャワーを浴びさせ、着替えと称してナース服エプロン野球帽といった明らかにおかしいラインナップをそろえるくらいはして来そうな物なのに。

玲「瑞希さんのことは真琴君から聞いています。真琴君の話を聞いて、瑞希さんはアキくんを騙す様な人ではないと判断しただけです」

真琴「感謝してくれよ？この石頭でっかち変態暴力女を説得するのは大変だったんだからな？」

真琴の台詞の中に思いっきり罵倒が含まれているのは気にしない方向で。

瑞希「えっと……あの、話がよく分からないんですけど……」
僕「えっと、姉さんは僕に不純異性交遊の全面禁止って意味不明な約束を取り付けさせてて、もし破ると……」
玲「アキくん。キスをしたくなるので顔を背けてくれませんか？」
僕「こうなるんだ」
真琴「今更ながらに思うんだがアンタに羞恥心と言うものはないのか！？」
瑞希「あ、明久君は渡しませんからね！？」
真琴「そこ！ツッコむところ違う！！」

姉さんのたった一言でここまで場が乱れるのだから姉さんのカオスを生み出す能力はＦクラス並みかもしれない。

僕「でも姉さんがそういうなら一番の壁はなくなったも同然――」
玲「アキくん。勘違いしないでください。姉さんは瑞希さんとのお付き合いを容認する“つもり”と言っただけで、まだ認めたわけではありません」
僕「え？それってどういう……」

姉さんは真面目な顔をして（いつも真面目な顔だけど）僕の目を見て話してくる。
こういうときの姉さんは（僕の記憶してる限り）真剣なときだ。

玲「アキくん。あなたは４月に悪友である坂本雄二くんと共にＡクラスに試召戦争を仕掛けていますね？」
僕「う、うん。結局は負けちゃって……あ……」
瑞希「……」

ここで自分の失言に気づく。
7対7の代表戦でFクラスの敗北を決めてしまった5試合目……その試合に参加したのは瑞希だ。
その本人がいるのにこの話題は好ましくない。

瑞希「明久君、気にしなくても良いですから……」
僕「う、うん。瑞希こそ気にしないほうが……」
玲「？　何の話しか分かりませんが、話を進めます」

あれ？戦争の内容については真琴から聞いてないのかな？

玲「アキくん。正直に話してください。あなたがAクラスに試召戦争を仕掛けた理由は何ですか？」

ぐ……結構嫌な質問じゃないか……
瑞希がいないところでなら『瑞希のために』って簡単に答えられたのに……

僕「えっと、あのｓ……」
玲「嘘をつかないでください」
僕「設備が……ってまだ何も言ってないよ！」
真琴「お前の嘘は底が浅いからな。正直に言えと言ってるだろう」
僕「ぐうぅ……」

し、仕方ない……
ここは正直になるとしよう……恥ずかしいけど／／／

僕「実は……あの戦争は瑞希の為に起こしたものなんだ……」
瑞希「……」

瑞希からは特に何のリアクションもない。
何かしらあると思ってたけど。
真琴と姉さんも無言で聞き続けてて、僕も話し続ける。

僕「瑞希は実力で言えばAクラス入り確実だったのに、振り分け試験で熱が出たってだけでFクラス入りなんて酷いと思ったんだ。だから、せめて設備だけでもAクラス並みのものを使わせてあげたいなって……」
瑞希「明久君……」
僕「でも結局はダメだったんだ。僕は負けちゃったし、設備を落として終わっちゃったんだから……」
瑞希「明久君、私は――」
玲「アキくんの考えはよく分かりました」

瑞希の言葉を遮って姉さんが言う。
よく分からないけど姉さんは何が言いたいんだろう。

玲「アキくん。アキくんはバカで不細工な上に甲斐性なしですが男の子です」
僕「いまさりげなく僕を罵倒したよね？」
玲「姉さんは昔から、男の子なら一度やると決めた事はやり通しなさいと教えたはずです。それとも瑞希さんの為に起こした試召戦争は、アキくんにとってその程度の物だったんですか？」
僕「そんなわけないよ！」
玲「だったらアキくんは自分のやるべきだと思うことをやりなさい。男の子なら、自分の責任に発言を持ちなさい」

あれ？でも今ってまだ宣戦布告禁止期間じゃ……

僕「でも姉さん。今はFクラスはまだ宣戦布告禁止期間で、僕たち

から戦争を仕掛けることは出来ないよ？」
玲「アキくんが物事を考えるのが苦手だという事は分かっています。アキくん。アキくんの前に座っているの誰ですか？」
僕「誰って……真琴？」
真琴「オレだな」
玲「アキくん。人にはそれぞれ得意不得意があります。確かに不得意はないほうが良いですが、不得意がない人間はいません。だからこそ、仲間同士で得意不得意をカバーするのではないですか？」
真琴「まあこの人がいいたい事はそれだけだろうな。ここから先はオレが引き継ごう」

ここで姉さんは話したいことを全て話したのか部屋から出て行った。

真琴「さて明久。お前に聞くが……試召戦争を仕掛ける気はあるか？」
僕「あるよ」
真琴「瑞希にも一応聞いておくが……」
瑞希「私もやりたいです！」
真琴「じゃあ説明にはいるぞ」
僕「ちょ、ちょっと待ってよ。さっきも言ったけど、僕等から戦争を仕掛けることは出来ないんだよ？」

真琴はフッっと笑って言う。

真琴「いいか明久。戦争を仕掛けられないことと設備が手に入らない事はイコールじゃない」
僕&瑞希「ど、どういうこと（ですか）？」
真琴「元システム研究者の実力、見せてやるよ」

第六十八話　AとBとFクラス軍師の思惑（前書き）

真琴イメチェン計画（某新世紀アニメネタｗｗｗ）
そして今回かなりＲ１５です。
苦手な方はバックをオススメします。

第六十八話　AとBとFクラス軍師の思惑

バカテスト　音楽

問　以下の楽器について説明しなさい。

『バズーン』

姫路瑞希の答え

『全長約2，6メートルの木管楽器の一種で、ドイツの呼称ではファゴットと呼ばれる楽器です。管は折り曲げられた形状をなし、幅広い最低音域をもちます』

教師のコメント

正解です。バスーンはベートーベンやチャイコフスキーの交響曲などでも用いられることのある楽器ですが、その特徴的で独特な音色から、クラシックだけでなくドラマやアニメ、歌謡曲などのＢＧＭ、伴奏として用いられる事もあるそうです。

峰嶋真琴の答え

『巨大な大砲』

教師のコメント

それはバズーカです。

土屋康太の答え

『バーゲンセールのときに見る』

教師のコメント

それはバルーンです。

吉井明久の答え

『主婦の皆様の戦闘意欲を掻き立てる球体』

教師のコメント

それもバルーンです。

明久ＳＩＤＥ

土日過ぎて週明け、月曜の朝。
場所はＦクラスの教室で僕等は見知らぬ眼鏡の女子と対面した。

見知らぬ眼鏡の女子「……って誰が見知らぬ眼鏡の女子じゃぁぁーーーー！！！」

その見知らぬ女子は何故か男子の制服を着て叫んだ。
……この声は真琴？

僕「真琴……なの？」
真琴？「んな事聞かなくても分かるだろ」
瑞希「わ、分からないです。というか可愛いです……」
秀吉「お主本当に真琴かの……」
雄二「まるで別人だな……」
康太「……新しいモデル」
みどり「うーん、あたしは見慣れてるしねぇ……」

へ？見慣れてる？
って……

僕「まさか真琴、女装癖が！？」
瑞希「ふ、不潔です！不純です！真琴君には美波ちゃんがいるじゃないですか！！」
真琴「お前らはバカか！？まず女装なんてしてないし、こっちに来る前はこれが普通だったんだ！！」
僕「これが普通って……」

真琴の髪は全体的に伸びていて、後ろで一つに結んだ髪が背中の真ん中辺りまで伸びている。
顔立ちといい眼鏡といい、某新世紀アニメの真〇波さんを髣髴とさせてくれるじゃないか。

真琴「眼鏡外せばまだ分かるか？」
僕「……まぁ、ちょっとは……」

しかし眼鏡と髪型だけでここまで雰囲気変わるとはね……

秀吉「しかし急にどうしたのじゃ？髪形なんぞ変えて」
雄二「…というよりどうやって伸ばした？二日三日じゃそこまで伸びないだろ」

あ、そこは僕も気になるところだ。

真琴「バカ。地毛な訳あるか。エクステだよ。エクステ」
僕＆雄＆秀＆康「「「エクステ？」」」

聞きなれない単語に４人で首をかしげる。

瑞希「エクステって確か、付け毛のことですよね？」

真琴「ああ。親父の仕事の知り合いにその手の人がいてな。頼み込んで使わせてもらった。初めてだったけど、結構元の形に戻ったと思うけど」

ここでも金持ちパワー炸裂か。

秀吉「つまりその髪型は昔の真琴の髪型というわけじゃな？それで、どうして急に髪型を元に戻そうなどと思ったのじゃ？」

真琴「ああ、それは美波が――――」

ガラ　（美波が教室のドアを開ける音）

シュパッ　（美波が真琴を音速で連れ去る音）

ギャアギャアギャア　（美波と清水さんが廊下で真琴を取り合う声）

全員「……」

あまりの摩訶不思議超速出来事に全員の口が開いたままになった。

僕「姿が見えなかった……」

瑞希「美波ちゃん凄いです……」

雄二「む、ムッツリーニ、今の見えたか……？」

康太「……見えなかった」

秀吉「一体何が起こったのじゃ……？」

みどり「琴君がいないから……みなみんと清水さんが琴君を連れ去った……てのが妥当な考え？」

推測は概ねみどりので正しいと思うけど……真琴、清水さんに続いて美波まで人外化したか……

真琴『ちょ……ま……おま、どこ触って……！？』

美波『かぁぁあぁぁいぁいぃぃいぁぁいいあぃぃぁぁぁ！！（精神崩壊中）』

美春『お姉さまばっかりズルイです！美春にも可愛らしいお兄さまを堪能させてください！！』

真琴『み、美春まで！？てかお前らホントにどこ触って……バカ！ベルト返せ！』

なんか……真琴が超えてはいけない一線を越えてしまう気がする……

真琴『あ、あき、明久！助け……ちょ、おい！ワイシャツのボタンに手をかけるな！！』

美波『真琴……ウチと一緒にヌギヌギしましょう！！（精神崩壊中）』

美春『お兄さま！《１８禁》するなら美春としましょう！！』

真琴『バカ！！お前ら何言って……て、鉄人！！丁度よかった！助けて！いや、助けてください！！』

何！？鉄人だと！？いや、助ける助けない以前にこのままじゃ真琴が鬼の補習室行きに……

鉄人『あー……、峰嶋、お前も幸せ者だな？』

ならなかった。
それよりももっと酷い状況になった。

真琴『オイコラ鉄人!?いや、西村先生!!助けてくださいお願いします補習でも罰でも手伝いでも何でもするからしますからぁぁーーーー!!』
鉄人『いや、観察処分者の仕事は今はないからな。お前は成績優秀だし、補習の必要もないだろう』
美波『ほらほら、生活指導の西村先生公認なんだから、手早くじっくりと……』
真琴『オイ待て!手早くじっくりオレをどうするつもりだ!?というか手早くじっくりっておかしいだろ!!』
美春『その続きは美春が教えてあげますわ。お・に・い・さ・ま?』
真琴『遠慮する!全力で遠慮するから……ちょ、やめ、おい!Yシャツ返せ!!』
美春『お兄さまの汗が染み込んだYシャツ……一生洗わず大切にします!!』
美波『ちょっと美春!それ寄越しなさい!』
真琴『寄越すも何もそれオレのだしそれないとオレ今日一日困るし洗わなかったら汚いだろうがぁぁーーー!!』

真琴と美波と清水さんが走り去る音が聞こえる。
ちなみに教室では真琴の上半身裸を想像したムッツリーニが天に召されかけていた。

真琴ＳＩＤＥ

オレ「まったく……」
美波「ごめんなさい……」

美波と美春の暴走を（力で無理矢理）ねじ伏せて抑えた後の教室。
まったく、今日は大事な日だってのになんて迷惑なことしてくれてるんだか……

鉄人「ではホームルームを終わる。各自、授業の準備をしろ」

っと、ここらで言っとくべきか。

オレ「待ってください。先生」
鉄人「み、峰嶋か……復讐なら後にしてくれないか？」
オレ「違うわ！！……大事な話があるんですよ。ちょっと時間貰います」
鉄人「いいだろう。手早く済ませるんだぞ」

さて、担任の許可まで貰ったんだし、やりたい放題やらせてもらうか。

オレ「さて、皆に一つ質問したい。今のこの教室は清涼祭の稼ぎでEクラス並みの設備になっているんだが……これ以上の設備が欲しくはないか？」

F生徒『そりゃあ欲しいけど……』
F生徒『Fクラスはまだ宣戦布告禁止期間だからな……』
F生徒『望んだって無理なものは無理だし……』

お、分かってる奴が結構多いみたいだ。
流石にそこまでバカじゃなかったか。

オレ「少なくとも皆が今以上の設備を望むのなら、今より設備をよくする方法もなくはない」

F生徒全員『何ィィ！？』

うんうん、このノリのよさがFクラスのいいところだよな♪

雄二「おい真琴。さっきも誰かが言ったが俺達の宣戦布告禁止が解禁されるのはまだ2週間くらい先だ。そんな先の話を今からしてどうする？」

オレ「おいおい、いつ誰が『試召戦争を仕掛ける』なんて言ったよ？当然それも計算内さ」
雄二「どういうことだ？」
オレ「それを今から説明してやる」

～計画説明中～

オレ「……ということだ」
雄二「まさかそこまでするとは思わなかったぞ……一体何がそうまでしてお前を駆り立てる？」
オレ「うーん……とある変態に条件を出されたカップルの為……かな？」

当然明久と瑞希のことだけど（変態＝玲）。
雄二もそれでどういうことだかなんとなく理解したみたいだ。

雄二「なるほどな。それならお前が動くのも頷ける」
オレ「だろ？雄二もちったぁやる気でんじゃね？」
雄二「忘れたのか？俺はアイツの幸せが大嫌いだ」
オレ「何ならお前は霧島に引き渡してもいいんだけどな」
雄二「喜んで協力する」

ホント素直じゃねぇなぁ……

オレ「まあそういうわけだ。今からＡクラスに交渉に……」
明久「ちょ、ちょっと待って」

ここで明久に止められる。
ん？何か問題でもあったか？

オレ「どうした？」
明久「雄二、真琴をＦクラスの軍師として推薦したいんだけどいいかな？」
雄二「お、明久にしてはいい事言うじゃねぇか。それは丁度俺も考えてたことだ」

本人の意向無視して勝手に考えんな。

雄二「明久から推薦もあったことだし丁度いい。真琴がＦクラスの軍師になることに意義のある奴はいるか？」

そりゃあいるに決まって

シーーーン……

ないのかよ……

雄二「という訳だ。宜しく頼むぞ」
オレ「オレの意向は無視ですか！？」
雄二「そう言うなって。適任だろ」
明久「僕もそう思う、今回の作戦だって、真琴が考えたんだし」
オレ「……仕方ない。引き受ける……」

こうやって安受けあいして、あとで泣く羽目になるのってパターンだよなぁ……

優子「同盟を組めですって？」

オレ「そ、同盟」

さて、オレ達は豪華絢爛なＡクラスの教室まで交渉に来たわけでございます。
ちなみにメンバーは、オレ、雄二、明久、瑞希、美波、ムッツリーニ、秀吉、みどりの８人。
え？想像通り？おかしいなぁ……

とと、話を戻そう。オレ達はＡクラスの教室に同（ｒｙ

優子「お断りよ。Ｆクラスと同盟を組むってことは、この学年全員を敵に回すのと同じだし」
オレ「まさしく正論だな」

強化合宿での覗き騒ぎの主犯格（雄二、秀吉、ムッツリーニ）の三人が全員Ｆクラスって事もあって、Ｆクラスは学年中の女子から睨まれている。
正直、美春がいなきゃ大変だったかもな。

雄二「だがＦクラス男子である明久と真琴が女子側についたことと、この単科目平均１６００オーバーの化け物さんがいるおかげでどのクラスも攻め込んできてないわけだ」
オレ「オイコラさらっと化け物言うなゴリラ」
雄二「んだと怪物？」

「「……（ガンのくれあい）」」

優子「交渉の場でも喧嘩するのね……」

まったく、喧嘩しか能のない雄二のせいでオレまで一緒だと思われたじゃないか。

オレ「という訳で同盟ヨロシク！」
優子「今断ったばかりよ！？言ってるでしょ！Ａクラスはｆクラスとの同盟を拒否します！」
雄二「本当にそれでいいんだな？」
優子「ど、どういうことよ？」

Ａクラスって言っても、所詮は勉強脳か。もっと頭を使ったほうがいいと思うんだけどな。

オレ「この同盟を拒否するってことは、オレ達を敵に回すってことだぞ？」
優子「それが何だって言うのよ？学年最底辺のＦクラスを敵に回したところで、何も怖くないわよ」
翔子「……優子、落ち着いて」
明久「ぅおわぁ！？」

明久、うるさい上にオーバーリアクション過ぎだ……

優子「代表！？まさか代表は、同盟を飲むって言うの！？」
翔子「……そこまでは言ってない。ただ、冷静になって方がいいと言ってるだけ」
優子「アタシはいつだって冷静よ！とにかく、同盟は拒否します！」
オレ「いいんだな？」
優子「な、なによ！？」
翔子「……待って、峰嶋」

どうやらＡクラス代表にはオレの考えが伝わったみたいだな。

翔子「……優子、落ち着いて考えて。向こうの主戦力は交渉に来て

いる8人。峰嶋は単科目１６００点オーバーで、姫路は５０００、雄二、名川は４０００点オーバー。土屋は保健体育で１６００点オーバーだし、吉井、島田、優子の弟もＡクラス並みの点数をとっている」

優子「ひ、秀吉が……？」

秀吉「姉上。わしだって勉強するのじゃ。姉上に完敗してから、Ａクラスに勝つために必死で勉強してきたのじゃ」

みどり「ほとんどあたしが教えたんだけどねー」

秀吉「……」

みどり？折角の秀吉のカッコいいシーン返してやれよ？

オレ「で、どうする？同盟を拒否するってんなら、オレ達は宣戦布告が解禁すると同時にＡクラスに攻め込むが？」

優子「……いいわ。同盟を組みます」

オレ「交渉成立♪よろしくな」

優子「で、具体的にＦクラスは何がしたいのよ？」

そうそう。それ重要。

オレ「オレ達の目的はあくまで設備だ。今回の目標はＢクラスだけどな」

翔子「……話が見えない」

オレ「そちらさんがさっき言ったとおり、オレ達Ｆクラスは宣戦布告の解禁までまだ時間がある。こっちの事情で設備の向上は早めに行いたいから、Ａクラスに協力を仰いだって訳だ」

優子「ど、どういうこと？Ｂクラスの設備が欲しいなら、Ｂクラスに宣戦布告して勝てばいいじゃない」

オレ「それが出来ないからこうして来てるんだろうが」

ここまで言ってもまだ分からないか。
こりゃＡもＦも大差ないな。

オレ「単刀直入に言うと、Ａクラスにはｂクラスと試召戦争してもらう」
久保「どういうことだい？そんなことをしても、Ｂクラスの設備が落ちてしまうだけなんじゃ……」

久保？今まで黙ってたと思ったら一体何して……顔が赤いってことはコイツ、明久見てたな？
ってそんなことはどうでもいい（どうでもよくないけど）。

オレ「自分達が勝つのは前提か？まあそうでなくちゃ困るんだけどな。Ａクラスには、Ｂクラス戦に勝利してもらい、戦後処理として設備を交換して欲しい」
優子「それってアタシ達がＢクラスの設備になるってこと？そんなの――――」
翔子「……それで、その後は？」
優子「代表……。アタシの台詞……」
オレ「その後Ａクラスはｆクラスと試召戦争を行い、勝利する。んでもってＢクラスのときと同じように戦後処理として設備交換後、再度Ｂクラスと戦争してもらう」

これがＦクラスから戦争を仕掛けなくても設備を手に入れる方程式、作戦名『☆ＨＩ☆ＴＯ☆ＭＡ☆ＫＡ☆ＳＥ☆』だ！！

優子「そうなるとえっと……」
翔子「……Ａクラスの設備はもとのまま、ＦクラスとＢクラスの設備が入れ替わったことになる」
オレ「そういうことだ」

優子「それで、アタシ達にもメリットはあるんでしょうね？」
オレ「ああ。この作戦ではFクラスが一度戦争に敗北する必要があるため、その日から3ヶ月間宣戦布告が出来なくなる。3学期までAクラスに戦争の申し込みが出来るのは、C、D、E、クラスだけになる。平和だぞ～？Fがおとなしいのは～」
優子「……仕方ないわね。それじゃ今から宣戦布告してくるわ」
オレ「流石！行動が早い！」

木下姉は宣戦布告するために教室から出て行く。

オレ「それじゃ霧島。同盟を結んでくれたお礼として、ウチの代表を献上しよう」
翔子「……ありがとう。峰嶋はいい人」

霧島も旦那を捕まえるために退場に。
ちなみにオレが交渉を進めてる間、明久達7人は工藤愛子及び佐藤美穂とともにくつろいでたとか……

ふざんけんなよあいつ等……特に明久と瑞希……！！

そして今までである程度は平和だった第2学年は、また戦争の渦へと飲み込まれていく……

第六十八話　AとBとFクラス軍師の思惑（後書き）

次回急展開！！

「え！？まだ全然作戦進んでないよ！？」

第六十九話　嘘と敗北と入り混じる試召戦争（前書き）

お気に入り件数１００件突破です！
これからも宜しくお願いします！
あ、あと今回はバカテストはお休みです。
早くオカルト編入らないとバカテストのネタがない……

第六十九話　嘘と敗北と入り混じる試召戦争

真琴ＳＩＤＥ

美波「見てきたわ。どうやらＡクラスの方が優勢みたいね」
オレ「そうか。サンキューな」

現在ＡクラスはＢクラスと試召戦争をしている。
勿論これはＡクラスにとってはメリットなんてその辺のハウスダストくらいしかない戦争だ。
雄二はこれから３ヶ月間の宣戦布告が出来ないって教えたら憤慨してたけど、感謝して欲しいくらいだ。
仮にオレ、瑞希、雄二、みどり、明久、美波、ムッツリーニ、秀吉の全員が万全の状態だったとしても、Ａクラスの総合には全然届かない。
他の連中は５～１０人でＡクラスとやっと相対出来る程度の点数だし、それを考えたら無意味に高いリスクを背負ってまでＡクラスの設備を狙う必要はない。

明久「でもＢクラスの代表って根本君だよね？卑怯なこととかしてこないかな……」
オレ「最近やっと更正してきたかあのクズ野郎って思ってたのに、強化合宿以来もとの根本に逆戻りだもんな」

ちなみに現在教室に残っているのはオレ、瑞希、雄二、明久、美波の５人だけ。
理由は簡単。偵察に行かせてるからだ。

雄二「それにしても、クラス9割を偵察に投入ってやりすぎじゃないか？」
オレ「そんなことないさ。戦況をきっちり把握していなければ、軍師なんて務まるわけないだろう？」
雄二「まあそうだが……」

もっと言うと偵察に行かせた人数が多いのは、Bクラスが敵と間違えて勝負を挑んで補習室送りになったら面白いなーとか思ったからだ。
これは遊び半分面白半分だから別に成功してもしなくてもどっちでもいい。

美波「ただね、気になったのは、ところどころにCクラスとEクラスの生徒がいたってことよ」
瑞希「あ、それ私も見ました。なんでいるのかなって思ったんですけど、私たちと同じように偵察に来てるのかなって……」
オレ「お前らそういうことはもっと早く報告してくれよ……」
瑞希&美波「ごめんなさい……」

しかしCクラスとEクラス？あの2クラスの代表はヒステリーと筋肉だったか？
なんでCとEが偵察に来ている？あわよくば勝者の首根っこを……とか考えてるのか？

明久「なんでCクラスとEクラスがいるんだろうね？」
瑞希「私は偵察だと思ったんですけど……」
美波「ウチらみたいに偶然勝負を挑まれて補習室送りにしちゃうのが目的だったりして」
明久「それはないよ。仮にもしそうなら、BクラスかAクラスのど

っちかがCクラスかEクラスと手を組んでるってことになっちゃうし」

……何？

美波「あ、そういえばそうね」

瑞希「確かにこの４クラスはそこまで接点もないですし、手を組んでるって可能性はないですよね」

明久「それよりもやっぱり美味しいとこ取りを狙ってる可能性のほうが高いと……」

オレ「明久、今なんて言った？」

明久「え？えっと、『それよりもやっぱり美味しいとこ取りを狙ってる可能性のほうが高い』かな？」

明久はきょとんとした顔で答える。

オレ「違う。その前だ」

明久「その前って……BクラスかAクラスのどっちかがCまたはEと手を組んでることになるって……」

オレ「そうか……そういうことだったのか……」

道理でCEがいるわけだ……

このままで行くと……ヤバイな。

オレ「このままだと……Aクラスがかなり戦力を削られるけど……」

ん？つかちょっと待てよ？

戦争に勝利するにはAクラス代表である霧島を倒すしかないんだよな……

だとしたらその作戦はほとんど無意味じゃないか？

せいぜい護衛部隊を片付けるのが限界だし、霧島が自分から勝負を挑むとは考えにくいし、大人数を投入すれば立会いの教師に見つかりやすくなるって事もある。
そしたら……

秀吉「今戻ったぞい。CクラスとEクラスが模擬試召戦争をしておったのじゃが、どうしたのじゃろうな？」

秀吉が教室に入ってくるなりで報告してきた。

オレ「何！？」

CとEが模擬！？
ヤバイヤバイ！想像しうる限り最悪のパターンだ！

明久「どうしたの真琴？CクラスとEクラスが戦争してても、別に何も不自然じゃ……」
オレ「バカ明久！思いっきり不自然なんだよ！」
瑞希「どうしてですか？」
オレ「よく考えてみろ！今は学年のほとんどの女子の敵意がFクラスに向いてるんだぞ！！なのにオレ達を勝手に覗き犯と決め付けてきた女子の筆頭である小山と中林が戦争してるだなんておかしいだろ！！」
美波「確かに言われてみればそうだけど、それでどうしてそこまで取り乱すのよ？」
オレ「お前らついさっきまでその会話してただろ！」
雄二「間違って戦争しかけられて、補習室送りを狙ってるって話か？」
オレ「そうだ。ほぼ間違いなく、CクラスかEクラスのどちらか、最悪両方がBクラスの指示で動いていると考えられる」

Ａクラスは現在Ｆクラス同盟を結んでるから、他に仲間がいればオレ達に教えるはずだ。代表は霧島だし、そこまで自分達のリスクを底上げしてまでオレ達の妨害をするとは考えにくい。
ＡクラスとＢクラスでは戦力に圧倒的な差が出るから、ＣＥ連中を同じ場所で戦わせ、Ｂクラスの生徒と間違えたＡクラスの奴に勝負を挑ませるって寸法だろう。

明久「それで、最悪の場合どうなるの？」
オレ「Ａクラスが負けるってのが最悪の展開だ。それだけはなんとしても防がなきゃならない。秀吉、ムッツリーニとみどりと合流して、情報操作を頼む。ＣＥ連中を、出来るだけＡクラスの奴等から離してくれ」
秀吉「分かったのじゃ」
オレ「オレ、雄二は出払ってるウチの奴等と協力して、Ａクラスに敵の作戦を伝える。美波はムッツリーニから現在のＡＢ両クラスの戦力を聞いてきてオレに報告だ」
雄二「分かった」
美波「了解」
明久「あ、あの、真琴？」
瑞希「私たちは何をすれば……」
オレ「流石に教室をがら空きにするのはマズイ。二人には教室に待機してもらう」

というより明久と瑞希は弱みを握られて敵に回られると厄介この上ない。
切り札は安全圏に置いておくのがベストだ。

オレ「んじゃ行くぞ。試召戦争を挑まれることはないと思うけど、もしやられたら鉄人につれてかれる前にボコボコにしろ」

秀&雄&美「「「りょ、りょうかい……（残酷だな、おい）」」」

明久ＳＩＤＥ

僕「教室で待機かぁ……」

瑞希「きっと真琴君にも考えがあるんですよ。きっと……」

そもそもこの戦争だって僕と瑞希が付き合う許可を姉さんから貰うための戦争なんだよなぁ……

思いっきり私事だし、なんか悪いなぁ……

瑞希「……あの、明久君、私、ちょっとお手洗いに……」

僕「ん？ああ、いいよ。教室には僕が残ってるし、いってきなよ」

瑞希「あの、それじゃあお願いしますね……？」

そういうと瑞希はテクテクと教室を出て行く。

命令は『教室で待機』だけど、トイレくらいは別にいいよね？

僕「１３時４４分……まだ続きそうだなぁ……

時計で時間を確認する。

まだ1時間以上かかりそうだ。

僕「……うっし、僕も気合い入れてくぞ！」

「はぁ、はぁ……急がないと、真琴君が……」

急ぐ彼女の手には、一枚の紙が握られていた。

翔子ＳＩＤＥ

根本「まさか、本当にくるとは思ってなかったな」
私「……優子を返して」

この男はＢクラス代表、根本恭二。
優子を人質にとって、私に一人で４回の空き教室まで来るように言ってきた。

根本「木下姉？ああ、ありゃあ嘘だ」

私「……嘘？」
根本「そう。嘘だ。お前をここまで一人で来させるためのな。まさか確認もせずに飛んでくるとは思ってなかったけどよ」
私「……目的は何？」

見たところ、護衛も立会いの先生もいないみたい。
となると……話し合い？

根本「まあこっちもさっさと決着つけたくてな。一対一だ」
私「……立会いの先生がいないから召喚は出来ない。和平交渉なら、話を聞く前からお断り」
根本「そう言うな。そろそろ……来たな」

根本の口が気持ち悪く笑う。
何を待ってるかは分からないけど、誰かに先生を呼んでもらってこの男さえ倒してしまえば……　！？

根本「さあ来たぜ。思う存分暴れようじゃないか。試獣召喚（サモン）」
私「……くっ……試獣召喚（サモン）」

何故……

何故召喚フィールドが……

Ａクラス　霧島翔子　古典　４３５点
ＶＳ
Ｂクラス　根本恭二　古典　２４３点

根本「流石学年主席だ。俺の得意科目でも足元にも及ばないか」
私「……どうして召喚フィールドが……」
根本「それは後で隣の教室を見れば分かるさ。それじゃあこれでチェックメイトだな」

そう言って根本はズボンのポケットから黒い輪を取り出す。

私「……腕輪……？」
根本「いや、峰嶋や姫路が持ってるのとは違う。これはな……こうやって使うんだよ！」
私「！？」

黒い輪を私の召喚獣に向かって投げてきた。
観察処分者の召喚獣ならともかく、普通の召喚獣は物には触れない。
だからあの輪も、私の召喚獣をすり抜ける……はずだったのに……

ガキン！！

根本「うまく行ったな。これで終わった」
私「……どういうこと……？」
根本「その漆黒の抑輪に捕まった召喚獣は、攻撃・防御・移動、あらゆる動きを制限される。だからこうして……！」

ガン！

根本「…思いっきり蹴っても何もされないって訳だ」
私「……くっ……」

Ａクラス　霧島翔子　古典　３６８点

ＶＳ

Ｂクラス　根本恭二　古典　２４３点

私「どうして……そんなものを……」
根本「ある人物から貰ったのさ。さて、そろそろチェックメイトだ」
そう言って根本は召喚獣を構えさせる。
こっちも操作をしてみるも、ちっとも動かない。
根本「この戦争……俺の勝ちだ」
根本の鎌が私の召喚獣の首をはねた。

Ａクラス　霧島翔子　古典　ＤＥＡＤ

ＶＳ

Ｂクラス　根本恭二　古典　２４３点

私の召喚獣はゆっくりと無音で姿を消していった。

根本「終わったか……。さて、鉄人が来る前にこの召喚フィールドを展開したのが誰か確認してくるか？」

私「……そうさせてもらう」

今更確認してもどうしようもないかもしれないけど、少しでも多くの情報を手に入れて峰嶋に渡す。

それが負けてしまった私なりの、Ｆクラスへの協力。

空き教室を出て、隣の化学実験室に入る。

そこにいたのは……

私「……姫路？」

瑞希「しょ、翔子ちゃん……？」

そこにいたのは、学年次席レベルの才女にして、Ｆクラスの切り札（ワイルドカード）の一人、姫路瑞希だった。

第六十九話　嘘と敗北と入り混じる試召戦争（後書き）

まさかのＡクラスが敗北！？
瑞希がそこにいたわけは！？
次回、半分くらいの謎が明かされる！！

「残り半分は謎のままかよ……」ｂｙＦクラス軍師

第七十話　決意と密会と優しさの定義

翔子ＳＩＤＥ

私「……姫路、どうしてここにいるの？」
瑞希「それは……あの……」

私とＢクラス代表の根本が戦っていた空き教室の隣の教室にいたのは姫路瑞希だった。
さっきの古典のフィールドは多分姫路が展開したもの……

私「……単刀直入に聞く。古典のフィールドを展開したのは姫路？」
瑞希「え、えっと、それは……」

どうやら図星みたい。
でもなぜ？
ＡクラスとＦクラスは同盟を組んでて、姫路がＢクラスに肩入れする理由はないはず。

私「……？」

姫路が右手に持っている紙に目を落とす。
あれって……

スタスタスタ　パシッ

姫路が持っている紙を奪い取る。

瑞希「あっ……」

私「……そういうこと」

その紙にはこう書かれていた。

『峰嶋真琴の重大な秘密を知っている。ばらされたくなければ4階の化学実験室で古典フィールドを展開しろ』

私「……このこと、吉井や峰嶋達は知ってるの？」

……いや、知ってるわけがない。

知っていれば、吉井はともかく峰嶋は絶対止める。

少なくとも、姫路を一人でここに来させるわけがない。

瑞希「あ、あの、私……」

私「……このことをしっかり吉井達に話してきて」

瑞希「で、でも、真琴君が……」

私「……その重大な秘密が何なのかは私には分からない。でも、姫路が今やってることは峰嶋に対する侮辱にも等しい事」

瑞希「え……？」

姫路は首をかしげる。

私はそのまま話し続ける。

私「……雄二から聞いた。この戦争は吉井と姫路のための戦争だって。そのために峰嶋が頑張ってるって。なのに、姫路がそれを台無しにしてしまったら、峰嶋が可哀想」

瑞希「……そう…ですよね……」

私「……ちゃんと吉井や峰嶋と話してきて、ちゃんと謝らなきゃダメ」
瑞希「……分かりました」
私「……でも……」
瑞希「でも？」

でも……

私「……友達を心配して、助けてあげたいって思うことは悪い事じゃない」
瑞希「……ありがとうございます。翔子ちゃん」
私「……頑張って」

姫路は教室から出て行く。

根本「……もっと面白いことになると思ったのにな」
私「……これも貴方の策略？」
根本「さあ？どうだろうな？そんなことより戦争の話だ。お前に恨みはないんだがな、この一騎打ちの間に起こったことは誰にも口外するな、とだけ命令しておく敗者なんだから従うよな？」
私「……仕方ない」

ということは情報をFクラスに渡す事も出来ない……
同盟を組んだのに、役に立てないどころか足を引っ張る形になるなんて……
雄二……あとはお願い……

瑞希ＳＩＤＥ

真琴「……それで、その本当かどうかも分からない脅迫状を真に受けていいように利用されたきたわけか」
瑞希「……」

教室に戻ると残っていたのは明久君、真琴君、坂本君、美波ちゃんの４人だけでした。

美波「真琴、いくらなんでも言いすぎ……」
真琴「誰にも相談せずに勝手に行動してその結果かよ」

雄二「真琴、もうやめておけ」
私「……ごめんなさい」
真琴「ごめんなさいだ？ふざけるな」
明久「真琴！」
私「いいんです明久君」

私が自分ひとりで行動せずに、ちゃんと誰かに相談していればこんな事にはならなかったのですから……

真琴「お前が謝る相手はオレじゃない。オレは別に負けたこと自体は結果だと思って受け止めるし、これから打開策を考えればいいだけの話だ。けどな、お前が勝手に動いたせいで、協力してくれたＡクラスの設備を落として、３ヶ月間宣戦布告禁止にしちまったんだよ」
明久「いい加減にしろよ！瑞希だって好きでやったわけじゃないんだぞ！真琴のことを心配して……」
真琴「明久は黙ってろ。瑞希、お前は……」

うぅ……きっともう戦争に出るなって言われちゃいます……
仕方ありませんよね……私が誰かに相談していればこんなことには……

真琴「お前は次の戦争、１０人補習室送りにしろ」
私「……え？」
明久「真琴……それって……」
真琴「失敗したなら挽回しろ。失敗したままなんて絶対に許さん」
私「私……戦争に出てもいいんですか……？」
真琴「いいも何も、主戦力のお前がいなきゃ一気に苦しくなるだろうが」

でもやっぱり、きっと足を引っ張る事になっちゃうでしょうし……

真琴「オレとしては途中で投げ出すのは不本意なんだが……まあゆっくり考えればいい。お前が決めろ」

それだけ言って真琴君は教室から出て行きました。

私が決めるって……今度は私たちがBクラスと試召戦争をするってことですよね……

やりたくないって言えば嘘になりますけど……でも、もう一度やってもまた足を引っ張る結果になっちゃうに決まってます……

それに、Aクラスに勝っちゃうようなクラスとじゃ、戦って勝てるかどうかも……

明久「瑞希」

私「ふぇ？何ですか？明久く……！！？」

ギュッ

急に明久君に抱きつかれました。

私「あ、明久君！？何やってるんですか！？美波ちゃんも坂本君もいるのに！！」

明久「瑞希。真琴は瑞希が決めろって言ったけど、瑞希一人で抱え込まなくてもいいんだよ？」

私「え……？」

明久君は私から身体を離し、話します。

明久「真琴だって、僕らだって、相談して欲しかったんだよ。何でも一人で抱え込まないでよ」

美波「アキの言うとおりよ、瑞希。確かにウチらは真琴に比べたら頼りないかもしれないけど……それでもウチら、仲間で友達じゃない」

私「美波ちゃん……」

雄二「そうだぞ姫路。それにそういうことをするなら代表である俺に一言断ってくれないとな」

私「坂本君……」

明久君「もっと僕らを頼ってよ。仲間に頼られても、迷惑だなんて思わないからさ」

私「明久君……」

私……勘違いしてました。

私「私、こんな中途半端な終わり方、いやです！最後までやりきりたいです！」

明久「だったら、それを真琴にちゃんと伝えてこなきゃね。真琴だって、こんなところでやめるつもりはないしね」

私「はい！！」

私は真琴君を追って、教室を飛び出しました。

真琴ＳＩＤＥ

オレは屋上で風に当たっていた。
最近のお気に入りスポットベスト3だ（他の二つは中庭と美波の膝枕ｗ）。
にしても……

オレ「ありゃあちょっと言い過ぎたかなぁ……」

瑞希だって、やりたくてやったわけじゃない。
そんなことは分かっている。
それでも、相談されなかった事が、頼ろうと思われることのなかった自分の非力さに嫌気が差す。
化け物だ怪物だ人外だなんで言われたって、結局オレは想定しうる最悪の展開を防ぐ事が出来なかった。

オレ「所詮こんなものか……まったく、オレは何やってんだろうな

……」

その挙句には瑞希にキツイ言い方して、偉そうな事口で言って、結局は半分八つ当たりみたいになって……ホント、アホくさ……

キィ……

不意に屋上のドアが開く。誰かが入ってきたな。
誰が来たのか確認しようと後ろを見る。

瑞希「あ、真琴君、ここにいたんですね」
オレ「瑞希か……」

さっきの話の続きだろうな。多分。

瑞希「あの、さっきの話なんですけど……私、中途半端なところで終わらせたくないです」
オレ「……分かった。オレもまだこんなところで終わるわけには行かないからな」

あの脅迫文はどうせ根本のだろうし、まだお返しもしてないしな。

瑞希「真琴君。一つ聞いても良いですか？」
オレ「何だ？」
瑞希「どうしてそこまで試召戦争にこだわるんですか？いくら設備がかかってるとはいえ、そんなにこだわる必要は……」

試召戦争にこだわる理由、か……

オレ「ほら、オレってさ、化け物とか人外とか言われてたじゃん？」
瑞希「え、ええ……」

あ、この振り方はちょっと肯定しづらいか。
まあいいや。

オレ「でもさ、今日みたいなことがあると思うんだよな。天才だ何だって言われたって、役に立たないときは役に立たないんだなって」
瑞希「役って……」
オレ「オレは昔ッからバカみたいにぶっ飛んだ能力を持ってたけど、それを誰かを守るために使った事なんてほとんどないんだよな」

実際このバカ力を使うときのほとんどは気に入らない奴を潰す時、刃向かってくる奴を黙らせる時、ウザイ奴を消す時だしな。

オレ「結局のところ、オレは戦って傷つけて壊すしか能のない奴なんだよ。だったらそれを最大限利用しつつ、誰かのためになることがしたい……ってとこかな」

力を振るえば誰かを傷つける。
それが誰かを守るために振るった力だとしても、代わりに誰かが傷つくことに変わりはない。

オレ「ま、オレは誰かを傷つけなきゃ何も出来なかったってわけだ」

知らなかったとはいえ、自分が誰かに褒められたいって言う子供みたいな理由の為に何千万単位の人間の命を踏みにじるものを平気で作り出すような奴だし、まさに“悪人”って感じだし……

瑞希「どうして……」
オレ「ん？」
瑞希「真琴君は、いつも私たちのためにがんばってくれるし、励ましてくれるし、優しいじゃないですか！なのに、どうして自分のことを人を傷つけるための道具みたいに言うんですか！？」
オレ「優しい、か……優しいって何だろうな？」
瑞希「え……」

優しいって何だろうな？

人のことを思いやれる事？

人のことを助けられる事？

人のことを愛せる事？

オレ「たとえお前の目に写るオレが優しくても、この世の全員の目に写るオレが優しいとは限らねぇんだよ」
瑞希「でも……」
オレ「オレが異常だって言う定義はもう外せないんだよ。ま、瑞希がオレをそう評価してくれてる事は素直に喜んでおくけどな」

オレは瑞希の横を走りぬける。

オレ「早く戻るぞ！Aクラスの敵討ち、するんだろ？」
瑞希「あ！ま、待ってください！」

さて、辛気臭い話は終わり！
こっからは……

オレ「よくもオレの仲間の気持ちを弄んでくれたな……屑野郎、潰す」

オレの個人的な喧嘩だ。あの野郎、ぶっ潰す。

根本ＳＩＤＥ

友香「恭二、うまくＡクラスを倒したそうじゃない」

俺「まあな。４月も思ったんだが、姫路はよくあんな簡単な手に引っかかるんだろうな？」
中林「根本君、あのあと峰嶋君に制裁されたんでしょ？今回は大丈夫なの？」
俺「今回は特に俺だと特定できるものを残してないからな。大丈夫だ」

前にナース服で逆さ釣りにされたときは……マジに死ぬかと思った。

俺「峰嶋に真っ向から挑んでく奴はよほど自分に自信があるのか、よっぽどのバカかどちらかだ」
友香「そこまで言うならどうして峰嶋君に勝負挑むのよ？」
中林「それも結構卑怯な手を使って……でも同感ね。確かに怒ったときの峰嶋君は怖かったわ」

三人で一斉に震える。……ホント俺達何やってんだろうな……

友香「で、次はどうするの……ていうかアンタ本当にどうやって霧島さん倒したのよ？」
俺「古典は得意なんだ」
中林「得意どうこうでどうにかできる相手じゃないでしょ。それよりも、次はついにＦクラスなのよね？」
俺「まあな。そこでＤクラスを潰す役を二人にやってもらいたい」
友香＆中林「「Ｄクラス？」」

二人で首をかしげる。まあそうだろうな。

俺「どうもＤクラスの清水は峰嶋と仲がいいからな」
中林「でも清水さんってあのカメラ仕掛けた真犯人なんでしょ？代表でもないのにクラスを動かせるとは思えないわ」

俺「俺もそう思う。まあ念には念をってところだ」

峰嶋がどう動くかは知らないが、可能な限り不安要素は潰しておくべきだ。
どの道、あの抑輪がある限りは峰嶋には負けないがな。

俺「それじゃあ予定通りに頼むぞ」
友香「アタシ達はDクラスの相手よね」
中林「男子の言いなりなんて癪に障るけど、Fクラスのバカ共を潰すまでは仕方ないわね」

Aクラスの設備を手に入れて、峰嶋への復讐も出来る……最高だな。

明久ＳＩＤＥ

僕「で、具体的にどうするの？」
真琴「とにかく、ＣＥクラスを何とかしないといけないから……Ｄクラスに協力を仰ごうと思って」
美春「それで美春と……」
源二「俺が呼ばれたわけか」

そう。今Ｆクラスの教室には、Ｄクラスの平賀君と清水さんがいる。

真琴「悪いな、無理なお願いなのは分かってるんだが……」
源二「いや、Ｆクラスに借りもあるし、気にするな」
美春「お兄さまのお願いを断るはずがありませんわ」

具体的にはＤクラスにＥクラスへの試召戦争を仕掛けてもらう。
そのあとで、設備交換をせずに模擬試召戦争も含めたあらゆる戦争行為及び、ＢＣクラスとの戦争的接触の禁止を言い渡すって仕組みらしい（真琴の発案）。
僕等はＢクラスの前にＣクラスを潰しにかかるらしい（やっぱり真琴発案）。

源二「それじゃあ俺達は戦争の準備をすればいいんだな？」
真琴「ああ、頼む。うまくやってくれ」

平賀君と清水さんはＦクラスの教室から出て行く。

瑞希「真琴君、Bクラスはどうするんですか？」
真琴「当然黙らせるさ。宣戦布告される前に、な」
美波「どうやるのよ？」
真琴「まあそれは見てのお楽しみさ。あの屑、オレを敵に回した事、後悔しろよ……フフフフフフフフフフフフ……」

うーん……根本君はご愁傷様……かな？

第七十一話　お化けとオカルトとみんなの本質（前書き）

ＰＶ２５０，０００、ユニーク２０，０００達成です！
皆様これからも『バカとＦクラスと転校生』をよろしくお願いします！

ｙｏｓｉ４１２８さん、ＬＡＮ武さん感想ありがとうございました！

今回からオカルトです。原作だと夏休み中の話ですが、夏休みにやりたいことが多いので、１学期最後のイベントと言う形で。

では、第七十一話です。どうぞ♪

……バカテストが久しぶりな気がしますね。

第七十一話　お化けとオカルトとみんなの本質

バカテスト　家庭科

問　以下のソースについて説明しなさい。

『ベシャメルソース』

吉井明久・峰嶋真琴の答え

『小麦粉をバターで炒め、牛乳で伸ばして、塩こしょうなどで味付けをした白色のソース。別名、ホワイトソース』

教師のコメント

正解です。ホワイトソースと言われると想像できるのですが、ベシャメルソースという名称はあまり一般的ではありません。そこはさすが吉井君と峰嶋君といっておくべきでしょう。

姫路瑞希の答え

『硝酸カリウムを酢酸で炒め、アンモニア水溶液で伸ばした後、塩酸や青酸カリで味付けした白色のソース。別名ホワイトソース』

教師のコメント

その材料で白色のソースになるとは思えませんが……

峰嶋真琴のコメント

お前は料理を何だと思ってるんだ。

NO　SIDE

AクラスとBクラスの試召戦争から数日後、Fクラスの試召戦争解

禁を翌日に控えた今日。
Ｆクラス所属にして元試験召喚システム研究者の峰嶋真琴は、ババアｔｙ……学園長室に呼び出されていた。

ババア「……偉く地の文がイラつくんだけどねぇ……」
真琴「くだらねぇこと言ってないでさっさと用件話せババア。こっちは試召戦争の準備で忙しいんだよ」
ババア「まったく、アンタもムカつくクソジャリさね……今日はその試召戦争の件で呼び出したんだよ」
真琴「……何かあったのか？」

それなりに真剣な話だと察知したのか真面目な顔をする真琴。

ババア「ちょっとこれを見て欲しいさね」
真琴「……なんだこれは？」
ババア「この間の聖獣型召喚獣のデータの一部が影響していたところに、ＡＢクラスの試召戦争、ＤＥクラスの試召戦争と、システムに負担がかかり過ぎたの原因さね。まったくもって困ったものだよ」
真琴「直せないのか？」
ババア「直してもいいんだけど……どうせだからＦクラスのバカ共が生んだ損失を取り戻してもらうとするさね」
真琴「試召戦争は二学期に持ち込みか……」

そこには不適に笑う一匹の妖怪と肩を落とす一人の天才がいた。

明久ＳＩＤＥ

今日から僕たちＦクラスの試召戦争が解禁される。
とりあえず最初の相手はＣクラス。ちなみにＤクラスは約束どおりＥクラスに試召戦争を仕掛けて倒してようだ。
模擬試召戦争で点数を消費したままにしていた人が多く、もともとＤクラス代表の平賀君はリーダー性あふれる人だし、案外簡単に行ったらしい。

瑞希「あ。明久君、おはようございます」
僕「あ、おはよう瑞希」

教室の前で瑞希と会った。

いろいろな事があったが、瑞希も立ち直れたし、結果的には僕らFクラスがBクラスを倒す事でもともとの狙いの状況を作れるらしい（真琴談）。

Cクラスだったら、真琴と瑞希の超火力で圧倒出来そうだし。

僕「今日のCクラス戦、頑張ろうね！」

瑞希「はい！今度こそ足を引っ張らないようにがんばります！」

そして時は進み朝のHR（ホームルーム）。

鉄人「それから連絡事項だ。我がFクラスは今日から試召戦争が解禁されるんだが……二学期まで試召戦争は禁止になる」

Fクラス全員『『『『『はあああああああ！！！！？？？』』』』』

試召戦争が禁止！？何で！？折角設備向上のチャンスっていうかAクラスの敵討ちが始まるのに！！

須川『どういうことだ！？試召戦争を禁止なんて！？』

横溝『俺達は吉井と姫路さんをくっつけるために設備を上げなきゃならないんだ！！』

今田『そうですよ！どうして禁止されなきゃならないんですか！？

先生は吉井と姫路さんにくっついて欲しくないんですか！？』

みんなも同じ意見の……よう……だ？
うん？どうして異端審問会（みんな）が僕と瑞希をくっつけるための戦いに賛同するのかな？

鉄人「落ち着けお前ら。その代わり……になるかどうかは分からんが、学期末のイベントとしてあるイベントが行われる」

Ｆクラス全員『『『『『イベント？？』』』』』

イベントって何だろう？
清涼祭のときのように召喚大会でもやるのかな？

鉄人「お前ら、今日は暑いよな？」
雄二「まて鉄人。話に脈絡が無いぞ」
鉄人「吉井。召喚獣を呼び出してみろ。フィールドはもう展開してある」
僕「へ？わ、分かりました。試獣召喚（サモン）！！」

とりあえず言われるままに召喚してみる。
当然出てくるのは普通に改造学ランの召喚ｚｙ……

美波「……ナニコレ？」
瑞希「か、カッコ良いです……」

出てきたのは西洋甲冑に身を包み、大きな剣を持った僕の召喚獣。
しかし最もおかしいのは……

サイズが僕と同じだ。

僕「？？？？？」
雄二「どういうことだ鉄人」
鉄人「峰嶋、後は頼む」

え？何で真琴？
あ、システム研究者だっけ？

峰嶋「実は昨日からシステムに不具合が起きてな、このように召喚者の本質に沿った『妖怪』や『オカルト』型の召喚獣が出てくるんだ」
瑞希「よ、妖怪ですか？」
美波「お、オカルト？」
真琴「システムを構成する『科学』と『オカルト』と『偶然』の三要素のうち、『オカルト』の部分が色濃くでちまったんだよ」

ふむふむ、つまり僕の本質は騎士道精神とな？

雄二「で、明久の本質は何なんだ？」
僕「ふ、きっと有り余る騎士道精神に決まって……」
真琴「ふーん……」

ちょん（真琴が僕の召喚獣の頭をつつく音）

ポロ　コロコロ（僕の召喚獣の頭が落ち、転がる音）

ピタ（止まる音）

瑞希＆美波「「きゃあああああああ！！？」」
僕＆真琴「「ぎゃあああああああ！！？」」

痛い！？何だ！？あ、でも何か二つの柔らかい何かが当たっていいかも……

秀吉「あ、明久！？どうしてお主はそんなに幸せそうな顔をしておるのじゃ！？」
康太「……殺したいほどに妬ましい」

痛いけど……し、あ、わ……あれ？僕の視界が真っ白に……？

本日１回目の臨死体験。

僕＆真琴「「し、死ぬかと思った……」」
瑞希＆美波「「ごめんなさい……」」

とりあえず一命は取り留めた。
けど……これは一体どういうこと？

雄二「頭が落ちるって事は……デュラハンか？」
真琴「たぶん本質は頭が無い＝バカだろ」

僕「なんて不名誉な……」

システムにまでバカ扱いされるなんて……

鉄人「つまりこのオカルト召喚獣を使った肝試し大会をやろうというわけだ」

峰嶋「それもムカつく事に3年と合同でな」

僕「えー……3年とー？」

3年っていうとえっと……なんだっけ……？まあいいや。

鉄人「今日から日程が全て肝試し大会の時間になる。お化け屋敷の設置の時間は三日しかないからしっかり準備しろ」

Fクラス全員『『『『『いぇーーい！！！！』』』』』

3日も授業が潰れる！？最高だ！！

ってあれ？鉄人がもういない？退室早！？

雄二「にしても、どんな奴になってるのか、気になるな」

僕「そうだよね。みんなの召喚獣も見てみたいな」

瑞希「え！？よ、妖怪をですか！？」

美波「そ、そんな必要ないじゃない！？それに召喚フィールドだって無いし！！」

真琴「起動（アウェイクン）」

瑞希「真琴君！？何してるんですか！？」

美波「アンタは鬼！？」

なんかよく分からないけど、召喚できるみたいだ。

ナイス真琴！

秀吉「ではまずはわしから行くかの。試獣召喚(サモン)！」

ボン↑猫又登場

秀吉「な！？」
みどり「わ～、かわいい～」
真琴「猫又か……秀吉の本質は『可愛い』ってわけか」
雄二「秀吉らしいな……」
康太「……売れ行き向上(パシャパシャ)」
秀吉「間違っておる！こんなの間違っておる！！それからムッツリーニは写真を撮るでない！！」

秀吉……最近時々男らしいときもあるかなって思ってたのに、やっぱりダメか……

瑞希「こ、怖いのじゃなくてよかったです……」
美波「さっきのアキの召喚獣は心臓に悪かったものね……」

お化け苦手組はお互いに抱き合っている。
うーん、ちょっと悪い事したかな？

雄二「次は真琴行け！」
真琴「オレ？俺のなんか見ても楽しく無いと思うけどな……試獣召喚(サモン)！」

ゴゴゴゴ↑黄龍登場

美波「わぁ……」
瑞希「綺麗です……」
僕「これは……龍？」
みどり「これは黄龍だね」
全員「「「「「「黄龍？」」」」」」

黄龍？聞いたこと無い……こともないけど。
確かペル○ナにそんな奴がいた気が……

真琴「黄龍って確か、四神の長だよな？中国じゃ肯定の権威の象徴とかにもなってるけど」
僕「ってことは真琴の本質は……」

美波「権威の象徴？」
瑞希「四神の長って言うくらいだからきっとリーダーシップじゃないですか？」
秀吉「いや、こんな綺麗な龍なのじゃから美しさ（？）じゃろう」

まず秀吉の意見は有り得ないとして、（なぜじゃ！？何故わしはこういう扱いなのに真琴は違うのじゃ！？）本当にどんな本質なんだろう？

雄二「ただデタラメに強いってだけじゃないか？」
全員「「「「「「それだ！」」」」」」
真琴「いや、違うだろ」

四神の長なんだから強いに決まってる！で、四神って何？

【朱雀、玄武、白虎、青龍の事です！】

真琴「お、オレの本質なんてどうでもいいだろ！それよりも次だ次！瑞希か美波あたり行ってみろ！人の見といて自分は見せないとか言わないよな！？」

何をそんなに焦っているのは知らないけど、僕も瑞希の召喚獣には興味がある。

瑞希「わ、私ですか？……わ、分かりました！試獣召喚（サモン）です！」

ボンッ↑サキュバス登場

瑞希「きゃあああああああ！？」

僕「ぎゃあああああああ！？」

なんだ！？いきなり首が１８０度回転したぞ！？

真琴「み、瑞希！？死ぬ！！明久が死ぬ！！」

瑞希「へ？あ、明久君！！ごめんなさい！！」

僕「あ、はは……おじいちゃん……今逝くよ……」（誤字にあらず）

真琴「明久ーーーーー！？」

本日二回目の臨死体験。

僕「う、いてて……」
瑞希「あ、明久君、大丈夫ですか？」
僕「うん、たぶん大丈夫……あれ？首が真後ろを向く？」
秀吉「それは恐らく大丈夫とは言わないじゃろ……」

危うく僕自身がデュラハンになるところだった。

美波「それにしても凄い召喚獣ね……。……特に胸が」
雄二「特にそこまで露出してるわけでも無いのに胸がえらく強調されてるもんな」
瑞希「ひゃっ！？み、見ちゃダメです！！」

確かに雄二の言うとおり、必要以上に「ぶしゃあああああああ！！」胸が強調されている。これから想像できる瑞希の本質が「ぶぼおおおおおおお！！」何かは分からないけど、きっと「ぶばばばばばばば！！」大丈夫かムッツリーニ！？

真琴「瑞希。召喚獣を隠したいならオレから離れろ。召喚フィールドから出てしまえば召喚獣は消えるはずだからな」
瑞希「は、はい……」

真っ赤な顔をして真琴から離れる瑞希。召喚獣が消えたのを確認すると戻ってきた。
僕としてはもうちょっと拝んでいたい気分だけど……

康太「……（ピクピクピク）」

それは一人の漢を死に至らしめる結果になるから自重しよう。

ていうか痙攣しながら輸血をするとはなんて大物なんだムッツリーニ。

美波「で、結局瑞希の本質って何なのよ？」
僕「それは、その……ねぇ？」
真琴「うーんとだな……なぁ？」
秀吉「う、うむ……えっとじゃな……」
雄二「胸がでかいって事だろ」
瑞希「うわあああああん！！」

さすが雄二だ。僕等が言いづらくて言えなかったことを簡単に言ってのけた。
これは後で報復の必要がありそうだ。

雄二「まあ他には『大胆』ってのもあるんじゃないか？サキュバスだし」
真琴「確かに酔うと平気で明久に抱きつくよな。誰かが周りにいてもお構いなしに」
秀吉「そう言えば真琴の実家でも明久に抱きついておったな」
瑞希「ち、違うんです！あれは、えっと……」

いや、お酒のせいだし気にしなくてもいいと思うんだけどな。
真っ赤になってうつむく瑞希をみて美波が得意そうに笑みを浮かべた。

美波「ふふっ。瑞希ってば、そんな大きな胸してるからあんな召喚獣が出てくるのよ」
瑞希「うぅ……。あんまりです……」
美波「その点、ウチは何の心配も無いから大丈夫よ。きっとああいうエッチなのじゃなくて、妖精とか女神とか戦乙女とかそういう可

愛いのが出てくるはずよ。見てなさい――――試獣召喚（サモン）！」

ゴゴゴゴゴ……↑ぬりかべ登場

ダメだ。今笑ったら殺される。

真琴「（助けて明久。今笑ったら殺される）」
明久「（無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理）」

僕だって笑いをこらえるのに精一杯なんだ。
誰かを助ける余裕は無い。

美波「……ねぇ真琴」
真琴「な、なにかな？」
美波「この召喚獣、ウチに何を言いたいのかしらね？」
真琴「さあ？わ、分からないな（助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて助けて）」

かなり必死な真琴のＳＯＳ。だが僕はじめ秀吉ムッツリーニ雄二にはどうしようもない。自分で何とかしてもらうしかない。

美波「そっか……もう一度しっかり考えてみて？」
真琴「きっと……あれじゃないか？ぬりかべは石で、美波は意思が硬い……とか……はっはっはっはぁ」
美波「それでどうしてウチの胸を見るのかしらね？」
真琴「それはきっと美波の胸はぬりかべみたいにあがぁっ！！ごめんなさい！！」
美波「地獄を見てきなさい！！」

あーあ、やっちゃった……

秀吉「む、ムッツリーニよ。お主はどんな召喚獣なのじゃ？まだ確認しておらんのじゃろう？」

ちょっと遅いけどナイスフォロー秀吉。

秀吉が話題を真琴からムッツリーニに変えた。

康太「……試獣召喚（サモン）」

ムッツリーニが呟くと黒衣に身を纏った少年が現れた。これは……

雄二「なるほど、確かにいつも血を欲しているイメージがあるからな」

秀吉「若い女が好きと言う点も酷似しておるの」

真琴「仕事するときの黒衣って点も似てるよな。あれ？腕で縄跳びが出来るぞ？」

やっぱりヴァンパイアか。ムッツリーニにはある意味ぴったりかも。

そして真琴は本当に大丈夫!?

僕「そういえば雄二とみどりはどんな召喚獣なの？」

雄二「ん？俺か？そういや気になるな。試獣召喚（サモン）！」

みどり「あたしも召喚するよ～。試獣召喚（サモン）！」

まずは雄二。現れたソイツは鍛え上げられた肉体を隠すことなくさらけ出し、何も持たずにって――――

雄二「また手ぶらじゃないかァァ！！」

堂々と素手で現れた雄二の召喚獣。メリケンサックといい、こいつは素手以外に攻撃法を知らないのか！？

真琴「ってか雄二お前装備ズボンだけ！？最悪だな！？」
僕「ビジュアル的な意味でもはやくそれ消して！！」
秀吉「しかしこれはまた雄二そっくりじゃな。服装以外に見分けがつかん」
瑞希「ちょっと目のやり場に困ります……でも、明久君だったら……」
僕「待つんだ瑞希、僕だったら何だって言うんだい？」

というか上半身裸の雄二なんて目の毒以外の何物でも無いじゃないか。
こんな有害物質を瑞希に見せるわけにはいかない。

僕「とにかく、その不幸の塊をはやく消して」
雄二「分かってる。俺だってこんなものいつまでも見たくは無い」
秀吉「じゃが、雄二の召喚獣は結局何の妖怪なのじゃ？これではさっぱり分からんぞ」
康太「……ドッペルゲンガーとか？」

秀吉とムッツリーニが首をかしげる。あれ？二人には分からないのかな？

真琴「何言ってんだ二人とも。これは近年日本でまれに確認される新種妖怪『坂本雄二』じゃないか」
僕「文月妖怪『藤堂カヲル』の孫で、醜い容姿と汚い性格で美人の幼馴染を騙すんだよ。秀吉も気をつけて」
秀吉「何気に学園長が罵倒されておる上にわしが美人の分類なのは

何故じゃろうな？」
雄二「明久に真琴。ちょっと召喚獣出せ」
僕&真琴「「ん？いいけど？試獣召喚（サモン）っ」」
雄二「目指せワールドカップ！（ガコッ）」
僕「あがぁっ！僕の召喚獣の頭が妖怪『坂本雄二』によってサッカーボールのように宙を舞ってった！？」
真琴「しかもその頭がオレの黄龍の頭部にクリティカルヒット！？」

僕の頭部が神々しい真琴の黄龍の角と角の間に乗ってる……。なんてシュールな絵なんだ……。

雄二「そう怒るな明久に真琴。『友達はボール』って言うだろ？」
僕「それを言うなら『ボールは友達』じゃないの！？」
真琴「よぉーし、そっちがその気ならこっちもやってやる！」
僕「そうだ！さっき瑞希を泣かせた分も含めて勝負だ雄二！」
雄二「ちょっと待て！教科は日本史で明久と真琴だと！？勝てるわけが――――」

Fクラス　吉井明久　日本史　３３２点
　　峰嶋真琴　日本史　１７８３点

ＶＳ

Fクラス　坂本雄二　日本史　４１０点

真琴「くたばれェェェ！！」
雄二「ぎゃあああ！？龍によるリンチだと！？そんなのグハァッ！！」

どうやら僕の出番はなさそうだ。
そういえばさっきから女性陣＋1が静かだけどどうしたんだろう？

僕「瑞希、どうしたのって……」
瑞希「あ、明久君！？ダメです！見ちゃダメです！！」
真琴「どした？そういやみどりの召喚獣はどんなだったんだ？」

雄二を片付けた真琴がやってきた。
そうそう、僕もそれ気になってるんだっけ。

美波「だ、男子はあっち向いてなさい！」
康太「……（ピクピクピクブシャアアア）」

嗚呼……ムッツリーニの様子でよく分かった。
多分瑞希のサキュバスに近い何かが出てきたんだろうな……

みどり「うぅ……今消してきた……」
真琴「い、一応聞くけど何だったんだ？」
秀吉「……あれは何じゃろうな？」
瑞希「その、名前は知らないんですけど、その……」
美波「裸でヘビを撒いてて……」

ｎｃｉｕｅぐえｍｃｉｅｗ（真琴の声にならない悲鳴）

バタン（真琴が倒れる音）

ガン　バタバタ（真琴が机の角に頭を打ち、もだえる音）

真琴「ヘビヘビヘビいやぁぁーー！！」
僕「落ち着いて真琴！ヘビなんていないから！！」
真琴「そ、そうだったな……全裸でヘビならリリスじゃないか？」
女子「「「リリス？」」」」
秀吉「って今わしが女子カウントされた気がするのじゃが？」
僕「気のせいでしょ」

でもリリスだとどんな本質なんだろ……

康太「……リリスは女の夜の妖怪。別名夜の魔女と呼ばれ、男児を害する妖怪といわれる」
みどり「そ、そんなぁ……」

だ、男児を害する妖怪……ショタコン？

真琴「ムッツリーニ。そりゃメソポタミアの話だろ？カナン神話ではリリスは安産の女神で、目やフクロウをシンボルとした大地母神だって説もあるぞ。……いやでもショタコンじゃね？」
みどり「琴君までひどい！」
瑞希「そうですよ！」
美波「みどりのどこにショタコン要素があるのよ！？」
真琴「いや、お前らはみどりが家でやってること知らないから……」
みどり「な、なんのことかな……？」
真琴「お前さ……この前宗太のベッドに潜り込んでたよな？」
みどり「……ナンナノコトカナ？」
真琴「動揺しまくってる上に噛んでんじゃねーか……」

まさか、宗太君のベッドに潜り込んでただなんて……確かにショタコンだ……！

秀吉「真琴……その話、詳しく教えて欲しいのじゃが……」
真琴「秀吉？どうしてオレがそんな怖い目で睨まれてる？」
みどり「ひ、秀君！？これには深い訳が……」
秀吉「問答無用じゃぁぁ！！」
真琴「ぎゃあああ！！俺の腕を掴んだまま両手を挙げるな折れるぅぅ！！」

……そっか、秀吉とみどりって付き合ってんだっけ……
そりゃあ秀吉も嫉妬するよね……

？？＆？？『『テメエらいい加減にしやがれ！！』』

全員『『『『『『『『！？』』』』』』』』

え！？あの二人は――――

誰だっけ？

第七十一話　お化けとオカルトとみんなの本質（後書き）

現れた「誰だっけ？」さん。
さあどんな活躍を見せてくれるのか！？

「「おれたちは誰だっけ？じゃねぇ！！」」ｂｙとある変態の常川夏村

第七十二話　勝負と常夏と胆試し大会（前書き）

ＬＡＮ武さん、ノッポガキさん、ｙｏｓｉ４１２８さん感想ありがとうございました！

今回からオカルト編終了までは、

『Ｆクラス　吉井明久　古典　１７４点』

ではなく、

『２－Ｆ　吉井明久　古典　１７４点』

になります。

第七十二話　勝負と常夏と胆試し大会

バカテスト　英語

問　次の単語を英訳しなさい。

『スペイン語』

姫路瑞希の答え

『Ｓｐａｎｉｓｈ』

教師のコメント

基礎英単語の一つですね。たまに頭文字のＳを大文字にするのを忘れてしまう人がいます。そのようなケアレスミスには十分注意しましょう。

土屋康太の答え

『Ｓｐｅｉｎｅｓ――』

教師のコメント

“Ｊａｐａｎｅｓｅ”と同じで“Ｓｐａｉｎｅｓｅ”とでも書きたかったのでしょうか。残念ながら間違いです。

峰嶋真琴の答え

『Ｅｓｐａｎｏｌ』

教師のコメント

スペイン語を英訳しなさいとは言いましたがスペイン語を書けとは言ってません。

吉井明久の答え

『Ｓｐａｇｅｔ――』

教師のコメント

どう解釈してもスパゲティと書こうとしたようにしか見えません。

真琴ＳＩＤＥ

??&??『『テメエらいい加減にしやがれ!!』』

全員『『『『『『『!?』』』』』』』

あ、アレは……!?

明久「……誰だっけ?」
雄二「真琴覚えてるか?」
オレ「さあ?」
美波「完全記憶能力者の真琴が覚えて無いならきっと初対面ね」
瑞希「私も見覚え無いです」
秀吉「というかアレは新種の妖怪か何かじゃろうか?」
康太「……妖怪図鑑には載ってない（スッ）」
みどり「ＯＫムッツリーニ君。なんで妖怪図鑑持ってるかなんてツッコまないよ?」
ハゲ「待てやテメェら!揃いも揃ってコケに……って常村!?どうした!?」

モヒ「妖怪……木下に妖怪って言われた……」

ん？なんであの妖怪コンビはコントやってるんだろうな？

夏川「ってコントじゃねぇし妖怪でも無いわ！3年の夏川と常村だ！」

常村「忘れたなんて言わせねぇぞ！」

オレ「言わないよ。見覚え無いもん」

夏川&常村「「ぶち殺すぞテメェ！」」

ほう……オレをブチコロストナ……？

雄二「あー……すまん先輩方。さっきのは謝る。というか訂正しないと指全部折られるぞ」

オレ「うんうん。貴方達が清涼祭でしでかしてくれた事、忘れちゃいませんぜ？（百億ドルの笑顔で）」

夏川「う……そ、それはすまｎ」

オレ「で、用件は何ですか？」

夏川「ぅおいぃ！？そっちから訂正しろっつっといてそれは無いだろ！？」

常村「お、落ち着け夏川。用件ってのは肝試し大会だよ」

明久「ヱ？キモイ先輩にダメだし大会？」

常夏「「胆試し大会だ！」」

いや、キモイ先輩にダメ出しなんてダメ出しが可哀想だろ。

雄二「で、胆試しがどうしたんだ？」

常村「お前ら2年が真面目に準備してないから先輩として注意しに来たんだよ」

夏川「こっちだって嫌々なんだよ。お前らも真面目にやれよな」

明久「うーん……それはこっちが悪いような……」
雄二「いや、こっちは召喚獣のオカルト化がしっかりクラスに伝わって無くてな、まだ準備の役割分担とかも決まって無いんだ。状況の説明も必要だと思うんだが？」
オレ「って言うかアンタらただサボりに来ただけだろ」
常夏「「なっ！？」」
オレ「だって……準備明日からだし」

日程では明日、明後日を準備に使って、明々後日が本番、問題が無ければ夏休みに一般公開ってなるんだよな。
つまり今日はまだ平常授業。３年が準備を始めてるなんて話聞いて無いけど？（↑実行委員＆システム研究者）

オレ「まあでも今回は授業潰す代わりに召喚獣バトルを取り入れなきゃ入れないから丁度いいや」
常夏「「何？」」
雄二「……なるほどな。先輩方、俺達と勝負しないか？」
常村「勝負だぁ？」
夏川「何言ってやがんだ？」
オレ「胆試し大会を、脅かす側と脅かされる側に分かれて、チェックポイントで召喚獣によるバトルで決着をつけるんだよ」
夏川「……おもしれぇ。で、教科とか細かいルールはどうするんだ？」
雄二「それは後で話し合うとして、罰ゲームが無きゃつまらないよな？」

さすが雄二。そこのところ、よく分かってる。
実際上から召喚獣バトルを用いた胆試しにしろとはいわれたんだがこれは丁度いい。
でもやっぱ罰ゲームって大事だもんね。

ババア『……ヘックシっ……？』↑上

常村「で、どんな罰ゲームにするんだ？」
オレ「……そうだな、“今度の体育祭の準備片づけを全て引き受ける”ってのはどうだ？」
夏川「なんだ？随分と軽い罰じゃないか。まさか負けるのが怖いのか？」
雄二「バカ言うなよ。お互い独断なんだ。そんな重い罰ゲームを勝手に決められないだろ」

そ。雄二の言うとおり。
それにうまくやれば体育祭の準備免除だし（鉄人なら補習なりなんなりするだろうが）。

夏川「それじゃ具体的なルールを決めるぞ」
雄二「そうだな。あとで“聞いてなかった”なんて言わないようにもな」
オレ「そうだな……４人だけで話し合える場所に移動するか」
常村「おい、召喚獣を使うならフィールドは……」

うん。この二人、なんだかんだ言ってＡクラスだ。
それなりに頭も回るし単純な頭脳なら明久なんか比べ物にもならない（普段の行動は同じレベルだけど）。

明久『……僕、主人公なのに蚊帳の外……』
秀吉『……（ポン）』
康太『……（ポン）』

美波『……（ポン）』
瑞希『……（ポン）』
みどり『……（ポン）』
明久『やめてっ！みんなして僕の肩を優しく叩かないで！』

……可哀想なことしたかなぁ。

夏川「なぁ。ちょっといいか？さっきから気になってたんだが……」
オレ「ん？オレか？」
夏川「お前誰だ？」

……コイツもか。

明久ＳＩＤＥ

胆試し大会を翌日に控えた今日、僕等はお化け屋敷のセットの準備をしていた。

秀吉「おぉ……。これはまた本格的じゃのう……」

僕「真琴と雄二が『授業サボれる！』って本気で準備してたしね」

新校舎の３階は作業する人で賑わっていた。

Ａクラスからｄクラスまでの広い教室を使って胆試しを行うからだ。

しかし、ババアが根回ししたのかな？そうでもなきゃＡクラスの教室が使えるなんて思えないし。

僕「やっぱ皆勉強ばっかじゃつまんないもんね」

Ａクラスも含めてみんな僕等と同じ高校生。

その差はあれど、ある程度は遊びたいと思うのが普通だろう。

瑞希「わ、私はこういうのよりはお勉強のほうが……」

美波「だ、大丈夫よ瑞希。こんなの全部作り物なんだから」

秀吉「あの二人は相変わらずあの調子なのじゃな……」

僕「まあだれだって苦手なものの一つや二つあるし、瑞希にはいつも助けてもらってるしいいんじゃない？」

苦手なら無理に強要する必要は無い。

その辺は真琴もしっかり考えてるようで、必ず胆試しに参加しなければならないわけではないようだ。

康太「……明久。あっちのロッカーを動かして欲しい」

僕「あ。ムッツリーニ。分かったよ。それじゃ瑞希に頼んで腕輪を――――」

康太「……もう頼んである」

見ると世界史の田中先生がいた。

なるほど。こういうときは簡単に召喚許可が下りて楽で良いや。

僕「んじゃさっさとすませよう。試獣召喚（サモン）」

おなじみの幾何学模様が現れる。

そこからカッコいい騎士道デュラハンの僕登場。

僕「それじゃこのロッカーを……あ」

ポロ

頭が落ちた。

瑞希＆美波「「……！？」」

二人が震えたのが分かる。

リアルにがたがたと音がなるくらいに震えてるからだ。

骸骨もびっくりの音量だよ。

秀吉「しかしお主の首も困り者じゃのう」
僕「僕が賞金首みたいな言い方はやめてよ……。でもこれじゃあ戦闘中に首が落ちたりしたら格好の的になるしね」
康太「……ガムテープで固定する」
僕「でも召喚するたびにそれも面倒だし……このままでいっか」
この首の取れる感覚を今だけでも味わっておくとしよう。
僕「はやくロッカー運ぼうってあがぁっ!?」
なんだ!?いきなり頭部に激しい痛みが!?
須川「お、吉井の頭だ。蹴っちまおう。試獣召喚(サモン)!」
近藤「よし、みんなでサッカーやるか!試獣召喚(サモン)!」
君島「試獣召喚(サモン)!そら、そっちいったぞ!」
Fクラスのバカ共が僕の頭でサッカーを始めてやがる。
しかも全員の召喚獣がゾンビって……
秀吉「根性が腐っておるからゾンビなのじゃろうな」
ああ、納得。
てかそれ多分僕より酷い扱いだよね?
瑞希「ひっ!?ゾ、ゾンビが明久君の頭でサッカーしてます!?」
美波「地獄よ……ここは地獄なのよ……!」
気持ちは分かるが恐怖より痛みのほうが怖いってことをこの二人には理解して欲しい。
召喚獣のパワーで蹴られてるからかなり痛いんだよこれ……っ!!

常夏「「いい加減にしろぉ！！」」
なｔ「お前ら遊んでばっかで準備してねぇじゃねぇか！！」
とｋ「２年３年合同なんだから真面目にやれっておい！？名前途中で区切るのやめろ！！」

誰かと思ったら３年生の常夏コンビか。
雄二も真琴も居ないけどどうしようか？

夏川「また吉井か。いい加減にしやがれ！試獣召喚（サモン）！！」
常村「ここでぶちのめしてやる！試獣召喚（サモン）！！」
僕「ええ！？ちょ、タンマ！！」

３－Ａ　夏川俊平　世界史　２６２点
　　常村勇作　世界史　２５７点

ＶＳ

２－Ｆ　吉井明久　世界史　２３１点

夏川「なんだ！？Ｆクラスの癖に互角だと！？」
常村「構うな！２対１だ！やっちまえ！」
僕「だから待ってぇぇぇ！！」

遅いかかってくる牛頭と馬頭。
どうやらこの二人の本質は『弱いものいじめ』のようだ。

？？『『試獣召喚（サモン）！！』』

僕「え！？」

頭をバカ共に持っていかれて落ち着いて操作できずにいた僕の前に３体の召喚獣が現れた。

３－Ａ　夏川俊平　世界史　２６２点
　　常村勇作　世界史　２５７点

ＶＳ

２－Ａ　久保利光　世界史　３７２点
２－Ｄ　清水美春　世界史　１２６点
２－Ｆ　姫路瑞希　世界史　５３３点

僕「瑞希！？それに久保君と清水さんも！？」
夏川「なんだお前ら！？」
常村「邪魔すんな！！」

助けてくれたのはうれしいけど、どうして久保君と清水さんが？

利光「吉井君を攻撃しようというのなら、例え先輩でも容赦はしません」
美春「お兄さまの親友を守るのは、美春の役目です！そしてお兄さまに、『美春、よく明久を守ってくれたな。ありがとう』なんて言われるんですわ！キャー！」
瑞希「……／／／（ボッ）」

清水さんは下心丸見えだな……

？　瑞希はどうしたんだろう？

……あ。

瑞希サキュバス「（全力でお色気中）」

僕「瑞希！？無理しなくてもいいんだよ！？」

瑞希「あ、明久君を守るためです！これくらいはなんでもないです……」

だんだん声が小さくなってるのに大丈夫って言われても説得力無い……

しかも瑞希の召喚獣を見て……

Ｆクラス『『『『『眼福じゃぁあぁーーーーー！！』』』』』

Ｆクラスのバカ共が覚醒した。

常夏「……（ダラー）」

僕「！？　どくんだ瑞希！あの二人は僕の手でぶち殺さなければ気がすまない！」

瑞希を見て鼻血を出していいのは僕とムッツリーニだけ（もうどうしようもないため）だ！

え？久保君と清水さんのオカルト召喚獣が気になる？原作６巻参照！

『なげやりだなオイ！！』ｂｙ作者

常村「じょ、上等じゃねえか！！３年なめんな！！」
夏川「ぶちのめしてやる！！」
僕「こっちの台詞だ変態コンビ！」

僕と常夏コンビが同時に召喚獣を動かす。
２対１だけど操作技術で押し切る！

真琴『やめんかこの大バカ共がぁぁーーーーー！！！！！！！』

僕＆常夏「！？」

な、なんだ！？いきなり僕と常夏コンビの召喚獣に雷が落ちてきたぞ！？

僕「ていうか痺れる！痺れるっ！！」

２－Ｆ　峰嶋真琴　世界史　４３０点

ＶＳ

２－Ｆ　吉井明久　世界史　２点
３－Ａ　夏川俊平　世界史　ＤＥＡＤ
　　常村勇作　世界史　ＤＥＡＤ

常夏「「点数がぁぁっ！？」」
僕「た、たすかった……」
鉄人「戦死者は補習！！」
真琴「フン」

常夏コンビは突如現れた真琴（と落雷）によって戦死、鉄人に連行されていった。

僕「ひ、ひどい真琴……僕にフィードバックがあるの知っててやったでしょ……」

真琴「お前は喧嘩売られた側だったから手加減したんだ。準備時間にあんなくずに付き合ってんなよ」

利光＆美春「……」

真琴「ん？久保に美春？どうした？」

利光「いや、峰嶋君。君の召喚獣なんだが……おかしくないかい？」

美春「綺麗です……。さすがお兄さまです……」

おかしい？おかしいってどこがだろう？

まことがおかしいのは今に始まった事じゃないし……

利光「峰嶋君。他の人の召喚獣は、みんな召喚者と同じサイズなのに、どうして君だけそんなに大きいんだい？」

真琴「あー……さあ？」

あ、そういうことか。

オカルト召喚獣は常夏コンビの牛頭と馬頭も含めて皆自分自身と同じサイズなのに、真琴の黄龍だけ数倍の大きさがあるんだ。

そりゃあ違和感もあるよね……

美春「綺麗です……。さすがお兄さまです……」

清水さんはさっきからこれの繰り返しだ。

瑞希「ハァ…ハァ…ま、真琴君……」

真琴「何だ…ってどうしてそんなに息を切らせてるんだ？」

瑞希「い……今、召喚フィールドの、外に、行って、きました……」
僕「だ、大丈夫？ほら水」
瑞希「あ、ありがとう、ございます（ゴクゴク）」
真琴「……ああ、そういうことか。それは…道理で向こうでバカがうるさいと思ったよ」
瑞希の様子とバカの様子で真琴も大体事情がつかめたようだ。
瑞希「ふぅ……それで、真琴君。なんだか点数低く無いですか？」
僕「え？あ、言われてみれば……」

２－Ｆ　峰嶋真琴　世界史　４３０点

言われてみればなんてもんじゃない。
普段の真琴の１／４以下じゃないか。

真琴「おお！良くぞ聞いてくれました！酷いんだよ！あのババア、オレに無断で点数上限５００点に設定したんだよ！しかもオレだけ！」
僕＆瑞＆利＆美「「「「ああ、なるほど」」」」
真琴「全員納得！？」

真琴はムッツリーニみたいな一教科特化型じゃなくて、全教科において１６００点、指輪クラスの点数を保持する学園最強の点数保持者だ。
そんな人が居たら多分一人で全てのチェックポイントを突破してしまうだろう。

真琴「そのせいで瑞希より総合点数が下になったんだよ！酷いと思わないか！？」

僕「え！？そこに怒ってるの！？」

瑞希「え、ええと、ごめんなさい？」

真琴「チクショォォォーーーーー！！学園最強がぁぁーーーーー！！」

利光『……清水さん。あれが君が尊敬する人なのかい？』

美春『……お兄さまは今日は体調が優れないのですわ』

久保君と清水さんが少し遠かった気がした。

真琴「……」
明久「ま、まあ元気出してよ。点数が低くても真琴なら簡単に勝てるからさ？」
真琴「……うん」

あれから少しして、真琴は体育座りになってしまった。
仕方ないとはいえ、ちょっと可哀想だよなぁ……
あ、ムッツリーニはそのままだって。多分それも真琴が怒る理由の一つなんだろうなぁ……ん？

僕「ナニコレ？」

真琴が一枚の紙を渡してきた。

真琴「……今回の胆試し大会のルール。ババアと話し合って決めてきた。他の奴には雄二が配ってる」

ふーん。これを決めてたからいなかったのか。
どれどれ……

？二人一組での行動が必須。一人だけになった場合のチェックポイント通過は認めない。また、可能な限り男女でペアを組む事。
※一人になっても失格ではない。
※２年Ｆクラス木下秀吉は第３の性別『秀吉』の為、男女どちらと組んでも構わない。

？二人のうちのどちらかが悲鳴をあげてしまったら、両者とも失格

とする。

?:チェックポイントはA~Dの各クラスに一つずつ。合計4箇所とする。

?:チェックポイントでは各ポイントを守る代表者2名（クラス代表でなくても可）と召喚獣で勝負する。撃破でチェックポイント通過扱いとなる。

?:一組でもチェックポイントを全て通過できれば驚かされる側（第二学年）、通過者を一組も出さなければ驚かす側（第三学年）の勝利とする。

?:驚かす側の一般生徒は召喚獣のバトルは認めない。あくまでも驚かすだけとする。ただし、驚かされる側から勝負を申し込まれた場合、教師が許可すればバトルをとりおこなう事を許可する。

?:召喚時に必要となる教師は、各クラスに一名ずつ配置する。

?:一度使われた教科は、他のチェックポイントで使う事は出来ない。

?:通過の確認用として、驚かされる側はカメラを携帯する。

?:悲鳴の音量は、2年Fクラス土屋康太の音量測定器で判定、一定量を超えたら失格とする。

なるほど。全然分からない。

真琴「それ、やるから覚えとけよ」

僕「う、うん」

覚えられるかな？

真琴「それな、３年の小暮って女の先輩と決めたんだけど、あの人要注意だ。かなり頭が回る」

僕「そうなの？そんなすごい人が居るんだ」

真琴「ああ。今回オレは瑞希より少し少ないくらいの点数しかないし（それでも十二分に高得点だけど）、瑞希はあの調子で参加させるのは酷だし、結構キツイかもしれないな」

僕「まあ……大丈夫じゃない？」

雄二も居るし。

僕「それにこれはあくまでイベント。皆で楽しめればいいんじゃない？」

真琴「それもそうだな」

瑞希＆美波『『きゃあああああああああ！！』』

……あの二人には楽しむ余裕なんてないかもなぁ…

第七十二話　勝負と常夏と胆試し大会（後書き）

次回、ついに胆試し開始！

『お、お化け！？いや、お化けじゃないけどお化けより怖いです！！』

第七十三話　バカと恐怖と本気の3年（前書き）

ＬＡＮ武さん感想ありがとうございました！
そして総合評価３００ｐｔ突破です！
これも一重に読んで下さる読者様のおかげです！これからも宜しくお願いします！

☆今日の迷！？言コーナー！☆

真琴「今日のッ」

明久「迷！？言ッ」

真琴「これはオレ達が今までの話の中で『感じてはいたけど文章にはならなかった言葉』を言っていくコーナーである」

明久「今日の迷！？言は何かな？」

真琴「特に何も考えてないが……あ」

明久「何々？なんかあった？聞かせて聞かせて」

真琴「これは前回の常夏コンビ再登場のときの思ったことなんだが……」

『……あの二人って、使い捨てキャラじゃなかったんだな』

明久「あー……そりゃ確かにそうだね……」

真琴「……」

明久「……」

真琴「……これ、閉めるの難しいな……」

明久「……うん」

続くかな？

第七十三話　バカと恐怖と本気の３年

バカテスト　現代社会

問　以下の問に答えなさい。

『国連環境開発会議について説明しなさい』

姫路瑞希の答え

『１９９２年にリオデジャネイロで開催された国際連合主催の会議のこと。環境や開発について各国の首脳が集まって話し合うもので、地球環境サミットとも呼ばれる。この会議において、リオ宣言やアジェンダ２１、森林原則声明が合意された』

教師のコメント

その通りです。地球環境に対する取り組みが各国で盛んに協議されている会議で執り行われた重要な会議の一つです。この会議は、姫路さんの上げた二つの名称の他に、リオ・サミットとも呼ばれています。覚えておくと良いでしょう。

峰嶋真琴の答え

『１９９２年にリオデジャネイロで開催された国際連合主催の会議のこと。環境汚染の元となる根本恭二（クズ）、夏川俊平（ドスケベモヒカン）や常村勇作（ホモエロ坊主）の処理方法について各国の首脳が集まって話し合うもので、地球環境サミ

ットとも呼ばれる。ドミニカ共和国の『根本恭二（クズ）、夏川俊平（ドスケベモヒカン）、常村勇作（ホモエロ坊主）の処理方法についての全権を峰嶋真琴に一任する』という提案に対し国連加盟国の９８％が賛成した』

教師のコメント

正解です。

クズ・モヒカン・坊主のコメント

教師ィィィィィィィィィィ！！！？？？

土屋康太の答え

『一言で説明するのは難しい』

教師のコメント

分かりました。あとで職員室でじっくり聞かせてもらいます。

吉井明久の答え

『

※環境のことを考えて、この解答は着色料を使用していません

教師のコメント

貴方は環境以上に自分の卒業の可否についてよく考えましょう。

真琴ＳＩＤＥ

一晩明けて翌日。胆試し大会当日。

オレ「こりゃすげえ……」

明久「3年も本気だ……」
瑞希&美波「「（ガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタ）」」

我等が校舎はお化け屋敷と化した。
昨日の準備は、『仕上げは脅かす側のほうがいい』ということで3年に任せてしまったのだが、ここまで完成度の高いものを作ってくるとは……

瑞希&美波「「（ガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタ）」」

あまりのハイクオリティに美波はオレから、瑞希は明久から離れようとしない（怖いらしい）。
やっぱ美波は可愛ゲフンゲフン。

雄二「おう、お前ら。やっときたか――――――」

瑞希&美波「「きゃあああああああああああああ！！」」
オレ&明久「「ぎゃあああああああああああああ！！」」

後ろから声をかけられてびっくりしたのか二人の腕を抱きしめる力が強まる。
そして俺と明久の腕が上げる悲鳴が聞こえた。

雄二「姫路に島田。明久はともかく今日は真琴に死なれる訳にはいかないから離してやってくれないか？」
瑞希「ふぇ？さ、坂本君？って明久君！？ごごごめんなさい！」
美波「真琴！？きゃ、きゃあ！腕が変な方向いてる！？」

それお前のせいだよ。

オレ「ぐ、ぐぅ……よいしょ！（ボキ）治ったぞ」
明久「（ボキ）こっちも治ったよ」
雄二「お前らはどんな人外だ……」

放っといて欲しい。

瑞希「あ、明久君、大丈夫ですか？」
美波「なんでアンタ達が外れた関節を戻せるのかは聞かないでおくわね……」

聞かれたら正直に「いつも美波に外されてるからです」って答えてやるっ。

雄二「行くぞ。もう大分集まってるしな」
明久「？　教室に行くんじゃないの？」
雄二「いや、体育館だ。そこでペアを決めてから胆試し大会スタートだな」
瑞希＆美波「「（ガタガタガタガタガタガタガタガタガタガタ）」」
オレ「学年2位がこの調子で大丈夫か……？……コイツ今1位だったな」

康太「……おはよう」
オレ「おう、おはようムッツリーニ」
康太「……カメラの準備は万全」
オレ「おし、今日は頼むぞ」

ムッツリーニには今回使う機材の用意をしてもらった。
ルールにも書いたとおりで。

瑞希「こ、ここは普通なので助かります……」
美波「そ、そうね……（バア）きゃあああああ！？」
瑞希「ひゃあああああああ！！」

誰だあのゾンビ出したのは。明久が凄い形相でゾンビを切り刻んでるぞ。
……吉岡だったか？が鉄人にさらわれてったな。あいつか犯人は。

オレ「……今日、大丈夫かなぁ……？」
雄二「きっと大丈夫だろ。まあＢＣＥクラスが変なことしなければな」
オレ「流石にこんなときにはしないだろ。ていうか厳密にはクズと小山と中林な」

クズ『おい！？今何かムチャクチャ腹が立つことを言われたぞ！？』

オレ「そういや雄二。どうして“可能な限り男女ペア”なんてルールを？」
雄二「折角のイベントだ。皆楽しめるようにと思ってな」
オレ「異端審問会の攻撃の的を増やすだけだろ」

しかもこいつがそんな考えをしてるとは考えられないな……

オレ「で、本音は？」
雄二「翔子にペアを強制されたから腹いせに全員巻き込んでやった」
オレ「素直に白状ありがとう」

やっぱそんなところか。
しかし霧島も一途だなあ。

雄二「そろそろ時間だ。行くぞ」
オレ「え？オレも？」
雄二「当たり前だ。お前には俺がいないときに代わりを務めてもらわなきゃならないからな」

なんて勝手な。
しかもＯＫしてないし。

雄二『皆聞け！今からＢクラスの攻略に望むぞ！』
オレ「って早！？」
雄二『基本は男女ペアだが、俺達２年は男子のほうが多いからな！ある程度はしょうがない！』

ちなみに今のこの時点でペアが決まってないのってＦＦＦ団だけだったりする。
根本にすら負けるとは、酷いなあいつ等。

ＦＦＦ『おい！？なんで俺達のペアは女子じゃないんだ！？』
ＦＦＦ『分からん！！とりあえず異端者を狩るぞ！！』
ＦＦＦ『サーチアンドデェーズス！』

そんなんだからだろ。

オレは個人的に美波と組みたかったんだが、そうするとイヤでも美波は突入組みになり、それだけは嫌だと言うことでオレが明久と組んで、美波は瑞希と組むことになった。
まあ途中で変えてもいいんだけどね？

雄二『おっしゃ！！行くぞテメエらぁぁ！！』
２年『『『『『おおーーー！！』』』』』

しかし雄二はすげえな。
この士気、どうやったら実現できるんだ？

明久ＳＩＤＥ

Ｂ女『ね、ねぇ……あの角、怪しくない……？』
Ｂ男『そ、そうだな……』

先発隊として、Ｂクラスの男女ペアが入っていった。
現在ムッツリーニの設置したモニターに映し出されている。

作りの都合上まずはBクラスから突入する事になっている。
比較的大きい教室だし、どうやら江戸時代をモチーフにしたようでかなり怖い。

B男『そ、それじゃ俺が先に行くから……』
B女『う、うん……』

カメラはかなり怪しい曲がり角を写している。
確かに何か出てきてもおかしくないかも。

瑞希「ひ!?み、美波ちゃん!今カメラに何か写りましたよ!?」
美波「きききききキノセイヨ瑞希!だだだ大丈夫にキマッテるわよ!」

だったらどうしてそんないびつな片言になるのかな?
というか怖いなら見なければいいのに。
怖い怖いと言いながらも見てしまう人間の悲しき性って奴か……

B男『行くぞ……っ!!』
B女『うん……っ!』

バッ!!とカメラが曲がり角の向こうを映し出す。
…けど、そこには何もいなくてただ道が続いてるだけだった。

美波「な、なによ。何もいないんじゃない……」
瑞希「よ、よかったです……。怖いのがいなくて本当によかったです……」

と二人が胸をなでおろした瞬間。

B男&B女『『ぎゃあああああああああああ！！？？』』

瑞希&美波「「きゃあああああああああああ！！？？」」

カメラの向こうから大きな悲鳴が響き、その悲鳴に驚いたのか瑞希と美波が悲鳴を上げる。

翔子「……？」

ちなみに霧島さんはなんともないようだ。

康太「……失格」

雄二「まさか二組目が入る前に一組目が失格になるとは……」

真琴「敵も相当本気だなこりゃ」

秀吉「どうするのじゃ？このままでは無駄に戦力を失う事になるのは目に見えておるぞい」

雄二「……いや、先発隊の残り４組を投入する！」

１０分後

康太「……先発隊、全滅」

先発隊に加えてＡクラスやＢクラスも投入したのに全滅。

一気に２４人も失格になってしまった。

雄二「……真琴、行ってくれ」

真琴「いきなりオレかよ……まあいい。行くぞ明久」

僕「了解」

かなり早い出番だけど、仕方がない……あれ？

僕「み、瑞希？」

真琴「美波？」

僕は瑞希に、真琴は美波に抱きつかれた。

瑞希「お、お願いです明久君。行かないでください怖くて死んじゃいそうです……」

僕「う……」

美波「行かないで真琴。真琴に行かれたらウチはもう生きていけない！」

真琴「しかしなぁ…」

涙目で懇願してくる二人。

かなり困った。

僕「どうする雄二？」

雄二「仕方ない。須川福村ペアと朝倉有働ペアを投入する！」

４バカ「「「「任せろ！！」」」」

須川『お、ここか？何か出るって場所は』
福村『そうじゃないか？』

さすがにＦクラスだ。
さっきからちっとも悲鳴を上げずに問題の場所まで到達してしまった。
ちなみにそれまでに他のペアから3回ほど悲鳴が聞こえて失格者は３０人、ぴったり１０％になった。

須川『なーにがいるのかなっと』
瑞希＆美波「「きゃあああああああああああ！！」」

カメラに写ったのは血みどろの生首。
そして須川君がカメラを背後へと回すと気味の悪い口の避けた女の人が写った。

瑞希＆美波「「きゃあああああああああああ！！きゃあああああああああああ！！」」

どこから出てるのか本当に不思議になるくらいの大声で叫び続ける瑞希と美波。
それ以外にもあちこちから悲鳴やらなにやら色々聞こえてくる。
あ、その間に僕は瑞希に、真琴は美波に抱きついてもらってちょっと顔が綻んでいます（笑）。

須川『見ろ福村。この人ちょっと口は大きいけどかなりの美人さんだぞ？』
福村『ああ。だがこっちも首から下は分からないが血を洗い流せば

ミスコンで良い線行きそうなくらいの美女だと思わないか？』

あの二人はなんて会話をしてるんだ。

美波「な、なんであんなに冷静にお化けの見比べなんかできるのよ！？ま、真琴もアキもあんなにリアルなのに怖くないの！？」

僕「いや、そんなこと言われても……」

真琴「怖くないものは怖くないし……」

正直ＦＦＦ団に襲われている僕や雄二のほうがよっぽどリアルでグロテスクだろう。

勝てる自信がある。そんな自信欲しくはないけど。

雄二「グロテスクなものならＦクラスで見慣れてるしな。あとはキレた真琴とか」

康太「……あの程度、殺されかけている明久やキレた真琴に比べれば大したことはない」

秀吉「正直マジ切れした真琴のほうがよっぽど怖いのじゃ」

僕＆美波「「あ、それは納得かも」」

真琴「お前ら言いたい放題だな！？そんなに怖いか！？」

真琴以外「「「「「一方通行とタイマンはったほうがいいって思うくらいに」」」」」

真琴「怖すぎだろ！？」

正直な意見だ。

瑞希「……」

僕「？　瑞希？」

瑞希「……そうですここは天国だからお化けなんていないんです」
真琴「!?　壊れただと!?」
僕「や、やばい!!瑞希!しっかりして!」

ブー!ブー!

え?失格を知らせるアラーム!?

須川『お前がモテないのが悪いんだ!!』
福村『いいや、お前がバカでブサイクなのが悪いんだ!!』

バカ二人は頭の悪い言い合いをして失格になっていた。

第七十三話　バカと恐怖と本気の3年（後書き）

次回も宜しくお願いします！

『『俺達は使い捨てキャラじゃねぇ！！』』ｂｙ誰だっけ？

第七十四話　Bクラス突破！（前書き）

ＬＡＮ武さん感想ありがとうございました！

第七十四話　Bクラス突破！

バカテスト　世界史

問　以下の（　）に正しい語句を入れなさい。

『ロシアの作家ドストエフスキーは著書『（　？　）の兄弟』や、『（　？　）と罰』の中で信仰心を失った近代人の虚無主義的な姿を描いた』

姫路瑞希の答え

『？（カラマーゾフ）の兄弟
？（　　罪　　）と罰　』

教師のコメント

正解です。この二作品と『白痴』、『悪霊』、『未成年』はドストエフスキー五大長編と呼ばれる名作ですので、興味があればそれらを読んでみるのも良いでしょう。

土屋康太の答え

『？（　　マーゾ　）の兄弟』

教師のコメント

なんてところをピンポイントで覚えてるんですか。

吉井明久の答え

『？（　　ムチ　　）と罰』

教師のコメント

マーゾの兄弟大喜び。

峰嶋真琴の答え

『？（ロリコン）の兄弟
　？（性犯罪者）と罰』

教師のコメント

時々君の思考回路に異変が起きてるのではないかと心配になります。

真琴ＳＩＤＥ

２－Ｆ　朝倉正弘　化学　５９点
　　有働住吉　化学　４３点

ＶＳ

３－Ｆ　近藤良文　化学　４４３点
　　大竹貴美子　化学　３７２点

……勝負になりゃしねぇ。

朝倉『ぎゃあああああああ！！』
有働『おわあああああああ！！』

どうやら瞬殺されたようだ。

まああの点数差じゃ明久の操作技術でも無理だろうな。

雄二「かなり点数高いな」

オレ「どうする？なんならオレと明久が行くが？」

雄二「行けるのか？」

オレ「……ごめん。無理だわ」

さっきから美波がオレから離れようとしない。

オレが突入するときは美波がパートナーで確定って事か？

明久「でもどうする？あの点数に対抗できるのって真琴、瑞希、雄二、霧島さん、久保君は文系だから……」

オレ「雄二と霧島のペアはどうだ？」

雄二「いや、単純に点数の高い奴でなくても、Ｂクラス辺りをぶつけ続ければ向こうもいつか点数が尽きるぞ」

なるほど、相手が回復試験を受けられないのを逆手に取るのか。しかし……

オレ「それってチェックポイント通過するまでに何人失格にすればいいんだ？」

実はここまでにもう５０人ほど投入してるのだが、その中でチェックポイントまで到達したのはたった６人。ほとんどがチェックポイントに着く前に悲鳴をあげてしまっているのだ。

これ以上の余計な戦力消費は避けたいところだし、Ａクラス上位辺りをぶつけないとまずいかもしれない。

オレ「霧島は雄二と固定だとして、他には……」

あの点数に対抗できそうなのは、木下姉、佐藤、工藤、河野兄妹…
…ん？河野……？

オレ「なあ雄二。河野兄妹ぶつければ余裕なんじゃ……」
雄二「ん？それもそうだな」
翔子「……二人は今日は法事で休み」
オレ「……間、悪いな」

やっぱ雄二霧島ペアかオレ明久ペアしかないか……

雄二「悪いが木下姉と佐藤行ってくれるか？」
オレ「やっぱそうなんのね……」
優子「仕方ないわね。行くわよ美穂」
美穂「は、はい。待ってください」

二人はＢクラスへと急ぐ。

オレ「あの二人なら勝てないまでも、相当なダメージを与えてくるよな？」
雄二「ああ。俺も最初からそこまで考えてるからな」

さすが元神童の名は伊達じゃないな。
２００点くらい削ってくれればあとはＢクラスでも余裕で『きゃあああああああああああ！！』……今の悲鳴は……

康太「……佐藤美穂、失格」
オレ＆雄二「「やっぱりか……」」
翔子「……そういえば美穂は爬虫類がダメだった」

画面には巨大カエルが写っている。

カエルは爬虫類じゃなくて両生類なんだが……

明久「それで結局僕らが行くんだもんね…」
オレ「美波たち説得すんの大変だったな。明久は何て言ったんだ?」

オレ達はBクラスの中を歩いていた。
結局オレと明久のパワー&コントロールコンビでのゴリ押しだそうだ。
そしてオレ達は他愛もない会話に花を咲かせつつ、チェックポイントを目指し歩いている。

明久「今度料理作るのと、今晩添い寝してあげるって言った。真琴は?」
オレ「オレは今度一日何でも言うこと聞くのと、如月グランドパークに連れてくってので説得」

本当に大変だった。
光を失った眼で放心状態の美波にズボンを掴まれた時は一生離してくれないんじゃないかと思ったくらいだ。

オレ「ていうか添い寝ってことはお前んちに瑞希が泊まるのか?それとも逆?」

明久「どっちかは決めてないけどね」

さっきからカッターナイフが飛んできて、『リア充爆発しろ』と聞こえるのは気のせいだろう。

ちなみに異端審問会が明久と瑞希をくっつけるのに（一時的に）協力的だったのはオレが拳で☆Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ☆したからだ。

明久「あ、提灯お化け」

オレ「本当だ。薄暗くて提灯としての需要を果たせてないな。試獣召喚（サモン）」

召喚獣を呼び出してみる。

布施『承認します』

２－Ｆ　峰嶋真琴　化学　５００点

ＶＳ

３－Ｆ　陰山浩助　化学　７７点

明久「龍が提灯持ってる……」

オレ「結構シュールだろ？ちなみにめんどくさいしコイツ倒しちゃっていいよな？」

明久「いいんじゃない？」

陰山『え！？ちょ、おい！？』

オレ「“落雷”」

２－Ｆ　峰嶋真琴　化学　４３０点

ＶＳ

３－Ｆ　陰山浩助　化学　ＤＥＡＤ

当然戦死ものだ。

陰山『あいつらコロスゥゥゥゥ！！』

明久「敵が増えたね。それにしても落雷使わなくてもいいんじゃない？点数もったいないし」

オレ「あ、そだな」

実はこの落雷、一撃で７０点も消費する。

あまり点数のない今のオレにとっては燃費のいい技じゃないんだ。

提灯を電撃で焼いてすこし歩くとチェックポイントにたどり着いた。

近藤「お、観察処分者と学園１位のコンビか」

大竹「楽しませて頂戴ね？」

明久「はい。そのつもりですよ」

オレ「めんどい。さっさと片付ける」

４人「「「「試獣召喚（サモン）！！」」」」

２－Ｆ　吉井明久　化学　２１３点

峰嶋真琴　化学　４３０点

ＶＳ

３－Ｆ　近藤良文　化学　４２５点

大竹貴美子　化学　３６１点

あれからまた一戦したのか、少し点数が減っていた。

近藤「な!?吉井ってあんなに点数いいのか!?」

大竹「で、でも、トータルの点数はこっちのほうが上……って何!?あのバカデカい龍は!?」

オレ「悪いな。先輩」

落雷。

大竹「え!?きゃあ!!」

３－Ｆ　大竹貴美子　化学　ＤＥＡＤ

近藤「貴美子!?」

明久「先輩の相手は僕ですよ?」

近藤「!?」

明久のデュラハンが持つ剣が、相手の召喚獣を縦に真っ二つにする。

３－Ｆ　近藤良文　化学　ＤＥＡＤ

オレ「これでここのチェックポイントは通過だな」
明久「案外簡単だったね」
オレ「よし、このまま次のＤクラスに行きたいところだが、戻るぞ」
明久「オーケー。最初からその予定だったもんね」

明久「ただいま」
オレ「勝って来たぞ」
雄二「おう。もうＤクラス攻略は始まってるぞ」

モニターにはＤクラス内の５組のペアの様子が映し出されていた。
あ、２番と３番のモニターの人失格になった。

瑞希「よ、よかったです……。これで私たちはＢクラスには行かなくていいんですよね？」
明久「うん。Ｂクラスのチェックポイントは、僕と真琴で突破してきたからね」

一度突破した教室は無視して次の教室から入る事が出来る。
配置の関係でBクラスの次はDクラスだ。

瑞希「わ、私は怖いから不参加でお願いしたいんですけど……」
オレ「なるべく入らなくてもいいようにはするけど、まったく不参加ってのはな……」

一応二年と三年の合同行事だし、オカルト召喚獣を一般公開してもいいかどうかの試験的な意味も含めてるし、怖いって理由だけで一切参加しないってのはちょっと厳しいだろう（あのババアが許可するとは思えない）。

真一と呼ばれた男子『み、真美？大丈夫か？』
真美と呼ばれた女子『う、うん。真一君も大丈夫？』

FFF団『『『『『チッ……！』』』』』

さすがFクラスだ。いちゃつく奴等を見つければ即戦闘体勢。
だから春が来ないんだろ？

近藤「坂本。次は俺に行かせてくれ。本当の敵は二年にいるってことを教えてやらねば」
武藤「まて近藤。ここは【安心確実の仲間殺し】の異名を持つこの武藤啓太に任せてもらおうか」
原田「まてまて。ここは【逆恨み清算します】がキャッチコピーの俺、原田信孝に任せてもらうぞ」
オレ「お前ら全員くたばって来い」

どうしてFクラスはこんなバカが大多数を占めてるんだろう？
あ、Fクラスだからか。

雄二「おいおいお前らな……。ちょっと落ち着けよ」

さすが雄二。こういうときでも冷静に暴徒と化したクラスメイトを静めて……

雄二「――――そういうことはクラス全員でやるべきだ」

お前もくたばって来いこのバカ。

近藤「おお！流石坂本！」

武藤「考えることが違うぜ！」

原田「代表カッコいい！！」

全員死んでしまえばいいのに。

心からそう思ったよ。

オレ「待て待て。皆落ち着け。殺るならあいつ等が失格になった後で殺れ。それなら戦力に被害はないしな」

秀吉「お主の地の文そっくりそのまま返してもよいかの？」

失敬な。ちゃんと勝利を考えて戦力に被害が出ないようにしたというのに。

というかDクラスは面積で言えばBクラスの1／3くらいしかないし、Bクラスのときほど戦力を消費するという事はないと思うけど……

真美『きゃあああ！！』

真一『真美！？ど、どうした！？』

真美『な、なにか今ヌメッとしたものが首に……』

康太「……失格」
なんて思ったら失格だ。
会話から察するに視覚ではなく触覚に刺激を与える方法に切り替えてきたんだろう。

明久「ねぇ真琴、雄二、今何が映ったか分かった？」
雄二「わからねぇ」
オレ「オレもよくは見えなかったが、会話から察するに恐らくコンニャクの類じゃないか？」

男子『おわあああああああ！？』
女子『きゃあああああああ！？』

康太「……４番５番ペア、失格」
オレ「まずいな……。このままだとＢクラス同様大量に戦力を消費する羽目になるぞ……」

Ｂクラスといえば根本はどうしたんだっけ？
アイツはチェックポイントにぶつけて戦力と手の内を見ておきたいんだが……

オレ「おい。根本はどうした？」
康太「……Ｂクラスのときにチェックポイントで召喚キーを大声で叫んで失格」
オレ「アイツはどこまで足引っ張るんだ……ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・だ・な」

え？麦のんさんなんて僕はシリマセンヨ？

女子『うきゃあああああ！！』
男子『うおわあああああ！！』

ヤバイ。どんどん失格になっていく。

康太「……真琴の言うとおり、直接攻撃」
明久「だね。今コンニャクらしき物体見えたよ」
真琴「そうだな……こういうときこそバカの使いどころだな」

女子『きゃああ！？カエル！？』
男子『なんだこのでかい蜘蛛は！？』
男子『ヘビ！？』

ヤバイ。オレ今回使い物にならないわ。

明久「真琴がダウンしてる！！皆！フォローするよ！！」

明久の優しさに本当に涙が出た。

第七十五話　坊主と恐怖と敵討ち（前書き）

ＬＡＮ武さん、月さん、則次　火焔さん感想ありがとうございました！

サブタイトル考えるのが大変になってきた今日この頃です。
いやー、本当に大変です。
あ。あと今回とあるネタがかなりてんこ盛りです。

第七十五話　坊主と恐怖と敵討ち

♪吉井明久と峰嶋真琴の実際にあった怖い話紹介♪

明「という訳でここでは僕、吉井明久と」

真「このオレ、峰嶋真琴が」

明「みんなから寄せられた『本当にあった怖い話』を紹介していきます」

真「うさんくせえ企画だな。バカテストのほうがまだ有意義な気さえしてきたぞ」

明「ダメだよ真琴。そういうことは思っても本編でしか言わない約束だから。それにこれ突発企画だし、意見が寄せられてるだけでもマシでしょ」

真「お前も大概酷いな。じゃとりあえず最初のメールの紹介ヨロ」

明「了解。最初はえっと、H・N（ハンドルネーム）『オレはシブヤ最強のＡ－Ｂｏｙ』さんからのメールです」

真「場所を秋葉に変えるかＢ－Ｂｏｙを名乗るかしたらどうなんだ」

明「ねえ真琴。メールの文章がなんだかヒップホップ調なんだけど、やっぱりそれっぽく読んだほうがいいのかな？」

真「ヒップホップ？メールでヒップホップを伝えようとするその心

意気に感心だが、できるならそうしてやってくれ」

明「わかった。それじゃいくよ――――――『Ｙｅａｈ！オレはシブヤ最強のＡ－Ｂｏｙ！常に進むぜ栄光に！あまり行かないぜ予備校に！』」

真「栄光に向かって進むのなら予備校に行け。でないと就職のときに困るぞ」

明「『オレのｔｈｉｓ聞け！そして振り向け！』」

真「そらみろ言わんこっちゃない。ｔｈｉｓとｄｉｓを間違えてるじゃないか」

明「『誰の言うことも聞きゃしねぇ！泣いた女は数知れねぇ！』」

真「泣いた女はお前の母親だろうし親の言うことは聞くものだぞ？ウチの親父はちょっと殊勝だから別だけどな」

明「『オレのラップ、音高く響かせ！近所のジャップ、恐怖で叫ばせ！』」

真「ん……？ラップ……？ああ、そういうことか……。おい明久、そのメールはもう読まなくていい」

明「『恐れるヤツぁマジ――――』――――え？もういいの？まだ怖い話全然でてきてないけど」

真「ああ。その代わり、ソイツにラップ音とラップの違いを説明するメールを返信してやってくれ」

明「へ？」

真「……頼む。これ以上説明させないでくれ」

明「……ああ、そういうこと」

真「……」

明「……」

真「なんか……読まなきゃよかったな……。このメール……」

明「僕もなんだか自分が悪いわけじゃないのに申し訳なくなってくるよ……」

明久ＳＩＤＥ

Ｄクラス攻略の突入部隊第二陣は四組八名。
そのうちＦクラスのペアは一組だけで、あとはそれぞれＡ、Ｂ、Ｃクラスのペアになっている。

真琴「……（ガタガタガタガタ）」
美波「大丈夫？ほら、ヘビなんかいないわよ」
真琴「……ほんと？（ガタガタガタガタ）」
美波「ホントよ（か、可愛い！！）」

ちなみに真琴は大蛇がモニターに映った瞬間に泡吹いて倒れました。
Ｄクラス攻略には真琴は参戦できないって考えたほうがいいかもね。

近藤『おい。坂本や戻ってきたヤツの話では、どうにもここはよく分からんものを当ててくるらしいぞ』
原田『そうなのか。それだとさっきのＢクラスよりもやりづらくなるな』
近藤『ああ。そうだな』

突入部隊唯一のＦクラスペアがなにやら会話している。
真琴が出撃できないのだから慎重になって欲しいものだけど――

近藤『そこで、俺はちょっとした対策を練ってきた』
原田『対策？何かいい方法があるのか？』
近藤『ああ。取って置きの方法だ。……いいか。触れてくるものが怖いのは、それが何か分からないからだ。だからそれを《何か分からないもの》から《声をかけたいんだけど恥ずかしくてその辺の物を使ってしまう美少女》に脳内変換するんだ』
原田『なん……だと……！？　す、凄いぜ近藤……！今俺にはお前が天才に見える……！』
近藤『へっ、よせやい』

このざまである。

僕「ねえ雄二。この二人、カメラ越しに音声がこっちに届いてるって分かってるのかな？」
雄二「わかんねえ。何せ恐ろしい頭脳の持ち主だからな」
僕「確かに恐ろしいね」

またFクラスの評価はがた落ちだろう。
Fクラスがクズだのゴミ溜めだの言われる理由はああいう連中が大多数を占めてるからだと思う。
そんなとき、画面を何かが横切った。
あれは……こんにゃくか！
謎の物体（こんにゃく）がピタッと音を立てて二人に接触する。

バカ×2『『ふぉぉぉーーーーーーー！！！！たまんねぇぇーーーーーーー！！！！』』

康太「……失格」

そしてこのざまである。
本当に恐ろしい頭脳の持ち主共だ。

雄二「真琴……は無理そうだな。明久。あとでアイツら処分しておいてくれ」
僕「了解」

最近よく思うんだけどＦクラスって腹の中に抱えてる爆弾多すぎる気がする。
そしてその爆発物処理は大抵僕と真琴で行われてる。

瑞希「こ、このクラスは見てるだけならそんなに怖くないので助かります……」

呆れる僕の隣では瑞希が小動物のように震えながら呟いていた。
うん。とっても可愛ゲフンゲフン保護欲を掻き立てる姿だ。

真琴「うーんうーん」
美波「ヘビに関するデータの残り件数２３８９１、残り十秒、楽勝だってのよ……　！？」
康太「……（チャキ）」↑無言で銃を構える
僕「はいそこ！とあるのＶＴＲ再現やってない！！」

なんだ。真琴元気じゃないか。

真琴「へび……ヘビ怖いヘビ来ないでヘビに食われる」

訂正、真琴が元気なんじゃなくて、動きが打ち止めさんに似てる真琴で美波とムッツリーニが遊んでただけだ。

A男子『お、なんか雰囲気が変わったな』
A女子『ホ、ホントね……』

どうやらかなり開けた場所に出たらしい。
これだけ広いと何か仕掛けがあってもおかしくないし、二人も警戒してるみたいだ。

雄二「ここが正念場だな。なにか大きな仕掛けがある気がする」
真琴「ゆ、雄二もそう思うか？」
僕「あれ？真琴もう大丈夫なの？」
真琴「なんとかな。美波に打ち止め役やらされて『オレは男だ』パワーで蘇った」
僕「それは……頑張って……」
真琴「ありがとう。本当にありがとう……！」
瑞希「あの、『らすとおーだー』って何ですか？」

肩を抱き合って泣く男二人に瑞希が疑問符を浮かべて問いかける。
もしかして瑞希はとある読んだことないのかな？

康太「……人の気配」

画面の中央にはうっすらと人影が写っていた。
あれが3年側の仕掛けなんだろうか。
もしかしたらあれは囮で、本命の仕掛けは背後に。なんてギミックかもしれない。

A男子『とっ、とにかく突っ立ってても仕方ない。先に進もう』
A女子『う、うん』

二人が空間の中央辺りまで来ると、バン！とスポットライトが入り、

それまで人影だけで何か良く分からなかったものが見えた。
人影だったのは常夏コンビの片割れの坊主の……夏川？先輩で、夏川？先輩は結構綺麗な姿勢で立っていた。

全身フリフリのゴスロリファッションで。

第2学年ほぼ全員『『ぎゃああーーーーーーっっっっ！！！！！』』

画面の内外関係なしに聞こえる悲鳴の数々。ちなみに少し遅れて校舎のほうからも悲鳴が聞こえてきたくらいだ。

当然僕を含めたFクラスメンバーや霧島さんたちAクラスも只ではすまない。

雄二「坊主野郎めっ！やってくれやがったな！？」
僕「汚いっ！？やり方も汚ければ絵面も汚いよ！！」
瑞希「きゃあああーっ！？お化け！いや、お化けじゃないですけどお化けより怖いです！」
美波「助けてえ！！ウチをこの変態ゴスロリ坊主地獄から助けてぇ！！」
翔子「……この世のものとは思えない」
秀吉「アレは流石にわしも耐えられん……！」
真琴「だっ、だれか、バケツを……をぇ」

ヤバイ！？回復の兆しが見えていた真琴が再び倒れた！？ていうか痙攣してんじゃん！これ本格的にやばいって！！

僕「真琴！！」
真琴「明久……オレがくたばったら……美波を……頼…む………（ガクっ）」
僕「真琴ォォォーーーーーーー！！！！」

ちくしょう！ゲス野郎め！真琴の仇は絶対討ってやる！！

突入隊Ａ『なんだ？今こっちから悲鳴が聞こえなかったか？』
突入隊Ｂ『ああ。確かにこっちから悲鳴が聞こえ――ぎゃあああああ！！』

しまった！？悲鳴が悲鳴を呼び起こしているだと！？
このままじゃ今突入してる人たちは全滅してしまう！！

突入隊Ａ『ぎゃあああ！！誰か、誰か助けてぇ！！』
突入隊Ｂ『嫌だ！嫌だ嫌だ嫌だ！頼むからここから出してくれ！』
突入隊Ｃ『助けてくれ！それが出来ないならせめて殺してくれ！』
突入隊Ｄ『●▼□■＄ゞж→→→▲＼（・ω・）／ヴォヴァァァァ！！』

康太「……突入部隊……全滅……！」
僕「くっそぉ！みんなぁ！！」

注ぎ込んでいた戦力は全て削られ、突入部隊は全滅。
画面越しでこのダメージなのだ。直接目視してしまった彼らのダメージは計り知れない。

岡崎『坂本ぉ！仇を……、アイツらの仇を討ってくれぇ……！』
横溝『このままじゃ散って行ったアイツらにあわせる顔がねぇんだよぉ……！！』

Ｆクラスの皆が涙ながらに訴える。
僕だって真琴の仇を討ちたい。このままじゃ誰も浮かばれない……！（あんな格好の坊主先輩も含めて）

雄二「分かっている！向こうが手段を選らばねぇんだったらこっちもそうするまでだ！突入準備をしてる奴等を全員さげろ！ムッツリーニ＆工藤ペアを投下するぞ！」

二年全員『『『『『『『うおおおぉぉーーーーーーー！！！！！！』』』』』』』

二人の名前を聞いて学年で一斉に雄たけび。
ムッツリーニと工藤さんならきっと何とかして仇を討ってくれる！！

『『『ムッツリーニ！ムッツリーニ！』』』
『『工藤！工藤！』』

どこからともなく始まった『ムッツリーニ＆工藤』コール。
けど当事者の工藤さんは特に緊張した様子もなく、

愛子「宜しくね。康太君」
康太「……こっちこそ」

ムッツリーニにも緊張の気配は見られない。
やっぱこの二人は格が違う。

雄二「頼むぞ二人とも。必ずあの坊主を突破して、Ｄクラスをクリアしてきてくれ」

教室の広さから考えても、坊主先輩のあとにまだ仕掛けがあるとは考えにくい。
Ｄクラスのチェックポイントは科目が保健体育になってるし、ムッツリーニと工藤さんなら簡単に突破してしまうだろう。

愛子「う～ん。約束は出来ないけど、一応頑張るよ。坂本君」

やっぱりいつもどおりのしゃべり方の工藤さん。

雄二「ああ。宜しく頼む。ムッツリーニも問題ないな？」

康太「……何の問題もない」

静かに、小さくいつもどおりに頷くムッツリーニ。

康太「……あの坊主に、真の恐怖を教えてやる」

第七十五話　坊主と恐怖と敵討ち（後書き）

次回は今日中に更新できたらいいなと思います。

第七十六話　反撃と出番と保健体育（前書き）

ノッポガキさん、月さん、ＬＡＮ武さん感想ありがとうございました！

第七十六話　反撃と出番と保健体育

♪吉井明久と峰嶋真琴の実際にあった怖い話紹介♪

明「それじゃ次のメール。H・N（ハンドルネーム）、『悩める弟』さんからです」

真「やれやれ、前回は下らないメールだったからな。今回は普通に怖いといいんだが……」

明「『初めましてお二人とも。突然ですが、僕の怖い実体験をお話します』」

真「お、結構普通の出だしだな。初めまして」

明「『実は僕には兄がいます』」

真「ふむふむ、兄ね……」

明「『真面目で勉強の出来る自慢の兄です』」

真「そりゃあ素晴らしい事だな。いい兄さんじゃないか」

明「『ところがその兄が、学校の合宿から帰って以来、急に人が変わってしまいました』」

真「変わった？憑き物とか何かか？」

明「『何故か急に晴れ晴れとした顔で、“学校一のバカと称される男友達”について熱く語ってくるのです』

真「……は？」

明「『あまりに熱心に語るので、怖くなってこっそり部屋をチェックしてみたのですが』」

真「お、おお……」

明「『同い年くらいのバカ面の男の写真が机の引き出しに入っていました』」

真「……」

明「『それ以来、僕は怖くて兄の顔をまっすぐ見られません』」

真「……」

明「『きっと兄は、合宿で何か恐ろしい世界へ足を踏み入れてしまったのだと思います。お二人とも気をつけてください』」

真「……」

明「以上、H．N．『久保良光』さん――じゃなくて、『悩める弟』さんからのメールでした」

真「すまねぇ……。久保の弟よ……」

明「結局これどういうことなのかな？」

真「お前は知らなくていいんだ……」

明「？？？」

明久ＳＩＤＥ

僕「皆！もうすぐあの衝撃映像が来るよ！女子は目を閉じるんだ！」

ムッツリーニと工藤さんが例の衝撃迸る地獄の門へとたどり着いた。

あのゴスロリ坊主がスポットライトで照らされるのは時間の問題だ。

瑞希「つ、土屋君がダメだったら、こっちも対抗して明久君と真琴君がフリフリの可愛い服を着ていくしかありませんね……」

美波「そ、そうよね……。アキと真琴なら全然問題ないものね……」

真琴「……」

僕「二人とも。恐怖で頭がおかしくなっちゃってるからそんなことを考えてるだけだよね？」

瑞希＆美波「……」

黙りこくっているのはあの坊主先輩の恐怖から逃れるために目と耳を塞いでいるからだろう。そうに違いない。

愛子『康太君。さっきの面白い人がいるのってこの辺りだよね？』

康太『……ああ。さっきのよりも面白い物を見せてやるから楽しみにしていろ』

愛子『本当？うれしいな♪』

こっちのカオスとは裏腹にムッツリーニと工藤さんは楽しそうにしている。

なんだか逆な気がするんだよなぁ……。

ムッツリーニは何か持ってるけど、あれは対坊主用兵器だろうか？

僕「やっぱり真っ暗だね」

雄二「そうだな。いきなり照らしたほうが衝撃も大きいって事だろ」

カメラが闇の中に人影を捕らえた。

雄二「来るぞ……っ！」

僕「うん……！」

真琴「……」

くるぞ……！くるぞ……っ！

バンッ！（スポットライトのスイッチが入る音）

ドンッ！（ムッツリーニが大きな鏡を置く音）

ケポケポケポッ（坊主先輩が嘔吐する音）

夏川『て、てめぇ！なんて事しやがる！？思わず吐いちまったじゃねぇか！』

康太『……吐いた事は恥じゃない。それは人として当然のこと』

夏川『くそっ……。想像を絶する気持ち悪さに自分で吐いちまったぜ……。どうりで着付けをした連中が頑なに鏡を見せてくれなかったわけだ……！』

愛子『康太君。この先輩ちょっと面白いかもね。来世だったら知り合いくらいにはなってもいいかも』

康太『……俺は来世でも御免だ』

夏川『ちょっとまてやお前！俺の現世を全面否定してねぇか！？ていうか来世でも知り合い止まりかよ！？』

愛子『あ。ごめんなさい。悪気はあったんですゲロ野郎』

夏川『純粋な悪意しか見られねぇよ……って悪意あったのかよ！？思わず原作通りのツッコミしちまったじゃねえか！！』

康太『……メタ発言は自重すべき』

夏川『前回散々とあるネタやってたテメエには言われたくないわ！

！ってお前ナニ人のこんな格好取っ手やがんだ！？』
康太『……海外のホンモノサイトにＵＰする』
夏川『じょ、冗談じゃねえ！！覚えてろよぉっ！！』

坊主先輩はその瞳にうっすらと心の汗を流しながらダッシュで逃げて行った。
気持ち悪いのでやめて欲しい。
それにしても……

僕「工藤さんって結構厳しいこと言うんだね。意外だな」
翔子「……ううん。普段の愛子はあんなこと言わない」
雄二「となると、誰かの入れ知恵か」
秀吉「そういえばさっき、工藤が清水に何か聞いておったな」

清水って言うとＤクラスの清水美春さんか。
確かに清水さんならあの罵倒も納得だ。

美波『ナイスよ美春！今度真琴を一日貸し出すわ！』
真琴『よくやった美春！今度……おい美波！今なんつった！？』
美春『お兄さま！さあお姉さまの許可も頂いたことですし、手早くじっくり美春を抱いてください！』
真琴『おわぁ！？来るな！！ていうか手早くじっくりの意味がよくわかんねぇんだよ！！』
美春『お姉さま！ちょっとそっちを持ってください！』
美波『分かったわ美春！えい！』
真琴『ぎゃあああ！！やめろおお！！関節が倍になるぅぅ！！』

向こうでは真琴が美波と清水さんに囲まれていた。
関節が倍ってどうやったらなるんだろうね？

雄二「おい島田に清水。真琴にはまだまだ働いてもらわなきゃならないんだから殺すなよ？」
美波「分かってるわよ。支障の出ない範囲でやるわ」
清水「豚野郎なんかに言われなくてもわかってますわ」
雄二「じゃあ頼むぞ」
真琴「雄二テメェ！！あとでぶち殺ぎゃあああ！！関節が増えたああ！？明久助けて！！」

うん。来ると思ってたよ。
助けたいのはやまやまなんだけど……

美波「アキ……？邪魔したらどうなるかワカッテルワヨネ……？」
美春「コロシマス……。ミハルトオニイサマノジャマヲスルモノハスベテコロシマス……」

こんなバーサーカーを2体も相手に僕一人では太刀打ちできない。
この瞬間、

瑞希の安全＞＞＞僕の安全＞バーサーカー美波＞＞＞＞＞＞真琴＞＞＞＞（中略）＞＞＞＞雄二

の方程式が僕の中で確立した。

僕「さあ！頑張れムッツリーニに工藤さん！」
真琴「明久ぁ！？」
美波&美春「「さあ真琴（お兄さま）！まずはシャツからよ（ですわ）！！」」
真琴「のわあああ！？明久テメエもあとで雄二と一緒にぶち殺す！！まずは美春クラッシャー！！」
美春「ああ！お兄さま！？」

真琴「まずは雄二だぁぁ！！」
雄二「おわ！？真琴！？」

さて、真琴が雄二を追いかけてる間に僕は墓石と遺書に使う紙を選んでこよう。

真琴ＳＩＤＥ

オレ「次やったらマジで殺す」
明久&雄二「「申し訳ありませんでした」」

まったく、瑞希と霧島に免じて今回はすねにガムテープ張って剥がすの刑だけにしておいたが、次やったらマジにぶち殺したいわ。

雄二「おい。ムッツリーニ達がチェックポイントに着いたみたいだぞ」
明久「あれ？ここのチェックポイントは坊主先輩じゃないんだね。てっきり出てくるかと思ったのに」
オレ「別にそういう決まりはないからな。それにこの短時間であのメイクを落とせるとも思えない。出てくる可能性は最初から低かっただろ」
明久「どこかのチェックポイントで出てくるよね？」
雄二「当然だろう。アイツらはどうにも真琴を目の敵にしていたからな」
オレ「どうせ召喚大会で瞬殺されたのが悔しかったんだろ。まったく、器の小さい奴等だ」

昨日見た限りでは二人ともＡクラスではあるものの、そこまで飛びぬけて優秀だというわけではないようだ。
最初からあの二人はＡクラスのチェックポイントにいるのを想定してやってんだから当然だけど。

秀吉「まあ後のことは後のことじゃ。今は目の前の敵に集中するのじゃ」
オレ「秀吉の言うとおりだな。後のことにとらわれて今をおろそかにしたんじゃ元も子もない」

さて、ムッツリーニ達は大丈夫かなっと……
画面に視線を戻すと、丁度召喚するところだったようだ。

４人『『『『試獣召喚（サモン）』』』』

ムッツリーニは前に見たとおりの吸血鬼。工藤はのっぺらぼうだ。
見た目は牛頭馬頭コンビや黄龍に比べればマシだ。かなりマシだ。

明久「工藤さんの召喚獣がのっぺらぼうなのは何でだろうね？」
雄二「顔がない、つまり本性を見せないってところじゃないか？」

素顔を見せない……か……
なるほど、工藤も人には知られたくない過去があるのか。
そういや工藤って確か一年の終わりに転校してきたって情報だったな。
親が離婚とかいじめとか、なにかとっても重大なことがあるんじゃないだろうか？
普段のセクハラ発言も、人に知られたくない自分を隠すための物だったのかもしれない。
今も家庭で何かあって、辛い思いをしていたり――

秀吉「そういえば、前に演劇の候補として探していた話にのっぺらぼうの尻目というものがあったのじゃが」
明久「尻目？」
秀吉「うむ。なんでもそののっぺらぼうは、人に会うと途端に全裸になったそうじゃ」

オレの心配を返せやコラ。

オレ「それはそれとして、向こうもまたメジャーな妖怪だな」
雄二「ミイラ男にフランケンか。確かに分かりやすいな」
あの二人の本質は怪我しやすいとか根は優しいとかそんな感じだろう。
秀吉「揃いも揃って分かりやすい連中じゃの」
オレ「秀吉。それは本人達の前では絶対言うなよ」
多分かなりのショックを受けることだろう。

３－Ａ　市原両次郎　保健体育　３７３点
　　名波健一　　保健体育　３６９点

流石Ａクラスだ。
本来受験科目でないはずの保健体育までＡクラストップレベルか。
受験科目じゃないんだから、そんなに高い点数を取るまで勉強する必要もないだろうに。
愛子『康太君。先輩達の召喚獣、なんだか強そうだね。あっちのほうが一年長く操作してるし、結構てこずるかも』
康太『……そんなこともない』
ムッツリーニの言うとおりだ。
工藤も分かってるはず。
ムッツリーニの保健体育の点数は……

２－Ａ　工藤愛子　保健体育　８８３点
　　土屋康太　保健体育　１７８２点
ＶＳ
３－Ａ　市原両次郎　保健体育　３７３点
　　名波健一　保健体育　３６９点

オレよりも上を行ってしまっているのだ。

先輩方『『！！？』』

先輩達が目視するまもなく、一瞬で勝負がついた。
当然、ムッツリーニ＆工藤ペアの圧勝である。

愛子『康太君。また点数上がったね？』
康太『……今回は出来が悪かった。調子がいいと１９００点くらいはいく』

明久「真琴。真琴の保健体育って絶好調で何点？」
オレ「調子がよくても１７００行くか行かないかくらいだ」

もうムッツリーニ保健体育は強すぎるよ。こっちも制限かけた方がいいんじゃないか？

雄二「おい真琴。今何が起こったか見えたか？」
オレ「はっきりと見えたわけじゃないが……ヴァンパイアのほうは一瞬で腕が８本になってミイラ男を切り裂いた後、一瞬で元に戻った」

雄二「真琴の動体視力でもはっきり見えないなんてどんだけ速いんだ……。で、のっぺらぼうは？」
オレ「一瞬で全裸になってフランケンをぼこぼこにした後またすぐ服を着た」

ＨＡＨＡＨＡ。とりあえず美波に土下座しておこう。
ちなみにその間にムッツリーニは出血、止血、輸血の３段階を済ませていたぞ。

翔子「……雄二、浮気の現行犯」
雄二「なっ！？違う！工藤の召喚獣が勝手に脱いだんだ！！俺は見たくてみたわけじゃなぎゃあああああああああ！！」
翔子「……浮気は許さない」

雄二は別にどうなってもいい。
さて、問題は……

瑞希「明久君。いけないものをみちゃダメデスヨ？」
明久「待って瑞希！僕は別にやましい気持ちで見てたわけじゃないんだよ！？（ＳＯＳ！ＳＯＳ！）」

明久からＳＯＳ信号が送られてくる。
さっきの仕返しにシカトしてもいいんだけど、ここはちょっと面白くしてやるか。

オレ「（●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●）」
明久「ふむふむ……ってそんな台詞言えるかぁぁ！！第一、そんなこといったら僕はただの変態じゃないかァァ！！」
オレ「何を今更」

まったく、度胸のないやつだ。オレが背中を押してやろう。

オレ「おい瑞希。明久は瑞希が裸を見せてくれないから欲求不満になって工藤を見てしまったらしいぞ？」

瑞希「ふぇ！？あ、明久君！？」

明久「嘘だからね！？僕はそんなこと一言も思ってないよ！？」

オレ「なるほど、瑞希の裸は見たくない、と……」

明久「そこは本当！って違う！これじゃ結局ただの変態だ！」

明久の社会的地位が音速で崩れていく。

ざまあみやがれ（笑）。

秀吉「真琴。ムッツリーニたちが次のCクラスに入っておるのじゃが」

オレ「ん？問題ないよ？次のフィールドは現国だし、たぶん突破できないだろうけど」

実はムッツリーニ、保健体育以外は未だに2桁なのである。

ホント、保健体育が出来るなら他の科目も出来てもいいと思うんだけどな……

みどり「おっまたせ～♪」

オレ「お、待ってたぞ」

秀吉「みどりよ。今までどこに行っておったのじゃ？」

みどり「琴君に頼まれてちょっと調べ物。ほらこれだよ」

渡された資料は３－Ａ所属、『小暮葵』の物だ。

美波「小暮葵……？誰よこれ」

オレ「三年の作戦参謀的役割を担ってるヤツだ。ルール決めるときに徹底的にやってきて、隙なんか微塵もないほどの大物だったんでな。気になって調べてみた」

特にこれといって気になる記述はなさそうだな……。

３－Ａに所属する女子生徒。

学年次席で成績優秀な上に大和撫子のごとき和風美人。最も近いタイプは霧島か。

かなりの人気を誇る、か……。

みどり「それじゃああたしはこれでお役目終了だね」

オレ「ああ。お疲れ」

特にこれといってめぼしい情報は得られなかったがまあいい。

ん？そういや部活の欄まだ見てないな……

秀吉「む？真琴よ。もしやあれは小暮葵ではないかの？」

オレ「何？」

最高学年次席がＣクラスに？絶対Ａクラスにいるとばかり……

康太『……！？（くわっ）』

愛子『どうしたの康太君……ああ、なるほどね』

確かに小暮葵だが……制服を着ていない。

というより……あれは着物だ。

小暮葵は着物を着ていた。

色っぽく崩した着物を。

男子ほぼ全員『『『『『『眼福じゃァァァーーーーー！！！！！！！』』』』』』

体育館に歓喜の声が響く。
これはマズイ。ムッツリーニのことだから、鼻血の噴出音とかでもアウトに鳴りかねない！

翔子「……雄二」
雄二「見ていない！俺は何も見ていないぞ！」
翔子「……私だって着物を着ればあんなふうになる」

自分と同じタイプの人間に闘志を燃やすのは結構だが後にして欲しい。

康太『……この…程度で……ッ……俺が……！』
愛子『康太君。結構足に来てるね？』
康太『……！！（ブンブンブン）』

秀吉「ムッツリーニが耐えておる！この勝負、わし等の勝ちじゃ！！」
オレ「……いや、マズイ！」
秀吉「！？」

葵『ようこそいらっしゃいました。私、三年Ａ組所属、小暮葵と申します』
愛子『小暮先輩ですか。ボクは２－Ａの工藤愛子です。その着物、似合ってますね』
葵『ありがとうございます。こう見えても私、茶道部に所属しておりますの』
愛子『あ、そっか。茶道って着物でやるもんね。その服装はユニフォームみたいなもんだよね。着方はちょっとエッチだけど』
葵『はい。ユニフォームを着ているのです』
愛子『そうですか。それじゃボク達急ぎますので――』
葵『ああ、待ってください』
愛子『？　まだ何か？』

秀吉「真琴よ！一体何がまずいのじゃ！？」
美波「早く教えてよ！」
真琴「いいかお前ら……。小暮葵は……新体操部にも所属している！！」

葵『実は私――新体操部にも所属しておりますの』

オレとほぼ同時に小暮先輩が言い放ち、はだけていた着物を完全に脱ぎ捨てた。
その下から現れたのは――――――レオタードを纏った小暮先輩だった。

『土屋康太！音声レベル、及びモニター画像全て赤！失格です！』

オレ「ムッツリーニィィィ！！」

畜生ッ！やりやがった！
まさか足に来て限界のムッツリーニに止めを刺してくるなんて！
どこまで卑怯なんだ3年はッ！！

翔子「……雄二、悪いものを見るいけない目はこれ？」
雄二「ぐわあああ！！『いけない目はこれ？』じゃねえ！耳や口をひねり上げる調子で目を突くな！御仕置きのレベルが全然可愛くねえぞ！？」

クソ！！策を練ろうにも雄二は（目を）潰されてしまった！
どうする！？

瑞希「明久君がどうしても脱いで欲しいって言うなら……私、脱ぎます！」
明久「いいから！こんな人のたくさんいるところでやらなくてもいいから！！」

どうでもいいけど瑞希ってああいうところが影響してサキュバスになったんじゃないか？
本当にどうでもいいんだけど。

バカ『大変だ！土屋が危険だ！助けに行ってくる！』
バカ『待て！一人じゃ危険だ！俺も行く！』
バカ『待て！俺だって土屋が心配だ！』
おい！？コイツＡクラスだぞ！？『俺も行くぜ！仲間を見捨てるわけには行かないからな！！』

バカ共『『『『『うおおおおぉぉぉーーーーーー！！新体操ぉぉぉーーーー！！！』』』』』

秀吉「突入とともに全員失格になったようじゃな……」
オレ「おいおい……。今何人残ってる？」
みどり「今残ってるのは……アッキーたちも入れてざっと３０人くらいかな？」
美波「ハァ……どうして覗き騒ぎが起きたのかも分かる気がするわ……」

前半に女子ペアを投入しすぎたのと、うちの学年は元々男子のほうが多いってことが災いしてほとんど戦力が無くなっちまった。
ていうかＡからＦまで全員突っ走ってったのか……

オレ「しょうがない……みどり。戻ってきたばかりですまないが秀吉と組んで行ってくれ」
みどり「ＯＫ。それじゃさっさと行こう秀君！」
秀吉「真琴よ、よもやお主もわしを女と見ておるのではないじゃろうな？」
オレ「……」
秀吉「何故そこで黙るのじゃ！？お主もか！？お主もそういう目でわしを見ておるのか！？」

あはは。ノーコメント。

とにかくいってらっしゃい。
さて、オレは……

オレ「バカ共の制裁の準備をしてくるかな……」

第七十六話　反撃と出番と保健体育（後書き）

葵を学年次席と言うことにしてみました。
結構頭回るし、良いですよね……？

第七十七話　秀吉と恐怖体験とリアル胆試し（前書き）

ＬＡＮ武さん、月さん感想ありがとうございました！

今回若干のグロ描写アリです。
苦手な方は注意してください。

第七十七話　秀吉と恐怖体験とリアル胆試し

バカテスト　国語

問　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「定吉はどこに言ったんだ」
次平がたずねると太助は肩を竦めて答えた。
「お菊のところだよ。十年来の恋心を得意の和歌にして伝えて来るんだとさ」
それを聞いて次平が眉を顰める。
「恋の和歌と来たか。それなら［結果］は知れたようなものだな」
「違いない。あいつの歌は下手の（　）だからな」

問？　（　）に正しい語句を入れて慣用句を完成させ、その意味を答えなさい。

問？　［　］内の“結果”とはどのような結果なのか。次平と太助が想像しているであろう結果を答えなさい。

姫路瑞希の答え

『問？　下手の（横好き）
　意味：下手であるにも関わらず、その物事にやたらと熱中していること
問？　下手な和歌で失敗してしまって、定吉の想いは成就しないという結果　』

教師のコメント

正解です。この文脈で他に当てはまる“下手の――――――”で始まる慣用句としては、“下手の真似好き”というものもあります。どちらの慣用句であろうとも、拙い技量を示すため、次平と太助の二人が予測する結果は失敗であるということがわかります。

吉井明久の答え

『問？　下手の（一念）
　意味：へたくそでも一生懸命頑張ること
問？　へたくそでも、自分のために一生懸命歌う定吉の姿に、お菊はきっと心を動かされるに違いないという予想』

教師のコメント

決して正解とは言えませんが、先生はこの回答を好ましく思います。

峰嶋真琴の答え

『問？　下手の（遠回り）
　意味：へたくそはへたくそなりに頑張り、違う形で偉大な結果を残すこと
問？　お菊は定吉のへたくそな歌には何も感じないだろうが、自分をずっと想い続けてくれた定吉に惚れるであろうという予想（明久と瑞希もかなり前から両想いなのできっと定吉もうまくいくと思いました）』

教師のコメント

近くにお手本がいたわけですか。吉井君と同じくこの回答も正解とはいえませんが、先生はこの回答も好ましく思います。

明久ＳＩＤＥ

みどり『お化けかぁ。あたしこういうのあんまり得意じゃないかも』

秀吉『踏んでる。みどりよ、セットの唐笠お化けを踏んどるぞ』
みどり『あ、ヤバ。壊れてないかな』

なるほど、あの二人は確かに凄い。
二人とも悲鳴なんか上げないだろうし、見てて華もあるし、点数もかなり高い。
これならCクラスは余裕で突破できるんじゃないだろうか。

僕「秀吉とみどりなら余裕で突破できそうだね」
真琴「だな。アイツらなら色仕掛けにも引っかからないしお化けも聞かないし点数も高い。ほぼ確実にチェックポイントまで辿り着くだろ」

特に何事もなく例のちょっとエロい先輩のところにたどり着く二人。
葵『あら？あなた方は――――そうですか。女の子同士の組み合わせで来ましたか。それでしたら、私にはできることは何もありませんね。どうぞお通りください』
みどり『ホントですか？よかったね、秀君』
秀吉『むぅ……。すんなりと通れたのにこのいい知れぬ感情は何なのじゃ……』

僕「秀吉には悪いことしたね……」
真琴「そうだな……今度飯でも奢ってやるか……」
雄二「そんなことよりすんなりと行き過ぎじゃないか？」

あ。雄二生きてたんだ。

真琴「まぁそうだな。確かに違和感もなくはないけど……」
僕「けど？」

真琴「あの二人をチェックポイントで撃退する自信があるのか、はたまたまだ何か仕掛けがあるのか……」
雄二「おい、何かあったみたいだぞ」

雄二に言われて画面に視線を戻すと、エロい先輩がいた場所を通過したすぐ後に常夏コンビの片割れ、常村先輩（モヒカンのほうです）が立っていた。

常村『来たか木下。待っていたぞ』
秀吉『なんじゃ？わしに何か用かの。見ての通り、わし等は急いでおるのじゃが』
常村『大丈夫だ。時間はとらせねぇ』
みどり『ふーん。いいじゃん秀君。さっさと終わらせてよ』
秀吉『そうじゃな。何の用かは知らぬが手短に頼むぞい』
常村『ああ、分かっている。――――――いいか木下秀吉』

画面の中で、モヒカン野郎が真剣な面持ちで一歩前に出て、聞き間違えのない声で言った。

常村『俺は――――――――――――――お前のことが好きなんだ。付き合ってくれ、木下秀吉』

生まれて初めて秀吉の本気の悲鳴を聞いた気がした。

真琴ＳＩＤＥ

秀吉「す、すまぬ……明久に真琴に雄二よ……。このわしが……あれほどまでにみっともない悲鳴を……」
雄二「気に病むな秀吉。同性に――――――それもあんなむさ苦しいヤツに告白なんてされたら悲鳴を上げても仕方ない」
明久「そうだよ。秀吉は何も悪くないよ」

とりあえず胆試しは一時中断、急遽『みんなで秀吉を励まそうの会』が実施された。
やってくれるじゃないかモヒカンめ。まさかイベントを中断させるほどの一撃を仕掛けてくるなんて……って思ったんだけど、坊主といい小暮先輩といい、どうしてまともな胆試しじゃありえない仕掛けが多いんだろうな？

瑞希「秀吉君、あの悪魔のような先輩はきっと明久君と真琴君が倒してくれますから」
美波「そうよ。なにも気にすることはないわ。ほら、ちょっとみどり成分吸収してきなさい」
秀吉「う、うぅ……そうしてくるのじゃ……」

うん。いつのまにかオレと明久が倒すことになってるな。
いや、最初からその予定だったし別にいいんだけど、あんな告白するような奴とやるのってなんか士気がそがれるというか……

明久「あの先輩……仕掛けにしてはかなり凄まじかったよね……」
雄二「いや、自作のポエムまで用意してたんだ。あれが演技とは思えない」
オレ「『お前は俺の太陽だ』だっけか？あれ言うのが別の奴ならすっごいいいと思うんだけどな……」

あ、秀吉が震え始めた。これはちょっとやばいかも……精神科のいい医者探さなきゃ……

雄二「さて、じゃあ次頼むぞ真琴」
オレ「は？オレ？」
雄二「そうだ。現段階じゃあお前が一番チェックポイントの突破がしやすいんだよ」
オレ「やだよあんなのがいるところに行くの。行ったらもう戻れない世界に踏み込んでしまう気がするし」
雄二「いや、大丈夫だろ。秀吉があそこまで怯えるってことは演技じゃないだろうし、あれは仕掛けなんかじゃない正真正銘本気の告白だろ」
オレ「秀吉落ち着け。ほら、あったかいココアだぞ？これ飲んで静

かにしてような？」

“本気”という単語に反応して痙攣する秀吉。
これはかなりのトラウマになることだろう。
ちなみにみどりだが、鉄人が止めなければ間違いなくモヒカンを殺していただろう。
こっちだってリアル胆試しをやるつもりはないし、あんなのの死体なんて学校の評判を下げるだけだろう。それにクラスの仲間から犯罪者を出したくはない。

オレ「まあそういうなら行ってもいいけどな。行くぞ明久」
雄二「いや、今回真琴と組むのは明久じゃない」
明久「へ？じゃあ誰が？」
雄二「それは……」
美春「おっにいさまーーーー！！！」
オレ「嗚呼……暑いな……夏だな……」

聞こえない。オレには美春の声なんて聞こえない。

美春「美春はお兄さまと一緒にお化け屋敷に入れるのを、ずっと心待ちにしていました！」
オレ「雄二……あとで地獄を見せてやるからな……」
雄二「行って来い。地獄なんてもう見飽きたしな」

よしゃ。戻ってきたら霧島に売り渡そ。

美春「お兄さまと胆試し……お兄さまと胆試し……オニイサマトキモダメシ……」
オレ「こら美春。人外化するんじゃない。お化けが怖がって近寄ってこないぞ」

本当にオカルト召喚獣共が寄ってこないから不思議だ。
召喚者がびびってんのか？
っと、そろそろ小暮先輩のいるところだな。

葵「おや？あなたは……峰嶋真琴君でしたか？」
オレ「あ、覚えててくれたんすか？」
美春「フーッ、フーッ、フーッ」
葵「一応お聞きしますがそちらは第2学年の生徒でよろしいのですね」
オレ「生の怪奇現象だと思ってください」

あながち間違いではないだろう。

葵「一応レオタードになったほうがよろしいですか？」
オレ「いや、脱がれてもオレも困るんでいいです。オレは美波以外には興味ないんで」
葵「そうですか。どうやら強がりではなく本当に興味をもたれていないようですね。少し残念ですが仕方ないでしょう」
オレ「すいませんね。昔ッからこうなんで」

もとより興味のないものには徹底的に興味のない主義なんでな。
まあ小暮先輩もいつかいい人見つかるんじゃないか？

葵「いえ、気にすることはありません。どうぞお通りください」
オレ「どうも」

何事もなく無事に通過できたな。さて……

オレ「美春。何もなかったからそのフォークを小暮先輩に向けるのをやめるんだ」
美春「オニイサマヲユウワクスルメスブタハメッサツシナケレバナラナイノデスガ……。オニイサマガソウイウナラシカタアリマセン」
オレ「人外娘を扱うのも大変だな……」

あ、あともう一つ。

オレ「美波。関節技の準備をしてるんならやめておいてくれるとうれしい。オレは別にあの先輩のことはなんとも思ってないからな」

どこかから殺意を収める気配がしたのは気のせいだろう。

オレ「ん？」

小暮先輩のいたところを通ｋ……めんどいや。さっきモヒカンがいたところまでくると、今度はモヒカンの代わりに４人ほどの３年生が出てきた。

３年Ａ「悪いな。ここから先を通りたければ俺達に試召戦争を申し込んでくれ」

オレ「ああ、なるほど。常夏の命令か」

３年Ｂ「俺達だってこんなことしたくはないけどな」

ふむふむ。ここまで来るとクズにも磨きがかかってくるな。

まさかパワーゲームのゴリ押しなんて小暮先輩が考えるわけないし……常夏の独断か。

美春「ど、どういうことですか？お兄さま」

オレ「『？驚かす側の一般生徒は召喚獣のバトルは認めない。あくまでも驚かすだけとする。ただし、驚かされる側から勝負を申し込まれた場合、教師が許可すればバトルをとりおこなう事を許可する』って言うのがあっただろ。つまり大勢で道を塞いで、『通りたければ俺達を倒してからにしろ！！』みたいな格下の死亡フラグな台詞を吐かせる作戦だよ」

美春「それってルール違反にはならないんですか？」

オレ「ならないな。向こうはただ道を塞いでるだけでオレ達に直接暴力を振るってきてるわけじゃないし、行く手を阻むのなんか胆試しなんだから当たり前。あっちからバトルを挑んできてるわけでもないし……ここは素直に倒させてもらうか」

もうすぐチェックポイントのはずだから科目は現国。

ここであまり点数を消費するとこの先厳しくなるけど……まぁここ通れないんじゃ話にならないし、仕方ないと思って倒しちゃおう。

オレ「あ。美春は防御に徹してくれ。ここで戦死されるとここを切り抜けてもチェックポイントじゃ勝てない」

美春「了解ですわ」

Ａ４人「「「「試獣召喚（サモン）！」」」」

３－Ａ　好川良治　現代国語　２９４点
　　山田雄介　現代国語　３０５点
　　島岡光司　現代国語　２４４点
　　江島秀治　現代国語　３１２点

うん。流石Ａクラスだけあって立派な点数だ。

オレ＆美春「「試獣召喚（サモン）」」

２－Ｆ　峰嶋真琴　現代国語　５００点
２－Ｄ　清水美春　現代国語　１７９点

オレ「１７９か。かなり上がったな」

美春「美春だって勉強してますわ。少しでもお兄さまの力になれるように、昨日は徹夜でしたわ！」

その感情はうれしいがコイツは時々それが暴走するから恐ろしい。

２－Ｆ　峰嶋真琴　現代国語　５００点
２－Ｄ　清水美春　現代国語　１７９点

ＶＳ

３－Ａ　好川良治　現代国語　２９４点
　　山田雄介　現代国語　３０５点
　　島岡光司　現代国語　２４４点
　　江島秀治　現代国語　３１２点

うわ。かなり戦力差あるな。

オレ「……“落雷”４発」

仕方ないし、無駄に接近戦して点数削られるのも嫌なので落雷で一掃しようとする。

好川「うわっ！？」

まず１匹。

山田「ぐっ！」

２匹目。

島岡「ぎゃっ！」

３匹目。

さて、ラスト１匹だ。

江島「……」

さっさと当たってどいてくれ……って、は！？

オレ「……今避けた？」

江島「３回も見せられれば分かる」

オレ「マジですか……」

江島「落下地点が少し光る。それさえ分かれば避けるのは簡単だ」

うわ。弱点見破られてた。

そう。今先輩が言ったとおり、オレの落雷は完璧じゃない。

完璧どころか落下地点が光るために攻撃を予測しやすいという欠陥品なのである。

その分敵を一撃でしとめるほどの高い攻撃力もあるのだが……

オレ「どんな強い攻撃も、当たらなければ意味はないな……」

という訳で、作戦変更。ちょっと本気出す。

２－Ｆ　峰嶋真琴　現代国語　２２０点

２－Ｄ　清水美春　現代国語　１７９点

ＶＳ

３－Ａ　江島秀治　現代国語　３１２点

点数が減って２２０点になった。

落雷４発で２８０点消費だからぴったりか。

オレ「美春。悪いがあっち向いててくれないか？出来れば誰にも見られたくはない」

美春「……分かりました。お兄さまがそういうなら」

オレ「悪いな」

美春には悪いがこれも落雷と同じで見破られると相当弱体化するからできれば見られたくないんだよな。そういうわけでカメラもあさっての方向へ。

江崎「……？なにをするつもりだ」

オレ「いやぁ、すんませんね。こっちもそれなりに頑張らないといけないんで……死んでください」

※ここから先、グロ描写アリです

オレ「やっと着いたな」
美春「チェックポイント、ですわね」

さて、先輩４人を撃退した俺と美春なわけだが……これはゲーム終了のお知らせじゃね？

２－Ｆ　峰嶋真琴　現代国語　１２０点
２－Ｄ　清水美春　現代国語　１７９点

Ａ女子「来たわね」
Ａ女子「江島君たちは負けちゃったか。でも相当点数消費したでしょ？」
オレ「ほんとっすよ。おかげで一撃も食らってないのに３８０も減りました」

え？腕輪の使いすぎ？自業自得？そんな言葉キコエナイゼ？

Ａ女子「それじゃ美味しい所取りとさせてもらうわ。試獣召喚（サモン）」
Ａ女子「試獣召喚（サモン）」
オレ＆美春「「試獣召喚（サモン）」」

２－Ｆ　峰嶋真琴　現代国語　１２０点
２－Ｄ　清水美春　現代国語　１７９点

ＶＳ

３－Ａ　寿湊　現代国語　２８９点
　　中曽根みさお　現代国語　２７７点

３００点未満のコンビで助かった。これで今までみたいな４００オーバーなんて出てこられたらやってらんなかったな。

オレ「んじゃえーと、中曽根って人のほう頼むよ」
美春「本当にいいのですか？」
オレ「ああ。まだ一回使えるしな」
寿「行くわよッ！」
オレ「うお」

あっちの召喚獣は雪女か。
これは……

オレ「……“地点変更”」

一撃だな。

寿「え！？わ、私の召喚獣はどこへ！？」
オレ「ここだよ」

オレが指で上を指すと、さっきの雪女……の残骸が降ってきた。
その血で白い衣を真っ赤に染めて。

寿「きゃあああああ！？」
オレ「……リアル胆試しだ」

２－Ｆ　峰嶋真琴　現代国語　２０点

ＶＳ

３－Ａ　寿湊　　現代国語　ＤＥＡＤ

寿「……（カクッ）」
オレ「え？ちょ、大丈夫？」

肉片となって降り注ぐ雪女（本人と同じ顔）がよほど怖かったのだろうか。
うーん、普段のＦクラスで似たようなものを見慣れてるせいでよく分からん……

中曽根「え！？み、湊！？」
美春「隙アリですわ」
中曽根「え？きゃ、きゃあ！」

向こうは美春迷ひ神ＶＳ先輩ハーピーか。
迷い神が一方的な暴行を続けているように見えるのは気のせいだろう。

オレ「あ」
中曽根「え？」
美春「フィニッシュですわ」
中曽根「ああ！！そんな！？」

２－Ｆ　峰嶋真琴　　現代国語　２０点
２－Ｄ　清水美春　　現代国語　６９点

ＶＳ

３－Ａ　寿湊　　現代国語　ＤＥＡＤ
　　中曽根みさお　現代国語　ＤＥＡＤ

……ラストが騙まし討ちだったのはスルーの方向で。

中曽根「ううう……あの点数差で負けた……」
オレ「あの、すいませんね。これも勝負なんで」

あんな［グロ注意］を見せられた後で負けるなんてかなりきついわ。

中曽根「ううん、気にしないで。あ。チェックポイントは通過でいいわよ」
オレ「ども。んじゃ行くぞ美春」
美春「はい。お兄さま♪」

最初はギリギリいけるか自信なかったけど、美春もよくやってくれたし、結果は上々だったな。
しかし……

オレ「口の中が血の味でいっぱいだ……」

あとで口の中洗ってこよ……

第七十七話　秀吉と恐怖体験とリアル胆試し（後書き）

真琴が何をしたかは最後の台詞で想像してください。
次回、最後のＡクラス攻略開始！

第七十八話　常夏の実力と瑞希のきもち（前書き）

ＬＡＮ武さん、月さん、Ｅｄｕａｌｄさん感想ありがとうございました！
いつもいつもお世話になってます＾＾

さて、ここから先は言い訳タイムです。
そんな弱者の台詞は聞きたくないわ馬鹿者！！って方は読み飛ばしていただいて結構ですので。
またやらかしました。原稿デストロイ。
まったく、毎度のことながらなぜメモ帳でバックアップをとっとかなかったのか……
という訳で一から書き直しとなり、昨日は更新が間に合いませんでした。
これからは原稿デストロイなどが起こらぬよう、しっかりとバックアップを取っておくのでどうかお許しを。

そんなわけで、ちょっと遅れましたが第七十八話です。
本編どうぞ！

第七十八話　常夏の実力と瑞希のきもち

♪吉井明久と峰嶋真琴の実際にあった怖い話紹介♪

明「それじゃ最後のメール、H.N（ハンドルネーム）『お兄さま大好き』さんから」

真「とあるツインドリルを髣髴とさせる点についてはスルーの方向で頼む」

明「それじゃ読むね。『お二人ともこんにちは。いきなりですが、私の家族は私と両親の3人家族です』」

真「まあ一般的な家庭だな」

明「『母は普通の常識人で、進路などの相談にも応じてくれます』」

真「いい母さんじゃないか。ウチなんて口ごたえすれば金だらいだぞ？」

明「『ところが、父親は“親子のスキンシップ”と称して娘である私に一緒にお風呂に入ることを強要してくる変態です』」

真「……ヱ？」

明「『私の家は喫茶店を経営しているのですが、父は仕事もお客様もほったらかして私に「ディア・マイ・ドゥーター！！」と叫んで抱きつこうとしてきます』」

真「……」

明「『嫌がっても、「照れているだけ」などと図々しい事この上ない台詞を抜かして来ます』」

真「……」

明「『この前は、私が尊敬しているバイトのお兄さま（同い年）を「娘を誑かす輩は貴様かぁー！！」などと暴言を吐きながら殺そうとしていました』」

真「……そりゃそいつも災難だったな」

明「『お二人の周りにも、このような変態がいるかもしれません。スタンガン（４０万ボルト）を携帯することをオススメします』」

真「……」

明「真琴……。これって……」

真「わりぃ。ちょっとバイトの店長追い詰めてくるわ……」

真琴ＳＩＤＥ

雄二『くそ、真琴の野郎……』
翔子『……雄二、峰嶋を苛めちゃダメ』

さてさて、無事にＣクラスを突破した我等は最後のチェックポイントがあるＡクラスへと挑んでいるわけでございます。
……って言っても戦力なんて現在突入してる奴等含めてもあと５組１０人だけなんだけどな。
ちなみにオレ、明久、瑞希、美波は待機組だ。理由は単純。

オレ→連戦から来る点数消費による疲れとフィードバック

瑞希→お化け怖い

美波↓以下同文

明久↓めぼしいパートナーいなくね？じゃあ行かなくていいよ

あ。久保が血の涙流してたけど気にしないで。

オレ「そしてその筆頭が雄二霧島ペアってわけだ」

明久「誰に向かってしゃべってるのさ？」

オレ「あ、なんでもない」

そうそう。雄二にはもれなく『恐怖！霧島との暗闇胆試しデート』か『絶叫！霧島との（リアル）鬼ごっこ』の選択権をくれてやった。あはは。喜んでくれて何よりだ（棒読み）。

お化けさん『オネエチャン、きれいダネ……』

翔子『……ありがとう。お化けさんはいい人』

雄二『まて翔子。お化けさんは人じゃないだろ』

翔子『……気にしない』

うん。そこは確かに気にしなくていい場所だ。

お化けさん『オネエチャンが悲鳴をアゲルト彼氏くんヨロコブンじゃないかな……』

翔子『……本当？』

お化けさん『ホントウだよ……』

明久「ねえ真琴。なんだか凄く嫌な予感がするんだけど」

オレ「奇遇だな明久。オレもとんでもなく嫌な予感がする」

お化けさん『ホラ、はやくハヤク……』
翔子『……うん。コホッコホッ、きゃあああああ！！』
雄二『翔子！？どうした！？普段のお前なら悲鳴なんかあげギャアアアアア！！関節決めるんじゃねえええええ！！』

康太「……失格」
オレ＆明久「「やっぱり……」」

やってくれやがったなあのバカップルめ。

康太「……こっちはチェックポイント」
オレ「何？」

別の画面に視線を戻すとＣクラスの男女ペアがチェックポイントまで到達していた。
チェックポイントにいるのはやはり常夏コンビだ。
最後の最後で出てくるとはラスボス気取りかコイツらは？

常村『おう。やっと来たな』
夏川『峰嶋と吉井をぶっ倒すための肩ならしだ。せいぜい頑張れよ』
４人『『『『試獣召喚（サモン）』』』』

肩慣らしだって？笑わせる。
召喚大会の時の点数から考えてもせいぜい３５０前後に決まって……

２－Ｃ　山田奈緒　物理　１６７点
平山翔太　物理　１５３点

ＶＳ

３－Ａ　常村勇作　物理　４６９点
夏川俊平　物理　４８８点

全員『『『何ィィィ！！！？』』』

全員で奏でる見事なハモリ。
って違う！なんだあの点数は！？

明久「ちょ、ちょっと！？常夏コンビってあんなに点数高いの！？」
オレ「知るかよ！召喚大会のときは両方とも４０００弱だったんだ！！」
秀吉「あれではまるでＡクラスの優等生じゃぞい！」
康太「……有り得ない」

クソッ！これがあるからアイツらこんなに簡単に勝負に乗ってきてたわけか！
自分達なら誰が来ても倒せるって言う絶対的な自信があったから！

雄二「おい、どうした……ってうぉ！？これ常夏の奴等の点数か！？」
オレ「まったく、してやられたぜ……！」

さて、こうなった以上は疲れただの辛いだの言ってられない。
オレと明久が組んで出るほかない（というよりは最初からその予定だった）。

オレ「んじゃ行くぞ明久」
明久「うん。最初からこうなることは分かってたしね」

どうやら常夏コンビはオレと明久との一騎打ちをご所望らしいからな。
でもヤなんだよ。男に告白したりゴスロリの服着る様な奴とやるの……

明久「それじゃあ行ってくr「ま、待ってください！」え？」
オレ「は？」
瑞希「わ、私も行きます！」
美波「ウ、ウチも！」

でもこの二人はお化けの類は苦手って……

明久「でも、苦手なんでしょ？だったら無理しなくても……」
瑞希「それでも、行きたいんです！」
美波「最後まで何も出来ないなんて、その、嫌だし……」
オレ「……いいんじゃないか？」
明久「え？」
オレ「苦手なのに“やりたい”って言ってくれてるんだ。それにこれはあくまで学校行事。全員が楽しめなければ意味がない」

そう。いくら対戦形式をとっているとはいえ、いくらオカルト召喚獣を一般公開してもいいかの実験とはいえ、これは行事、イベントなのだ。
イベントなのだから全員が楽しめなければ意味がない。
そりゃやるからには勝ちたいけど、それよりも2年3年問わず全員が後で「あのときは怖かったね」なんて言って笑えるものにしたい。
怖くても二人が参加してくれるならそれはとても喜ばしいことだ。

明久「……そうだね。それじゃあさ」
瑞希「え？」
オレ「ああ。行くか」
美波「え？」

明久が瑞希の、オレが美波の手をとる。
二人は驚き、声を上げる。

瑞希「あの、明久君は真琴君と組むんじゃ……」
明久「胆試しなのに、お化けが苦手な女の子二人でなんて行かせられないよ」
美波「真琴……」
オレ「それにこれは勝負ではあっても戦争じゃない。勝ち負け以前に全員が楽しむことが大事なんだ」

つまりは――――――――

オレ&明久「「オレ（僕）は美波（瑞希）と一緒に行きたいってことだ（さ）」」

明久ＳＩＤＥ

瑞希「あ、明久君、手を離さないでくださいね……」
僕「う、うん。分かってるよ」

というわけで僕と瑞希が先に、真琴と美波が後に突入することになった。
うーん、さっきから同じところをぐるぐる回ってるような気がしないでもない……？

瑞希「こ、怖くないんです。明久君と一緒だからちっともさっぱり全然これっぽっちも怖くなんかないんです……」

どうやら瑞希はそんなことに気づく余裕はないみたいだ。

僕「ってさっきから全然お化けでてこないな……」
瑞希「ど、どうしたんですか……？お化けが出てこないならいいじ

ゃないですか……」
僕「そうだけど、Cクラスだったらもう4、5回くらいはお化けが出てきてもよかったくらいの勢いだったし……」
何か仕掛けがあるんだろうか。
少し警戒するべきかもしれない。
僕「……」
瑞希「……」
ダメだ。警戒なんてして無言になれば余計に瑞希の恐怖を煽る結果になる。
何かしゃべってないと危ないかもしれない。
僕「あ、あのさ、瑞希」
瑞希「は、はい……？」
会話を続けよう。でないと瑞希の恐怖が大きくなったり実はもう限界の僕の理性が飛んだりする。
僕「苦手なのに胆試しに参加してくれてありがとね」
瑞希「あ、いえ、私の方こそこうやって迷惑をかけちゃうのに一緒に来てもらってありがとうございます」
僕「迷惑だなんて思わないよ。こうやって一緒に学校の行事に参加してくれてるのに、迷惑だなんて思うわけないじゃないか」
瑞希「そ、そうですか？そう言ってもらえると私も嬉しいです」
怖がっていた瑞希は笑顔を見せる。でも……
僕「でもやっぱ怖い？」

瑞希「そ、そんなことは……こわいです」

そう言って瑞希はまたうつむいてしまう。
いくら召喚獣がいないとは言え、薄暗い中で肌寒くてこの雰囲気だ。
怖いものは怖いんだろう。

瑞希「あの、明久君。本当にごめんなさい。私、運動も出来ないし、こういうのも苦手で、いつも明久君に頼って……」
僕「あ、いや、そんなに謝らないでよ」
瑞希「でも……！」
僕「あのね、瑞希。僕からしたら、瑞希がそうやって頼ってくれるっていうのは凄く嬉しいことなんだ」
瑞希「うれしい……ですか……？」
僕「うん。瑞希が僕を頼りにしてくれてるって。僕の大好きな人が僕を頼ってくれてるって思ったら、嬉しいに決まってるよ。迷惑だなんて絶対思わないよ」
瑞希「そ、そうですか……？はぅ……」

顔を真っ赤にしてうつむく瑞希。
僕も結構顔が熱い。

瑞希「じゃあ、明久君……」
僕「何？」
瑞希「こうやったら、明久君は嬉しいですか……？」

ぎゅっ、と瑞希が僕の腕を強く抱きしめてくる。

僕「勿論だよ。瑞希は頭もいいし、可愛くて優しくて、欠点のないお姫様を守ってる騎士（ナイト）になった気分で……」
瑞希「え……？」

一瞬、瑞希の表情が曇った。
何か拙いこと言ったかな……？

瑞希「明久君……」
僕「な、何かな？」
瑞希「明久君は、私のいいところばかりを見てるんじゃないですか……？」
僕「え？」
瑞希「明久君は、私の目立つところだけを見て、目立たない欠点を見てくれてないんじゃないですか……？」
僕「そ、そんなこと……」

ない、とは言い切れなかった。
特に意識したことなんてなかったけど、言われてみれば確かにそうだ。
瑞希の長所ならいくらでも思いつく。けど、短所って言われて思いつくものなんてほとんどない。というか一切ない。

瑞希「明久君……私、お姫様なんかじゃないんです……。運動音痴だし、嫉妬深くて、鈍くさくて、勉強だって肝心なときには倒れちゃうし……」
僕「……」

いきなりの会話にどう返事をすればいいのか分からなくなる。

瑞希「明久君……もっと、私自身を見てください……いいところだけじゃくて、悪いところも全部……！！」
僕「……うん。分かったよ。ごめんね、瑞希」
瑞希「え……？」

僕「瑞希がそういう風に悩んでたのに、ちっとも気づかないなんて……こんなんじゃ彼氏失格だよね……」
瑞希「え？そ、そんなことは……」

瑞希が一方的に守られたり、特別扱いされるのを嫌がっていたのを僕は知ってたのに、同じようなことを瑞希に言ってしまった。
瑞希のことを何も考えずに……

瑞希「……」

瑞希が無言で僕の手を見つめてくる。
一体どうしたんだ――――

――――――――――あ。

瑞希の視線の先にはカメラがあった。
ってまずい！カメラがあるって事は、今までの会話全部秀吉やムッツリーニたちに筒抜けって事に！？

瑞希「え、えっとえっと、わ、私がこういう風に悩んでるって知ったら、明久君びっくりするかな～？なんて……」
僕「そ、そうだね。すごくびっくりしたよ。あははは」

うん。ぎこちなさ過ぎる。
秀吉やムッツリーニがこれで納得するとは思えない。
あとで尋問される覚悟を決めておこう。

瑞希「ほ、ほら、明久君。真琴君と美波ちゃんに追いつかれちゃいますし、はやく行きましょう！」
僕「あ、待って瑞希。暗い中で走るとあぶな――――――」
い。と言いかけたところで急に照明が一気に落ちた。
瑞希『え……？あ、明久君……？』
暗闇の中から瑞希の声が聞こえてくる。
大体どっちの方向から聞こえてくるかは分かるけど、あまりに視界が悪すぎてうかつに動けない。
僕「落ち着いて瑞希。下手に動き回らないで、その場でじっとしてるんだ。目と耳を塞いでおいてね」
瑞希『は、はい。分かりました……』
この暗闇に乗じて一斉に驚かしてくる気かもしれないから、目と耳を塞いでおくように指示を出す。
そろそろ目も慣れて見えるように……
見えるように……？
僕「あ、あれ……？壁……？」
ほんの数歩しか離れていなかったはずの僕と瑞希の間にいつの間にか壁が出来ていた。
これは……迷路を造り変えられた！？
僕「まずいまずいまずい……！」

このままじゃ僕も瑞希も一人のままだ。
一人じゃチェックポイントまでたどり着いても意味がないし、なにより怖がりの瑞希をこのまま一人ぼっちになんて出来ない。
早く迂回路を探して瑞希と合流しなきゃ……

ガサガサ……

僕「！！」

近くで人の動く気配がした。
慌ててそっちの方へ手探りで移動してその人の手を握る。

僕「ごめんね瑞希。もう大丈――――――」

パッ（照明点灯）

僕「――――――――――――バカの顔？」

真琴「ふざけんなバカ」

そこにいたのは瑞希ではなく、僕の親友にして学園最高点数保持者、峰嶋真琴だった。

第七十九話　美波のきもちと全身全霊の本気（前書き）

ＬＡＮ武さん、月さん、唐笠さん感想ありがとうございます！

さて、またこの時期（？）がやってきました。
バカテストのオリジナル問題です。
この作品では可能な限り毎回バカテストを入れるようにしています（時々コラムも有り）。
しかし、原作の問題だけでは圧倒的に数が足らず、じゃあオリ混ぜるか。ってなわけです。
でもネタもう有りません……ｏｒｚ
だれかネタをプリーズしてくれる優しい方は感想からいただけるととっても嬉しいです。
なんとか今回はネタが思いつきましたが、このままだとオカルト編が終わるまでバカテストなしに……！？
本気で助けてください。お願いします。
ではでは第七十九話です。宜しくお願いします。

第七十九話　美波のきもちと全身全霊の本気

バカテスト　世界史

問　以下の組織の名称を答えなさい。

『国際連合憲章の定める集団安全保障制度の下で、侵略の防止・鎮圧など軍事的強制措置のために使用される国際的常設軍隊』

姫路瑞希の答え

『国連軍』

教師のコメント

正解です。しかし実際には国連軍は大国間の相互不信によりまだ組織されたことはなく、現在、通常『国連軍』というと、朝鮮戦争などにみられる新しい型の国際的兵力のことを指します。

吉井明久の答え

『アルケイディア帝国』

土屋康太の答え

『ロザリア帝国』

教師のコメント

先生もＦＦ１２は寝る間も惜しんではまりました。

峰嶋真琴の答え

『Ｕ．Ｎ．　ｆｏｒｃｅｓ』

教師のコメント

いい加減外国語で解答するのやめてもらえませんか？

時は遡る事二十数分前……

真琴ＳＩＤＥ

美波「ま、真琴……？絶対、手、離さないでね……？」
オレ「ああ。わかってるって」

明久達が突入してから、およそ5分後。オレ達も明久達に続いてＡクラスに突入した。
……突入といえるほど勢いのいいものでもないけど。

美波「うぅ……どうして日本のお化けってあんなに怖いのよ……」
オレ「そんなこと言われても……」

個人の感性だし、オレはお化けなんか怖いと思ったことはないしな。お化けなんかより刃物を向けてくるチンピラのほうがよっぽど怖かったし（最初だけだけど）。

オレ「しかし全然仕掛けてこないな。瑞希の悲鳴も聞こえてこないってことは向こうも無事ってことだろうけど……」

まったく仕掛けてこないのは不自然だ。
常夏コンビがオレと明久のペアとの直接対決を望んでるから？でも

オレと明久がペアを組んでいない以上、それは叶わぬ願いだろう。

美波「ちょ、ちょ、ちょっと待ってよ……歩くの速いわよ……」

オレ「え？ああ、ごめん」

やっぱ個人の感性だ。オレは怖いなんて思わないから歩くペースもいつもどおり。それに対して美波は恐怖のせいで若干歩くペースが落ちている。

うーん、どこがそんなに怖いんだろうな？冗談抜きでＦＦＦ団に襲われている明久や雄二のほうがグロテスクだけど。

美波「もういや……。こんな怖いお化けがいるならウチもうドイツに帰る……！」

オレ「そ、そこまでか？」

美波「だってぇ……ドイツのお化けならまだしも、日本のお化けなんて全然知らないんだもの……」

ああ、そういうことか。

人間ってのは（一部の例外を除いて）基本的に“わからないもの”に対して恐怖を覚える生き物だ。

美波はドイツ育ちでろくろ首やらぬらりひょんやらの日本を代表する妖怪を知らないから人一倍恐怖心が強いわけか。

美波「ありえないわよ……。いきなり首が伸びたり頭が大きかったり目がいっぱいだったり……。ホントにドイツに帰りたい……」

オレ「そんなこと言うなよ。お化けが怖いってだけでドイツに帰るなんて……。それにドイツに帰ったらオレにも明久にも瑞希にも会えないんだぞ？」

美波「それはそうだけど……」

オレ「オレは美波と一緒にいたいし、美波だってオレと一緒にいた

いだろ？美波が怖いと思ったらオレが傍にいてやる。だからドイツに帰るなんて言うなよ」
美波「……でも……」
もう……絶対に誰かと離れるなんてゴメンだ。
４年前の過ちは、二度と繰り返さない。
オレ「美波は絶対にドイツには帰らせない。オレが帰らせないよ」
美波「……／／／」
ちなみに会話の間も美波はずっと抱きついてくる。
あんまり力込められるといつもみたく関節が……ってことにはならない。いや、シリアスだから作者パワーでとかじゃなくて、単純に関節を曲がらないように固定（独自に開発）してるからだ。
あまりにも関節を外される機会が多いせいで、いつの間にか身についた自己防衛スキルである。
美波「そ、その、真琴はウチなんかでいいの……？」
オレ「は？」
美波「だ、だって、ウチは乱暴だし、胸も大きくないし、勉強だってそんなに出来るわけじゃないし……」
オレ「はぁ……。あのな、オレは勉強が出来るとか、胸が大きいだとか、そんなので美波を好きになったつもりはないんだぞ？美波は優しいし、頑張り屋で、お化けだって怖くたってこうやってチャレンジしてるじゃないか。それは立派に胸を誇れることであってだな……」
とまあちょっと演説っぽい台詞が続く。
すると美波が急に立ち止まった。

オレ「……？」
美波「……真琴、ありがとね」
オレ「……？？？」
美波「ウチね、自信がなかったの。真琴は運動も勉強も抜群で、優しくて強くて力があって……そんな真琴の傍にいるのがウチでいいのかなって……でも、真琴がウチがいいって言ってくれて、凄く嬉しくて……」
オレ「美波……」
美波「ウチね、真琴のこと大好き。すっっごく大好き」
オレ「……何を今更。そんなの言われなくたってわかってるさ」

オレだって大好きだ。もう手放したくないくらいに。
離れたくないくらいに。失ってしまいたくないくらいに。
だからこそ、美波がドイツに帰りたいって言ったときに……

フッ

オレ&美波「「！？」」

いきなり照明が全て、同時に消えた。

美波『ま、真琴……？どこにいるのよ……』
オレ「落ち着け。そこから動くんじゃない。目と耳を塞いで、闇に目が慣れるまで待つんだ」
美波『う、うん……』

暗闇に乗じて驚かしてくるのは十分想像できるパターンだ。
美波には目と耳を塞いでもらってたほうがいいだろう。

美波がどうかは分からないが、オレ自身、目がなれるのは早いほうだと自負している。
そろそろ目が慣れてくる頃のはず……

オレ「……なんだ？」

……さっきから何かが動いてるな。
召喚獣……って線はないな。あれ気配しないし。
となると、セットを使ってオレ達を驚かすつもりか……？

オレ「どのみちそろそろ目が慣れるし、驚かされる程度なんとも……なんだこりゃ」

目が慣れてきて、周囲の状況が掴みやすくなった。
そして……目の前にさっきまでなかった壁がある。

オレ「……美波？」

失格にならない程度の声で美波を呼んでみる。

美波『……真琴？』
オレ「（近くにいるみたいだな……）そのまま目と耳を塞いでおいてくれ』
美波『わ、分かったわ』

多分この壁は移動できるように作ってあるもの、仕掛けの一種だろう。
形が変わる迷路、とでも言ったところか。

オレ「くそ……どこか迂回するところは……」

今のうちに美波が驚かされて失格になれば、ペアであるオレも失格になってしまう。
あのまま一人にしておくのも酷だし、早く合流しなければ……
迂回路を求めて歩いていると、誰かの気配がした。

オレ「……」

気配がして、いきなり手を握られた。

パッ（照明点灯）

明久「――――――――――――バカの顔？」
オレ「ふざけんなバカ」

で、現在にもどるというわけである……

明久ＳＩＤＥ

僕「えーと、つまり、これは3年生側の仕掛けだったって事？」
真琴「多分、な。オレ達が予定通りにペアを組んで突入すればこうするつもりはなかったんだろうけど」

やっぱり常夏コンビが僕らと戦いたがってるっていうのが一番強いみたいだ。
そうでなければこのペア変更には意味がない。
僕も真琴も悲鳴をあげてもおかしくない人とペアを組んでたんだから、失格にしたいのならペアを換える必要なんてないし。

僕「となると、瑞希と美波は……」
真琴「多分合流してるだろうな」
僕「そうか……なんとかして僕らも合流できないかな？」
真琴「無理だな。照明全部落としてのペア変更までやってきたんだ。合流しようとしても、迷路を作り変えられてしまう。オレ達は当初の予定通り、チェックポイントを突破するぞ」
僕「そうだね」

僕らがチェックポイントを早く突破すれば、その分だけ瑞希と美波が早くお化け屋敷から出られるということだ。
合流できない以上、それが一番だろう。

瑞希『うぅ……美波ちゃん……手を離さないでくださいね……？』
美波『瑞希こそ、手、離さないでよ……？』

真琴「……？」
僕「！？瑞kこば！？」
真琴「失格になるだろ」
僕「……近くにいるのかな？」

ここからでも声が聞こえるってことは、壁一枚はさんだ向こう側にいるって事だ。
ならこっちから声をかけたら向こうに聞こえるかもしれない。

僕「み～ず～き～」

瑞希『ひゃ！？き、聞こえません……！声なんて聞こえません……！』

僕「……どうやら逆効果みたいだね」
真琴「だな」

瑞希も美波も頑張ってるのに、これで僕らが驚かして失格になったらあまりに申し訳ない。
ここはちょっと我慢してよう。

お化け『ホホホ……ドウカシタノカイ……？』

美波『こっ、怖くない……！こんなのただの召喚獣よ……！』
瑞希『そうです……召喚獣なんです……怖くないんです……！』

お化け『おヴぁあげヴぉヴぁ……』
美波『――――――――！――――――――！』
瑞希『怖くない……怖くない……』

お化け『うらめし……や……』
美波『ここ怖くないここ怖い』
瑞希『み、美波ちゃん、ここここわくなんか無いですよ……！』

真琴「おお、結構頑張るな」
僕「だね。このままチェックポイントまで行けるといいのに……あ、ここ行き止まり」
真琴「そうだな。あんなに頑張ってるんだから、その努力も報われて欲しいものだ……こっちもだ。引き返そう」

しゃべりながらも手当たり次第に通路を探していく。
チェックポイントに続く道なんて一つもないけど。

３年『おい……あの子たち、頑張るな』
３年『目も閉じてるみたいだし、しっかりタイミング合わせろよ？』
３年『ああ、分かってる。行くぞ……試獣召喚（サモン）』

お化け『ケハハハ……こっちを向いてヨウ……』
美波『い、嫌よ……お化けなんか見たくないわよ……』
瑞希『こここわくなんか……ないです……！』

二人とも怖いはずなのに、凄く頑張ってる。その努力はぜひとも報われて欲しい。

頑張れ……！頑張れ……！

僕「頑張れ……！頑張れ……！」
真琴「おい、明久」
僕「頑張れ……！……何？真琴」
真琴「こっちも行き止まりだ。やっぱチェックポイントに続く道なんてないんじゃないか？」

見ると確かに行き止まりだった。
うーん、結構歩いたし、そろそろチェックポイントの近くにいてもおかしくないと思うんだけどな……

美波『……あれ？』
瑞希『ど、どうしたんですか……？…あれ？ここって……』
夏川『げっ！こいつ等失格しなかったのか！？どうする常村！？』
常村『どうするって……やるしかないだろ……』

あれ……？もしかして……

真琴「向こうが先にチェックポイントについたみたいだな」
僕「ホント？やった！」

失格にならないように声を潜めて喜ぶ。
瑞希と美波なら勝てる可能性は十分にあるし、勝てなくてもきっと大きなダメージを与えてくれることだろう。

夏川『まったく、クズコンビをやる前にとんだ邪魔が入ったな。誰だよミスった奴』
常村『あのクズ二人よりこっちの方がよっぽどしんどそうだな』
夏川『あーあ、二年なんてバカだらけだから楽勝だとかほざいてた

のはどこのどいつだよ』
常村『悪かったって。訂正する。吉井と峰嶋はクズだがそれ以外はマシな奴もいる。これでいいだろ？』
夏川『今更おせぇよ。しかしこの二人、あのクズ共と付き合ってるんだろ？まさに掃き溜めに鶴って奴じゃねえか。あんなカス共には勿体ねえよ』

ふぅ……まったく、これだから……

僕「雄二のせいで僕らまでカスだのクズだの言われたじゃないか」
真琴「いや、雄二関係ないし。てか実名出されただろが」

まあそれは気にしない方向で！

夏川『そもそもあんなクズ共がこの学校にいるから俺達は――――』
美波『真琴達はクズじゃない……！』
夏川『あ？』
美波『真琴達はクズなんかじゃない……！！』
常村『そうは言っても事実だろ。部活で何か功績を挙げたわけでもなければ賞を貰ったわけでもない。普段の素行は最悪、成績だってこの前まで最低ランク』
夏川『峰嶋にしたっていいのは点数だけでやってることはバカ共と同レベルだしな。おまけに二人とも観察処分者。あれをクズと呼ばずしてなんて呼ぶんだよ』

真琴「言われたかないが概ね事実だな」
僕「だね。覗きとか補習の脱走とか色々やっちゃったし、僕ら二人とも観察処分者だし、何か言われても言い返せないよね」
真琴「強いて言うならテメエには言われたかねえよクソ坊主とクソ

モヒカンってところか」

夏川『まったく、アイツらは学園の面汚しだな。人に迷惑をかけることしか出来ないんだから、さっさとゴミ溜めにでも埋まってろっての』

いや、テメエに言われたくないです。
そっちのほうがよっぽど迷惑ですから。
なんて言いながら真琴と駄弁っていると

瑞希&美波『『どうしてそんな酷い事を言うんですか（言うのよ）！！！！』』

僕にも、真琴にも聞こえるくらいの大音量で、そんな大声が聞こえてきた。
今のって……瑞希と美波？

常村『んだテメエら……！文句でもあんのかよ……！？』
瑞希『確かにあなた方の言うように、明久君も真琴君も色々目をつけられるようなことをしてしまったかもしれません……！でも、どうして……どうしてそれだけでそこまで酷いことを言うんですか！！何も知らないくせに……！二人がどれだけ優しくて、どれだけ人を思いやれるかも、何も知らないくせに！！』
美波『観察処分者がなによ！どうしてアキと真琴が観察処分者になったのか、アンタ達知ってるの！？アキも真琴も誰かのために汚名を被って、そうしてまで人のために頑張れるような優しさを持ってるのよ！アンタ達に、二人を侮辱する権利も資格もないわ！！今すぐアキと真琴に謝りなさい！！』
夏川『ぎゃんぎゃんわめくな！あんなカス共のことなんか知ったことじゃねえ！』

常村『なんで俺達があんなゴミに謝んなきゃならねえんだよ！！』
瑞希『明久君たちはカスでもゴミでもありません！！』
夏川『知るか！！あんなゴミ共とつるんでる時点で、お前らもゴミ同然だ！』
美波『ゴミで結構よ！アンタ達に比べたらゴミのほうがマシよ！！』
常村『いいから出てけ！なあ夏川、コイツら今ので失格だよな？』
夏川『ああ、そうだな、ってことだ！さっさと失せろゴミ！』
美波『言われるまでもないわよ！瑞希、行くわよ』
瑞希『……はい』

瑞希と美波の気配が遠ざかっていく。
そして……見えた。見てしまった。
歩きながら、両手で顔を押さえて泣きじゃくる瑞希を。

僕「……ゴメン、真琴。ちょっと用事が出来た」
真琴「気にするな。オレも急用を思い出した」
僕「ゴメンね、つき合わせちゃって」
真琴「気にするな。こっちの野暮用でもある」

胆試しなんてのは遊びだ、ただの行事だ。皆が楽しめればそれでいい。
確かにそう言った。けど……僕はこんな胆試し、絶対認めない。
瑞希達を侮辱されただけじゃない。アイツらは二人の努力を踏みにじった。
凄く怖かったはずなのに……我慢して、耐えて、僕らのために頑張ってくれた。
それをアイツらは踏みにじった。
踏みにじって、皆で作ってきた胆試しまでも台無しにした。
胆試しなんてものは遊びだ。ムキになってやるものじゃない。けど……

僕「ここから先は本気だクソ野郎」
真琴「全力で叩き潰してやる」
アイツらは、全身全霊の本気で叩き潰す。

第七十九話　美波のきもちと全身全霊の本気（後書き）

次回、胆試し決着。

第八十話　決着と潤造雷斬と双秀連翔破（前書き）

ＬＡＮ武さん、月さん感想ありがとうございます！

今回は月さんよりアイデアを頂きまして、色々と必殺技が登場します。

そんなわけで、第八十話です。どーぞ！

第八十話　決着と潤造雷斬と双秀連翔破

バカテスト　国語

問　以下の□に正しい漢字を入れ、四字熟語を完成させなさい。

『自□自□』

姫路瑞希の答え

『自画自賛』

教師のコメント

正解です。この問題は回答が複数ありますが、自画自賛はその中の一つですね。ほかには自業自得や自給自足、自縄自縛などもありますね。

峰嶋真琴の答え

『自業自得』

教師のコメント

君が言うとやけに重みがあるのは何故でしょうか。

吉井明久の答え

『自爆自滅』

教師のコメント

君のことです。

真琴ＳＩＤＥ

オレ「待たせたなクソ野郎」
常夏「「あ？」」

オレの罵倒に無駄に反応するクソ共。
あっちだって散々言ってくれたんだからこれくらいはかまわねえだろ。

明久「そういきり立たないでくださいクソ先輩。これは個人的な勝負でもありますし、賭けでもしませんか？」
夏川「賭けだと？」
真琴「“負けたほうが勝った方の言うことをなんでも一つ聞く”ってのだよ」
常村「上等じゃねえか……！どうなってもしらねえぞ！！夏川は吉井をやれ！俺は峰嶋をやる！」
夏川「おお！わかった！」

どうやらオレの相手はモヒカンのようだ。
まあ最初から1対1に持ち込むつもりだったし関係ねェけどな。

オレ「じゃあ明久。そっちのクソ坊主は頼んだぞ」
明久「うん。分かった」
夏川「そうやってカッコつけてられんのも今のうちだけだ！試獣召喚（サモン）！」
常夏「あとで後悔してもしらねえぞ！！試獣召喚（サモン）！」
オレ＆明久「「試獣召喚（サモン）」」

２－Ｆ　吉井明久　物理　１９２点

ＶＳ

３－Ａ　夏川俊平　物理　４８８点

２－Ｆ　峰嶋真琴　物理　５００点

ＶＳ

３－Ａ　常村勇作　物理　４６９点

オレ達がカッコつけてる？
どうやらあのクソ先輩は勘違いしてるみたいだな。

オレ「あのさぁ……もしかしてアンタ、オレ達が冷静でいると思ってる？」

常村「あ？」

オレ「冷静で……いるわけないだろ」

常夏「な！？」

黄龍がまさに光速で相手、馬頭に喰らいつく。
しかし流石に点数差が無いせいでしっかり防御されてはいるが。

オレ「瑞希と美波が、どんなに怖い思いをしてここまできたか分かってんのか？」

常夏「ああ！？」

オレ「まぁ、要するに……」

馬頭を押しのけて距離をとる。

距離をとって……

オレ「もうアンタに生き残る術は残ってないって事だ。じゃあな。
“潤造雷斬（しゅんそうらいざん）”」

最大級の一撃をぶち込む。
点数制限をつけられる代わりに与えられた、３つ目の腕輪の能力。

オレ「消し飛べ……！」

普通の落雷の数倍の威力はある電撃が馬頭に降りかかる……のだが
……

オレ「……あ？」
常村「ッ……あっぶねぇ……！！」

確かに電撃は当たったはずだ。なのにどうしてモヒカンは無傷なんだ？
決まっている。防御したからだ。

オレ「防御系の能力か……！」

ここで突然だが、腕輪の話をしよう。
腕輪の能力、と簡単に言ってはいるものの、その種類は大きく分けて五つに分けられる。
一つ目は『召喚獣自体の強化』。単純な攻撃力を上げたり、防御力を上げたりとにかく召喚獣自体の能力値を上げる能力。
二つ目は『武器の強化』。武器の硬質化、属性付加、伸縮自在などがこれに含まれる。
三つ目は『必殺技系』。落雷や零戦砲を初めとして、熱線などもこ

れに含まれる。
四つ目は『サポート系』。防御障壁はこれに含まれ、
最後は『分類不可能』。これまでのどれにも分類できない能力がこれに含まれる。

つまり、常村の能力は四つ目の『サポート系』の能力だったというわけだ。

オレ「また厄介な能力を……！」
常村「は、はは……テ、テメエの攻撃なんて効くかよ！！」
オレ「くそ……！」

面倒なのは何が起きて防御されたかが分からないということ。
電撃が防御されたのか、攻撃が防御されたのか、そのどちらなのかによってこれからの攻撃法が決まるんだが……

オレ「……力押しでいいな」

単純な力押しによるパワーゲーム。無策ってわけじゃないんだけど……

オレ「……潤造雷斬」
常村「効かねえよ！」
オレ「潤造雷斬」
常村「だから効かなぎゃあああああ！？痺れるっ！？」

残念だけど……ただのバリアで防がれるほどこっちの電撃は弱くない。
どんなバリアも絶対の壁ではないのだ。防御の限界を超えれば自然と攻撃は貫通する。

常夏「がっ、な、なんでだ!?フィードバックは観察処分者だけのもののはずだろ!?」
オレ「潤造雷斬は自然にフィードバックが来る技なんだよ。だから今まで一度も使わなかったんだけどさ……アンタはゴミカスの気遣いなんかいらないよね」
常夏「ま、まって……がああ!!」

もう一撃、潤造雷斬を喰らわせる。
……ってもう気絶?こんなに早く気絶されてもつまらないんだけど。

常夏「……が、がぁ……」
オレ「なんだ、まだ意識あるんじゃん。っと……もう点数切れか……」

２－Ｆ　峰嶋真琴　物理　６７点

ＶＳ

３－Ａ　常村勇作　物理　ＤＥＡＤ

オレ「気絶されんのは困るしこのまま放置でいいか。さて、明久のほうは……」

明久ＳＩＤＥ

夏川「へへへ……やっとお前をいたぶれるな」

気持ち悪い笑みを浮かべて召喚獣をけしかけてくる。

僕「先輩、僕が勝ったらちゃんと言うこと聞いてもらいますからね」
夏川「わぁーってるよ。ま、お前じゃ俺には勝てないけどな！」
僕「く……はっ！」
夏川「な！？」

２－Ｆ　吉井明久　物理　１８５点

ＶＳ

３－Ａ　夏川俊平　物理　４２９点

夏川「なに！？」

僕「自分で言ったんですよ？僕が観察処分者だって」

夏川「観察処分者の利点か……ッ！」

流石にそれは知ってたみたいだ。

観察処分者は教師の雑用を召喚獣を使って手伝わされる代わりに物理干渉能力がある。

教師の雑用を普段からやってるおかげで召喚獣を使い慣れてるんだ。

だからこそ、普通では出来ない精密操作も可能になる。

僕「まだこんなの序の口ですよ？……二重（ダブル）召喚」

夏川「くそ！！」

金色の腕輪で二体に増えた僕の召喚獣が一気に牛頭に畳み掛ける。

２－Ｆ　吉井明久Ａ　物理　９３点

吉井明久Ｂ　物理　９２点

ＶＳ

３－Ａ　夏川俊平　物理　３７７点

僕「あれ？もう４００点切っちゃいましたね？」
夏川「テメエ……！！」

僕の挑発に頭から湯気を出しそうな勢いでキレる先輩。
そんなまともに集中してないような状態の奴の攻撃なんか、大したこと無い！

夏川「くそ！！くそ！！」
僕「どうしたんですか？３年自慢の操作技術を見せてくださいよ」
夏川「くそぉぉ！！俺が、吉井なんかに！！」

牛頭はデタラメにその手に持つ斧を振り回してくる。
僕はそれを主獣と副獣を器用に操って翻弄する。
あっちは後先考えずにそれだけで大量の点数を消費するにもかかわらず召喚獣を動かしまくってくる。

僕「そこだ！」
夏川「なっ！？」

副獣が牛頭の持っていた斧を剣で弾き飛ばす。
これで向こうは武器なしの素手になった。

夏川「く……っそぉぉぉぉぉぉぉ！！」

坊主はキレて牛頭に素手で僕の主獣を殴らせる。
まだ点数差は１５０点近くあるし、普通ならそれだけで戦死ものなんだけど……

僕「効かないよ」

夏川「なっ……！？」

精密操作が出来るということは、どこをどのタイミングで防御したらいいかを分かっているということだ。
何の集中もしていない苦し紛れのパンチなど、止めるのに苦労はしない。

真琴「おい坊主。もっと集中しろや。見苦しいぞ」
夏川「はぁ！？」

坊主先輩の後ろには、モヒカンを引きずった真琴がいた。
……何したんだろうね？

真琴「こっちはもう終わってんだ。そっちもさっさと終わらせろよ？」
僕「分かってるよ。もう終わるとこだから」
夏川「あんだと！？」
僕「……喰らえ」
夏川「！？」

主獣と副獣が牛頭を間に挟んで対極に立つ。
そして剣を構え、同時に走り出す。

僕「双秀連翔破」

そして、二対の召喚獣で同時に牛頭を斬りつけた。

２－Ｆ　吉井明久Ａ　物理　４６点
吉井明久Ｂ　物理　５３点

ＶＳ

３－Ａ　夏川俊平　物理　ＤＥＡＤ

僕「これで僕たちの勝ちですね。先輩」
真琴「言うこと、聞いてもらうぜ」
夏川「……くそ、何をやらせようってんだ」

何をさせられるのか想像してるようで凄く嫌そうな顔をする坊主先輩。
別に女装とかはさせないですよ。気持ち悪いし。
僕らがコイツラにさせたいことは唯一つ――――――――――――――

僕&真琴「「瑞希と美波に謝れ」」

第八十話　決着と潤造雷斬と双秀連翔破（後書き）

あと2回ほどでオカルト編を終わりにしたいと思います。
では、次回も宜しくお願いします♪

第八十一話　僕と瑞希と一つの吹っ切れたもの（前書き）

ＬＡＮ武さん、月さん感想ありがとうございます！

えー、すごく更新が遅れました。
家庭の事情で祖母の家に出かけ、そこで布団争奪戦に敗れて熱が出たなんていいません。
これからは更新ペースを戻すのでどうかを許しを……

第八十一話　僕と瑞希と一つの吹っ切れたもの

バカテスト　化学

問　次の元素記号を原子量の小さい順に並べ、その名称を答えなさい。

『Ｎｅ　Ｇａ　Ｈ　Ｏ　Ｐｏ　Ｉ　Ｎａ』

姫路瑞希の答え

『Ｈ　：水素
Ｏ　：酸素
Ｎｅ：ネオン
Ｎａ：ナトリウム
Ｇａ：ガリウム
Ｉ　：ヨウ素
Ｐｏ：ポロニウム』

教師のコメント

正解です。ＧａやＰｏは中々出てこない元素なので難しいかと思ったのですが、流石は姫路さんですね。

土屋康太の答え

『Ｈ　：Ｈ

Ｎａ‥な
Ｏ　‥お
Ｎｅ‥ね
Ｇａ‥が
Ｉ　‥い
Ｐｏ‥ポッ（＊／　▽　＼＊）』

教師のコメント

こんな解答なのにナトリウム以外の並び順が合っているのが腹立たしいです。

峰嶋真琴の答え

『Ｈ　‥ハ○テのごとく！
Ｏ　‥俺の妹がこ○なに可愛いわけがない
Ｎｅ‥ネット○ースト　ＰＩＰＯＰＡ
Ｎａ‥ＮＡ○ＵＴＯ
Ｇａ‥ＧＡ○ＴＺ
Ｉ　‥イノセ○ス
Ｐｏ‥ポケットモ○スター』

教師のコメント

こんな解答なのにちゃんと正しい順番で並べている辺りが腹立たしいです。

明久ＳＩＤＥ

２年『いやー、結構大掛かりな仕掛けだったし、面白かったな』
２年『なんか夏休み中に一般解放するらしいぜ？』
２年『先生たちがお化け役やるらしいな。高橋先生のとか気になるな』
２年『鉄人は……やめとこ。想像したら戻ってこれない気がする』

夏休み直前のイベントが終わり、つまりはあとは数日の授業と終業式を残すのみとなった。

夏休みに一般解放することが正式に決定したようで、片付けはしなくてもいいと言う学園長のお達しがあり、皆晴れ晴れとした顔で下校していく。常夏コンビが3年生にボコボコにされたのは気にしないで置こう。
さて、あとは……

真琴「明久、美波を見なかったか？」
僕「見てないよ。真琴こそ、瑞希を見なかった？」
真琴「いいや、一緒にいるかどうかもさっぱり」

あとは瑞希達のことだけだ。
帰る前に、日付が変わってしまう前にもう一度話がしたかったけど……

翔子「……吉井、それに峰嶋」
僕「霧島さん？」
真琴「オレ達に何か用か？」
翔子「……吉井は屋上に行って。峰嶋は中庭」
僕&真琴「「へ？屋上（中庭）？」」
翔子「……瑞希と美波がいるから」
僕「瑞希が！？ありがと霧島さん！」
真琴「サンキューな！！あとでなんかお礼するから！！」

それぞれの目的地に駆け出す。
道理で校舎中を探しても見つからないわけだ。屋上にいたんじゃ校舎の中を探しても見つかるわけがない。

雄二『なんだ翔子。下の名前で呼ぶなんて、随分と姫路と島田と親しくなったな』
翔子『……うん。私は、誰かのために一生懸命になれる人が好きだ

から』
雄二『なるほどな。お前らしいといえばお前らしい』
翔子『……』
雄二『それで俺の方を見るのはおかしいと思うぞ。俺は誰かのために一生懸命になるなんて殊勝な態度はないからな』
翔子『……そんなことない。雄二はいつも私のために一生懸命になってくれる』
雄二『ばっ…何言ってんだ!?』
翔子『……そんな風に照れる雄二が、私は大好き』
雄二『俺はそんな風に引っ付くお前を大好きになれないぞ』
翔子『……そんなことない』
雄二『ぐ……そんなことある』
翔子『……じゃあ、そういうことにしてあげる』
雄二『……まったく、行くぞ翔子』
翔子『……うん』

僕「瑞希」

屋上までの階段を全力で駆け上がって、少し息を切らせながら名前を呼んだ。

瑞希「え……？」

僕の顔を見て、気まずそうに顔をそらす。その瞳は少しだけ赤くなっていた。

僕「そろそろ帰ろう？もうすぐ夏休みだし、楽しいこともいっぱいあるよ？」

瑞希「……」

僕「実はさ、姉さんが海に行こうって言ってるんだ。それで、もし瑞希さえよかったら一緒にどうかなって。姉さんも瑞希が来てくれたら嬉しいって言ってたし」

瑞希「……」

困ったなぁ……。

瑞希の暗い表情に変化はないし、どうしたらいいかなぁ……

瑞希「……さっき」

少しして、瑞希が口を開いた。

瑞希「さっき、あの先輩達が来て、私に謝ってくれました」

僕「あ、そうなんだ」

どうやら約束はしっかり守ってくれてたようだ。

ということは謝った後に他の3年生にボコボコにされてたのか。

ちょっと可哀想な気もするけど、自業自得だろうし、とにかく約束を守ってくれたことには感謝しておこう。

瑞希「あれって……明久君と真琴君のおかげ……ですよね……」

僕「え？うーんとね……それは」

瑞希「嘘をつかないでください」

僕「まだ何も言ってないのに……」

確かに誤魔化そうとはしてたけど。

瑞希「ごめんなさい……。またこうやって迷惑かけてしまって……」

僕「瑞希、それは違うよ」

瑞希「どこも違わないじゃないですか！！また私は役に立てなくって、足を引っ張るだけで、迷惑ばっかりかけちゃって……」

僕「瑞希……」

瑞希「私、自分が嫌いです……。役に立てないところも、迷惑かけちゃうところも、こうやって、明久君に当たっちゃうところも……！」

そう言って瑞希は大粒の涙を流してしまった。

そんなのことないのに……ちっとも迷惑なんかじゃないのに……

僕「瑞希、聞いて？」

瑞希「……はい」

一呼吸おいて、続ける。

僕「さっきね、先輩達に啖呵を切ったの、凄くカッコよかったよ」

瑞希「え……？」

カッコよかった、というのが相当意外だったのか、さっきまで大粒を流していた瞳が丸くなる。

僕「そう簡単に出来ることじゃないよ。男の先輩に、あんなに大声で怒るなんてさ。僕でも出来ないかも」

瑞希「そ、そんなこと言って茶化さないでください！カッコいいとかじゃなくて――――――」

僕「カッコよくて……それと、凄く嬉しかった。僕らのために本気で怒ってくれて、あの一言で、僕も真琴も頑張れた。本当にありがとう」

正直な、心からの感謝の気持ちを込めて頭を下げる。

はっきり言ってしまえば、あのときの僕がどういう気持ちだったのか、今の僕には思い出せない。

瑞希が僕らのことを庇ってくれて、クズなんかじゃないって言ってくれたことが嬉しかったのか。

僕らのせいで、僕らのために努力を無駄にさせてしまったことが申し訳なかったのか。

よく分からないけど、色んな気持ちがごちゃ混ぜになってた気がする。

瑞希「で、でも、私は相手の点数だって一点も減らせなかったですし……」

僕「そんなのどうでもいいんだよ。瑞希が僕らの点数じゃない部分を評価してくれてるみたいに、僕らも瑞希の点数じゃない部分に助けられてるんだから」

確かに僕も真琴も最初から常夏コンビと戦う予定ではあったけど、あそこまでいくとはっきり言ってもうめんどくさくなっていた。例え勝っても体育祭の準備をしない代わりに、補習ならなんやらをやらされる可能性が高いからだ。勝っても負けても大差ないのだから、あとは常夏コンビに負けるのが癪に障るって言うだけの話。フィードバックによる激痛に耐えてまでやるほどのことじゃない。けど……

けど、瑞希と美波が頑張ったから。だから僕も真琴も頑張れた。最後の最後で全力で頑張った。

多分、瑞希達が僕らのために怒ってくれてなかったら、僕も真琴も適当に流して痛みを避けて終わってただろう。

瑞希「明久……くん……」

僕「それに夏休みが明ければBクラスとの試召戦争が始まるしね。真琴も言ってたじゃん。瑞希は僕らFクラスの主戦力なんだよ。また瑞希の点数にいっぱい助けてもらうことになりそうだし」

夏休みが明ければ僕らの宣戦布告禁止期間がやっと明けて、Bクラスに宣戦布告することになるだろう。そのときには、また瑞希に助けてもらうことになるのは間違いない。

僕がそう言って励ますと、瑞希は目元を拭っていつもの優しい笑顔を見せてくれた。

瑞希「ありがとうございます。明久君」

僕「あ、いや。こっちこそお礼を言うべきで――――――」
瑞希「私。明久君のおかげで少しだけ自分に自身が持てそうです」
僕「あ。それはよかった」

どんな形であろうと、好きな人のためになれたことは嬉しいことだ。
……自分で言っててハズいなコレ。

瑞希「助け合ってるって言ってもらえるのなら、もっと遠慮しなくてもいいんですよねっ！」
僕「うん。勿論だよ」
瑞希「じゃあ明久君」
僕「ん？何かな？」
瑞希「目を閉じてください」
僕「ふぇ？」

いきなりのよく分からない申し出に一瞬思考回路がフリーズしかける。

瑞希「いいですから、早く」
僕「う、うん」

言われるままに目を閉じる。
なんだろ？何されるんだろ？全然想像つかないけど……

瑞希「い、いいって言うまで目を開けないでくださいね？」
僕「う、うん、分かった」

言われたとおり、しばらくそのままでいると、肩に何かふわりとしたものがかかった。
顔に何かが近づいてくるのが分かる。そして……僕の唇に何か柔ら

かい物が押し付けられた。

僕「！？」

びっくりして目を開ける。

そこには、真っ赤な顔をして目を閉じた瑞希の顔が目の前にあった。

瑞希「……ぷはぁ……遠慮しなくてもいいなら……これからはもっと明久君に甘えることにしますね」

僕「う、うん。僕は全然いいよ」

どうやら瑞希は瑞希で何か吹っ切れたようなものがあるみたいだ。

それと……甘えてくれるっていうのは単純に男として嬉しいって言うのもあるけど。

瑞希「さ、行きましょう明久君。もうすぐ夏休みですし、いっぱい遊びましょうねっ」

僕「うん！」

もうすぐ始まる僕らの夏休み。

……といっても最初の数日は試召戦争で使った分の補習が入るんだけどね。

第八十一話　僕と瑞希と一つの吹っ切れたもの（後書き）

次回は真琴と美波の会話です。
オリジナルなので完成度は低いかもしれませんが……

第八十二話　美波と個人と大切な人（前書き）

月さん、ＳＨＩＮさん、ＬＡＮ武さん、パンデモニウムさん感想ありがとうございました！

気づけばＰＶ３００，０００突破で総合評価も４００ｐｔ突破……皆様こんな駄文にここまでお付き合いいただき本当にありがとうございます！！

いくら感謝の言葉を並べても足りないくらいです！

これからも精進いたしますので、どうかこの先も宜しくお願いします！

というわけでここから先、本編です。どうぞ☆

あ。バカテストはなしですよ？……本当にネタがないんですって……ｏｒｚ

第八十二話　美波と個人と大切な人

真琴ＳＩＤＥ

霧島に言われたとおりに中庭まで走ってくると、そこには美波が座っていた。

オレ「美波」

美波「……真琴？」

オレ「こんなとこで何してんだよ？皆帰り始めたし、オレ達も帰ろうぜ？」

美波「……」

無言になってしまった美波の隣に座る。

オレ「しっかし疲れたな。フィードバックで体の節々が痛いぞ……」

美波「……」

やっぱダメか。

なんかうまく会話がつながらないし、どうしたものか……

美波「……さっきね」

オレ「ん？」

美波「さっき、あの二人がここにきてウチに謝ってくれたの」

オレ「へぇ～。そりゃよかった」

美波「けど、ウチからしてみれば、ウチよりも真琴とアキに謝って欲しかった」

オレ「へ？オレと明久？」

一体どういうことだ？

美波「ウチは……何のとりえも無いし、それだったら、ウチよりも真琴に謝って欲しかった」

オレ「美波……別にオレは」

美波「やめて！」

オレ「！！」

美波「『そんなことない』って言ってくれるんでしょ？でも、そんなことあるの……。ウチは何をやっても全然ダメで、真琴は何でも出来て、ウチなんかじゃどんなに頑張っても真琴と対等にはなれないの……」

きっと……そういうことを気にしてしまうのは仕方がないんだろう。自分に他人よりも劣っている点があると気づけば、それを気にしてしまうことは仕方ないことだ。

でも……そういう話じゃ、オレにだって他人より劣っている部分はあるのだ。

ただ表に出さないだけで……

オレ「美波……オレはさ、美波と一緒にいれて楽しいよ？」

美波「え……？」

オレ「美波と過ごす時間が大切で、美波と触れ合える時間が大切で、美波が凄く大切なんだよ」

美波「え…？い、いきなり何言って……」

オレ「美波はさ、オレをそういう風な気持ちにさせてくれる。それって、ただ力が強いとか、勉強が出来るとか、そんなことよりもよっぽど大事だと思わないか？」

美波「……うん／／／」

きっとそういうことなんだ。
秀でてる部分があって、劣っている部分があるから“個人”で、自分に大切な人ができる。
大切な人だから……失いたくないと思ってしまう。

美波「じゃ、じゃあ、ウチが一生真琴の大切な人でいてあげるって言ったら、どうする？」
オレ「へ？それって……」
美波「や、やっぱ今のナシ！！忘れて！！忘れて！！」

慌てて顔を真っ赤にする美波。
うん。なんと言うか……可愛いなぁ……

美波「ほ、ほら！もう帰らないとアレだし！！」
オレ「お、おう」

急にスクッと立ち上がる美波。
てかそれオレがさっき言った奴だよね。

ズルッ

美波「へ？」
オレ「は？」

足元が雑草だったのが災いしたのか……美波は立ち上がった勢いで滑った。
滑って……オレの方に倒れてきた。

ズシャーン！

オレ「えっと……」
美波「え？え！？ち、違っ……これは、そうじゃなくて、あの……」

形的には美波がオレを押し倒した形になった。
……誰かに見られたら誤解されそうだ。

美波「……真琴、目を閉じなさい」
オレ「……へ？」
美波「いいから！！早く！！」
オレ「あ、う、うん」

とりあえず目を閉じる。何されんだろな？
そして何かがゆっくり顔に近づいてきて……オレの唇とやわらかい何かが重なった。

オレ「！？」
美波「……！？　ちょ、ちょっと！？目を開けないでって言ったじゃない！！」
オレ「あ、ああ……ゴメン…」
美波「……」
オレ「……」

なんか気まずい……

美波「い、今のは、ほら、押し倒しちゃったお詫びって言うか……」
オレ「ああ……はいはい。じゃそういうことにしといてあげますか」

美波「な、何よその言い方!?」
オレ「あはは、やっぱ美波といるとスゲェ楽しいや！」
美波「アンタそれ絶対さっきと意味違うでしょ!!」

とまぁ成り行きで追いかけっこを始めるオレと美波。

やっぱり、美波といる時間が一番楽しいんだ……。だから……

美波「真琴」
オレ「ん?」
美波「…大好き」
オレ「ああ、オレもだ」
美波「だから……ね。その……今日は。ウチに泊まりにこない?」
オレ「……はい?」
美波「それで、その、お父さんに紹介したいなって……」
オレ「……」
……」
美波「……真琴?」
オレ「……

……プシュー」

美波「え!?ちょ、ちょっとそれだけで処理落ち!?ちょ……カムバーーーック!!」

だから、こんなオレだけど……

オレも、一生君の大切な人でいてもいいかな。

第八十二話　美波と個人と大切な人（後書き）

まあ今回がエピローグ兼ねて……なかった気がします。
次回から夏休み編です！

第八十三話　ロシアと留学と極寒の夏休み！（前書き）

ＬＡＮ武さん、月さん、唐笠さん、パンデモニウムさん感想ありがとうございました！

なんだか夏休みらしいイベントをとても期待してもらってるようで嬉しいです。
逆にこんな「夏？何それ？おいしいの？」みたいな話になってしまってスミマセン……

第八十三話　ロシアと留学と極寒の夏休み！

バカテスト　世界史

問　以下の人物を答えなさい。

『初代ロシア連邦閣僚会議議長』

峰嶋真琴の答え

『ボリス・エリツィン』

教師のコメント

正解です。ロシアの首相は時代によって名称が微妙に異なり、首相の肩書きも若干違うので、混ざらないように注意してください。と言っても、峰嶋君にとっては大して難しくはないかもしれませんね。

姫路瑞希の答え

『ヴィクトル・チェルノムイルジン』

教師のコメント

残念ながら不正解です。恐らく、初代ロシア連邦首相と混ざってしまったのでしょう。ここで言うロシア連邦閣僚会議議長とは、１９９１年から１９９３年までのボリス・エリツィン、エゴール・ガイ

ダル、ヴィクトル・チェルノムイルジンの3人を指します。
ヴィクトル・チェルノムイルジンも、歴代のロシア連邦閣僚会議議長の一人ですが、初代ではないので不正解となってしまいます。

土屋康太の答え

『バラク・オバマ』

教師のコメント

実在の人物の名前が出ただけでもよしとします。

吉井明久の答え

『ポリス・エリツィン』

教師のコメント

……部分点をあげます。

明久ＳＩＤＥ

僕らＦクラスのいつものメンバー８人と、Ａクラスの霧島さん、工藤さん、木下さん、久保君の４人を加えた１２で、大地に立っていた。
広がる大空は白い雲で覆い隠され、厚く着込んだダウンジャケットをも貫いて肌を刺すような寒さに、５メートル先も見えないくらいの猛吹雪……って

僕「なんでこんなことになってるんだぁぁーーーー！！！？」

僕のシャウトは吹雪の中に消えていく。

真琴「こっちが聞きてえ！！ババアの話と１ミリもかすってねえぞ！？」
瑞希「うぅ……寒いです……寒すぎです……」

美波「眠いわ……ウチもう寝る……」
みどり「ってみなみん!?寝たら死ぬぞ!?」
秀吉「……ｚｚｚ」
優子「起きなさい秀吉!!寝たら死ぬわよ!!」
翔子「……雄二、寒い」
雄二「くっつくな翔子!!って違う!!逆に今はくっつけ!!」
康太「……鼻血も凍る」
愛子「これは……キツ過ぎだよ……！」
利光「胆試し大会に続いて出番が多いと思ったらこんな扱いだなんて……!!」

久保君のメタ発言はおいておくとして、これはリアルなほうでヤバイ。
あ……むこうでおじいちゃんが手を振ってるや……

真琴「明久!?おい!!寝るな!!」
僕「ｚｚｚ……」
真琴「起きろ!!寝たら死ぬぞ!!」
美波「ｚｚｚ……」
真琴「ってそっちもか!?クソ、手に負えない!!」

……ハッ!?僕は一体何を!?

真琴「と、とりあえず空港まで引き返すぞ!!」
全員「「「「「コクコクコク」」」」」

とりあえず空港の中に退避する。
さて、どうして僕らがこんな極寒の地にいるかと言うと、それを説明するにはまず話を1週間前に戻さないといけないわけで……

真琴ＳＩＤＥ

さて、我輩は今、ババア室にいる。

すいません。ふざけました。

まあ言いたい事は伝わったと思う。明日から夏休みだわーい♪なこの日に醜悪な妖怪のオブジェが飾られているこの魔の部屋に呼び出されたのである。

ババア「なんだか地の文がえらく気になるけど、まぁ気にしなくていいさね」

相変わらずなんて感なんだ。妖怪らしくない。

ババア「峰嶋以外は知ってるだろうけど、もうすぐロシアにある試験召喚システムを取り入れたもう一つの学園……長月女学院との交流留学が始まるころさね」

オレ「交流留学？」

瑞希「毎年先生たちが選んだ数人の２年生が、長月女学院に数日間留学すると言うものですよ」

オレ「つまりオレ達がその選ばれた人ってことか？」

ちなみにだが、この場にいるのはオレとババアを除いて４人。

Ａクラス代表にして学年主席、霧島翔子。

同性愛者疑惑の学年次席、久保利光。

文月学園でも数少ない常識人、木下優子。

んでもって、我等がＦクラスの切り札にして、実質学年２位の姫路瑞希。

よく分からんが、このメンバーにオレを加えた５人が長月女学院とやらに行くらしい。のだが……

オレ「どう考えても人選おかしいだろ」

ババア「学年トップの５人を集めたこの人選のどこに問題があると言うんだい？」

オレ「おおありだ」

瑞希と木下姉はまだいいとして、雄二がいない状態のヤンデレと同性愛のホモ野郎と一週間以上も一緒だなんてやってられるか。

利光「峰嶋君、君がどういうつもりで言ってるのかは知らないが、そういうことは本人の前では控えるべきだと思うんだけど」
オレ「そうだな。ちなみにオレはお前が一番一緒に行きたくない奴なんだけど」
利光「……つまり君は女子の中に自分以外の男子がいるのが気に入らないと？」
オレ「そういう解釈をするお前が気に入らない」

同性愛者と一緒だなんて冗談じゃない。夜中に襲われでもしたら翌朝死体が転がることになるだろう。

瑞希「で、でも、私も出来れば明久君と一緒がいいんですけど……」
翔子「……私も雄二と一緒が良いです」
オレ「オレもだ。美波がいないんじゃ行く意味はないな」
ババア「揃いも揃ってわがまま言うガキ共さね！！」

だってめんどいしつまんなそうだし。

優子「私は別に何の問題も無いですけど……」
オレ「ん？オレがどうかしたのか？」
優子「だって……姫路さんはともかく、普段からFクラスのバカたちとバカやってる君が一緒だと……」
オレ「気持ちは痛いほど分かるぞ」

オレだって逆の立場ならお断りだ。
大体、オレは行くなんて一言も言ってないんだが。

優子「姫路さんは不可抗力でのFクラス入りですけど、居眠りなんかで学年の恥にもなるクラスに入るような人を行かせるべきではな

いと思います」
ババア「まあ良いのはテストの点数だけ出しねぇ……」
オレ「待てコラババア。誰がオカルト召喚獣の解除手伝ったと思ってる」
ババア「あれは全部アタシがやったことさね」
オレ「汚ぇ!?大人気ないぞこのババア!!」

人が折角無償で引き受けてやった仕事なのに!!なんてこと言いやがるんだこのババアは!!

オレ「ババアテメエ表でろや!!その大人気ない根性叩きなおしてやる!!」
ババア「黙りなクソガキ!!生徒だったら大人しく教師の言うことを聞きな!!」
オレ「今度は職権乱用か!?どんだけ汚いんだよ!?」

てか、オレはアンタを教師とは認めないぞ!!
清涼祭のときも聖獣型召喚獣のときもこのババアのせいで面倒な処理を押し付けられてるんだからな!!今更教師ぶったって遅いわ!!

優子「ちょっと貴方、さっきから聞いてればババアババアってもう少し敬意を払いなさいよ!」
オレ「こんな迷惑妖怪は人間扱いでも十分すぎるくらいだ!」
優子「いい加減にしなさいよ!だから学園の恥だって言われるのよ!」
オレ「まったく、雄二のせいでオレまで恥とか言われたぜ。今度何か奢らせるか」
優子「アンタのことよ!!」

うんうん。コイツ小山と似てる気がするな。

ヒステリー2号だ。

瑞希「真琴君は、学園の恥なんかじゃありません！！」
優子「な、何よ……？」
瑞希「真琴君は学園の恥なんかじゃありません！！優しいし、いつも私たちのことを考えてくれてるんです！！」
久保「でもね、姫路さん。学園長をババア呼ばわりする生徒の、どこが恥じゃないんだい？」
優子「吉井君や坂本君と一緒になって補習を抜け出したりして西村先生に迷惑かけてるじゃない。そういうことしてる時点で恥なのよ」
久保「……もしかしたら、少しだけ恥かもしれないね」

本当に自分の欲望に正直だなオイ。

瑞希「真琴君は恥なんかじゃ無いです！私たちの誇りなんです！」
オレ「……」

うーん、そこまで言ってくれるとちょっと嬉しいかな？
誇りって言ってもらえると色々やってるのが報われる気がするというか……

翔子「……優子、雄二は恥なんかじゃない」
優子「代表まで！？」
瑞希「取り消してください！」
利光「……そうだね。もしかしたら、恥ではない可能性も０ではないかも」

瑞希の周りにいる３人がバカに見えるのはオレの目の錯覚だろうか？

オレ「ババ……学園長、お願いします。お願いですからメンバーを

変えるか増やすかして下さい。こんな調子じゃ絶対ダメでしょ」

ババア「Ａクラスだけはまともだと思ったんだけどねぇ……」

この学園の生徒にまともな奴なんていないんじゃなかろうか？

本気でそう思った。

明久ＳＩＤＥ

僕「く、空港の中はまだあったかいね……」
真琴「おかしいだろ……。今のロシアって夏のはずだぞ……？どうしてこんなに寒いんだ……」
雄二「さっき温度計見てきたけど、マイナス５度くらいあったぞ……」

ロシアは日本と同じ北半球だから、季節も日本と同じはず……なんだけど……

僕「どうしてこんなことに……」
雄二「あのババアが補習免除してまで行かせるくらいだから何かあるとは思ってはいたが……」
真琴「あのババア……ぶち殺す……」

詳しいことをババアに問い詰めたら「補習免除してやるんだから黙っていきなクソガキ」だもんなぁ……

瑞希「さ、寒かったです……」
美波「どうしてこんなに寒いのよ……」
翔子「……分からない」

女子勢もくたばってるようだ。ホント、ここから長月女学院まで移動しないといけないのに……って

僕「ロシアの学校で長月っておかしくない？」
真琴「なんでも文月学園の姉妹学校みたいなもんだとか。設立者も日本人らしいぞ」
雄二「なんで日本人がロシアに学校作るんだよ」
真琴「知らねえよ。学者の考えることはどうもよく分からん」
雄二「お前も含めてな」

真琴「黙れよクソ雄二」

ロシアまで来て日本でやってる喧嘩と同レベルってなんだか悲しくなってくる。

??『皆様、お待たせいたしました』

全員「「「「「「??」」」」」」

不意に声をかけられた。

全員の視線が一箇所に集まる。その視線の先には若い日本人女性が一人。

唯「私、長月女学院の数学と日本語を担当しています、葉山唯と申します。以後、お見知りおきを」

雄二「ど、どうも」

雄二初め、皆であまりの礼儀正しさに呆然とする。

同じ女性数学教師なのに船越先生とはえらい違いだ。

唯「ではここからバスで長月女学院のほうへ移動します。こちらへどうぞ」

それだけ言うと、えっと……葉山先生は振り返って歩いていく。

僕「真琴、日本語って?」

真琴「長月じゃ日本語が必修科目らしい。まあオレ達にとってはプラスの材料にしかならないけどな」

僕「あ、そか。僕らロシア語なんて話せないもんね」

真琴「オレもロシア語なんて話せねーぞ……」

そりゃあ確かに嬉しいかも。
文月学園と長月女学院が毎年交流留学をやってるのも分かる気がする。

瑞希「明久君、行きますよ？」
美波「真琴、早く来ないと置いてくわよ」
僕「あ、待ってよ」
真琴「はいはい。今行く」

今日から一週間の交流留学。どんなことをするのかはまだ知らないけど……

僕「校舎の中、あったかいといいなぁ……」

とりあえず、僕としてはそれだけが心配だ。

第八十四話　教訓　～長月の皆様はＦクラスに厳しい～（前書き）

ＬＡＮ武さん、月さん感想ありがとうございます！

ちなみに今回のストーリーはタイトルが全てを物語っています（笑）
あと今回はバカテストはお休みです。
ていうかロシア編中ずっとお休みです……ｏｒｚ
ネタが思いついたらやります。

第八十四話　教訓　～長月の皆様はFクラスに厳しい～

真琴ＳＩＤＥ

オレ「……でか」

バスに揺られること2時間、オレ達は長月女学院に到着した。
到着したけど……

雄二「でかすぎだろ……」
明久「文月学園より大きくない？」

うん、でかいね。
ていうかでかすぎだねどこのお嬢様学校だぁぁぁーーーー！！！！！！

秀吉「きっとここにもスポンサーがついておるのじゃろう。“女学院”と言うだけあって、問題を起こすようなバカもいないじゃろうしな」
明久「だってさ雄二。言われてるよ」
雄二「ハッ。お前のことだぞ明久」
オレ「どっちもだバカ共」

どうせ口を開けば低レベルなガキの喧嘩しかしないんだから口を塞いでて欲しい。

美波「多分アンタも入ってるわよ」
オレ「おい雄二。お前のせいでオレまでバカ扱いだぞ。どうしてく

れる」
雄二「お前も俺達と同レベルなんだよ」
オレ「マジで！？」
雄二「そこまで驚くか！？」

まさかオレがこんなゴリラと同レベルと見られてるのか！？
これはちょっと生活態度改めないといけないな……

唯「生徒は全員体育館に集まっていますので、皆さんにも体育館に移動してもらいます」
優子「そそそれはいいんですけど後者の中は暖かいんですか！？」
唯「はい。校舎の中は完全防寒になっていますので」
瑞希「よよよかったです……。もう寒くないんですね……」
美波「てかアンタ達は何でそんなにピンピンしてるのよ！？」

なんでっていわれても……

オレ「オレはもともと北海道にいたせいで寒さ耐性があるしな」
雄二「Ｆクラスにいればいやでも身につく環境適応能力だぞ」
明久「あのボロ臭い教室にいればなおさらね」
康太「……別に不自然じゃない」
秀吉「うむ。気が付けばもう慣れておったしな」
みどり「君達全員一回病院行ったほうがいいよ！？」

おかしいのはオレ達じゃなくてＦクラスだ。
そこは勘違いしないで欲しい。

利光「え、Ｆクラスは壮絶なんだね……」
優子「ダメよ久保君。Ｆクラスは既に常識という枠組みからは外れているから」

それについては否定できない。

唯「ではついてきてください」

全員「「「「「はーい」」」」」

あ、さっき上条さんたち見かけたけどどうしたのかな？

やっぱ世界って狭いよね。別の作品の人たちとあっちゃうくらいだし。

みどり「それおかしい！絶対おかしい！！てかそれを“世界は狭い”で済ませちゃダメだよ！？」

明久ＳＩＤＥ

今日、ここにきてはっきりと思い知ったことがある。

『妖怪とババアは信じてはいけない』と……

あのババア、事前連絡って単語知らないんじゃないかな。

僕「すごい沢山人いるね」

真琴「ざっと９００人前後か……？一学年３００人だからオレ達と同じってことか」

瑞希「ここでもＡクラスやＦクラスがあるんでしょうか？」

秀吉「どうやらそのようじゃの。見てみるのじゃ」

あ。なんか盛り上がってるクラスとそうでないクラスがある。

多分ノリ的には、

Ｆクラス→交流留学！？ヤバ！！楽しそう！！

Ａクラス→交流留学？それより授業進めてください。

なんだろうなぁ……。

理事長らしき人『皆さんお静かに。今から文月学園の代表として、今日から一週間我が校に滞在する１２人の留学生を紹介します』

それの内の７人が補習免除してやるからいってこいな人とはとても言えない。

真琴「なぁ……。これって補習免除の代わりなんて言えないよな……？」

真琴も同じ考えのようだ。

Ａクラスのほうから、霧島さんから順番に自己紹介が進んでいく。

翔子『……霧島翔子です。Ａクラス代表を務めています。宜しくお願いします』

ざわざわ……

さすが霧島さんだ。女の子しかいない学校でもその印象は強烈らしい。

ていうか本当に日本語分かるんだ……。

利光『久保利光です。学年次席をしています。宜しくお願いします』

聞こえない。僕には黄色い声なんて聞こえない。

真琴「（明久、現実逃避するんじゃない。久保は勉強も出来るし容姿もそれなりだしモテるのは仕方ないだろ）」

僕「（……）」

聞こえない。僕を現実（リアル）に引き戻そうとする声なんて聞こえない……！

優子『Ａクラスの木下優子です。一週間よろしくお願いします』

木下さんの時は特に何の反応もなくただ拍手だけ。

まあ、原作でも影薄いしね……

優子「（吉井君、あとでちょっといいかしら？）」

なんだか言ってはいけないことを言ってしまった気がする。

愛子『どーも、Ａクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞。得意科目は保健体育で、スリーサイズは上から７８・５６・７９、特技はパンチラで好きな食べ物はシュークリームだよ』

ササッ↑全員が一斉に身構える音

愛子『……すいません。宜しくお願いします』

Ａクラスでもおかしい人となれば別か。

うん。いい経験になったね。

次の雄二からＦクラスだけど大丈夫かな？思いっきり失敗すればいいのに。

雄二『Ｆクラス代表の坂本雄二だ。宜しくたｎ……』

長月生徒『『『『きゃーーーー!!ゴリラーーーーー!!』』』』

雄二『な!?おい!!ゴリラってお前ら失礼だろ!?』

僕「あはは!ゴリラだってゴリラ!!」

真琴「初対面でゴリラっていわれてやんの!!あはは!ヤバイ!超おもしれぇ!!」

雄二「お前らあとで覚えてろよ!!」

腹を抱えて笑う僕と真琴。それに憤慨する雄二。

結局はいつものFクラスである。

ていうか最後まで言わせずにゴリラってちょっと酷くない?僕のときもそういうノリ?

みどり『えー、名川みどりです。Fクラスですが、宜しくお願いします』

「「「「……」」」」

みどり『まったく無反応もそれはそれでキツイよ……』

あ、精神的ノックアウト。

秀吉『(みどりよ、落ち込む出ない)木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。宜しく頼むじゃ』

ざわざわ……

ん?なんか声が聞こえるような……

長月生徒「あの子女の子なのにどうして男子の制服着てるのかしら？」

長月生徒「しっ！きっとそういう趣味があるのよ」

長月生徒「そういう趣味って……／／／」

秀吉「……なにやらあらぬ誤解をされてる気がするぞい……」

なんだか可哀想になってきたよ……。

これからは秀吉に対してもっと優しくしてあげよう。

康太『……土屋康太』

あ。いつの間にかムッツリーニの番だ。

康太『……趣味はとうｓ…なんでもない。特技はとうｔｙ…特にない』

今だけは全員ドン引きしていいタイミングだろう。

あ、次はいよいよ瑞希の番だ。

瑞希『え、えっと、ひ、姫路瑞希です。よろしゅきゅおねびゃいしましゅ』

僕「お、落ち着いて、ね？」

超がつくくらい緊張していたらしく、瑞希は噛み噛みだった。

えーっと、次は僕の番だね。

一応言っておくけど、４月みたいに『ダーリンと呼んでください』なんて言わないからね？

僕『えー、Ｆクラスの吉井明久です。気軽に『ハニー』と呼んで下

さい♪』
真琴「明久。ハニーは普通、女性の呼称として用いられるものだが……」
僕『……失礼。忘れて下さい。とにかくよろしくお願いします』
あきひさ　は　こころ　に　ふかいきず　を　おった！
はぁ……。もう嫌……。
そんな僕の憂鬱をよそに美波の自己紹介が続く。
美波『島田美波です。ドイツからの帰国子女で、日本語の読み書きが少し苦手です。宜しくお願いします』
やっぱり美波は（普段の暴力さえなければ）普通の女の子。反応も普通の平穏なものになるのは当然なんだろうな。
最後は真琴だけど……コイツ、何かやらかしそうだ。そんな目をしている。
真琴『あー、峰嶋真琴だ。一応Fクラスの軍師（嫌々ながらに）をやっている。特技はまぁ少し料理ができる程度だが……試召戦争に自身のあるやつはいつでもかかってこい。相手になる。それからこっちの島田美波に手を出した奴は教師生徒男女問わず全員ぶち殺すので覚悟してくれ』
やりやがったよこいつ。
全校に対する宣戦布告&美波に手を出したらぶち殺すよ？発言。
女の子だけの学校なんだし、美波に手を出す人なんていないと思うんだけどな……

サッ↑何人かが目をそらす音

まさか清水さん属性がこの中にもいるのか……！？

？？『ちょっとアナタ！学園内でそういう物騒な発言は控えてもらえるかしら！？』

真琴「あ？」

声がした方向を見ると……そこには3人の女の子が立っていた。

第八十四話　教訓　～長月の皆様はＦクラスに厳しい～（後書き）

上条さんとのニアミスネタをやりたいがためだけに今回の舞台をロシアにしました（実話です）。

第八十五話　メイと鉄人とまさかの留学生（前書き）

ＬＡＮ武さん、月さん感想ありがとうございます！

気が付けば前回で１００部突破ですね……。
ここまで長いようで短かった……バカ転はこれからもがんばりますよ！！
あ、バトン回したのでよろしければどうぞ♪

名前がロシア人じゃないとかそんな点はスルーの方向でお願いします。
ロシア人の名前なんて知らないんだよぉ！！（じゃあなぜこれ始めた？）

第八十五話　メイと鉄人とまさかの留学生

コラム　特別編

長月新聞　☆文月学園からの交流留学生☆

先日やってきた、文月学園からの交流留学生。毎年４～５人の生徒がやってくるのだが、今年は１２人とかなりの大人数であった。しかも、毎年ＡクラスやＢクラスなどの成績優秀者のみがやってくるのに対し、今年は１２人中８人が成績最低ランクのＦクラスの生徒である。今年の文月学園は何を考えているのか、イマイチ分かりづらい。文月学園第２学年主席のＫ島Ｓ子さんに話を聞いたところ、「テストの点数で峰嶋に勝てるものはいない」と、自称Ｆクラス軍師のＭ嶋Ｍ琴氏をとても評価している様子であった。留学生達の点数は明かされていないが、学年主席はあくまでもＫ島さんであると言う点からそれでも４０００点前後が最大ではないかという推測が飛び交っている。留学生の一人であり、Ｆクラス代表のＳ本Ｙ二氏によると、Ｍ嶋氏はかなり乱暴な性格で、その女子のような容姿とは裏腹に笑いながら人を攻撃するような残虐な性格らしい。ところが、同じく留学生のＳ田Ｍ波さんによると、とても優しく仲間思いで、誰かのためにいつも一生懸命になれる人らしい。同じクラスメイトでも、女子の人気はそれなりに高いようであった。

真「……」

明「へぇー。こっちにも校内新聞あるんだ。あ、これ日本語版」

真「……あのゴリラァァァ！！」

明「え!?何!?どしたの!?……ああ、なるほど」

真「あの野郎、人の風評落としやがって!!ただじゃおかねえ!!」

明「あー……、救急車呼んでおこう」

真琴ＳＩＤＥ

？？『ちょっとアナタ！学園内でそういう物騒な発言は控えてもらえるかしら！？』
オレ「あ？」

声がした方向を向くと3人の女子が立っていた。
うん。立っていただけなら軽くスルーするんだが……

長月生徒『会長よ！』
長月生徒『マリーナ会長だわ！』

明らかに生徒の反応が黄色くなっている。本当にこの学校も文月レベルで狂ってるんじゃないか？
てか生徒静かにさせろよ教師。一応集会だろ。

マリーナ「私はこの学校の生徒会長を努めているマリーナ＝クロムウェルです。とにかく、アナタの今の発言は生徒全員の長として見過ごすわけには行きません」
オレ「で、だから何？」
マリーナ「は……？」
オレ「だから、それがどうしたって言ってんの。さっきも言っただろ。腕に自信があるなら黙ってかかって来い。そうじゃないなら消えろ。雑魚に用は無い」

マリーナ「ざ、雑魚……」

どれだけ吼えようが実力がなければそれまでだからな。闘るなら全力で捻り潰すし。

明久「真琴、言い過ぎ言い過ぎ」

雄二「かまわん。もっと言ってやれ」

オレ「雄二、ゴリラ呼ばわりされたからってオレを使って復讐するのはやめような？」

軍師と復讐代行は違います。

マリーナ「ざ、雑魚って……いいわ！今ここでアナタに模擬試召戦争を申し込みます！」

オレ「お？やるか？なんならそこの二人も加わってくれてもいいんだけど？」

マリーナ「Fクラス程度一人、私で十分です。身の程って物を思い知らせてあげるわ！先生！お願いしま……」

オレ「ああ。要らない要らない。起動（アウェイクン）」

白銀の腕輪を起動させ、召喚フィールドを展開する。

やっぱり教科選択ができないのは使いづらいなコレ……

マリーナ「え？しょ、召喚フィールド？」

オレ「まあちょっとした事情でな。オレとそっちの姫路瑞希は教師の承認がなくてもフィールドを張れるんだよ。教科選択は出来ないけど我慢してくれ」

瑞希を指差しながら言う。

すると瑞希は顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。さっきの自己

紹介といい、いくらなんでも緊張しすぎだろ……

オレ「じゃあさっさと済ませるか？」

マリーナ「そ、そんなこと、別に凄くもなんでもないわ！試獣召喚（サモン）！」

いや、召喚大会の優勝賞品だし、十分凄いと思うんだけどな……

マリーナだっけ？の点数が表示される。

Ａクラス　マリーナ＝クロムウェル　数学　４４７点

向こうの召喚獣の装備はジャックナイフに軍服といういかにもロシアっぽい（？）装備。

さてさて、こっちも実験するとしますか。

オレ「試獣召喚（サモン）」

足元に幾何学模様が現れ、召喚獣の姿がはっきりと出る。

美波「真琴、また装備変わったの？」

オレ「まあな。面白いもの見せてやるから楽しみにしてろよ？」

こっちの召喚獣は銃身が１メートル以上あるライフルと文月学園の指定制服。

ライフルなんて持ってたら接近戦出来ないぞこのヤローとか言わないぜ？

Aクラス　マリーナ＝クロムウェル　数学　４４７点

ＶＳ

Fクラス　峰嶋真琴　数学　１７７３点

こっちの点数も表示されると……

マリーナ「……は？」
オレ「行くぞ？」
マリーナ「ちょちょちょちょっと待って！！１７００っておかしいでしょ！？」
雄二「真琴を甘く見たのが失敗だったな。そいつは世界でも指折りの天才だ」
マリーナ「う、嘘でしょ……？」
オレ「んじゃさっさと行くぜ。“大天使（ガブリエル）の翼”」

起動ワードを唱えると、召喚獣の背中から８枚の純白の翼が生える。
しかもその翼を羽ばたかせることで……

オレ「おお、飛んだ飛んだ」
マリーナ「う、嘘……。飛ぶ召喚獣なんて見たことないわよ……」
オレ「オレだって見たことねえよ……。使ってなんだが操作しづらいなコレ……」

とかいいつつもライフルを構え、一撃で相手の心臓を打ち抜く。
通常は銃身１メートルオーバーのライフルなんて持ってても使いづらいだけだが、こうやって大天使（ガブリエル）の翼と組み合わせると絶大な攻撃力を持つことになる。

Ａクラス　マリーナ＝クロムウェル　数学　ＤＥＡＤ

ＶＳ

Ｆクラス　峰嶋真琴　数学　１７７３点

マリーナ「う、嘘……私が……」
オレ「まあ相手が悪かったと思って諦めるんだな」
明久「こうやって見てると真琴って女の子を苛める悪者だよね」
秀吉「そうじゃな」
康太「……様になってる」

なんて失礼な。
まるで人を弱い者苛めみたいな言い方をするなんて。

マリーナ「くっ……生徒会長である私がこんなに簡単に……え？」
全員「「「「は？」」」」

突如生徒会長の体が浮かんだ。
いや、浮かんだのではなく誰かに襟首を掴まれて持ち上げられたのだ。

康太「……見えそうで、見えない……！（ブシャアアア）」
愛子「こ、康太君！？想像でその量の鼻血出しちゃうの！？」

ちなみにこの事態によりバカが一人昇天。
そして生徒会長を持ち上げた大男は……

鉄人「戦死者は補習だ」
オレ&明&雄「「「鉄人!?」」」
なんで鉄人がここにいる!?
鉄人「鉄人と呼ぶな!西村先生と呼べ!」
雄二「そんなことよりなんで鉄人がここにいるんだ!?」
鉄人「学園長についていくように頼まれたのだ。それから今年は3年生からも交流留学生がいるぞ」
は?3年?
瑞希「それって誰なんですか?」
??『俺達だよ』
げ……この薄汚い声は……
常村「よお吉井に峰嶋」
夏川「胆試しのときはよくもやってくr」
チャキ↑ライフルを構える音
ドンドン!↑ライフルを常夏コンビに向けて撃つ音
ドテドテドテ!↑常夏コンビが逃げようとして転ぶ音

常夏「「何しやがる!?」」
オレ「すんません。なんか条件反射で」
優子「条件反射で発砲するのはどうかと思うわよ……」

いやでも常夏コンビだし……

夏川「あ?誰かと思ったら木下のどうでもいい方か。お前に興味はねえよ。どっかいけ」
優子「ピキッ」

あ、なんか拙いかも。

優子「峰嶋君。ちょっとそのライフル貸してもらってイイカシラ?」
オレ「へ?い、いや、でもこれ召喚獣用の……」
優子「……黙って貸しなさいよ。それとも今すぐ死ぬ?」
オレ「どうぞお使いください」

ライフルのために命投げ出してたまるか。

夏川「ぅおぃ!?何貸してんだテメエ!?」
オレ「黙れ!オレの命がかかってるんだ!」
夏川「俺の命もかかってんだよ!!」
オレ「アンタの命なんかどうでもいい!!」
夏川「言い切ったなテメ(バンバン)おわああ!?殺されてたまるかぁぁ!!」
優子「……逃がさないわよ」

夏川モヒカン逃亡。木下姉追跡。

鉄人「まったく、アイツらは……」
久保「僕は木下さんを止めてきます」
鉄人「ああ、頼む。……殺されるなよ？」

教師がその台詞を吐くのはどうかと思う。

常村「夏川……俺ァお前のことは忘れないぞ……」
明久「先輩も大概酷いですね……」

まあアレは自業自得だししょうがないだろ。

マリーナ「ちょっと早く下ろしなさい！！」
鉄人「暴れるな！貴様は補習だ！」
マリーナ「補習って何よ！？」
雄二「ここでも補習やるんだな」
鉄人「当然だ。例えどこにいようと戦死すれば補習だ」
オレ「逆に聞きたいんだけど例えば瑞希が女子風呂の中で腕輪を使って誰かと模擬試召戦争して戦死したら補習に連れてくのか？」
鉄人「……人権は尊重する」
オレ「強制連行の時点で尊重されてないだろ」

まさかそこまでするのか？やっぱ文月学園って潰れたほうがいいかもしれない（社会的ななんとやらで）。

鉄人「そういう時は高橋先生が補習室まで連れてきてくれるから安心しろ。吉井も殺気を立たせるんじゃない」

まるで親の敵を目の前にしたかのような形相で鉄人を睨む明久。
気持ちは分かるが抑えて置けよ？

オレ「落ち着け明久。ナイフは頚動脈を掻き切るときだけ使え。それ以外のときは銃のほうが的確に殺れる」
明久「そうだね。さすが真琴だよ」
美波「真琴が落ち着きなさいよ！ていうかこの話題振ったのアンタだし！！」
オレ「全ての悪に終わりを！」
美波「この場合の悪はどっちかって言うと真琴よ！」

バカな。いつオレが悪になった。

マリーナ「……いいかげんに下ろしなさいよ」
鉄人「だから貴様は補習だ！」
マリーナ「だから何で生徒会長である私が補習なんて受けｎ」

あ。強制連行されてった。
てかここにも補習室ってあるんだなぁ……

優子「あー。すっきりしたわ。峰嶋君。コレ返すわね」
オレ「え？ああ。……お前何発撃った？」
優子「え？軽く１７、８０発くらいだけど？」

基本的にオレのライフルの銃弾の装填数は２００発（その全てを撃ちつくすと最後の一発発射直後からカウントして２４時間後に同数補充される。弾が尽きるまでは補充できない）。コイツが借りに１８０発撃ったとして、残りって２０発程度しかないんじゃ……

オレ「今のうちに撃って補充しておくか……」

それにしても撃ちすぎだ。
いくら物理干渉持ってるからって普通一般人はライフルなんか使え

ない。オレも使ったこと無いぞ。それを撃ちまくるなんてどういうことだ？

夏川「……死ぬかと思った」
常村「夏川、よく生きててくれたな……！！」

さすがにコレは同情しそうだ。

？？「あ、あの、皆様……」
オレ「ん？」

後ろから声がして振り返ってみると、大人しそうなメガネをかけた女子が一人……って

オレ「おい。小学生が混じってるぞ」
？？「ち、違います！これでも立派な高校１年生です！」

☆ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ☆　世の中には不思議な事もあるもんだ。

メイ「私、さっきのマリーナの妹でメイって言います。よ、宜しくお願いします……」

消え入りそうな声で自己紹介をするメイ。
というか……

オレ「……どうしてオレを避ける」

コイツ、さっきから瑞希の後ろに隠れてばっかでオレから距離をとろうとしまくりやがってる。

雄二「お前がどうしようもない暴力野郎だってわかったからじゃないか？」
オレ「初対面でゴリラコール受けたバカは黙ってろよ」
雄二「殺すぞテメエ」
オレ「その台詞そっくりそのまま返してやる」
メイ「い、いえ、そうじゃなくて……」

そうじゃない？というかそうであられては困るんだけど。

メイ「さっきの召喚獣の武器にそちらの方が触っていたので……もしかして観察処分者かなって……」
オレ「そうだけど？」
メイ「ひっ！ゆ、許して！」

オレなんもしてないんだけど。

美波「ちょっと！年下の女の子泣かせるなんて最低よ！」
瑞希「もうちょっと考えてください！」
優子「男として恥ずかしくないのかしら」
翔子「……最低」
オレ「ちょっと待て！！今の会話のどこに怯える要素があった！？」

観察処分者ってことで罵倒は受けたことあるけど怖がれたのは初めてだぞ！？

メイ「だ、だって、文月学園の観察処分者は人の腕を笑いながらへし折る人だって……」
Fクラス勢「「「「「「「「……」」」」」」」」

どうしよう……。否定できない……！！

利光「いやいや、吉井君がそんなことする訳ないじゃないか。ねえ吉井君」
明久「う、うん……」
優子「そうね。峰嶋君ってずる賢い所はあるけど、そんなに乱暴でもなさそうだし」

その評価は今すぐ取り消していただきたい。

メイ「そ、そうなんですか……？でも、お姉ちゃんは『観察処分者は人殺しもいとわない最低の人間だ』って……」
オレ&明久「「生徒会長ォォォォーーーーー！！！？」」

あの女なんちゅう噂吹いてんだ！？どこの世界にそんな残虐な人間がいるんだよ！？

雄二「あの生徒会長結構腹黒いな……」
瑞希「酷いです！そんなデタラメを言うなんて」
美波「真琴は案外臆病で甘えんぼだからそんなこと出来る訳ないのよ！」
オレ「そのフォローはフォローになってねえぞ！？」

案外臆病で甘えんぼって何だよ！？
さてはあれか！？強化合宿のときの心理テストが尾を引いてるのか！？

オレ「ってこの話題はもういいだろ……。観察処分者なんて、物理干渉とフィードバックを除けば別に何も特別じゃないしな」
明久「そうだね」
オレ「オレの場合は別口で疲労が来てるんだけどな……」

明久「あ、はは……」

ちなみに長月の生徒ならオレが生徒会長下したときに一斉に逃げ出したぞ？

メイ「あの、とても話がそれてしまったんですけど、皆さんが宿泊する場所にご案内します」

全員「「「「「……え？」」」」」

それはつまり……オレ達はこの学校の寮みたいなものに泊まるってことか？

第八十五話　メイと鉄人とまさかの留学生（後書き）

そして戦争は巻き起こる……

「ババア……ブチコロス……」ｂｙとある人外な天才少年

オリキャラ紹介？&腕輪の説明&教科のあれこれ（前書き）

今回は今のところ登場しているマリーナ&メイの設定紹介と真琴の大量にある能力の設定紹介です。
若干ネタバレありかも。

オリキャラ紹介？&腕輪の説明&教科のあれこれ

☆キャラ紹介☆

マリーナ＝クロムウェル

高校２年生　１６歳

金髪藍眼で身長は１６０ｃｍ前後。胸はＡカップ。髪は肩にかかる程度。

長月女学院の生徒会長で、第２学年の学年次席。

理数系の教科においては４００オーバー、文系科目でも３００後半の点数を取る。

一年に妹のメイがおり、普段の学校生活では過剰な接触を避けようとするも、その裏では誰よりも妹を心配する。若干シスコンの気あり。

召喚獣の装備は迷彩模様の軍服にジャックナイフが二本、脚部に拳銃を隠し持つという軽装備。それゆえに俊敏な動きを得意とし、接近戦を何よりも得意とする。Ａクラスながら、観察処分者並みの操作技術を有し、教科によっては教師すら圧倒する場合もある。過去に物理フィールドで物理担当の教師を接戦で下した経験あり。

腕輪の能力は不明。

メイ＝クロムウェル

高校１年生　１５歳

姉のマリーナと同じく金髪藍眼の美少女。髪を腰まで伸ばしている。胸は姉よりも大きいＢカップ。

身長は１３７ｃｍ（長月学園唯一の合法ロリとして有名。その手の趣味の人に人気）。教師ですら時々小学生と間違える。

所属クラスは１年Ｂクラス（１年生はクラス分けが成績に左右されない）。基本的に成績自体はあまり良くなく、総合は文月学園のＤクラス中堅（１５００点）程度。唯一日本語科目のみ教師レベル。それ以外の教科はよくて９０、悪いと６０と酷いときはＦクラスレベルまで落ちる。

日本語の発音及び読み書きを得意とし、日本文学をこよなく愛する。

成績の悪さから、普段の学校生活では姉との接触を避けられているが、その裏で姉が誰よりも自分を心配してくれていることを知っており、姉の生徒会長としての立場を守るためにも表立った接触は避けようと意識している。こちらもややシスコン気味。

他人とコミュニケーションをとることを苦手とし、姉に『観察処分者は冷酷で残虐』と教えられた（吹き込まれた）ため明久と真琴に対して異常なまでのおびえを見せる。自分から誰かを嫌悪することは少ないが、その気弱な性格からたびたび苛めの的となり、それもコミュニケーションをとることを苦手とする理由の一つとなっている。

召喚獣の装備、腕輪の能力、操作技術、全てが不明。

葉山　唯

数学、日本語担当教師　【年齢はヒ・ミ・ツ】歳

長月女学院の教師の一人。第2学年Aクラス担任。
担当教科は数学と日本語で、両者において６００点以上の点数をとり、それ以外の教科も腕輪クラスの点数を取る才女。

身長１８０ｃｍを超えるスレンダー美人で、胸のなさも逆に魅力としてしまうほど。学園内の男性教師に絶大な人気を誇り、やっぱりそっちの趣味の生徒にも人気がある。
見た目とは裏腹にかなりの体力を持ち、学生時代は陸上部。

生徒と真っ直ぐ向き合うことを信条にしており、鉄人を教師として尊敬する。

好みの男性のタイプは強くて優しくて面倒見が良くて肌が黒く、トライアスロンなどのスポーツをたしなむ人。基本鈍感。

召喚獣の装備、腕輪の能力、ともに不明。教師なので、物理干渉能力を有する。

☆真琴の腕輪☆

・バージョン？（ファースト）

第一の腕輪　属性付加

右手の大剣に炎、左手の大剣に雷をまとわせる（攻撃力は通常の２倍。非常にチートくさい）。
汎用性がなく、真琴自身ほとんど使ってない。

第二の腕輪　決闘（デュエル）

自分と選択した対象を異空間に閉じ込める能力。
どちらかが戦死するまで出ることは出来ない（真琴本人にも解除不可）。
自分以外の人間を自分の代わりに閉じ込めることが可能。ただしその場合、閉じ込めることができるのは同じクラスの人間のみ。
閉じ込められた相手は、例外を除いて点数が半分になる。真琴本人と、真琴の代わりに入った人間はコレにあてはまらない。
閉じ込めた相手の点数によって消費点数が変動する。自分以外の人間を代わりとして閉じ込めた場合は、その人物の点数も含めて点数を消費する。

・バージョン？（セカンド）

第一の腕輪　無効

飛んでくる腕輪の特殊攻撃を無効化する。一度使用するごとに１００点消費。
あくまで無効化できるのは腕輪による特殊攻撃のみで、武器攻撃や格闘には対処できない。

第二の腕　獣化（ビースト）

装備を全て破棄し、召喚獣を獣化させる。獣化時には点数が2倍になり、操作も半自動化（〇〇を攻撃するなどと言った、おおまかな指示はできるが、攻撃方法などの精密操作が出来なくなる）される。獣化時間は真琴と召喚獣の同調率や、真琴の精神状態に比例する。通常、同調率が高いほど維持時間が長くなり、冷静なときほど維持時間が長くなる。ただ、例外も有り、怒りなどで半永久的に獣化を維持することも可能。
獣化が切れると点数が獣化前の１０％になる。強制解除した場合は５０％。

・バージョン？（サード）

第一の腕　零戦砲（ゼロセンホウ）

右腕から高密度のエネルギー砲を発射する。これは砲撃面積を狭くする（圧縮する）ことで攻撃能力を上げることも可能。
消費点数を自由に調整でき、消費点数によって威力や速度などが変動する。
わずかながら発射の反動が来るため、それを利用しての移動なども可能。

第二の腕　防御障壁（ウォール）

２００点を消費して防御障壁を張る。元ネタは『エヴァンゲリオン』の『ＡＴフィールド』。
かなり堅い障壁で、破るにはかなりの攻撃力が必要となる。
一度に張れる枚数は一枚までで、それ以上の枚数を張ろうとすると

古い方が消えてしまう。

・バージョン？（フォース）

第一の腕輪　大天使（ガブリエル）の翼

８枚の純白の翼を生やす能力。元ネタは『とある魔術の禁書目録』の『未元物質』。
飛行、防御、攻撃、あらゆる方面で多様な応用性を誇る。
それ以上の詳細は不明。

第二の腕輪　不明

・オカルト召喚獣

第一の腕輪　落雷

７０点を消費して指定した地点に落雷を落とす能力。落雷落下地点は淡く光る。

第二の腕輪　地点移動

召喚獣をある一点からある一点に移動させる能力。元ネタは『とある魔術の禁書目録』の『座標移動』。
ただし移動可能な物体は『自分自身以外の召喚獣』に限り、元ネタと同じく非常に高い座標計算能力が必要となる。
真琴はコレを利用し、相手を黄龍の口の中へと移動させ、そのまま噛み砕くという技を開発するも『口の中が血の味でいっぱいになり

気持ち悪い』という理由で使われなくなった。
一回使用するごとに１００点消費。

第三の腕輪　潤造雷斬（じゅんそうらいざん）

他作者様発案の、落雷以上の攻撃性能を誇る電撃。一回使用するごとに１００点消費。
非常に攻撃力が高く、Ａクラス下位レベルなら一撃で葬ることが可能。
また、相手が観察処分者でなくともフィードバックが行き渡るため、真琴自身も使用を控えるようにしている（ただし常夏コンビは別）。

指輪の能力　装備変更（デフォルトチェンジ）

２００点を消費して別の装備に変更する能力。変更可能なのは過去に習得したことのある物のみ。
初期装備は一番最近に手に入れたものになる。

☆文月学園と長月女学院の教科の違い☆

～通常、文月学園で試召戦争に用いられる１０教科～

数学
物理
化学

英語W（ライティング）
現代国語
古典
日本史
世界史
現代社会（政治・経済など）
保健体育

～通常、長月女学院で試召戦争に用いられる１０教科～

数学
物理
化学
日本語
ロシア語
英語
ロシア史
世界史
政治経済
保健体育

ロシア語、ロシア史については完全に作者のオリジナル科目。そんなものが現実にあるかどうかなんて知りません（オイ）。

試召戦争を行う場合は、

日本語⇔現代国語
ロシア語⇔古典
ロシア史⇔日本史

政治経済⇔現代社会

となる。

オリキャラ紹介？&腕輪の説明&教科のあれこれ（後書き）

次回は本編です。

第八十六話　開戦と戦争と激戦の予感（前書き）

ＬＡＮ武さん感想ありがとうございます！

やっぱロシア編って書くの大変……

なによりキャラの名前考えるのが……ロシア人の名前なんてしらねーよ！！

なんて叫びませんよー？黙々と作業続けますよー？

ネーミングセンス皆無だなんて聞こえませんよー？（超涙目）

第八十六話　開戦と戦争と激戦の予感

バカテスト　日本史

問　以下の（　）にあてはまる歴史上の人物を答えなさい。

楽市楽座や関所の撤廃を行い、商工業や経済の発展を促したのは（　）である。

姫路瑞希の答え

『織田信長』

教師のコメント

正解です。

島田美波の答え

『ちょんまげ』

教師のコメント

日本にはもう慣れましたか？
この解答を見て先生は少し不安になりました。

吉井明久の答え

『ノブ』

教師のコメント

ちょっと慣れ慣れしいと思います。

峰嶋真琴の答え

『ハゲ』

教師のコメント

ちょっと職員室まで出頭を命じます。

メイ＝クロムウェルの答え

『織田信長』

教師のコメント

正解ですが、何故あなたが日本史のテストを受けているのか聞きたいですね。

メイ＝クロムウェルのコメント

ごめんなさい……。興味があったので……

マリーナ＝クロムウェルの答え

『ドストエフスキー』

教師のコメント

清々しいほど明後日の回答ですね。妹さんに日本史を教えてもらってはどうでしょうか？

マリーナ＝クロムウェルのコメント

……考慮するわ。

明久ＳＩＤＥ

僕「うわ……」
真琴「おいおい……どこの高級ホテルだコレ……」
雄二「すげぇな……」

久保君を含めた僕ら男子６人が連れてこられたのは超高級ホテルも顔負けのスイートルームみたいな部屋だった。
あれー？てか僕ら一応Ｆクラスなのにこんなにいい設備なの？

メイ「この部屋は毎年留学生の皆さんが使う部屋の一つだそうです。今年は６人なので、ベッドを６つに増やしただけですが……」
真琴「これはいくらなんでも豪華すぎだろ……。こんなソファウチにもないぞ……？」

真琴が置かれているソファの一つを押してみる。思いっきり沈んだ。これは相当ふかふかだ。

雄二「凄いな。まさに高級ホテルだ」
康太「……冷蔵庫も完備」
秀吉「このテレビ液晶じゃぞ……しかも５０型とかでかすぎじゃろ……」
利光「個室なのにお風呂がかなり大きいよ。これなら全員一度に入

れるかも……（タラー）」

なぜか久保君が鼻血をたらしていた。それを見て他の４人が何か気まずそうにしている。

一体どうしたんだろう？

真琴「でかいのはかまわないんだが……」

メイ「？　何か不満があればできる限り対処するように言われてるのですが……」

真琴「美波と同室じゃないのが気に入らない……」

メイ「ふぇ！？おおお女の人と一緒がいいんですか！？そそそれって……／／／（ボン！）」

あ。処理落ちしてる。

雄二「流石にそれは無理だろ……。明久からも何か言ってやれ」

僕「僕も瑞希と一緒じゃないとなんかな……」

雄二「お前もか！？」

秀吉「できればわしもみどりと一緒が良いのじゃが……」

雄二「秀吉まで！？クソ、俺一人じゃツッコミが追いつかない！！ムッツリーニか久保に応援を……」

康太『……女子の浴槽もコレ位の広さなら……！！（ブシャアアア）』

久保『吉井君とお風呂……吉井君とお風呂……』

雄二「ダメだ！自分の世界にトリップしてやがる！！」

とまあ冗談は置いておいて……

僕「こんないい設備なのって不自然だよね」
真琴「そうだな。オレ達一応Fクラスなのに」

Fクラスの僕らがこんなに優遇されてるなんておかしい。
はっきりいってダンボールとか出てくるんじゃないかとか思ってたのに。

メイ「留学生はクラスに関係なく毎年この設備らしいです。それから藤堂学園長から伝言があるんですけど……」
僕&真琴&雄二「「「ババアから？」」」
メイ「学園長をババア呼ばわりですか！？」
秀吉「おぬし等も相変わらずじゃの……」
康太「……でもババアだから仕方ない」
利光「まったく、やっぱりFクラスはほんの少しだけ一般知識が足りてないかもしれない気がしないでもないかもしれないよ」

久保君が何を言いたいのかさっぱりだ。

※暇な人は久保君の結論を求めてみてください。

真琴「それで、伝言ってのは何なんだ？」
メイ「はい。荷物の整理が落ち着いたらもう一度体育館に集まるようにと……。そこで顔合わせをするそうです」
真琴「顔合わせ？」

どういうことだろう？
自己紹介ならさっきやったけど。

メイ「あ。私も準備があるのでこれで失礼しますね」

そういうとメイは足早に出て行った。
さて……

真琴「女子部屋に行くか」
僕「そうだね」
雄二「行かせるか」

邪魔された。

利光「吉井君。君と姫路さんの関係を邪魔するつもりはないが、僕らは仮も文月学園の代表なんだよ。もう少し品性のある行動をとるように心がけないと」
僕「う……」

た、確かに久保君の言うとおりだ……

利光「だからそういうことは男同士、つまり僕と吉井君とでやるべきだと思うんだ」

あれ？なんか今おかしかったような……？

雄二「思いっきり邪魔してんじゃねぇか……」
真琴「まったく、同性愛なんて下らないもの見せられるこっちの身にもなれよな」
秀吉「今日の久保はやけに積極的じゃのう」
康太「……コレはコレで売れる」

あれ？なんか僕の貞操がピンチになってる気が……？

僕「く、久保君。男同士って、そっちのほうが品性がないと思うけ

ど？」

利光「……そうだね。僕としたことが少しあせっていたよ」

どこのなににあせっていたのかぜひ教えて欲しい。

真琴「まったく、下らないことやってないで行くなら行くぞ」

僕「そうだね。瑞希達を待たせるわけにも行かないしね」

利光「峰嶋君。下らないというのは止めてもらえないかな」

真琴「黙れホモ。次変なことしたら頭の名前を『利光』から『久保』にするからな」

久保「やれるものならやってみれば…ってもうなってるのかい……？」

あ。本当だ。

久保「まあいいさ。その程度で僕は止められないからね」

なんだか今日の久保君からはやけに得体の知れない恐怖と悪寒を感じるなぁ……

真琴ＳＩＤＥ

明久「あ、瑞希！」
瑞希「明久君！」

どうやらオレら以外の全員が集まってたようで、文月女性人、メイやさっきの生徒会長を含めたえっと……６人と、鉄人に葉山先生、ババアと知らない男の人とついでに常夏コンビ。

常夏「「おい！今お前俺達をついでって言ったろ！！」」
オレ「へ？それがなにか？」
夏川「クソ！舐めやがって……！」
常村「いまここで胆試しのときの仕返ししてやろうか！？」
オレ「出来るもんならやってみろよクズコンビ」
ババア「やめなクソガキ。こんな大勢の前で、恥さらすんじゃないよ」

ババアが止めに入る。まあどうでもいいけど。

知らない男「これでは勝負にはならないようですな。藤堂学園長？」
ババア「ハッ。それはどうかね？この子らはうちの学園でも召喚獣バトルにおいては飛びぬけて優秀さね。今まで見たいに勝てると思わないほうが身のためさね」

あれあれー？なんか知らないおっさんとババアが火花散らしてる？
てか……

オレ「このおっさんは誰だ？それから勝負ってなんだよ」
桐生「おっさんとはまた随分な物言いだね。私はこの長月女学院の理事長を務めている桐生(きりゅう)輝月(みつき)だ。よろしく」
オレ「ふーん。どうもとだけ言っておくよ」
桐生「ぐ……まあいい」

あれ？なんか機嫌損ねちゃいました？
でもそっちもムカつくこと言ってくれたしお互い様だよねー？

明久「あの、桐生理事長？勝負というのは……」
桐生「知らされてないのかい？まったく、藤堂学園長？」
ババア「……勝負って言うのはここにいる文月学園代表１４名対長月女学院６名の試験召喚戦争のことさね」
オレ＆明久＆雄二「「何ィィ！？」」」

は！？なにそれ聞いてねえぞ！？

明久「そんなの聞いて無いですよ！？」
雄二「どういうことだ！？」
ババア「ああ五月蠅いガキ共だね。今から説明してやるから黙って聞きな」

てか何でオレらには事前連絡が来てなかったか聞きたいんだよこっちは!!

瑞希「あの……明久君、実は知らされてなかったのは明久君たち3人だけなんです」

美波「アンタ達じゃ何しでかすか分からないって学園長が」

翔子「……私たちは知らされた。でも雄二達には言うなって学園長が」

3バカ「「「ババアァァーーーーー!!!!!!!!」」」

畜生!やることがえげつねえぞ!!

ババア「ああもう黙りな!今から説明してやるさね!」

オレ「クッソ……!次隠し事したら専属技師やめっからな!!」

ババア「脅迫とはアンタも大概酷いさね!?」

オレ「黙れ!妖怪みたいな醜悪な容姿しといてほざくな!」

と・に・か・く!その勝負ってのをさっさと聞かせろ!

ババア「はぁ……。じゃあルールを説明するよ。この紙を読んで置くように」

オレ「どこも説明じゃねえじゃねえかぁぁーーーー!!!」

一ミリも説明してないババアに突っ込みをいれながら紙を受け取る。

なになに……?

?勝負方式は長月生徒4名対文月生徒5名によるハンティング。移動する教師用召喚獣5体をより多く倒したほうの勝ちとする。

?決められた代表が戦死した場合は、戦死したほうの負けとする。代表は、常に戦争に参加しなければなら無い。

?勝負は3日間3回戦に分けて行う。トータルで勝利数の多いほうの勝ちとする。

?一度の勝負で倒した召喚獣の数が同じ場合は戦死者の少ないほうを勝ちとし、戦死者も同数の場合はサドンデス一回勝負で勝敗を決める。

?戦争は朝の9時から始め、3時間ごとに30分の休憩を挟み、夕方の5時に終了とする。

?戦争中は常に召喚獣を呼び出しておくこと。3分以上召喚を行わなかった場合は戦死扱いとする。

?戦争中は相手チームの生徒に試召戦争を仕掛けても良い。

?今回に限り、敵前逃亡は戦死扱いにならない。

?フィールドは長月女学院の、学生寮、トイレ、体育館を除いた全ての敷地とする。それを大きく10にわけ、召喚フィールドを展開する。

?戦死者はその日の戦争が終わるまでは補習とし、翌日からは戦争に参加することができる。

?戦争に参加しない生徒は、全員体育館に集合すること。

?文月学園側は、長月女学院に対し地理的に不利なため、5人で勝

負することができる。

？両チームとも、事前にその日参加する４名（文月学園は５名）を書いたリストを提出すること。そのリストに記入されていないメンバーの参加は原則的に認めない。

なるほど。つまり敵を殲滅して教師召喚獣も殲滅しろと。

オレ「やることが明確な分楽でいいな」
ババア「そうやって楽観してると痛い目に会うよ」

まあ確かにババアの言うとおりだな。
瑞希なんかは体力がないから途中でメンバー変更できないってあたりはキツイルールだし、このクソ広い学園全てが戦場かと思うとオレもうんざりするし。

夏川「やっと去年の雪辱戦ができるな」
常夏「今年は絶対負けないからな」

なんか常夏がほざいてる。
まさかコイツら……去年負けてたのか？

明久「ねぇ真琴」
オレ「ん？なんだ？」
明久「あとでルール教えて？」
オレ「分かったから黙ってろバカ」

コイツ、理解能力が乏しいにもほどがあるぞ……

桐生「まあルールは各自覚えておいてくれ。それではこちらの代表生徒を紹介させてもらうよ」

そう言っておっさんが並んでる6人を指す。
別に紹介なんかしてくれなくてもどうせ倒すんだからいいとも思うんだけどなー？

キィナ「えと……初めましてです…。キィナ＝ロレンツォと申します…。一応二年Aクラス代表です…」
マリーナ「しっかりしてください代表、一応じゃなくて、しっかり代表ですから」

えっと、キィナさん？だっけ？
なんか霧島とはえらい違いだなぁ……。
こりゃあ生徒会長がそこの準ヒステリアなのも分かるわ……

マリーナ「さっきも言ったけど、私はマリーナ＝クロムウェル。生徒会長と第二学年次席をしています」

びっくり仰天。まさか準ヒステリアが学年次席とは……

エレナ「ハーイ。私はエレナ＝ハーティリーだよ。んでもって……」
エリナ「エレナの双子の姉のエリナです。宜しくお願いします」

今度は木下姉妹と同レベルの神様もびっくりな双子だ。
うわ。コレ違いがわかんねぇ……

秀吉「今木下“姉妹”と言われたような気がするのじゃが……？」

オレはいつだって秀吉の味方だ。

ん？この二人……

オレ「もしかしてさっき生徒会長の横にいた……」
エレナ「お！君正解！」
エリナ「はい。先ほどは出番が有りませんでしたから……
みどり「あたしの出番も欲しいんだけど～？」

ということはこの二人も生徒会？
しかしこれは黙られたら絶対違いが分からないな……

レナ「で、ウチがレナ＝カリュート。よろしくね」
康太「……」
オレ「ん？どうした？ムッツリーニ」
康太「……コイツからは、俺と同じにおいがする」
オレ「ふむふむ。変態、と……」
康太「……！？（ブンブンブン）」

いや、ムッツリーニと同じって時点で変態は確定だろ……

メイ「あ、あの……」
オレ「……お前も代表か？」
メイ「あ、は、はい！メイ＝クロムウェルです。宜しくお願いします……」
瑞希「宜しくお願いしますね。メイちゃん」
メイ「は、はい！」

やっぱまだちょっと避けられてる気がする。
というか怖がられてる？

雄二「どうやらお前のことが怖いらしいな（ニヤニヤ）」

オレ「テメエ……あとで覚えてやがれよ……」

それはさておき、これで全員の自己紹介が終わったわけか……

ババア「それじゃ後は代表を決めるだけさね。峰嶋やりな」

オレ「やっぱりか……」

ババア「当然さね。アンタなら体力もあるし、点数だってずば抜けてるだろ？」

オレ「へいへい。りょーかいだ」

また面倒ごとが増える……

マリーナ「こっちの代表は私です。そちらは峰嶋君でいいのね？」

オレ「おう。オレが代表……てか大将だな」

常夏「「待てコラ」」

オレ「ん？」

なんか文句ですか？常夏先輩。

夏川「お前が代表だなんて納得いかねえ」

常村「今すぐ俺と代わりやがれ！」

オレ「明久に負けたくせに何いってんの？」

明久『うぅ……なんか僕に負けると恥みたいな言い方されてる……』

あ。ヤベ。

マリーナ「あら、どこのハゲかと思ったら、去年私にボコボコにされたハゲじゃない」

オレ「なんだ。ここでも負けてたのか」

マリーナ「私に負けて、後輩にも負けるなんて無様すぎて笑うことも出来ないわ」

オレなんかこの人と気ィ会う気がしてきた。

常夏「「ぐ……！」」
ババア「もう決めちまったさね。諦めな」
常夏「「ババアァァ！？」」

やばい。面白いｗｗ

オレ「んじゃ終わりでいーか？」
桐生「ああ。かまわないよ」
オレ「ンじゃちょっくら下見行ってくるわ」

一応代表なわけだし、どんなところなのかある程度把握し解かないとな。

明久「あ。僕も行く」
瑞希「私も行きます！」
美波「待って！ウチも！」

なんかいっぱい来たぞ。別にいいけど。

メイ「じゃ、じゃあ私も「アンタはこっちよ」ひゃぅ……」

……さっさとすませてこよ。

第八十六話　開戦と戦争と激戦の予感（後書き）

細かいキャラ設定は一話ごとに入れていきます。

第八十七話　鉄人と唯先生　～あれ！？意外なＣＰ！？いえいえ、この人たち鉄

月さん、ＬＡＮ武さん感想ありがとうございました！

意外なＣＰ登場。ゑ？オリキャラ紹介のときに予想できた？

ＨＡＨＡＨＡ！何を言ってるんですか？

……鉄人って妻子持ちじゃなかったよね？

第八十七話　鉄人と唯先生　～あれ！？意外なＣＰ！？いえいえ、この人たち鋼

☆長月女学院代表生徒紹介！☆

キィナ＝ロレンツォ　１６歳

長月女学院第二学年主席。金髪を三つ編みにして肩にかけている。瞳は翠色。
おどおどした性格でありながら、試召戦争では的確な指示を出すなど、リーダー性あふれる人物。
緊張しやすいため、生徒全員の前に立つ生徒会長の座をマリーナに譲る。

基本的に文系科目のほうが点数は高い。が、理数系においても４５０点以上の高得点を記録するなど、学年主席の名に恥じない成績の持ち主である。総合科目は５０００～５２００点。

召喚獣の装備、腕輪、操作技量全てが不明だが、過去の戦死経験が一度も無いという経歴がある。
Ａクラス代表という、前線での戦闘にはもっとも遠い立場でありながら、かなりの操作技術を持つと推測される。

『あ、あの…宜しくお願いします…』

レナ＝カリュート　１６歳

長月女学院Ａクラス所属。短く切った茶髪と緋色の瞳が印象的な少女。若干愛子とキャラが被っている。

性格は陽気で自由奔放、常識や固定概念に捕らわれない柔軟な思考の持ち主で、戦闘においてはその柔軟な思考をフル活用しさまざまな作戦を企てる。前線の部隊長を務めることが多い。

数学、化学、ロシア史は４００オーバー。それ以外の教科でも３００点を超える超高得点の持ち主。保健体育は７００オーバー（愛子とキャラ被り）。

召喚獣の装備、腕輪の能力、操作技量全てが不明。

一切の情報ナシ。

『うーん?保健体育のエキスパートは二人も要らないよね?』

NO　SIDE

職員室。そこには今のところ二人の教師だけが座っていた。
一人は文月学園教師、鬼の補習担当通称『鉄人』こと西村宗一。
もう一人は長月女学院教師、数学と日本語担当の葉山唯。
二人は黙々と自分の作業を続けていた。

唯「……西村先生、コーヒーを入れましょうか？」
鉄人「あ、すいません。お願いします」

唯はコーヒーを入れるかどうか鉄人に尋ねる。それに対し、鉄人は首を縦に振った。

唯「どうぞ」
鉄人「ありがとうございます」

唯からコーヒーを受け取る鉄人。
それをズズズ……と飲む。

鉄人「はぁ……。暖まりますな」
唯「そうですね。この辺りは一年中氷点下ですから」

唯は窓の外を指差しながら言う。
窓の外は猛吹雪だった。

鉄人「そうなんですか。しかし文月学園もおかしな生徒が多いですが、こちらも一風変わった生徒がいますな」
唯「あら？それは誰のことでしょうか？」
鉄人「身長１４０ｃｍの小学生みたいな子のことです」
言うまでもなくメイのことである。
唯「あれはあれでいいのですよ。“合法ロリ”ですから」
鉄人「葉山先生までおかしくならないでください……」
微笑む唯と頭を抱える鉄人。
傍からみれば十分カップルで成立しそうな空気である。
唯「それにしても西村先生は生徒と仲がいいんですね。“鉄人”だなんて愛称で呼ばれて」
鉄人「そういいもんじゃありませんよ。吉井と坂本、峰嶋の三人にはいつも手を焼かされています」
このときどこかの３バカが一斉にくしゃみをしたとかしないとか。
唯「あら、『出来の悪い子ほど可愛い』と言うじゃありませんの」
鉄人「出来が悪すぎて困ります。それなりに成績は上がってきているのだから、普段の生活態度をもう少し改めて欲しいものですよ」
唯「子供は元気が一番ですよ。ウチの学園の生徒なんて女の子同士であんなことやそんなことを……」
鉄人「待ってください。変態臭がします」
文月学園に一般常識は当てはまらない。だがしかしそれは長月女学院でも同じようだった。

唯「それに鉄村先生のような男らしくて素敵な先生に恵まれて……文月学園は本当にすばらしいところですね」
鉄人「貴方が鉄人と西村を組み合わせて斬新な苗字を作らなければ今の台詞もとても素敵なものでしたよ」
唯「あらごめんなさい。西村鉄人」
鉄人「はぁ…。もう鉄人で良いですよ」

珍しく鉄人が折れた瞬間である。

唯「西村先生。西村先生はどんな女性が好みですか？」
鉄人「そうですね……。あえて言うならスレンダーで身長の高い女性……ですかね」
唯「そんな人、そうそういないと思いますけど？」
鉄人「確かにその通りですね」

この二人、鈍感である。

鉄人「葉山先生こそどんな男性が好みなんですか？」
唯「私ですか？私は強くて優しくて面倒見が良くて肌が黒く、トライアスロンなどのスポーツをたしなむような人が好みですよ」
鉄人「そんな人もそうそういませんよ」
唯「確かにそうですね」

あえてもう一度言おう。この二人、鈍感である。

鉄人「寒いですね……」
唯「そうですね……」

どこまでも鈍感な二人は窓の外の猛吹雪に目をやり、小さく呟いた。

ある暗闇に包まれた一室。
そこにある一脚の椅子には長月女学院理事長、桐生禅几が座っていた。
そして桐生の前には二人の男。
一人はやせ細り、余分な脂肪の無い背の高い男。
もう一人は丸く太った、背の低い男。

桐生「私としても、君達のような金で動く人間には頼りたくないのだがね」

小太りの男「とかいいながらちゃっかり大金払っちゃったりしてるじゃないですか」
やせた男「俺らは金サえ貰えば１００％仕事を完了サセまスよ」
やせた男のほうは若干のなまりがあった。
桐生「１００％、ね……」
男たち「「？」」
桐生は１００％という単語に反応して、小さな笑みをこぼす。
桐生「いや、なんでもない。それでは宜しく頼むよ」
小太りの男「へい。峰嶋真琴。コイツを誘拐しろと」
やせた男「抵抗スる場合は殺シてもかまわない、でシたね」
桐生「そうだ。死体はどこかの雪山にでも放って置いてくれて結構だ」
男たち「「了解」」
男たちは要点だけを伝えられると、部屋を出て行った。
桐生「……ふぅ。あれだからならず者は困る」
二人が出て行ったのを確認すると、桐生はため息を漏らし、
桐生「この世に１００％などないのだよ。それでも、９９．９９％は存在するがね」
そう独り言を呟いた。

第八十七話　鉄人と唯先生　～あれ！？意外なＣＰ！？いえいえ、この人たち鉄人×唯先生のＣＰ！そして桐生理事長と謎の二人組み！どうなる！？極寒の夏休み！！

第八十八話　真琴とメイと動き出した二人組み（前書き）

ＬＡＮ武さん、月さん、唐笠さん、感想ありがとうございます！

今回からシリアス展開！

結構重いので苦手な方は注意してください。

第八十八話　真琴とメイと動き出した二人組み

☆長月女学院代表生徒紹介！☆

エリナ＝ハーティリー　１６歳
エレナ＝ハーティリー　１６歳

長月女学院２年Ａクラス所属。蒼色の髪と藍色の瞳をしている双子の姉妹。二人は言語を介さずとも息がピッタリあうほどのコンビネーションで、まさに以心伝心一心同体。

成績もほとんど同じな上に、得意教科、苦手教科もまったく同じ。ともにロシア史、世界史、ロシア語で４００オーバー、数学、物理で３００前後、それ以外の教科は３５０前後となっている。

召喚獣の装備、腕輪、操作技量全て不明。

真琴ＳＩＤＥ

オレ「…寝付けねえ……」

手元の携帯で時間を確認する。

もう2時過ぎなのに、眠くなるどころか目が冴える一方だ。

オレ「メイ、か……」

なんだろうな……。もう気にしてなかったはずなのに……。忘れていたはずなのに……。

いや、違う。

完全記憶能力を持っている時点で“忘れる”なんて出来ないんだ。

やっぱり、一生忘れることの出来ないままなんだな……

オレ「クッソ……！」

ベッドから跳ね起きる。なんとなく制服に着替えてオレは部屋を出た。

明久『真琴……』

部屋を出た後に明久がオレを呼んだのには気づかなかった。

オレ「くそぅ……どうして完全記憶能力なんか……」

望んだわけでもない。欲したわけでもない。

なのに、忘れたいことも忘れられず、こんな忌々しい記憶にいつまでもつきまとわられて……！

相棒『真琴……』

オレ「分かってるよ。こんなのただの逃げだって事くらい……分かってるけどさ」

相棒『もういいよ。誰だって辛いものは辛い』

全て選んだのは自分。何かのせいにして逃げようなんて都合のいい話だってことも。

相棒『それでも、何かのせいにしなきゃやってられない、か……』

オレ「人間なんてそんなもんだよ。いくら化け物だのなんだの言わ

れたって、所詮オレはただの人間でしかないんだから」

頭で理解することと、心で納得することは違う。
頭で理解しても、感情はそれを認めない。
感情が認めない限り、忌々しい記憶は一生付きまとう。

相棒『僕は君の“記憶”というデータでしか知らないけど……それでも』
オレ「待て……誰か来た」

相棒の言葉を遮って言う。
もう深夜もいいとこなのに誰だ？

メイ「あ……峰嶋先輩…」

タイミングいいなオイ。

オレ「こんな真夜中にどうした？」
メイ「え、あの、その、眠れなくて……（ササッ）」
オレ「……別に襲ったりしないから安心しろよ。てか、んなことしたら美波に１０回殺されるだろうが」
メイ「え！？美波って島田先輩ですか！？そ、そんな人が……」

いるんだなコレが。

メイ「……」
オレ「？　どうした？」
メイ「い、いえ、その、なんだか悲しそうな顔をしてたなって……」
オレ「……別に、んなことねえよ」

どうしてこう妙なところで鋭いんだ。

メイ「そう、ですよね！峰嶋先輩は点数もいいし強いし、悩みなんて無いですよね！」
オレ「お前オレの人間性に喧嘩売ってないか？」

いくら天才でも悩みくらいあるわ。

メイ「そんなことないですよ。私なんかと違って、先輩はとっても凄いです」
オレ「お前だって代表に選ばれるくらいなんだからトップクラスの成績なんだろ？」
メイ「私は……勉強なんて全然です」
オレ「じゃあ操作技術がずば抜けてるとか」
メイ「違いますよ。本当に勉強が出来ないんです。お姉ちゃんにも『Fクラスだけには絶対入るな』って言われちゃうくらいに……」

ふーん……。まあ生徒会長なら身内にFクラスがいるなんて絶対避けたい事態なんだろうな。
……くだらない。

オレ「メイ」
メイ「はい？」
オレ「それがお前の才能だ」
メイ「へ？」

しまった。省きすぎた。

オレ「お前はそうやって流暢に日本語話せるだろうが。外国人が日本語を話すってのは大変なことなんだよ。お前はそれができるんだ

から、十分に才能の一つなんだよ」

天性の才能かもしれない。努力による結果かもしれない。
どちらにしろ、それはコイツが立派に誇れることの一つなんだ。

メイ「そ、そうですか？あ、ありがとうございます……／／／」
オレ「どうした？顔が赤いぞ？」
メイ「そ、それは、そんな風に褒められたのが初めてだったから恥ずかしいというですか……」

何を緊張しているのか急にモジモジしだしたメイ。
そういやさっき、ムッツリーニと同じ種類の変態女が“合法ロリ”って言ってたな（立派な人権侵害だと思うのはオレだけか？）。

メイ「……ありがとうございますね」
オレ「別に。当然の事を言ったまでだ」
メイ「あ、いえ、そっちじゃなくて、相談に乗ってもらってというか……」
オレ「どっちにしろ気にすんな。別に大したことはしてないから」

相談か……できることならこっちが相談に乗って欲しいくらいだ。

メイ「じゃあ私、そろそろもどりますね」
オレ「そうだな。オレも戻って寝るわ」
メイ「おやすみなさい」
オレ「ああ、おやすみ」

そう言いあってそれぞれの部屋に戻ろうとしたときだった。

バンッ！！

オレ&メイ「！？」

辺りの電気が一気に消えた。

メイ「え…？せ、先輩……？」
オレ「こっちだ。こっちにこい」

とりあえずメイを呼び戻す。

メイ「み、峰嶋先輩……」
オレ「……オレから離れるなよ」

真っ暗……まさに何も見えない。
しかし……

オレ「眼は慣れねえな……。んでもってさっきからその辺うろうろしてるアンタはなんなんだ？」

さっきからゴキブリみたいながさがさしやがって……ウゼえんだよな……

小太りの男「へへへ……。ちょっとお前さんに用があってねぇ……」
オレ「こっちはテメエに用なんかねえよ。照明落としてまでこっちの視覚を塞ぎたかったのか？」
小太りの男「本当に頭の回るクソガキ……報告どおりだねぇ……」

報告？身近に共犯がいる？ババアの下らない実験か何かか？
……違うな。
いくらババアでもこんな意味不明なことはしないだろうし、なによりコイツ……

オレ「アンタ……結構強いね」
小太りの男「え！？分かっちゃう！？やっぱ天才って人を見る目があるね！！分かる人は分かるんだね！！」

……なんて分かりやすいデブなんだ。

メイ「先輩……」

メイがオレのズボンをぎゅっと握ってくる。

オレ「別に……あっちが強くてもこっちも強いわけだし……大丈夫だ」

あのデブ、多分その辺のチンピラなんてレベルじゃない。
多分、特殊な訓練を受けた軍人とかそういう感じの奴。
人を殺すことに、何のためらいも持たないような奴。

オレ「とりあえず用件を述べてもらおうか」
小太りの男「ほっ！俺達の狙いが君なのかそっちのちっこいなのかはっきりさせたいわけだ」
オレ「……アンタも相当頭が回るわけだ」

コレ本格的に拙いかも知れない。
多分このデブの標的はオレなんだろうけど……コイツは今俺“達”といった。

てことはこの近くにもう一人、最悪もっと沢山の仲間が潜んでるわけだ。

オレ「で、本当に何の用だ？こっちは大事な試合が控えてて忙しいんだけど」

小太りの男「別に。ただお前さんを殺せればいいだけさ」

単純明快な回答ありがとうございます。

このタイミングからして、黒幕は桐生のおっさんか？分かりやすいことこの上ないな。

小太りの男「それじゃちょっとついてきてもらえるかな？ウヒヒヒ……」

気持ち悪い笑みを浮かべながらオレが愛用しているのに近い形のジャックナイフを構えるデブ。

まずいな……メイを守りながらプロの傭兵レベルの相手を一度に二人はいくらなんでも無理がある。

そもそも戦闘能力や格闘技術は格段にむこうのほうが上なのに、さらに手数まで増やされたら勝率なんて０に等しくなる。

メイ「……！！」

オレ「大丈夫だ。お前はオレが守ってやる」

小太りの男「別にその子はどうでもいいんだけど……顔を見られたら生かしちゃおけねえってお決まりのパターン」

オレ「だったら顔隠してこいよウスラトンカチのデブ野郎」

小太りの男「ッ…！俺はデブじゃねえ！！」

メイを抱きかかえながらナイフを振り回してくるデブの攻撃を避け続ける。

そのとき

オレ「へっ！そんなの当たるわけが……がっ…」

いきなり後頭部に激痛が走る。
そしてそのまま倒れこんだ。

メイ『…！……！……！』

ぐ……。
メイが何を言ってるの聞き取ることが出来ず、オレは意識を手放した。

第八十九話　メイと知られざる秘密と襲撃開始（前書き）

ＬＡＮ武さん、月さん感想ありがとうございました！

更新遅くなってごめんなさい！！いろいろあったのです……ｏｒｚ

あれ？真琴以外のオリキャラ視点って今回が初めてでわ？うまく書けたか微妙です……

第八十九話　メイと知られざる秘密と襲撃開始

バカテスト　化学

問　以下の元素が発見された年と発見方法を答えなさい。

『ダームスタチウム』

姫路瑞希の答え

『発見した年：１９９４年
発見方法：重イオン線形加速器で加速したニッケル６２イオンを、鉛２０８に衝突させ、ダームスタチウム２６９を発見した』

教師のコメント

正解です。当初、ダームスタチウムは日本ではダルムスタチウム、またはダルムシュタッチウムと呼ばれていましたが、２００４年に日本化学会によって現在の「ダームスタチウム」という呼称に決定されました。こちらも覚えておくといいでしょう。

吉井明久の答え

『発見した年：１９９４年
発見方法：なんちゃら加速器で加速したなにかをなにかに衝突させ、ダームスタチウム２６９を発見した』

教師のコメント

うろおぼえでも君にとっては大きな進歩ですね。

峰嶋真琴の答え

『発見した年：２００９年
　発見（訂正）発射方法：メダルゲームのコインをローレンツ力で音速の３倍に加速させて一気に撃ち出す事により、多大な攻撃力を生み出した』

教師のコメント

誰も超電磁砲の発射原理なんて聞いていません。

メイＳＩＤＥ

う……さむっ

私「ここは……」

寒さで目が覚めた私は、辺りを見回します。どうやら何かの箱のようなものに閉じ込められているようです。しかも、手首を縛られています。

確か、急に照明が落ちたと思ったら峰嶋先輩が誰かと話してて、先輩が倒れたと思ったら口を何かで押さえられて……

私「あっ、先輩！」

見ると、横で峰嶋先輩が倒れていました。先輩も手首をロープのようなもので縛られていました。

私「先輩……！先輩……！！」

身体を揺さぶってみても全然起きそうにありません。

ど、どうすれば……？

声１「……？」
声２「……！……、……？」
声１「……。……」

……？

なにか話し声が聞こえるような……？

男の声『……しかし驚いたな。あのミネシマってガキ、なんちゃらなんとかシステムの研究者だってさ』
別の男の声『……試験召喚システム。科学とオカルトと偶然によって構成される未知のシステム』
男『その科学とオカルトと偶然ってなんだよ？科学とオカルトはいいとしても、偶然って不確定要素でしかねえじゃねえか』
別の男の声『……俺がソんなことを知っていると思うか？』

なんだか試験召喚システムの話をしてるみたいですけど……なんで？
いや、それよりも、峰嶋先輩がシステムの研究者って……？

男の声『で、そのどんちゃらがんちゃらシステムが……』
別の男の声『……試験召喚システムだと言っている』

……なんだかどんどん酷い呼び方になってます。

男の声『その試験召喚システムの軍事転用だったか？本当にそんなことができるのかよ』
別の男の声『サあな。それはあの子供が知っているだろ。ソれに俺達は言われたことを１００％完全に遂行するだけだ』
男の声『１００％ねぇ……。そういやあのおっさん、桐生だっけ？が『１００％は存在しない』とかほざいてたぜ？』
別の男の声『おい、依頼主（クライアント）の名前は出スなといつもいつも……』

え……？
桐生理事長が、この人たちを雇った……？峰嶋先輩を襲うように仕向けた……？
ど、どういうこと……？

男の声『はいはい。話を戻すが、それはつまりあのガキを使えば強大な軍事力を手に入れられるってことか？』
別の男の声『どうだろうな？ソれにはあの子供の協力が必要不可欠だ。あれはきっと協力などしてくれないだろうシ』
男の声『たはーっ、勿体ねえ。噂通りならムチャクチャ強えんだろ？召喚獣って。それを戦争兵器にできるなら最高の戦力じゃねえか』
別の男の声『今の日本は戦争に意欲的ではない。当然の成り行きだ』

こ、この二人が言ってることが本当だとすると、峰嶋先輩は、試験召喚システムの研究者で、試験召喚システムを使って戦争をしようとしたってこと……？

私「う、嘘……先輩が、そんなこと……」

一行に起きる気配の無い先輩をみつめます。
嘘……ですよね……？先輩がそんな酷いこと、するはず……

真琴「……うっ……」
私「！！」

先輩がうめき声を上げます。
お、起きたんでしょうか……？

私「せ、先輩……？」

真琴「……ここは……っ！」
私「先輩！？」

目を開けて身体を起こそうとした途端に先輩は顔を歪めました。

真琴「い、いや、ちょっと殴られたところが痛んだだけ……大丈夫だ」
私「そ、そうですか……？よかったです……」
真琴「…ん？手を縛られてるな」

先輩は後ろで縛られた手首をゆすりながら言いました。
そうでした……。先輩が起きても、手が使えないんじゃどうしようも……

真琴「ぐ……！ぐぅぅ……！！」
私「へ！？」

先輩の手首を縛っていたロープがブチブチと音を立てて千切れていきます。
い、一体何をしたんですか！？

真琴「ぐぅぅ…！！　やっとほどけたか……」

一気にブチン！と音が鳴ると、ロープの残骸がぱらぱらと落ちていました。

真琴「う、流石に無理矢理引きちぎるのはやりすぎか…。ほら、手首だせ。お前も縛られてんだろ？」
私「へ！？あ、は、はい！」

言われるがままに後ろを向いて先輩にロープをほどいてもらいま「終わったぞ」早すぎですよ!?

私「と、とっても早いですね……。ありがとうございます……」

真琴「いいよ。気にすんな。で、ここどこ?」

ガクッ

思わずずっこけちゃいましたよ……

私「分からないです。なんだか揺れてるし、トラックか何かの中みたいですけど……」

真琴「ふーん……」

どうしましょう……?言うべきなんでしょうか?

二人の男の事、桐生理事長の事、そして、峰嶋先輩のこと……

真琴「良くわかんねえけど……ようはこの壁をぶっ壊して外に出ればいいんだろ?」

私「な、何を言ってるんですか?何もないのにそんなこと出来るわけ……」

真琴「外は寒いだろうから、コレ着てろ」

私「わっ」

そう言って先輩自身が来ていた制服の上着を私に投げてきます。

真琴「さぁて、それじゃあ……」

そして拳を振り上げ……

私「ま、まさか素手で……！？」

真琴「恨みを最大限込めた襲撃の開始だぜ！」

一気に壁に打ち込みました。

第八十九話　メイと知られざる秘密と襲撃開始（後書き）

次回、真琴ＶＳ二人組みのマジバトル！

「愉快痛快学園コメディーじゃねえのかよ！？」ｂｙとある文月の最強少年

第九十話　雪原の戦闘と流れる鮮血と限られた命《タイムリミット》（前書き）

ＬＡＮ武さん、月さん感想ありがとうございました！

なんだかこの小説の原作が『バカとテストと召喚獣』でいいのか不安になってきた今日この頃です。

第九十話　雪原の戦闘と流れる鮮血と限られた命《タイムリミット》

バカテスト　化学

問　以下の元素を原子量の大きい順に並べ、その名称を答えなさい。

『Ｅｕ　Ｙ　Ｋ　Ｓｉ　Ｇａ　Ｕ　Ｎｅ　Ｔｉ　Ｎ』

姫路瑞希の答え

『Ｕ　：：ウラン
Ｅｕ：：ユウロビウム
Ｙ　：：イットリウム
Ｇａ：：ガリウム
Ｔｉ：：チタン
Ｋ　：：カリウム
Ｓｉ：：ケイ素
Ｎｅ：：ネオン
Ｎ　：：窒素
』

教師のコメント

正解です。流石姫路さんです。

吉井明久、峰嶋真琴、坂本雄二の答え

『Ｇａ：：が

K‥く
Eu‥え
N‥ん
Ti‥ち
Y‥ょ
U‥う
Si‥し
Ne‥ね』

教師のコメント

今すぐ学園長に謝ってきなさい。

峰嶋真琴のコメント

これって作った方にも問題あるのでは？

オレ「うっわ……油臭い……」

壁をぶち破って外に出る。

予想通りトラックで、燃料のガソリンの匂いが辺りに立ち込める。

ちなみに猛吹雪。

オレ「メイ、大丈夫か？」

メイ「は、はい、大丈夫でヘックシ」

オレ「それちゃんと着とけ。着込んどかないと凍死するぞ」

猛吹雪である。学校の制服だけでどうにかなるとは思えないしな。

メイ「あ、あの、先輩こそ、ワイシャツ一枚で大丈夫なんですか？」

オレ「耐えられないほどでは……ない」

けど寒いことは寒い。

オレ「あー……、ところでここはどこだ？」

メイ「ふぇ？……どこですか？」

周囲には何も見えないし、学園からはかなり距離があるみたいだ。

特に何も考えてなかったけど、実はトラック大破させちゃったんだ

よね……

……もしかして遭難？

小太りの男「な、なんだ！？何が起こった！？」
やせた男「ゲホゲホッ……あのガキ、なにシやがった……！！」
オレ「あ、いたんだ？」

うーん、オレ達以外にも人がいる可能性を考慮してなかったな。
てか、今の状況の元凶ってあの二人組みでわ？

小太りの男「このガキ…！テメエのせいで俺達まで酷い目にあったぞ！！」
オレ「自業自得だろ」
やせた男「最初から殺ス予定だったんだ、今ここで死ね！！」
オレ「それって死亡フラグな気がするんだが？」

どの道今から学園まで戻るにはかなり時間と労力がいるんだ。
……今ここでコイツらと闘り合っても問題ないよな？

オレ「丁度いい。こっちもアンタらにはいいようにやられて頭キテんだよな。憂さ晴らしも兼ねて雪の中に沈めてやるよ」

思いっきり怒気を込めて言う。

オレ「メイは下がってろ。それの物陰にでも隠れてろ」

顎で大破して横転したトラックを指す。
炎上してないし爆発はしないと思うんだけどなー。

オレ「で、さっきも言ったけど結構キレてんだよ。一方的にやられるなんてことにはならないよな？」

あらかじめ制服から抜き取っておいた二本のジャックナイフを構える。

さあて、どっちからぶち殺してやろ……

チャキ↑二人組みが銃を構える音

オレ「……オーマイガー」

ダンダン！

吹き荒れる猛吹雪に銃声が響く。

オレ「ちょっと待て！銃って卑怯だろ！？」

やせた男「最初から殺スつもりだといっただろう」

オレ「ンのヤロぉ……！」

一気にデブとの間合いを詰める

オレ「そっちがその気なら正当防衛だ！とりあえずデブ死ね！」

デブ「だからデブじゃねえ！！」

ナイフを（かなりの速度で）心臓めがけて突き刺そうとするが避けられた。

このデブ……速い！

オレ「ぬおわぁっ！？」

鼻の頭をギリギリ弾丸がかすり、薬きょうの臭いが鼻を刺す。

やせた男「……チッ」

オレ「『……チッ』じゃねえよ！？殺す気かこのヤロー！！」

やせた男「だから殺ス気だといっている」

オレ「黙れガリノッポ！！」

ガリノッポ「俺はガリノッポじゃない……！！」

あれ？ここからシリアスに持ってくのって無理なのでわ？

デブ「てかお前はなんでさっきから全ての弾丸を避けてるんだ！？」

オレ「え？ああ、見えてるから」

ガリノッポ「見えてるだと？」

オレ「そういう……こと！」

一気にデブの懐に潜り込む。

デブ「……！？」

オレ「素早いデブでも急に反応は出来ねえみたいだな！！」

そのまま右アッパー！

デブ「ゴぶ……っ！」

ガリノッポ「ガキが……！」

オレ「おっと、撃ったらコイツ死んじゃうよ？」

デブを盾にする。

仲間なんだし撃ってくる訳が……

ガリノッポ「俺がソイツを撃てないとでも思ったか？世間知らズのクソガキ」
オレ「あ？」
ガリノッポ「仕事の出来ないゴミに価値は無い」
オレ「おい、お前……」

拳銃をこちらに向けてくる。
おい……まさか……！

オレ「くそ！！」

盾にしていたデブを横に突き飛ばす。
クソ、本気で撃ってこられたらコイツ自分じゃ避けられねえだろ！
デブを突き飛ばして、自分も避けようとしたところで左足に激痛が走る。

オレ「ぐっ……あああ！！」

左足を抱え込んで倒れる。
すねの辺りに１ｃｍ弱の穴が開き、そこから赤黒い液体が流れ出す。

オレ「この野郎ッ……！！」
ガリノッポ「……理解できないな。どうしてその役立たズを庇った？」
オレ「テメエみたいな仲間をゴミ扱いする奴に理解されるほど落ちてねえってことだよッ……！」

苦し紛れの台詞だって事は分かっている。それでも言わないわけに

は行かなかった。
左足に激痛が走るのを我慢して立ち上がる。

オレ「テメエみたいなクズには丁度いいハンデなんだよ…。このくらいはな…」
ガリノッポ「痛みに顔を歪められて言われても説得力がないな。天才でもソコのゴミと同列か？」
オレ「いい加減にしやがれ！アイツはテメエの仲間じゃねえのかよ！！」
ガリノッポ「あんな役立たズが仲間？反吐が出る。君にもいい加減に死んでもらわなければ」

もう一度拳銃を構えてくる。
クソ……次は避けられるかどうか自信がねえぞ……

ガリノッポ「いくつかトラブルはあったが、これで当初の目的は達成だな。……くたばれ」
オレ「畜生！一か八かだ！」

到底間に合うとは思えない。それでもこんなところで諦めるつもりも毛頭ない。
一か八かの確立に賭けて……避ける！

ダン！

銃声が響く。

オレ「ぐ……がハッ！」
ガリノッポ「ち……外したか」

脇腹から血が流れ出てるのが分かる。
まだ致命傷じゃないみたいだけど、これは出血多量で死ぬかも……

ガリノッポ「次は外さない。眉間をぶち抜く」

クソ……もう避ける気力なんて残ってねえぞ……
何か……何か打開策は……ん……？ポケットに何か感触が……？

メイ「や、やめてください！」
ガリノッポ「ぐ！？」
オレ「メイ！？」

何やってんだよ！？隠れてろっつったろ！？

ガリノッポ「離れろ！！」
メイ「きゃあ！！」

ガリノッポがメイを突き飛ばす。
ンの野郎が……！！

ガリノッポ「クソ……邪魔が入ったが、今度こそチェックメイトだ」

忌々しげにメイを見た後、またオレに銃を突きつけてくる。

オレ「チェックメイト、か……そりゃこっちの台詞だクソ野郎」
ガリノッポ「何だと？」
オレ「まったく、何が天才だよ……。こんな簡単なことも忘れてるとか、ホント笑いものだぜ……」

肝心なときの役に立たねえなこの頭脳（あたま）、と笑う。

ガリノッポは訳が分からないという顔をしている。
本当にどうしてもっと早く気づけなかったのだろうか。自分で自分がいやになってくるぜ……

オレ「まあ要するに……オレの勝ちだって事だ。起動（アウェイクン）」

メイＳＩＤＥ

なぜか突如発生した召喚フィールドと、峰嶋先輩の召喚獣。

やせた男「ど、どういうことだ！！」

真琴「オレ自身が動けなくてもこっちには人間の数百倍の力を持つ相棒がいるんだよ……！」

Ｆクラス　峰嶋真琴　日本史　１７９２点

やせた男「く、クソ！！」

真琴「大天使（ガブリエル）の翼」

先輩の召喚獣に８枚の純白の翼が生えます。８枚の翼は飛んでくる銃弾をはじき返します。

真琴「銃を使うのがテメエだけだと思うなよ……！」

先輩の召喚獣が、男の人の両足を撃ち抜きました。

やせた男「がああああ！！」

真琴「安心しとけよ……殺しはしねぇ。テメエその激痛を一生味わってろクソ野郎が」

私「先輩……」

召喚獣に担がれて先輩が寄ってきます。

真琴「はは……、みっともねえよな…。なんだかんだ言ってこのザマだ……。行くぞ……」

私「い、行くって、どこにですか……？」

真琴「決まってんだろ…帰んだよ…」
私「帰るって……」

ドサ！

真琴「ぐぇ……」
私「ど、どうしたんですか！？」

急に倒れこんだ先輩に駆け寄ります。

真琴「……腕輪が、イカれたらしい……。召喚フィールドの、維持が出来なくなったみてえだ……」
私「そ、それじゃあどうやって……」
真琴「……背中」
私「え……？」
真琴「負ぶってってやるから、さっさとしろ……」
私「で、でも、どっちに行けばいいとかわからないし……」
真琴「タイヤ痕を辿って行けば戻れるだろうが……」

でも、先輩2回も撃たれて、血だっていっぱい……

真琴「……いいから、さっさとしろ……！」
私「で、でも、でも……！」

何とか止めなきゃと思い、とにかくいろんな理由を並べて見ます。
そしたら先輩は私の頭に手を置いて……

真琴「お前はオレが守ってやるって決めたんだ……。いいから黙って守られてろよ」

私「先輩……」
真琴「……なんだよ」
私「さっき……あの人たちが言ってたんです……」
言うべきなのかどうか、といわれれば、正直分からないけど……でも、言ったほうがいいような気がしたんです。
私「先輩が、試験召喚システムの研究者で……システムを戦争に利用しようとしたって……」

真琴「……否定はしねえ」
私「本当……なんですね……」
やっぱり……でも、きっと何か理由があるんですよね……
私「で、でも！理由とかありますよね！」
真琴「……分かんねえよ」
先輩は凄く悲しそうな顔をして言います。
真琴「分かるわけねえよ……。裏側で生きる人間の事なんか……」
私「先輩……裏側って……」
真琴「お前が知るような話じゃねえよ。少なくとも、お前には関係のない世界の話だ……」
なんだか近くにいるのに、ずっと遠い場所にいるような感覚です。
最初は怖かったはずなのに、今は一緒にいないと不安で……少しでも先輩の役に立ちたいって思っちゃいます。暗い場所にいる先輩を、助けてあげたいって……
きっとそれは、島田先輩がやってくれるんでしょう。
私では島田先輩には勝てないって、分かってるんです。それでも私は……
私「先輩……」
真琴「んだよ……さっきから……」
私「ダメかもしれないですけど……私は……先輩のことが……」
その先を言おうとしたときでした。

グラ……

私「ひゃわ!?」

いきなり先輩が雪の中に倒れこみました。

せ、先輩!?

私「先輩!?大丈夫ですか!?」

真琴「……眠ィ」

私「へ?」

真琴「なんか……左足と腹の辺りがもう感覚ねえ……これは本格的にヤバイかも……」

私「そ、そんな!?」

先輩が倒れこんだ辺りの雪が、赤黒く染まっていきます。

このままじゃ、先輩が……!!

私「先輩!先輩!!」

真琴「……心配すんなよ。別に大した事ねえって……」

私「でも…!でも……!!」

さっきまでとは比べ物にならないくらいの量の血が……!

真琴「ああ……、さっきまでは筋肉で無理矢理止血してたから……溜まってた血が一気に溢れて来ただけだ……」

私「き、筋肉で止血ですか……?」

色々ツッコミどころではありますけど……

私「って、でも、凄い血が……!!」

真琴「こりゃあ……もう……無理…かも……」

だんだん先輩の声が小さくなっていきます。

先輩……まさか……！！

私「先輩！？先輩！！」

真琴「……」

どれだけ身体をゆすってみても、先輩は返事をしてくれません。

そんな……！まだ、この想いを伝えてないのに……！！

もっと一緒にいたいのに……！！

私「先輩……！起きて、ください……！」

ひとりでに涙が溢れて来ます。

起きてくださいよ……！他の人につっこむ時みたいに、笑顔で、明るく、笑って……！！

今はただそれだけを願います。

死なないで……！

？？『大丈夫か？』

私「え……？」

不意に声がしました。

この猛吹雪の中で一体誰……？

顔を上げてみると、そこにいたのは２ｍはあろうかという大きな男の人と、ショートカットで薄い青色の髪をした女の人でした。

第九十話　雪原の戦闘と流れる鮮血と限られた命《タイムリミット》（後書き）

真琴とメイの前に現れた二人は敵か！？味方か！？
ちなみに彼等が誰か分かった人は作者と相当気が合うとおもいますよ。

第九十一話　目覚めと蘇る記憶と必然の敗北（前書き）

ＬＡＮ武さん、月さん感想ありがとうございます！

おかげさまでＰＶ４００，０００、ユニーク３２，０００を突破しました！

気づけばこんなに凄い数字に……！？

読んでくださる読者の皆様、ありがとうございます！

駄文ですが、これからも宜しくお願いします！

今回はＬＡＮ武さん作の『バカとテストと年上の同級生』から榊龍星と榊白姫の二人を許可を頂いてお借りしてきました。

上手く二人を書けた自信はありませんが、宜しくお願いします！

第九十一話　目覚めと蘇る記憶と必然の敗北

バカテスト　数学

問　以下の問に答えなさい。

『トランプ５２枚のカードの数字を全部足すといくつになるでしょう』

姫路瑞希の答え

『３６４』

教師のコメント

正解です。流石ですね、姫路さん。
色々な計算の方法がありますが、例えば、スペードの１～１３の１３枚にそれぞれハートを１３～１まで逆に乗せていくと、それぞれの合計が全て１４になります。ダイヤとクローバーでも同じことをやりますので、１４×１３×２で３６４となります。

峰嶋真琴の答え

『３６３６
※実家にある把握してる分のトランプの数字全てを足しました』

教師のコメント

１０組あると言う事なのでしょうか？
それにしては数字がおかしい気がします。

峰嶋真琴のコメント

みどりの奴がスペードの４を一枚なくしたからです。

吉井明久の答え

『1たす、2たす、3たす、えっと……』

教師のコメント

頑張ってください。

真琴ＳＩＤＥ

『真琴君』

不意に名前を呼ばれる。

ここはいつも相棒と対話する夢の世界。

何も見えない真っ暗な世界。

けど、何かが違うんだよ。

『ねえ、大口叩いた割りに無様に倒れた真琴君？』

「……やめろ」

『「いつか外の世界に連れて行ってやる」って言ったよね？』

「……やめろよ」

『ふふーん、やめてあげてもいいけどね？』

コイツ……相棒じゃない……！

「お前はなんだよ。なんで一ソイツの顔をして喋ってる《・・・・・・・・》？」

『別に？私は私だから』

とりあえずコイツは絶対に相棒じゃない。それは間違いない。

『それで、真琴君の仲間を見下している気分はどうかなって』

「あ？」

『「守る」ってさ、つまり真琴君は彼らの実力を認めてないんでし

ょう?だから真琴君の力だけで何とかしようとするんでしょう?』

「……黙れよ」

『なんだかんだ言って、真琴君もあの人たちと一緒だよ。自分には力があるから他人を見下してる』

「……黙ってろよ」

『メイちゃん、だっけ?あの娘と私を重ねてたの?私を死なせてしまったから代わりにあの娘を守るの?私って代用品の効く程度の存在だったの?』

「黙れって言ってんだよ!!お前がアイツを……命依を知ったような口を聞くな!!」

『知ってるよ。私は命依。メイだもの。真琴君に見捨てられたメイなんだよ?』

「いい加減に……　!!」

一度目をそらし、再度それを見た。

それは、まるで業火で焼かれたかのように皮膚をただらせていた。

「……！！」

『「暖かい世界を見せてやる」って……「大切な人が待ってくれてる世界へ連れてってやる」っていったのに……真琴君は、私を騙したんだよね？あの人たちと同じように』

「違う……！オレはアイツらとは違う……！！アイツらは自分の欲望の為で、金とか、そういうのの為にあんな事をした奴等で、オレは……！オレは……！！」

『一緒だよ。真琴君も、あの人たちも。真琴君だって、ただ「褒められたかった」んでしょ？ただそれだけの為に、フェニックス（あんなもの）を生みだしたんでしょ？』

「違う！！違うんだよ！！」

『一緒だよ。私を殺したのは、あの人たちでもあり……真琴君でもあるんだから』

「やめろぉぉぉぉぉぉ！！！」

☆

オレ「……夢……オレ、生きてる……？」

病室と思われる少し広い部屋で、オレは目覚めた。
撃たれたはずの左足と脇腹には包帯が巻かれている。痛みは無いみたいだ。

オレ「……助かったのか」

明久達が探してくれたのか、通りかかった誰かが助けてくれたのか、どっちにしろ幸運だったな……

オレ「……胸糞悪ィ夢だな」

今更、なんでアイツが出て来るんだよ……。
“見下してる”か……。

オレ「本当にそうなのかな……。オレは、明久や美波や瑞希達を見下してるのかな……」

誰かを強大な力を持ってして守るということは、他人を見下してるという事なのだろうか？
その人の能力を否定することなのだろうか？
じゃあ……どうすればいいんだ？

守らなきゃ維持できない。守ったら見下した事になる。
ならどうすればいい？どうすれば誰も傷つかない結果に持っていける？

オレ「誰か……教えてくれよ……」

……違うな。
『誰も傷つかない結果』って前提条件が間違ってんだろうな……

なら……傷つくべきはオレなんだ。
自分がどれだけ傷ついても、皆を守んなきゃダメなんだろうな……

明久「でさー……あ、真琴、気が付いた!?」

明久が病室に入ってくるなり大声で叫ぶ。

美波「真琴起きてるの!?アキに坂本、どきなさい!!」
雄二「うお!?おい島田!押すんじゃねえ!!」
翔子「……雄二、美波から早く離れる」
明久「ちょっと雄二!!邪魔だよどいて!!」
瑞希「真琴君おきてるんですか!?明久君、ちょっと見せてください!!」
みどり「琴君気が付いてんの!?アッキー退散!」
明久「人を悪霊みたいに言わないで!!」
秀吉「ああもうじれったいの!いいから早く入るのじゃ!」
康太「……邪魔!」
優子「ちょっと落ち着きなさいよ!」
久保「木下さん、多分それは無理だよ」
愛子「そーだよ優子。んー?これは誰のお尻かなー?」
メイ「先輩起きてるんですか!?皆さんどいてくださ……ひゃ!?坂本先輩どこ触ってるんですか!?」
雄二「は!?いや俺じゃねえぞ!?」
翔子「……雄二、浮気は許さないと言っている……!!」
雄二「いやだから違うとぎゃあああああああああ!!頭盤がああああああああ!!」
愛子「あはは!代表、それくらいにしてあげなよ」
翔子「……いや、雄二にはキツイお仕置きが必要」
雄二「あんぎゃあああああああああああああああああ!!」

……病室で叫ぶなよ。

美波「真琴！！」

オレ「あ、美波……その、心配かけてゴメぶるぁあああっ！？」

いきなりアッパーカットを食らった。何事！？

美波「アンタがメイと一緒にいなくなったって聞いて、本当に心配したんだからね！？」

ならなぜオレの謝罪を遮ってのアッパーカットなんだ……。

美波「アンタがついにロリで始まってコンで終わるあれになったんじゃないかって、本当に心配したんだからね！！」

オレ「嫌な心配のされ方だなオイ！？」

あっれー！？つい先刻まで銃を持った軍人っぽい人たちとほぼ素手でとやりあったのに酷い扱いじゃないコレ！？

美波「本当に……心配したんだから……！！」

オレ「その……ゴメンな？心配かけて。皆もゴメン」

明久「ううん。真琴が無事でよかったよ。ね、瑞希」

瑞希「はい」

雄二「ああ。しかし真琴が血まみれで運ばれてきたときの島田は凄かったな。もう一生分の涙を流したんじゃないかってくらい泣きじゃくってたぞ」

へ？

美波「そ、そういうのはいいの！！当然でしょ！！……じゃなくて

！あれはゴミに目が入っただけで……！！」
秀吉「美波よ。日本語が支離滅裂になっておるぞ」
美波「／／／／／／」

それって、凄く心配してくれたって事だよな……？

オレ「あのさ、美波……」
美波「うぅ……何よ……」
オレ「その……ありがとな？心配してくれて」
美波「と、当然でしょ！ウチは真琴の彼女なんだから！」
メイ「えええええええええええ！？！？！？み、峰嶋先輩と島田先輩って、付き合ってたんですか！？」

と、何故かメイが素っ頓狂な声を上げる。どうかしたんだろうか？

オレ「そうだけど？」
メイ「そ、そんなぁ……分かってはいましたけど……改めて言われると……（ヘナヘナ）」
オレ「お、おい！？どうした！？」

メイはその場にへたり込んでしまった。
本当にどうしたんだ！？

雄二「まあ頑張れよ。島田以外にも真琴も好意を寄せてる奴はいるがな」
メイ「ええ！？まだいるんですか！？峰嶋先輩モテ過ぎです！！」
オレ「ちょい待て！モテて何が悪い！！」

なんだか理不尽なリアクションな気がする。

明久「真琴ってホント鈍感だよね」
瑞希「そうですね。メイちゃんがかわいそうです」
秀吉「鈍感じゃの。その上バカじゃな」
みどり「鈍感とバカは罪だよね～」
康太「………殺したいほどに羨ま…恨めしい」
愛子「康太君？ちょっと向こうで☆ＨＡ☆ＮＡ☆そっか」
康太「………！？（フルフルフル）」
翔子「……少しはメイの気持ちも考えてあげるべき」
優子「本当よね。鈍いにもほどがあるわよ」
久保「峰嶋君らしくもない。いつもはもっと鋭いのに」

あれ？なんだか怒られてる？

美波「（じーーーーーーーー……………………）」
オレ「み、美波サン？どうしました？」
美波「………ロリコン（ボソッ）」
オレ「なんだなんだよなんですかぁ！？どうしてこんなに言われたい放題なんだよ！？」

ああもうこの話題終了！
良くわかんねえけどオレなんかしたのかよ！？

オレ「そ、そういえば、オレはどうしてここにいるんだ？てかここはどこだ？」

とりあえず不自然じゃない疑問で話題をそらす。
まあ最初からそれなりに気になっていた疑問ではあるのだが。

明久「ここは長月女学院の外科病棟で……」
オレ「待てコラ。どうして学校に外科病棟があるんだよ」

病院じゃねえんだから。

明久「あのね、ここって年中猛吹雪が吹き荒れてるんだって」
オレ「ふむふむ」
明久「だから、大抵の施設は学園内に揃ってるんだよ」
オレ「どこの学園都市だよ」

これで学区が二十三くらいに分かれてたり「～じゃん」が口ぐせの女教師とかいたらもっと深いところまで突っ込んでやる。

オレ「ここが長月だってことは分かったけど、そっちはあんまり重要じゃねえんだよ。いや、重要だけど」

肝心なのはどうしてオレがここにいるかだ。誰がここまでオレとメイを運んだのか、それが知りたい。

オレ「どうしてオレは長月にいるんだよ。気絶した場所はもっと離れてたはずだぞ？」
雄二「それなんだけどな……」
美波「なんと言うか……」
瑞希「そのですね……」

？　なんか言いづらい訳でもあんのか？

？？『オレ達だよ。オレ達が運んできたんだ』

と明久たちの頭上から声がした。
普通は雄二とかの後ろにいると姿が見えなくなったりするんだが……

オレ「……兄貴？」
龍星「よっ」

そこにいたのは、ＬＡＮ武さん作の『バカとテストと年上の同級生』の榊龍星兄貴だった。
一応番宣も含めておく。

白姫「私もいますわよ？」
オレ「シロまでいんのか……？色々突っ込みたいがどうしてここにいるのか聞いてもいいか……？」
龍星「そりゃスティッ○ー・フィンガーズでゲートを通って……」
オレ「オーケー。とりあえず明久説明を頼む」
明久「え！？ええと……さあ？」

ああ……もうダメだ……理解能力がついてってない……（明久もろとも）

オレ「えーと……とりあえず今日何日？どれくらい眠ってたんだ？」
全員「「「「「……」」」」」
オレ「え？この話題もＮＧなの？」

てかなんでこんな重くなるんだ！？

明久「その……今日は９日……つまり……」
オレ「９日？あれ……？」

確か召喚ハンティング戦争の一日目が９日で、病室の時計はいま２１時を指してるから……

オレ「……もしかして一日目終わっちゃった？」

龍星「そういう訳なんだ……」
オレ「で、結局やったの？」
瑞希「はい。藤堂学園長は真琴君の不在を理由に中止か、せめて延期をして欲しいっておっしゃったんですけど……」
美波「向こうの理事長が認めなかったの。こっちが負けるのが怖くて逃げてるとか言ってきて」
雄二「……スマン。向こうのほうが、戦力的にも作戦的にも上だった」
オレ「ああ、別にいいって。まだ一回負けただけなんだろ？明日と明後日で逆転すればいいだけなんだからさ」
白姫「ですが……」
オレ「だぁーっ！オレがいいってったらいいの！明日はオレも参加するし、それ以前にあのクソジジイには借りがあるから何の問題もねえの！」

ちょっと子供みたいな言い方でその場の全員を諭す。
あーもうまだ負けたわけじゃねえのになんでそう落ち込むかな！？

オレ「皆オレがいない分をカバーしようと頑張ってくれたんだろ？だったらそれだけで十分だっての。オレが今晩中に作戦考えとくから」
雄二「……本当にすまない。こういう時こそ俺が頑張らなきゃならないのに」
オレ「雄二らしくねえぞ。今日の分の対戦データを置いといてくれ。長月の奴等に目に物見せてやろうぜ」
全員「「「「「おう！！」」」」」

クソジジイの計画だともしかしたら歯車狂いまくってるのかもしれないな。
だからこそ、予定通りに対戦を始めたのかもしれない。

しかし、あのクソジジイがそうまでしてやろうとしてる事ってなんだ？
ただこの交流目的の戦争に勝つためだけとは考えづらいが……

明久「それじゃあ僕たちは戻るね」
オレ「あ、ああ、おやすみ」
瑞希「おやすみなさい、真琴君」
美波「おやすみ、真琴。無理はしないでね」
雄二「じゃあな、明日は頼むぞ」
翔子「……ゆっくり休んで」
秀吉「おやすみなのじゃ」
みどり「じゃあね、琴君」
龍星「ゆっくり休めよ？」
白姫「無理しないように、ですわ」
康太「……明日、期待してる」
愛子「それじゃあね、峰嶋君」
優子「あまり役に立てなくてごめんなさい」
久保「ゆっくり休んでくれ。しかしこの名前の部分、利光に戻してはもらえないかい？」
オレ「あはは……、交渉しとくよ……」

最後の最後でボケを残しておくのは止めて欲しい。

メイ「せ、先輩！もしよかったら、私が、その、看病を……」
オレ「ああ、悪いな。ちょっとやる事があるから」
メイ「はぅ……そうですか……残念です……」

このあと全員から鈍感と言われた上に哀れむような非難するような目で見られた。
だからなんなんだよ一体！？

☆

オレ「今日の向こうのメンバーは生徒会長に双子に学年主席、こっちは雄二に霧島、木下姉に常夏コンビか……」

戦力としては全員申し分ないな。

瑞希や霧島クラスを投入しないと４ＶＳ５のハンデも意味なく終わってしまうくらいだ。

オレ「しかし、さっき雄二が言ってたのはどういう意味なんだ……？

雄二が言うには、『いきなり召喚獣が攻撃された』だとか。その周囲には敵は誰もいなかったのに、気が付いたら心臓を打ち抜かれて戦死していた、か……。

オレ「遠隔攻撃系の能力……？でもどうやって召喚獣や雄二達の居場所を突き止めた？まさかこっちの位置を正確に把握できるやつがいるとかじゃないよな……？」

そんな奴らコンビ組んだら撃破のしようが無いぞ？

オレ「……そろそろ全員寝静まったな」

時計はちょうど真夜中を指している。

オレはベッドから降りると掛けてある制服を手に取る。

オレ「無理しないでね、か……。悪いな美波」

まだちょっと、無理しなきゃいけない用事が残ってるんだ。

☆

まだ左足の感覚が変な感じがするため、松葉杖をついてオレは理事長室の前に来ていた。

オレ「邪魔するぞクソジジイ」

思いっきり恨みを込めて罵倒とともにドアを蹴って開ける。

桐生「クソジジイとはいきなりだね。死に底ないの天才君？」

オレ「それは自白と受け取っていいのか？」

このジジイ……スカした顔が余計に腹立つわ。年考えろジジイ。

オレ「単刀直入に言う。さっさと全部ゲロって自首しろ」

桐生「まるで私が黒幕のようなものいいだな。証拠はあるのかい？」

オレ「ねえけど。でもアンタが黒幕だろ？」

桐生「違うよ。私ではない」

クソ……まあ予想通りだが……

オレ「んじゃ、オレは明日に備えて寝る」
桐生「……一体何の用時なのかね」
オレ「別に」

俗に言う、「不敵な笑み」を浮かべて理事長室を後にする。

理事長室を出た後、携帯を取り出し電話をかける。

オレ「……少しいいか、折り入って頼みがある。親父……いや、父さん」

第九十一話　目覚めと蘇る記憶と必然の敗北（後書き）

次回、召喚ハンティング戦争二日目開幕！

第九十二話　激闘開幕！……といっても実は二日目（前書き）

ＬＡＮ武さん、月さん感想ありがとうございました！

今回ちょっと短いです。

第九十二話　激闘開幕！……といっても実は二日目

バカテスト　特別編

問　以下の問に答えなさい。

『学校に持ってきてはいけないものを答えなさい』

木下優子の答え

『漫画や、ゲーム機等の遊び道具』

教師のコメント

その通りです。基本的に学校は勉強をするところですが、同時に、社会に出る前に生活態度を学ぶところでもあります。勉強さえ出来ればいいと言うわけではなく、規則を守って生活できる事も大切です。

姫路瑞希の答え

『漫画や、ゲーム機等の遊び道具
※吉井明久君関連の物を除きます』

教師のコメント

Ｆクラスの毒気に犯されないように注意してください。

峰嶋真琴の答え

『ゴリラ、妖怪、ゴミクズ代表』

教師のコメント

君が何を言いたいのか、先生にはさっぱりわかりません。

ゴリラのコメント

誰がゴリラだ！？

妖怪のコメント

相変わらず失礼なクソガキさね！？

ゴミクズ代表のコメント

俺だけ明らかに名指しに等しいだろ！？

峰嶋真琴のコメント

自覚があったのか？

☆

真琴ＳＩＤＥ

一晩明けて翌日。長月の生徒全員を含めて一同は体育館に集合していた。

明久「真琴、本当に大丈夫なの？」
オレ「当然だ。どっちの意味でもな」

向こうのメンバーは知らないがこっちの参加選手はもう決めてある。
さっきババアを問い詰めたんだが、教師召喚獣をどれだけたくさん倒しても時間内には勝負が決まらないのに対し、代表が戦死した場

合にはその時点で決着らしい。つまり……

美波「目標を全部倒されても、向こうの代表を倒せればこっちの勝ちなのよね？」

オレ「そういうことだ。さっさと始めようぜ？」

マリーナ「……随分と余裕ですね」

オレ「まあな。昨日は負けちまったが、別に本気を出したわけじゃなかったからな。あれはただの情報収集だ。それとも情報収集目的の戦いに勝った程度でもう終わったつもりだったのか？」

長月生徒全員から渾身のブーイングが飛んでくる。

愛子「……峰嶋君ってこういう時は本当に悪役みたいだよね」

優子「そうね」

失敬な。

オレ「じゃあお互いにメンバーの確認といくか。こっちの参加メンバーは……モニターとかない？」

ここまで作ってきた雰囲気を一気にぶち壊す。

あ。出た。

文月学園チーム

・Ｆクラス　峰嶋真琴（代表）
・Ｆクラス　土屋康太
・Ａクラス　工藤愛子
・Ａクラス　久保利光

・特別参加　榊龍星
・特別参加　榊白姫

長月女学院チーム

・Ａクラス　マリーナ＝クロムウェル（代表）
・Ａクラス　キィナ＝ロレンツォ
・Ａクラス　エレナ＝ハーティリー
・Ａクラス　エリナ＝ハーティリー
・Ａクラス　レナ＝カリュート

全員「「「「「５ＶＳ６！？」」」」」

当初のルールと違う人数に驚く一同。
まあコレには色々訳がありまして……

オレ「そこの小物のおっさんとの交渉の賜物だよ」
桐生「……」
美波「ど、どういうことよ？」
オレ「決まってるさ。お互いに参加人数を増やしたんだよ。こっちは戦死者の二度目の参加を認めないって条件付でな」

一見するとこちらに不利に見える条件だが、実はメリットのほうが大きい。
数時間単位の長期戦は、瑞希や霧島や木下姉みたいな女子勢には辛いのは一目瞭然。どうせ連続して同じ奴は使えないのだ。
昨日の参加者である雄二達には相当量の疲労が溜まってると予測するのはそう難しい事ではない。
結局、そのハンデは実は何の意味もないに等しいのである。

それに気づけない辺り、小物だよな。

オレ「さぁーて、ちゃっちゃと始めちまおうぜ」
愛子「そうだね、ボクたちもう後がないし」
康太「……本気で行く」
久保「吉井君にアピールのチャンス」
龍星「おっしゃ！俺の出番だ！」
白姫「私にも活躍の出番があると良いですわ（犬耳犬尻尾モード）」

約一名不安が残るのは気のせいだろうか？

ババア「負けるんじゃないよ、ジャリ共」
オレ「げっ、妖怪」
ババア「本当に失礼なガキさね！」

いいじゃん本当の事だし。

ババア「文月学園はまだ一回も勝ってないんだ。今年も、なんてのは困るからね」
オレ「言われなくたって勝ってやるよ。こっちには秘策もあるんだからな」
愛子「今日の美味しいところ頂き役の工藤愛子と」
康太「……土屋康太」
ババア「……なるほどね。考えたじゃないか」
オレ「コレくらい朝飯前だ。うし、皆行くぞ！」
５人「「「「「おう！！」」」」」

見ていろ。ここからがオレ達の真骨頂だぜ！

第九十二話　激闘開幕！……といっても実は二日目（後書き）

長月勢の腕輪の能力考えるの大変だよぉ～（泣）

第九十三話　真琴ＶＳ狙撃手＆追跡者（前書き）

ＬＡＮ武さん感想ありがとうございました！

なんっか中二病地味てるぜ……ｏｒｚ

まあ職業中二病患者な中学二年生ですけどねｗｗ

でわ第九十三話どうぞ～

Ｐ．Ｓ　最近文学少女にはまりかけました。結構面白いですね。

第九十三話　真琴ＶＳ狙撃手＆追跡者

バカテスト　保健体育

問　以下の問に答えなさい。

『火傷をしたときの対処法を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『急いで水を冷やす』

教師のコメント

正解です。流石ですね、姫路さん。
流水で冷やせない部分の場合は、患部に清潔なタオルを掛けてから水を掛けましょう。
低温火傷や明らかに広範囲または重度の場合は患部を清潔なタオルで覆ってすぐに病院へ行きましょう。

土屋康太の答え

『手切れ金を払う』

教師のコメント

それは大人の火遊びです。

峰嶋真琴の答え

『そもそも火傷をしなければいいと思います』

教師のコメント

問題の前提条件を覆すあまりの珍回答にびっくりしました。

☆

真琴ＳＩＤＥ

戦争開始からすでに１０分が経過している。
当然とでも言うかのようにオレはアクションを起こさない。

オレ「……これだけ待ってこないとなると、ここじゃないわけか」

何を待っているかと言うと、雄二達を“狙撃”した奴である。
今回も参加している可能性が極めて高いため、狙撃される可能性が高いと踏んだのだが……

オレ「やっぱ別のフィールドの奴は攻撃できないのか？」

まあそんな能力だったらチートと叫んでやるがな。

オレ「そうと分かったらさっさと移動するか」

まずは数学のフィールドへ移動する。

☆

～数学フィールド～

オレ「こないな……」

さて、次のフィールドだ！

☆

～物理フィールド～

オレ「……こない、なぁ……」

さ、さあ！次行こう！

☆

～現代社会（政治経済）フィールド～

オレ「こねえェェェ！！」

クソ！イライラする！

☆

オレ「つ、次、えー、世界史、フィールドォ……」

実は結構ストレス溜まるぞコレ……広すぎだろ……

てかここまで一度も教師召喚獣と遭遇しないオレって……

オレ「はぁ……ここも来なかったらどうするか……試獣召喚（サモン）」

文月学園　峰嶋真琴　世界史　１７２５点

とりあえず失格にならないうちに召喚獣を召喚する。

普通の学生服にクソ長いライフルを持ったちっちゃいオレが出てくる。

オレ「はぁ……大天使（ガブリエル）の翼」

翼を出現させ、構える。

来て……！来て……！（本気で願ってます！）

……

……

……

……

……

来ねぇ……

やっぱ来ないんかい！！と心で突っ込んでみる。

はぁ……仕方ないから次のフィールドへ「ヒュン！ヒュン！ヒュン！」……へ？

オレ「……今撃たれた？」

ヒュン！ヒュン！ヒュン！

オレ「おわわ！！来た来た！」

やっと来た！さて、ここから相手の位置を逆算……するぞ！

ここまで撃たれた6発に共通する事……！

オレ「舞い降りる天使（フェザーノイズ）の羽」

能力を発動させ、あたり一面に羽を出現させる。

こいつは本来攻撃用だけど、使いようによっては応用もできる。

ここまでの6発に共通しているのは、一全てが同じ方向から来てい

る《・・・・・・・・・・》という事だ。
コレが引っ掛け(フェイク)でない限り、導き出される結論は一つ。
“敵は一方向からしか攻撃できない”ってことだ。
オレ「さあ、もう一発来い……！」
オレの舞い降りる天使(フェザーノイズ)の羽は大天使(ガブリエル)の翼の応用技で、本質ともいえる。
この羽は自分の所属クラスで無い奴の召喚獣に触れると自動で爆発、誘爆する。勿論コノハね全ての感触がフィードバックさせる事も可能（相棒に頼みました♪てへっ）。
コイツでどの方向からの狙撃か計算する！
ヒュン！
と空気が裂かれる音がする。来た！
その銃弾は羽を貫きオレの召喚獣めがけて飛んでくる。
銃弾そのものは羽で防御しはじいたから問題ない。けど……
オレ「ぎゃあああああ！！いってぇぇぇぇ！？」
2、3枚かすっただけなのに背中がナイフで１００回くらい刺されたくらいに痛い！？何事！？
相棒「なんだか、同調率が底上げされてるよ！？」
オレ「あがあああ！って、お前、喋れてないか！？」
相棒「あ、ホントだ！」

どんだけ同調率あがってんの！？

【ここで豆知識！同調率とは？】

説明しよう！同調率とは、主に真琴と召喚獣のフィードバックや操作技術の変動率を数値化したものである！そこ！エヴァじみてるとか言わない！

大体な気準←

５０％：召喚獣との念話が可能です。
８０％：この辺が基準ラインです。
９５％：高いとコレくらいです。
１２０％：フィードバックがもうきついです。
２００％：召喚獣が喋れるようになります。
２５０％：召喚獣が自分の意思で動けるようになります。
３００％：打ち所が悪いとフィードバックで死にます（死ぬの！？）。

オレ「これ誰に言ってんの？」
相棒「さあ？」
オレ「今どれくらい？」
相棒「２８０％くらい？」
オレ「嗚呼……死んだな……」
相棒「早いよ！？」

とまあ、冗談はおいといて、それなら攻撃を一度も受けなければいいだけの話だし。

オレ「計算完了。方角はえっと……３階の教室だな。多分」

相棒「やっぱり遠隔攻撃系？」
オレ「まあ当然だし予想の範疇だ。さっさと行くぞ」

☆

ＮＯ　ＳＩＤＥ

つい先刻、真琴に居場所を見破られ、能力による攻撃も防がれてしまった二人組みは慌てていた。

「!?　目標が凄い速度でこっちに向かってる!」
「ちょちょちょ!?なんで!?いつもどおりやったよ!?」
「知らないわよ!天才の名は伊達じゃないってことでしょ!」

焦りながらも急いで移動を試みる二人。
こっちには召喚者とその召喚獣の居場所を探知する事が可能な能力を使える人間が居る。
その前提条件が崩れない限り、再狙撃はいくらでも可能なのだ。
だから一度出直してもう一度チャンスを待とう、と双子の妹、エレナ＝ハーティリーは考えていた。

たとえ自分が戦死しても、姉であるエリナの探知能力はこの戦争の上で絶対的なアドバンテージ（特別に教師召喚獣の探知は不可能）。
自分が戦死してでも逃がさなければならないのである。

エレナ「お姉ちゃんは先に行って!ここはアタシが食い止めるから!」
エリナ「ええ!頼むわ!」

これは最初から決まっていた事。試召戦争ではいつものことである。

エレナ「……アタシ達のコンボを破るくらいの腕、楽しませてもらうわよ」

エレナ＝ハーティリーは一人その場に残り不適に笑った。
その笑みが恐怖から来るものなのか、それとも強敵と対峙する興奮から来るものだったのかは本人を含め、誰にも分からない。

☆

真琴ＳＩＤＥ

オレ「……もう一人は逃がしたのか？」

双子の片割れの一人に問いかける。

多分こっちの居場所を把握してる能力者は双子のもう一人だと思うんだけど。

エレナ「何のことかしら？アタシは最初から一人よ？」

オレ「別に、調べれば分かるからいいよ。疲れるだけで面倒だからやらなかったけど」
エレナ「……！」
おお、「どうしよう？」って顔に出てるぞ？
オレ「まあその前に、アンタを倒すんだけどね」
エレナ「言ってくれるわね。そっちが倒される側って教えてあげるわ」
既に召喚していた召喚獣を対峙させる。

文月学園　峰嶋真琴　世界史　１５９６点

ＶＳ

長月女学院　エレナ＝ハーティリー　世界史　４１２点

圧倒的な点数差だ。

エレナ「ぐ……！」
オレ「悪いな、ホント。舞い降りる天使（フェザーノイズ）の羽」

☆

エリナ「はぁ、はぁ、はぁ……ここまでくれば……」

エリナ（エレナはきっとやられて……能力を使うまでもないのね）

オレ「息切れしてるとこ悪いな。相手してもらうぜ」

エリナ「！？」

ハッとして振り返る相手。

オレ「双子の片割れなら今頃鉄拳フルコースだろ。次はアンタだ」

エリナ「……試獣召喚（サモン）」

さっきとは教科フィールドが違うため、もう一度召喚獣を呼びなおしてくる。

文月学園　峰嶋真琴　化学　１５９６点

ＶＳ

長月女学院　エリナ＝ハーティリー　化学　４１２点

オレ「悪いな、こっちも本気で行かないと拙いんだわ。そんなわけだからさ、死んでくれ」

大天使（ガブリエル）の翼を発動させ、一気に飛び、ライフルで心臓を打ち抜く。

オレ「舞い降りる天使（フェザーノイズ）の羽をこの学園全体に広めればアンタと同じことができるんだよ。おかげで世界史の点数１０００点くらい使ったがな」

エリナ「……これは、仕方ありませんね」

おかげでもうへとへとだよ。
まだ1時間半経つか経たないかって時間なのに……

オレ「これで、二人目」

小さく呟く。

オレ「さぁて、他はどうなってんだ？」

第九十三話　真琴ＶＳ狙撃手＆追跡者（後書き）

次回はゲストさん、龍星＆シロ＆利光が活躍します！

第九十四話　結局鉄人って敵なの？味方なの？（前書き）

ＬＡＮ武さん、月さん、感想ありがとうございました！

もうすぐテストなんでもう更新できないかもです。

あーもう！誰だテストとか考えた奴！今すぐテストを考えた事を謝罪しないってんなら、まずそのふざけた幻想を（ｒｙ

でわ第九十四話です。どぞ。

第九十四話　結局鉄人って敵なの？味方なの？

バカテスト　政治経済

問　以下の問に答えなさい。

『団体が政策に影響を与えようと、政治家に働きかける事をなんと言うでしょう』

姫路瑞希の答え

『ロビー活動』

教師のコメント

正解です。流石ですね、姫路さん。
議員が外部の人間と面会できる『ロビー』で活動していた事からこう呼ばれています。

峰嶋真琴の答え

『ウ○ール街を占拠せよ！』

教師のコメント

フ○イスブックは偉大です。

島田美波の答え

『合コン？』

教師のコメント

王様だーれだ？

☆

康太ＳＩＤＥ

俺と愛子は保健体育フィールドで待機している。
俺達以外の４人が教師召喚獣を保健体育フィールドまで誘導して、全員でたこ殴りにするのが目的だからだ。

愛子「でもさ、峰嶋君も考える事がえげつないよね。確かに保健体育はボクらの土俵だけどさ」
俺「……だが、俺が保健体育以外で戦うよりは確実」

自分で言うのもなんだが、俺の保健体育は１９００点前後だ。
ところが、それ以外の９教科は未だに５０点前後を右往左往している。

愛子「ホント、保健体育がそれだけできるのに他の教科はてんでダメだもんね……」
俺「……（プイッ）」

愛子から目をそらす。
……俺だって何とかしたいと思っている。

愛子「ま、康太君が出来ない分野は、ボクが補ってあげるけどね。保健体育では負けても、それ以外なら負けないから」
康太「……愛子にはいつも助けられてる」

俺だってやればできるんだ。興味がないだけなんだッ……！

愛子「保健体育しか出来ないところが、康太君らしいんだけどね？」
俺「……さりげなくバカにされた気がする」

だがまあ保健体育のエキスパートであることに誇りを持っているのは本当で「どいたどいたぁ！保健体育のエキスパートがお通りだよ！」……何！？

声がした方向を向くと、教師召喚獣を必死の形相で追いかけてくる女子生徒が一人。

！？　スカートが、めくれて……（ぶしゃあああああああ）

愛子「……康太君？何に反応シタノカナ？」

俺「……！？（ブンブンブン）」

愛子「うん？何が言いたイノカナ？」

俺「……！？い、今はそんなことを言ってる場合じゃない…！」

あの女子生徒は確かレナ＝カリュートで……情報によると保健体育を得意としているはず。

俺「……愛子、教師召喚獣を頼む。俺はあっちの方を止める」

愛子「ううん、康太君が教師召喚獣をやってよ」

俺「……？」

愛子「康太君のほうが点数高いからさ。直接ボク達の勝利に繋がる方を優先したほうがいいじゃん？」

……確かに愛子の言うことにも一理ある。

俺「……分かった。足止め頼む」

愛子「オッケー。任せて」

……愛子に任せなければならないのは少し悔しいが、今はそんなことを言ってる場合じゃない。

俺「……教師のほうは俺に任せろ」
愛子「……康太君、カッコつけてるとこ悪いんだけど、召喚獣もう行っちゃったよ？」
俺「……！？」

見ると教師召喚獣は既に１００ｍくらい先を行っていた。俺は急いで追いかける。
……せめて最後くらいカッコよく決めさせて欲しい。

レナ『うーん？なんのつもりかな？』
愛子『ゴメンね？ここは通せないよ』
レナ『ふむふむ。このあたしに保健体育で挑むとは、よっぽど自信があると見受けるよ？』
愛子『ボクね、保健体育の実技が得意なんだ。まあ、保健体育のエキスパートみたいなのだよ』
レナ『へえ！じゃああたしと一緒だ！』
愛子『貴女も保健体育得意なんだ？』
レナ『ま～ね～。ウチの中では１番だと思うよ？』
愛子『ボクは……あはは、３番だ……』
レナ『でもさ、得意なんでしょ？じゃあさっさと倒されちゃって』
愛子『へ？』
レナ『だってさ……保健体育のエキスパートは、二人も要らないもん』

☆

ＮＯ　ＳＩＤＥ

土屋康太、工藤愛子の文月学園が誇る保健体育コンビが、長月の保健体育の女王、レナ＝カリュートと邂逅していたのと時を同じくして、別の場所で二人の男女ととある教師召喚獣が対峙していた。
男女のうちの男のほうは、身長２ｍもある榊龍星。
女のほうは、龍星の従姉妹である榊白姫。
そして彼等が対峙しているのは……

龍星「まさかこんなところで西やんと闘ることになるとはな……」
白姫「☆♪％▼＊○＃！？＋@$～～～～！！（怖いですの！怖す

ぎですの！）」

補習担当　西村宗一　日本史　８１３点

ＶＳ

文月学園　榊龍星　日本史　４９２点
榊白姫　日本史　２８８点

文月学園が誇る（？）鬼教師、補習担当の鉄人こと西村宗一（の召喚獣）である。
もともと身体能力で人間のスペックを遥かに超える上に、勉学においても教師の担当科目より２００点以上も上を行く鉄人西村。龍星と白姫が臆するのも無理は無い。

殴りあうのはあくまで召喚獣。明久や真琴のようにフィードバックがある訳ではない。にもかかわらず、鉄人（の召喚獣）が放つ殺気は、龍星に恐怖を植え付け、白姫を使いものにならないほど壊すには十分すぎた。

鉄人（の召喚獣）は龍星と白姫が臆しているのを、まるで理解しているかのように二人の召喚獣めがけて跳躍する。
二人は召喚獣を操作し、間一髪のギリギリでかわす。鉄人（の召喚獣……だよね？）の拳が振り下ろされた場所には、召喚獣が干渉する事ができるように作られた特殊仕様の床がへこんでいた。

龍星「燃え上がれ、『爆炎』！爆炎放射、轟火剣嵐・龍牙！！」

鉄人に生まれた一瞬の隙を突いて反撃する龍星。
龍星の召喚獣の装備である日本刀に炎が絡み、龍の形を成して鉄人を飲み込む。
龍星の渾身の一撃である。

龍星「どんなもんよ！」
白姫「さすがですわお兄様！くぅぅぅぅん！」←ワン娘モード
龍星「どぁぁぁぁぁ！！はなれろぉぉぉ！！」

今までのムードを全てぶち壊しかねない勢いでコントじみた事を始める二人。
だが、当然それで終わるわけもなく、

ゴオッ！っと轟音を立てて鉄人は炎の中から生還した。

龍星「さすが西やん。やっぱこんくらいじゃダメか」
白姫「次は私も加勢しますわ」

龍星はある程度予想していたこの状況を冷静に分析、白姫はすぐにワン娘モードを解いて臨戦態勢に入る。
ついさっきの龍星の腕輪の使用による点数の消費を入れた点数が遅れて表示される。

補習担当　西村宗一　日本史　７１９点

ＶＳ

文月学園　榊龍星　日本史　４１５点
榊白姫　日本史　２８８点

龍星＆白姫「「はぁっ！？」」

思わずハモる二人。それも当然である。
一般的に、ある程度点数差がついても攻撃は通用しやすいのが試験召喚獣である。
たとえ相手が８００点だろうが、本気の一撃を叩き込めばそれ相応のダメージになるのだ。
にも関わらず、鉄人はダメージを１００点程度に抑えた。
点数に関わらず絶大な攻撃力を誇る腕輪の攻撃を、防御したのだ。

鉄人（忘れられてそうだけど召喚獣）はまるで『ホラ、俺って暑苦しいじゃん？だから炎効かないんだよね』的な何その超理論顔をする。

龍星「！？　来るぞ！！」
白姫「え？　き、きゃあ！」

白姫よりも一瞬だけ早く、攻撃を見切った龍星がとっさに白姫を庇う。
と、同時に赤い閃光が走り、爆音が響く。

召喚獣の特殊攻撃は通常人間にはあたらない。
だが、もしこの攻撃が自分達にも当たっていたら、相当熱かったんだろうな、と龍星は感じていた。

鉄人が放った赤い魂（フレイムセンス）は、基本的に攻撃技ではない。
龍星の『爆煙』や瑞希の『熱線』と言った、火炎属性の攻撃を中心に、あらゆる攻撃の威力を半減させる能力である。

この能力には殺傷能力は微塵も無い。

では、龍星と白姫を襲った赤い閃光はなんなのか？答えは簡単だ。

鉄人以外の誰かが、背後から鉄人を攻撃したのだ。

では、その誰かとは誰なのか？

それは龍星が知っていた。

龍星「……久保か」

久保「大丈夫ですか？」

鉄人を背後から襲撃し……龍星と白姫に加勢した人物――――それは、久保利光だった。

白姫「しょしょしょしょれはなんでしゅの！？（ガタガタガタ）」

白姫が久保の後ろをふわふわと浮いている、直径６０ｃｍ程度の赤い球体を指差す。

一箇所、まるで人間の黒目のような部分があり、中は赤い液体で満たされている。

久保「？　ああ、これかい？これは僕の能力だよ」

龍星「能力だと？真琴の話じゃお前さんの能力は“自爆”だったはずだろ？」

久保「総合科目では、の話ですよ。総合科目以外だと、この深紅（テラフ）の爆槍（レア）になるんですよ」

深紅（テラフレア）の爆槍。その名の通り、絶大な威力を誇る攻撃である。
近いものとしては、瑞希の『熱線』が挙げられるが、威力が桁違いに高い。
反面、威力が高い分欠点も多い。
この能力の最大の欠点は、『別の教科の点数も消費してしまう』という点だ。

たとえば、日本史フィールドで深紅（テラフレア）の爆槍を発動し、１００点を消費したとする。
通常ならそれで終わるのだが、深紅（テラフレア）の爆槍はそれ以外にもランダムで選出された４教科、計５教科の点数を消費してしまうのである。

さらに、日本史で１００点消費したからといって、他の教科も同じ分だけ、というわけではない。
日本史で１００点、数学で５０点、世界史で７０点、化学で１４０点、保健体育で９０点……と言った具合に、選ばれる教科も、消費される点数も完全にランダムなのである。
だからこそ、球体の中の赤い液体が意味を成してくる。

この液体は、久保の点数そのものを表し、あとどの程度点数が残っているのかを明確に表しているからだ。

龍星「じゃあさっきの西やんはお前さんの攻撃から身を守ろうとしていたってことだよな？」
久保「そういうことだと思います」
白姫「びっくりしましたわ～……」

久保の深紅（テラフレア）の爆槍は数ある腕輪の能力の中でも最強クラスの攻撃力を持つ。単純な攻撃力ならムッツリーニの閃光加速にも匹敵するほ

どに。

久保「……どうやら西村先生も復活したようです」

久保が冷静に言う。

その視線の先には、深紅の爆槍（テラフレア）に焼かれながらもなんとか立ち上がった鉄人（の召喚獣）がいた。

補習担当　西村宗一　日本史　１５１点

ＶＳ

文月学園　榊龍星　日本史　４１５点
榊白姫　日本史　２８８点
久保利光　日本史　３３６点

久保「僕としてはこのまま決着をつけたほうがいいと思うのですが」

龍星「そうだな」

白姫「私も同感ですわ」

３人がそれぞれの意思を確認すると、集中砲火を始める。

龍星「燃え上がれ、『爆炎』！爆炎放射、轟火剣嵐・龍牙！！」

久保「深紅の爆槍（テラフレア）！」

龍星と久保が最大級の攻撃をお見舞いする。

鉄人はそれを赤い魂（フレイムセンス）で防御、軽減し、かろうじて防ぎきる。

しかし――――――

白姫「召喚獣バトルは、なにも腕輪だけで決まるものでは無いですわ」

龍星と久保の攻撃を目隠しにして、白姫が鉄人の背後へと回りこんでいた。
対応する間も与えず、白姫の召喚獣の装備、十文字槍が振り下ろされる。
振り下ろされた十文字槍は、鉄人を一刀両断にし、即死させた。

補習担当　西村宗一　日本史　ＤＥＡＤ

ＶＳ

文月学園　榊龍星　日本史　３３５点
　　榊白姫　日本史　２６４点
　　久保利光　日本史　２９３点

文月学園最強の教師にして、人外のスペックを誇る鉄人は、意外な組み合わせのトリオによって沈められることとなった。
しかし、まだ彼等は知らなかった。

【文月学園　１　－　２　長月女学院】

自分達が、窮地に立たされている事に。

第九十四話　結局鉄人って敵なの？味方なの？（後書き）

鉄人悪役回でした（笑）

さて、次回は康太＆愛子視点でお送りします（いつになるのやら…

…ｏｒｚ）

第九十五話　康太と愛子と激闘の保健体育（前書き）

お久しぶりです。
テストが終わり、やっとまともに執筆の時間がとれるようになりました。
9日ぶりになってしまいましたが、第九十五話なのです♪
どーぞ♪

第九十五話　康太と愛子と激闘の保健体育

バカテスト　特別編

問　以下の問いに答えなさい。

『幼い頃に親しくしていた人を何と呼ぶか答えなさい』

姫路瑞希の答え

『幼馴染み』

教師のコメント

正解です。さすがですね、姫路さん。
姫路さんは幼馴染みはいますか？若い頃に仲の良かった友人には、一生仲良しでいられる人がたくさんいます。大人になってからでは得るのが難しい宝物です。今のうちにたくさんの友人を作っておきましょう。

峰嶋真琴の答え

『天敵……女装は嫌じゃあああああ！！』

教師のコメント

名川さんを指しているのでしょうか。

坂本雄二の答え

『おさななじ――――――――――あがががががががが！！！』

霧島翔子の答え

『いいなづけ』

教師のコメント

念のため、救急車を呼んでおきます。

康太ＳＩＤＥ

俺「……速い……！」

俺が全速力で追いかけてもどんどん離されていく。
あの教師召喚獣の速度は半端じゃないようだ。

俺「……ぐ……、閃光加速！」

１６００点オーバーで手に入る指輪の能力、“閃光加速”を使う。
多少距離は開いてても、一気に距離を詰めて一撃で決める！

ギュオン！

俺の召喚獣が敵の背後から小刀をつきたてる。
……勝った！

ゴオン！

俺「……何……！？」

確かに確実に後ろをとったはずなのに、教師召喚獣は俺の召喚獣の真横から攻撃を仕掛けてきた。
閃光加速で光速を超えた俺の動きに着いてきたというのか！？
いや、それ以前に、奴は俺の召喚獣に触れていなかった気がする。
動体視力には自信があるし、間違いなく奴は触れずに攻撃を仕掛けてきた。

ゴォォォォォン……

俺が奴の攻撃について考えていると、さっきまで愛子と一緒にいた場所にとても大きな雷が落ちた。

俺「……！？」

まさか愛子がやられたのか……！？
けど、こっちも助けに行けるような状況じゃない。どうする……！？
悩んでいると、敵が一気にたたみかけようと飛びかかってきた。

俺「……ぐっ！」

避けられるような体勢じゃない。
やばい……！！

？？「零戦砲（ゼロセンホウ）」

あとギリギリで攻撃が当たるというところで、極太のビーム砲が俺

の召喚獣の目の前をかすめた。
これは……

俺「……真琴」
真琴「やっほう。助けに来たぜ」
俺「……助けを呼んだ覚えはない」
真琴「そー堅いこと言うなって。それより行かなくていいのか？」
俺「……何のことだ」

またまたとぼけちゃって、と真琴は肩をすくめる。

真琴「工藤、気になるんだろ？」
俺「……（コクッ）」

俺は静かにうなずく。
気にならないと言えば嘘になるし、気になる。

真琴「この場はオレに任せて行けよ。王子様はお姫様を助けるモンだぜ？」
俺「……感謝する」
真琴「気にすんなよ。お前にゃいろいろと貸しがあるしな」

別に大した事をしたつもりはないが、ここは素直に真琴の言う通りにする。

俺「……すまないが頼む」
真琴「おう。がんばれよ、ムッツリーニ」

俺は真琴をその場に残し、今まで来た道を引き返す。
愛子、俺が行くまで死ぬな……！！

真琴『さて、ムッツリーニも行ったことだし、コイツはとっとと倒して早く向こうの代表見つけるか』

☆

愛子ＳＩＤＥ

レナ「……二人ってこういうとき便利だよね。そうやって役割分担ができるんだから」
ボク「あれ？もしかして僕と康太君の関係に嫉妬しちゃってる？」
レナ「あ？　……別に。試獣召喚（サモン）」
あれ？なんか怒らせちゃったかなー？
ボク「試獣召喚（サモン）っと」
お互いに召喚獣を呼び出す。
ボクは康太君や峰嶋君に比べたら低い点数かもしれないけど、それでも７００点を超える点数を取ってるんだから！

文月学園　工藤愛子　保健体育　８２３点

ＶＳ

長月女学院　レナ＝カリュート　保健体育　７７２点

お互いの召喚獣が姿を現し、頭の上に点数が表示される。
ボクのは見慣れたセーラー服に大斧、向こうは西洋鎧に瑞希ちゃんクラスの大剣。
なんかすごい宝石がたくさんついてて、派手さは今まで見た中で一番かも……。
ボク「一応点数はボクの方が上みたいだよ？」
レナ「関係ないから。点数で決まるほど、召喚獣バトルは甘くないわ……よ！」

ボク「うわっ！？」

いきなり大剣を振ってくる。
それをなんとか紙一重でかわす。

ボク「いきなり！？もうちょっと手加減してほしいかも！？」
レナ「あ……？」

あれ？なんかさっきよりも凄味が増して……

レナ「チョーシ乗ってンじゃねえぞ小娘！テメェは点数だけのエキスパートかよ！！」
ボク「！？」

相手が叫ぶと同時に青いビーム砲が飛んでくる。
これは……峰嶋君の零戦砲！？

レナ「エキスパートっつーのはなぁ、ただ点数が高ければ良いってもんじゃねぇンだよ！！点数の不利を覆せる戦闘技術と戦略を身につけて、初めてエキスパートなんだよ！！」
ボク「ぐ……！！」

相手はどんどん零戦砲を撃ち込んでくる。
なんでこの人が峰嶋君の技を使ってるか分からないけど……かなりマズイかも！

レナ「逃げんな小娘ぇ！！」

今まで連続発射していた零戦砲が止み、今度は……

レナ「らあああああああああああああああああああああ！！」

肝試し大会の時に峰嶋君が使った技、潤造雷斬（じゅんぞうらいざん）がボクの召喚獣を襲った。

ボク「きゃあああ！！」

その瞬間、強烈な電撃がボクの身体を貫いた。

まともに立てなくなり、その場に倒れこむ。

レナ「あ？痛みがフィードバックするのか？ったく、この技の持ち主はアブねぇ奴だなオイ」

ボク「も、持ち…主……？」

レナ「そうだよ。あたしの能力は『能力拝借（スキルマンション）』。同じフィールド内にいる奴の腕輪の能力を借りて発動させるんだよ」

だから、峰嶋君の技を、それも複数……！

レナ「しっかし、さすがにフィードバックはやりすぎかぁ？もう一回換えとくか」

この……レナさんが言うと、召喚獣が持っている剣の宝石の色が変わった。

宝石の色で能力がきまってるのかな……？

レナ「いつまでもくたばってないでさっさと立ちなよ。ま、やったあたしが言うことでもないけど。早くしないとトドメ刺しちゃうよ？もう瀕死だけどさ！」

文月学園　工藤愛子　保健体育　１３４点

ＶＳ

長月女学院　レナ＝カリュート　保健体育　４４９点

確かに、最初はこっちが有利だったのに、もうかなりの点差が開いちゃってる。
あんなこと言って、康太君の足を引っ張らないようにって思ったのに……康太君を助けてあげるなんていって……ボク、全然そんなこと言えない……！

レナ「さて、次はどんな能力かな……！？」

レナさんの召喚獣が身構えると、すごい勢いでこっちに突進してきた。
これは……康太君の“加速”だ……。ボク、康太君の技でやられちゃうんだ……

ボク「まだ……終われない……！」

召喚獣がを動かしたいのに、動いてくれない。
さっきの潤造雷斬（じゅんそうらいざん）で、まだ痺れているんだ。

レナさんの召喚獣はどんどんこっちに迫ってくる。
もう駄目かも……！！

？？『……“加速”』
レナ「あ？」

ボク「え？」

レナさんの召喚獣の剣を、忍び装束の召喚獣が受け止める。
あれは……

ボク「康太君……！」
康太「……またせたな、愛子。大丈夫か？」
ボク「う、うん。それより、教師召喚獣は……？」
康太「……真琴に任せてきた。それよりも……」

康太君は視線をボクからレナさんに移した。

レナ「な、何よアンタ……ッ！？」
康太「……愛子を傷つけて、ただで済むと思うな」
レナ「何よ！これは戦争ッ！傷つけて何が悪い！！」

レナさんが必死に召喚獣を操作しながら言う。
康太君はいつもどおりに、落ち着いていた。

康太「……確かに、これは戦争。でも……傷つけられたくないものは、理屈抜きに傷つけられたくない！」

康太君の召喚獣が、一気に加速する。

レナ「な…に……！？」
康太「……真の“加速”を見せてやる……！！」

康太君の召喚獣が、相手をはじいた。
そのままレナさんの召喚獣は体勢を崩してしまう。

レナ「あ、あたしは、保健体育のエキスパート！保健体育フィールドは、あたしの戦場！あたしだけの戦場なのにいいいいいいいいいいいいい！！」

康太「………“閃光加速”」

康太君の召喚獣が持つ小刀が、レナさんの大剣を砕き、レナさんの召喚獣そのものを吹き飛ばした。

第九十五話　康太と愛子と激闘の保健体育（後書き）

ムッツリーニカッコええ……

レナさんのモデルは麦のん（おもにキレた時が）。

ちょっとだけそれっぽくしてみました。

第九十六話　真琴と保体と不可視波動（前書き）

月さん、ＬＡＮ武さん感想ありがとうございました！

おーまいがっ！そろそろバカテストのネタが尽きそうだぜ！

第九十六話　真琴と保体と不可視波動

バカテスト　国語

問　以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『ものごとは繰り返されるものである』

姫路瑞希の答え

『二度あることは三度ある』

教師のコメント

正解です。さすがですね、姫路さん。

『あること三度』『一災起これば二災』という言葉もあります。

よくないことが続くときに使われる言葉です。

同じ過ちを起こさないよう、一度目の教訓を生かして対処しましょう。

峰嶋真琴の答え

『Ｒｅｐｅａｔ　Ａｆｔｅｒ　Ｍｅ』

教師のコメント

国語のテストで英語を書くのはやめてもらえませんか？

木下秀吉の答え

『輪廻転生』

教師のコメント

来世もFクラスですか？

☆

真琴ＳＩＤＥ

オレ「さて、ムッツリーニも行ったことだし、コイツはとっとと倒して早く向こうの代表見つけるか」

一応装備はバージョン？。（サード）

装備は接近戦、能力は遠距離戦に適したものになっている。

確認してなかったけど、向こうの点数ってどれくらいなんだ？

文月学園　峰嶋真琴　保健体育　１２９３点

装備変更（デフォルトチェンジ）に零戦砲（ゼロセンホウ）と能力を連発してつかったから、４００点ほど点数が減っている。向こうは……

文月学園　峰嶋真琴　保健体育　１２９３点

ＶＳ

保体教師　バーム＝カレイド　保健体育　９９２点

オレ「高っ！？」

零戦砲の直撃食らってあの点数なの！？

高すぎだろ！！

オレ「って突っ込んでる場合じゃねえ！！やってやろうじゃねえか！！」

相棒「気をつけようね！あれくらいの点数だと、一撃で（おもに君が）死んじゃうかもしれないから！」

オレ「わぁーってるよ！目標は……」

オレ＆相棒「「一撃も食らわずに勝つ！！」」

相手が先に動く。

一気に間合いを詰めてくるところをみると……接近戦で来るつもりか！

オレ「甘えんだよ！！」

グローブの手の右甲の部分から刃を出す。

ただのグローブじゃねえんだよこっちは！

オレ＆相棒「「どおりゃあああああああ！！」」

短期決戦！！

一撃で頭貫いて戦死させてやる！

ガッ

と思ったが、突き出した刃が何かに阻まれた。……

オレ（まずい……！！）

こっちの第一手は止められ、向こうの攻撃（ターン）。
そして、あっちが望んだ超至近距離からの攻撃。

オレ「お、おおおおおおおおおおおおおおおお！！」

とっさに手を前に突き出させ、零戦砲をぶっ放す。
攻撃そのものは見えない何かで防がれたが、目的はそっちじゃない。
零戦砲自体は試験召喚システムが作る“映像”なのだが、どういうわけか攻撃にはわずかながら反動があるらしい。
つまり、零戦砲発射に伴う反動を推進力にして一気に間合いを空けようというわけだ。

相棒「なんとか……窮地は脱出…？」
オレ「アブねえよ。ホントアブねえ」

しっかしあの見えない壁みたいなの厄介だな。
零戦砲の超火力でも破壊できねえみたいだし、どうするか……

相棒「……使う？」
オレ「てか今あれ使って大丈夫なのか？やだぜ。精神崩壊とか」
相棒「大丈夫！……多分」

待てやコラ。

オレ「まぁ……それはやめとくわ。本気でミスったらシャレにならないし」
相棒「じゃあどうする？大天使（ガブリエル）の翼使う？」
オレ「いや……このままで行く。問題なのはあの不可視の力だ。あ

ー……“不可視波動”とでも言うのか？とにかくあれを攻略する」

あの不可視波動は、薄く張って楯のように展開したり、壁の形にして押しだしたり、槍のようにとがらせて突き刺したり、とにかくいろんな形をするってのはわかってる。

防御はすべてアレでやってるみたいだ。

逆に言えば、アレを使わせ続ければいつか点数がなくなって能力の使用ができなくなるだろう。

つまりは……

オレ「ひたすらこっちから仕掛け続ける」

向こうの能力使用による点数切れを狙うわけだ。

どんだけ時間がかかるんだよって思うかもしれないけど……

文月学園　峰嶋真琴　保健体育　７２９点

ＶＳ

保体教師　バーム＝カレイド　保健体育　６０７点

どうやら燃費はそこまでよくないようだ。

まあ強大な能力の代償としては当然だな。

あとは、オレと敵、どっちの点数が先に尽きるかだ。

オレ「……行くぞ！」

今度はこっちから間合いを詰める。

至近距離から零戦砲と刃による連続攻撃だ！

オレ&相棒「「ぬおおありゃあああああああ！！」」

ガアァンッ！！と音が響く。

オレ&相棒「「おらおらおらあああああああああ！！」」

零戦砲の連続射出と両方の刃による連続斬撃。
一気にカタ付けるくらいの勢いで行くぞ！！

チュドンチュドンチュドン！！

連続で零戦砲を浴びせまくる。
連射能力を上げるために、一撃一撃の威力は低い。それでもここまでの連続攻撃なら……！！

ザクッ

突如、左腕に激痛が走った。

オレ「あああああああああああああ！！！」

低く、鈍った悲鳴を上げる。
痛い。脚を打ち抜かれた時よりも、銃弾が羽をかすった時よりもずっと。
まるで、神経をハサミで切られたように痛い。

オレ「不可視の…力を……槍みたいに……クソ……」

あまりの激痛に意識を手放しそうになる。
けど、こんなところで負けてられない。

オレが戦死すれば、その瞬間こっちの負けが決定する。
こんなところで、負けてられねえんだよ……！！

オレ「ッ……！！　装備（デフォルト）……変更（チェンジ）、バージョン……？（セカンド）……！！」

装備を？（セカンド）に変え、左腕を突き刺しているである見えない何かをつかむ。
どうやら掴むことはできる力らしい。

オレ「ッ…！！　使うつもりはなかったけど……ここからは全力で行かせてもらうぞ……！」

そして、オレの能力の中でも最強にして最も特異（イレギュラー）な技を発動させる。

オレ「……獣化（ビースト）」

第九十六話　真琴と保体と不可視波動（後書き）

次回へ続きます。
早めに更新できたらいいなぁ…

第九十七話　獣化とト代表と止まらない連戦（前書き）

ＬＡＮ武さん、則次　火焔さん感想ありがとうございました！

第九十七話　獣化とト代表と止まらない連戦

バカテスト

問　以下の問いに答えなさい

『相手を従わせるために、肉体的、精神的に痛めつけることを何と言うでしょう』

霧島翔子の答え

『石抱き　鞭打ち　海老責め　釣責め　はりつけ　天井吊るし等に代表される拷問』

教師のコメント

正解です。さすがですね、霧島さん。
現在は国際法上、拷問等禁止条約によって拷問は禁止されています。分かっているとは思いますが、人権を尊重し、くれぐれも類する行為のないよう学校生活を送ってください。

ＦＦＦ団の答え

『日常差飯事』

教師のコメント

日常茶飯事ってどういうことでしょう？
しかも漢字が違います。

坂本雄二の答え

『悪かった翔子――――――！』

教師のコメント

詳しくは聞きません。

☆

NO　SIDE

獣化（ビースト）。真琴の数ある能力の中でも極めて特異性の高い能力である。
単純な点数の増加だけでなく、本来点数で決まる召喚獣の基本能力を点数以上に底上げしてしまう能力。

真琴「はあああああああああああ！！」

獣化した召喚獣は、重い見えない壁を簡単に粉砕する。
だが、相手の教師召喚獣はすぐさま槍状の何かを展開し、突き出してくる。

真琴「効くかんなのおおおおおおおおお！！」

真琴はとっさにかわすと、横からそれをへし折る。
触れることができる以上、そして棒のような形状である以上、召喚獣自体の戦闘力がけた違いな獣化状態ならなんてことはない。

真琴「おりゃあああああ！！」

獣化状態の召喚獣の伸びた爪で、相手を切り裂く。
しかし、相手もまた見えない何かを爪のように使って応戦した。

真琴は、大きなフィードバックを食らう代わりに、身体で相手の能力の正体をつかみ取っていた。
左腕を抑えながら不敵に笑う。

真琴「テメェの能力の正体は空気だろうが……。んなことは最初の一撃を喰らった時点でわかってんだよ」

空気の塊によって作られた爪を召喚獣が掴む。

真琴「空気だっつっても、塊である以上は触れることも折ることも可能だ」

そしてへし折り、

真琴「そいつがしばらくの間は形状が維持されるってこともわかってる」

真琴の召喚獣の左腕には、ずっと空気の塊が刺さったままだった。
相手の手元を離れても、形がそのままだということを真琴は理解していた。

真琴「だったら、、テメェのその空気でテメェの身体を貫いてやる。自分の技で死んどけよ」

爪を相手の召喚獣の心臓部分に着きたてる。

文月学園　峰嶋真琴　保健体育　３４２（１７１）点

ＶＳ

保体教師　バーム＝カレイド　保健体育　ＤＥＡＤ

教師召喚獣はゆっくりとその姿を消していった。

真琴「……とりあえず、移動……か」

このままの状態で別の敵に狙われれば、間違いなく勝てないと踏んだ真琴はすぐさま移動を開始する。

しかし……

？？『行かせないわよ』

真琴「……！？」

真琴の目の前に一人の少女が現れる。

真琴「……生徒会長か……！！」

マリーナ「あら、私はどちらかというとマリーナと呼ばれる方が好きなのだけれど」

文月学園と長月女学院のリーダー同士がついに出会った。

第九十七話　獣化とト代表と止まらない連戦（後書き）

次回決着！できればいいな……

第九十八話　この小説の主人公はカッコいい時大抵死にかける（前書き）

月さん、ＬＡＮ武さん感想ありがとうございました！

第九十八話　この小説の主人公はカッコいい時大抵死にかける

アンケート

以下のアンケートに答えなさい。

『入学時、どんな抱負を抱いたか答えなさい』

姫路瑞希の答え

『当時は体が弱かったので、健康で元気にみんなと学園生活を送りたいと思いました』

教師のコメント

入学時から病気がちでしたが、最近はとても明るく健康そうで何よりです。内気な感じもありましたが、今は友達と元気に交流しているようで、内面的にも成長が見られます。これからもいい学園生活を送ってください。

峰嶋真琴の答え

『試召戦争で大暴れしたいと思いました。自分の強みは点数の高さだったので、それを生かせる何かをしたいと思っていました』

教師のコメント

久しぶりにまともな回答で安心しました。峰嶋君は二年生から転校してきて召喚獣の操作もなにも行わずいきなりの実践でしたが、試召戦争では大活躍でしたね。戦争以外の場面でも、君の活躍を期待しています。

島田美波の答え

『とにかく日本語が全く駄目だったので、はやく日本語の読み書きや会話ができるようになりたいと思いました』

教師のコメント

なるほど。島田さんはドイツからの帰国子女でしたね。入学当時はそうだったかもしれませんが、今は読み書きも会話もしっかりできていると思います。これもあなたの努力のたまものですね。

吉井明久の答え

『自分は特別な人間でいつか才能が認められる事件が起きると信じていました』

教師のコメント

目を覚ましましょう。

☆

真琴ＳＩＤＥ

オレ「まったく、冗談じゃねえっての……」

マリーナ「……どういう意味かしら」

向こうは冷静に返してくる。

教師の中でもトップクラスの（零戦砲を受けても９００前後だったことから）１２００点とか取るような奴とやりあった後で向こうの大将と連戦はさすがにキツイ。

ていうか勝てなくね？

マリーナ「……悪いけど、調べさせてもらったの。ずいぶんといろいろな種類の腕輪を持ってるじゃない？」
オレ「理事長になんか吹きこまれたか？そうでもなきゃ能力を調べるなんて無理だしな」
マリーナ「どうでもいいことよ。さっさと闘りましょう。残念だけど、こっちにも負けられない理由ができたの」
オレ「なんだ？そっちはまだ負けても終わらないってのに、ずいぶんと焦ってらっしゃいますねぇ？」

会話しながらこの先の行動を考える。
こっちは獣化で増えてる分の点数でも３００ちょい、途中での解除でもほとんど変わらない点数。
それに対して向こうは４００オーバー。
……うーん、不利だな。勝てねえ。

マリーナ「悪いけど、逃がさないわよ」

そう言って二本のナイフを構えてくる。
一応この戦争中は敵前逃亡おｋみたいなルールな訳だけど、まあ敵さんはそれを許してくれないわけだ。

オレ「そうだな……。じゃあ、アンタを倒せる可能性が最も高そうな装備で行くか」

少なくとも、今の獣化状態よりは圧倒的に可能性が高い。

オレ「解除、装備変更（デフォルトチェンジ）、バージョン（フォース）？」

文月学園　峰嶋真琴　保健体育　１９２点

ＶＳ

長月女学院　マリーナ＝クロムウェル　保健体育　４１１点

マリーナ「……それで、私に勝つつもりなの？」
オレ「ああ、今ならアンタ程度、余裕で倒せるね」

この状況なら、だれもがハッタリだと思うだろうな。
まあ逆の立場ならオレもそう思う。

オレ「まあ、見せてやるから。大天使（ガブリエル）の翼」

翼が生え、召喚獣が宙を舞う。
舞い降りる天使の羽（フェザーノイズ）は一気に点数を消費しちまうから使わない。

マリーナ「その、バージョン？（フォース）だったかしら？それに関するデータがなかったのよ。何か奥の手を持っているんでしょう？」
オレ「よく分かってんじゃん。ま、それを知るころには、アンタは負けた後だけどな」

一気に間合いを空ける。
あっちがナイフによる接近戦なら、間合いを空けて遠距離からライフルで狙撃すれば無傷で勝てる！

マリーナ「甘いのよ」
オレ「は？」
マリーナ「いつ、私の武器がナイフだけなんていったかしら？」

相手の召喚獣がナイフを投げ捨てると、太もものあたりのホルスターから拳銃を取り出してきた。
な！？　銃まで持ってんのかよ！？

マリーナ「まずは、その鬱陶しい羽根を打ち抜かせてもらうわ」
オレ「ハッ！　ただの拳銃程度で、こっちの速度に追いついてこられるわけないだろ！」
マリーナ「ただの拳銃かしらね」

一気に八発の弾を打ち出してくる。
ライフルとかならともかく、普通の拳銃なら避けられないことはないはず……！

チュン！チュン！チュン！チュン！チュン！チュン！チュン！チュン！

オレ「は……？」
マリーナ「ただの拳銃じゃないのよ。これは」

背中に穴があいたような、気持ちの悪い痛みが走る。
それほど痛いわけじゃないけど……やたらと気持ちの悪く様な痛みだった。

オレ「がっ……おぇ……！」
マリーナ「これはね、一撃の威力は大したことないわよ。単純な攻撃力だったらＦクラス以下でしょうね。けど……代わりに速度がある。この拳銃の射出速度は、およそ秒速２８００ｍ。音速の約８倍……日本で人気のある超電磁砲よりも速いわよ」

オレ「……意外と、詳しいな……アンタ……」
マリーナ「メイの受け売りよ。あの子、日本大好きだから」

そーかい……、と返す。
オレの位置からは召喚獣は見えないが、身体に帰ってくるフィードバックの感覚でよく分かる。
飛べてない。翼が、翼としての役割を果たせてない。

マリーナ「……無様ね、その召喚獣。天使か何かにでもなったつもりだったのだろうけど、翼をもがれた天使みたいね」
オレ「い…やな……嫌味、だな…」

ライフルを構えさせ、弾を打ち出す。
確かに大天使（ガブリエル）の翼による飛行能力は（どういうわけか）消されてしまったが、それで負け確定ってわけじゃない。攻撃自体はほとんどダメージなしだから、ただ飛べなくなっただけだ！

マリーナ「……凶弾（ヘルショット）」
オレ「またなんか仕掛けてくるつもりか……！」

点数差で圧倒的に不利なため、一応防御態勢をとる。
その直後、オレの召喚獣の翼を内側から何かが突き抜けてくる感覚。
それとほぼ同時に、オレの召喚獣の翼が内側から突き破られた。

オレ「がああああああああああああああああ！！」
マリーナ「……弾もただの銃弾じゃないの。これが私の腕輪の能力よ。打ち出した弾をウニの様な形に変形させる能力。さっきの銃撃は知らないけど……それはきっと痛いんでしょうね」

痛みで何を言ってるか全然頭に入ってこない。どうすればいいかも

全然考えられない。
ただ痛みにのたうちまわるしかできない、

マリーナ「……早く降参して。今のあなたが、フィードバックで死んでもおかしくないのは知ってるわ」
オレ「……が、がぁ……だれが、降参するかよ……」
マリーナ「……！凶弾（ヘルショット）！」

さらに翼がつき破られ、同じような痛みが全身を貫く。

オレ「がああああああああああああああ！！」
マリーナ「早くしないと、早くしないと……あなた、本当に取り返しのつかないことになるのよ！」
オレ「……ろよ」
マリーナ「え……？」

痛みのおかげで頭がはっきりしてきた。危うく意識飛びそうだったが、助かった。
てか、なんかオレさっきから酷い目のオンパレードだな？

オレ「やってみろよ…。とどめを刺せばいい。オレを殺したいなら殺せばいい」
マリーナ「……分かったわ」

チャキ、と拳銃を構えてくる。
やっぱ、動かねえよなぁ……

マリーナ「後悔、しないでくださいね」
オレ「アンタこそな」

ダァン！と銃声が響く。
フィードバックだったけど、一瞬、自分の心臓が止まったのを、確かに感じた。
マリーナ「……ごめん、なさい……でも、こうしないと、メイが……」
コツコツコツ、と足音が遠ざかっていく。
オレを倒したと思ってんだな。まあ、当然だろうな。
……勝った。
オレ「悪いな」
マリーナ「え……？」
オレ「オレの勝ちだ」
振り返り、マリーナをは驚愕する。
そりゃそうだ。ついさっき、自分でとどめを刺した奴が――――
マリーナ「なんで……！？」
文月学園　峰嶋真琴　保健体育　１４０９点
ＶＳ
長月女学院　マリーナ＝クロムウェル　ＤＥＡＤ
ボロボロに突き破られたはずの翼を神々しく光らせ、復活しているのだから。

第九十八話　この小説の主人公はカッコいい時大抵死にかける（後書き）

真琴復活の理由は！？
次回に続く！

「おい！？もう死にかけるのはごめんだぞ！？」ｂｙ峰嶋少年

第九十九話　利害一致（前書き）

ＬＡＮ武さん、月さん感想ありがとうございました！

最近あまりにも更新ペースが遅い……

若干スランプ気味です。

まあ他にも色々やらなきゃならん事があってｏｒｚ

でもがんばります！

第九十九話　利害一致

バカテスト　家庭科

問　以下の問いに答えなさい。

『味噌汁に足りない栄養素と、それを補うために味噌汁に入れるといい具材の例をあげなさい』

吉井明久の答え

『ネギ』

峰嶋真琴の答え

『玉葱』

メイ＝クロムウェルの答え

『春菊』

教師のコメント

どれも正解ですね。
ビタミンCなどが多く含まれるものがいいでしょう。味噌はビタミンB群が豊富で大豆たんぱく質も含まれるのでとても健康にいいです。反面、塩分が多めなので、塩分の取りすぎに注意しましょう。

姫路瑞希の答え

『ビタミンC、オレンジ、塩酸』

教師のコメント

それは料理ですか？

マリーナ＝クロムウェルの答え

『トリカブト、オニドコロ、シャクナゲ』

教師のコメント

それは食べ物ですか？

吉井明久のコメント

こんなところにも必殺料理人が……

峰嶋真琴の答え

なんで全部猛毒の植物なんだ……

☆

真琴ＳＩＤＥ

文月学園　峰嶋真琴　保健体育　１４０９点

ＶＳ

長月女学院　マリーナ＝クロムウェル　ＤＥＡＤ

オレ「はい！オレの勝ち！」

マリーナ「待って！納得できるわけないでしょ！どうして戦死してないのよ！？」

といったやりとりを実はすでに数十分近く繰り返している。

マリーナ「あなたの召喚獣は間違いなく心臓を貫かれて即死したはずよ！それがどうしてもとの点数に戻ってるのよ！？」

オレ「だからそれが腕輪の能力だっつってんだろ？そういう能力なんだよ、疑似心臓（ダミーハート）は」

マリーナ「そういうって、あなたの能力は翼による飛行じゃないの！？」

オレ「それもあるがそれだけとは一言も言ってねえぞ」

やっぱみんな勘違いしてるようで、『腕輪の能力は一人につき一つしかない』と思い込んでるらしい。

だが実際には久保のように教科によって能力が変わったり、オレみたいに装備変更で能力を複数所有する奴もいる。

まああれだ、オレにその常識は通用しねぇ。

マリーナ「……私の、負けってこと……？」

オレ「まあそういうことだ。で、こっからが本題なんだが……」

軽く周囲を見回す。

近くにあるのは……監視カメラっぽいものが一台か。

オレ「よっと」

懐から取り出したナイフをそれに向かって投げ、壊す。

これでよし。

マリーナ「何してるのよ……」

オレ「誰にも邪魔されたくないからな。さて、こっからが本題だ。

オレと取引しようぜ」
マリーナ「取引……？」

きょとんとした顔をする。
取引って言ってもどっちかつうと向こうにメリットが大きながな。

オレ「ああ。アンタの様子からなんかあったのはわかってる。どーせあのしょうもない小物のオッサンだろ？」
マリーナ「小物のオッサン……ああ、理事長のこと……」

それで伝わったことにびっくりだ。

オレ「オレもあのオッサン……てかジジイには結構ムカついてるからな。条件次第によってはあのオッサンを叩き潰してもいい」

本当は明日の対戦が終わってから片づけるつもりだったんだが、放っておくとまたシステムや“相棒”に干渉されるから迷惑なんだよな。
というわけでぶっ潰し確定で♪

マリーナ「……条件って何よ」
オレ「大したことじゃねえよ。明日の対戦の形式をちょっち変えてほしいだけ」

やってみて分かったことがある。
これ……もの凄く疲れる。
本人には悪いけど、これは美波や瑞希にぶっ通しでやらせるにはあまりにも消耗が激しすぎる。消耗の少ないやり方で終わらせた方がよさそうだ。

マリーナ「それだけでいいの……？」
オレ「ああ。別に金には困ってないし、あの小物を大義名分掲げて叩き潰せるだけでも十分だしな」

本当にあのオッサンは腹立つよな。
顔思い出しただけで苛立ってきたぞ。

マリーナ「……分かりました。お願いします」
オレ「おう、よろしくな。そんじゃ事の始めから教えてくれ」
マリーナ「……昨日の夜、貴方が目覚めたころに理事長に呼ばれて理事長室に向かったんです」

第百話　ルール（前書き）

けっこう間があきましたね。ＬＡＮ武さん感想ありがとうございました！

最近よく足が攣ります。
運動不足なんですかねぇ……し、仕方ないやん！わしはデスクワーク派なんや！
そんないいわけは聞きたくねえ！
では記念すべき（？）百話です！どうぞ！

第百話　ルール

バカテスト　化学

問　以下の元素から、アクチノイドを選んで書き抜き、元素番号の早い順に並べなさい。

『Ａｃ　Ｓｍ　Ｖ　Ｃｍ　Ｉ　Ｅｓ　Ｈ　Ｎｏ　Ｕ　Ｔｉ　Ｄｓ　Ｆｒ　Ｌａ』

姫路瑞希の答え

『Ａｃ：アクチニウム
Ｕ　：ウラン
Ｅｓ：アインスタイニウム
Ｎｏ：ノーベリウム
』

教師のコメント

正解です。アクチノイドは元素番号が８９～１０３のものを指します。
ランタノイドに属する元素記号もあったのですが、きちんと区別できていたようなのでよかったです。

吉井明久の答え

『Ａｃ、Ｕ：アク

Ｔｉ　：チ
Ｎｏ　：ノ
Ｉ　：イ
Ｄｓ　：ド
』

教師のコメント

やると思いました。

峰嶋真琴の答え

『Ｈ、Ｕ：ふ
Ｎｏ　：のう
回答不能
』

教師のコメント

これは予想外でした。

☆

真琴ＳＩＤＥ

さて、一週間ほど間が空いてしまったがまあ気にしないで行こう。
は？メタ発言自重しろ？気にすんな、小さいことさｗｗ

オレ「んじゃまあ……一発殴りこみと行くか？」

俺が今どこにいるか、だが……例のうざいオッサン（りじちょうしつ）の部屋の前である。
理由は二つある。
一つはメイの奪還。もう一つは……

オレ「オレの仲間に手ェ出したらどうなるか、思い知らせてやる」

報復だ。

ズドォォン！

ドアを蹴破って中に入る。
ババアにもしたことねえぞ、こんなこと。
……いや、あったかな？

オレ「まあいいや。お邪魔しまーっす」

中に入ってあたりを見回す。
……居ねえ。逃げやがった。

オレ「せっかく親父に頼んで特注のヤツ用意してもらったのに、使えずじまいか……？」

ガシャ、と低い音を立てるのは機関銃……一応本物じゃないよ？ある程度は威力を抑えてある。
まあ当たり所によってはアバラの二、三本折れるかもしれないけど。
つーか本当にいないな……この学園の敷地外に出られると猛吹雪だし追いようがないから困るんだけどな…。

その時、スッと後ろから気配がした。

？？「死ねぇぇ！」
オレ「！？　奇襲汚ッ！？」

振り向くと大斧を大きく振りかぶったオッサンこと桐生理事長がいた。
つーかこのままだと斬られる……！？

オレ「なーんちって」

難なく斧をよけてオッサンの後ろをとり……

オレ「つーか重い！」

機関銃を投げつけた。

撃ったのではなく投げつけた。てか放った。だって重いんだもん…

桐生「あがーっ！？」

オレ「ふう、重かった」

あ、なんか床ミシミシ言った。

しょうがないか。この銃たしか軽く２００ｋｇくらいあったし。

桐生「く……！糞！」

機関銃の下敷きになりながら床を叩くオッサン。

ま、オレに勝てると思ったのが間違いだったな。

オレ「さて、チャンスをやろう。メイの居場所を3秒以内に吐け。でないと殺す」

桐生「だ、だれが言うか……ッ！？」

オッサンの襟首をつかむ。

分かってねえんだよな、どいつもこいつも……

オレ「あのな、オレは今最高に頭にキてんだよ。オレがアンタの身体を粉々にしちまう前に吐いといた方がいいぞ？」

桐生「ひ……！べ、別館の、第４資料室……！」

オレ「……だそうだ、マリーナ」
マリーナ『ありがとう！』

さて、これで最低ノルマは達成したな。
ムッツリーニと龍星兄貴、鉄人にはマリーナの護衛とメイ探しを頼んでおいたし、向こうは問題ないだろう。
問題は……

オレ「アンタの処分だ」
桐生「な…、み、見逃してくれるんじゃ……！？」
オレ「んなわけないだろ。オレはメイ（アイツ）とは出会ったばっかだし、そこまでお互いをよく知ってるわけでもないけどな。色々と記憶をつつかれて仕方ねえんだよ」

コイツなら知ってるはずだ。こんな小心者が自分で考えて動いたとは思えない。
バックに必ずあの人がいるはずなんだ。

オレ「教えろ。お前のバックには戒夜さんがいるのか？」
桐生「だ、だれが言うか……、お前には教えん…あがぁっ！」
オレ「……だからさ、キレてんだよ。これ以上手間取らせないでくれよ」

やめろって美波に言われてたんだけど……まあ今回は特別に許してもらおう。
ちょっとそれどころの問題じゃなくなってるしな。

オレ「知ってるんだろ。戒夜さんがやった…5年前の実験のことも」
桐生「…！？　違う！確かに私はあの人の命令で動いていたが、それについては何も知らないんだ！！」

オレ「そうか。それよりお前、消されるぞ？」

間違いなく。

桐生「は……？」

オレ「忘れてないよな。オレたちのルール。戒夜さんの情報を漏らしたら、サンプルだろうが天才だろうが関係なく消されるぞ」

桐生「そ、そんな！？助けてくれ！」

オレ「……無理だな。そもそも理由がない」

機関銃を拾い上げ、理事長室を出ていく。

桐生「待ってくれ！私を見捨てないでくれ！」

オレ「無理だよ。アンタはもう助からない。存在そのものを戒夜さんに消されて……今まで生きてきた証も全て消えるだろうな」

それがオレ達、試験召喚システムの軍事研究機関のルール。トップの情報は誰にも漏らしてはいけない。

破れば即、存在が消され、生きてきた証拠すらも残らない。

オレ「運がよければ逃げ切れるさ。ま、それよりは宝くじで1等当てる方がはるかに楽だが」

言い残し、部屋を出ていく。もうあれは処分するまでもない。

明日の朝には、綺麗さっぱり消えていることだろう。

第百話　ルール（後書き）

少しずつ見えてきた影……
まだまだ全てが明らかになるのは先の話ですけどね！

第百一話　動き出した敵対者（前書き）

ＬＡＮ武さん、月さん感想ありがとうございました！

一昨日の足攣り記録

攣りかけ……３回
軽く攣り……１回
本気攣り……０回

……もういや。
どうしたら足が攣らなくなるんでしょうね？だれかおしえて
てなわけで百一話目です！どぞ！

Ｐ．Ｓ　最近けいおん！にはまってます。一期全巻ＴＵＴＡＹＡで借りてきました。

――――――――――

バカテストネタ切れｏｒｚ
あ、今回は龍星がちょこっと出現します。

第百一話　動き出した敵対者

康太ＳＩＤＥ

真琴『……だそうだ、マリーナ』
マリーナ「ありがとう！」

マリーナ…生徒会長は携帯を切る。
どうやらメイの居場所が分かったようだ。

龍星「メイちゃんの居場所、分かったのか？」
マリーナ「ええ、別館の第４資料室って」
鉄人「なら急ごう。ここからは少し距離がある」
俺「……真琴を襲ったやつらが、メイを狙う可能性もある」

よく分からないが、何かとんでもないものが動いている気がする。
この前だって、いつの間にか真琴とメイがいなくなっていて、真琴は血だらけになって（龍星が担いで）帰ってきた。
交流試合に勝つためだけに、あの理事長がそこまでやるとは考えづらい…

鉄人「……くそ、オレがもっとしっかりしていれば、峰嶋もクロムウェルも辛い目には合わなかったはずなのに……」
マリーナ「先生のせいじゃないです。先生は、こうして命を探すのを手伝ってくれてるじゃないですか」
龍星「そうだぜ西やん。悪いのは全部あの理事長だ」
俺「……こういう時、先生は頼りになる」

普段は理不尽極まりない暴力教師だが、こういう一大時にはとても心強い味方だ。
真琴もいい先生だと評価していたしな。

鉄人「お前たち……、すまないな」
龍星「西やん……」
俺「……先生……」
龍星&俺「「先生がお礼を言うってことは、明日は隕石だな」」
鉄人「お前ら事が済んだら補修だ」

なん、だと……！？

マリーナ「……急いでるんですけど。やっぱり文月学園ってバカぞろいなのかしら……？」
龍星「それは違うぞマリーナちゃんよ」
鉄人「ああ、榊の言うとおりだ」
俺「……誤解」
マリーナ「なんですって？」

文月学園の、俺たちのことを、コイツはちっともわかってない。

三人「「「バカなのは明久（吉井）だけだ」」」
マリーナ「……正直、吉井君が可哀そうになってきたわ……」

と、軽いコントを繰り広げながら第４資料室にたどりつく。

マリーナ「ハァ、ハァ、……メイ！！」

大声で妹の名を呼びながらドアを開けるマリーナ。
その先には……

全員「「「「「……！！」」」」」

……なぜかパフェを堪能するメイがいた。

全員「「「「「……は？」」」」」

目が点になるとはこういうことだろう。

メイ「～♪～♪　あ、お姉ちゃん！」
マリーナ「……メイ？ど、どうして…？」

マリーナが、おそらく鉄人も兄貴も気になっていることを口にする。

メイ「えっと、なんかよく分かんないけど、試合には出ずにここで大人しくしてろって言われて、おなかすいたって言ったらパフェとかいろいろくれたんだ～♪」

……これは真琴の耳には入れないようにしなければ。

マリーナ「……」
龍星「ま、まあ、メイちゃんが無事だったんだし、よかったじゃないか」
鉄人「……付き合いきれん。さっきの俺の後悔を返してくれ」
俺「……これはひどい」
メイ「へ？どうしたんですか？皆さん」

こころなしかマリーナの肩がふるえている気がする。
そして数秒後、

マリーナ「あの……クソ理事長ォォォ――――――――――――！！」

俺もそう叫びたい。
心の底からそう思った。

☆

ＮＯ　ＳＩＤＥ

桐生「糞……！死んでたまるか……！」

猛吹雪の荒れる中、桐生は歩みを進め続けた。
峰嶋真琴が理事長室を去ったすぐ後、簡単に荷物をまとめてすぐに学園を抜け出した。
すぐに来るであろう、自分を始末するためにやってくる人物から逃れるために。

桐生「死んでたまるか……！生きるんだ……！」

同じような言葉を呟きながら歩き続ける。
しかし、その切なる願いすらも、彼女は打ち砕く。

少女「ヤッホー☆。アンタが無能理事長でいいね？☆」
桐生「……？」

どこから現れたのか、突然桐生の前に姿を現したのは、自分を破滅へと追い込んだ少年と同じくらいのいたって普通の少女。
しかし、服装が普通ではなかった。
両方の腰に日本刀を帯刀し、吹雪の中でミニスカート。
太ももにはホルスターにしまった拳銃が見える。

少女「さて、ちゃっちゃと殺すから大人しく斬られてよね☆」
桐生「貴様が……？」

武装しているとはいえ、高校生くらいの少女が自分の存在を消すためにやってきた刺客。
正直、拍子抜けする話ではあった。
が、それが、たった一つの単語で塗り替えられる。

少女「最高傑作（パーフェクトピース）って言えば分かるかな？☆」
桐生「！！」

最高傑作（パーフェクトピース）。
桐生もしっかりと知っているわけではなかったが、これだけは理解していた。

『この世で最も敵に回してはいけない兵器』

どういう仕組みかは分からないが、圧倒的な身体能力を誇り、たった一人で日本国が誇る自衛隊を壊滅に追い込めるほどの戦術兵器。
それが、軍事研究機関のトップ、武藤戒夜の最高傑作（パーフェクトピース）。

少女「相手がアンタじゃなくて文月の留学生とかならいいんだけどさー☆、アンタ相手じゃ生身の方が早いわ」

そう言って左の腰にぶら下げている刀を抜く。
刃は妖しい光を放ち、銀色の刀身を鼓動のように点滅させていた。

少女「ほらほら、痛くないって☆　これはね、アタシが持つとあまりの切れ味の良さに傷口を摩擦熱で焼いちゃうんだ☆。こんな風に！」

ズバッ！と、刃が振り下ろされ、雪はそれまで人間だったはずの肉塊が飛び散らす鮮血で赤く染まった。

少女「感謝してよ。人間なんて下等生物が、アタシみたいな神に等しい力を持つ者に殺してもらえるんだから。ねえ？」

少女は死体を眺め、その次に虚空に声をかける。
声の響いた先には……

真琴「……どうだかな。オレにはそういう感性はねえよ」

文月学園最高点数保持者、峰嶋真琴がいた。

第百二話　守り抜くべき平和（前書き）

ＬＡＮ武さん、月さん、感想ありがとうございます。

おかげさまでＰＶ５００，０００、ユニーク４０，０００、総合評価５００ｐｔ逝きました！

……ちょっと眼医者いってくる……

本当にここまで来れるとは思ってませんでした！

本当にありがとうございます！そしてこれからも『バカとＦクラスと転校生』をよろしくお願いします！

第百二話　守り抜くべき平和

バカテスト　国語

問　以下の問いに答えなさい。

『得体のしれない集団が我が物顔で振る舞っている様子を答えなさい』

峰嶋真琴の答え

『百鬼夜行』

正解です。さすがですね、峰嶋君。
その昔、妖怪や魑魅魍魎が群れをなして歩くことをそう呼んでいた頃から、転じて、このように呼びます。

姫路瑞希と島田美波の答え

『怖いので答えたくありません』

教師のコメント

そういえば貴女方はお化けや妖怪の類が苦手でしたね…。

須川亮はじめＦＦＦ団員の答え

『モテる奴は敵じゃーーーーー！！』

教師のコメント

あなた方のことです。

☆

真琴ＳＩＤＥ

少女「感謝してよ。人間なんて下等生物が、アタシみたいな神に等

しい力を持つ者に殺してもらえるんだから。ねえ？」

オレにそう話しかけてくる。

オレ「……どうだかな。オレにはそういう感性はねえよ」

別に嘘を言ってるつもりはないし、ありのままの感情を話す。

少女「あっそ☆。ま、いいけど。で、アタシの仕事の邪魔をしに来たのかな？☆」

オレ「そう見えるか？」

少女「えっとね、見えない☆」

相手は二本の刀を両方の腰にぶら下げ、ホルスターに拳銃をしまっている。

対してこっちは、制服の内側にナイフを仕込んでいる以外は完全な丸腰。

どう考えてもこれから戦おうって格好には見えないし、そもそもそんなつもりはない。

オレ「別にお前が何をしようがオレの知ったこっちゃねえよ。オレは忠告に来ただけだ」

少女「忠告？キミさ、自分の立場わかってる？アタシ達に忠告できるような状況じゃないじゃん」

それまでの軽いしゃべり方をやめ、女とは思えないくらい重みのある声になる。

オレ「それでも一つだけ言っておいてやる。あいつらに手を出したら、オレはもう容赦しないからな。全力で戒夜さんもろとも全員殺

す」

少女「おー、怖。でも別に、彼らが知ってはいけないことさえ知らなければなにもしないよ？」

口ではそう言っても……信用できない。

こいつらは…人を人とも思わないような奴らだ。信用する方がどうかしてるしな。

少女「てーかさ、どうしてそこまであんなのを大事にするわけ？人間なんて、アタシら最高傑作（パーフェクトピース）に比べればただの非力な虫じゃん。この世界に吐いて捨てるほどあふれてるさ」

オレ「テメェにはわからねえよ。テメェにはねえからな。あいつらみたいに、必死になって築き上げてきた平和も、大事なものも」

少女「まーね。そんなもの、仕事には要らないし」

オレ「ほざいてろ」

吐き捨てて校舎の方に戻る。

ここであいつと敵対して戦っても何の意味もない。

たとえどれだけ腹が立っても……明久や美波を危険にさらせないのは変わらないのだから。

オレ「……絶対、守り抜く。誰に壊させない。戒夜さんにも、最高傑作（パーフェクトピース）にも……オレ自身にも」

ＰＶ５００，０００記念！座談会！（前書き）

今回は座談会です！
本編には一切関係ありません。

ＰＶ５００，０００記念！座談会！

黒炉「どーも！いつも『バカとＦクラスと転校生』をご愛読いただきありがとうございます！作者の黒炉と」

真琴「主人公の峰嶋真琴です！」

明久「原作主人公の吉井明久です」

瑞希「こんにちわ、姫路瑞希です」

真琴「今回のメインＭＣはこの５人でいいのか？」

３人「５人？」

美春「読者の豚野郎共、清水美春ですわ」

みどり「やっほー！最近出番が、少ない、名川みどり、だよ……」

明久「清水さん！？」

瑞希「みどりちゃんも！？」

黒炉「あれ？これで６人いるけど？」

真琴「ああ、今回は黒炉出番ナシな」

黒炉「マジで！？」

☆

黒炉「とゆーか美春よ。読者の皆様を豚呼ばわりはやめようぜ」

美春「黙りなさい豚野郎。男なんてお兄さまとお兄さまの相方の吉井以外は皆豚野郎なのですわ」

黒炉「話になんねえ……。真琴ぉ、なんか言ってくれよぉ」

真琴「美春、そいつはマジで豚野郎だからもっと言ってやれ」

黒炉「この野郎！」

明久「とりあえず、この６人が今回の座談会のメインＭＣでいいんだね？」

みどり「そのはずだよー。そう聞かされてたしね」

瑞希「みどりちゃん、久しぶりに名前出てきてよかったですね」

みどり「へっ…。メインヒロインの瑞希には分かんないよ。出番のない辛さが……」

瑞希「あはは……」

真琴「なんかあっちもこっちもカオスだな…」

黒炉「片方はお前が原因だろ！」

☆

真琴「今回のテーマは？」

黒炉「募集と告知」

真琴「座談会じゃねえの！？」

明久「活動報告の方でも募集していましたが、クリスマスに合わせて短編を投稿する予定です」

瑞希「その内容について、以下の中から2～3個選んで感想などから投票してください」

1、鉄板の明久×瑞希

2、オリジナルＣＰの真琴×美波

3、またまたオリＣＰの秀吉×みどり

4、こちらも人気の雄二×翔子

5、あまり目立ってない康太×愛子

美春「み、美春のネタがありません！？」

みどり「3！3で！出番プリーズ！」

黒炉「締め切りは21日の23時です。よろしくお願いします！」

真琴「……オレ、ハブラレ？」

みどり「ようこそ、こっち側の世界へ……ふふふ……」

真琴「いやだー！オレ本編でも結構ダークサイドだけどそっちはいやだー！」

ＰＶ５００，０００記念！座談会！（後書き）

投票よろしくお願いします！
現在は、

明久×瑞希　２票
真琴×美波　２票
雄二×翔子　１票

です。

みどり「３が一票もない！？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3359v/

バカとテストと召喚獣　バカとＦクラスと転校生

2011年12月18日23時53分発行